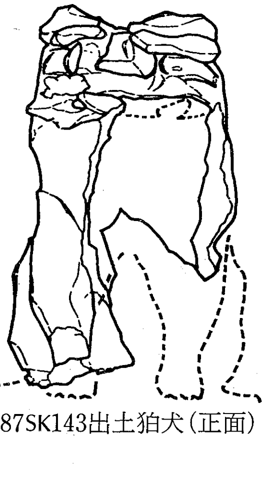
太宰府市の文化財　第30集

太宰府条坊跡 Ⅸ



条87SK143出土狛犬(正面)

１　９　９　６

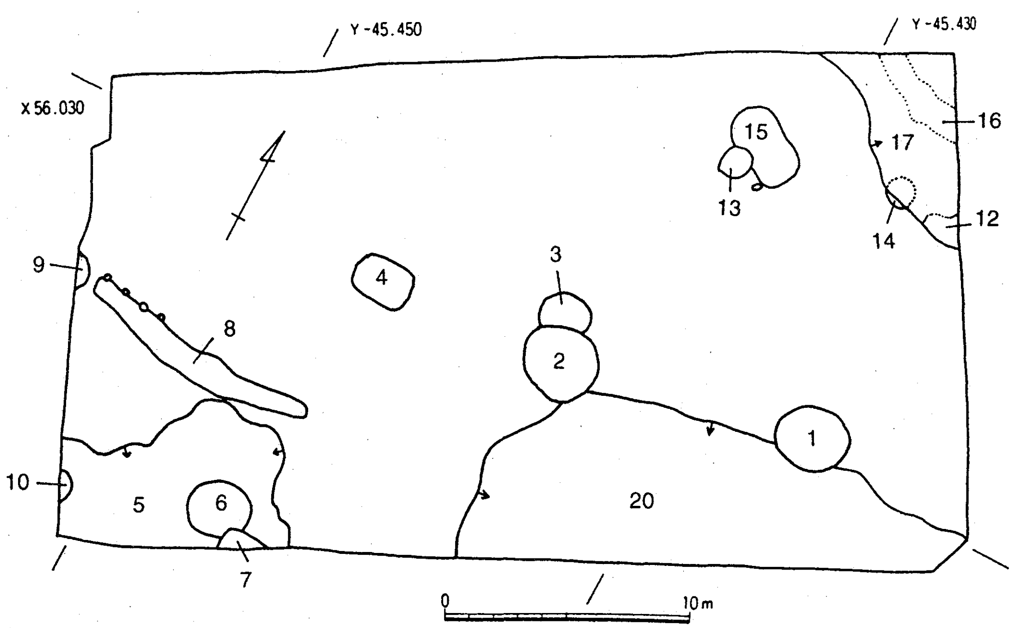
太宰府市教育委員会

『大宰府条坊跡　IX』正誤表

頁	行	誤	正
2	18	倉住康彦	倉住靖彦
66		106SK198	106SX198
68	23	106SK198	106SX198
68		Fig.58　106SK198遺構実測図（1/60）	Fig.58　106SX198遺構実測図（1/60）
124		Fig.100　遺構検出面での土色変化模式図（1/400）	Fig.99　遺構検出面での土色変化模式図（1/400）
125・126		Fig.99　条坊141次調査遺構実測図（1/100）	Fig.100　条坊141次調査遺構実測図（1/100）
170	3	国土座標第VI座標系	国土座標第II座標系
223		15 98SE005	15 98SE015

なお御手数おかけいたしますが、別図（条坊98次遺構略測図）を223頁下半へ貼付いただきますようお願いいたします。

223ページ下半部の空白に貼り付けて下さい



条坊跡　98次調査略測図

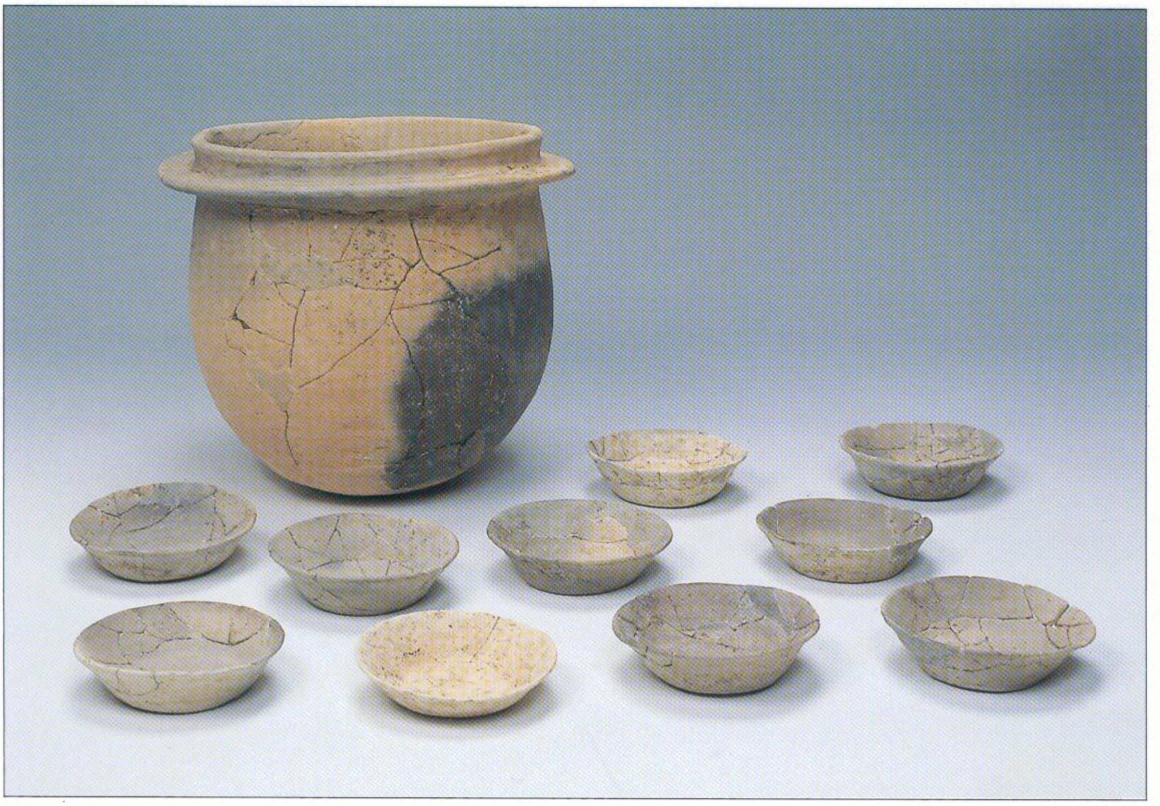
『大宰府条坊跡』Ⅸ
太宰府市の文化財　第30集

大宰府条坊跡　Ⅸ

１９９６

太宰府市教育委員会

狛犬（条87SK143出土）



条106SK040出土遺物

序

本書は、平成元年度から平成６年度までに発掘調査を行いました大宰府条坊跡の埋蔵文化財発掘調査報告書であります。大宰府条坊跡は古代における都市遺跡として全国的にも知られ、市街地のほぼ全体を覆う広大な遺跡です。今回はその大宰府条坊跡の中でも西北に位置する区域をまとめて報告しております。

今回報告いたしております調査地からは、奈良・平安時代における道路の跡をはじめとする、当時の生活を彷彿させる遺構・遺物が多量に出土しております。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、文化財に対して御理解いただきました皆様をはじめ、関係された諸機関の皆様方に心からお礼申しあげます。

太宰府市教育委員会
教育長　長野治己

例　　　言

1．本書は、太宰府市教育委員会が行なった平成元年度から平成６年度までに実施した大宰府条坊跡第87・98・106・118・141次調査の発掘調査報告書である。

2．本書に掲載した発掘調査の原因、調査期間等の調査に関わる経緯については、各調査の報告部分に記載している。

3．本書に掲載した調査年度は、平成元年度から平成６年度にかけて実施してきたものであるため、調査組織ならびに整理参加者は第II章にまとめた。なお整理作業は各調査終了後随時行なってきたが、主として平成７年度に実施した。

4．遺構の実測は主として各調査担当者が行なったが、第87次調査についての実測作業はアジア航測株式会社による航空測量による図化作業を行なった。また実測作業に関して、谷由紀子・柴田剛・桧垣みどりの援助を得、図の浄書は調査担当者ならびに森田レイ子・谷由紀子・上村英士・松隈里恵子・狭川孝子が行なった。

5．遺物の実測は、調査担当者ならびに井上信正・田中克子・河田聡・森田レイ子・谷由紀子・上村英士・鶴味加代子が行なった。図の浄書は調査担当者ならびに森田レイ子・谷由紀子・上村英士が行なった。

6．遺構の写真撮影は調査担当者が行ない、空中写真は㈲空中写真企画・アジア航測株式会社が行なった。遺物の写真撮影はフォトハウスおか（代表：岡　紀久夫）が行なった。

7．遺構実測図および遺構配置図は全て国土調査法第II座標系を基準としている。したがって図中に記載される方位は特に注記のないかぎり座標北（G.N）を指している。磁北と座標北との偏差は西偏６°30′（1992年）である。

8．出土した金属製品の応急処置は、狭川麻子・山中幸子・下川可容子が担当した。

9．本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。

条　87　SE　015

遺跡名　調査次数　遺構種別　遺構番号

10．本書の執筆は、目次及び項目末尾に記し、編集は中島恒次郎が行った。

11．出土遺物および図面、写真等の記録は太宰府市教育委員会が保管している。

12．本書に掲載した遺物の分類は、以下に記載された分類によっている。

土器　太宰府市教育委員会（1983）『大宰府条坊跡II』
　　　太宰府市教育委員会（1992）『宮ノ本遺跡II一窯跡篇一』

陶磁器　太宰府市教育委員会（1983）『大宰府条坊跡II』

瓦　石松好雄・高橋章（1983）「大宰府出土瓦について（二）」『九州歴史資料館研究論集４』

焼塩壺　森田勉（1983）「焼塩壺考」『大宰府古文化論叢　一下巻一』

石鍋　森田勉（1983）「滑石製容器　一特に石鍋を中心として一」『佛教藝術』148号

硯　横田賢次郎（1983）「福岡県内出土の硯について　一分類と編年に関する一試案一」『九州歴史資料館研究論集 9』

権衡　吉村靖徳（1995）「権衡に関する一考察　一福岡県内出土権状製品の検討と課題一」『九州歴史資料館研究論集20』

なお森田論文については、以下の文献に再録されている。

森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会（1995）『大宰府陶磁器研究』

また、報告文中にて示される時期（大宰府XII期など）については、以下のTab. 1に示す。

紀年銘共伴資料	(森田・横田) 年代観	①大宰府史跡 森田・横田 1978	②南条坊 前川 1980	③大宰府 森田 1983	④大宰府史跡 森田・横田型式の移動に伴う年代の動く可能性	⑤大宰府条坊跡 山本 1992	
				A		I A	
		〔98SX2480〕		A		I B	
	700	〔160SK4141〕		B 1		II	
大85SD2340 734「天平6」	750	〔85·87·90SD2340〕		B 1		III	ⓐ
		45SK1280·1285		B		IV	
長岡京右京102次SD 10201※1 784「延暦3」		43SE1081		B 2		V	
	825	18SE400	I 1	C		VI A	
		70SK1800	I 1 A	D		VI B	
	850	70SK1800	I 1 B	D		VII	
大74SD205A 927「延長5」	900	35SK678	I 2 A	E		VIII	ⓑ
	927 / 950	34SK674 65-2SE1558	I 2 B	F		IX	
	1000	48SE1083	I 2 C	G		X	
	1050	38SK802	I 3 A	H		XI	
平安京左京4条※2 1坊SE8、1091「寛治5」	1100	46SD1330	I 3 B	H		XII A	
			I 3 C	H		XII B	
	1150		I 3 D			XIII	
		43SK1204	I 4		1150	XIV	
	1200		II 1			XV	
大33SD605 1224「貞応3」	1225	43SK1805	II 2		1200	XVI	
	1250	33SK601 / 38SK835	II 3			XVII	ⓒ
		33SK601	II 4			XVIII	
大109、111SD3200 1304「嘉元2」	1300	38SK830	II 5A			XIX	
大45SX1200 1330「元徳2」	1330 / 1350	45SX1200新	II 5B			XX	ⓓ
		(33SK624)	II 6				
大70SD1805 1501「文亀元年」	1500	70SD1805					

Tab. 1　大宰府の土器型式と年代

〔　〕：後日追加された標識遺構
（　）：②で前川氏が比定した遺構
①横田賢次郎・森田勉（1978）「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館研究論集　2』
②前川威洋（1978）「土師器の分類および編年とその共伴土器について」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第8集（下）』
③森田勉（1983）「大宰府の出土品③　土器・陶磁器」『佛教藝術　146』
④山本信夫（1988）「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究　IV』
⑤山本信夫（1992）「大宰府」『第1回古代土器研究会資料』
なお文献①③は、森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会（1995）『大宰府陶磁器研究』に再録。

※1　筑前型土師器が長岡京より出土
中島恒次郎（1992）「都へ行った土器」『古文化談叢　第28集』
※2　陶磁器の共伴
平安京調査会（1975）『平安京跡発掘調査報告　-左京四条一坊-』
ⓐ大85SD2340は、IIとIIIを含む。IIIは少ない。
ⓑ大74SD205Aは、VIIIとIXを含む。
ⓒ大33SD605はXVIとXVIIを含む。
ⓓ大45SX1200はXIXとXXを含む。

目　　次

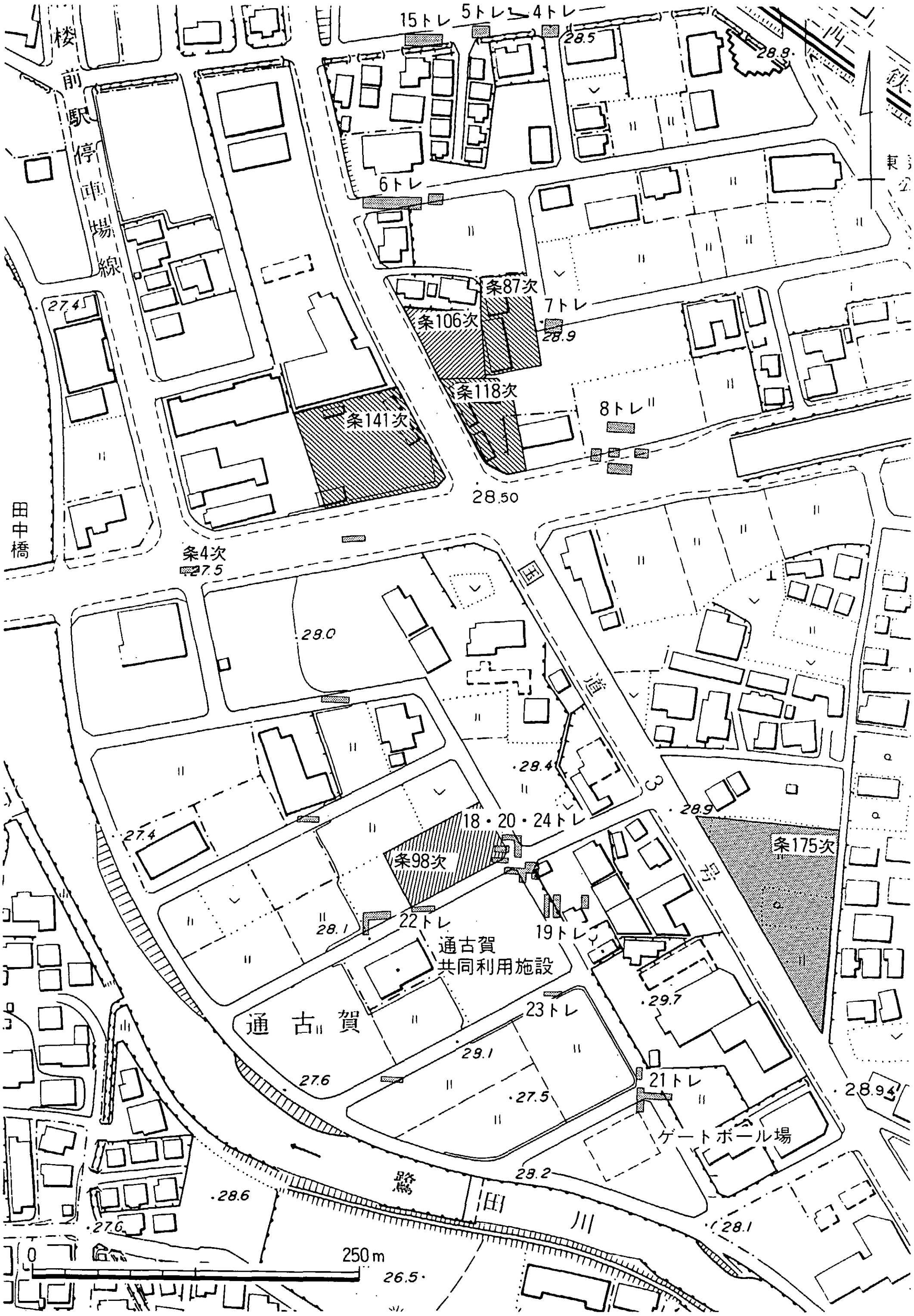


Fig.1　報告地点周辺の調査状況

Ⅰ. はじめに

太宰府は、福岡平野と筑紫平野を分かつ、脊振山系と四王寺山系にはさまれた狭小な平野に所在し、地形的にも歴史的にも、古くから路集まるところとして河川および交通の要として息づいてきている。

今回報告する各調査は、いずれも大宰府条坊跡に所在しており、太宰府市の市街地の西寄り、鏡山猛によって推定された右郭九条六坊周辺に位置し（Fig. 2）、平成元年度より実施した調査結果をまとめている。報告する各調査に先立ち、周辺は太宰府市による観世音寺土地区画整理事業に伴う事前調査として、トレンチによる調査が昭和54年度より太宰府市教育委員会によって実施されている（Fig. 1）。調査の成果は既に明らかにされているが、個々の調査の規模が狭小であったこと、広範囲にわたってトレンチによる調査であったことから、大宰府条坊跡右郭九条六坊周辺の状況を把握するには不十分と言わざるを得ない結果となった。したがって区画整理終了後ではあったが、調査原因の発生に伴い発掘調査を実施してきているのが現状である。

近年の発掘調査の実施により、不明確であった大宰府条坊域の様相が次第に明らかになりつつあり、条坊痕跡の存否をはじめとして、それまで議論の対象となっていた課題が、少しづつではあるが解決の方向へと向かい始めている。しかし、調査の進展に伴って、様々な事象が表出し、条坊施工時期や具体的な規模に関する課題など、新たなる課題が蓄積されつつあることも事実である。いずれにしても遺物個々にわたる微視的な視野から大宰府条坊跡の歴史的意義にわたる巨視的な視野に至るまで、数多くの課題が山積されつつある今日、何らかの模索が行なえればと考える。

大宰府条坊跡が所在する太宰府市街地にも開発の波は押し寄せ、福岡市のベッドタウンとして人口も増え続けている。また大宰府条坊跡周辺においても数多くの遺跡が破壊の岐路に立たされ、発掘調査によって明らかになる部分と、開発によって破壊されてゆく部分が存在している。そのような中で、鴻臚館から大宰府への道の検出や条坊外における古代の集落形態、さら

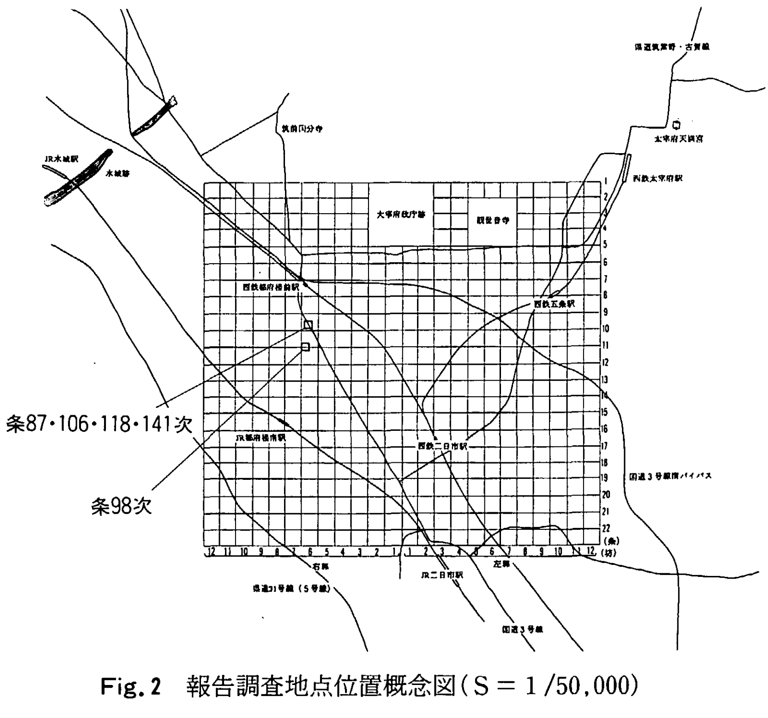


Fig. 2　報告調査地点位置概念図（S＝1/50,000）

調査次数	推定条坊	地　　番	調査期間	調査内容	トレンチ番号	掲載文献
4次調査	右郭九条七坊	通古賀4丁目	1979.12.13	―	4トレンチ	(1)
5次調査	右郭十条六坊	通古賀4丁目530他	1979.12.20～1980.1.8	奈良期：土壙、平安期：井戸、東西溝等	18～24トレンチ	(1)
7次調査	右郭八条六坊	通古賀2丁目375-1他	1980.12.1～1980.12.10	中世：杭列	4・5トレンチ	(2)
8次調査	右郭八・九条六坊	通古賀2丁目404他	1980.12.4～1980.12.17	平安期：南北溝、ピット	6～8トレンチ	(2)
15次調査	右郭八条六坊	通古賀2丁目265-4	1981.3.11～1981.3.19	奈良期：ピット、平安期：土壙、ピット	15トレンチ	(2)
87次調査	右郭九条六坊	通古賀2丁目249-3他	1989.11.28～1990.1.30	奈良期：掘立柱建物、平安期：道路、井戸	―	本書掲載
98次調査	右郭十一条五坊	通古賀4丁目530	1990.7.6～1990.7.23	飛鳥期：整地、奈良期：井戸、平安期：井戸	―	本書掲載
106次調査	右郭九条六坊	通古賀2丁目250-1他	1990.12.13～1991.3.15	奈良期：道路、平安期：掘立柱建物、井戸	―	本書掲載
118次調査	右郭九条六坊	通古賀2丁目248-1他	1991.12.2～1992.1.27	縄文期：溝、平安期：道路、井戸、掘立柱建物	―	本書掲載
141次調査	右郭九条六坊	通古賀3丁目236他	1993.9.21～1993.11.10	奈良期：掘立柱建物、平安期：掘立柱建物、南北溝	―	本書掲載
175次調査	右郭十・十一条五坊	通古賀5丁目547他	1995.11.26～1996.1.31	奈良期：井戸、平安期：溝、井戸	―	平成7年度調査

文献　(1) 太宰府市教育委員会（1982）『大宰府条坊跡　I』　(2) 太宰府市教育委員会（1983）『大宰府条坊跡　II』

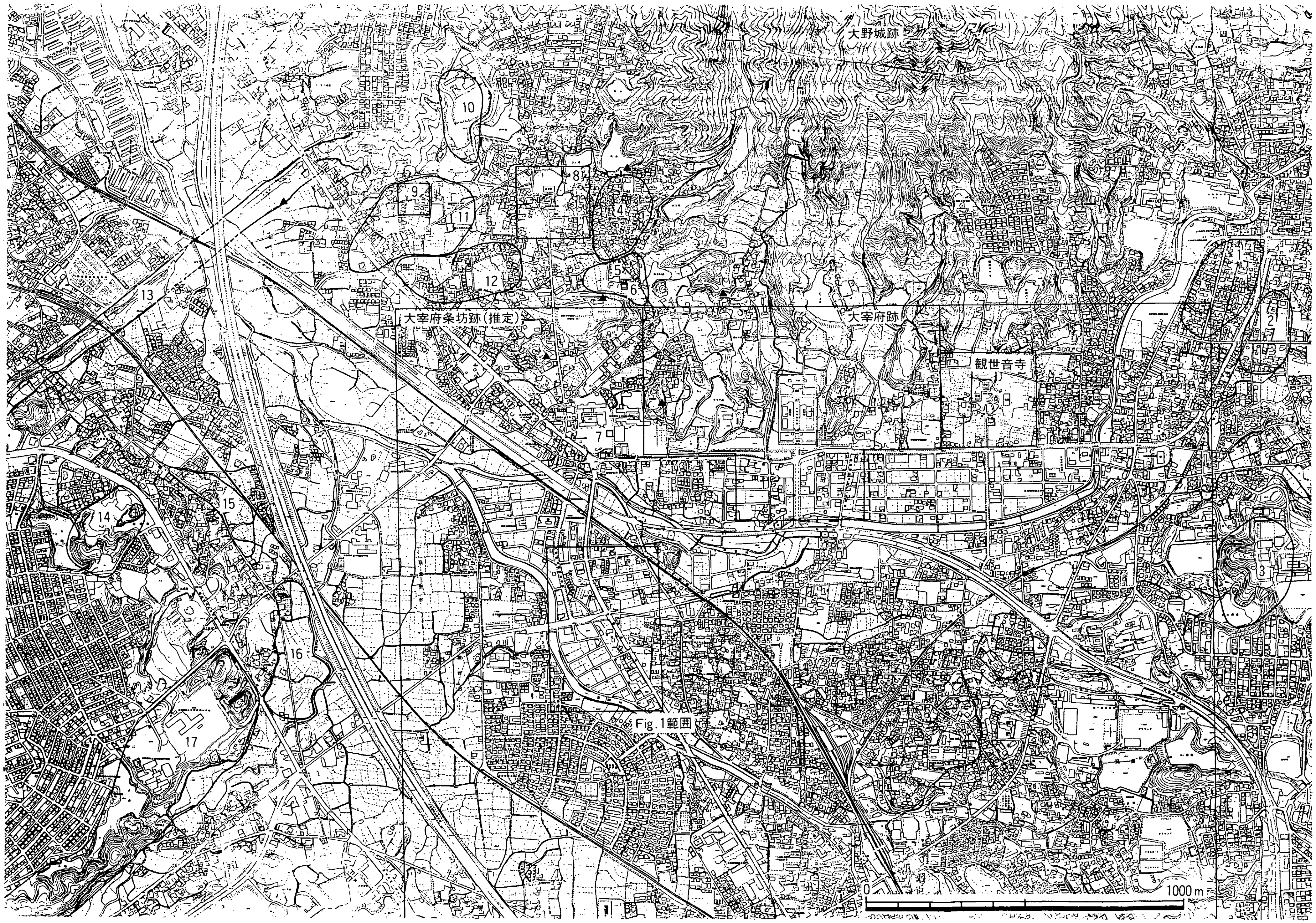
Tab. 2　報告地点周辺の調査状況

には官人の墓域と考えられる宮ノ本遺跡の調査等、市域の西部にて繰り広げられている佐野地区土地区画整理事業の進展に伴う広域発掘調査によって様々な事象が明らかになりつつある。また筑前国分寺や国分尼寺を結び水城東門への取付け道路を推定させ得る道路痕跡、僧寺・尼寺の規模や御笠団印出土地周辺遺跡の調査など条坊外での官的な施設の検討が行なえる成果が次第に整いつつある。さらに大宰府前史として弥生時代の集落や墓域を検出した国分松本遺跡の調査や、大宰府造営直前の道路痕跡を検出した原口遺跡の調査など、大宰府の成り立ちを考える上で貴重な成果を納めつつある。また大宰府の廃絶後の状況を知る上で、市域の東部に展開した太宰府天満宮周辺で栄えた門前町の調査も進み、太宰府全域を見た場合の集落変遷に関わる課題も次第に成果をあげつつあるといえる。しかし一方で市民への啓発の不十分さから破壊の憂き目をみる遺跡も少なからず存在し、調査の充実とともに市民啓発の手立てが望まれるところである。

大宰府条坊跡に関する主要な論考を以下に記述しておく。

鏡山　猛　(1968)『大宰府都城の研究』
岸　俊男　(1983)「大宰府と都城制」『大宰府古文化論叢　一上巻一』
金田章裕　(1989)「大宰府条坊プランについて」『人文地理　第41巻　第5号』
狭川真一　(1990)「大宰府条坊の復原　一発掘調査成果からの試案一」『条里制研究　6号』
狭川真一　(1990)「天下の一都会」『太宰府市史　一考古資料編一』
倉住康彦　(1990)「都市大宰府をめぐる若干の考察」『九州歴史資料館研究論集　15』
鬼塚久美子 (1992)「8世紀大宰府の計画地割について」『人文地理　第44巻　第2号』

（中島恒次郎）



番号	遺跡名	遺跡内容
1	新町遺跡	古代末期～近世にかけての集落
2	馬場遺跡	古代末期～近世にかけての集落
3	五条遺跡	中世の集落および墓域
4	辻遺跡	古代の集落、道路
5	御笠団印出土地周辺遺跡	原始(古墳)から古代の集落
6	御笠団印出土地	御笠団印採集地
7	遠賀団印出土地	遠賀団印採集地
8	筑前国分寺跡	古代の寺院跡
9	筑前国分尼寺跡	古代の寺院跡
10	陣ノ尾遺跡	原始(弥生期～古墳期)の墓域
11	国分松本遺跡	原始(弥生期)の集落および墓域
12	国分千足遺跡	原始(弥生期)から古代の集落
13	水城跡	古代の防衛施設
14	篠振遺跡	古代の窯跡、中世の墓
15	原口遺跡	原始(弥生期)の集落、古代の集落および道路
16	前田遺跡	原始(弥生期～古墳期)の集落、古代の集落および道路
17	宮ノ本遺跡	原始(弥生期～古墳期)の集落および墓域、古代の墓域・窯跡

▲：瓦窯跡

Fig. 3 大宰府条坊跡周辺の遺跡

II．調査組織

本書に掲載した調査は、複数年度にわたって実施したため、以下に各年度の調査組織について年度ごとに記述する。なお調査担当者および試掘調査担当者については、各調査報告の中に調査に至る経過というかたちで記述しているが、ここではゴチック体の活字にて記述しておく。また、整理作業年度については主として作業を実施した平成７年度の組織を記載した。

（中島恒次郎）

大宰府条坊跡　第87次調査（平成元年度）

総括	教育長	藤　壽人（～元年６月30日）
		長野治己（元年８月８日～）
庶務	教育部長	西山義則
	社会教育課長	関岡　勉
	文化財係長	鬼木冨士夫
	主事	岡部大治
		白水伸司
調査	技師	山本信夫
		狭川真一
		城戸康利
		緒方俊輔
		山村信榮
	技師（嘱託）	**中島恒次郎**
		狭川麻子（２年１月５日～）

大宰府条坊跡　第98次・第106次調査（平成２年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	西山義則
	社会教育課長	関岡　勉
	文化財係長	鬼木冨士夫
	主任主事	岡部大治
	主事	白水伸司
調査	主任技師	山本信夫
		狭川真一（条坊98次）
		城戸康利（２年７月１日～）
	技師	城戸康利（～２年６月30日）
		緒方俊輔
		山村信榮
	技師（嘱託）	**中島恒次郎**（条坊106次）
		狭川麻子

大宰府条坊跡　第118次調査（平成３年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	中川シゲ子
	文化課長	佐藤恭宏
	埋蔵文化財係長	富田　譲
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治
		川谷　豊
調査	主任技師	山本信夫
		狭川真一
		城戸康利
		緒方俊輔

	技師	山村信榮
		中島恒次郎
		塩地潤一
	技師（嘱託）	田中克子（3年10月1日～）

大宰府条坊跡　第141次調査（平成5年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	中川シゲ子
	文化課長	佐藤恭宏
	埋蔵文化財係長	高田克二
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治
		川谷　豊
調査	技術主査	山本信夫（5年10月1日～）
	主任技師	山本信夫（～5年9月30日）
		狭川真一
		城戸康利
		緒方俊輔
		山村信榮
		中島恒次郎
	技師	塩地潤一
	技師（嘱託）	田中克子
		重松麻里子（5年6月1日～）
		井上信正（5年7月1日～）

整理・報告（平成7年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	白木三男
	文化課長	花田勝彦
	文化財保護係長	高田克二（～5月31日）
		和田敏信（6月1日～）
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治
		川谷　豊
	主事	今村江利子
調査	技術主査	山本信夫
	主任技師	狭川真一
		城戸康利
		山村信榮
		中島恒次郎
		重松麻里子（～6月30日）
	技師	井上信正
		髙橋　学
	技師（嘱託）	下川可容子
		松川博一

（整理作業参加者）

相川寿美子、安芸朋江、上村英士、河田聡（現山口県豊浦町教育委員会）、久保喜代香、酒井三保子、田崎道子、谷由紀子、鶴味加代子、原野正子、藤野由貴子、松隈里恵子、宮崎亮一、森田レイ子、横山美津子、吉田勝子

発掘調査および整理報告にあたって、次の方々から御教示、資料提供を賜った、記して心より感謝申し上げます。

赤司善彦、伊野近富、宇野隆夫、尾上実、川越俊一、鈴木重治、西口寿生、福田正継、前田達男、溝口孝司、森隆、森島康雄、百瀬正恒、橋本久和

III. 調査の概要

1. 第87次調査

1）調査に至る経過

太宰府市通古賀2丁目249－3他（旧地名：大字通古賀字権入・北ノ橋）において、昭和63年12月20日に宅地拡張を目的とした文化財取り扱いに関わる問い合わせが、地権者である和田彰氏より太宰府市教育委員会にあった。当地は、鏡山猛氏推定復原案による大宰府条坊跡右郭九条六坊に位置しており、昭和46年に計画立案された観世音寺土地区画整理に先立つ文化財の試掘調査によって、埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高い区域に入るため、建物を建築する計画の有無ないしは建築計画の内容によって、埋蔵文化財の取り扱いが生じる旨を伝えた。その後計画変更が生じ、貸倉庫建築の計画となり、文化財の有無および文化財の規模確認のため、平成元年1月23日に試掘調査を実施した。その結果現地表面下約1mに埋蔵文化財が確認でき、協議の結果、発掘調査を実施することで合意をみた。発掘調査は平成元年11月28日から平成2年1月30日にかけて実施した。試掘調査は、山本信夫が、発掘調査は狭川真一・中島恒次郎が担当した。開発対象面積は774㎡、発掘調査面積は320㎡を測る。

2）層位

当地は既に観世音寺土地区画整理事業により、真砂土による埋立が約40cm為されており、真砂土による盛土を除去すると土器細片を少量含む淡茶色の遺物包含層が堆積している。この遺物包含層を除去すると遺構検出面に至る。遺構の多くは黄茶色の地山形成土に切り込むかたちで検出されるが調査区南側において一部茶黄色土の整地層下に淡茶色の遺構が検出された。したがって、当該調査区においては、2面の生活面が形成されている。

3）遺構

検出された遺構は、層位の項にて記述したようにI面とII面からなり、主として遺構I面から平安時代のものが、遺構II面からは奈良時代のものが検出された。

遺構I面からは井戸、溝、土壙、道路が主として検出されている。遺構II面からは、建物、土壙が検出されている。以下その概要について、遺構I面から順に記述する。

一遺構I面一

井戸

87SE015　調査区南端部の中央付近に検出された井戸で、溝87SD018に切られる状況で確認した。一辺約2.5mを測る隅丸方形の平面形を呈し、完掘時の深さは約1.48mを測る。井戸枠自体は腐植により残存しなかったが、層相の違いから四隅に丸杭を配し、方形の平面形を有す

るように枠材を組む構造と推定される。枠内および裏込め土の堆積状況は、まず枠内については上位より、茶黒色土→灰茶色土→灰茶色砂質土→灰色粘土が堆積している。最上位に堆積している茶黒色土層には、主として完形に近い土器が重なるように多量に出土し、遺物の堆積状況に規則性が認められないことから、一括廃棄によるものと考えられる。枠内において、他の下位に堆積する各層からは、あまり遺物等が出土しないため、井戸自体の機能が放棄された段

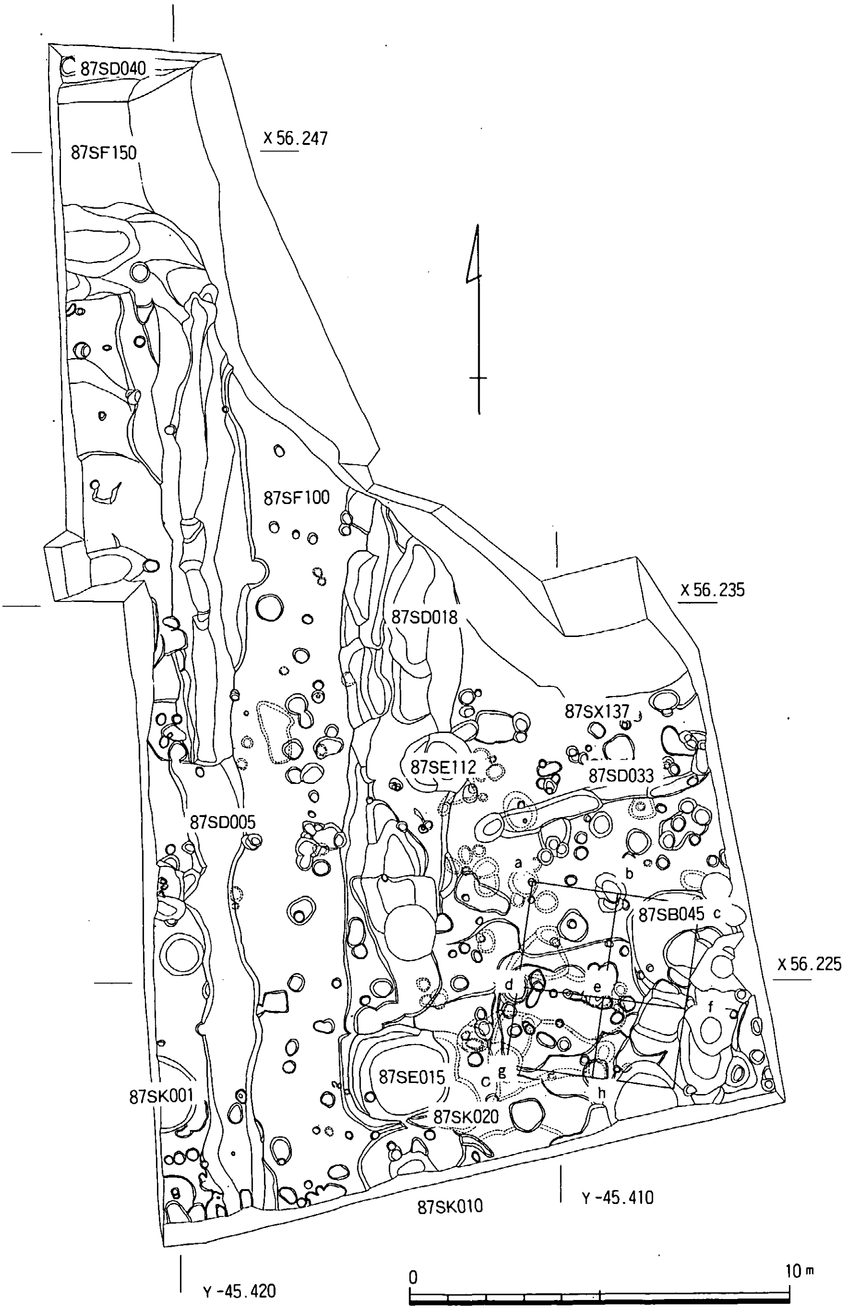
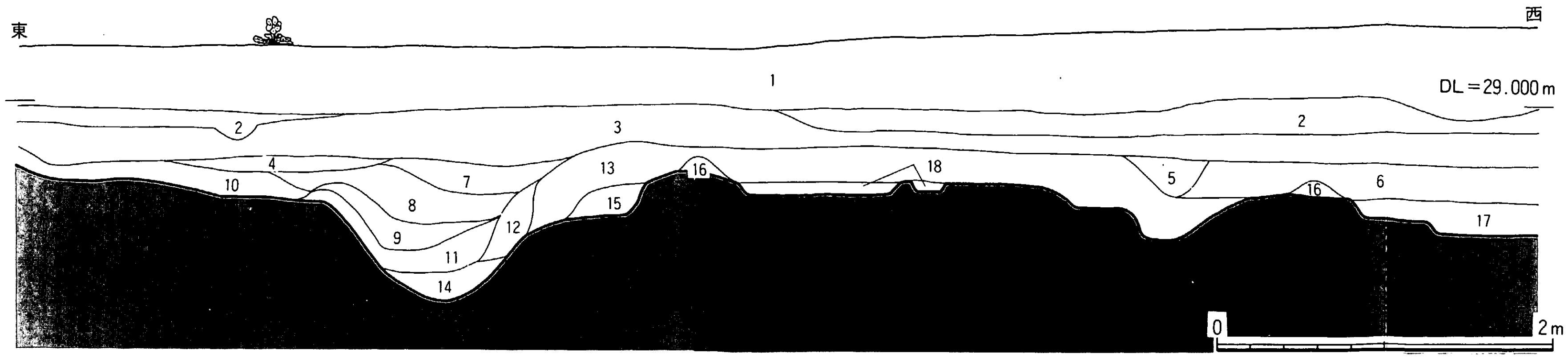


Fig. 4　条坊跡　第87次調査遺構実測図（1/200）

調査区南壁土層観察図



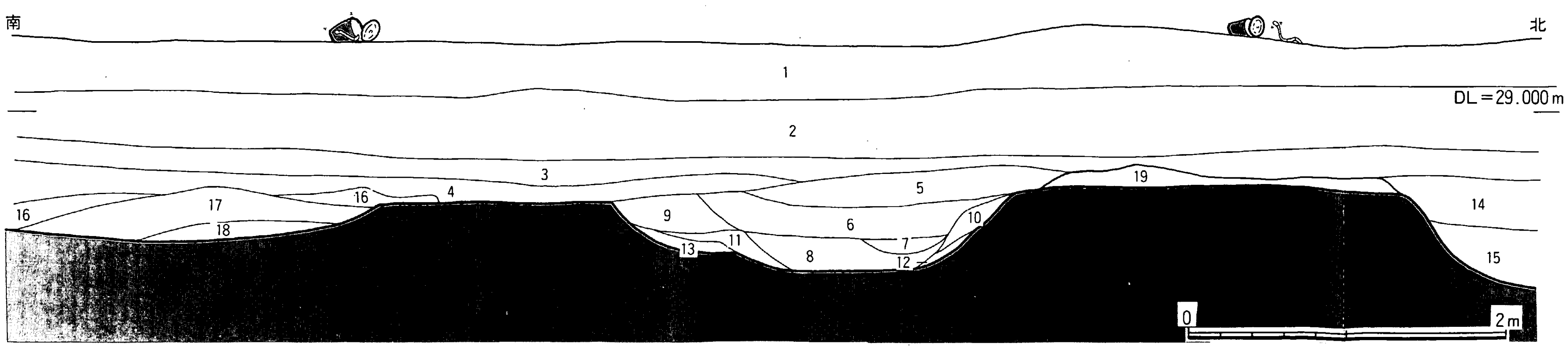
調査区南壁土層

1．表土（真砂土：区画整理事業に伴う盛り土。）
2．表土（廃材を含む埋め立て土。）
3．茶褐色土（1cmないし0.5cmの土器片を少量混入。）
4．茶色土（1cmないし0.5cmの土器片を少量混入。）
5．黄茶色土（3cm～1cmの土器片を少量混入。）
6．灰茶色土（2cm～0.5cmの土器片・炭化物片を多く混入。）
7．淡黒茶色土（1cm～0.5cmの土器片を少量混入。）
8．黒茶色土（3cm～1cmの土器片・炭化物片を多く混入。）
9．黒色炭化物混入土（3cm～1cmの土器片・炭化物片を極めて多く混入。）
10．灰茶色土（3cm～1cmの土器片・炭化物片を少量混入。）
11．淡灰茶色土（3cm～1cmの土器片・炭化物片を少量混入。）
12．灰茶色土（3cm～1cmの土器片・炭化物片を少量混入。）
13．茶褐色土（3cm～1cmの土器片・炭化物片を少量混入。）
14．灰茶色中粒砂（0.3cm以下の土器片を極少量混入。）
15．灰茶色土（0.3cm以下の土器片・炭化物片を多く混入。）
16．茶灰色土（1cm～0.5cmの土器片・炭化物片を極微量混入。）
17．茶黄色土（1cm～0.5cmの土器片・炭化物片を極微量混入。）
18．黄茶色土（1cm～0.5cmの土器片・炭化物片を極微量混入。路面上の堆積層）

遺物群との対応関係

茶褐色土：3層　SD018黒茶色土：7～9層　SD018茶色土：11・12層　SD018茶黒色土：14層

調査区西壁土層観察図



調査区西壁土層

1．表土（真砂土：区画整理事業に伴う盛り土。）
2．黒茶色土
3．茶褐色土（遺物包含層、遺構検出時における除去土層。）
4．灰茶色土（遺物包含層、遺構検出時における除去土層。）
5．淡茶色土（土器等を少量混入し、混入物の長軸方向は水平。）
6．茶色土（2cm以下の土器・炭化物を少量混入し、混入物の長軸方向は不規則。）
7．黄茶色土（茶色土を基質とし、2cm以下の黄色土ブロックを多く混入している。）
8．茶色土（1cm以下の角礫状炭化物を多く含み、土層上位に集中して堆積している。）
9．黄茶色土（1cm以下の土器・炭化物片を少量混入している。5cm程度の焼け石も含む。）
10．灰茶色土（5cm以下の土器・炭化物片を極少量混入。）
11．灰黄茶色土（1cm以下の炭化物片を少量混入。）
12．黄色土（溝機能時の地山攪乱土）
13．茶黄色土（溝機能時の地山攪乱土）
14．茶色土（2cm以下の土器片を少量混入し、混入物の長軸方向は不規則。）
15．灰茶色土（2cm以下の土器片を極少量混入し、混入物の長軸方向は不規則。）
16．黄茶色土（ほぼ均等に黄色土・茶色土の混合土。1cm以下の土器片を極少量混入。）
17．茶色粗粒砂（角礫状の粗粒砂）
18．灰茶色細粒砂
19．茶黄色土（10cm以下の土器片を少量混入。SD005が切ることから路面上の堆積物の可能性大。）

遺物群との対応関係

茶褐色土：2・3層　SD005淡茶色土：5層　SD005灰茶色土：欠失　SD005茶色土：6層
SD005黒茶色土：8層　SD040：14・15層

【記載注記】

中粒砂等の粒径区分はWentworth（1922）の粒径区分を用いている。
（勘米良亀齢他編（1979）『岩波講座　地球科学　5　地球表層の物質と環境』に記載）

Fig. 5　条坊跡　第87次調査基本土層実測図（1/40）

階で、廃棄土壙として転用されたものと考えられる。裏込め土は、上位より茶色土→黄色土と茶色土の混合土がそれぞれ堆積しており、上位にある茶色土は井戸枠崩壊に伴う土と判断され、下位に堆積している混合土は、基盤層を形成する黄色土を多く含んでいることから、地山の掘り起こし後、あまり時間を経ずに井戸造営が行なわれたものと考えられる。

枠内の堆積土および裏込め土内に包含されている遺物には、時期差に換言できる差異は認められないため、長期にわたる使用はなされていないものと推定できる。

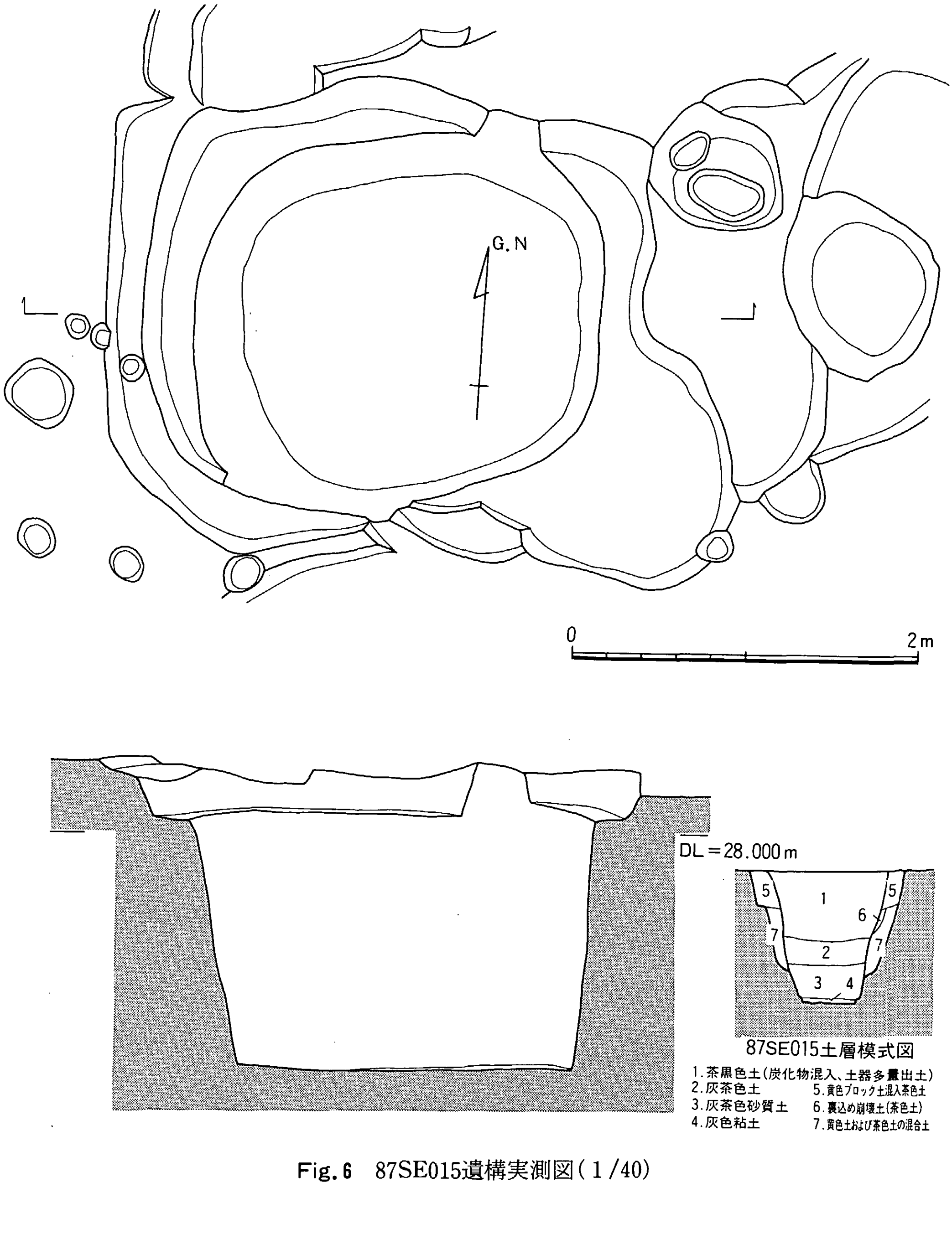


Fig.6　87SE015遺構実測図(1/40)

87SE112 調査区中央部にて検出した井戸で、87SE015同様に溝87SD018に切られている。井戸枠材は腐植によって残存していなかったが、土質の違いから、丸杭を四隅に配し方形を呈する枠構造を有していたものと判断できる。一辺1.56mを測る隅丸方形を呈し、残存する深さ1.88mを測る。枠内および裏込めの堆積土は、まず枠内の堆積土は上位より茶黒色土→灰色土の関係で堆積している。また裏込め土は、井戸上位にのみ確認でき、灰白色土が堆積している。各堆積土中からは、顕著な遺物の出土が無いことから、井戸放棄後短期間のうちに自然埋没していったものと考えられる。

溝

87SD005 調査区西側に南北に延びる直線の溝で、調査区北側において、西へ曲折している。溝幅約1.5m～2.0mを測り、残存する深さ約0.81mから0.21mを測る。溝内に堆積した土は上位より、淡茶色土→灰茶色土→茶色土→黄茶色土→茶黒色土→茶色土→淡灰茶色土が堆積している。それぞれの土が溝全体にわたって確認できているわけではなく、各所に堆積した土の確認状況から導き出した。特に西へ曲折する箇所において、堆積状況が複雑化する状況にある。また溝底部分は凹凸が確認できる。各土層から、遺物が出土している。溝の方向は別表の通り（Tab. 3）。

87SD018 調査区のほぼ中央に南北に縦断し先述した87SD005とほぼ平行して検出した溝で、溝幅約3.0m、残存する深さ約0.77mから0.33mを測る。溝内に堆積した土は上位より黒茶色土→茶色土→茶黒色土が堆積している。主として

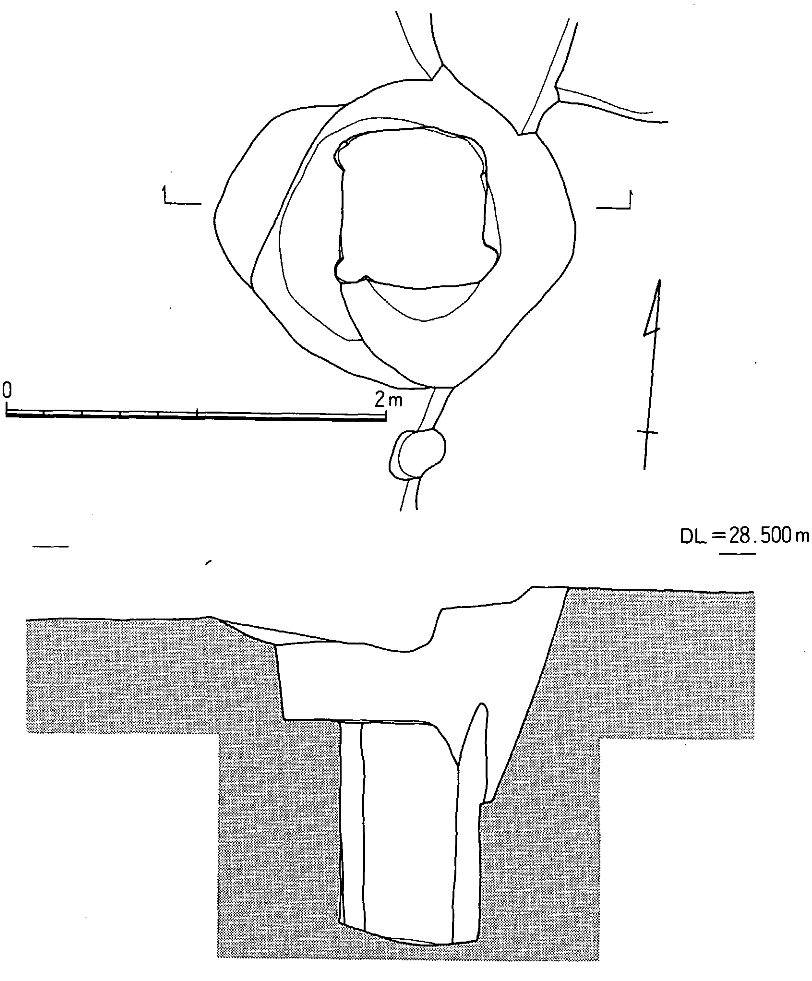


Fig. 7　87SE112遺構実測図（1/40）

上位二層が溝全体に堆積している。87SD005同様に溝底には凹凸が確認できる。溝の方向は別表の通り（Tab. 3）。

87SD033　調査区東部中央に北東方向から南西方向へ直線的に延びる溝で、残存長約5.70m、残存する深さ約0.15mを測る。残存状況は良好とはいえず、僅かに凹みを確認したにすぎない。

87SD040　調査区北西部に僅かに検出した溝で、南から北へ落ちる状況を確認していたが、調査最終段階で重機により拡張掘削を行なったところ、北側の上がりを確認したため（Pla. 5）、溝と判断した。残存する深さは約0.52mを測る。溝内の堆積土は、上位より茶色土→灰茶色土が堆積している。溝の方向は別表の通り（Tab. 3）。

土壙

87SK001　調査区南西部に検出した土壙で直径約2.06mのほぼ円形を呈すると考えられるが、調査区外へ遺構が延びていることから全景は不明である。埋没土の堆積状況は、上位より黒茶色土→茶灰色土が堆積している。

87SK010　調査区の南部、87SD018の南延長部分に検出した土壙で、調査区外へ展開しているため詳細は不明であるが、検出できた範囲では隅丸方形を呈していると考えられる。長軸長2.90m、残存する深さ0.4mをそれぞれ測る。埋没土の堆積状況は、上位より灰色土→茶黒色土→灰茶色土が堆積している。

87SK020　調査区南部に位置し、87SE015に切られる状況で検出できた。残存している形状は不整形で、その大半を87SE015の造営に伴って欠失しているため不明である。残存する深さは0.26mを測る。土壙内より、土師器の坏が完形に近い形で出土している。

87SK143　調査区北東部に検出した不整形の土壙で、北部を河川の氾濫によって欠失していることから、詳細は不明である。北部へ落ちる状況で検出している。

道路

87SF100　ほぼ同時期に埋没したと考えられる溝87SD005および溝87SD018にはさまれた空間を道路遺構と認定した。道路面には、小穴が検出されているが、いずれも87SE015ならびに87SE112と同時期の遺物を出土していることから、屋敷地として機能していた時期のものと考えられ、道路機能時には全て埋没していたものと考えられる。道路面において舗装事業の痕跡は確認できなかった。道路の中心軸は、座標北に対しN-0°14′-Eの振れを有している（Tab. 3）。

87SF150　西方へ曲折する溝87SD005と調査区の北端部で検出した溝87SD040にはさまれた空間を道路遺構と認定した。両者の溝とも西に隣接する試掘調査現場にて延長部分を検出できており、今次調査区より西方へ延びているものと考えられる。道路の中心軸は、座標北に対しN-88°24′-Eの方向へ振れている（Tab.3)。道路路面幅は約2.70mを測る。

その他の遺構

87SX008　現在の御笠川による氾濫によって掘削がなされた際に堆積した土で、遺跡の残存

状況も、当該遺構より北側は欠失している。周辺の試掘調査により調査区の東南方向へ向けて広がる傾向にあり、河川の蛇行に伴う掘削が広がっているものと考えられる。

87SX066　調査区北西部に位置し、調査区外へ西方に広がるように検出できた。深さ約0.2mの不整形の凹み。

87SX067　調査区北東部に検出した小穴。茶色土が堆積している。

87SX076　調査区南東部に検出した不整形の凹みで、茶色土が堆積している。残存する深さは、約0.5mを測る。

87SX086　87SX086の下位より検出した不整形の凹みで、残存する深さは約0.66mを測る。

87SX137　調査区北東部に検出した小穴で、直径約0.31mの円形を呈し、残存する深さ0.23mを測る。埋没土は茶色土が堆積し、遺構内部から完形の土師器丸底坏aが2枚伏せた状況で出土している。

―**遺構II面**―

調査区南東部分にのみ検出することができた。調査区南東方向へ展開するものと考えられ、周辺の試掘調査によっても、南東方向へ遺構の検出が確認されてきている。調査区内では僅かな遺構しか検出できなかったため、遺構の性格および具体的な状況についての検討は、南部の発掘調査によるしかない。

掘立柱建物

87SB045　調査区南東部に検出した建物で、調査区南東方向へ展開するものと考えられるため全容は不明である。検出した柱間は平均で約

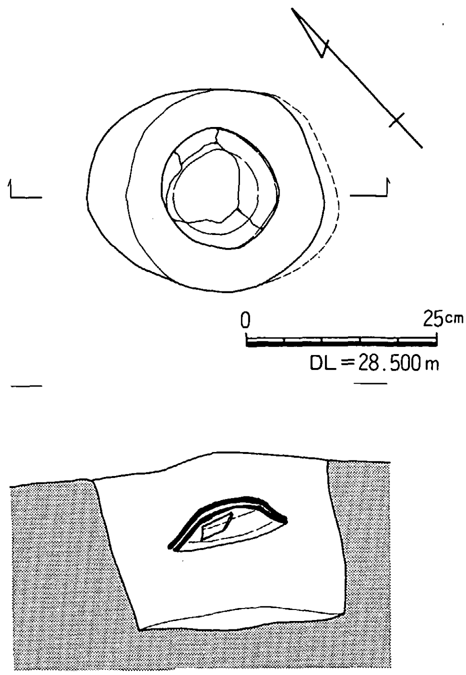


Fig. 8　87SX137遺構実測図(1/10)

掘立柱建物

遺構番号	抽出Point	遺構任意中点座標 X座標	遺構任意中点座標 Y座標	方位角	抽出Point間距離
87SB045	a	56.227.600	−45.410.725	N8°0′17″E	4.847m
	g	56.222.800	−45.411.400		

道路側溝

遺構番号	抽出Point	遺構任意中点座標 X座標	遺構任意中点座標 Y座標	方位角
87SD005	NP	56.241.200	−45.419.500	N3°7′45″E
	SP	56.219.250	−45.418.300	
87SD005	EP	56.244.475	−45.421.500	N84°53′52″E
	WP	56.244.350	−45.422.900	
87SD018	NP	56.235.500	−45.414.150	N0°50′4″E
	SP	56.225.200	−45.414.350	
87SD040	EP	56.249.300	−45.421.200	N90°E
	WP	56.249.300	−45.423.000	

道路

遺構番号	抽出Point	遺構任意中点座標 X座標	遺構任意中点座標 Y座標	方位角
87SF100	NP	56.236.200	−45.416.700	N0°14′5″E
	SP	56.224.000	−45.416.750	
87SF150	EP	56.247.000	−45.421.200	N88°24′32″E
	WP	56.246.950	−45.423.000	

Tab. 3　条坊87次主要遺構座標値

2.424m、建物の座標北方向からの振れは、南北柱方向でみてN-8°-Eを示す（Tab. 3）。

土壙

87SK152　調査区南端部分にて検出した凹みで、残存状況は悪く、深さ0.13mを測る。

87SK159　調査区南端部分にて検出した凹みで、残存状況は悪く、深さ0.25mを測る。

87SK166　調査区南端部分にて検出した凹みで、残存状況は悪く、深さ0.18mを測る。当該土壙からは、弥生時代のものと考えられる石斧が出土していることから、周辺地域での弥生時代の遺跡の存在をうかがわせる。　（中島恒次郎）

4）遺物

掘立柱建物出土遺物

87SB045b（Fig. 9）

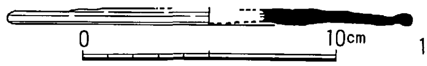


Fig. 9　掘立柱建物出土遺物実測図

須恵器

蓋3(1)　口径16.0cmを測る。偏平な形状で天井部は粗いヘラ削りを行なう。

井戸出土遺物

87SE015（Fig.10～12）

須恵器

鉢（86～88）　86・87は口径23.1・24.0cmを測る。胎土はいずれも精選されそれぞれ明灰色、淡灰色を呈し、焼成も良好である。86は口縁端部を玉縁状に内側に折り曲げた痕跡が観察される。87の底部は糸切りで、口縁部は内外面とも黒色を呈する。いずれも篠窯系と考えられる。88は口径27cmに復原され、胎土は砂粒を多めに含み粗い。青灰色を呈し焼成、還元ともに良好。搬入品（産地不明）と考えられる。

土師器

坏a（1～50）　口径10.3～12.5cm、器高1.7～2.8cmを測る。底部は磨耗しているものを除き、すべてヘラ切りされる。体部下位もしくは中位に屈曲を有するものが多い。小皿aに分類できる可能性もある。

小皿a2（51）　口径14.0cm、器高2.6cmを測る。口縁部が丸く外反し、口縁端部の内側には浅い沈線が巡る。手捏ねで器肉は薄く仕上げられ、外面体部から底部に指頭圧痕が残っている。畿内よりの搬入品と考えられる。

小皿c（52～56）　口径11.65～13.3cm、器高2.3～2.6cmを測る。いずれも皿部を偏平につくる。

椀a（57～70・78）　口径10.45～13.1cm、器高2.9～4.1cmを測る。体部は下位に丸味をもち、口縁部まで立ち気味で端部を外反させるものが多い。61～65・68・69は内面にミガキbを施す。68・69は体部が開く。70は磨耗のため内面の調整は不明。78は口径15.0cmで内面にミガキbを施す。68～70・78は形態は直線的に上方へ伸びる体部を有しているが、ミガキbを施している

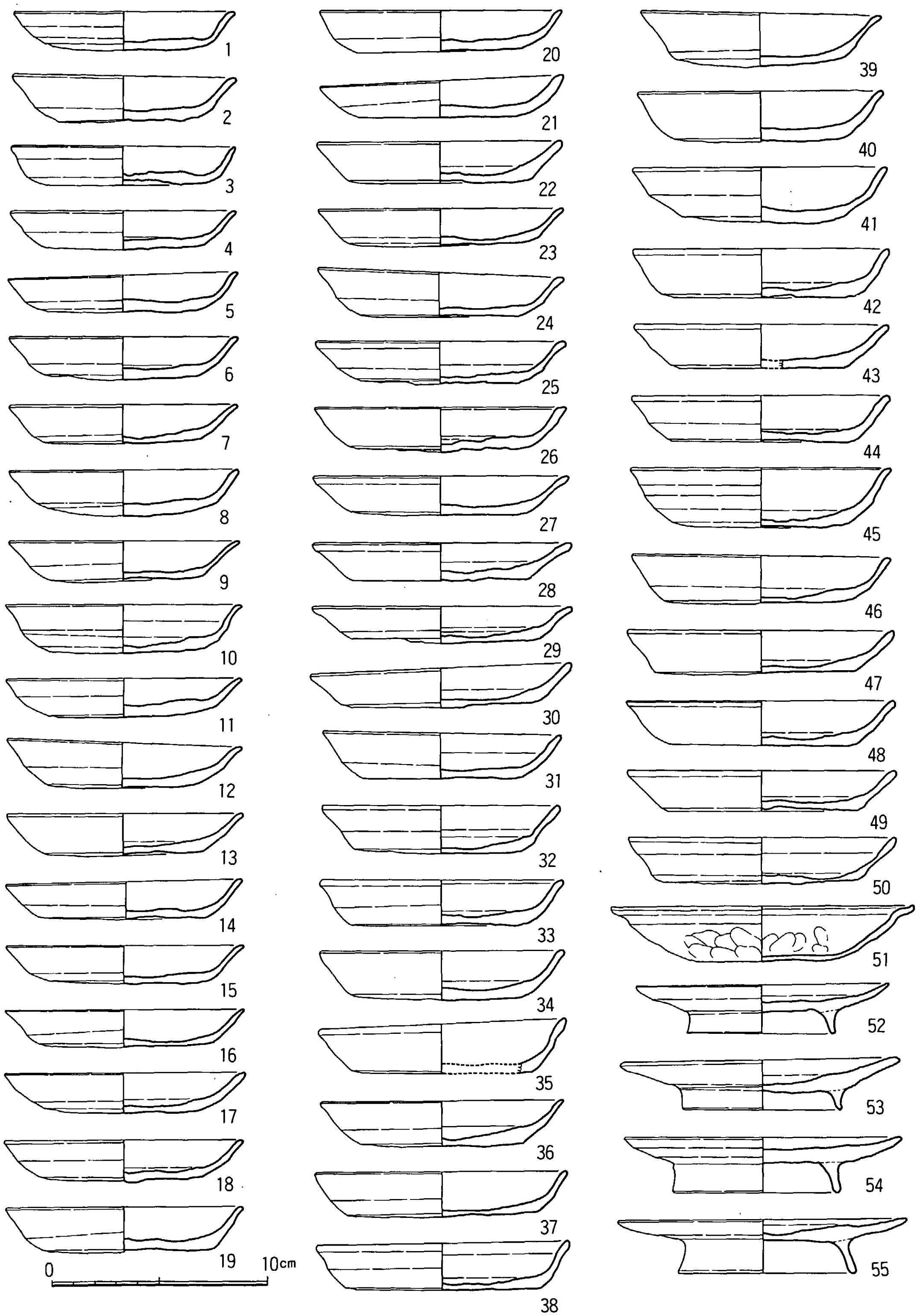


Fig.10　87SE015出土遺物実測図(1)

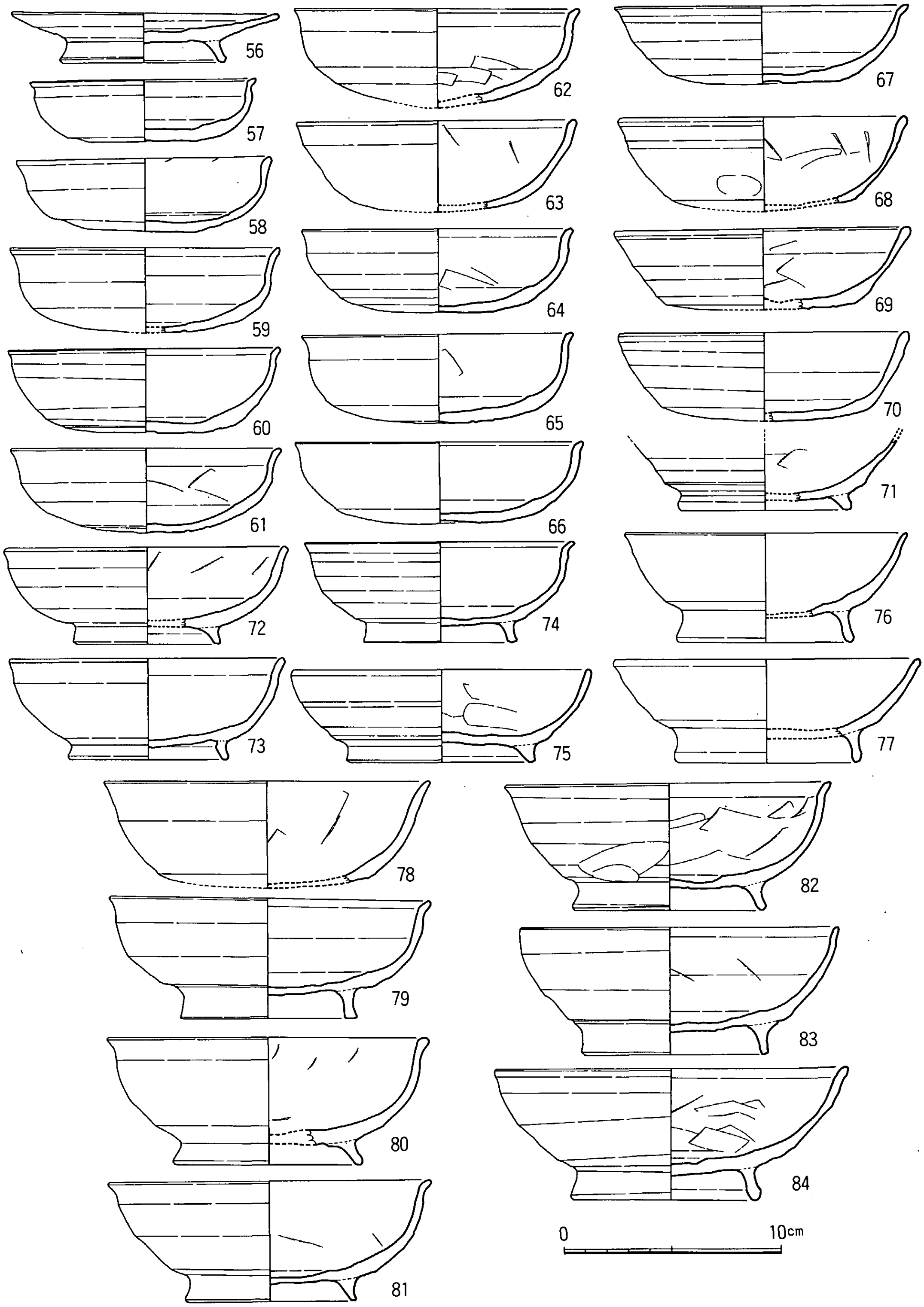


Fig.11　87SE015出土遺物実測図(2)

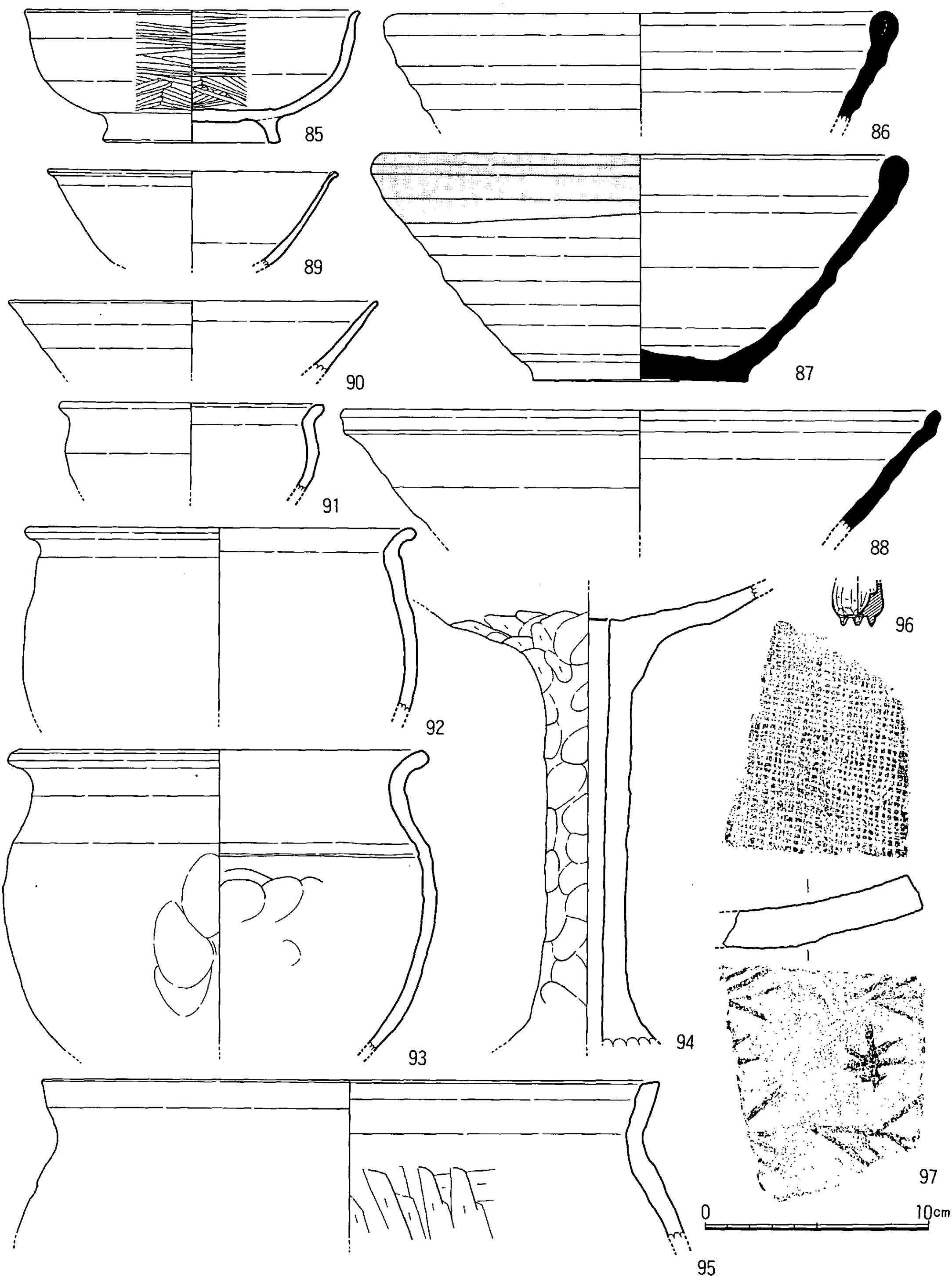


Fig.12　87SE015出土遺物実測図(3)

ことから椀aに含めた。

椀c2（71〜77・79〜84） 口径11.65〜13.3cm、器高4.3〜6.15cm、高台径6.8〜8.9cmを測る。体部に丸味があり、75・83は口縁部は立ち気味で、その他は外反する。72・75・77・80〜84は内面にミガキｂを行なう。

甕（91〜93・95） 口径12.0〜27.8cmに復原される。91は小甕で外面は横ナデ、92は内面はナデ調整される。93は外面は叩きの後ナデ消し、内面に指頭圧痕が残る。口縁部外面下から体部全体に煤状炭化物が付着する。95は口縁部が立ち気味で、胴部内面は手持ちヘラ削りを行なう。

器台（94） 胎土は明黄白色を呈し、砂粒を含んで粗い。外面に指頭圧痕が多く残る。中心部の穴は直径1.4cmを測る。

黒色土器

椀c2（85） 口径15.1cm、器高6.0cm、高台径8.0cmを測る。体部下位は丸く張り出し、口縁部は直線的に立ち上がる。内外面とも丁寧なミガキｃを行なう。Ｂ類。

緑釉陶器

椀（89） 口径12.9cmに復原される。素地は黄茶色を呈し精選され、釉は暗緑色で光沢がある。土師質である。

越州窯系青磁

椀（90） 口径16.6cmに復原される。体部は外側へ直線的に開く。素地は、灰色を呈し精選されているが、釉は剝落している。Ｉ類。

石製品

鍋（96） 滑石製で、最大径2.2cmを測る。小さな脚を推定4足削り出す。ミニチュア鍋か？

瓦類

平瓦（97） 凹面に布目圧痕、凸面は平行線叩きに「未」の左字を記す。XIV類。

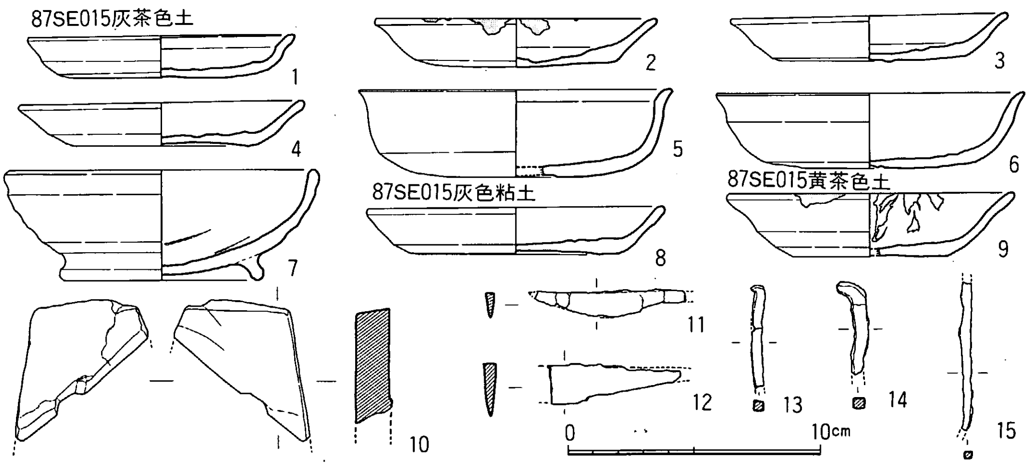


Fig.13　87SE015各土層出土遺物実測図

87SE015灰茶色土（Fig.13）

土師器

小皿a（1～4） 口径10.6～11.4cm、器高1.7～1.9cmを測る。底部はすべてヘラ切りされる。2は口縁の内外面に黒色の炭化物が付着する。

椀a（5・6） 口径12.4・12.2cm、器高3.5・3.0cmを測る。体部下位に丸味があり、口縁部はわずかに外反する。いずれも体部は横ナデ、見込みには不定方向のナデ調整を行なう。底部はヘラ切り。

87SE015灰色粘土（Fig.13）

土師器

坏a（8） 口径11.8cm、器高1.9cmを測る。見込みは不定方向のナデを行ない、外面底部に板状圧痕が残る。底部はヘラ切り。

87SE015黄茶色土（Fig.13）

土師器

坏a（9） 口径11.4cm、器高2.5cmを測る。見込みから口縁部外面にかけて黒色の炭化物が付着する。底部はヘラ切り。

石製品

砥石（10） 残存長5.6cm、幅5.4cm。使用痕が不明瞭で砥石とは断定できない。材質は硬質砂岩。

金属製品

刀子（11・12） いずれも鉄製。11は小ぶりで、残存長6.0cm。刃部と中子が残る。12は腐食のため刃部の大きさは不明。

釘（13～15） 鉄釘。13は折れ曲がった頭部が残り、14・15は両端とも欠損する。断面はいずれも四角形である。

87SE112（Fig.14）

須恵器

鉢（5・6） 6は口径24.0cmに復原される。胎土は黄白色を呈し、口縁部の外側は黒灰色となる。瓦質である。5は小片だが、胎土は明灰色を呈し精選される。焼成良好。いずれも篠窯系。

土師器

丸底坏c（4） 口径15.0cm、器高5.1cmを測る。内面はミガキｂを丁寧に行ない、外面体部下位は爪を立てたような圧痕が残る。

灰釉陶器

椀（2） 高台径6.8cmを測る。見込みは平滑になっており、外面は体部下位から底部にかけて黄白色のヌタ（？）がついている。底部は糸切り。

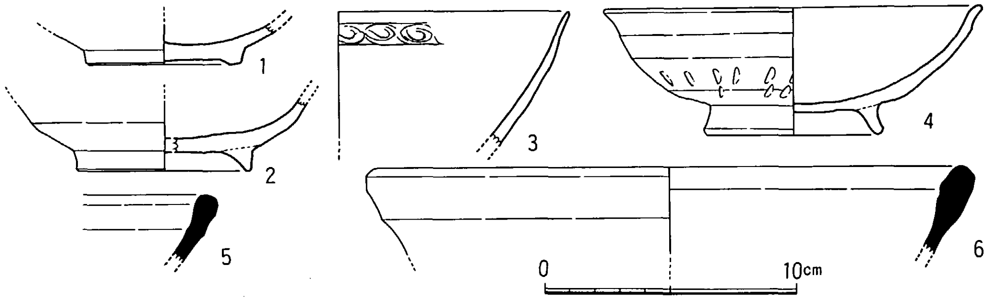


Fig.14　87SE112出土遺物実測図

越州窯系青磁

椀（3）　素地は茶灰色を呈し精選されている。釉は茶色味の強い緑灰色で光沢がある。口縁部内面に毛彫りの文様が帯状に巡る。III類。

白磁

皿（1）　素地は灰白色を呈し、やや粗い。外面は露胎で、体部下位はヘラ削りされる。II類。椀のIV類とも考えられる。

土壙出土遺物

87SK001（Fig.16）

土師器

小皿a2（1）　口径11.2cm、器高0.9cmを測る。口縁部内側に浅い沈線が巡る。底部はヘラ切り。

丸底坏a（2）　口径16.0cm、器高3.5cm。内面はミガキbを施している。

黒色土器

椀c（3）　高台底部は欠損するが径6.0cm前後を測る。内面にはミガキcを施し、体部は丸味がある。A類。

87SK010（Fig.15）

土師器

小皿a（1～3）　口径9.9～10.0cm、器高1.0～1.3cmを測り、底部はいずれもヘラ切りされる。

丸底坏a（4）　口径14.8cm。内面はミガキbを施し、外面は指頭圧痕の上から丁寧にナデを行なっている。

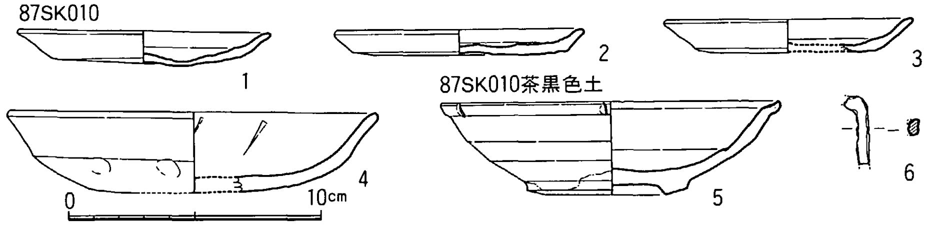


Fig.15　87SK010出土遺物実測図

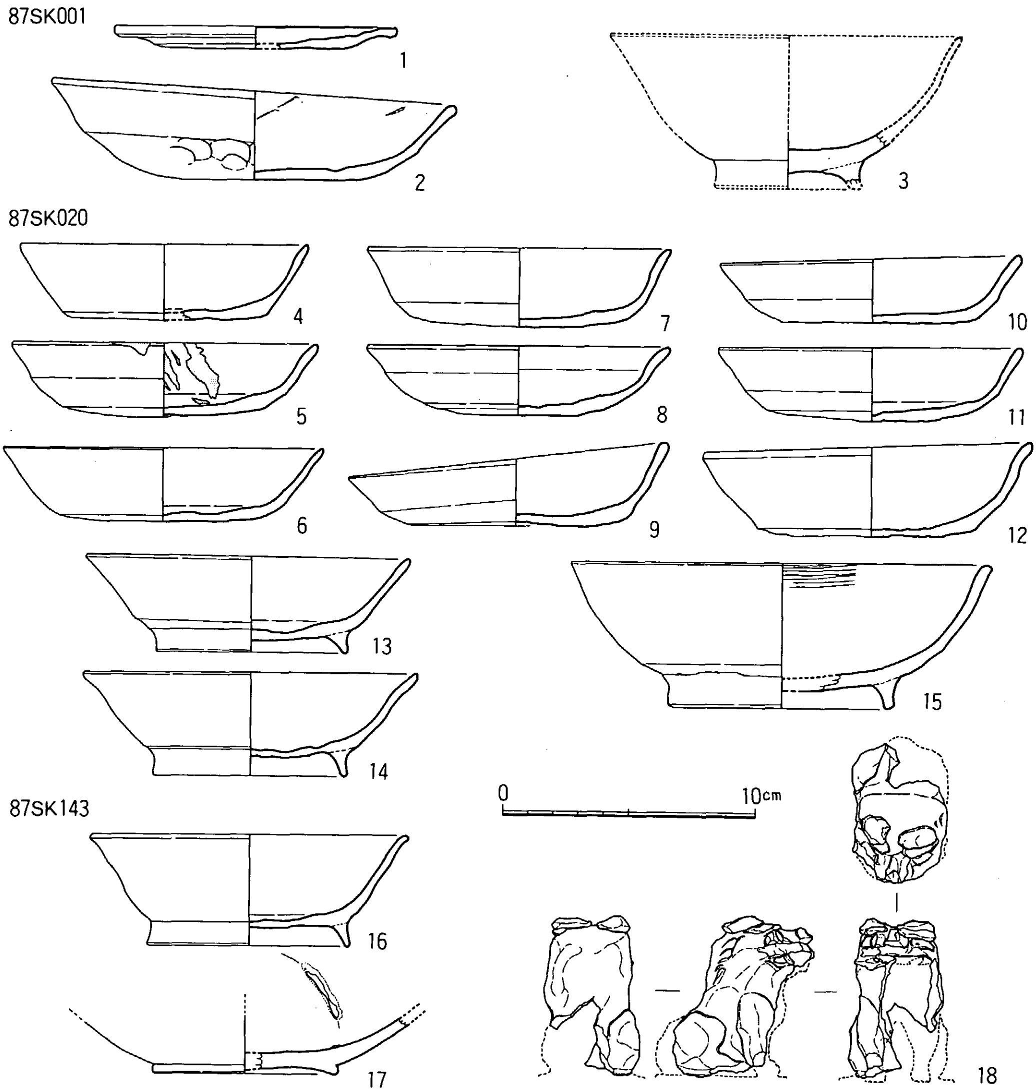


Fig.16　土壙出土遺物実測図(1)

87SK010茶黒色土（Fig.15)

白磁

皿（5）　口径13.5cm、器高3.7cm、高台径6.4cmを測る。素地は灰白色を呈しやや粗く、わずかに空色味を帯びた透明感のある釉が外面体部下位まで施される。口縁部外面に推定5～6箇ヘラで押圧して輪花をつくり、見込みには段がつく。外面は体部上位までヘラ削りを行なう。未分類。

金属製品

釘（6）　鉄製で、折れ曲がった頭部が残る。残存長2.7cm。断面は四角形と考えられる。

87SK020（Fig.16)

土師器

坏a（4～12） 口径11.35～13.05cm、器高2.6～3.2cmを測る。5は内外面に黒色の煤が付着する。磨耗したものが多いが、概ね明黄白色を呈し、底部はすべてヘラ切りである。

椀c1（13・14） 口径12.8・13.25cm、器高3.8・4.1cm、高台径7.6・7.7cmを測る。直線的に体部が開く。14は、体部内外面とも横ナデを行なう。

黒色土器

椀c2（15） 口径16.7cm、器高5.75cm、高台径8.9cmを測る。内面は丁寧にミガキcを行ない、外面はナデによる凹凸がついている。口縁部外面まで黒変している。A類。

87SK143（Fig.16）

土師器

椀c1（16） 口径12.6cm、器高4.4cm、高台径8.0cmを測る。体部は直線的に開き横ナデ調整されている。

越州窯系青磁

椀（17） 底部径7.7cmを測る。底部は円盤状をなし、見込みに白色の目土が残る。素地は明灰色で、黒色の細粒を含み、黄茶色のやや光沢のある釉が体部外面中位まで施される。II-2類。

狛犬（18） 高さ6.5cmほどを測る。素地は灰色で、黒色の細粒を含み、褐色の釉が内外面にまわっている。中空構造になっているが型造りではなく手作りである。顎部は欠損するが、顔面の右端のやや開いた下唇に牙が貼付され、口は阿形になっている。目、耳、鼻、足は粘土を貼り付け、たて髪や目の輪郭はヘラを使って成形され、台座等に接合されていたと考えられる。II類と同様の素地質を有する。

87SK159（Fig.17）

須恵器

蓋c3（19） 口径19.05cm。天井部は丁寧にヘラ削りされ、擬宝珠状のつまみがつく。

坏c（21・22） それぞれ口径11.1・13.3cm、器高3.45・4.1cm、高台径7.3・9.4cmを測る。体部は横ナデ、見込みには不定方向のナデを行なう。

皿a（20） 口径15.6cmに復原される。底部はヘラ切り。口縁部内外面とも黒変する。

甕（23） 口径30.0cm、器高25.4cmに復原される。横耳を推定二個貼り付け把手にしている。外面は体部上位まで平行叩きを行ない、内面に同心円の当て具痕が残る。明灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。

87SK166（Fig.17）

須恵器

蓋3（24） 口径12.8cmを測る。天井部はヘラ切り後ナデ調整。内面は平滑で、転用硯と考えられる。口縁部外面は黒灰色になっている。

壺蓋（25） 口径16.8cmに復原される。天井部はヘラ削りされ、口縁端部を丸く外側にひき出している。

坏c（26〜28） 口径11.1〜14.9cm、器高3.5〜4.0cmを測る。体部を横ナデ、見込みは不定方向のナデを行なっている。底部はヘラ切り。

甕（30） 口縁部のみの破片である。内面に自然釉が付着し、外面にカキ目が残る。

土師器

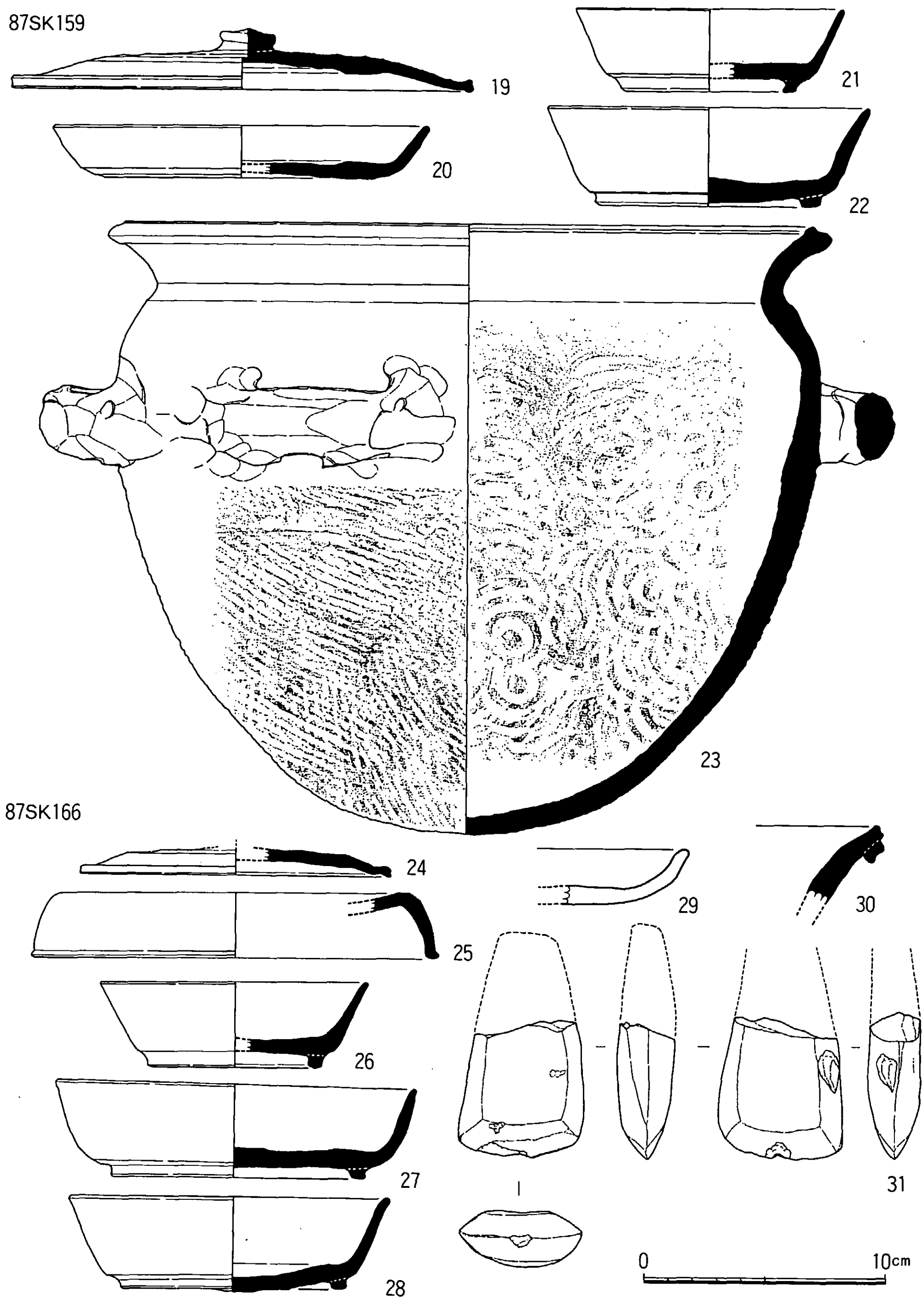


Fig.17 土壙出土遺物実測図(2)

皿b（29） 胎土は明赤褐色を呈する。小片で、磨耗しているため調整は不明。

石製品

石斧（31） 残存長6.0cmで、刃部は4.9cmを測る。一部刃こぼれで欠損する。材質は緑色片岩。混入品と考えられる。

溝出土遺物

87SD005（Fig.18）

須恵器

円面硯（3） 底部径23.0cm。圏台は高めで、大ぶりの硯と考えられる。外面は茶褐色から暗褐色を呈し、焼成は良好。外面に格子叩きの痕が残る。圏台部には円形と長円形の透かしがある。

土師器

丸底坏a（4・5） それぞれ口径14.7・14.8cmを測る。内面はミガキｂを行ない、5は押し出しされたところに指頭圧痕が残っている。

緑釉陶器

椀（2） 高台径は6.0cmに復原される。明灰色の素地で精選されており、土師質に焼き上げられている。底部は糸切り後高台を貼付する。

灰釉陶器

椀（1） 口径13.8cmを測る。素地は明灰色を呈し精選されている。体部は横ナデを行ない、残存部に釉は確認できなかった。

越州窯系青磁

椀（6） 高台径6.6cmを測る。素地はやや茶色味をおびた灰白色で精選されている。全面施釉後、高台畳付の釉はカキ取られ、目跡が残る。Ⅰ-2類。

白磁

椀（7） 口径16.0cmを測り、長い玉縁の口縁をもつ。Ⅳ類。

石製品

器種不明（8） 滑石製で、口径2.2cm、高さ2.0cmほどの筒状の容器を2つ連結させたまま削って成形している。底部内面は抉り痕を残すが、他は丁寧に削られる。用途不明。

87SD005灰茶色土（Fig.18）

須恵器

鉢（9～11） 9と10は同一個体と考えられ、口径は22.2cmに復原される。口縁部を内側に折り曲げ玉縁状につくる。底部は糸切り。11は破片だがやはり口縁部を内側に折り曲げたもの。いずれも胎土は灰白色を呈し、口縁部外面が黒灰色になっており、瓦質に焼成されている。篠窯系。

土師器

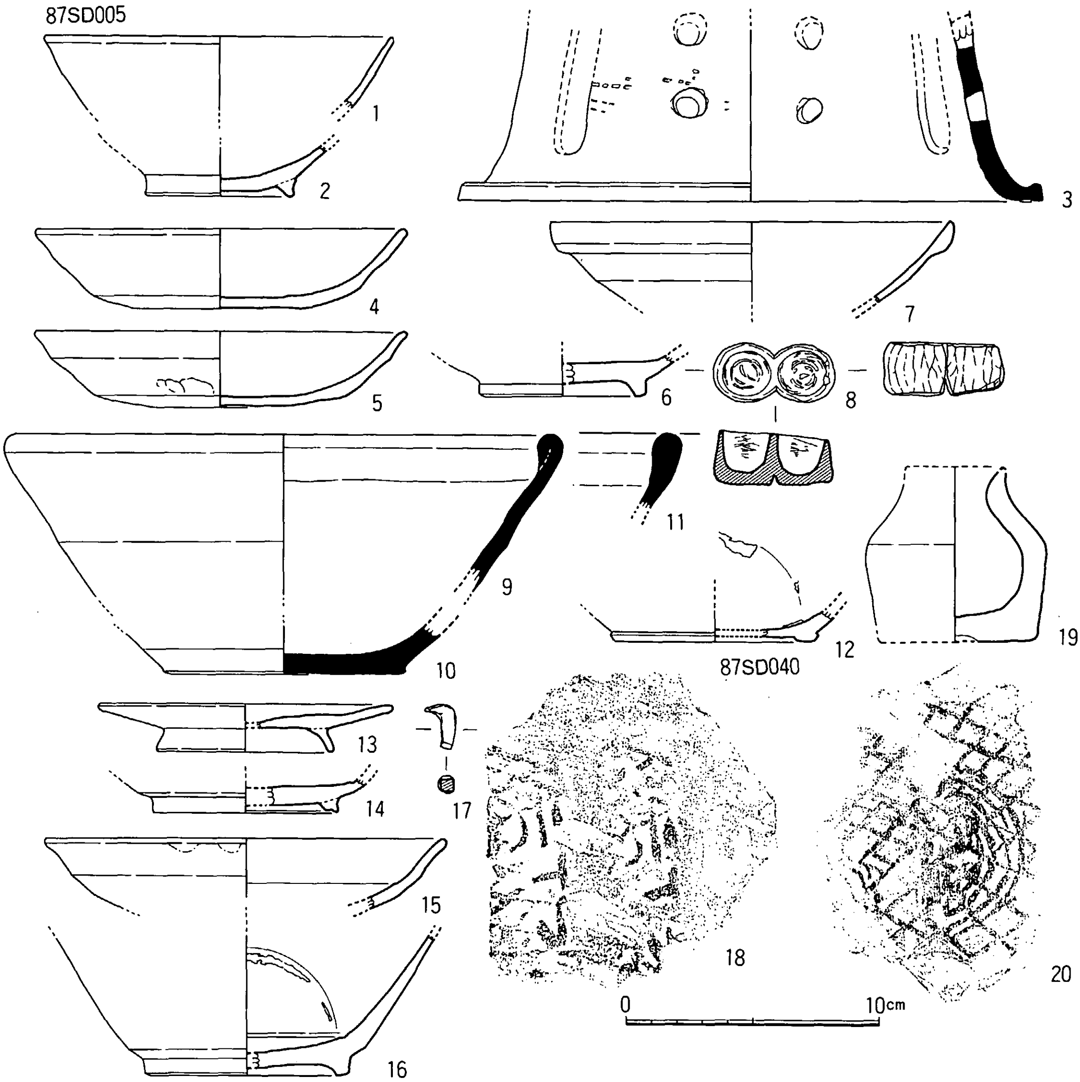


Fig.18　87SD005・040出土遺物実測図

小壺（19）　口縁端部及び底部の一部を欠くが、器高7.0cm、最大径7.2cm程で、横ナデ調整される。体部と底部の一部が黒色になっている。

87SD005茶色土（Fig.18）

土師器

小皿c（13）　口径11.6cmを測り、皿部は体部が外側に開き偏平になっている。

緑釉陶器

皿（14）　高台径7.4cm。素地は灰色から茶灰色を呈す。高台の形状は、高台内面に段がつき、高台の内側にはハリを使った痕跡が残る。底部は糸切り。須恵質で近江産と考えられる。

越州窯系青磁

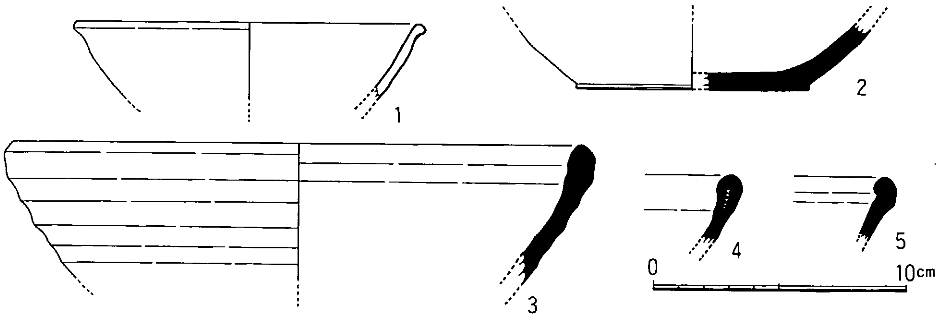


Fig.19　87SD018出土遺物実測図

椀（12・16）　12は高台径8.2cm。円盤状の底部の内側を削って高台をつくる。素地は灰色から茶灰色を呈し、黒色の細粒を含む。黄色味の強い緑灰色の釉が内面に残る。II-2a類。16は高台径8.1cmを測る。素地は精選されるが、釉は発色が悪く灰色味をおびた黄緑色を呈する。全面施釉後、高台畳付の釉をカキ取る。I-2類。

白磁

皿（15）　口径16.0cm前後に復原される。外面は体部上位まで削り、見込みには段がある。やや黄色味をおびた白色の不透明な釉が施される。VI類。

瓦類

丸瓦（18）　凹面は布目圧痕、凸面は斜格子叩きで「小ト瓦」の左字が記される。X類。

87SD018（Fig.19）

須恵器

鉢（2～5）　いずれも篠窯系の鉢で、2の底部は糸切り。3～5は口縁部を玉縁状につくる。3は口径23.4cmに復原され、2・4・5は瓦質になっている。

白磁

椀（1）　口径14cmを測る。素地は灰白色を呈し精選され、釉は淡く空色をおびた透明釉で光沢がある。口縁端部は玉縁の変形したものと考えられ、II類と考えられる。

87SD018黒茶色土（Fig.20）

須恵器

猿面硯（18）　凸面はハケ調整で、須恵器壺の転用硯である。凹面は平滑でわずかに墨痕が残る。

土師器

丸底坏a（1～3）　口径14.6～16.0cmを測る。いずれも内面にミガキbを行なう。底部はヘラ切りである。

緑釉陶器

椀（4）　高台径は8.2cmを測る。見込みはヘラ磨きされ、底部はヘラ削りを行なう。見込みと外面底部にハリの痕跡が残っている。須恵質。

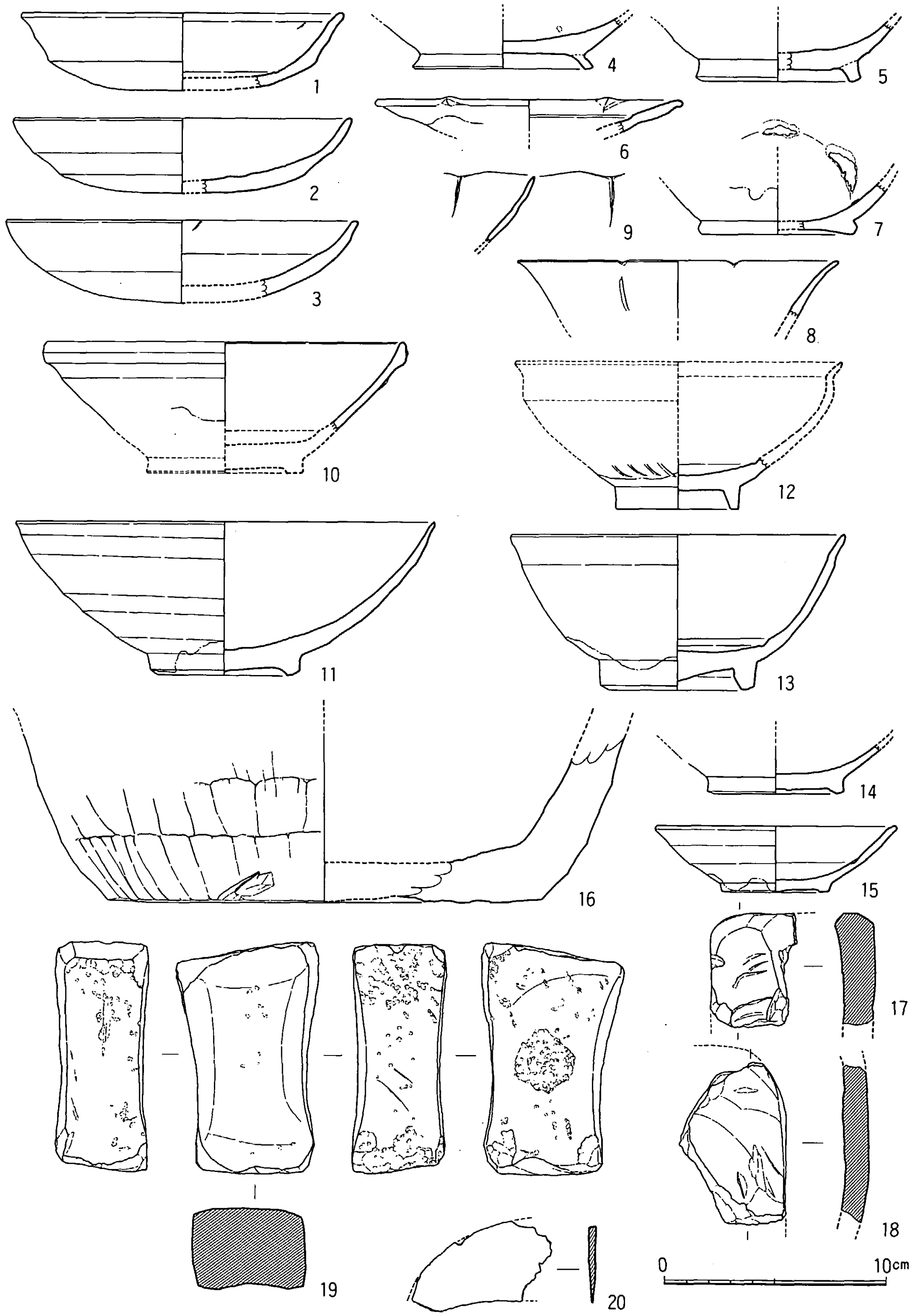


Fig. 20　87SD018黒茶色土出土遺物実測図

灰釉陶器

椀（５） 高台径7.4cmを測る。底部は糸切り。見込みが平滑になっており、使用による磨耗と考えられる。見込みと外面の体部から高台にかけて淡く赤色顔料が残る。

段皿（６） 口径14.0cmを測る。素地は明灰色を呈し精選されるが、砂粒を多めに含んでいる。口縁部は外側からヘラで押圧し輪花をつくる。

越州窯系青磁

椀（７・８） ７は高台径7.2cm。素地は明灰色を呈し黒色の細粒を含む。化粧掛けの上から施釉されるが発色が悪い。見込みに白色の目土が残る。II－２類。８は口径14.6cmで、素地は精選されている。体部外面はヘラで縦方向に押圧し、口縁部は刻みをいれて輪花をつくる。I－２b類。

白磁

椀（９～14） ９は灰白色の精選された素地に淡い空色をおびた光沢のある釉が施されている。輪花になっており、XI類と考えられる。10は口縁に玉縁をもち、体部上位まで削る。IV類。12は見込みに浅い段をもち、体部外面は片切り彫りで線刻される。体部下位以下は施釉しない。XII-1b類。11は口径19cm前後、器高7.0cmを測り、精選された素地に空色味をおびた透明釉が施される。XI類。13は口径15.2cm、器高7.1cmを測る。見込みに段があり、口縁部がわずかに外反する。V－１類。14は高台径6.2cm。高台を浅く削りだし、青味をおびた透明釉が施されている。IV類。

皿（15） 口径11.0cm。外面は口縁部下まで削り、見込みに段をもつ。釉は淡い空色を呈した透明釉である。II-1a類。

石製品

石鍋（16） 平底で底部径は20.0cm前後。内面の削りは粗く、底に黒く焦げた物質がこびりつき、体部外面は黒色の煤が付着する。滑石製。

器種不明（17） 板状で角は丸く削られ、凹面は平滑になっている。滑石製。硯の可能性がある。

砥石（19） ４面使用され、敲打痕が残る。材質は砂岩。

金属製品

鎌（20） 鉄製鎌の刃先。厚さは0.35～0.1cm。

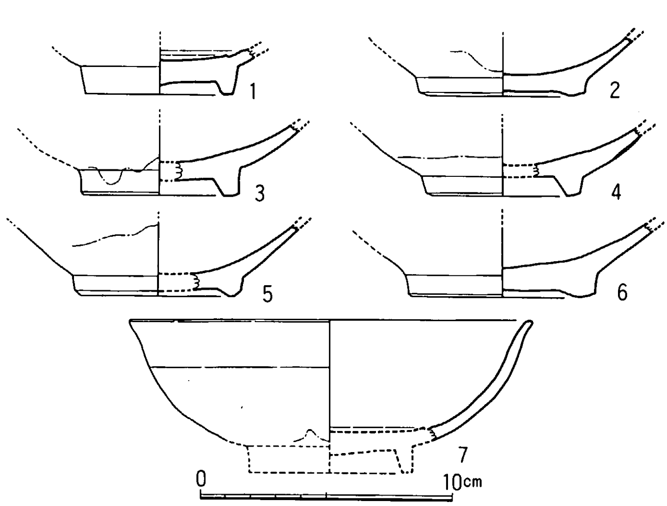


Fig.21 87SD033出土遺物実測図

87SD033 (Fig.21)

白磁

椀（1～7） 1は高台径5.8cm。高台を高く削りだし見込みに浅い段をもつ。釉は灰色味をおびた透明釉である。V類。2・5・6はそれぞれ高台径6.7・6.1・7.4cmを測る。高台を浅く削りだし、体部外面下位まで淡い空色をおびた透明釉が施される。IV類。3・4は高台の内側を斜めに削り、わずかに青味をおびた透明釉に細かい貫入がはいる。II類。7は口径16.0cmを測り、体部外面上位まで削って、口縁端部を外反させる。釉は淡い空色味をおびた透明釉が施される。V-2類。

87SD040 (Fig.18)

平瓦（20） 凸面に斜格子と三重の半円を合わせた叩き痕が残る。

その他の遺構出土遺物

87SX002 (Fig.22)

須恵器

鉢（1） 口径25cm前後を測る。胎土は灰色を呈し、細かい黒色の粒子を多く含んでいる。口縁は内側に折り曲げて玉縁になっている。篠窯系。

87SX008 (Fig.22)

越州窯系青磁

椀（2） 高台径7.4cm。高台は円盤状の底部の内側を浅く削り取る。釉は内面は剝落するが化粧土がかかっており、やや黄色味をおびた緑灰色を呈する。II-2a類。

白磁

椀（3） 口径15.0cmを測る。口縁部が緩く内湾し、灰白色の素地に、淡い青色を帯びた透明釉が施される。貫入あり。II-3×4類。

陶器

壺（4） 底部径7.6cm。素地は灰色で白色の砂粒を含む。高台形状と、胴部下位に目跡が残存することから四耳壺VI-2類と考えられる。また全面施釉されるが、釉はやや発色が悪く、くすんだ灰緑色を呈し、釉調からA′類に分類される。

金属製品

釘（5・6） 鉄製釘で、両先端とも欠損する。断面は四角形である。

87SX012 (Fig.22)

須恵器

鉢（8） 胎土は灰白色を呈する。瓦質である。口縁は玉縁をつくり、内側に浅い沈線が巡る。篠窯系。

越州窯系青磁

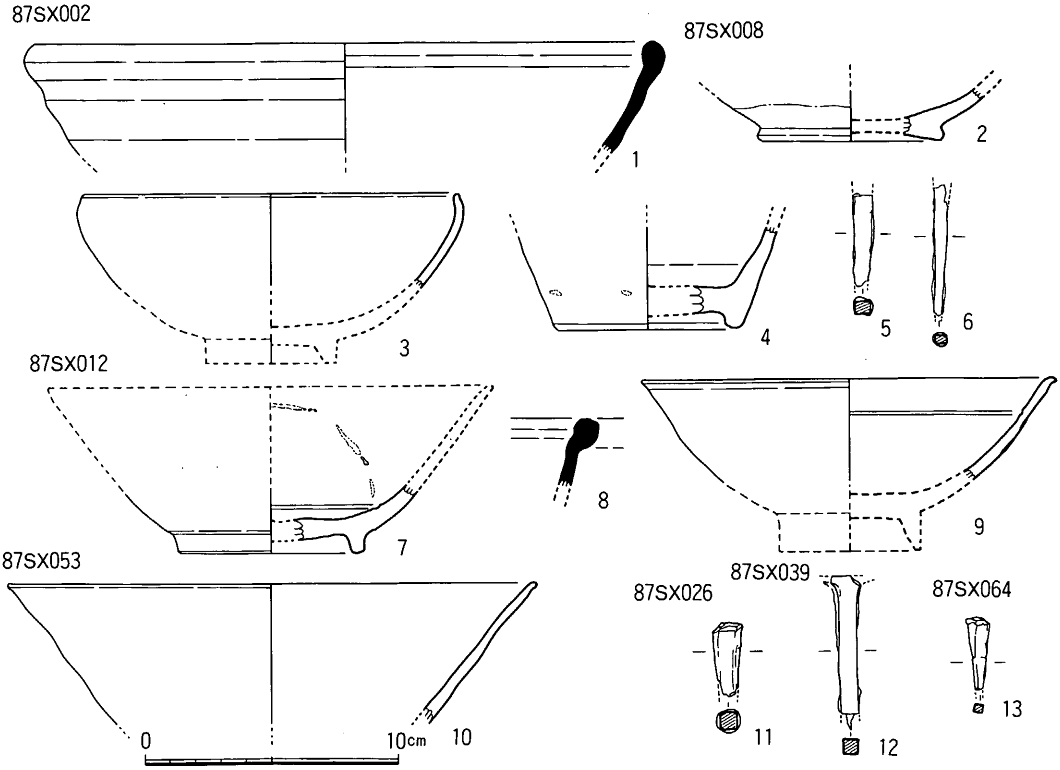


Fig.22　その他の遺構出土遺物実測図(1)

椀（7）　高台径7.3cm。素地は黄色味をおびた灰色を呈し精選されている。全面施釉後、高台畳付のみ釉をカキ取る。見込みと高台底部には目跡が残っている。Ⅰ-2a類。

白磁

椀（9）　口径16.4cmを測る。外面の上位まで粗く削り、青味をおびた半透明の釉が施されている。体部は外側へ喇叭状に開いて、口縁端部が外へ折れ曲がる。Ⅴ-4類。

87SX026（Fig.22）

金属製品

釘（11）　鉄製釘の頭部。残存長2.7cm。断面は四角形を呈す。

87SX039（Fig.22）

金属製品

釘（12）　鉄製釘。頭部の一部を欠損する。残存長6.2cm。

87SX053（Fig.22）

越州窯系青磁

椀（10）　口径21.0cmを測り、体部は直線的に外へ開く。素地は茶灰色を呈し精選され、淡黄茶色の釉が施されている。Ⅰ類。

87SX064（Fig.22）

金属製品

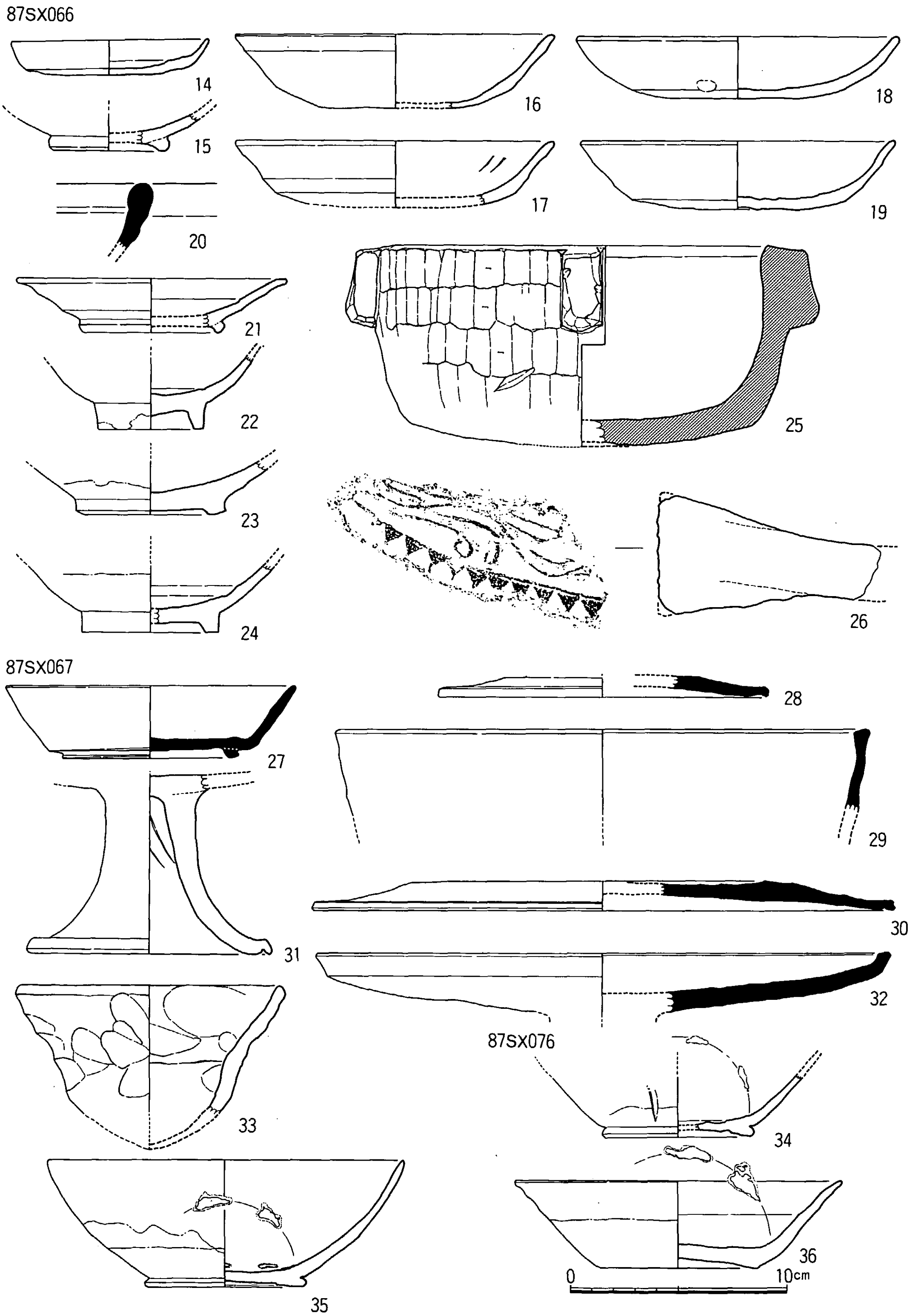


Fig.23　その他の遺構出土遺物実測図(2)

釘（13） 鉄製釘。先端部を欠損している。残存長2.7cm。

87SX066（Fig.23）

須恵器

鉢（20） 灰白色のキメの細かい胎土で、瓦質である。口縁を玉縁状につくる。篠窯系。

土師器

小皿a（14） 口径9.2cm、器高1.65cmを測る。底部はヘラ切り後ナデを行なう。

丸底坏a（16～19） 口径14.65～15.0cm、器高3.0～3.5cmを測る。19は磨耗して調整不明だが、他は内面にミガキbを行なっている。

椀c（15） 高台径5.6cmで、低い高台を貼り付けている。見込みは磨きを行なったと考えられる。

灰釉陶器

段皿（21） 口径は12.6cm前後を測る。素地は明灰色を呈し精選され、釉は確認できなかった。小さい高台を貼り付ける。

白磁

椀（22～24） 22は高台径4.9cm。見込みに段がつき、高台を高く削り出す。Ⅴ類。23は浅い削り出しの高台で、淡い空色の透明釉が外面の体部下位まで施される。Ⅳ類。24は見込みに浅い段がつく。釉調は淡い空色を呈し、半透明で光沢がある。Ⅱ類。

石製品

石鍋（25） 口径21cm、器高9.5cm前後を測る。４個の方形の耳を削り出し、外面は横方向に丁寧に削って成形されている。底部外面から体部上位まで黒い煤が付着する。滑石製石鍋A群。

瓦類

軒平瓦（26） 胎土は白色砂粒を多量に含む。焼成は良好。内区に左から右へ流れる偏行唐草文、外区に凸鋸歯文とわずかに珠文が残っている。

87SX067（Fig.23）

須恵器

蓋３（28） 口径15.2cmを測る。天井部はヘラ切り後ナデ調整される。外面は口縁部が暗灰色に変色し、重ね焼きしたと考えられる。

大蓋３（30） 口径は29.0cmを測り、天井部はヘラ削りされる。口縁部内面に鋭い沈線が巡る。

坏c（27） 口径13.5cm、器高3.4cm。底部から体部へ鋭く屈曲し、外方へ大きく開く体部形態を有している。

鉢b（29） 口径24.7cmを測り、内面は灰色、外面は暗灰色を呈す。口縁端部は平坦におさめる。

高坏（32） 坏部のみ残存、わずかに脚部の接合痕が残っている。口径26.6cm。底部は口縁部近くまで粗くヘラ削りされる。

土師器

高坏b（31） 脚部径11.4cmを測る。脚は下位で外側に開き、先端で下方に屈曲する。内側に粘土がねじれた痕が残る。焼成はやや不良。

焼塩壺（33） 胎土は明黄白色で、口縁の一部は黒変している。円錐状を呈し、内面はヘラ状の工具でなでたと考えられる。外面には指頭圧痕が残る。II-b類。

87SX076（Fig.23）

越州窯系青磁

椀（34・35） 34は高台径7.0cm。見込みには段がつき、高台は円盤状の底部の内側を丸く削ってつくっている。体部外面にヘラで縦沈線をいれ、黄灰色の釉を施す。II-1a類。35は口径16.6cm、器高5.9cmで、蛇の目高台。素地に黒い細粒を少量含む。釉は明るい黄茶色に発色する。II-1類。いずれも化粧掛けされている。

坏（36） 口径15.1cm、器高4.1cmを測る。底部は糸切り。素地は灰色を呈し黒色の細粒を含む。釉は明黄茶色で、口縁部の一部は褐彩である。見込みに黄白色の目土が残る。青磁褐彩。

87SX082（Fig.24）

土師器

坏a（37） 口径11.1cm、器高2.5cmを測る。明茶灰色を呈し、底部はヘラ切りされる。

椀c2（38） 口径12.2cm、器高5.1cm、高台径7.0cmを測る。体部は丸味をもち、口縁は直線的に伸びる。内面はミガキbの痕跡が残っている。

87SX084（Fig.24）

越州窯系青磁

椀（39・40） 39は高台径7.1cmで、円盤状高台をもつ。釉は明るい黄灰色で光沢がある。II-2類。40は平底の椀で底部と体部の境を面取りしている。灰色味を帯びた黄緑色の釉が施され、見込みに白色の目土、面取りされた部分に目跡が残る。II-3類。

87SX086（Fig.24）

土師器

坏a（41） 口径11.4cm、器高3.2cm。体部は横ナデ調整で、底部はヘラ切りされる。

椀c1（42） 口径12.8cm、器高4.7cm、高台径9.0cmを測る。体部は直線的に開き、高台は底部の一番外側に貼付される。

焼塩壺（46） 橙色味をおびた茶灰色を呈し、内面に目の粗い布目痕、外面に多数の指頭圧痕が残る。筒状の焼塩壺の破片。I類。

越州窯系青磁

椀（43・44） 43は高台径6.8cm。素地は茶灰色を呈し精選され、明るい緑灰色の釉を全面に施した後、高台畳付のみカキ取っている。体部外面にヘラで縦沈線をいれる。I-2b類。44は高台径9.4cm。全面施釉後高台畳付の釉をカキ取る。釉の発色が悪くほとんど白濁して黄白

色を呈す。Ｉ－２類。

皿（45） 高台径5.2cm。濁った灰緑色の釉を全面に施して、高台畳付の釉をカキ取る。高台畳付に目跡が残る。Ｉ－２類。

87SX103（Fig.24）

須恵器

鉢（47） 胎土は灰色を呈し精選されている。口縁は玉縁状につくり、焼成・還元ともに良好。篠窯系。

87SX104（Fig.24）

須恵器

鉢（48） 暗灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。口縁は折り曲げて玉縁をつくった跡が観察できる。篠窯系。

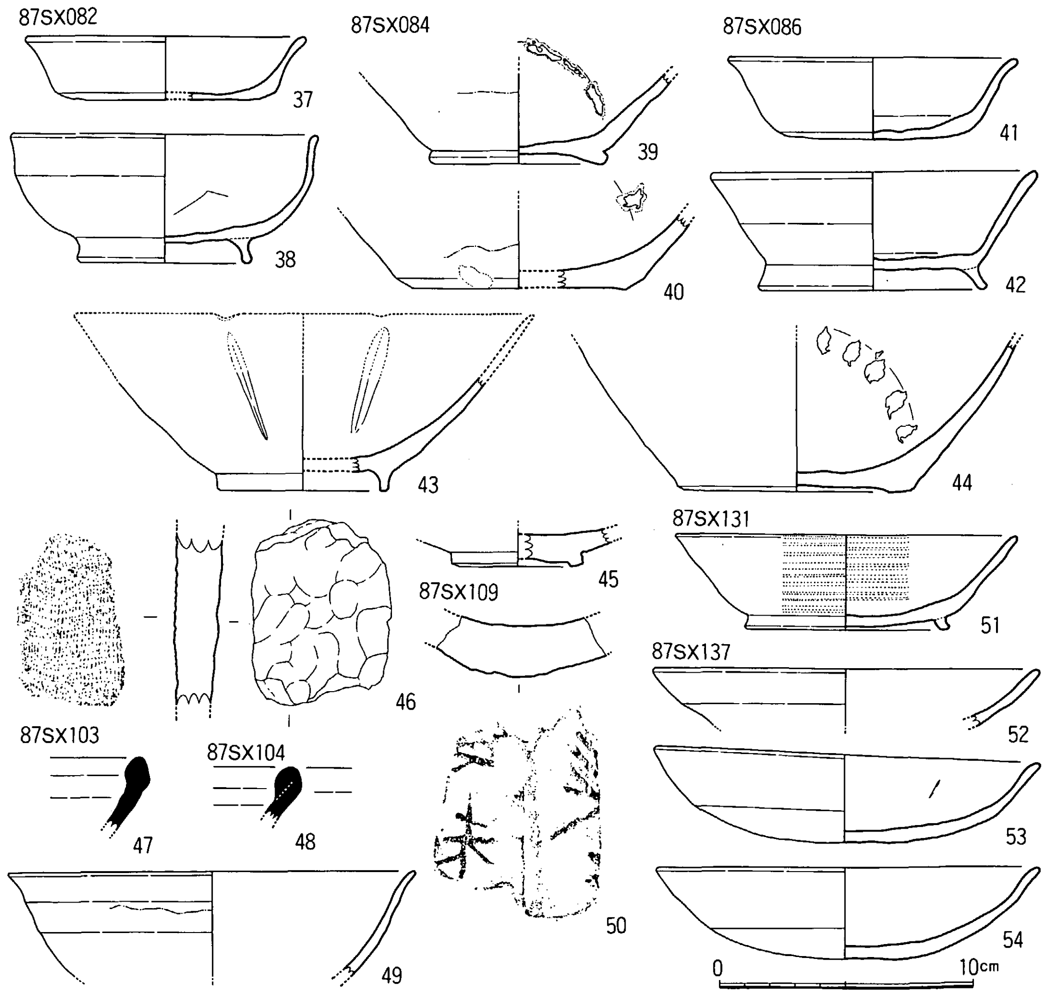


Fig.24 その他の遺構出土遺物実測図（３）

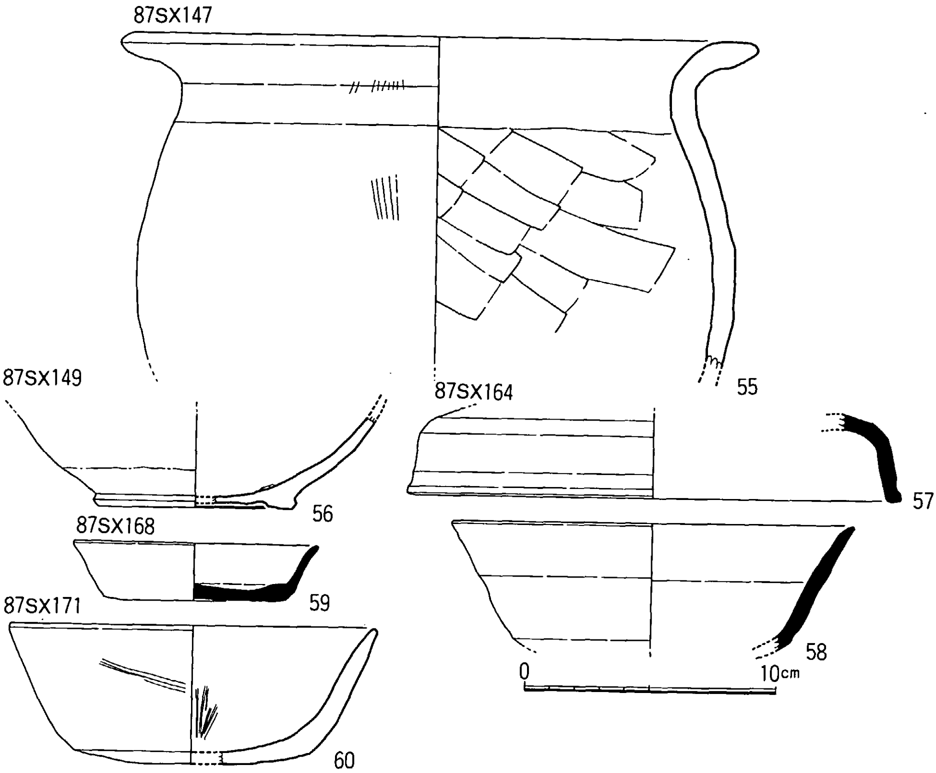


Fig.25　その他の遺構出土遺物実測図(4)

灰釉陶器

椀（49）　口径は16cm前後に復原される。素地は明灰色を呈しキメがやや粗い。灰色味をおびた淡緑色の釉が外面体部上位まで施される。

87SX109（Fig.24）

瓦類

平瓦（50）　凹面は布目圧痕、凸面は平行叩きで「未」の左字が記される。焼成はやや不良。XIV類。

87SX131（Fig.24）

土師器

坏c（51）　口径13.5cm、器高3.8cm、高台径8.1cmを測る。橙色味の強い茶灰色を呈し、内外面ともミガキaを施す。底部はヘラ削りされる。

87SX137（Fig.24）

土師器

丸底坏a（52～54）　口径は15.1～15.2cm。53は内面にミガキｂを行なう。

87SX147（Fig.25）

土師器

甕a（55）　口径25.2cm前後に復原される。胎土は橙茶灰色を呈し砂粒を多く含んで粗い。

胴部外面はハケ調整、内面は手持ちのヘラ削りを行なう。

87SX149 (Fig.25)

越州窯系青磁

椀 (56) 高台径8.0cm。円盤状の底部の内側を削り高台をつくる。釉は黄色味をおびた緑灰色を呈し体部外面下位まで施される。II-2a類。

87SX164 (Fig.25)

須恵器

坏 (58) 口径16.0cmを測る。明灰色を呈し内外面とも横ナデ調整される。

壺蓋 (57) 口径19.0cm前後を測る。天井部はヘラ削りされる。

87SX168 (Fig.25)

須恵器

小坏a (59) 口径9.6cm、器高2.3cmを測る。暗灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。底部外面に渦状痕が残り、粘土紐の痕跡と考えられる。

87SX171 (Fig.25)

土師器

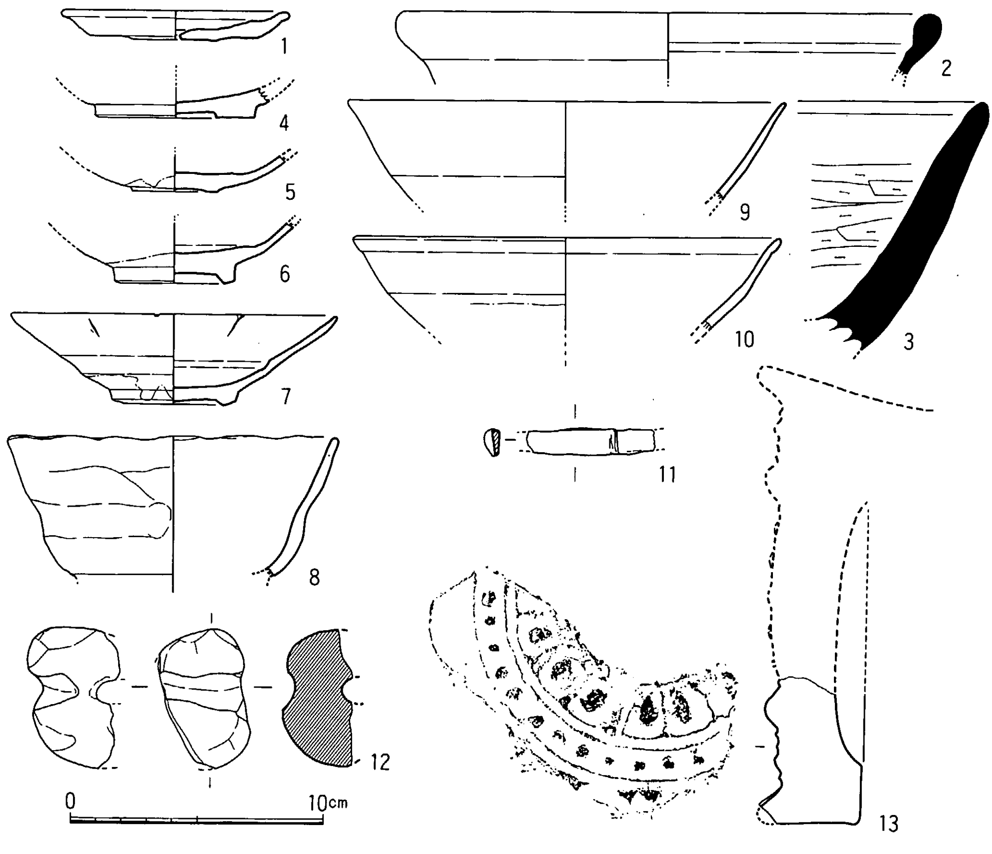


Fig.26 茶褐色土出土遺物実測図

椀a（60）　口径14.6cm、器高5.5cm。器肉が厚めで外面は手持ちのヘラ削りを行ない、内面は縦方向、外面は横方向にミガキcを施す。内外面に煤が付着する。

茶褐色土出土遺物（Fig.26）

須恵器

鉢（2・3）　2は口径21.6cm前後を測り、口縁部を内側に折り曲げ玉縁をつくる。口縁部外面は黒灰色を呈し、焼成は瓦質である。篠窯系。3は明灰色のキメの粗い胎土で、体部内面は手持ちヘラ削りを行なう。焼成は良好。

土師器

小皿a（1）　口径9.0cm、器高1.2cm。底部はヘラ切り。底部中央に外側から径0.6cmの孔を穿つ。

椀（8）　口径は13.0cm前後を測る。手捏ね土器で粘土紐の跡が残る。胎土は茶灰色を呈し、内外面に明赤褐色の顔料が塗布されている。

越州窯系青磁

椀（9・10）　9は口径17.4cm。素地は灰色を呈し、精選されている。明緑灰色の半透明釉が施される。I類。10は口径17.0cmを測り、口縁部が玉縁状になっている。素地は暗灰色で黒い細粒を含み、化粧掛けの上から灰緑色の釉が施される。II-f類。

白磁

椀（4）　高台径6.4cm。乳白色のよく精選された素地にわずかに黄白色をおびた透明釉が施される。高台は蛇の目高台。I類。

皿（5～7）　5は底径3.4cm。素地は灰白色を呈し、見込みに浅い段をもつ。II系。6は高台径4.9cmを測る。素地は灰白色を呈し、淡い空色をおびた透明釉が体部外面下位まで施される。底部外面にハマの痕跡が残る。II-1a類。7は口径12.9cmを測り、灰白色の精選された素地をもつ。口縁部外面に細くヘラで縦沈線をいれ、端部に刻みをいれて輪花とする。XI類。

石製品

器種不明（12）　側面は凹み削り、中央部は穿孔したと考えられる。完全な形状は不明。軽石製。浮子の可能性がある。

金属製品

刀子（11）　残存長5.1cm。刃の幅1cm程を測る小形の鉄製刀子。

瓦類

軒丸瓦（13）　複弁で外区内縁に珠文、外縁に凸鋸歯文を配する。焼成良好。

整地層出土遺物（Fig.27）

須恵器

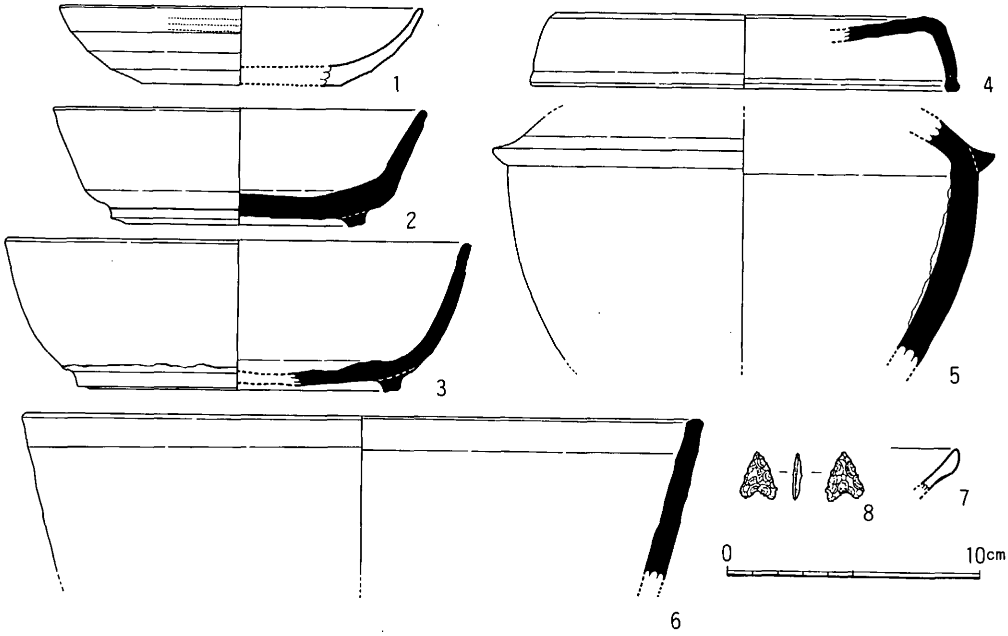


Fig.27　整地層出土遺物実測図

坏c（2）　口径14.8cm、器高4.6cm、高台径10.0cmを測る。底部はヘラ切り後、粗くナデを行なう。茶灰色を呈し還元不良。

大坏c（3）　口径18.4cm、器高6.0cm、高台径12.8cmを測る。暗青灰色を呈し焼成・還元ともに良好。底部はヘラ削りされる。

壺蓋（4）　口径17.0cm。天井部はヘラ削りされる。

鉢b（6）　口径27.0cm前後に復原される。体部は横ナデ調整され、焼成良好。

壺e（5）　最大径20cm前後を測る。肩部に断面三角形の凸帯を貼り付け、胴部外面はヘラ削りを行なう。内面に石灰質の物質が付着している。

黒色土器

坏（1）　口径は14.0cm前後を測る。外面は底部から体部へ丁寧にヘラ削りし、内外面にミガキaを施す。A類。

白磁

椀（7）　椀Ⅳ類の玉縁口縁の一部。淡い青色の釉が厚めに施される。混入品と考えられる。

石製品

石鏃（8）　長さ2.0cm、幅1.5cmを測る。黒曜石製の剝片鏃。混入品と考えられる。

表土出土遺物（Fig.28）

須恵器

鉢（9・10）　9の口径は21.0cm前後を測る。いずれも胎土は灰白色を呈し、口縁部外面が

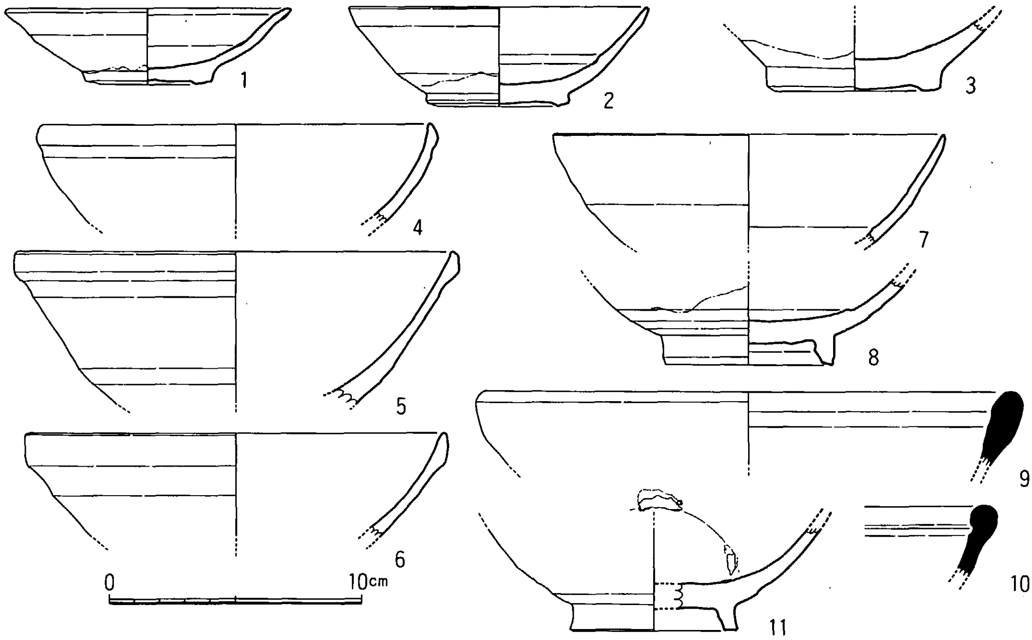


Fig.28　表土出土遺物実測図

黒灰色になっている。瓦質である。篠窯系。

高麗青磁

椀（11）　高台径6.6cm。素地は灰色から茶灰色を呈しやや粗い。明緑黄色の光沢のある釉が施され、全面に施釉した後、高台畳付はカキ取る。見込みに白色の目土、高台畳付に目跡が残る。III類。

白磁

椀（3～8）　3は高台径6.9cm。高台の削り出しは粗く浅い。IV-1類。4は口径15.8cm。釉は淡い空色をおびた透明釉で、光沢があり貫入が入る。II-1類。5・6は口径17.6・16.8cmを測る。いずれも外面の体部上位まで削る。IV類。7は口径15.6cm。体部外面中位まで粗く削る。やや青味をおびた透明釉が施されている。V-1類。8は高台を高めに削り淡い空色がかった透明な釉が体部下位まで施される。V類。

皿（1・2）　口径11.4・11.9cmを測り、いずれも見込みに段がついて高台は浅く削り出す。釉はやや青味をおびた透明釉で光沢がある。1は口縁端部がわずかに外反する。1・2ともII-1a類。　　　　（森田レイ子）

5）小結

今次調査の成果についてまとめると以下のようになる。

・奈良時代の掘立柱建物が検出できたが、調査区南東部へ展開していることから、今次調査

区のみで、奈良期の土地利用状況に関しての具体化へはいたらなかった。

・大宰府X期を下限とする井戸87SE015および87SE112をはじめとして、居住空間としての土地利用をうかがわせる遺構が調査区全体に検出できた。

・平安時代後期、大宰府XII期に埋没したと考えられる溝2条を平行して検出し、西側の溝は調査区北部において西へ直角に曲折している。溝にはさまれた空間には、同時期の遺構は存在せず、道路として機能していたものと考えられる。

・道路側溝の施工時期は、前後関係にある井戸87SE015および井戸87SE112が大宰府X期を下限とする時期の遺物を出土したことから、その時期以降に求めることができる。

・井戸87SE015より出土した一括廃棄資料中に、平安京より持ち込まれたと考えられる遺物が混入していたことから、考古遺物の平安京と大宰府における相対時期検討資料を提供した。

・調査区北東部分は、御笠川の氾濫によって大半を欠失していた。

当該調査区からは、主として大宰府における古代の街区割りにあたる道路痕跡が検出できたことが特筆できる。この調査によって、大宰府条坊論が再燃し金田（1989）、狭川（1990）、倉住（1990）の各氏等によって討議がなされ、大宰府条坊の有無に関しての議論に終止符を打つことができた。現在の状況として、条坊の施工時期および規模に関しての検討が必要となりつつあり、その後の発掘調査の進展によって様々な資料が蓄積され、特に大宰府条坊跡第168次調査による左郭1坊～3坊の連続調査を行なった結果、数時期にわたる条坊施工状況が判明しつつある。

（中島恒次郎）

2．第98次調査

1）調査に至る経過

調査地は、太宰府市通古賀4丁目530（旧地名：大字通古賀字西ノ後）で、共同住宅建設に先立つ事前の発掘調査である。周辺は昭和54年度に区画整理が実施されており、近辺の道路部分については調査を行っている箇所がある。その折りの所見では西側にある鷺田川が氾濫している箇所が大きく入り込んでおり、また遺構面も大きく削平されている部分があることが判明しており、当該範囲を調査前に予備調査することとなった。その結果、深い遺構が当該敷地の東側約半分強に認められ、西側は鷺田川の氾濫が入り込んでいることがわかった。この所見を受けて関係者間で協議を行ない、平成2年7月6日から同月23日にかけて発掘調査を実施することとなった。現地での調査に関わる費用のすべては、ナガタ建設株式会社が負担した。

なお、調査対象面積は1,461㎡、調査面積は800㎡、試掘調査は山本信夫が担当し、発掘調査は狭川真一が担当した。

2）層位

現在の水田の表土を除去した段階で黄色粘土の地山から直接切り込むかたちで確認され、遺構面の上には明確な包含層が確認されなかった。

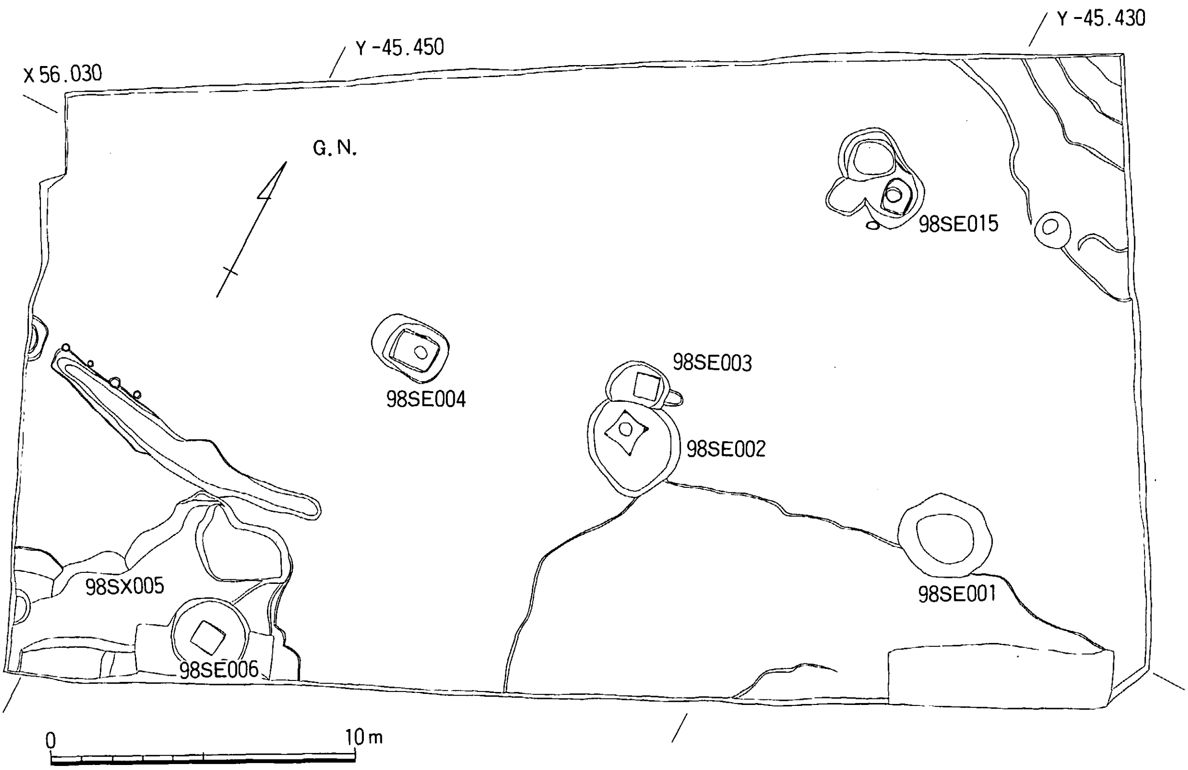


Fig.29　条坊跡　第98次調査遺構実測図（1/250）

3）遺構

検出された遺構は、ほとんどが井戸等の深いものばかりであり、ピットなどの浅い遺構は皆無に等しかった。したがってこの付近一帯の遺構面は、大きく削平されているものと判断されたが、それでも奈良時代から平安時代の井戸6基、土壙3基、溝1基、7世紀後半の大きな溜まり状遺構などを検出することができた。以下、個別にその概要を記載する。

井戸

98SE001　東西3.1m、南北2.7mで略円形のプランを呈し、深さは1.0mを測る。枠の痕跡を確認できなかったが、他の遺構の底部の標高と比較して井戸であったものと考えられる。埋土は上から黄茶色土、黒灰色土、暗灰色土の順で盆状に堆積し、最下層には薄く灰色粘土が溜まっていた。

98SE002　東西3.3m、南北2.9mで略円形のプランを呈し、深さ1.5mを測る掘り方を有する井戸である。遺構面から若干掘り下げた段階で方形の枠の痕跡が検出された。枠は四隅に直径10cm程度の丸木材を立て（底部の当たる地面をわずかに窪ませる）、その側面に横桟を通して背後の板を固定するものである。板材は幅30cm程度のものを4枚程度並べて一辺を構成している。枠の底部中央には径0.4～0.45mで深さが0.15mの曲物を据えた跡が確認された。板材の底部付近で地山の質が変化し、以下は灰色砂層となる。当時の湧水層が窺える。埋土は枠内の上から淡茶色土、炭層（薄い）、黒色土、黒灰色粘土（粘土化した炭層とみられる）で底に灰色砂層が若干確認され

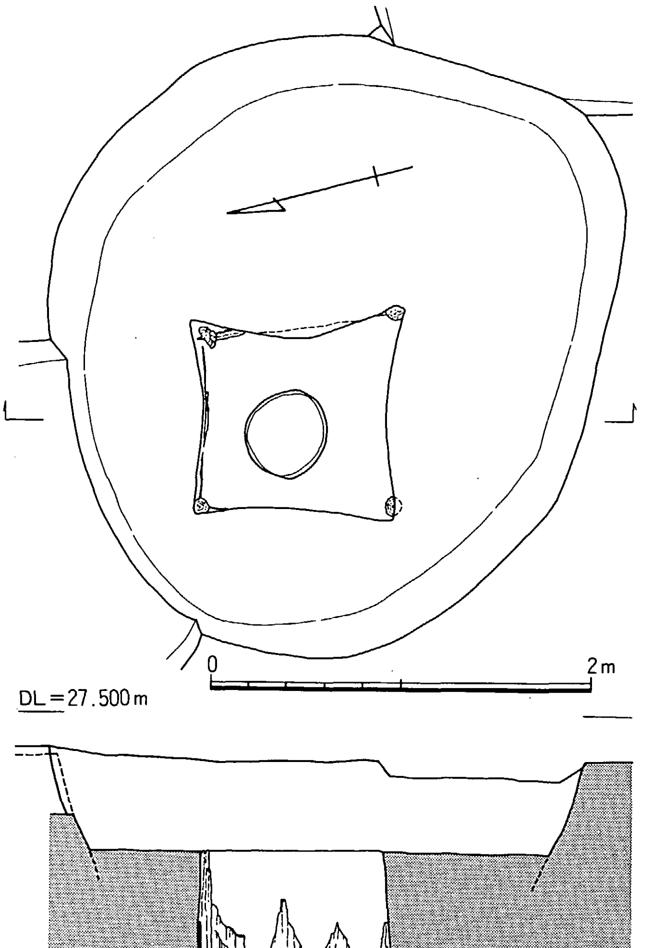


Fig.30　98SE002遺構実測図（1/40）

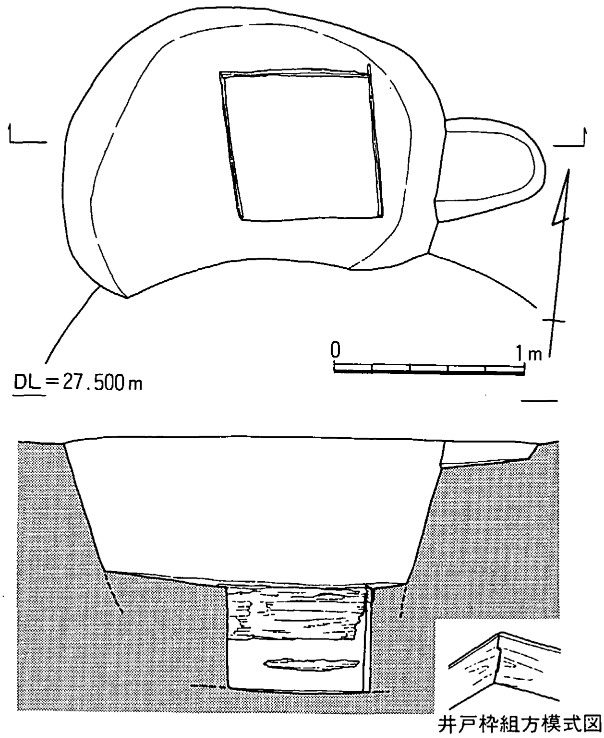


Fig.31　98SE003遺構実測図（1/40）

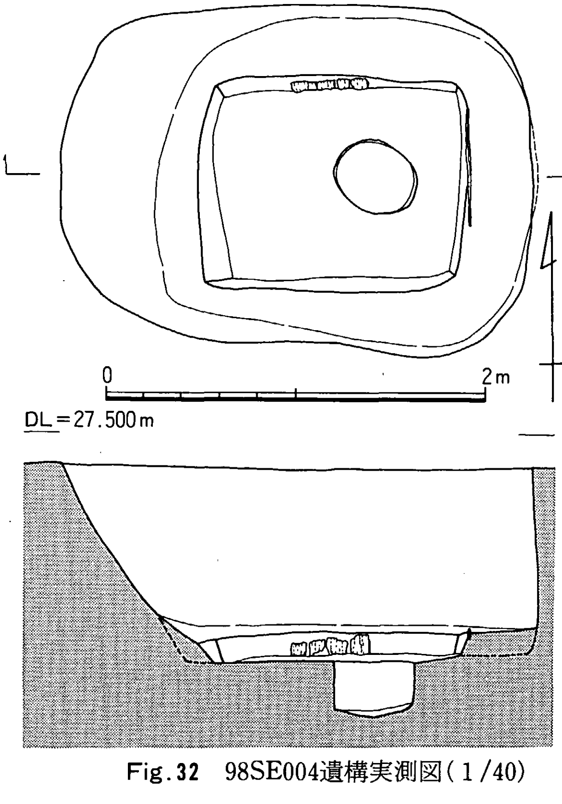


Fig.32　98SE004遺構実測図（1/40）

た。遺物は黒色土からまとまって出土したが、直上の炭層との境目に特に集中していた。「乾元大宝」もこの位置から出土した。なお裏込めの土は茶色砂質土である。

98SE003　98SE002に掘り方の一部を切られている。東西2.0m、南北は1.6m以上で楕円形プランを呈し、深さ1.35mの掘り方を有する井戸である。遺構面から約0.75mの深さで方形の枠の痕跡を確認した。枠は掘り方内の東に偏って検出された。一辺0.75m前後で、幅30cm弱、厚さ3cm程度の板材を井桁に組んでいたものと考えられる。埋土は地山が埋め戻されたような状況で、黄色粘土のブロック化したものが主体をしめる。

98SE004　東西2.5m、南北1.75mで隅丸方形のプランを呈し、深さ1.3mの掘り方を有する井戸である。底部近くに至って東西1.45m、南北1.15mの枠の痕跡を確認した。枠は北側と東側にごく一部が残存していた程度であり、当初の構造は明らかにはできなかったが、板材の幅が10cm程度と小さいものであること、縦方向に使用したものであることは判明している。この長方形枠の東に偏ったところに径0.37～0.44m、深さ0.25mの曲物を据えた痕跡を確認した。埋土は上から茶色粘質土、灰色粘土で、単純な略水平堆積であった。なお灰色粘土中から石帯（巡方）が出土した。

98SE006　98SX005を切っている。

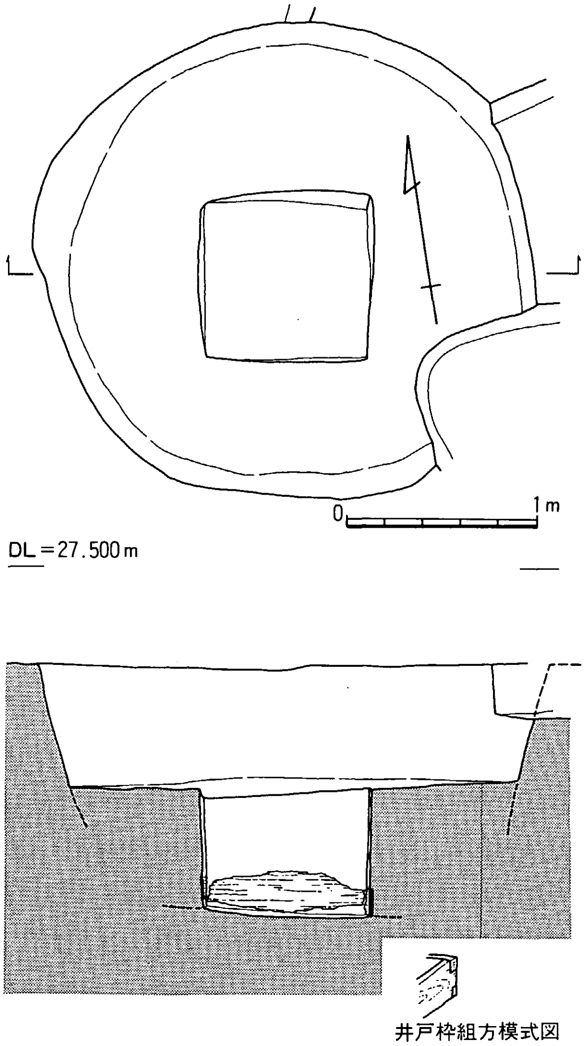


Fig.33　98SE006遺構実測図（1/40）

東西2.62m、南北2.50mで楕円形プランを呈し、深さ1.35mの掘り方を有する井戸である。遺構面から約0.65mの深さで方形の枠の痕跡を確認した。枠は一辺0.82〜0.87mで、幅20cm強の板材を井桁に組んでいたものと考えられる。枠は掘り方内のほぼ中央に位置している。

98SE015　遺構面で検出した際のプランは3.45×1.95mの楕円形を呈していたが、底部近くまで掘り下げた段階で不整形のふたつのプランが確認された。不整形プラン確認以前の埋土は上から黄白色粘土（黄色粘土ブロックで構成される）、暗灰色粘土（黄色粘土ブロックが若干混在する）の単純な堆積であった。東側のプラン内には径0.47〜0.53m、深さ0.2mの曲物が据えられており、井戸と確認された。西側のものは1.52×1.30m、深さ0.25mを測るもので井戸の可能性が考えられる。両者の関係は明確ではなく、出土遺物の傾向、各埋没土の質（暗青灰色粘土）も変わらないことから、2基併存していたものか、廃棄後に崩落したものかは明らかにできなかった。

土壙

98SK010　南北0.6m、東西0.25m以上、深さ0.2m以上を測る土壙である。98SX005を切っている。

98SK013　南北0.7m程度、東西0.6m、深さ0.85mを測る。98SE015を切っている。

98SK014　径0.6m、深さ0.75mで略円形を呈する。

溝

98SD008　長さ5.1m、幅0.35〜0.75m、深さ0.11mを測る。98SX005に接しているが前後関係は明らかではない。

溜まり状遺構

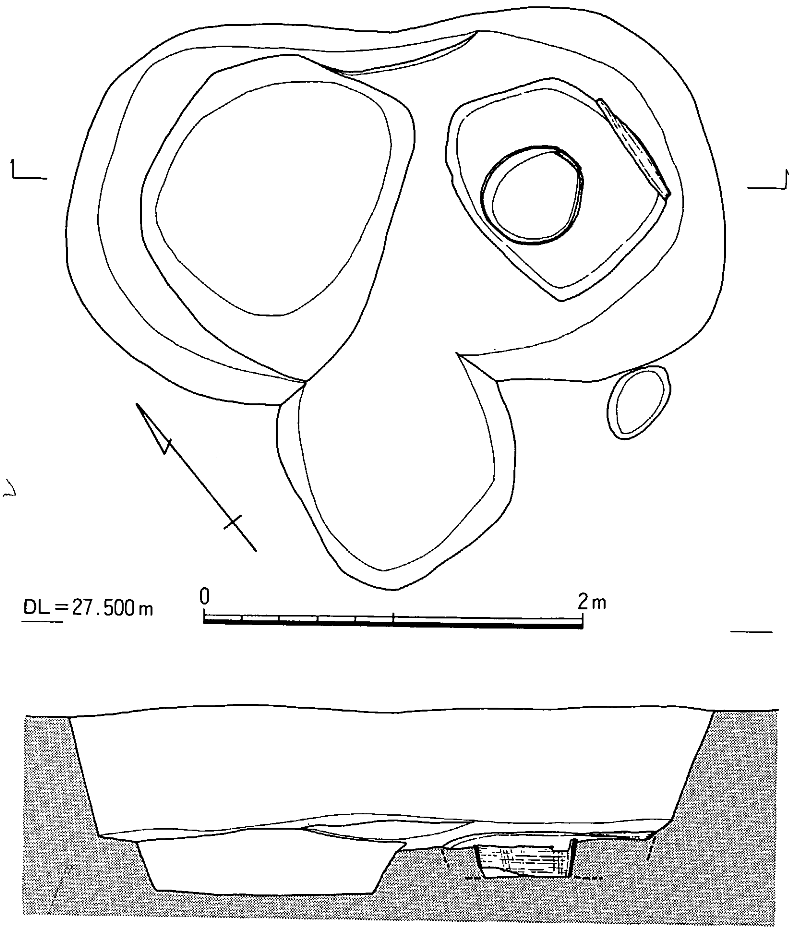


Fig.34　98SE015遺構実測図(1/40)

98SX005　不定形な窪み状遺構で、東西約4.5m、南北約3.1m分を検出したが、南及び西にさらに広がっている。深さは0.3mを最深とする。埋土は上から淡茶色土、黒褐色土、茶褐色土の順に堆積するが、黒褐色土中には多量の遺物が含まれていた。出土状態は埋土中に破片となった資料が混在する状況であったが、出土位置と堆積状況を考慮すると北側から投棄されたものと考えられる。

98SX020　不定形な窪み状遺構で、東西約9.9m、南北約3.5m分を検出したが、さらに南へ広がっている。深さは0.3mを最深とする。埋土は茶褐色土が主体である。98SX005と調査区外でつながっているものと考えられる。

その他の遺構

98SX007　98SE006を切る遺構である。土壙ないしは井戸の可能性があるが調査区外に延びており、今回は性格を特定できなかった。

98SX017　調査区隅で検出した段落ち遺構である。周辺の水田普請の際に造成されたものとみられ、年代的にはきわめて新しいものである。

4）遺物

井戸出土遺物

98SE001黄茶色土層（Fig.35）

高麗青磁

椀（1）　口径15.1cmを測る。内外面ともに施釉され、釉は灰黄色に発色する。胎土は精良

で淡灰色を呈する。初期高麗青磁Ⅰ類。

白磁

椀（2） 口径16.5cm、器高6.1cm、高台径6.9cmを測る。高台付近を除いて全面に施釉される。釉は灰白色に発色する。内面見込みに大きな段を持つ。Ⅳ-1b類。

陶器

壺（3） 底径12.1cm。硬質に焼成され、暗青灰色を呈する。底部は未調整である。朝鮮系の無釉陶器とみられる。

98SE001黒灰色土層（Fig.35）

土師器

小皿a（4） 底部はヘラ切りで、板状圧痕が残る。

丸底坏a（5・6） 内面はミガキb。6の底部に穿孔がある。

丸底坏c（7） 内面はミガキb。外面に指圧痕が残る。

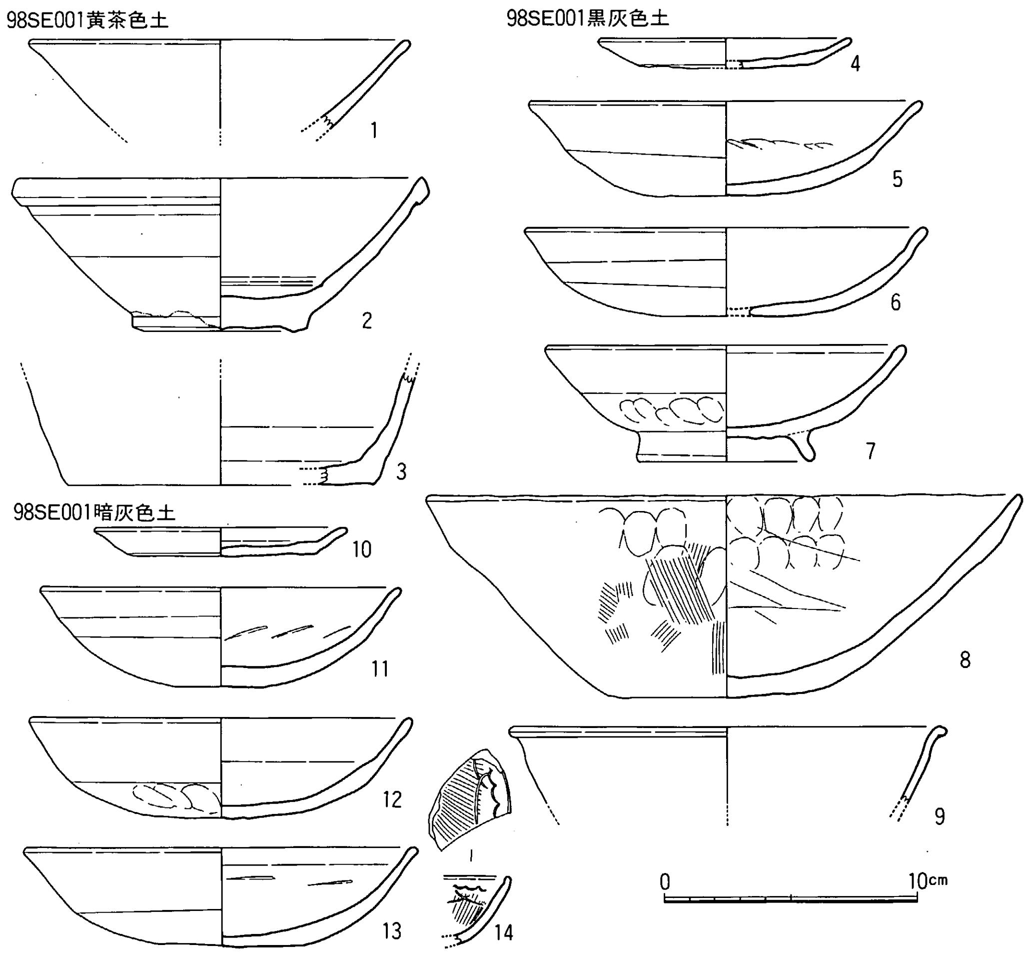


Fig.35 98SE001出土遺物実測図

鉢（8） 口径23.6cm、器高8.0cm、底径8.5cmを測る。内外面ともに指圧によって成形され、のち内面は粗いナデ、外面は粗いハケで調整される。焼成はややあまく、胎土は砂粒を多く含む粗いものである。

高麗青磁

椀（9） 口径17.4cm程度に復原される。内外面ともに施釉され、淡緑色に発色する。全体に貫入が認められる。初期高麗青磁III－2a類。

98SE001暗灰色土層（Fig.35）

土師器

小皿a（10） 底部はヘラ切りである。

丸底坏a（11～13） 口径14.3～15.7cm、器高3.9～4.0cmを測る。内面はミガキb、外面はヘラ切りのままで板状圧痕が残る。

坏（14） 都城系の杯片である。外面は横方向の手持ちヘラ磨き、内面は右斜め上がりの縦方向の磨きを施す。口縁内面に一条の沈線があり、その下に細かな波状（螺旋？）の暗文、その下に磨きを重複して大きな螺旋の暗文がみられる。古い資料の混入品であるが、類例が少ないので紹介した。

98SE002黒色土層（Fig.36・37）

土師器

坏a（1～38） 口径10.1～11.6cm、器高1.0～1.9cmを測る。底部はヘラ切りされ、板状圧痕の残るものも多い。

椀a（39～50） 口径12.4～14.4cm、器高3.2～4.3cmを測る。底部はヘラ切りされ、板状圧痕の残るものもある。

椀c（51～55） 口径14.6～15.0cm、器高5.4～6.2cm、高台径7.0～8.0cmを測る。いずれも高めの高台を有している。内面の調整にミガキbの見られるもの（53・55）がある。

把手（56） 長さ13cm程度の把手である。ナデにより調整される。

黒色土器

小皿a（57・58） いずれもB類で、口径11.4～11.5cm、器高1.8～2.0cmを測る。内外面ともにミガキcが顕著である。

金属製品

銅銭（a） 皇朝十二銭の最後に鋳造された「乾元大寳」である。全部で17枚出土したが、ほとんどが癒着し、単体に離すことができたのは数枚である。表面は著しく腐食し、銹で覆われているが直径1.9～2.0cm、穿孔部の一辺は5mm前後、厚さ1mm内外である。

98SE002黒灰色粘土層（Fig.38）

土師器

小皿a（1～4） 口径10.0～11.0cm、器高1.5～1.9cmを測る。底部はヘラ切りされる。

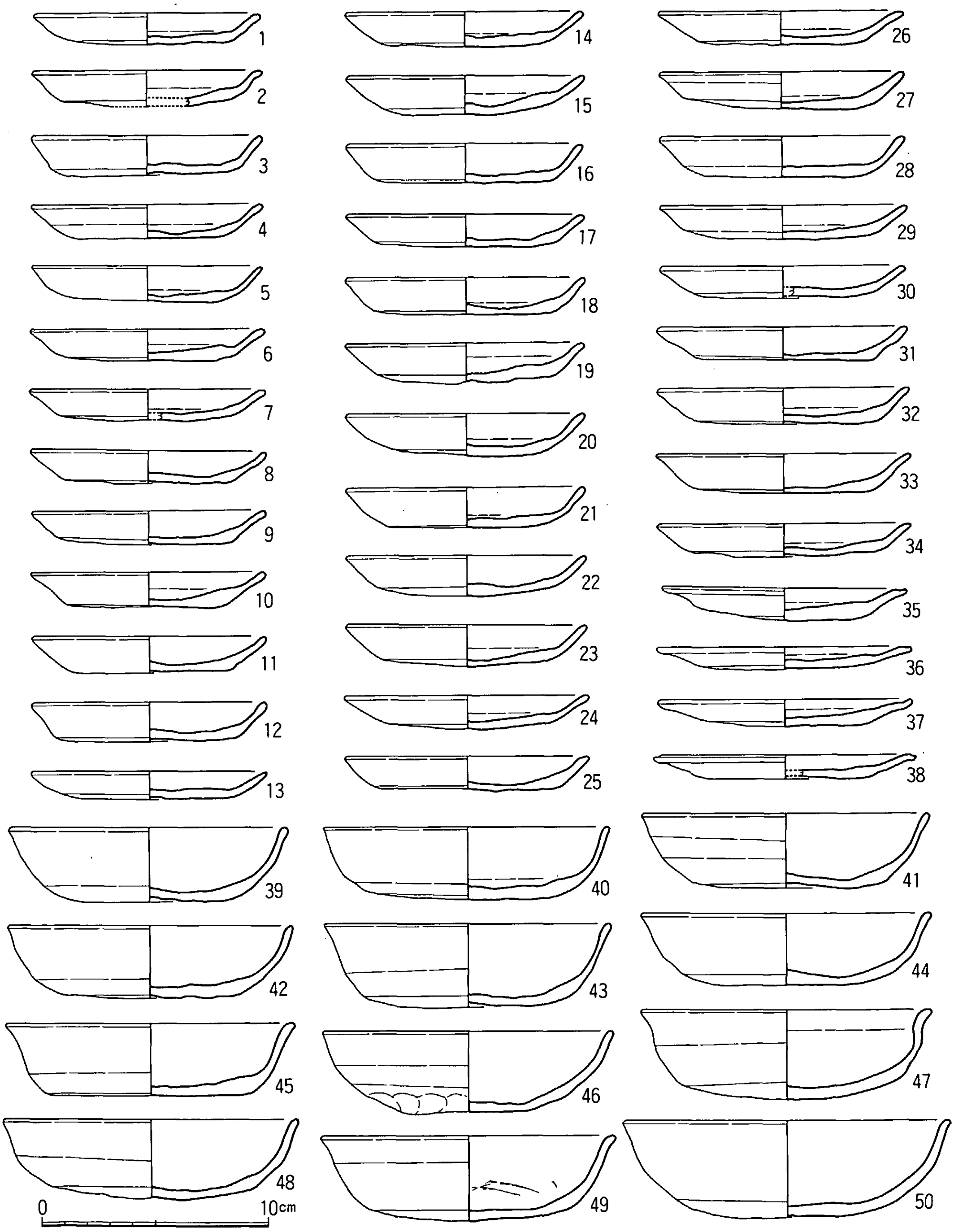


Fig.36　98SE002出土遺物実測図（1）

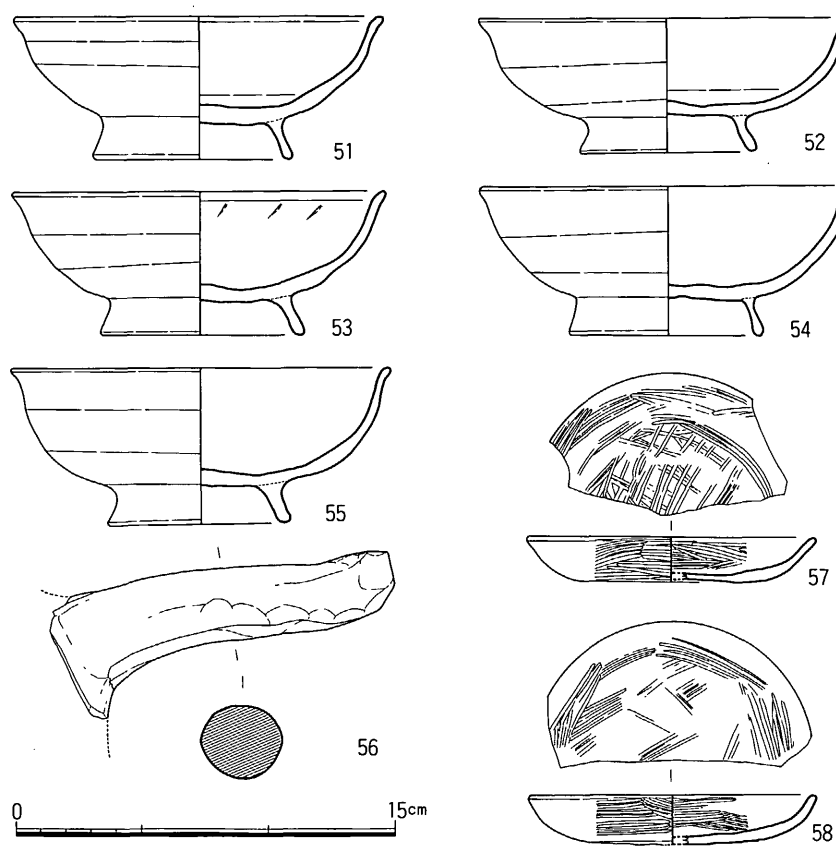


Fig.37　98SE002出土遺物実測図(2)

椀c（5・6）　口径14.6・15.1cmを測る。

98SE003（Fig.39・40）

須恵器

蓋c3（1〜6）　端部の形状が明瞭な三角形を呈するもの（4・6）とそうでないものとがある。天井部の調整はヘラ切りのままで摘み貼付時に生じる横ナデがみられる程度である。なお6の天井部には「卅」の墨書があるが、摘みが剥離してから記されている。

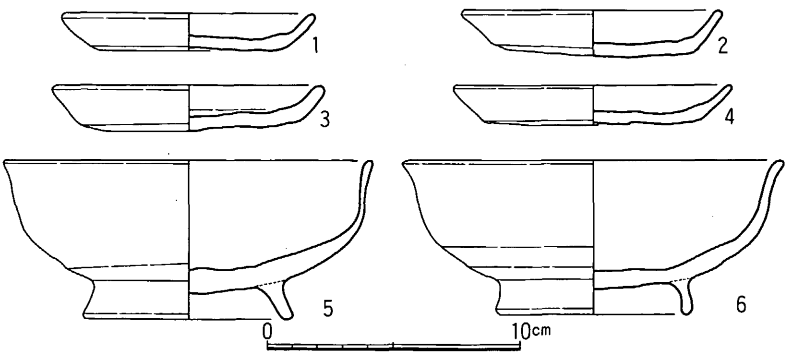


Fig.38　98SE002出土遺物実測図(3)

坏a（7）　磨滅が進行し調整は判断しにくいが底部はヘラ切りのままである。

坏c（8）　口径12.8cmを測る。底部はヘラ切りのままである。

椀c（9）　底径

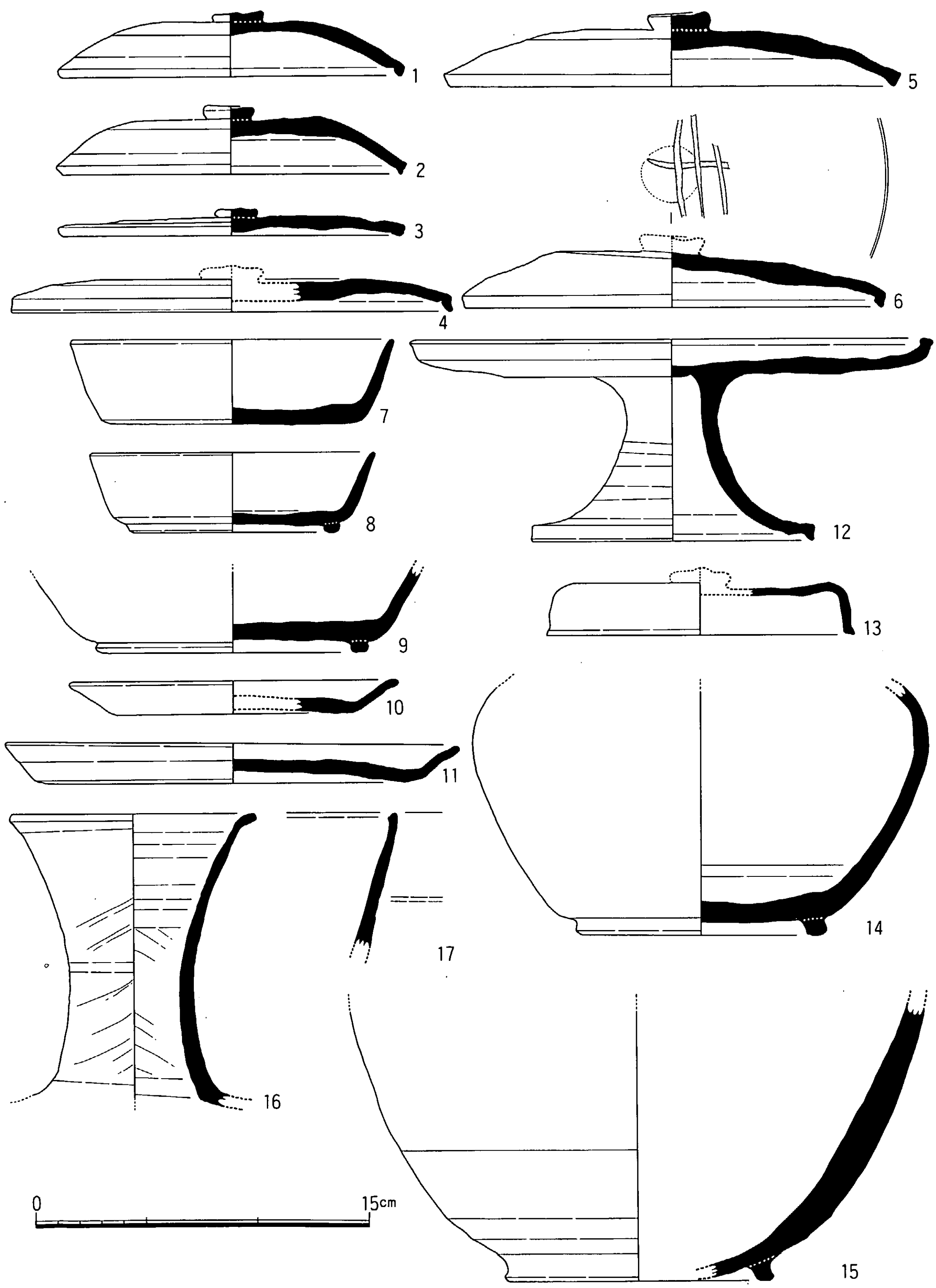


Fig.39　98SE003出土遺物実測図（1）

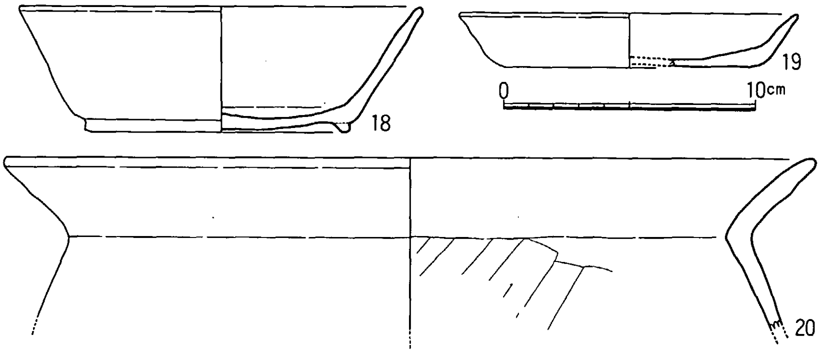


Fig.40　98SE003出土遺物実測図（2）

12.2cmと大きめである。

皿a（10・11）　外方へ開き気味の体部で、底部はヘラ切りのままである。

高坏（12）　口径23.5cm、器高9.1cm（うち坏部高1.6cm）、脚端部径12.7cmを測る。坏部底部はヘラ切りのままでそこに脚部を貼り付けている。口縁部の折り返しは小さく、端部は平坦気味につくる。

壺蓋（13）　口径13.8cmに復原される。体部は横ナデされる。

壺（14～16）　14は短頸壺の胴部以下とみられる。胴部最大径20.4cm、高台径11.2cmを測る。内外面ともに横ナデされるが底部は回転ヘラ削りされる。15は大型の壺とみられ、胴部下半部を回転ヘラ削りする。高台はやや外方に踏ん張るような形状を呈している。16は長頸壺で、口径11.1cm。頸部中位に浅い一条の沈線がある。口縁端部の折り返しは緩やかで不明瞭な部分もある。

鉢（17）　口縁端部内面をわずかに内側につまみ出している。外面には2条の沈線がみられる。全体に灰がかぶり釉を施したようにみえる。

土師器

坏c（18）　口径16.0cm。表面は風化が進行し、調整不明。

皿（19）　口径13.5cm。表面は風化が進行し、調整不明。

甕（20）　口径32.2cm。外面は風化が進行し、調整は明らかでないが、内面はヘラ削りで成形される。

98SE003枠内（Fig.41）

須恵器

蓋c3（1・2）　摘みは偏平なボタン状を呈している。天井部はヘラ切りのままである。口

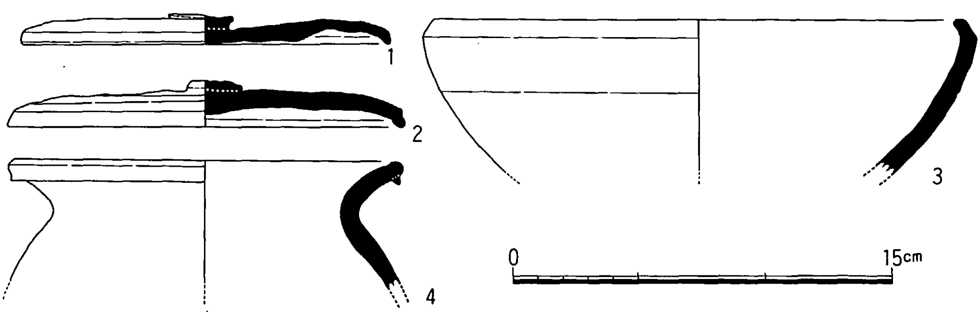


Fig.41　98SE003枠内出土遺物実測図

縁端部の形状は不明瞭な三角形を呈している。

鉢（3）　口径21.0cm。内外面ともに横ナデ調整される。

甕（4）　口径15.6cm。口縁部外面に小さな突帯が巡っている。残存する範囲内で調整は横ナデである。

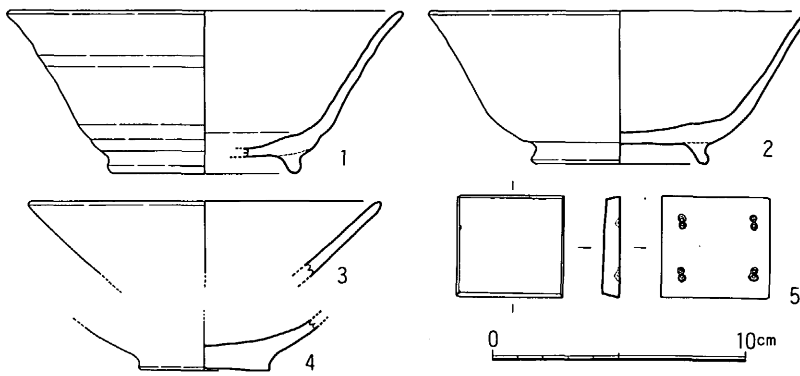


Fig.42　98SE004出土遺物実測図

98SE004(Fig.42)

土師器

椀c（1）　口径15.8cm、器高6.5cm、高台径7.7cmを測る。外方へ直線的に立ち上がる体部を有する。

黒色土器

椀c（2）　口径15.7cm、器高6.1cm、底径7.0cmを測る。内面にミガキcを認める。A類。

越州窯系青磁

椀（3）　口径14.0cmに復原される。残存部全面に施釉され、釉はオリーブ色に発色するが光沢に乏しい。胎土は精良で、茶灰色を呈している。椀I－1類。

緑釉陶器

椀（4）　底径5.2cm。底部は糸切りで、釉はかからない。体部は内外面ともに施釉され、釉は淡黄緑色を呈する。焼成はあまく土師質、胎土は精良で乳白色を呈している。京都洛北産とみられる。

石帯

巡方（5）　4.25cm×4.05cm、厚さ0.6cmを測る。蛇文岩製と見られ、黒灰色を呈し光沢を帯びる。表面の4隅に紐通しの穴を穿つ。

98SE006（Fig.43）

須恵器

蓋3（1～3）　摘みの有無は確認できない。端部の形状は不明瞭な三角形を呈する。いずれも天井部はヘラ切りのままである。

蓋c3（4・5）　口径13.0・18.3cm。端部の形状は不明瞭な三角形を呈する。いずれも天井部はヘラ切りのままである。

坏a（6・7）　口径12.7・15.2cm。底部はヘラ切りのままである。

坏c（8・9）　口径14.1・14.5cm。8の高台は底部と体部の境目付近に接合される。

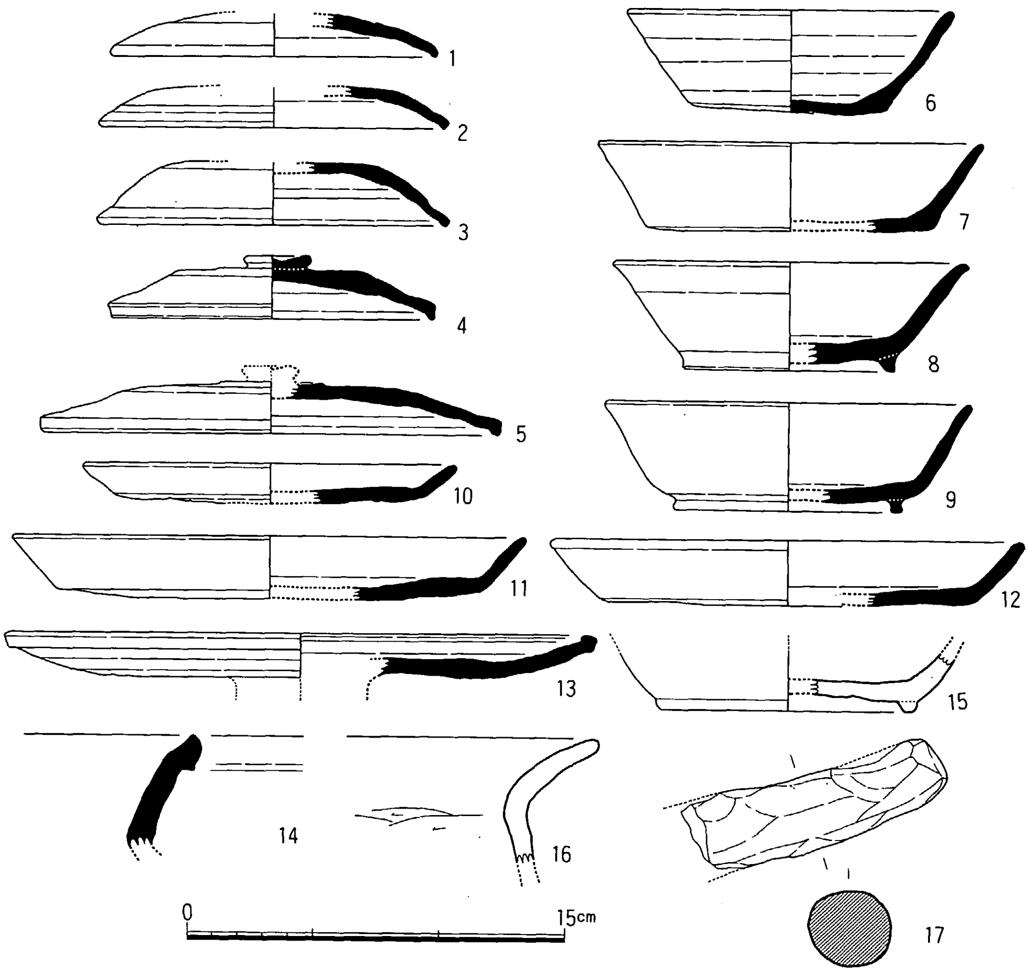


Fig.43 98SE006出土遺物実測図

皿a（10・12） 口径14.9～20.2cm。底部はヘラ切りのままである。

高坏（13） 口径23.5cm、坏部高1.8cmを測る。坏部底部は回転ヘラ削りされ、そこに脚部を貼り付けている。口縁部の折り返しは小さく、端部を平坦気味につくる。脚部は残存しない。

甕（14） 口縁部外面に叩き目の痕跡が認められる。

土師器

坏c（15） 高台径10.0cmを測る。

甕（16） 外面はハケ調整、内面はヘラ削りである。

把手（17） 長さ約10cmで、指圧によって仕上げられる。

3～5・7・8・10・11・14・15は枠内出土、他はその上面の埋土中出土。

98SE015（Fig.44）

須恵器

鉢（1） 口径19.6cm。口縁端部を肥厚させ、丸くおさめる。篠窯産とみられる。

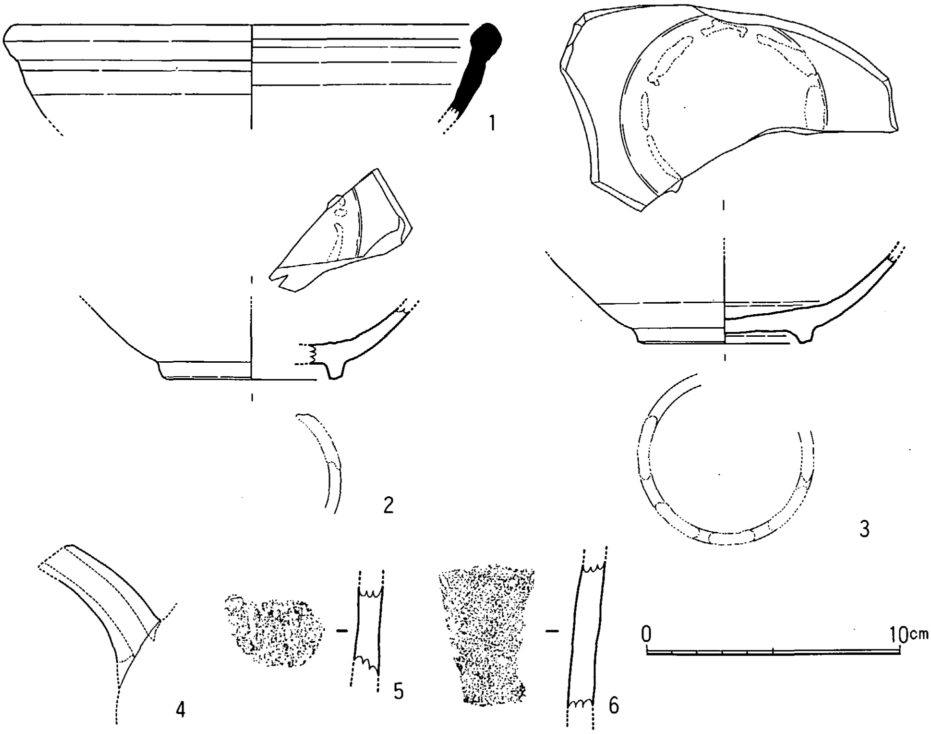


Fig.44　98SE015出土遺物実測図

越州窯系青磁

椀（2・3）　高台径7.1・6.9cm。見込み及び畳付けに横長の目跡が観察される。いずれも椀I－2ア類。

水注（4）　I類の水注で、注ぎ口の破片である。破片残存範囲全体に施釉され、釉はオリ

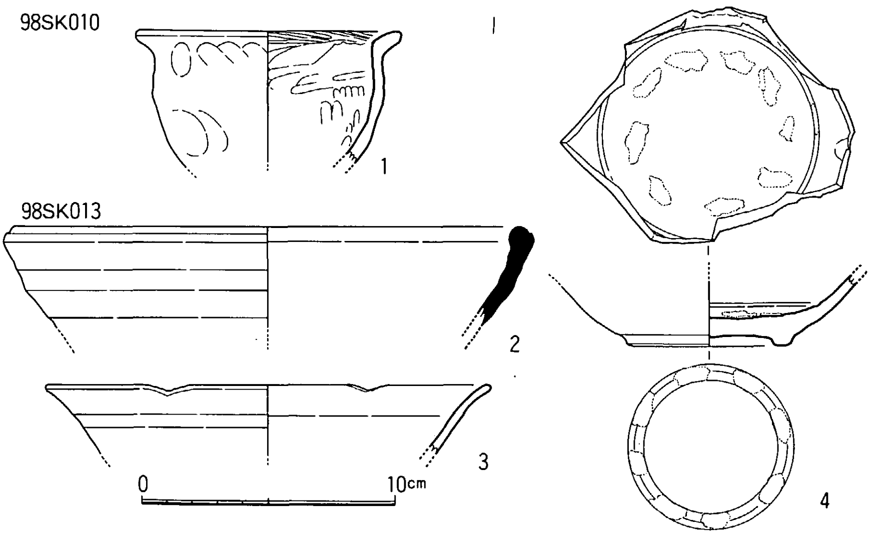


Fig.45　98SK010・SK013出土遺物実測図

ーブ色に発色し光沢がある。一部に貫入が認められる。

製塩土器

壺（5・6） 外面は指圧痕、内面は布目痕が観察される。

1・2・5は全体の埋土中、4・6は西、3は東出土。

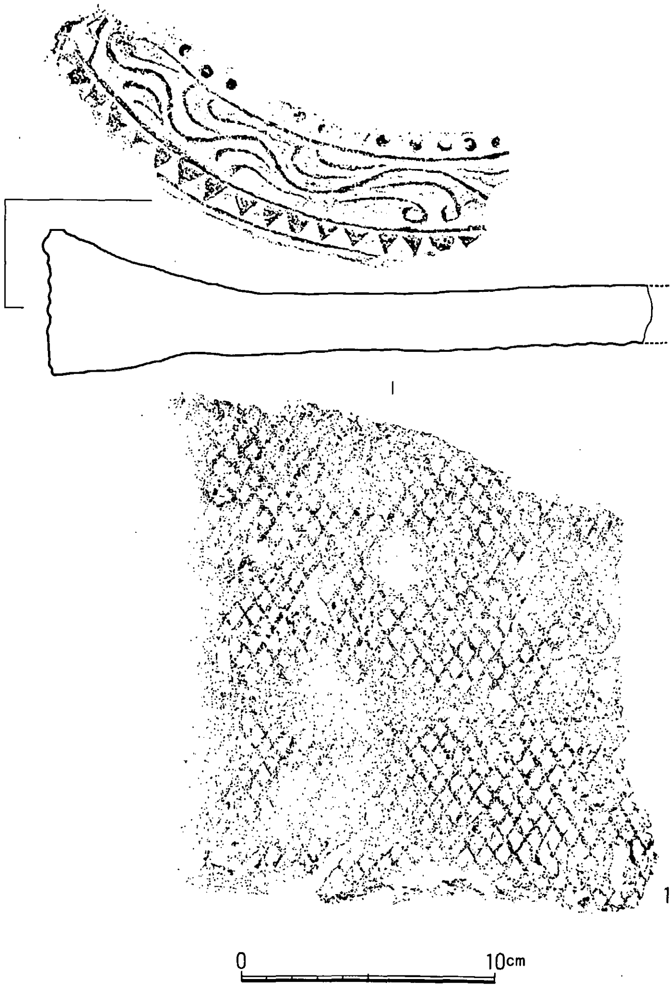


Fig.46 98SK014出土遺物実測図

土壙出土遺物

98SK010(Fig.45)

黒色土器

小甕（1） 口径10.6cm。口縁部内面付近にヘラ磨きを行う。

98SK013(Fig.45)

須恵器

鉢（2） 口径21.0cm。口縁端部を肥大化させ丸くおさめる。調整は内外面とも横ナデによる。篠窯産と考えられる。

越州窯系青磁

椀（3・4） 3は口縁部に輪華をあしらうもので、I－2b類。釉は全体に薄く掛けられ、灰緑色に発色する。全体に貫入が認められる。4はI－2ア類で、輪状高台の畳付け部分は露胎となり、そこには8箇所の目跡が観察される。見込みには沈線状の軽い段があり、その内側に9箇所の目跡がある。釉はオリーブ色に発色するが光沢はあまりない。

98SK014 (Fig.46)

瓦

軒平瓦（1） 瓦当文様は主茎が左から右に流れる偏行唐草文で、上外区は珠文帯、下外区は凸鋸歯文である。平瓦部の凸面は格子叩きである。

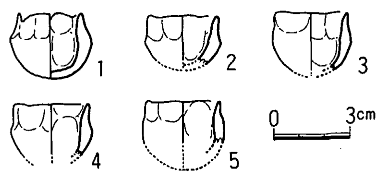


Fig.47 98SD008出土遺物実測図

溝出土遺物

98SD008（Fig.47）

土師器

ミニチュア鉢（1～5） 口径2.5～3.0cm、器高2.5cm前後のもので、すべて手捏ねである。口縁部を形成する時の指圧で体部外面に軽い段が生じている。

溜まり状遺構出土遺物

98SX005上面（Fig.48）

須恵器

蓋a1（1） 口径14.0cm、器高2.2cm。ヘラ切りのままの天井部には格子目状のヘラ記号がある。

蓋c1（2） 口径12.7cm、器高3.4cmで、やや偏平な擬宝珠形の摘みが付く。天井部は回転ヘラ削りされる。

鉢（3） 復原口径30.6cm。口縁部は内側に大きく折り曲げ、再度軽く立ち上がる。調整は横ナデ。

高坏（4・5） 4は口径9.4cm、坏部の器高3.4cmである。底部と体部の境目は明瞭で一条の沈線がある。底部は回転ヘラ削りされたのち横ナデが施されている。5は、脚端部径11.0cmを測る。

甕（6） 口径21.9cm。口縁部の調整は横ナデである。

土師器

皿（7） 口径22.9cm。口縁部は強い横ナデによって内外面ともに軽い段を有し、端部を平

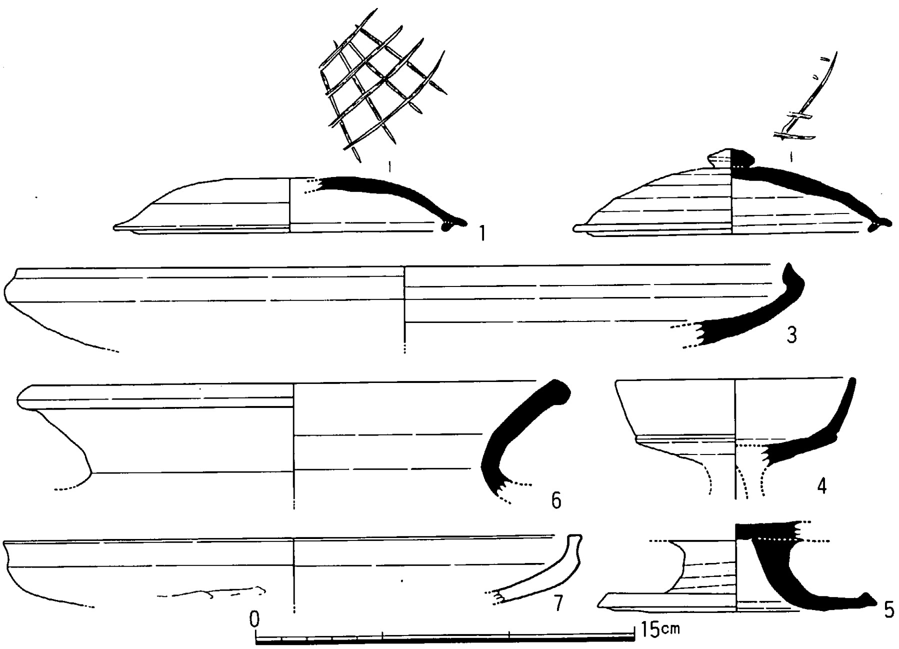


Fig.48 98SX005上面出土遺物実測図

坦におさめる。底部は手持ちヘラ削りで調整され、外面の口縁部付近には朱彩された痕跡が認められる。

98SX005（Fig.49・50）

茶褐色土、黒褐色土、淡茶色土に分層して取り上げたが、堆積の状況、遺物の接合関係、調査段階における所見などから遺構北側に一括して廃棄されたものと判断し、ここではまとめて報告する。なお参考のために文末に出土層位を記載した。

須恵器

蓋a 1 （1～5） 口径10.6～12.6cm、器高2.0～2.5cm。天井部はすべてヘラ切りのままである。

蓋c 1 （6～13） 口径11.5～14.8cm、器高1.9～3.6cm。摘みの形状は宝珠形、ボタン形の両

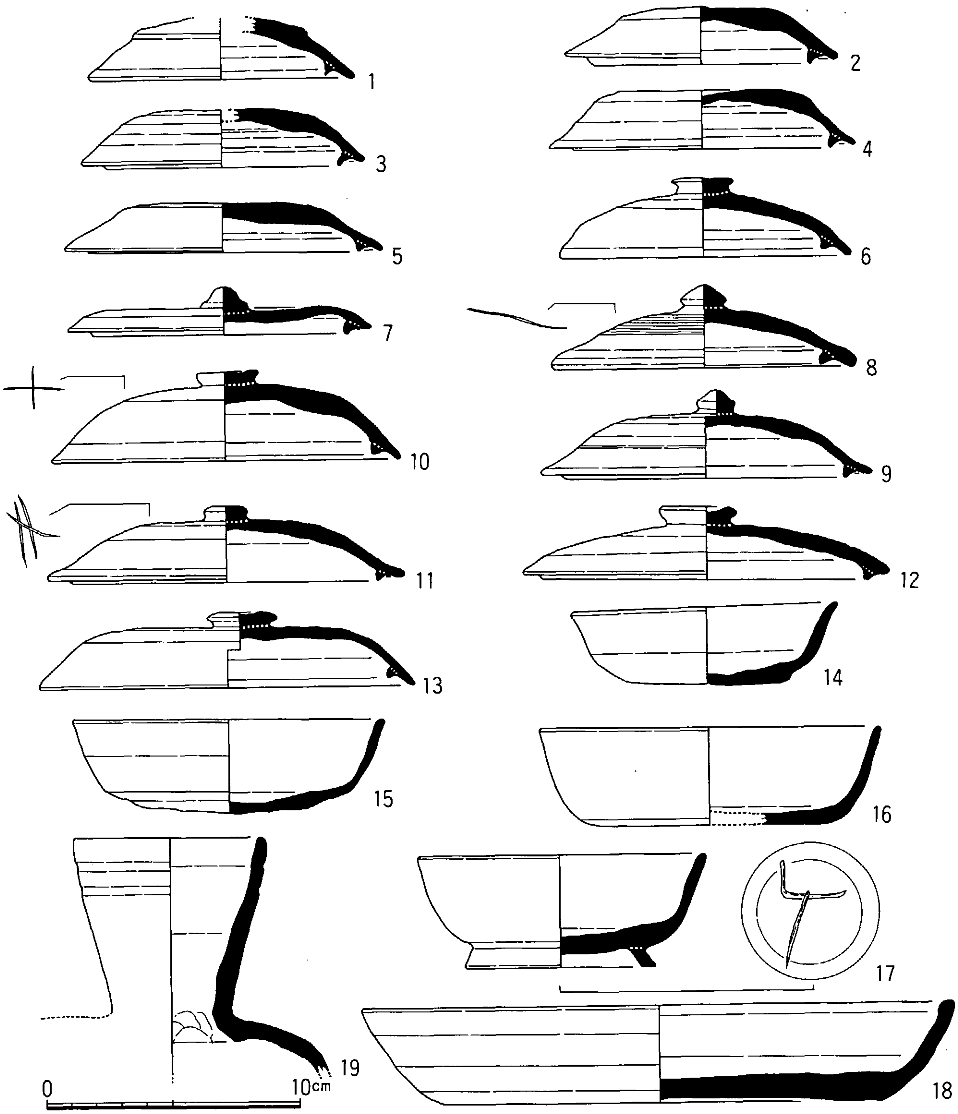


Fig.49 98SX005出土遺物実測図（1）

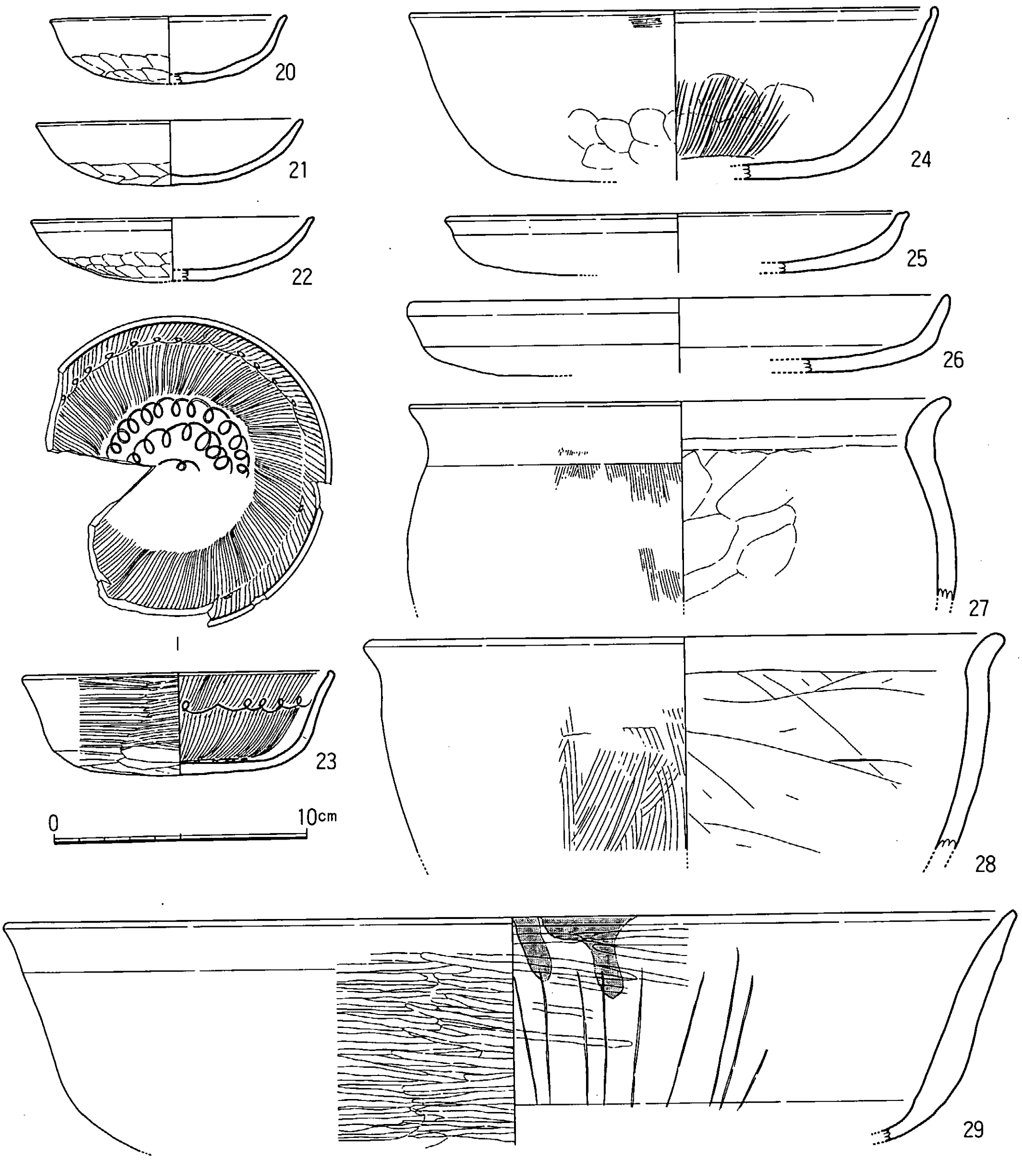


Fig.50　98SX005出土遺物実測図（2）

者がある。天井部はいずれも回転ヘラ削りされるが、8は掻き目調整が施される。8・10・11の天井部外面にはヘラ記号がある。

坏a（14～16）　口径10.5～13.5cm、器高3.1～3.9cm。底部は14・15がヘラ切りのままであるが、16はやや不明瞭ながら回転ヘラ削りを施しているとみられる。

坏c（17）　口径11.4cm、器高4.5cm、高台径7.6cmを測る。高台は外方へ踏ん張る形状を呈している。底部、高台内側にヘラ記号がある。

皿a（18）　口径23.4cm、器高4.0cm、底径17.3cm。口縁端部を内側に軽くつまみ出し、稜を作る。外面の体部下半から底部は丁寧な回転ヘラ削りを施すが、作業行程は別とみなされる。

横瓶（19） 口径7.6cm。体部には掻き目の痕跡がある。

大甕（a） 口径22.1cmを測る大甕である。胴部中位に資料の欠落あり正確な器高はつかめないが、およそ111cmに復原される。

土師器

小皿（20～22） 口径9.3～11.1cm、器高2.5～2.7cm。底部は丸底で部分的に指圧痕が残るが、最終調整は手持ちヘラ削りである。内面及び外面体部は手持ちのナデ調整である。

坏（23） 口径12.3cm、器高5.1cmを測る。坏Aとされる典型的な飛鳥の土器で、搬入品である。口縁端部内面には軽い段があり、沈線状を呈している。外面は底部を手持ちヘラ削りで調整し、体部は横方向の手持ちヘラ磨きで仕上げる。内面は横方向の磨きを行った後、2段の斜め右上がりになる暗文を配し、その境目に螺旋状の暗文を入れる。見込み部分にも螺旋状の暗文を3段に入れる。焼成は良好で硬質、色調は埋蔵環境にもよるものの赤褐色を呈している。

大坏（24） 口径20.8cm、器高6.8cmを測る。口縁端部を内側に軽く折り返し、稜を作る。その直下は沈線状を呈している。風化が著しく調整は不明瞭であるが、内面には斜め右上がりになる暗文を配している。見込みにも暗文が存在しているようだが判然としない。

皿（25・26） 25は口径18.4cmを測り、口縁部をわずかに外反させる。口縁端部は平坦に作られる。底部は手持ちヘラ削り調整される。体部外面に朱彩の痕跡が確認される。上面で検出された資料（Fig.48-7）と同一個体の可能性がある。26は口径21.4cm。底部を手持ちヘラ削り調整する。体部外面から底部の一部にかけて朱彩の痕跡が確認される。

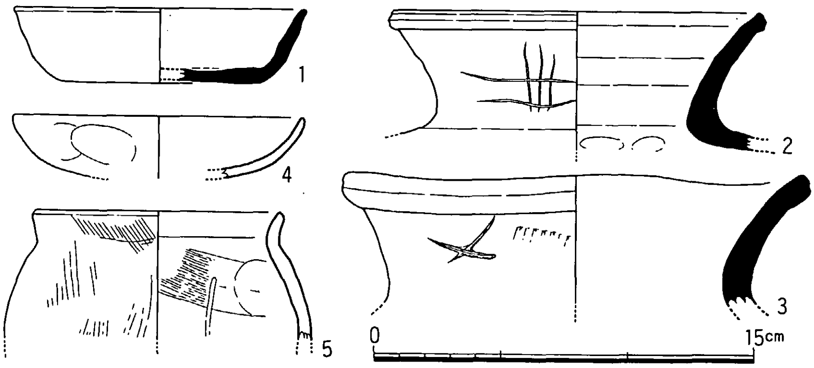


Fig.51 98SX020上面出土遺物実測図

甕（27・28） 口径21.4・25.4cm。両者とも外面は縦方向のハケ、内面は手持ちヘラ削り調整される。

大鉢（29） 口径40.0cmを測る大型の器種で、底部を手持ちヘラ削りし、体部外面は横方向のヘラ磨きを施す。内面は粗雑な横方向のヘラ磨きを基調とするが、1～2cm間隔で不揃いな縦方向の暗文を配する。体部の厚さに比べて底部はきわめて薄く作られている。

（出土層位） 2・10・25・28は淡茶色土層、12・14が茶褐色土層、他は黒褐色土層から出土した。ただし23は黒褐色土層、茶褐色土層の両者から出土したものが接合した。

98SX020（Fig.51）

すべて埋没土上面に近い位置から出土した。

須恵器

坏a（1） 口径11.7cm、器高3.0cm、底径7.9cmを測る。底部はヘラ切り後、ヘラ状の工具により平滑に調整されている。

甕（2・3） 口径14.9・18.5cm。両者とも口縁部外面にヘラ記号がある。

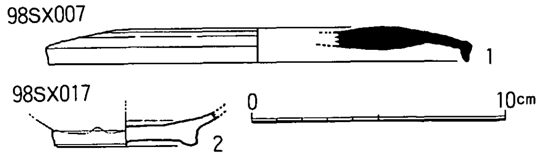


Fig.52 98SX007・017出土遺物実測図

土師器

小皿（4） 口径11.6cm。98SX005から出土した小皿（Fig.50-20～22）と同じタイプのものと考えられるが、風化が進行しており詳細は明らかではない。

小甕（5） 口径10.0cm。外面は口縁部から体部にかけてすべて縦方向のハケ目である。内面は手持ちヘラ削りである。

その他の遺構出土遺物

98SX007（Fig.52）

須恵器

蓋3（1） 口径16.7cm。口縁端部はやや長めの三角形を呈している。天井部は回転ヘラ削りされる。

98SX017（Fig.52）

白磁

椀（2） 高台径5.6cm。体部には乳白色の釉がかかるが、底部外面は露胎である。XI類とみられる。

5）小結

主要な遺構について埋没時期等を記述してまとめとしたい。

98SE001 土師器丸底坏a、小皿aともにヘラ切りで、共伴する陶磁器も白磁椀IV類、初期高麗青磁であり、大宰府XII期（11世紀後半）を下らない時期に埋没したものとみられる。

98SE002 土師器坏、椀の法量から大宰府X期（10世紀後半～11世紀初頭）を中心としたものと考えられる。なお、同時に出土した資料中に皇朝十二銭の最後に鋳造された「乾元大宝」がまとまって含まれていた。この銭の初鋳年代は天徳2（957）年であるが、永延元（987）年には一条天皇による銭貨通用制止の詔が出されることから、詔が全国に普く行き渡ったものであるならば、通用していた期間はわずか30年余となる。今回検出された銭の出土状況は、単純に祭祀とも廃棄とも限定できない状況であるが、この詔に影響された廃棄行為の産物とすれば、土師器の年代観と矛盾するものではない。今後の銭共伴資料の評価に期待したい[1]。

98SE003・006 両者とも出土遺物の傾向はきわめて近似している。須恵器蓋では端部の形

状が未だ明瞭な三角形を維持しているものを含むものの天井部の調整は未調整で、粗さが目立つ。坏にしても調整は粗雑化の傾向があり、8世紀でも前半には遡らないとみられる。土師器では供膳形態が未だ多量に出現しておらず、8世紀後半の典型的な傾向は示していない。したがってこれらの資料は8世紀中頃〜後半に位置づけるのが妥当ではないかと思われる。

98SE004　出土した土師器坏は体部が直線的で古い傾向を示しているが、外面の調整はヨコナデで終わっており、大宰府ⅥA期に該当する資料とみられる。他の資料も特に年代的にはこれを下るものではないため、この遺構の埋没時期をここでは大宰府ⅥA期（9世紀初頭）と考えておきたい。

98SX005　出土した土器群のうち須恵器は蓋ではすべて返りを有しているが、法量の点から11〜12cmの小型のものと13〜14cm代のものに2分される。前者は古い傾向にあり後者はやや新規とみられるが、連続する型式とみて差し支えない資料である。両者の出土量には大差はなく、両型式の中間的な年代が考えられよう。こうした傾向を示すものを大宰府ⅠA〜ⅠB期として捉えており、宮ノ本4号窯出土資料に近い傾向にある。土師器では搬入品である飛鳥の坏の年代が参考になる。この資料は飛鳥Ⅲ〜Ⅳ期の遺構に含まれるもので、Ⅲの後半からⅣの前半にその主体がおけるものである。これまでの当該地域の年代観では飛鳥Ⅲが7世紀第Ⅲ四半期、Ⅳが第Ⅳ四半期とみられている。こうしたことから、この遺構の埋没年代は7世紀中頃から後半への移行時期あたりと考えておきたい。

なお、98SX020についても同様の時期と考えられ、性格も同じとみなされる。この調査地に隣接して、区画整理事業が実施される以前に小規模な調査が行われている（大宰府条坊跡第9次調査[2]）。ここでも同様の埋没土がトレンチによって確認されており、この周辺に広がっているものとみられる。おそらく調査区外では両者ひとつにつながっているものと思われる。この遺構の性格については明らかではないが、年代的にみて大宰府を建設する段階のものであり、大宰府完成時の遺構（98SE006）がこの上に展開していることから、大宰府都市部分の整地造成作業に関わるものである可能性が考えられる[3]。

今回の調査は、井戸をはじめとする深い遺構のみの検出であったが、年代的には7世紀代から11世紀代に至る遺構が確認され、8世紀以降にはこの地が生活の場となっていたことが井戸の存在から窺えたことは貴重である。また、石帯や乾元大宝の出土はここに生活していた人物の階層をも窺わせるものである。今後周辺部の調査が進行することで、大宰府都市における西区域の様相が明らかになるものと思われる。　　　　　　　　　　　　　　　　（狭川真一）

参考文献

1）中島恒次郎（1992）「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』日本中世土器研究会
2）山本信夫（1982）『大宰府条坊跡』太宰府市教育委員会
3）狭川真一（1993）「大宰府成立期の遺構と遺物」『古文化談叢』第30集（中）九州古文化研究会

4．第106次調査

1）調査に至る経過

太宰府市通古賀２丁目248－１他（旧地名：大字通古賀字権入）において、平成元年３月９日に㈱福岡日産自動車のショールームならびに整備工場改築に伴なう埋蔵文化財の取り扱いの有無についての問い合わせが同社からなされた。当地は鏡山猛氏推定復原案による大宰府条坊跡右郭九条六坊に位置しており、開発対象地域に隣接して、条坊跡第87次調査地が所在していることから、埋蔵文化財の広がりを考えると、当該地域まで広がっていることは容易に推定できた。本調査に先立って、文化財の有無ならびに規模の確認のための試掘調査は、営業との関わりから不可能であるとの協議結果に基づき、開発対象地の分割調査ならびに、社屋解体後に試掘調査および本調査を実施することで合意をみた。発掘調査は、開発対象地の北半部分を平成２年12月13日から平成３年３月15日にかけて条坊跡第106次調査として実施した。調査は中島恒次郎があたった。

2）層位

当地は、㈱福岡日産自動車の社屋があったにも関わらず、既存の建物に伴なう攪乱はなく、極めて良好な状況で遺構が確認できた。約0.3mほどの建物建築に伴なう整地層があり、その整地層を除去すると、約0.2mほどの茶褐色土の遺物包含層が堆積している。この遺物包含層を除去すると下位より遺構検出面が現われる。遺構の多くは黄茶色地山形成土に切り込むかたちで検出されるが、調査区の南西部分は黄色土の整地層が覆い、下位に暗黄茶色の遺構が地山形成土に切り込んでいる。したがって、東に隣接する87次調査の所見同様に２面の生活面が検出できた。

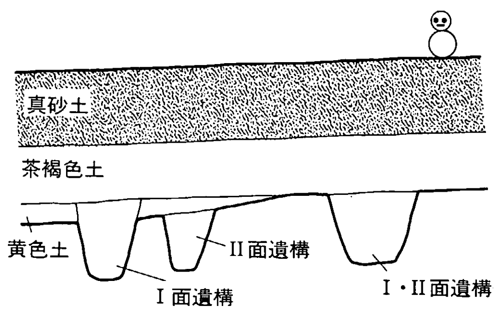


Fig.53　条坊106次基本土層模式図

3）遺構

東に隣接する大宰府条坊跡第87次調査同様に２面の生活面を検出しており、検出できた遺構は、建物、柵、井戸、埋納遺構等多岐にわたり、宅地内部を想像させる遺構構成を有している。以下にその概略について記述する。

-遺構Ｉ面-

建物

106SB075　調査区北東部に検出した２間×４間の南北棟建物で、柱間総距離（柱心々間を

測る。以下特に注記しない場合は同様）は桁行で6.99m、梁行で1.95mを測る。各柱間の平均距離は、桁行で約1.8m、梁行で1.95mを測る。建物の桁行方向は、N-4°18′-Eである。

106SB080 106SB075の西に隣接し、調査区の北部中央に検出した建物で、2間×3間の南北棟である。柱間総距離は、桁行で約6.25m、梁行で約4.028mを測り、柱間の平均距離は、桁行で約2.1m、梁行で約1.9mを測る。建物の桁行方向は、N-4°24′-Eを測る。

106SB085 調査区の中央に検出した建物で、106SB075および106SB080の南に隣接して検出できた。規模は4間×2間の東西棟で、東に廂を設けているものと考えられる。柱間総距離は、桁行で約8.55m、梁行で約4.03mを測り、柱間の平均距離は、桁行で約2.1mほぼ等間で検出できたが、梁行で約2.2m～1.8m前後を測り、梁行に関しては、等間で検出できていない。東側の廂の出は、約1.2mを測り、梁行方向は、N-9°17′-Eである。

106SB090 調査区の南端部分にて検出した南北棟の建物で調査区外へ延びているため、全容に関しては、不明確である。梁行2間、桁行は調査区外へ延びるため2間のみ検出した。柱間総距離は、残存桁行約4.04m、梁行約3.15mを測る。各柱間の平均距離は、桁行で約2.1m、梁行で約1.65mを測る。桁行方向は、N-4°15′-Eを向いている。

106SB095 調査区西部に検出した小規模な建物で、1間×2間の南北棟と考えられる。柱間総距離は、桁行で約3.33m、梁行で約2.25mを測る。各柱間の平均距離は、桁行で約1.65m、梁行で約1.95mを測り、桁行方向はN-1°17′-Eを向いている。

106SB115 調査区北西部に検出した1間×3間の東西棟で、柱間総距離は桁行約4.95m、梁行約1.70mを測る。各柱間の平均距離は、桁行で1.5m～1.8m、梁行で1.9mを測り、桁行は等間にない。梁行方向はN-2°31′-Eを向く。

106SB120 調査区西部に検出した建物で、2間×3間の南北棟である。柱間総距離は桁行で約7.64m、梁行で約5.2mを測り、柱間の平均距離は桁行で約2.5m、梁行で約2.4mを測り南に廂が設けられ、約0.5m出ている。柱穴の大きさから、縁側が取り付く可能性も否めない。桁行方向は、N-0°33′-Wを向いている。

106SB125 調査区外へ延びるのか、柵として考えた方がよいのかは今次調査のみでは確定し難いが、柱穴の規模から掘立柱建物と判断した。検出できた柱は2間で、総距離は約6.9mを測り、方向はN-88°-Eを向いている。柱間の平均距離は、約2.32mを測る。

柵

106SA110 調査区東側に位置し、建物群と後述する106SA130のほぼ中間に配される状況で検出できた。直線に配されており、柱間総距離は7.068mを測る。各柱間の距離は約1.4m～2.0mと等間にない。方向はN-2°45′-Eを向いている。

106SA130 調査区の東に位置し、2つの穴が組になるように南北方向に配されるように検出できた。柱間の距離は、東西方向で約1.2m、南北方向で約1.2m～2.0mと一定していない。方向に関しても一定していないため、柵とするのかどうか検討を要するところである。

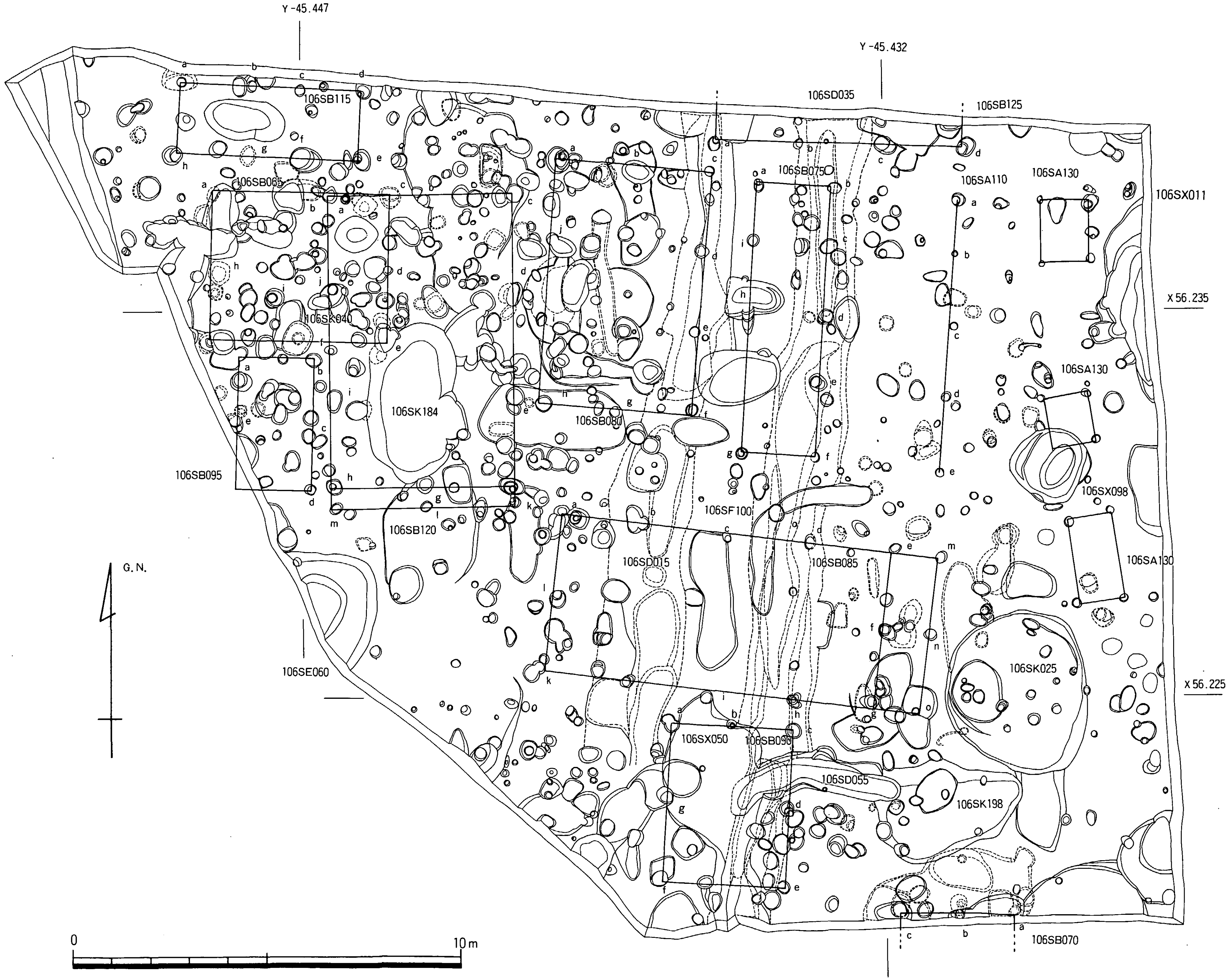


Fig.54　条坊106次遺構実測図(1/125)

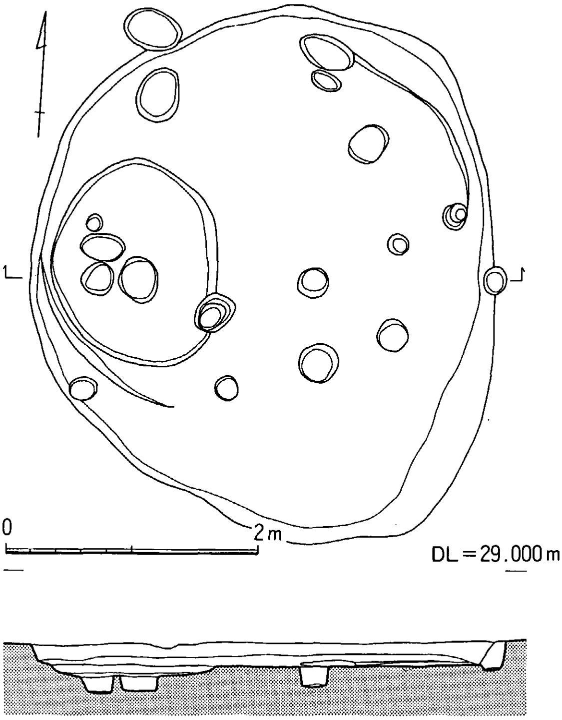


Fig.55　106SK025遺構実測図（1/60）

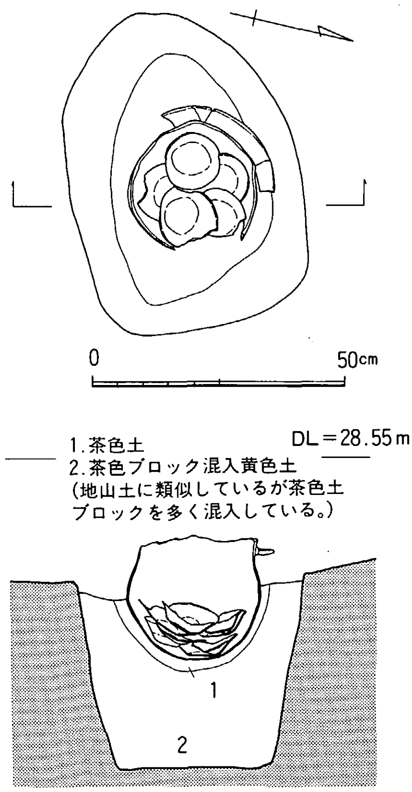


Fig.56　106SK040遺構実測図（1/15）

溝

106SD055　調査区南端部分に検出した土壙状の遺構で、東西方向に延びている。長軸長約2.2m、幅約0.4mを測り、深さ0.4〜0.6mが残存していた。埋没土は茶色土が堆積しており、炭化物を多く混入している。

土壙

106SK010　調査区北部に検出できた不整形の土壙で、長軸長約1.46m、短軸長約0.81m、深さ約0.47mをそれぞれ測る。茶黄色土が堆積している。

106SK025　調査区南東部に検出できたやや円形を呈する土壙で、長軸長約4.27m、短軸長約3.65m、深さ0.25mを測り、土壙底面には小穴が多く検出できた。黒茶色土が堆積していた。

106SK030　調査区中央に検出された長楕円形の土壙で、長軸長約1.8m、短軸長約0.72mを測る。残存する深さは、0.54mを測る。埋没土は、上位より茶黄色土→茶黄色砂が堆積している。

106SK040　調査区北西部に検出した小穴で、長軸長0.63m、短軸長0.45mを測り、完掘時の深さは0.40mが残存していた。遺構内部には、土師器の甕が埋置された状態で出土し、甕内部には、土師器の坏が10枚重なるように納められていた。甕口縁部が遺構検出面より上位に出ていることから、当時の生活面の標高は、現況の標高より高かったものと考えられる。

106SK073　調査区北西部に検出した長楕円形の土壙で、長軸長約0.8m、短軸長約0.4m、深さ約0.38mが残存していた。茶色土が堆積し、細片化した遺物が包含されていた。

106SK087　調査区北西部に検出できた不整形の土壙で調査区西方へ延びているため全容は摑めていない。検出した深さは約0.32mを測る。黄茶色土が堆積している。

106SK163・106SK164・106SK166・106SK167　一連の土壙で、106SK166・106SK167→106SK164→106SK163の関係で検出した。しかし、堆積土はいずれも茶色土が堆積しており、106SK166・106SK167に炭化物の混入度合いが高いという他は、差異は認められない。残存する深さは0.2m前後を測る。

106SK169　調査区中央の106SK030の南に検出した長楕円形の土壙で、長軸長約0.72m、短軸長約0.38m、深さ0.15mを測る。茶色土が堆積している。

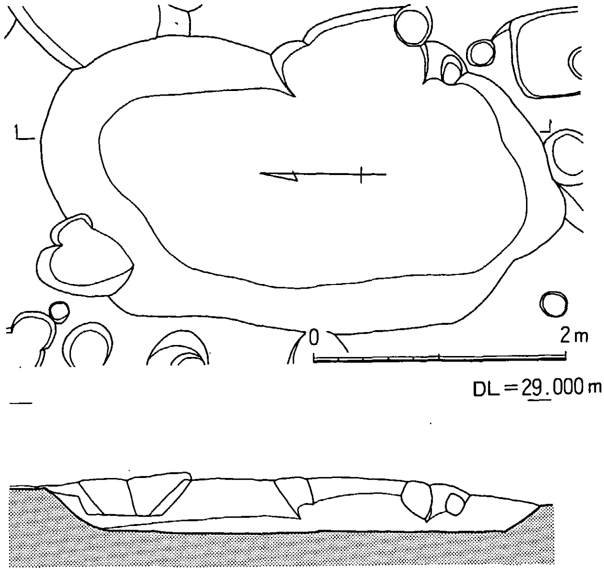


Fig.57　106SK184遺構実測図（1/60）

106SK173　調査区中央に検出した南北に長い凹み状の土壙で、長軸長約3.61m、幅約1.00mを測る。残存する深さは、0.11mを測り、茶黄色土が堆積している。

106SK178　調査区南部に検出した不整形な凹み状の土壙で、長軸長約1.48m、短軸長約0.52m、残存する深さは僅かに0.10mを測る。茶色土が堆積している。

106SK184　調査区西部に検出した南北にのびる長楕円形の土壙で、長軸長約4.15m、短軸長約2.20mを測り、残存する深さは約0.42mを測る。茶黒色土が堆積している。

106SK198　調査区南東部にて検出した不整形の土壙で、長軸長約3.80m、短軸長約2.00m、深さ約0.2mを測る。遺構底面は小穴による凹凸がある。茶色土が堆積している。

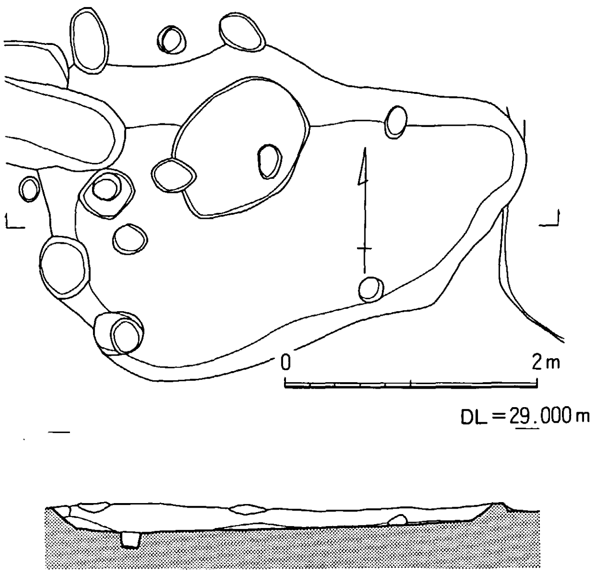


Fig.58　106SK198遺構実測図（1/60）

その他の遺構

106SX011　調査区北東隅に検出した不整形の遺構で、調査区東方に広がっている。検出した規模は長軸長約5.33m、短軸長（検出長）1.14mを測る。この遺構は調査区から階段状に東方に深くなっており、深さ0.12m→0.26m→0.50mと次第に深さを増している。東に隣接している条坊跡第87次調査区の遺構検出面の標高が、当該調査区の標高と比較して深くなっていることや、検出した各遺構の深さの比較から考えても、平安時代当時の標高差が現

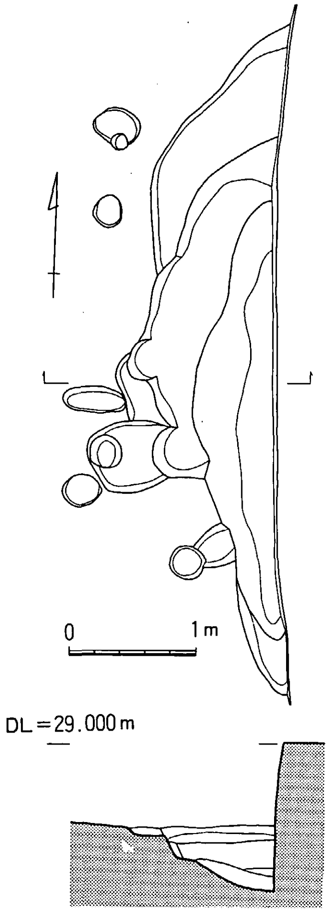


Fig.59　106SX011
遺構実測図（1/60）

在まで残存していた可能性が高い。したがって106SX011の遺構形状からみて階段であった可能性が出てくる。遺構内の埋没土は、茶色土が堆積していた。

106SX050　調査区南部に検出した不整形の凹みで、検出した遺構の規模は約3.00m四方の範囲に茶色土が広がっており、残存する深さは0.2mを測る。遺構内に堆積した土の中には、大きな破片の状態で遺物が出土しており、周辺に散乱していた日常品を凹みへ清掃廃棄した状況を想定させるように、不規則に出土している。

106SX098　調査区の東に検出した不整形の凹みで、長軸長2.10m、短軸長1.96m、残存する深さ0.70mを測る。遺構内には上位より茶色土→茶灰色土→黄色土が堆積している。また遺構底面に焼土塊が西方から投棄された状況で多量に出土している。

106SX128　調査区西南隅に検出した隅丸長方形の凹みで、長軸長約0.98m、短軸長約0.55m、深さ約0.17mをそれぞれ測る。遺構内には茶色土が堆積している。

106SX132　106SX128の南に隣接して検出した凹みで調査区南方へ広がっている。検出した規模は長軸長約0.52m、短軸長約0.38m、深さ約0.33mを測る。遺構内には、茶色土が堆積している。

106SX221　調査区中央付近に検出した不整形の凹みで、長軸長約1.92m、短軸長約0.80m、深さ約0.09mを測る。遺構内には茶色土が堆積している。

106SX246　調査区西部に検出した不整形の凹みで、106SX184に切られる状態で南側に広がっている。検出できた長軸長は約3.70m、短軸長2.25m、深さ0.29mを測る。遺構内には茶色土が堆積している。

106SX256　調査区南隅に検出した小穴で、下層に展開している建物106SB070の柱穴上面にある凹みであった可能性がある。遺構内には茶色土が堆積し炭化物を混入していた。

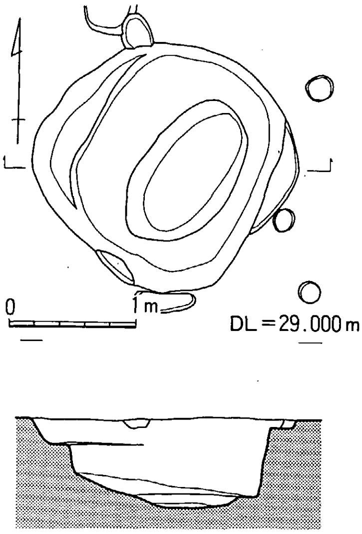


Fig.60　106SX098遺構実測図
（1/60）

-II面遺構-

建物

106SB065　調査区西部に検出した2間×2間の総柱建物で、柱総距離は東西方向で約4.3m、南北方向で約3.8mを測る。やや東西方向の柱総距離が長く、正方形の形状は呈していない。

柱間の平均距離は、東西方向が約2.17m、南北方向が約1.9mをそれぞれ測る。座標北からの建物方向は、N-1°30′-Eを振る。

106SB070　調査区南端に検出した遺構で、柱穴と考えられる穴を3基検出したのみであることから、建物の規模に関しては判断できない。柱間の平均距離は約1.45mを測る。

井戸

106SE060　調査作業に際して、崩壊の危険性があったため完全に調査を実施できなかった。遺構検出時の所見から、遺構内に方形を呈する黒茶色土が堆積しており方形の井戸枠を有するものと推定できるのみである。裏込めの際の土は灰茶色砂質の土が使用されている。

溝

106SD015　調査区中央を南北に縦断する溝で、検出長は約18.0m、幅は約1.2m～1.8m、深さは0.06m～0.47mを測り、完掘状況から土壙状の連なりを呈していた。溝の任意中心軸は座標北方向から東に8°33′を振る。遺構内には上位より暗黄茶色土→黄色砂混じり土が堆積していた。

掘立柱建物

遺構番号	抽出Point	遺構任意中点座標		方位角	抽出Point間距離
		X座標	Y座標		
106SB065	c	56.238.050	−45.444.725	N1°30′27″E	3.801m
	e	56.234.250	−45.444.825		
106SB075	b	56.238.150	−45.433.225	N4°18′16″E	6.995m
	f	56.231.175	−45.433.750		
106SB080	c	56.238.560	−45.436.425	N4°24′34″E	6.178m
	f	56.232.400	−45.436.900		
106SB085	e	56.228.800	−45.431.700	N9°17′13″E	4.028m
	g	56.224.825	−45.432.350		
106SB090	c	56.224.075	−45.434.350	N4°15′45″E	4.036m
	e	56.220.050	−45.434.650		
106SB095	b	56.233.725	−45.446.700	N1°17′32″E	3.326m
	d	56.230.400	−45.446.775		
106SB115	d	56.240.650	−45.445.450	N2°31′34″E	1.702m
	e	56.220.050	−45.445.525		
106SB120	c	56.238.000	−45.441.500	N0°33′45″E	7.640m
	f	56.230.360	−45.441.575		
106SB125 (106SA125)	d	56.239.250	−45.429.950	N88°0′8″E	4.303m
	a	56.239.400	−45.434.250		

柵

遺構番号	抽出Point	遺構任意中点座標		方位角	抽出Point間距離
		X座標	Y座標		
106SA110	a	56.237.810	−45.430.210	N2°45′26″E	7.068m
	e	56.230.750	−45.430.550		

道路側溝

遺構番号	抽出Point	遺構任意中点座標		方位角
		X座標	Y座標	
106SD035	NP	56.239.950	−45.433.260	N6°52′41″E
	SP	56.219.100	−45.435.775	
106SD015	NP	56.239.360	−45.436.450	N8°33′9″E
	SP	56.223.900	−45.438.775	

道路

遺構番号	抽出Point	遺構任意中点座標		方位角
		X座標	Y座標	
106SF100	NP	56.239.150	−45.434.950	N6°10′52″E
	SP	56.225.300	−45.436.450	

Tab. 4　条坊106次主要遺構座標値

106SD035　調査区中央を南北に縦断し、106SD015に平行して検出した溝で、検出長は約21.0m、幅は約1.5m～2.0m、深さは0.28m～0.50mを測る。先の106SD015同様に完掘状況は土壙状の連なりを呈していた。溝の任意中心軸は座標北方向から東に6°52′振っている。遺構内には上位より暗黄色土→明黄茶色土が堆積していた。

道路

106SF100　溝106SD015および106SD035の両者にはさまれた空間が道路と推定できる。道路路面と推定できる部分には舗装事業は確認できなかった。路面幅は約1.4m～2.1mとまちまちである。道路任意の中心軸の方向は、座標北から約6°10′52″東へ振れている。政庁中軸線からの距離は、西へ約610.52mの位置にあたる。

その他の遺構

106SX299　調査区南隅に検出した不整形の凹みで、建物と推定した106SD070の上位に検出した。調査区南部へ広がっていることから詳細な規模は不明だが、残存長軸長は約2.16mを測り、深さ約0.25mを測る。　(中島恒次郎)

4）遺物

掘立柱建物出土遺物

106SB075（Fig.61）

須恵器

鉢（1）　口径27.0cm前後を測る。明灰色の胎土に黒色細粒を多く含むが精選されている。口縁部は玉縁をつくる。焼成・還元ともに良好。篠窯系。

106SB090（Fig.61）

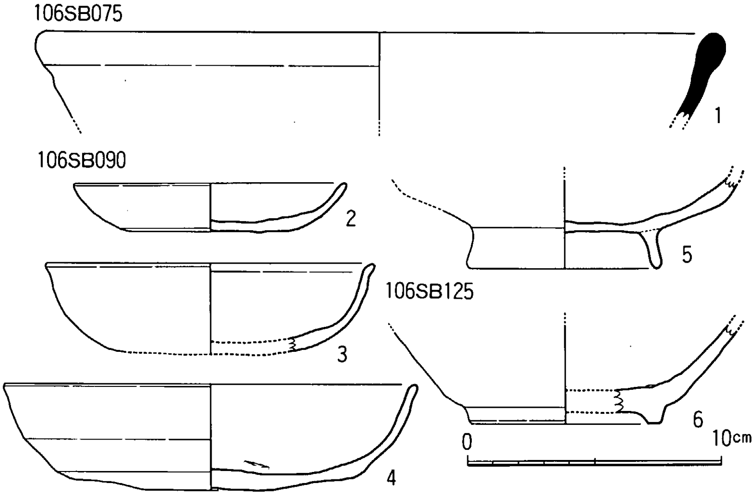


Fig.61　掘立柱建物(Ⅰ面)出土遺物実測図

土師器

小皿a（2）　口径10.8cm、器高1.9cmを測る。黄白色を呈し、磨耗のため調整は不明。

椀a（3・4）　口径13.0・16.4cmを測り、体部下位に丸味をもつ。4は内面にミガキbの痕が残る。

椀c（5）　高台径7.7cm。体部下位は外側に張り出し細く高い高台を貼り付ける。磨耗して調整不明。

106SB125（Fig.61）

越州窯系青磁

椀（6）　高台径7.6cm前後を測る。茶灰色から灰色の精選された素地に全面施釉される。釉の発色は悪く淡い黄茶色を呈し、高台畳付の釉をカキ取っている。見込みに目跡がある。Ⅰ-2a類。

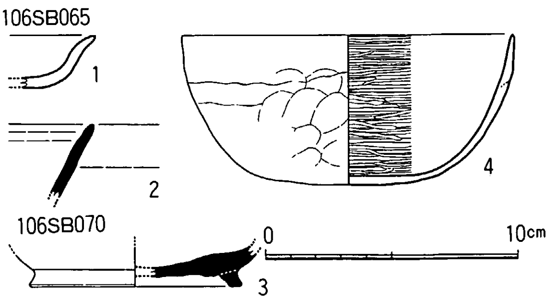


Fig.62　掘立柱建物(Ⅱ面)出土遺物実測図

106SB065 (Fig.62)

須恵器

坏（2） 内面は明灰色、外面は暗灰色を呈し、横ナデされる。

土師器

皿a（1） 胎土は明赤褐色を呈し、精選されている。調整は不明。

106SB070 (Fig.62)

須恵器

坏c（3） 高台径8.4cm。見込みに不定方向のナデを行なう。

黒色土器

椀（4） 口径13.0cm、器高5.9cmを測る。胎土は良く精選され、内面に丁寧なミガキcを行なう。器肉は薄く仕上げられ、外面に指頭圧痕が多く残る。外面は明赤褐色を呈する。A類。

井戸出土遺物

106SE060 (Fig.63)

土師器

皿a（1） 胎土は明赤褐色を呈し精選されている。底部はヘラ削りされる。

106SE060灰茶色砂 (Fig.63)

土師器

皿a（2・3） 2の胎土は明赤褐色を呈し精選されている。外面は底部から口縁部近くまでヘラ削りし、内面は丁寧なミガキaを施す。3は口径14.0cmを測り明赤褐色を呈する。底部はヘラ切り。

椀c1（4） 口径14.9cm、器高6.1cm、高台径7.7cmを測る。胎土は淡赤褐色で精選されている。体部は直線的に開き、高台が底部の外縁に貼付される。

壺（5） 高台径9.5cm前後を測る。高台を八の字に開いて貼り付ける。内面は横ナデ、外面はヘラ削りと考えられる。

甕a（6） 口縁部内外面と胴部外面はハケ調整し、外面の屈曲部に指頭圧痕が残る。胴部内面は手持ちヘラ削りされる。

106SE060黒茶色粘土 (Fig.63)

須恵器

蓋3（7） 口径15.5cm。明灰色を呈し、横ナデ調整を行なう。口縁部の内側に浅い幅広の沈線が巡るが明瞭な稜をなさない。

坏（8） 明灰色を呈し、横ナデされる。

土師器

坏a（9・10） 9は茶白色を呈し、内外面に黒褐色の煤が付着する。10は皿の可能性もあ

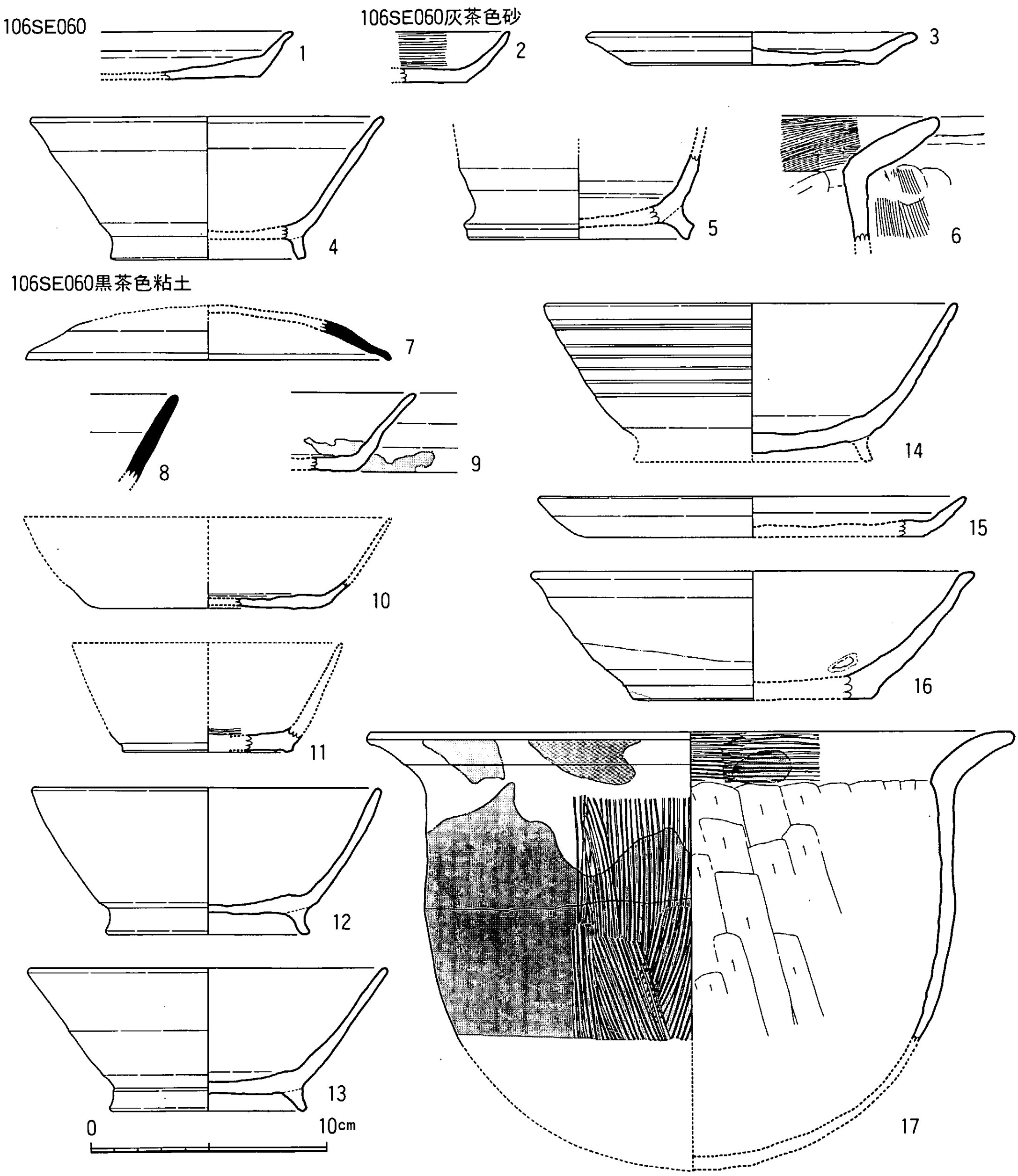


Fig.63　106SE060出土遺物実測図

る。いずれも底部はヘラ切りされる。

坏c（11）　高台径7.2cm前後に復原され明赤褐色を呈する。見込みは丁寧なヘラ磨きを行ない、底部外面をヘラ削りし、高台を削り出す。筑後国周辺に分布中心がある。

椀c 1（12～14）　口径14.8～17.45cm。器高6.0～6.7cmを測る。体部はいずれも直線的に開き横ナデを行なう。14は体部外面に沈線が幾重も巡り、意図的に施された可能性もある。

皿a（15）　口径18.1cmに復原される。底部はヘラ切り。

甕a（17） 口径27.4cm前後を測る。口縁部内側、胴部外面は粗いハケ調整を行ない、胴部内面は縦方向に粗く削る。

陶器（越州窯系）

坏（16） 口径18.8cm、器高5.5cm、底径10.2cmを測る褐釉の坏。素地は灰色から茶灰色を呈し、黒色の細粒を含む。暗褐色の釉が外面の体部下位まで施され、見込みには目跡が残る。

土壙出土遺物

106SK010（Fig.65）

須恵器

蓋3（1） 口径16.6cm。明青灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。内外面とも横ナデを行なう。

坏c（2） 口径12.6cm、器高3.9cm、高台径8.6cmを測る。体部は直線的に開く。

土師器

甕（3） 口径21.5cm前後に復原される。口縁部は横ナデ、胴部内面は斜め方向にへラ削り

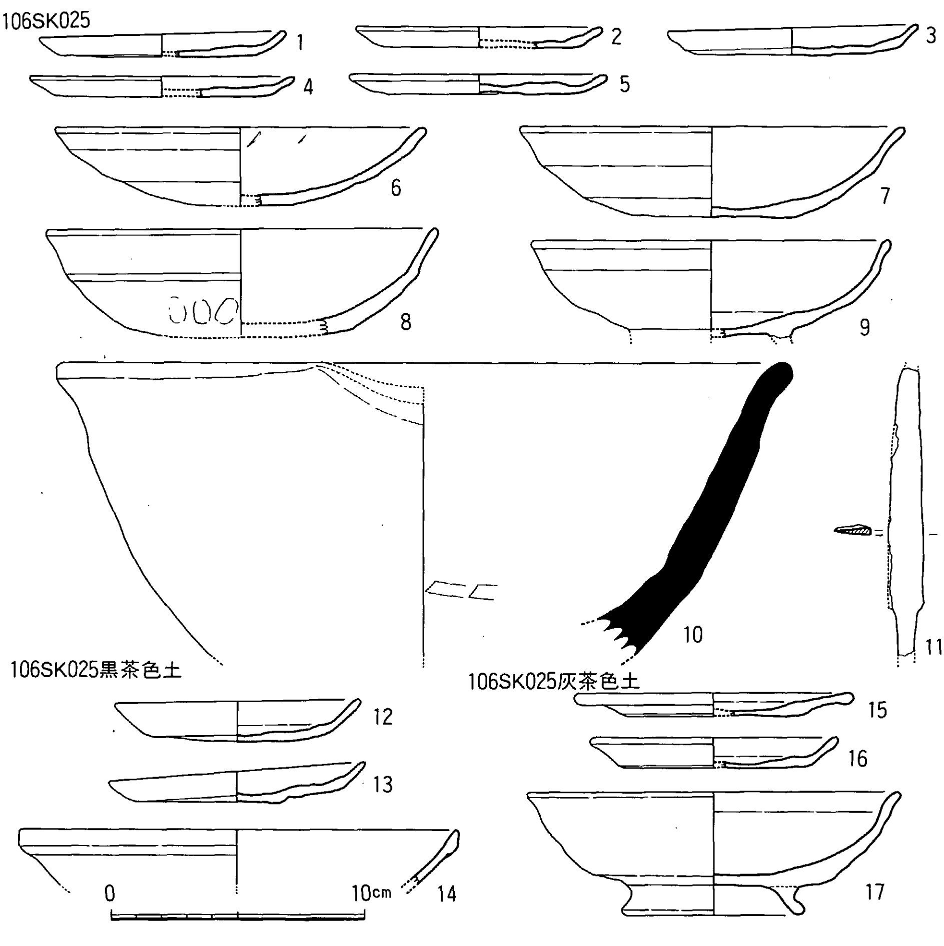


Fig.64 106SK025出土遺物実測図

を行なう。

106SK025 (Fig.64)

須恵器

鉢 (10) 口径29cm前後を測り、青灰色の胎土に多量の砂粒を含む。内面は横方向にナデを行なう。片口と考えられる。

土師器

小皿a (1～5) 口径9.8～10.4cm、器高0.8～1.1cmを測る。底部はすべてヘラ切り。3・5は底部に板状圧痕が残る。

丸底坏a (6～8) 口径14.6～15.4cm。6・8は内面にミガキbを行なう。7は調整不明。

丸底坏c (9) 口径14.2cm。内外面の調整は不明。外面体部下位は押し出しと考えられる。

金属製品

刀子 (11) 残存長11.75cmの鉄製刀子。刃部は先端部を欠く。

106SK025黒茶色土 (Fig.64)

土師器

小皿a (12・13) 口径9.7～10.1cm、器高1.7～1.2cmを測る。いずれも底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

白磁

椀 (14) 口径17.4cm。淡く空色をおびた透明釉が施される。Ⅳ類。

106SK025灰茶色土 (Fig.64)

土師器

小皿a (15・16) 口径9.8・11.0cm、器高0.9・1.2cmを測る。16は底部をヘラ切りする。15は口縁端部内側に浅い沈線を巡らせ小皿a 2の可能性がある。

椀c (17) 口径14.8cm、器高4.9cm、高台径7.2cmを測る。外面は横ナデし、内面にミガキbを施す。

106SK030茶黄色砂 (Fig.65)

須恵器

蓋c 3 (4) 口径16.9cmを測る。天井部はヘラ削りされ、偏平な擬宝珠状のつまみを貼り付ける。

106SK030茶黄色土 (Fig.65)

須恵器

小蓋4 (5) 口径10.8cmを測る。天井部はヘラ切りし口縁端部を丸くおさめる。

蓋c 3 (6～8) 口径は13.4～17.0cmを測る。天井部はいずれもヘラ削りして、偏平なつまみを貼付する。

小坏c (9) 口径10.2cm、器高3.7cm、高台径7.8cm。体部は横ナデし、見込みを不定方向になでる。

106SK010

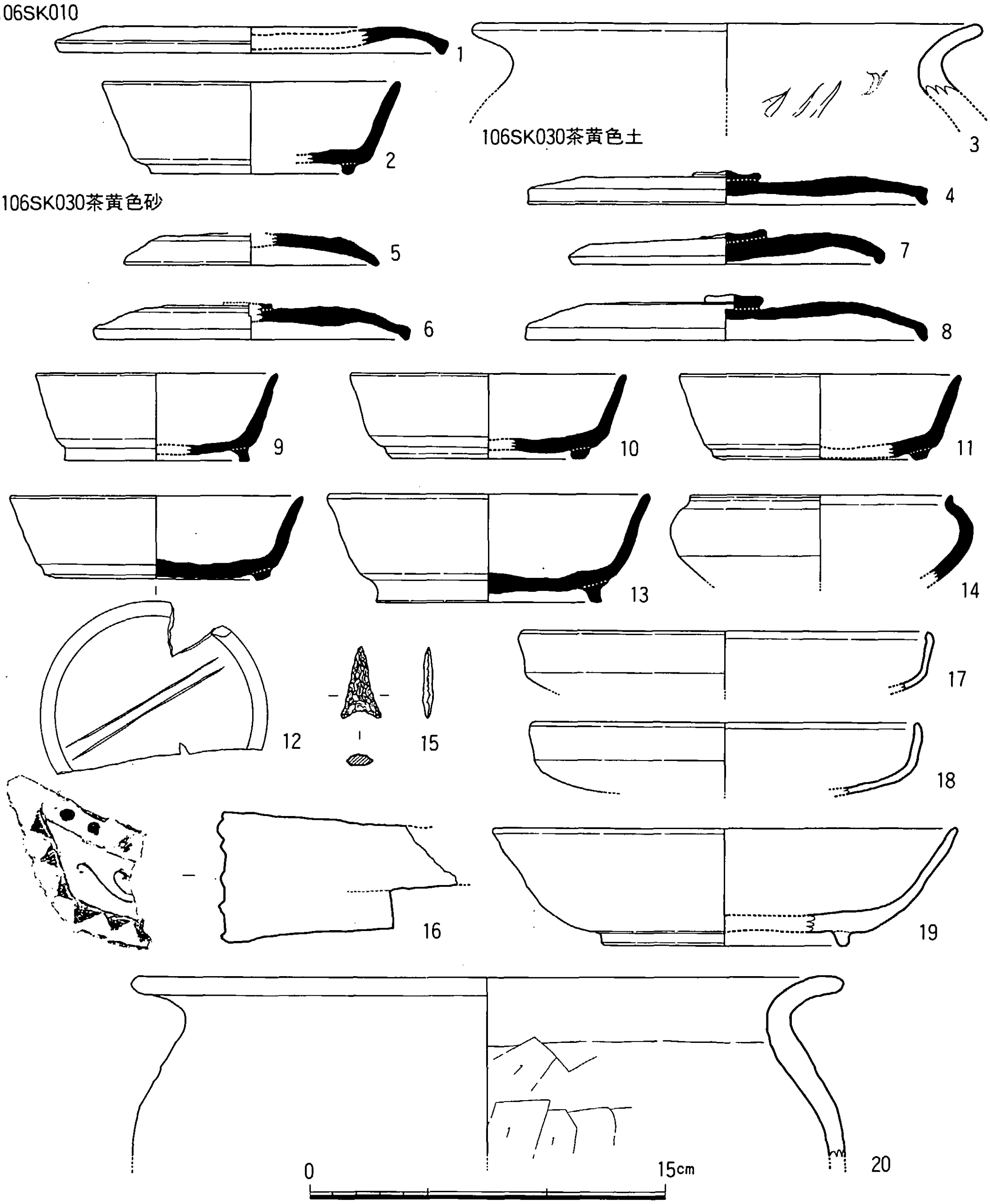


Fig.65　106SK010・030遺構実測図

坏c（10〜13）　口径11.6〜13.6cm、器高3.5〜4.6cm、高台径8.4〜9.6cmを測る。底部はすべてヘラ切りされ、12の底部には２条の平行な沈線を刻む。ヘラ記号とも考えられる。

小壺（14）　口径11.0cmに復原される。胴部外面下半はヘラ削りし、他は横ナデ調整を行なう。青灰色から明灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。

土師器

大坏c（19）　口径19.6cm、器高5.0cm、高台径10.4cmを測る。橙茶灰色を呈し、内外面に磨

きを行なうが単位は不明。

皿b（17・18） 口径16.0～17.0cm前後を測る。17は明灰色、18は黒灰色を呈し、器肉はいずれも薄く仕上げて、口縁端部内側に浅い沈線が巡る。

甕a（20） 口径30.0cm前後に復原される。口縁部は横ナデ、胴部内面は手持ちヘラ削りされる。外面は調整不明。

瓦類

軒平瓦（16） 内区に左方向に流れる偏行唐草文、外区に珠文と凸鋸歯文を巡らせる。焼成良好。

石製品

石鏃（15） 現存長3.1cm、幅1.7cm。材質はサヌカイト。

106SK040（Fig.66）

土師器

坏a（1～10） 口径11.6～12.5cm、器高2.7～3.7cmを測る。茶灰色から灰褐色を呈し、体部が底部からシャープに立ち上がるものと、体部下位に屈曲をもつものとがある。底部はすべてヘラ切りされ板状圧痕が残る。

甕b（11） 口径25.8cm、鍔の直径は31.0cm、器高26.5cmを測る。胴

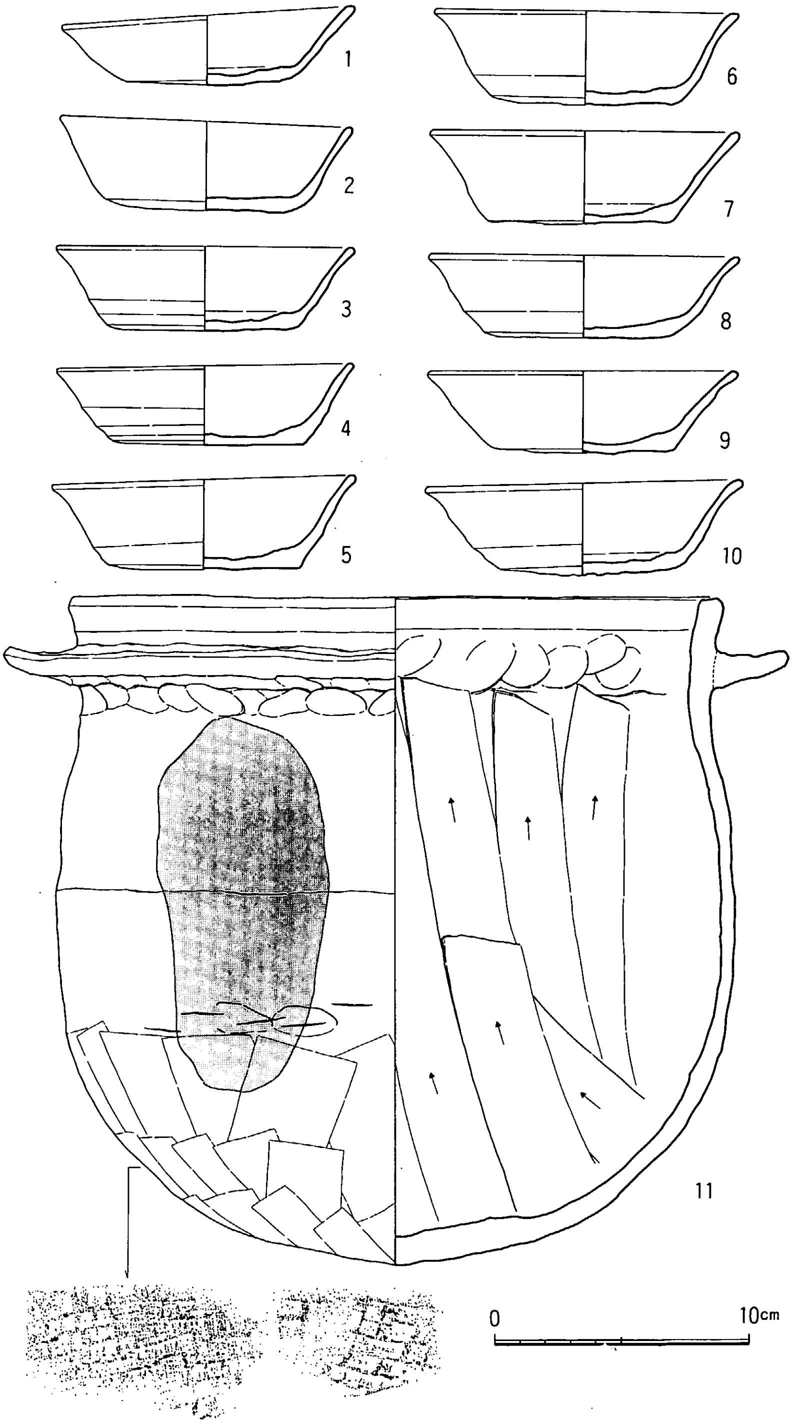


Fig.66 106SK040遺物実測図

部内面は手持ちヘラ削り、外面は下位に格子叩き、中位から口縁部まで横ナデを行ない口縁部は直線的に立ち上がる。鍔は胴部の内側から指を当て貼り付け、鍔の上下の面も指頭圧痕が残る。胴部外面に径13cm～15cmを測る楕円形の黒斑が2箇所残存している。

106SK073 (Fig.67)

土師器

小皿a(2) 口径10.0cm、器高1.0cmを測る。磨耗が著しく調整不明。

大坏a(1) 口径16.0cm、器高5.5cmを測る。体部は直線的に開き、横ナデ調整を行なう。

甕a(3) 胴部内面は斜め方向に手持ちヘラ削り、口縁部内面と胴部外面はハケ調整を行なう。

106SK087 (Fig.67)

須恵器

蓋3(4) 口径14.9cm。天井部はヘラ削りされる。つまみの有無は不明。

皿a(5) 口径は17.0cm前後、器高2.4cmを測る。底部はナデ調整される。

106SK118 (Fig.67)

瓦類

平瓦(6) 凹面に布目圧痕、凸面は斜格子叩きに「佐瓦」の左字を記す。II-7b類。

106SK163 (Fig.67)

土師器

小皿a(7～14) 口径は10.4～11.0cm、器高1.7～2.2cmを測る。体部下位に丸味をもつ。底部はすべてヘラ切り。13は外面の体部から底部にかけて黒色になっている。

椀a(15) 口径14.0cm、器高3.7cm。器面は磨耗しているが横ナデと考えられる。

小椀c(16) 口径9.2cm、器高3.8cmを測り、高台を欠損する。体部下位に丸味をもち、内面は横ナデ調整される。

椀c2(17～20) 口径12.0～14.6cm、18・19は器高4.65・5.9cmを測る。体部下位から中位にかけて丸味をもち、17・20の内面はミガキbを行なう。

106SK166 (Fig.68)

土師器

小皿c(22) 口径12.2cm。高台を欠損する。偏平な皿部に脚が貼付される。

坏a(21) 口径10.5cm、器高2.0cmを測る。底部はヘラ切りと考えられる。

小椀c2(23) 口径11.0cm、器高3.5cm、高台径7.0cmに復原される。体部内外面は横ナデを行ない、口縁端部を外反させる。

106SK167 (Fig.68)

土師器

坏a(24・25) 口径10.2・10.4cm、器高1.9・2.0cmを測る。底部はヘラ切り。

椀a（26・27） 口径12.2・13.0cm。26は内外面横ナデを行ない、体部下位は押し出しと考えられる。27は調整不明。いずれも底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

椀c２（28～30） 28は高台径6.6cm。体部は横ナデ調整。29は口径12.2cmを測り内外面横ナデされ椀aに高台を貼付したもの。30は口径14.2cm、器高6.1cmに復原され、体部中位で屈曲し内外面に横ナデを行なう。

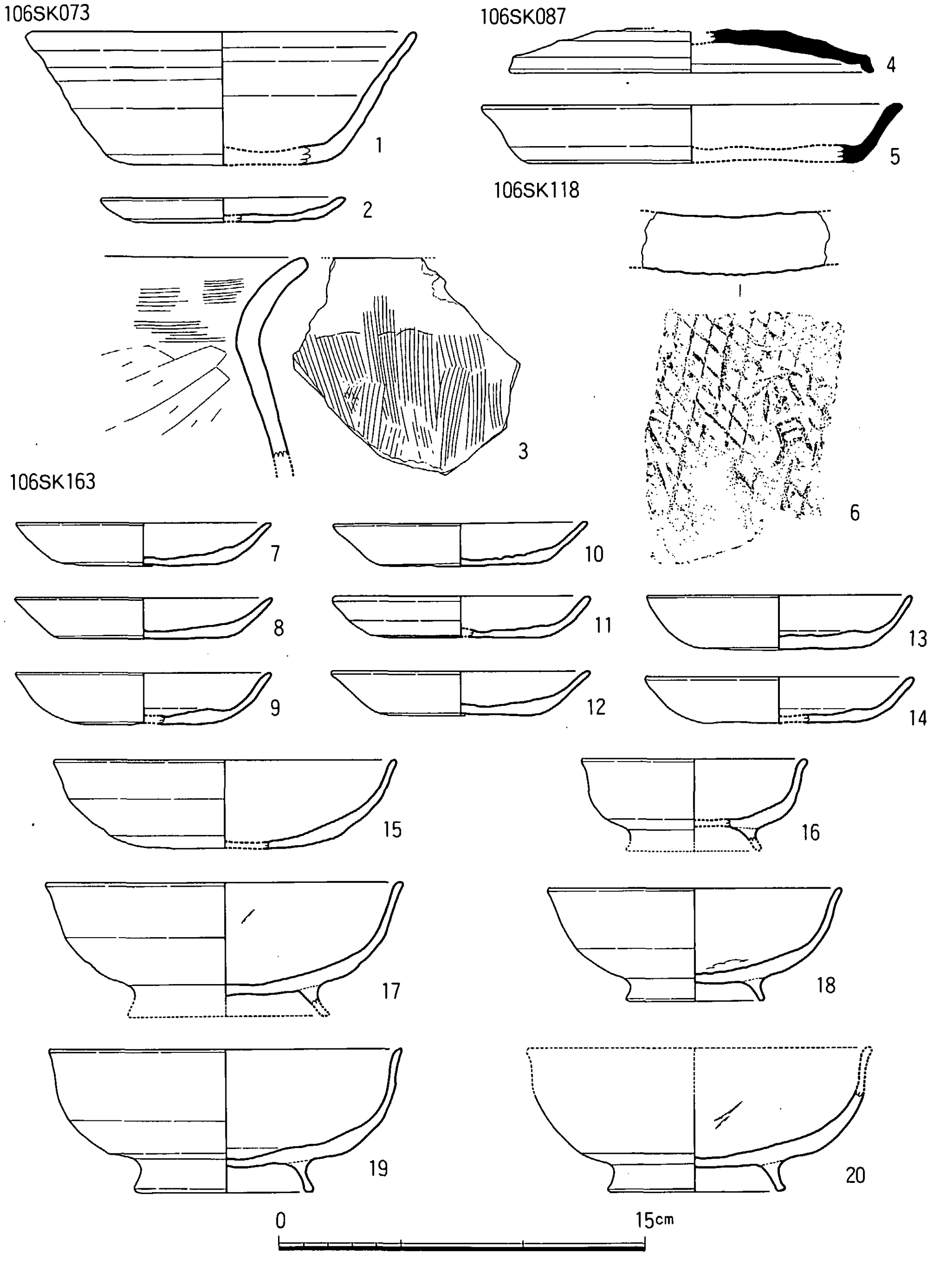


Fig.67 土壙出土遺物実測図(１)

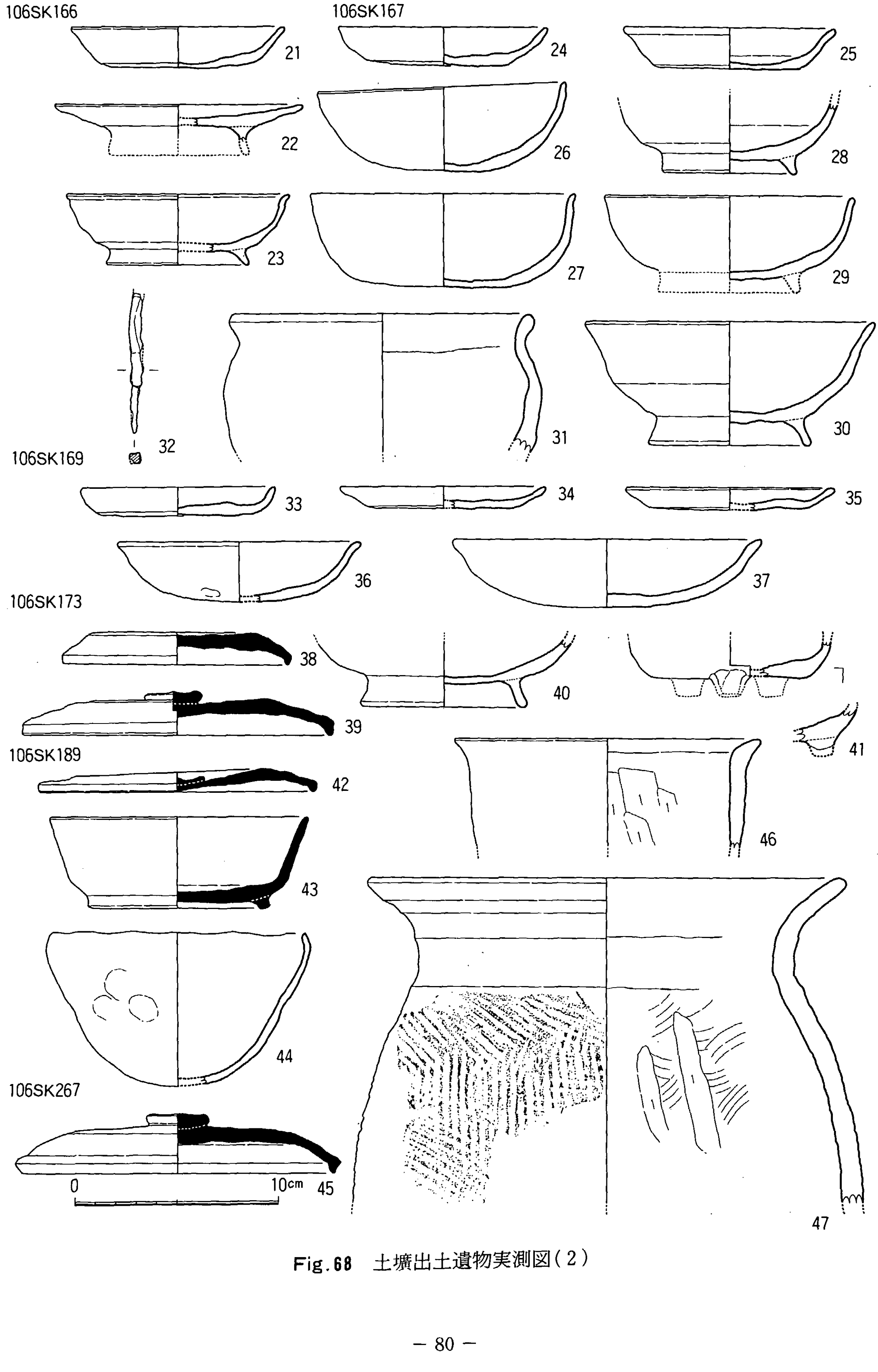


Fig.68　土壙出土遺物実測図(2)

甕（31） 口径15.0cmに復原される。胴部内面はナデ、口縁部は横ナデ調整を行なう。口縁部内面に粘土紐の痕跡が観察される。

金属製品

釘（32） 残存長6.9cm。鉄製の釘で頭部を欠損する。

106SK169（Fig.68）

土師器

小皿a（33～35） 口径は9.6～10.2cm、器高1.1～1.35cmを測る。底部はヘラ切り。33・35は板状圧痕が残る。

丸底坏a（36・37） 口径12.0・15.1cm、器高2.9・3.3cmに復原される。37は内面にミガキbを行なう。

106SK173（Fig.68）

須恵器

小蓋a3（38） 口径11.2cm。天井部はヘラ切り後粗くナデ、口縁端部を断面三角形につくる。

蓋c3（39） 口径15.2cm。天井部はヘラ削り。偏平な擬宝珠状のつまみが貼付される。

土師器

椀c（40） 高台径8.2cm。体部下位で屈曲させ高い高台を貼付する。調整は不明。

脚付坏（41） 坏部底径は7.4cm前後を測り、横ナデ調整を行なう。脚は底部を欠損し正確な形は不明。脚は3足と考えられる。

106SK189（Fig.68）

須恵器

蓋c3（42） 口径13.6cm。天井部はヘラ削りされ偏平なつまみがつく。歪みが大きい。

坏c（43） 口径12.6cm、器高4.5cm、高台径8.8cmを測る。底部はヘラ切り後ナデ調整する。

土師器

焼塩壺（44） 口径12.5cm前後を測り、赤褐色を呈する。外面に指頭圧痕が残り、内面はヘラ削りを行なって、器肉を薄く仕上げている。II-b類。

106SK267（Fig.68）

須恵器

蓋c3（45） 口径15.0cm前後を測る。天井部はヘラ切り後、横ナデを行なう。灰白色を呈し焼成はやや不良。

土師器

小甕（46） 口径14.9cmに復原される。内面は縦方向のヘラ削りを行ない、外面は調整不明。明赤褐色から明褐色を呈す。

甕b（47） 煎熬土器。口径23.4cmに復原される。内面は同心円の当て具痕の上をナデ調整し、外面は平行叩きを行なう。口縁部は横ナデ。

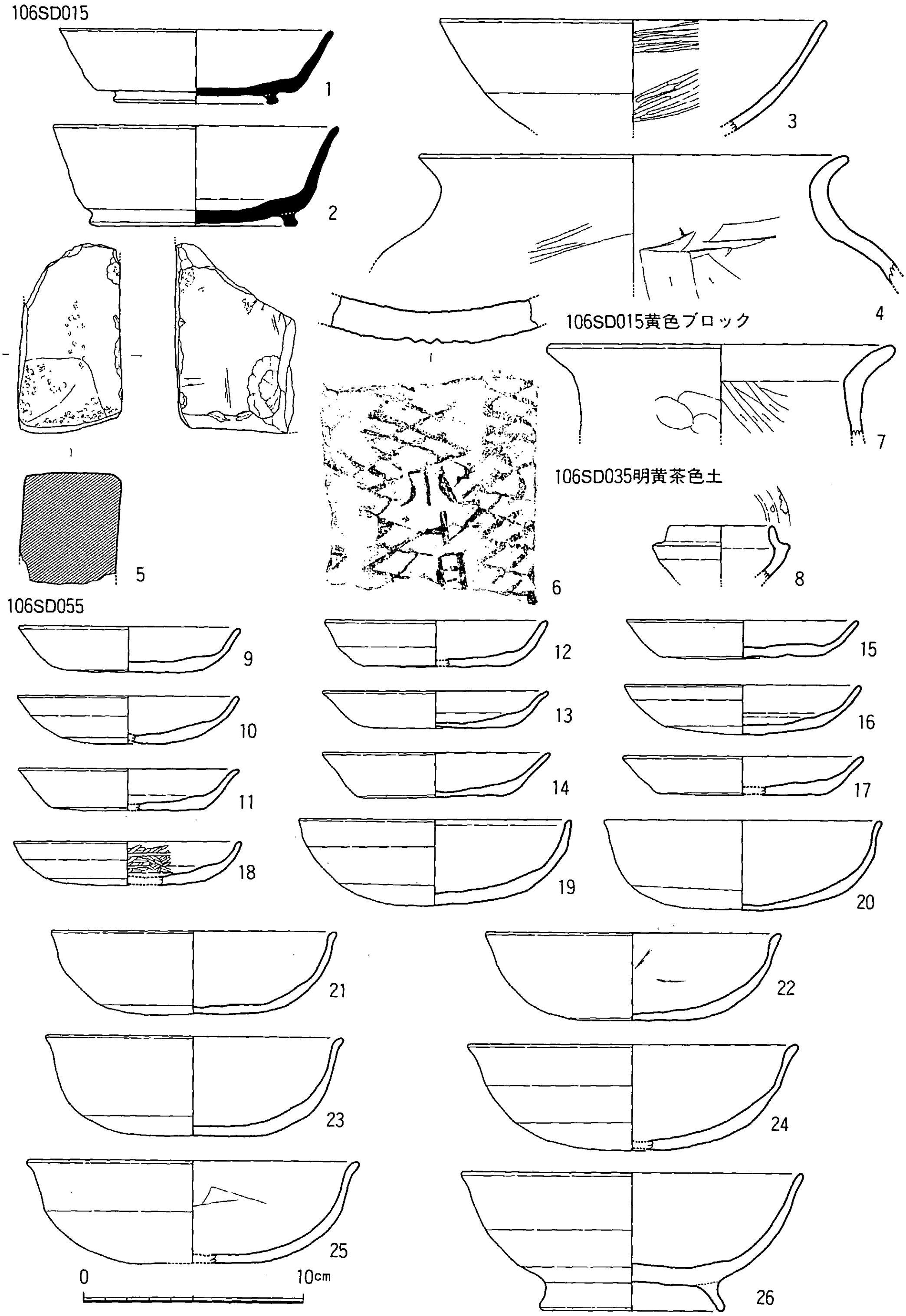


Fig.69 溝出土遺物実測図(1)

溝出土遺物

106SD015（Fig.69）

須恵器

坏c（1・2） 口径12.5・13.0cm、器高3.4・4.6cm、高台径7.5・9.6cmを測る。底部はヘラ切り。焼成良好。

土師器

甕a（4） 口径19.6cmに復原される。内面をヘラ削りし、外面は粗いハケ目が残る。口縁部は横ナデ。

黒色土器

椀c（3） 口径17.6cmに復原される。内面に丁寧なミガキcを施し、外面は体部中位までヘラ削りを行なう。A類。

瓦類

平瓦（6） 凹面に布目痕、凸面には斜格子叩きに「小ト瓦」の左字を記す。青灰色を呈し焼成良好。Ｘ類。

石製品

砥石（5） 残存長8.65×5.5×5.1cm。使用面に敲打痕を残す。砥石ないしは台石と考えられる。材質は細粒砂岩。

106SD015黄色ブロック混入土（Fig.69）

土師器

甕（7） 口径15.0cmに復原される。内面は粗いヘラ削りを行ない、口縁部と胴部外面は横ナデ調整である。内外面とも暗褐色を呈す。

106SD035明黄茶色土（Fig.69）

越州窯系青磁

合子（8） 口径4.7cm、肩部径6.2cmに復原される。明黄茶色味をおびた釉が全面に施され、口縁部から肩にかけて目跡が残る。合子の身部。Ｉ類。

106SD055（Fig.69）

土師器

坏a（9～17） 口径10.1～11.0cm、器高1.7～2.3cmを測る。15・17は底部から体部がシャープに立ち上がり、その他は体部下位に丸味をもつ。底部はすべてヘラ切りされる。

椀a（19～25） 口径12.4～15.0cm、器高3.8～4.9cmを測る。体部下位に丸味をもち、19は直口縁、その他は口縁部がわずかに外反する。22・25は内面にミガキbを施す。

椀c2（26） 口径15.1cm、器高6.3cm、高台径8.4cmを測る。体部は緩いカーブをもって立ち上がる。調整は不明。

黒色土器

小皿a (18) 口径10.4cm、器高2.0cmを測る。内面は丁寧なミガキcを施す。外面も磨耗しているが、ミガキcと考えられる。底部はヘラ切り。B類。

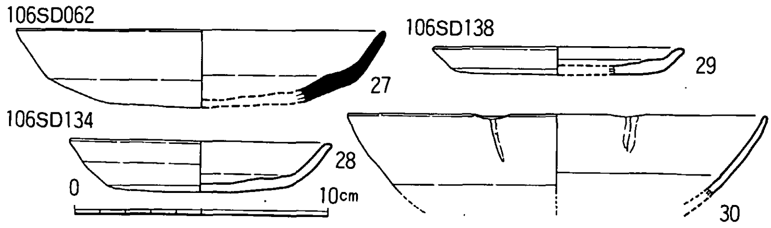


Fig.70 溝出土遺物実測図(2)

106SD062 (Fig.70)

須恵器

皿a (27) 口径14.6cmに復原される。明黄灰色を呈し焼成・還元ともに不良。

106SD134 (Fig.70)

土師器

坏a (28) 口径は10.4cm、器高2.1cmを測る。底部はヘラ切り。

106SD138 (Fig.70)

土師器

小皿a (29) 口径は10.0cm、器高1.1cmを測る。調整不明。

白磁

椀 (30) 口径16.5cm前後を測る。外面にヘラで縦方向の沈線をいれ、口縁を輪花状に刻む。釉は淡い空色をおびた透明釉である。XI-5類。

その他の遺構出土遺物

106SX009 (Fig.71)

黒色土器

椀 (1) 口径14.1cmに復原され、内外面にミガキcを行なう。口縁部は立ち気味で、端部がわずかに外反する。B類

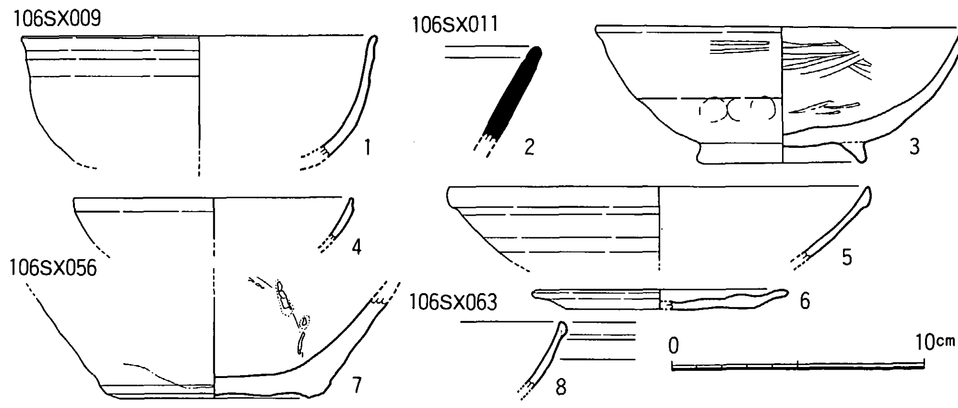


Fig.71 その他の遺構出土遺物実測図(1)

106SX011（Fig.71）

須恵器

椀（2） 体部が直線的に開き、口縁部内側に浅い沈線が巡る。明灰白色を呈し焼成良好。鉢の可能性もある。

黒色土器

椀c2（3） 口径14.9cm、器高5.4cm、高台径6.3cmを測る。内外面にミガキcを行ない、体部外面下位に指頭圧痕が残る。黒褐色を呈し焼成はやや不良である。B類。

越州窯系青磁

坏（4） 口径は11.0cm前後を測り、黄灰色の精選された素地に光沢のある明緑灰色の釉が施される。口縁端部をわずかに内側に引き出す。Ⅰ類。

白磁

椀（5） 口径は16.4cm前後を測る。灰白色の素地に淡い空色をおびた光沢のある釉が施される。Ⅳ類。

106SX050（Fig.72）

土師器

坏a（1～4） 口径10.0～11.2cm、器高1.5～2.3cmを測る。体部下位で屈曲する。底部はすべてヘラ切り。坏aに分類される可能性あり。

小皿a（15～18） 口径11.5～12.4cm、器高2.0～3.4cmを測る。15は高台が貼付されていたと考えられ、16とともに偏平な皿部をもつ。17・18は体部が長く開く。

椀a（19～26） 口径12.4～15.2cm、器高3.4～4.5cmを測る。体部下位に丸味をもち、口縁部がわずかに外反する。21は見込みから体部中位までナデを行ない、26は内面にミガキbを施す。24の外面の一部は黒変している。

椀c2（27～30） 口径14.4～15.8cm、器高5.7～6.2cm、高台径7.8～8.6cmを測る。体部に丸味があり、口縁部を外反させ高い高台を貼付する。27は内面にミガキbを行なう。

黒色土器

椀（31） 口径14.8cmに復原され、内外面にミガキcを施す。口縁部外面まで黒色を呈する。A類。

緑釉陶器

椀（32） 高台径8.8cmに復原される。素地は明赤褐色を呈し、明緑色の光沢のある釉が全面に施される。見込みに浅い段をもち、体部下位を削って高台を貼付する。高台の内側にハリの痕が残っている。土師質である。

灰釉陶器

器種不明（33） 素地は明灰色を呈し、高い高台を貼り付ける。見込み部分が平滑になっている。

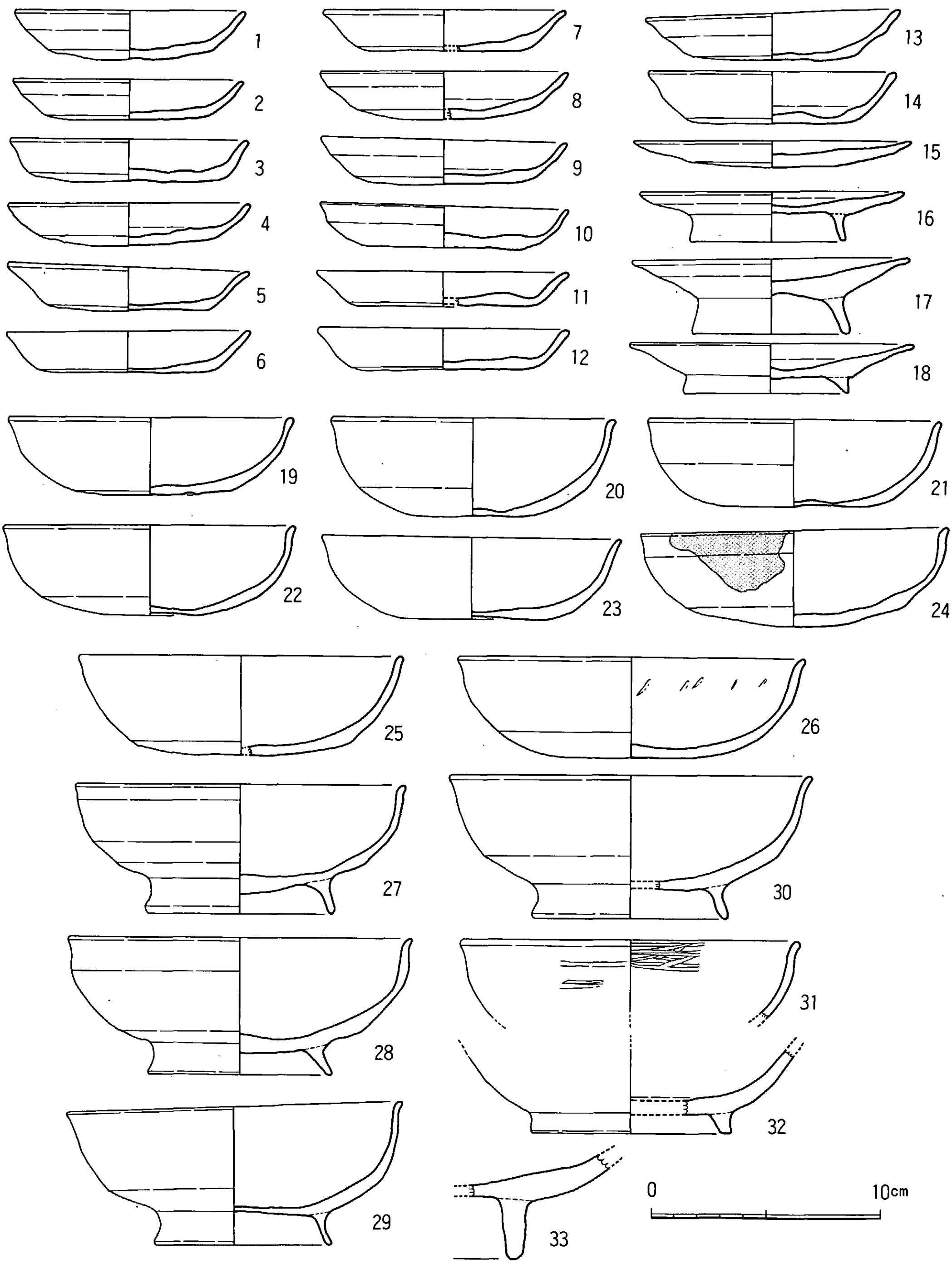


Fig.72　106SX050出土遺物実測図

106SX056 (Fig.71)

土師器

小皿a（6） 口径10.2cm、器高0.8cmを測る。底部は黒色を呈し磨耗が著しく調整は不明。底部はヘラ切りされる。

越州窯系青磁

椀（7） 底径9.2cm前後を測り、底部と体部の境を面取りする。灰色の素地に明緑黄色の釉を体部外面下位まで施す。見込みに白色の目土、面取りされた部位に目跡が残る。Ⅰ-5類。

106SX063 (Fig.71)

白磁

椀（8） 素地は明灰色を呈し、やや青味がかった光沢のある釉が施される。細かい貫入が入っている。口縁部は小さな玉縁をつくる。Ⅱ-1類。

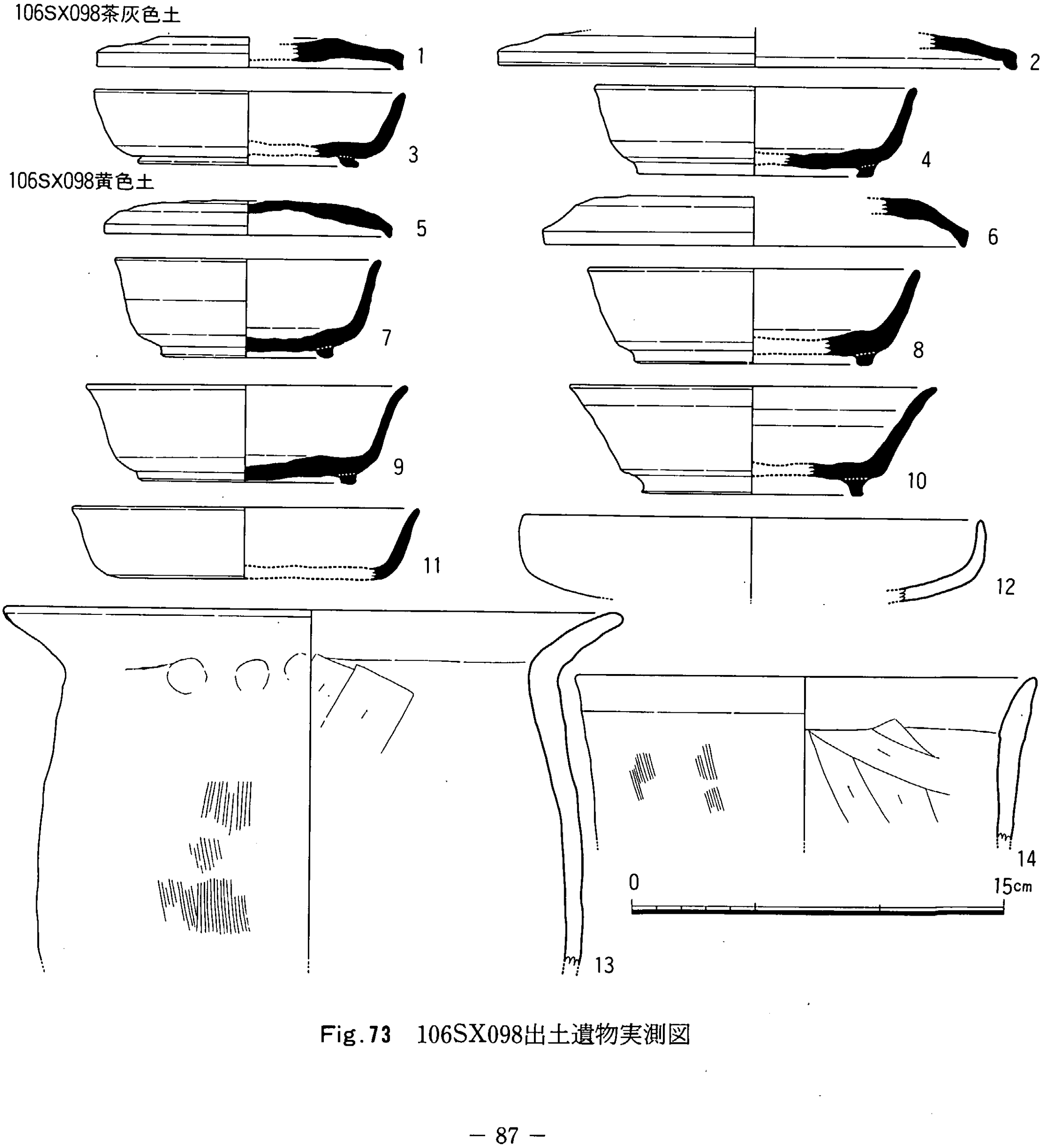


Fig.73 106SX098出土遺物実測図

106SX098茶灰色土（Fig.73）

須恵器

蓋３（１・２） 口径12.4～20.9cmを測る。いずれも天井部はヘラ削りされる。明灰色を呈し焼成良好。

坏c（３・４） 口径12.6・13.0cm、器高3.0・3.6cm、高台径9.0・9.5cmを測る。４は底部をヘラ切りする。

106SX098黄色土（Fig.73）

須恵器

小蓋a３（５） 口径11.6cm。天井部の削りは粗い。内面は平滑になっており転用硯の可能性がある。

蓋３（６） 口径17.2cmに復原される。口縁部は断面三角形を呈す。

坏c（７～10） 口径10.8～14.8cm、器高3.9～4.4cm、高台径7.0～9.6cmを測る。８は茶灰色を呈し還元不良。

皿a（11） 口径14.0cm、器高2.9cmに復原される。青灰色を呈し還元良好。

土師器

皿b（12） 口径18.5cm前後を測る。橙色味をおびた茶灰色を呈し調整は不明。

甕a（13・14） 13は口径25.2cm前後に復原される。胴部内面は手持ちヘラ削り、外面はハケ調整され口縁部は横ナデを行なう。屈曲部に指頭圧痕が残る。14は口径18.0cmに復原され、立ち気味の口縁部の内側にハケ目がつく。胴部の調整は13と同じ。外面は黒色になっている。

106SX103（Fig.74）

土師器

椀c２（９） 高台径7.4cmに復原される。丸味をもった体部に高い高台を貼り付ける。底部に径0.6～0.8cmの孔が推定５～６個穿たれている。

106SX122（Fig.74）

土師器

小皿a（10） 口径9.9cm、器高1.1cm。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

106SX128（Fig.74）

土師器

小皿a（11～15） 口径9.6～10.2cm、器高0.9～1.3cmを測る。底部はすべてヘラ切りされる 。

106SX132（Fig.74）

須恵器

小壺（16） 高台径5.0cmを測る。体部は横ナデ、底部内面は不定方向のナデを行なう。

土師器

小皿a１（17～22・24～26） 口径9.3～10.8cm、器高0.8～1.5cmを測る。底部はすべてヘラ

切りされる。

小皿a 2 (23・27) 口径10.6・11.0cm、器高1.0・0.85cmを測る。口縁部内面に浅い沈線を巡らせる。

小皿c (29) 高台径7.6cmを測る。偏平な皿部の中央に径0.5cmの穿孔がある。

椀a (30) 口径12.4cmに復原される。体部に丸味をもち、口縁部は外反する。調整は不明。

丸底坏a (31・32) 口径15.4・16.0cm、器高4.0・3.9cmを測る。31は内面にミガキbを施す。32は外面に黒色の煤状炭化物が付着する。

丸底坏c (33) 口径15.6cm、器高5.0cm、高台径6.6cmを測る。体部内面はミガキbを行なう。

金属製品

釘 (34) 鉄製で残存長6.0cmを測るが、両端を欠損する。

106SX154 (Fig.74)

金属製品

釘 (35) 鉄製。断面は四角形を呈す。

106SX157 (Fig.74)

瓦類

軒平瓦 (36) 凹面は布目痕をナデ消す。瓦当の文様は内区に偏行唐草文、外区に珠文、凸鋸歯文を巡らす。

106SX159 (Fig.74)

須恵器

蓋c 3 (37) 口径14.5cm。天井部はヘラ削りされる。灰色を呈し焼成は良好。

坏c (38) 口径15.4cm、器高4.1cm、高台径10.6cmを測る。体部は横ナデ、見込みは不定方向のナデを行なう。

106SX164 (Fig.74)

土師器

小皿a (39) 口径10.0cm、器高1.8cmに復原される。底部はヘラ切り。坏aに分類される可能性がある。

灰釉陶器

段皿 (40) 高台径6.2cmに復原される。底部から体部は横ナデを行ない、高台を貼付する。

越州窯系青磁

椀 (41) 高台径5.5cmに復原される。灰色の精選された素地に灰緑色の釉を全面に施し、高台畳付のみ釉をカキ取る。見込みと畳付けに目跡が残る。I-2類。

106SX178 (Fig.75)

土師器

小皿a 1 (42) 口径10.5cm、器高1.3cmを測る。底部はヘラ切りされ板状圧痕が残る。

小皿a 2 （43） 口径10.8cm、器高0.7cmを測る。口縁部の内側に浅い沈線が巡る。底部はヘラ切り。

小皿c（44） 口径11.9cm、器高1.9cm、高台径6.6cm。高台が皿部の中心よりずれて接合される。

丸底坏a（45・46） 口径15.5・16.4cm、器高3.5・3.4cmを測る。いずれも調整は不明。46は口縁部内側に浅い沈線が巡り、体部と口縁部の一部が褐色に焦げる。

椀c（47・48） 口径15.5・16.1cm、器高5.3・6.2cmを測る。47は体部に丁寧な横ナデを行な

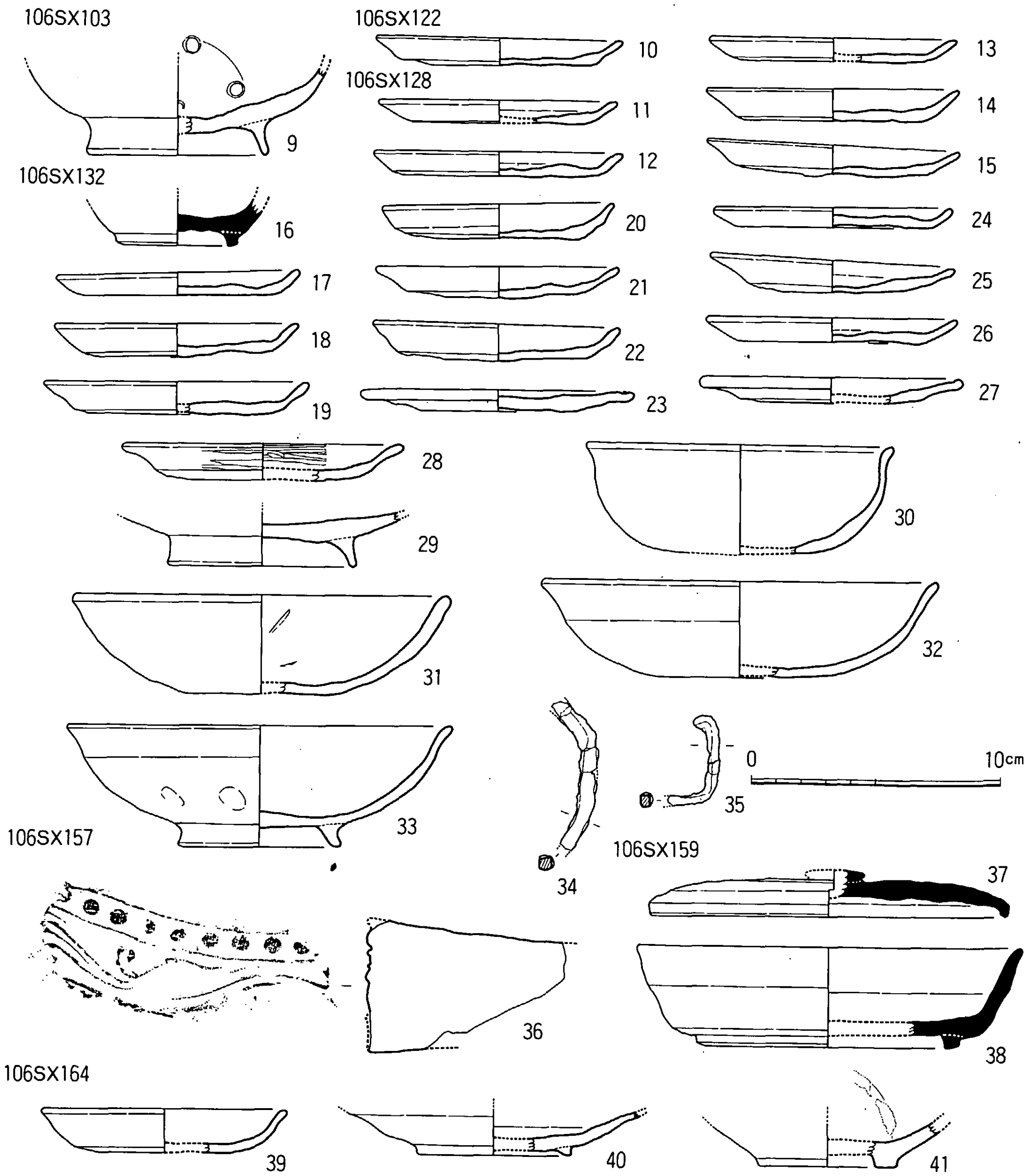


Fig.74 その他の遺構出土遺物実測図(2)

う。48は内面が茶褐色から黒褐色を呈す。調整は不明。

金属製品

釘（49） 残存長7.0cmの鉄釘。両端を欠損する。

106SX184（Fig.75）

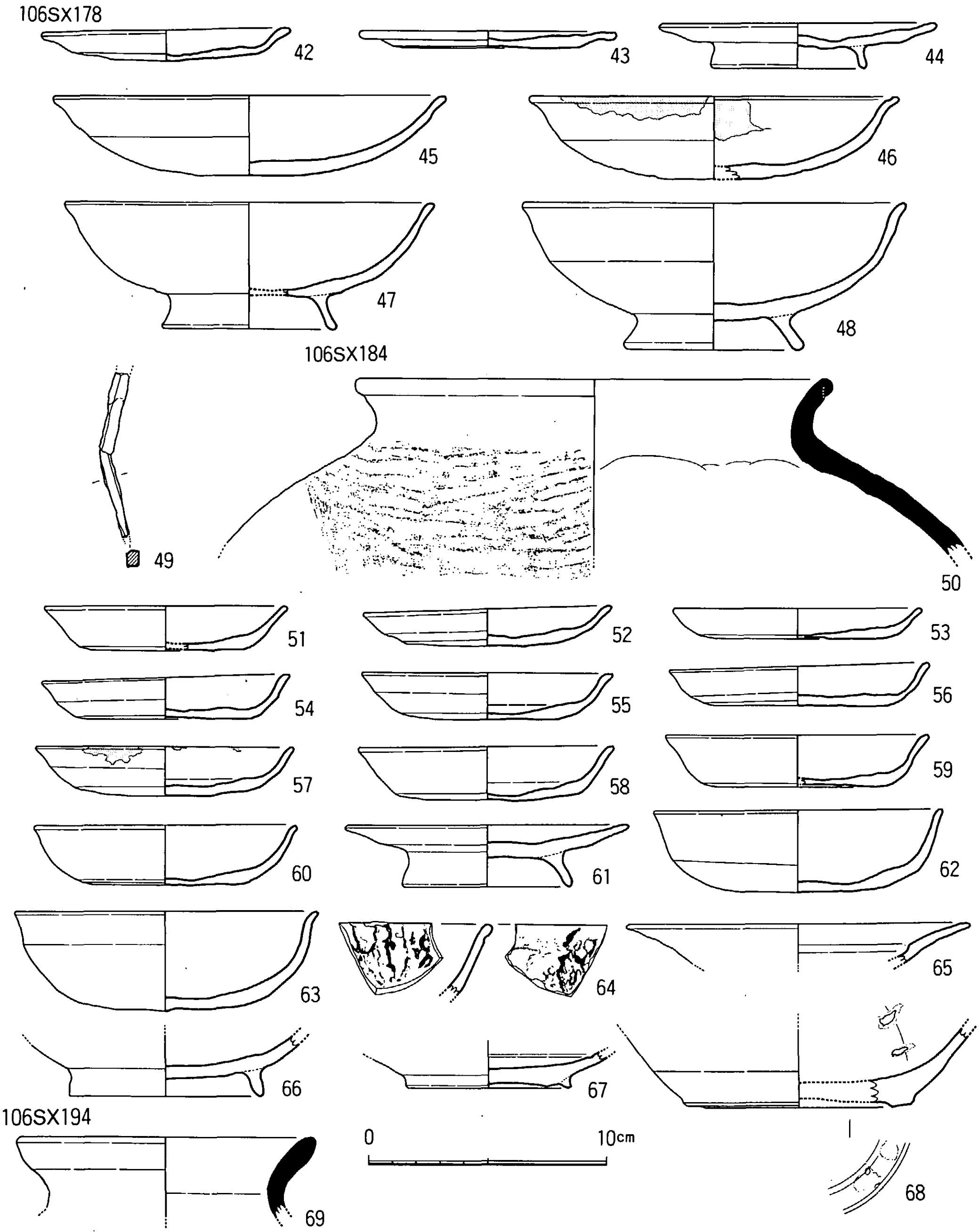


Fig.75 その他の遺構出土遺物実測図（3）

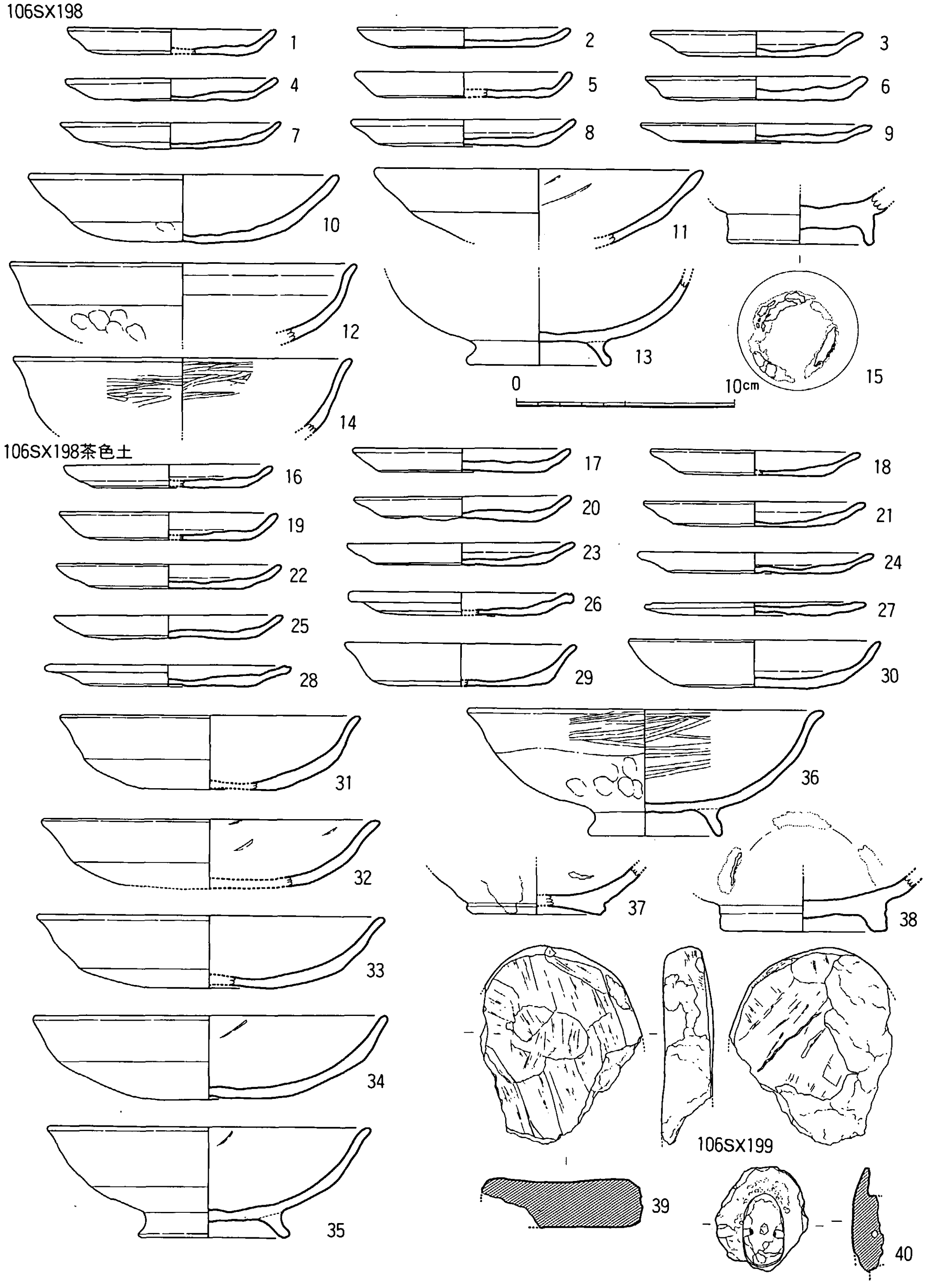


Fig.76　106SX198・199出土遺物実測図

須恵器

甕a（50） 口径20.0cmに復原される。胴部外面は粗い平行叩き、内面は当て具痕をナデ消す。茶褐色を呈し還元不良。

土師器

小皿a 1 （51～60） 口径10.4～11.0cm、器高1.3～2.5cm。底部はすべてヘラ切りされる。57は口縁部に黒色の炭化物が付着し、53は底部中央に径0.5cmの孔があり、焼成後穿たれたと考えられる。58～60は坏aに含めて考えることも可能である。

小皿c（61） 口径11.9cm、器高2.6cm、高台径7.2cmを測る。体部が斜め上方に開く。

椀a（62・63） 口径12.0・12.7cm、器高3.5・4.1cmを測る。丸味をもった体部は横ナデされる。62は口縁部が立ち気味で63は外反する。

緑釉陶器

椀（64） 口縁部をわずかに外反させ丸くおさめる。黄緑色の釉の上から、濃緑色の釉を施す。緑釉緑彩。須恵質である。

段皿（65） 口径は14.4cm前後を測る。明黄緑色の釉は殆ど剥落している。須恵質である。

灰釉陶器

椀（66） 高台径8.2cmを測る。底部と体部外面はヘラ削りし、高台を貼り付ける。見込みに施釉されない部分が円形に残る。重ね焼きの痕と考えられる。

皿（67） 高台径7.0cmを測る。見込みに粘土が残り、重ね焼きの痕が観察される。底部は糸切り。見込みに浅い沈線が巡る。

越州窯系青磁

椀（68） 高台径9.5cm前後を測る。素地は精選され、明るいオリーブ色の釉が全面に掛けられ高台畳付はカキ取る。Ⅰ-2ウ類。

106SX194（Fig.75）

須恵器

壺（69） 口径12.5cm前後を測る。口縁部を外反させて端部まで丸く肥厚させている。明灰色を呈し焼成良好。

106SX198（Fig.76）

土師器

小皿a 1 （1～8） 口径9.6～10.4cm、器高0.9～1.2cmを測る。底部はすべてヘラ切りされる。

小皿a 2 （9） 口径10.6cm、器高0.9cmを測る。不明瞭だが口縁端部の内側に浅い沈線が巡る。底部はヘラ切り。

丸底坏a（10～12） 口径14.4～16.0cmを測る。10は調整不明。11・12は内面にミガキbを施し、12の体部外面には指頭圧痕が多く残る。

椀c（13） 高台径6.6cmを測る。体部は丸味がある。調整は不明。

黒色土器

埦c２（14）　口径15.6cmに復原される。内外面はミガキcが施されている。B類。

高麗青磁

埦（15）　高台径6.8cmを測り、素地は明灰色を呈しキメが粗い。淡い黄緑色を呈する半透明釉が全面に施される。底部外面に焼台の痕が残る。

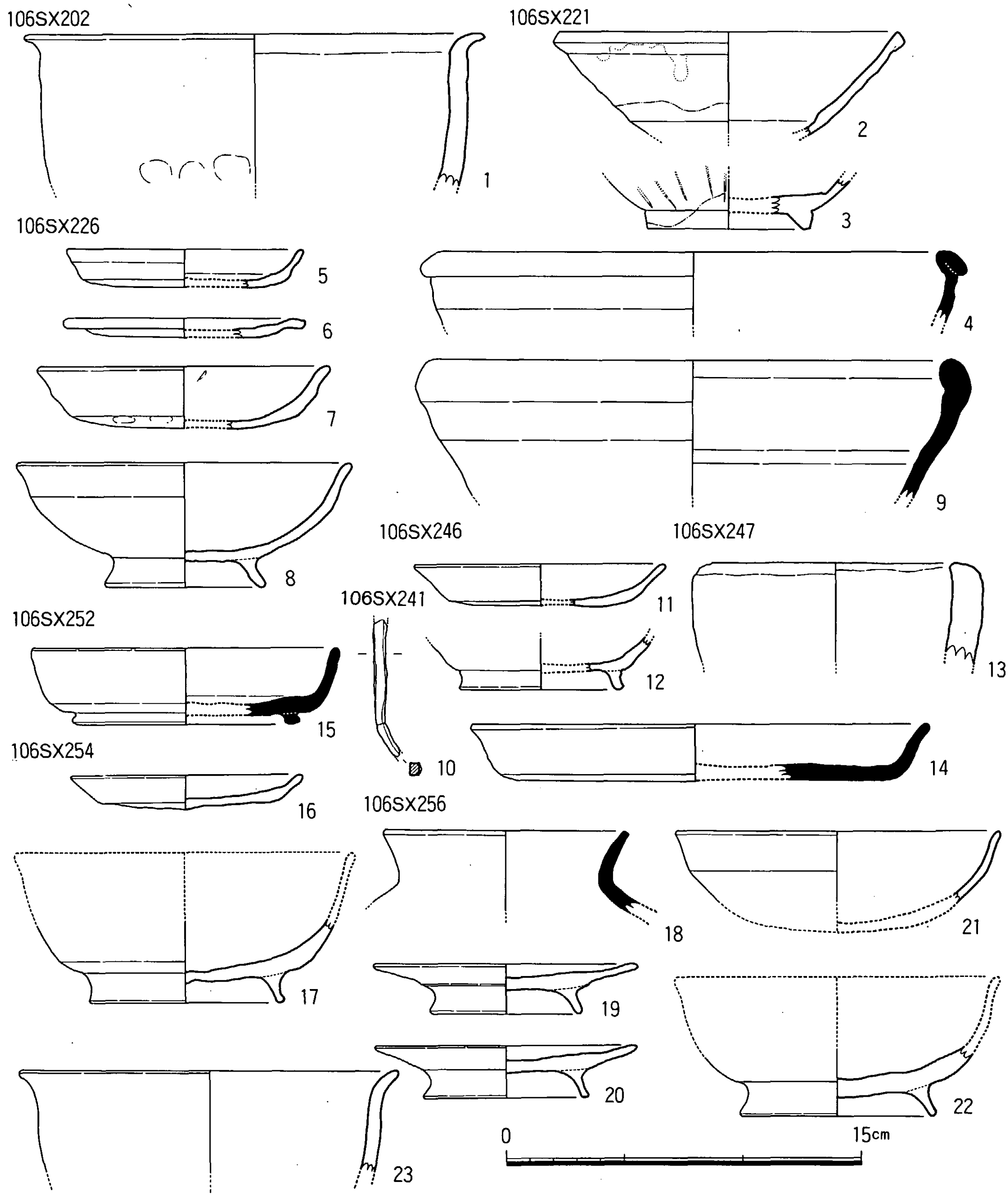


Fig.77　その他の遺構出土遺物実測図(４)

106SX198茶色土（Fig.76）

土師器

小皿a 1（16～25） 口径9.6～10.6cm、器高1.0～1.3cmを測る。底部はすべてヘラ切りされる。

小皿a 2（26～28） 口径10.2～11.4cm、器高0.6～1.1cmを測る。口縁端部の内側に浅い沈線が巡る。27は底部と体部の境が殆どなく偏平になっている。

坏a（29・30） 口径10.6・11.6cm、器高2.0・2.2cmに復原される。30は体部下位に丸味がある。いずれも底部はヘラ切り。

丸底坏a（31～34） 口径13.8～16.4cm、器高3.1～3.8cmを測る。32～34は内面にミガキbを行なう。押し出しの部分は、33・34は指頭圧痕が残り31・32は丁寧になでられる。

丸底坏c（35） 口径14.9cm、器高5.1cm、高台径7.1cmを測る。内面にミガキbを行ない、外面は丁寧に押し出して緩く丸味をつける。

黒色土器

椀c（36） 口径16.4cm、器高5.8cm、高台径6.2cmを測る。内外面にミガキcを行ない、外面は体部下位に乱雑な指頭圧痕が残る。高台は中心よりずれて貼付されている。内面は漆黒色を呈するが、外面は黒灰色から茶灰色になっている。B類。

越州窯系青磁

椀（37） 円盤状の高台は直径6.4cmに復原される。灰色の素地に黒色の細粒を含み、茶黄色の釉が内面に施される。外面は露胎。見込みに白色の目土が残る。II-2類。

高麗青磁

椀（38） 高台径7.6cmを測り、高台の削り出しは粗雑である。素地は灰色を呈し精選され青味がかった釉を全面に施した後、畳付けの釉をカキ取る。見込みと畳付け部に5個の目跡がつく。

石製品

器種不明（39） 滑石製で形態は円盤状である。残存長9.1×7.5×2.3cm。

106SX199（Fig.76）

石製品

器種不明（40） 滑石製で、残存長4.8cm、幅4.3cm、厚さ1.4cm。片面を長円形に0.8cmほど削り出し、つまみ状に作る。その側面には径0.2cmほどの穴が貫通しており、内部に鉄心が残存している。用途としては、石鍋の補塡材として使用した例があり参考になる（宮崎県教育委員会、1995）。

106SX202（Fig.77）

土師器

甕（1） 口径19.4cmに復原される。口縁部は横ナデされ、胴部は調整不明だが外面に指頭圧痕が残る。

106SX221（Fig.77）

須恵器

鉢（4） 口径23.0cm前後を測る。口縁端部を外側に折って玉縁状につくる。篠窯系。

白磁

椀（2・3） 2は口径14.8cmに復原される。素地は灰白色を呈しやや粗く、淡く空色をおびた透明釉が外面の体部中位まで施される。Ⅳ-1b類。3は高台径7.0cmに復原され、外面に蓮弁を陽刻する。素地はわずかに灰色味をおびた白色を呈し、精選されている。Ⅺ-4類。

106SX226 (Fig.77)

須恵器

鉢（9） 口径23.4cm前後を測る。口縁部は玉縁をつくる。口縁部外面は黒灰色を呈し瓦質になっている。篠窯系。

土師器

小皿a1（5）．口径10.0cm、器高1.6cm。底部はナデ調整される。

小皿a2（6） 口径10.2cm、器高0.8cmを測る。磨耗しているが、口縁部内側に浅い沈線が巡る。底部はヘラ切り。

丸底坏a（7） 口径12.4cm、器高2.6cm。内面にミガキbを行ない、押し出しが不十分だが底部に指頭圧痕が残る。

椀c（8） 口径14.2cm、器高5.3cm、高台径6.8cmを測る。調整は不明。

106SX241 (Fig.77)

金属製品

釘（10） 残存長5.8cm。鉄釘で両端を欠損する。

106SX246 (Fig.77)

土師器

小皿a1（11） 口径10.6cm、器高1.8cmに復原される。底部はヘラ切り。

緑釉陶器

椀（12） 高台径6.8cm前後を測る。体部は横ナデして高台を貼り付け、淡い黄緑色の釉が全面に施されている。土師質である。

106SX247 (Fig.77)

須恵器

皿a（14） 口径18.8cm、器高2.4cmを測り、底部はヘラ削りされる。口縁部と内面の一部が黒色になっている。

土師器

焼塩壺（13） 口径は12cm前後を測り、明赤褐色を呈する。内面に粗い布目痕が残る。II類と考えられる。

106SX252 (Fig.77)

須恵器

坏c（15） 口径13.0cm、器高3.3cm、高台径9.6cmに復原される。焼成・還元ともに良好。

106SX254（Fig.77）

土師器

小皿a 1（16） 口径9.8cm、器高1.4cmを測る。底部はヘラ切り。

椀c（17） 高台径8.2cmを測り、体部下位で屈曲する。調整は不明。

106SX256（Fig.77）

須恵器

甕（18） 口径10.3cmに復原される。胴部から口縁にかけて横ナデし、口縁部を外反させる。

土師器

小皿c（19・20） 口径11.1・11.2cm、器高2.2・2.1cmを測る。いずれも偏平な皿部に高台を貼り付ける。底部はヘラ切り。

椀（21） 口径13.6cmに復原され、体部は丸味をもつ。淡赤褐色から黒灰色を呈す。調整は不明。

椀c（22） 高台径8.2cm。体部下位で屈曲する。調整は不明。

甕（23） 口径16.0cm前後を測る。内面は明褐色、外面は赤褐色を呈す。調整は不明。

106SX259（Fig.78）

土師器

小皿c（24） 口径11.2cm、器高1.9cmを測る。偏平な皿部に高台を貼り付ける。底部はヘラ切り。

甕（25） 口縁部のみの破片。横ナデされる。内側に黒褐色の煤が付着する。

106SX262（Fig.78）

土師器

坏a（26） 口径11.7cm、器高3.9cmに復原される。橙茶灰色を呈し、内外面は平滑で磨きが施されていたと考えられる。

106SX266（Fig.78）

緑釉陶器

椀（27） 高台径7.6cmに復原される。淡黄緑色の釉が全面に施される。土師質である。

106SX268（Fig.78）

土師器

小皿a 2（28） 口径12.0cm、器高0.9cmを測る。口縁部内側に明瞭な沈線を巡らせる。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

106SX273（Fig.78）

須恵器

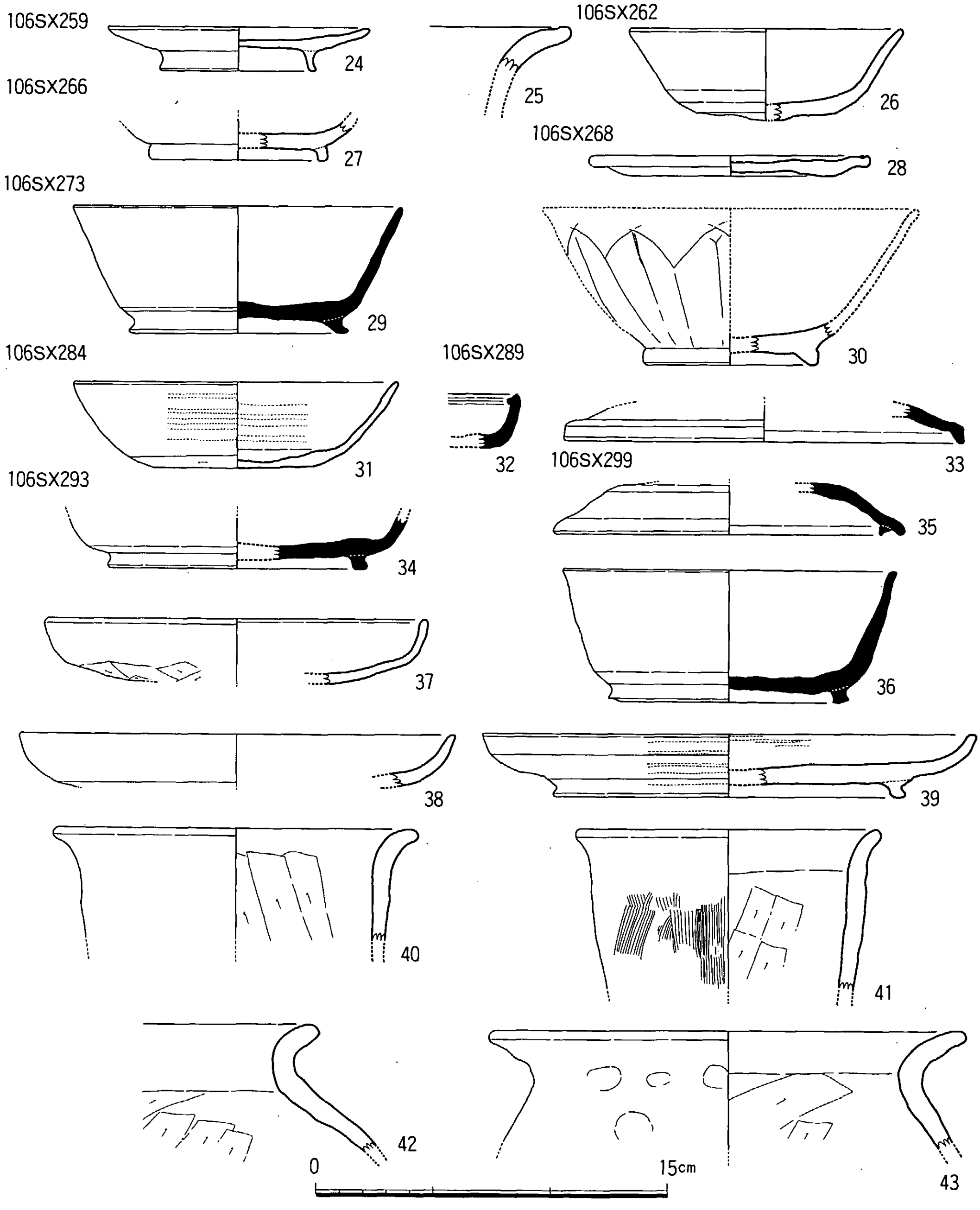


Fig.78 その他の遺構出土遺物実測図(5)

坏c (29) 口径14.1cm、器高5.5cm、高台径9.4cmを測る。体部は直線的に開き底部はヘラ切り後ナデ調整を行なう。

白磁

椀 (30) 高台径7.4cmに復原される。素地は乳白色を呈し、わずかに黄色味をおびた半透明釉が高台まで施される。体部は陽刻の蓮弁を削り出す。Ⅺ-4類。

106SX284（Fig.78）

土師器

坏d（31） 口径13.9cm、器高3.7cm、底径6.8cmを測る。橙茶灰色を呈し、底部から体部下位までヘラ削りし、体部内外面にミガキaを行なう。

106SX289（Fig.78）

須恵器

蓋３（33） 口径17.0cmに復原され、端部は断面三角形をつくる。

皿a（32） 明灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。底部はヘラ削りされる。

106SX293（Fig.78）

須恵器

大坏c（34） 高台径11.1cmに復原される。明灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。見込みは平滑で転用硯と考えられる。

106SX299（Fig.78）

須恵器

蓋１（35） 口径15.0cm。天井部はヘラ削りされ、口縁部に断面三角形のかえりを貼り付ける。

坏c（36） 口径14.2cm、器高5.7cm、高台径10.25cmを測る。体部は直線的に開き、底部はヘラ切り後ナデ調整する。

土師器

皿b（37） 口径16.4cm前後を測る。体部は横ナデし、底部は手持ちヘラ削りを行なう。器肉は薄く仕上げられる。

皿（38） 口径16.8cmに復原される。橙茶灰色を呈し、体部外面にミガキａと考えられる痕跡が残る。

皿c（39） 口径21.0cm、器高2.7cm、高台径15.0cmを測る。橙茶灰色を呈し、底部と体部下半はヘラ削り、内外面にはミガキaを行なう。

小甕（40・41） それぞれ口径15.6・13.0cmを測る。40は胴部内面を縦方向にヘラ削りし、41は外面にハケ調整、内面はヘラ削りを行なう。いずれも赤褐色を呈し、胴部と口縁部の境は明瞭な稜をなさない。

甕（42・43） 42は口縁部を丸く外側へ屈曲させ横ナデを行なう。43は口径20.3cm前後を測り、胴部内面を斜め方向にヘラ削りし、外面の屈曲部に指頭圧痕が残る。

茶褐色土出土遺物（Fig.79・80）

須恵器

円面硯（１） 圏台肩部径12.8cmに復原される。外堤と凸帯を肩部に貼り付け、圏台は長方形の透かしを入れる。Ⅰ-Cbハ類。

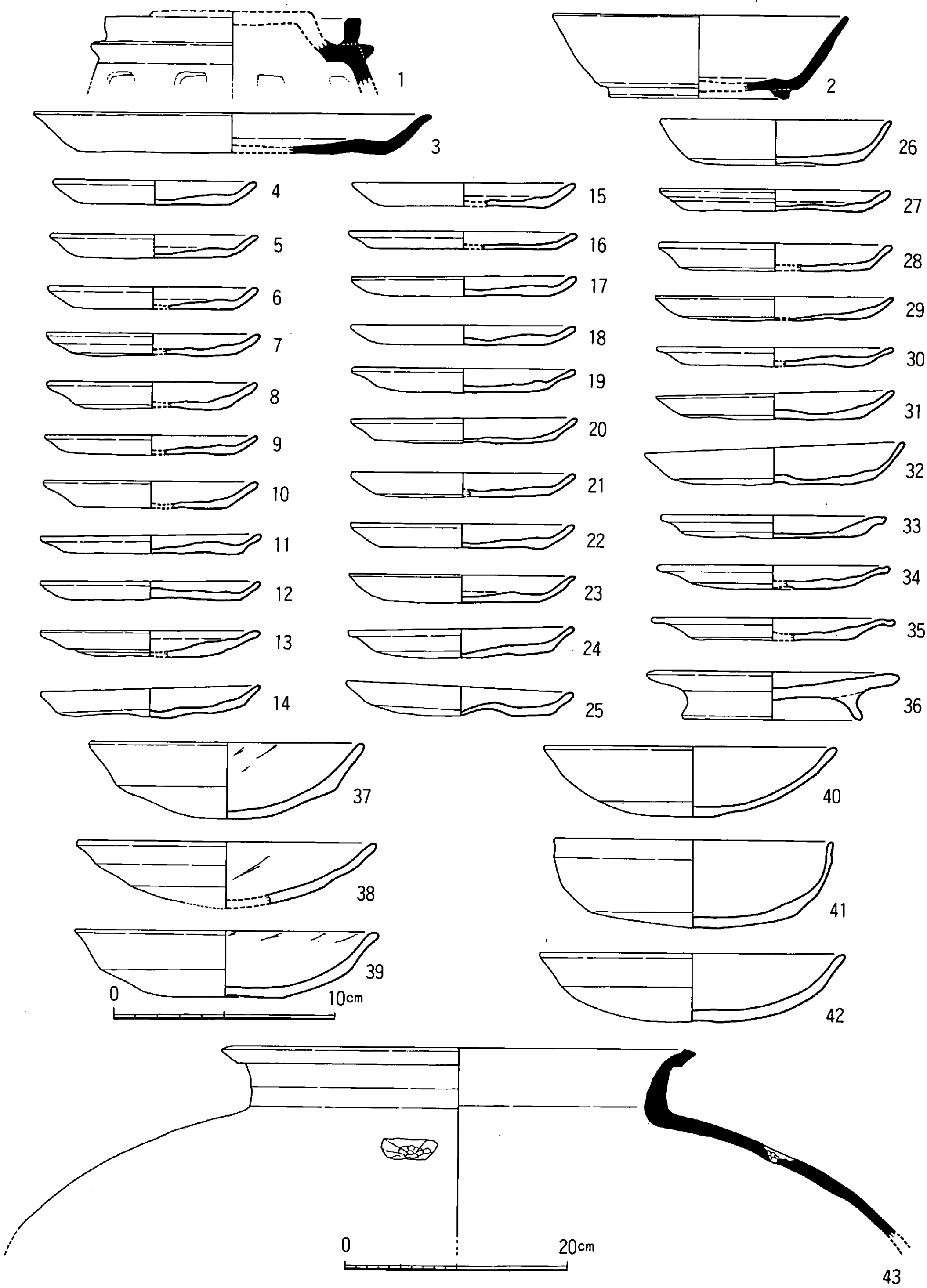


Fig.79　茶褐色土出土遺物実測図(1)

坏c（2） 口径13.4cm前後、器高3.8cm、高台径8.2cm前後を測る。体部は直線的に開き、見込みが平滑になっている。転用硯と考えられる。

皿a（3） 口径18.0cm、器高1.8cmに復原される。底部はヘラ切り。体部内面に黒褐色の煤が付着する。

大甕b（43） 口径40.8cmに復原され、灰色を呈し焼成・還元ともに良好。胴部外面は格子叩きの上から粗いハケ調整を行ない、内面は口縁の屈曲部まで同心円の当て具痕が残る。胴部上位に径1cm程の孔があり、孔を中心にして放射状に割れる。

土師器

小皿a1（4～32） 口径9.2～10.8cm、器高0.8～1.4cmを測る。底部はヘラ切りされる。29は底部中央が穿孔されている。26・32はそれぞれ口径10.4～11.7cm、器高2.0・1.7cmを測り、坏aに分類される可能性もある。

小皿a2（33・34） 口径10.2・11.0cm、器高1.0・1.1cm測る。口縁部内側に沈線が巡る。底部はヘラ切り。

小皿c（36） 口径11.4cm、器高2.2cm、高台径8.2cm。橙褐色を呈し、皿部は偏平になっている。

椀a（41） 口径12.6cm、器高4.0cmを測る。体部下位に丸味をもち、口縁部は直線的に立ち上がる。底部はヘラ切り。

丸底坏a（37～40・42・44～51） 口径12.4～15.8cm、器高3.0～4.0cmに復原される。40・42・46は調整不明だが、その他は内面にミガキｂを行なう。

椀c2（52） 口径14.6cmに復原される。体部は緩い丸味をもって内外面は横ナデを行なう。

小甕b（53） 口径17.0cmに復原される。胴部外面と口縁部は横ナデ調整。外面に叩き痕が残り、黒色の煤が付着する。

小壺（54） 口縁端部と体部下位は欠損するが、最大径は6.2cmを測る。体部から口縁までナデ調整される。内面に強くなでた痕跡が残る。

黒色土器

蓋（55） 口縁端部を丸くおさめ、内外面に細いミガキｃを丁寧に行なっている。B類。

小皿c（56） 口径10.9cm、器高2.4cm、高台径8.0cmに復原される。口縁を直線的に引き上げ全面にミガキｃを施す。B類。

緑釉陶器

段皿（57） 口径12.5cm、器高2.6cm、高台径6.9cmを測る。体部は横ナデ、底部はヘラ削りして高台を貼付する。高台の内側に3箇所ハリの痕が残る。土師質である。

越州窯系青磁

椀（58・59） 58は高台径6.5cmを測る。蛇の目高台で、全面施釉後、高台畳付のみカキ取る。釉は発色が悪く黄白色を呈する。Ⅰ-1類。59は高台径6.8cmを測る。素地は灰色を呈し精選されている。やや青味を帯びた釉が全面に施され、底部に白色の目土が残る。高台の成形技法は

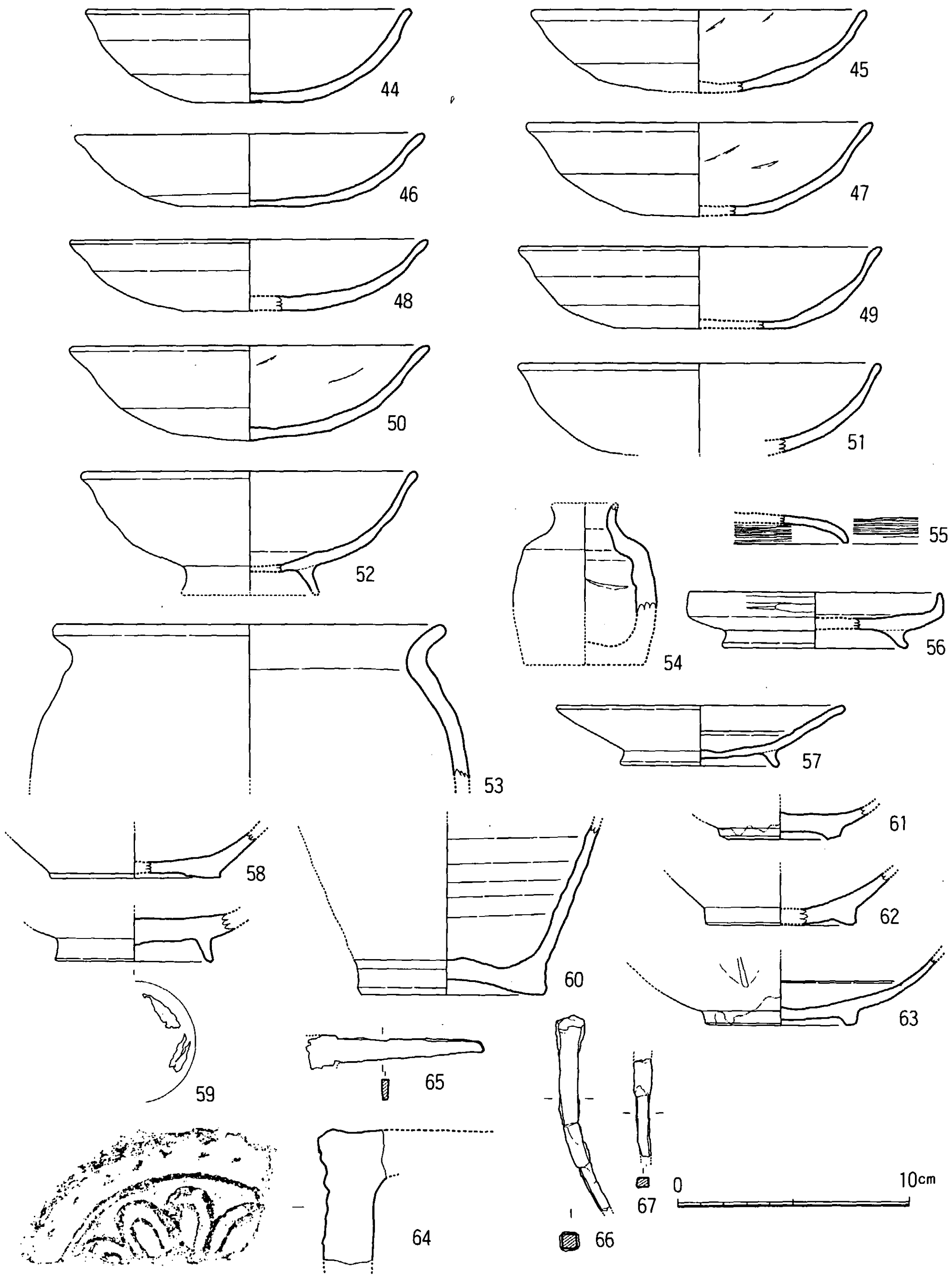


Fig.80　茶褐色土出土遺物実測図(2)

不明。III－1類。

壺（60） 底部径7.6cm。胴部外面は削り、内面は横ナデされる。淡黄灰色の釉が底部外面際までかかる。壺ないしは水注。Ｉ類。

白磁

椀（62） 高台径6.5cmを測る。高台を浅く削り出し内面に淡い黄白色の半透明釉が施される。IV類。

皿（61・63） 61は高台径5.2cm。やや空色をおびた透明釉が外面の体部下位まで施される。II類。63は大皿で高台径6.6cm。淡い空色をおびた透明釉が外面の体部下位まで施される。底部に焼き台の痕跡が残る。XI類。

瓦類

軒丸瓦（64） 内区は単弁で、外区に珠文が巡る。焼成は不良。

金属製品

刀子（65） 鉄製。中子とわずかに刃部が残る。残存長7.7×1.5×0.3cm。

釘（66・67） 鉄製釘。66は残存長8.5cm。67は両端を欠損する。いずれも断面は四角形。

黄色土出土遺物（Fig.81）

須恵器

蓋c1（1） 口径13.9cm、器高2.3cmを測る。天井部をヘラ削りし、偏平な擬宝珠状のつまみと断面三角形のかえりを貼付する。焼成・還元ともに良好。

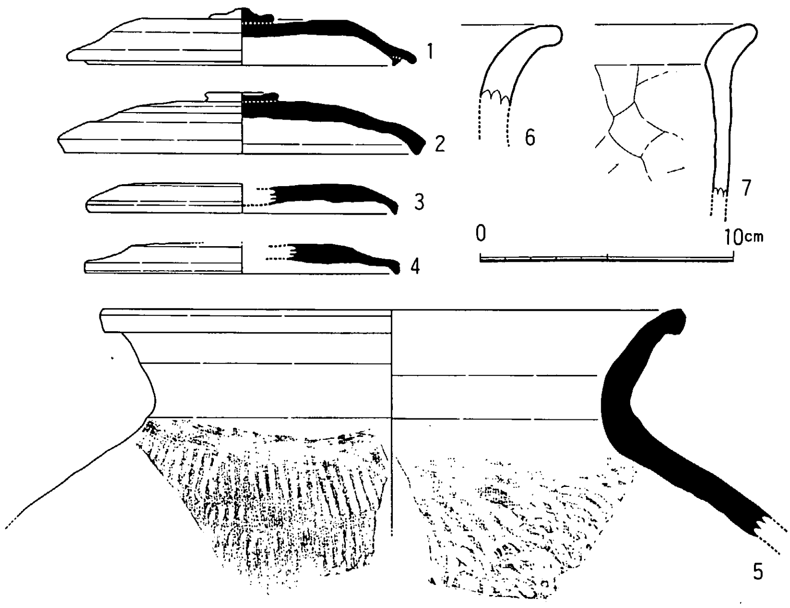


Fig.81 黄色土出土遺物実測図

蓋c3（2） 口径14.6cm。天井部はヘラ削りされ、口縁端部を断面三角形につくる。

蓋3（3・4） 口径12.5・12.4cmに復原される。3は天井部の削りが粗雑である。4はヘラ切り後ナデ調整する。いずれも口縁端部を三角形につくる。

甕a（5） 口径23.1cmに復原される。胴部外面に平行叩きを行い、内面に同心円の当て具痕が残る。暗赤褐色を呈する。

土師器

甕（6・7） 6は橙茶灰色を呈し、横ナデ調整。7は胴部内面を手持ちヘラ削りし、外面は調整不明。 （森田レイ子）

5）小結

今次調査の成果をまとめると、以下のようになる。

・出土遺物から、各遺構検出面の形成時期は、I面が平安時代中期を中心とする時期に、II面は奈良時代末から平安時代初期を中心とする時期と考えられる。

・調査区全面に掘立柱建物や柵等宅地を想定させ得る遺構群が展開していることから、居住空間としての土地利用がなされていたと考えられる。

・I面に検出した建物群は、建物の建造方向からみてほぼ南北方向のものと、N-5°-E前後のものがあり2方向がうかがえること、ならびに建物許容空間から2時期の建築時期が考えられる。なお時間軸上での位置づけは、柱穴からの出土遺物から両者とも平安時代中期に入ると考えられるが、共時性に関しては、柱穴の切り合い関係が認められなかったことから、今次調査では判断できなかった。

・II面には調査区中央に道路106SF100を検出し、政庁中軸線から西方へ約610mの位置にある。

・II面には道路遺構をはさんで建物を2棟検出したのみであったことから、居住空間（人々の生活に密着した空間を指す）としての別は不明であるが、少なくとも何らかの宅地（倉庫・工房等を含めた空間を指す）としての土地利用は想定できよう。

・調査区全体に黄色の基盤粘質土層が広がっていることから、極めて安定した地盤が展開している。

当該調査区から特筆すべきものとして、II面目に道路跡106SF100を検出したことが上げられる。道路を形成している溝2条の埋没時期が大宰府VIA期に考えられることから、奈良時代の条路規模を考える上で参考にすべき資料を提供したといえよう。また、調査区全体に平安時代中期の建物群が展開していることから、屋敷地としての居住空間の土地利用状況を推定する上で多くの資料を提供したが、共時性の検討など課題を残す結果となった。 （中島恒次郎）

引用文献

宮崎県教育委員会（1995）『学頭遺跡・八児遺跡』

八児遺跡I区に検出された土壙墓の出土品として、滑石製石鍋（森田分類A群）が出土しており、この石鍋底部欠損を補填するように滑石加工品が使用されている。

4．第118次調査

1）調査に至る経過

太宰府市通古賀2丁目248－1他（旧地名：大字通古賀字権入）において平成元年3月9日に㈱福岡日産自動車のショールームならびに整備工場改築に伴なう埋蔵文化財の取り扱いの有無についての問い合わせが、同社からなされた。当地は鏡山猛氏推定復原案による大宰府条坊跡右郭九条六坊に位置しており、開発対象地域に隣接して、条坊跡第87次調査地が所在していることから、埋蔵文化財の広がりを考えると、当該地域まで広がっていることは容易に推定できた。本調査に先立って、文化財の有無ならびに規模の確認のための試掘調査は、営業との関わりから不可能であるとの協議結果に基づき、開発対象地の分割調査ならびに、社屋解体後に試掘調査および本調査を実施することで合意をみた。発掘調査は、開発対象地の北半部分を平成2年12月13日から平成3年3月15日にかけて条坊跡第106次調査として実施し、その結果、奈良時代から平安時代にかけての遺構が検出され、極めて遺構密度の高い遺跡が埋蔵されていることがわかった。したがって、南接するショールーム部分の調査も必要と考えられ、社屋解体後調査を実施した。調査期間は平成3年12月2日から平成4年1月27日にかけて条坊跡第118次調査として行なった。調査は緒方俊輔・中島恒次郎があたった。

2）層位

北に隣接する第106次調査結果から、極めて良好な状況で遺構が確認できるものと推定されたが、意に反して調査区全域が後世の掘削により消失し、遺構検出面まで約1.8mの深さを測った。

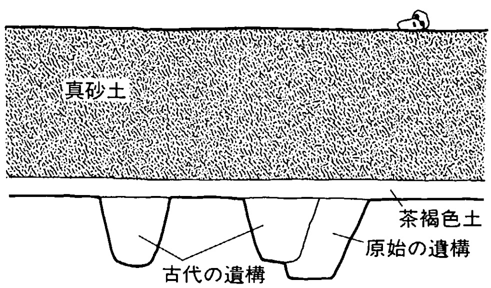


Fig.82　条坊118次調査基本土層模式図

基本層位は、観世音寺土地区画整理事業に伴う真砂土があり、遺構検出面付近まで埋立てられていた。その下位に旧耕作土が薄く堆積し、その下から遺構が検出された。遺構検出面には、各所に重機による爪跡が確認でき、聞き取りによると昭和初期における旧国道3号線（県道112号線）の建設事業の際掘削されたことがわかった。第106次調査地での遺構残存状況が良好であっただけに残念なことである。

3）遺構

検出された遺構は、建物、井戸、溝、道路が検出されているが、周辺での調査成果とは異なった遺構残存状況であったことから、宅地の中心部分という印象は薄い。しかし、残存状況を考慮するならば、北側に隣接する第106次調査と同様の宅地状況であった可能性は十分想定で

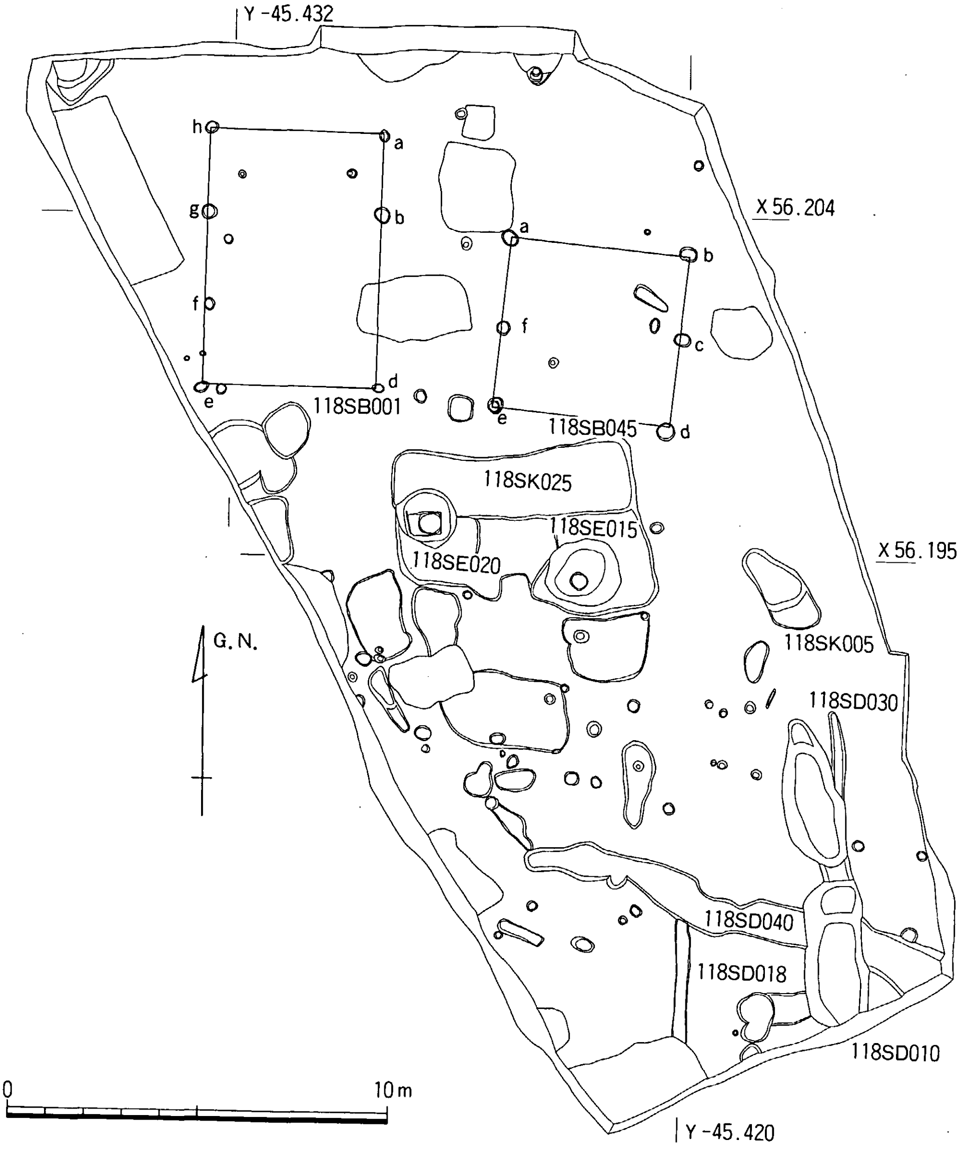


Fig.83　条坊118次調査遺構実測図（1/200）

き、極めて残念な調査結果となった。

建物

118SB001　調査区北西部に検出した1間×3間の南北棟で、柱総距離は桁行で約6.85m、梁行で約4.5mを測る。平均柱間は、桁行で約2.27m、梁行で約4.5mを測る。桁行の方向はN-1°15′-Eを測る。

118SB045　調査区北東部に検出した1間×2間の南北棟で、柱総距離は桁行で約4.416m、梁行で約4.7mを測る。桁行の平均柱間は約2.2mを測る。桁行方向はN-4°52′-Eを測る。

井戸

調査区のほぼ中央部に２基並んで検出され、残存状況は井戸枠材が残っておらず、あまりいい状態ではなかった。

118SE015　掘り方の長軸長2.0m、短軸長1.76mを測り、平面形はやや不整形ながら方形を呈している。残存している深さは1.64mを測る。井戸枠は残存しておらず、暗灰色土が堆積している。最下部に直径0.46m、深さ0.16mのほぼ円形の掘り方を確認しており、曲物が埋置されていた可能性が高い。

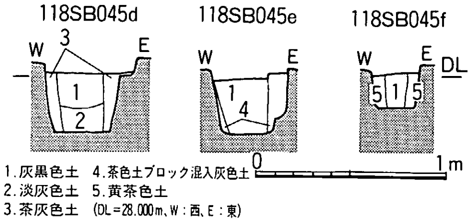


Fig.84　建物柱穴土層図

118SE020　掘り方長軸長1.64m、短軸長1.55m、残存している深さは1.46mを測り、平面形は不整形ながら略円形を呈している。内部には、上位から暗灰色土、下位に青灰色土が堆積し、井戸枠材は残っていなかった。下部に枠材を支えたと考えられる横木が僅かながら残っており、横木から推定される枠の規模は長軸長0.86m、短軸長0.6mを測る。また最下部には直径0.6m、深さ0.16mのほぼ円形の掘り方が確認でき、おそらく曲物が埋置されていたと考えられる。

溝

調査区内からの数条の溝が確認できているがいずれも調査区南部に集中している。これは、北接する第106次調査区の標高差を考慮すると、自然地形としては緩やかな傾斜を持ちつつ標高が高くなっていたと考えられる。したがって層位の項で述べたように、旧国道３号線の建設事業によって削られたものと考えられ、後世の人為的な削平による結果と考えられる。

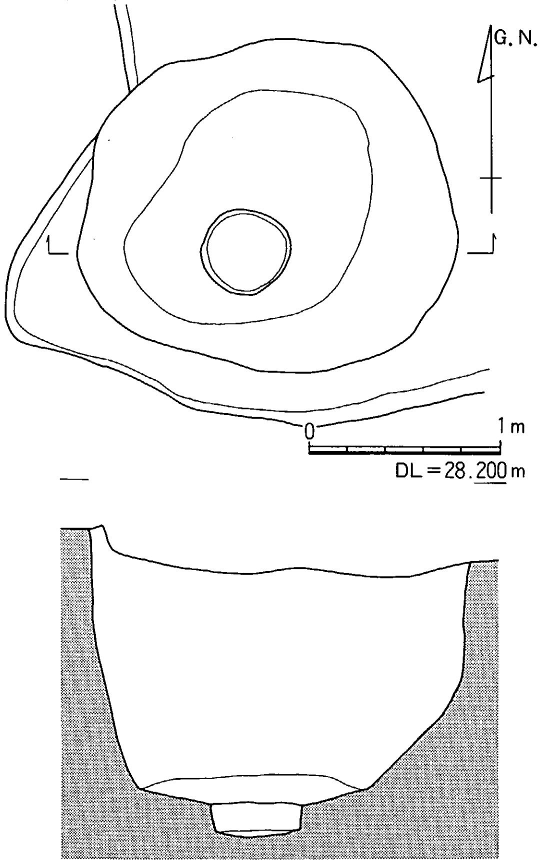


Fig.85　118SE015遺構実測図（１/40）

118SD005　検出された長さは2.4m、幅1.1mで、残存する深さは0.17mを測る。土壙状の形状を呈しているが、南に検出された118SD010の状況から考えて、一連の溝と解した。

118SD010　検出長は8.3m、幅1.5mで、残存する深さは平均で0.7mを測る。均一な深さで溝が形成されておらず、高低差がありいわば土壙が連なった形状を呈している。検出された部

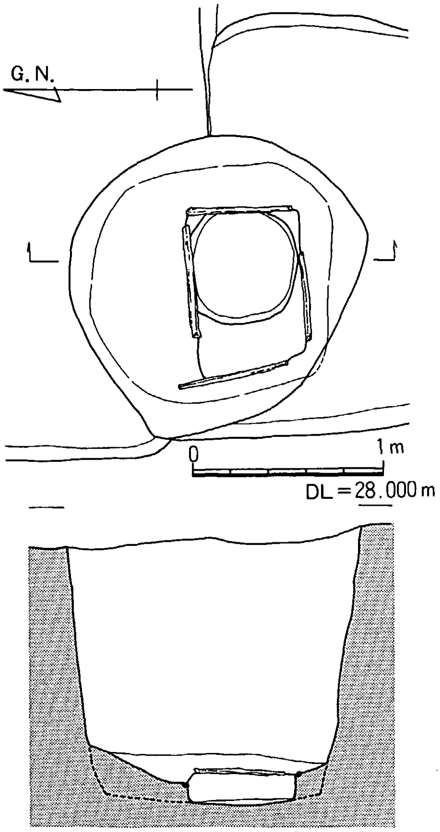


Fig.86　118SE020遺構実測図（1/40）

分での方向はN-7°45′-Wを向いている。検出された位置からみて、118SD018と対になり、その挟まれた空間が道路118SF100であると考えられる。この道路跡は、北へ延長することで第87次調査にて検出した87SF100へとつながると推定される。

118SD018　検出長は3.4m、幅0.36m、残存する深さは0.03mを測り、南側を後世の攪乱によって消失し、残存している深さが物語るように極めて残りの悪い状況で検出された。検出された部分での方向は南北を向き、118SD010と対になると考えられる。

118SD030　検出長は2.06m、幅0.36m、残存する深さは0.16mを測り、残存状況は悪い。検出状況から118SD010に切られる状況で確認できたが、出土した遺物からは時期差は認められなかった。

118SD040　調査区の南に検出され、南東から北西にのびる溝で、検出長12.0m、幅1.6m、残存する深さは0.17mを測る。検出された全ての遺構に切られており、当該調査で最も古い遺構にあたる。堆積土の中から縄文時代の土器が出土している。

掘立柱建物

遺構番号	抽出Point	遺構任意中点座標		方位角	抽出Point間距離
		X座標	Y座標		
118SB001	h	56.206.250	−45.432.600	N1°15′16″E	6.852m
	e	56.199.400	−45.432.750		
118SB045	a	56.203.400	−45.424.750	N4°52′17″E	4.416m
	e	56.199.000	−45.425.125		

道路側溝

遺構番号	抽出Point	遺構任意中点座標		方位角
		X座標	Y座標	
118SD010	NP	56.188.700	−45.416.500	N7°45′55″E
	SP	56.183.200	−45.415.750	
118SD018	NP	56.185.400	−45.419.950	N0°0′0″E
	SP	56.182.450	−45.419.950	

道路

遺構番号	抽出Point	遺構任意中点座標		方位角
		X座標	Y座標	
118SF100	NP	56.184.800	−45.418.150	N0°0′0″E
	SP	56.183.000	−45.418.150	

Tab.5　条坊118次調査主要遺構座標値

道路

118SF100　118SD005・118SD010・118SD030と118SD018に挟まれた空間が道路跡と推定され、北へ延長すると第87次調査にて検出された87SF100へつながるものと考えられる。溝118SD010の任意中心線と118SD018の任意中心線間の距離は約4m、路面の幅は約3mをそれぞれ測る。道路任意の中心線の方向は、南北方向である。

その他の遺構

118SX002　調査区北西隅にて検出された落ちで、調査区北

西側へ広がっていると考えられる。遺構の性格に関しては、調査区内で判断つけ難かった。堆積土は上位から茶褐色土、灰茶色土、暗茶灰色土からなり、最下層の暗茶灰色土には炭化物が多く混入していた。検出した深さは0.46mを測る。

118SX016　井戸跡118SE015・118SE020および土壙118SK025の上位に検出された凹み。長軸長6.55m、短軸長4.5mで平面形が不整形の広がりを有している。残存する深さは0.13mを測る。

118SX025　118SX016の下位から検出された土壙状の遺構で、長軸長6.5m、短軸長1.5m、残存する深さは0.4mをそれぞれ測る。遺構には黒茶色土が堆積している。各遺構の前後関係は、118SE015・118SE020→118SX025→118SX016→118SX006・118SX007であった。

（中島恒次郎）

4）遺物

掘立柱建物出土遺物

118SB045（Fig.87）

土師器

椀a（1）　口径13.0cmに復原される。茶白色を呈し、調整は横ナデと考えられる。

甕b（2）　口径27.0cm前後に復原される。口縁部は横ナデを行ない、胴部外面は粗い平行叩き、内面はハケ調整を行なう。

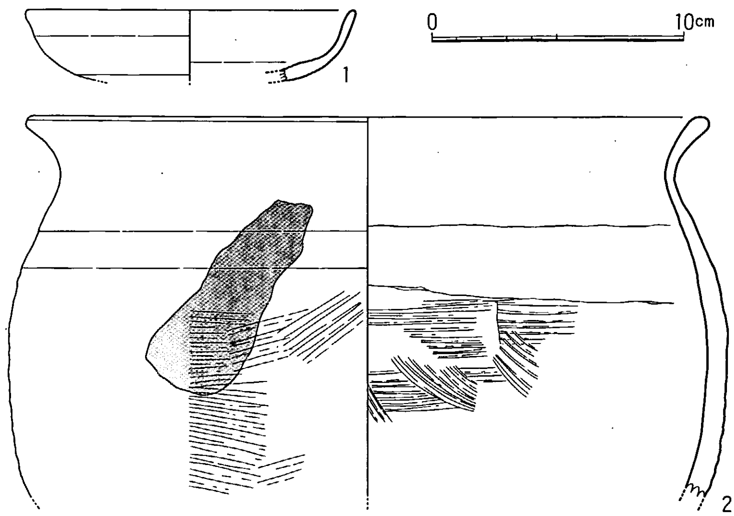


Fig.87　掘立柱建物出土遺物実測図

井戸出土遺物

118SE015青灰色土（Fig.88）

土師器

小皿a1（1・2）　口径9.2・9.8cm、器高1.15・1.0cmを測る。底部はヘラ切りされる。

坏a（3）　底径8.0cm前後を測る小片。黄白色を呈し、底部はヘラ切りされる。見込みと外面に墨書があり、内面の墨書は人面を描く。

丸底坏a（4）　口径14.4cm、器高3.2cmを測る。つくりが丁寧で内面にミガキbを施し、外面に指頭圧痕が残る。

白磁

椀（5）　高台径6.0cm。淡い空色を帯びた透明釉を高台際まで施す。Ⅳ類。

118SE015暗灰色土（Fig.88）

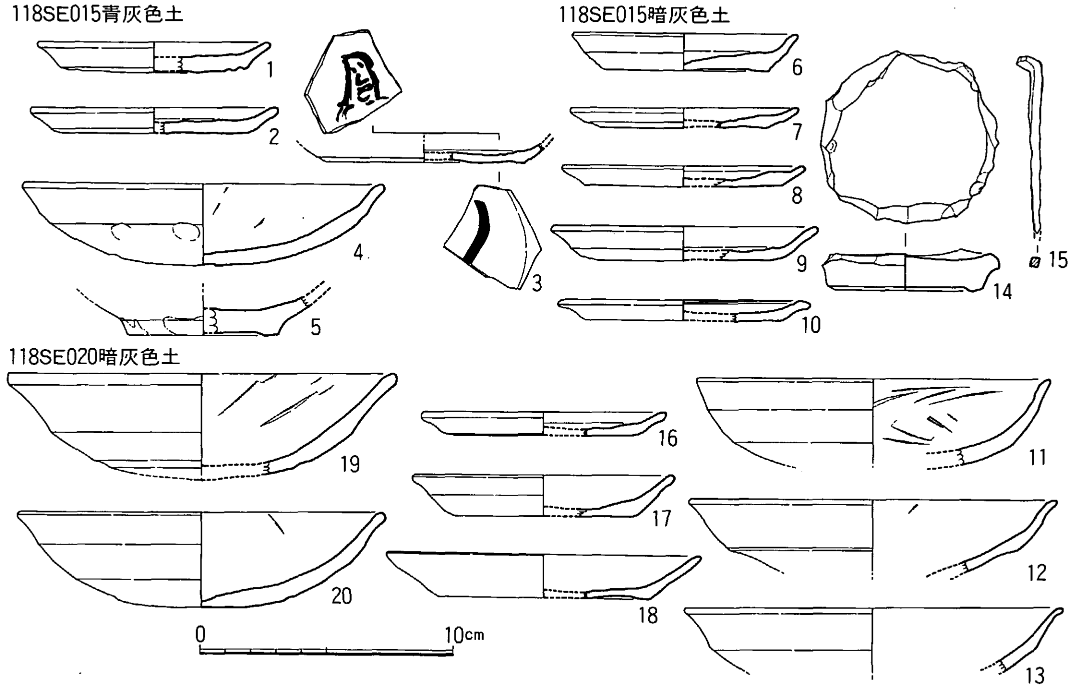


Fig.88　118SE015・020出土遺物実測図

土師器

小皿a 1 （6～9）　口径9.0～10.6cm、器高0.8～1.5cmを測る。底部はすべてヘラ切り。

小皿a 2 （10）　口径10.0cm、器高0.8cm。口縁部内側に沈線が巡る。つくりが粗雑である。

丸底坏a（11～13）　口径14.0～15.0cmを測る。内面にミガキbを施すが、11は内面の調整が粗雑で、ヘラ状工具の痕跡が残る。

白磁

椀（14）　高台径6.2cmを測る。高台に沿って底部を丸く打ち欠いている。Ⅳ類。

金属製品

釘（15）　残存長7.0cmの鉄釘。先端部のみ欠損する。

118SE020暗灰色土（Fig.88）

土師器

小皿a 1 （16・17）　口径9.8・10.4cm、器高0.9・1.6cmを測る。底部はヘラ切り。17は底部外面を除いて赤褐色の顔料が塗布される。

坏a（18）　口径12.5cm前後、器高1.8cmを測る。底部はヘラ切りされる。内面に黒いススが付着する。

丸底坏a（19・20）　口径15.4・14.6cmを測る。内面にミガキｂを行ない、外面は押し出した後丁寧になでる。

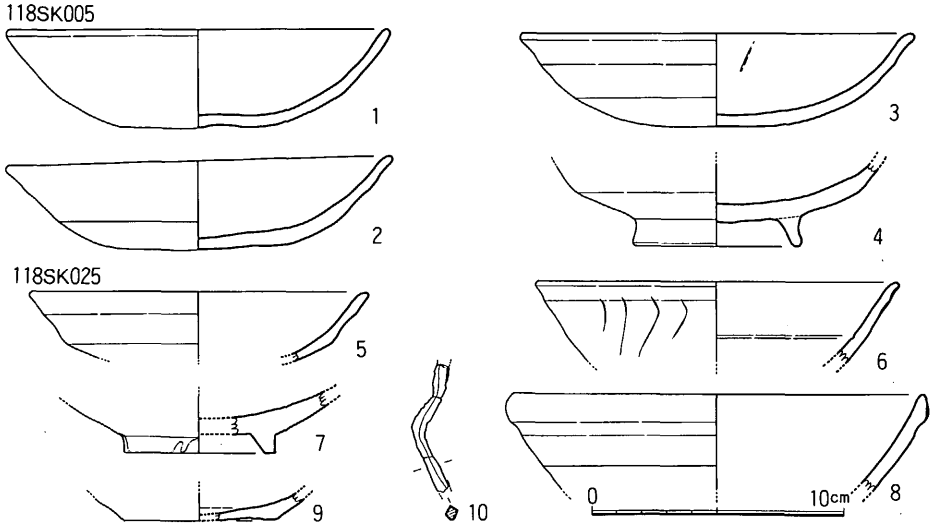


Fig.89　118SK005・025出土遺物実測図

土壙出土遺物

118SK005（Fig.89）

土師器

丸底坏a（1～3）　口径15.2～15.6cm、器高3.5～3.9cm。2・3は内面にミガキｂを行なう。

椀c（4）　高台径6.7cmを測る。茶灰色を呈し、体部下位で張り出す。調整は不明。

118SK025（Fig.89）

土師器

丸底坏a（5）　口径13.4cmに復原される。内面はミガキｂと考えられる。

白磁

椀（6～8）　6は口径14.4cmを測る。外面は体部下位まで削り、淡い空色の透明釉が施される。外面は櫛目で施文する。V-2b類。7は高台径6.0cm。高台の内側を斜めに削り、やや黄色味をおびた透明釉が施される。細かい貫入が入る。II類。8は口径16.7cmに復原される。大きめの玉縁をつくり、淡い空色をおびた釉を厚めに施す。IV類。

皿（9）　底径6.0cm。平底で底部際まで空色気味の透明釉を施す。素地は乳白色を呈し精選されている。XI類。

金属製品

釘（10）　鉄釘。頭部と先端部を欠く。残存長5.0cm。

溝出土遺物

118SD010（Fig.90・91）

須恵器

壺（1・2）　1は口径10.5cm前後を測り、胎土は明灰色を呈しており、ややキメが粗い。

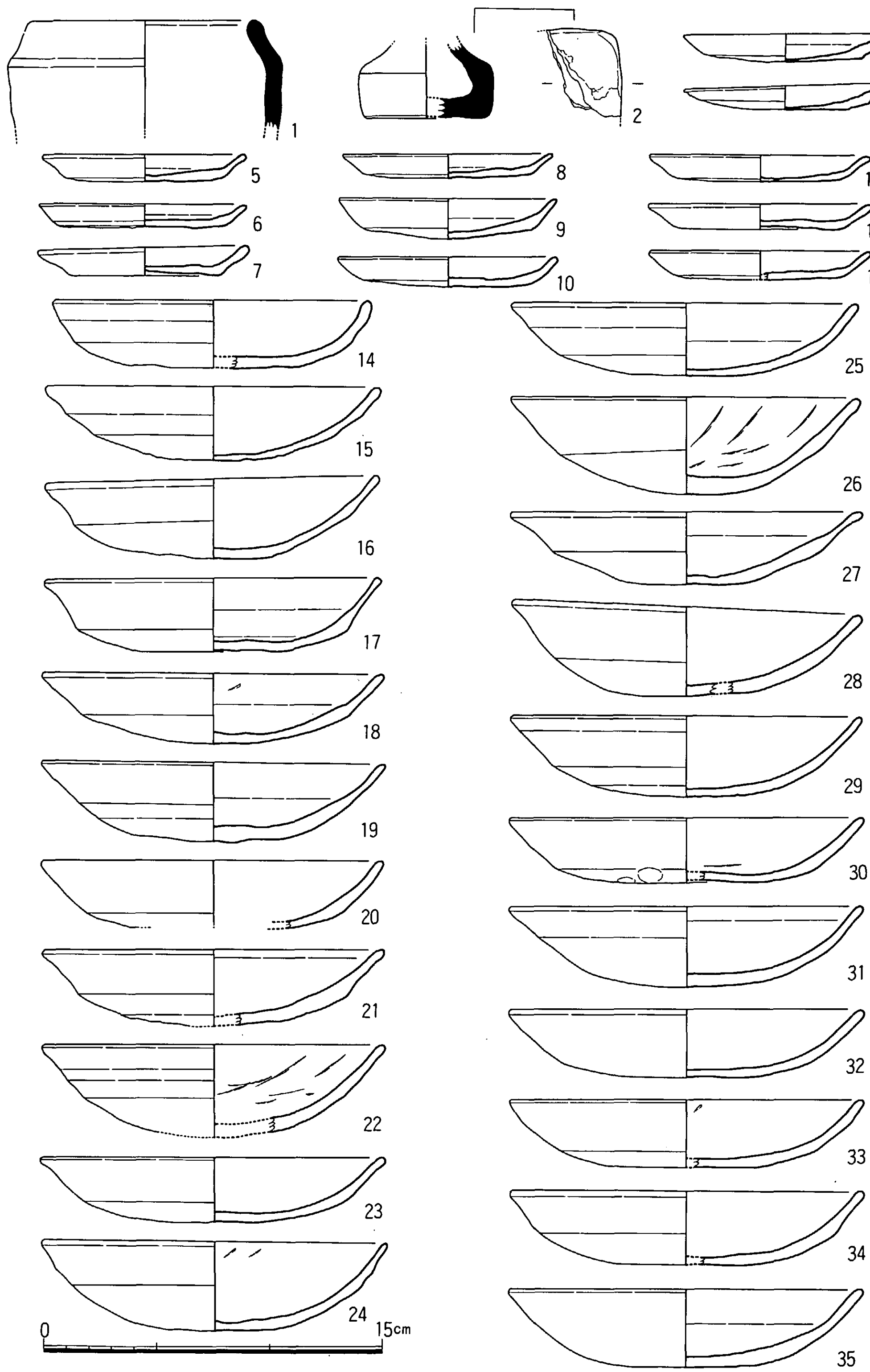


Fig.90　118SD010出土遺物実測図(1)

口縁部を内側に屈曲させ横ナデを行なう。2は手捏ねで外面はヘラ状工具でナデ調整される。一辺が6cm前後の方形の小壺と考えられる。

土師器

小皿a1（3～13） 口径9.1～9.9cm、器高1.1～1.8cmを測る。底部は7は糸切り、9は不明、他はすべてヘラ切りされる。

丸底坏a（14～35） 口径14.2～15.8cm、器高2.9～4.3cmを測る。15・19・23・35は磨耗して調整不明、他はミガキbを行なう。24は口縁部内面は黒色になっている。

椀c（36～38） 口径15.0～16.6cm、器高5.0～6.0cm。いずれも内面が平滑で、ミガキbを行なったと考えられる。37は外面に指頭圧痕が残る。

甕（46） 黄白色を呈し、砂粒を多く含んでキメが粗い。内面は粗いナデ、外面に指頭圧痕が残る。内面は粘土紐の痕が観察できる。

黒色土器

椀c（39） 口径15.8cm、器高5.7cm、高台径8.2cmを測る。内面にミガキcを施し、外面は口

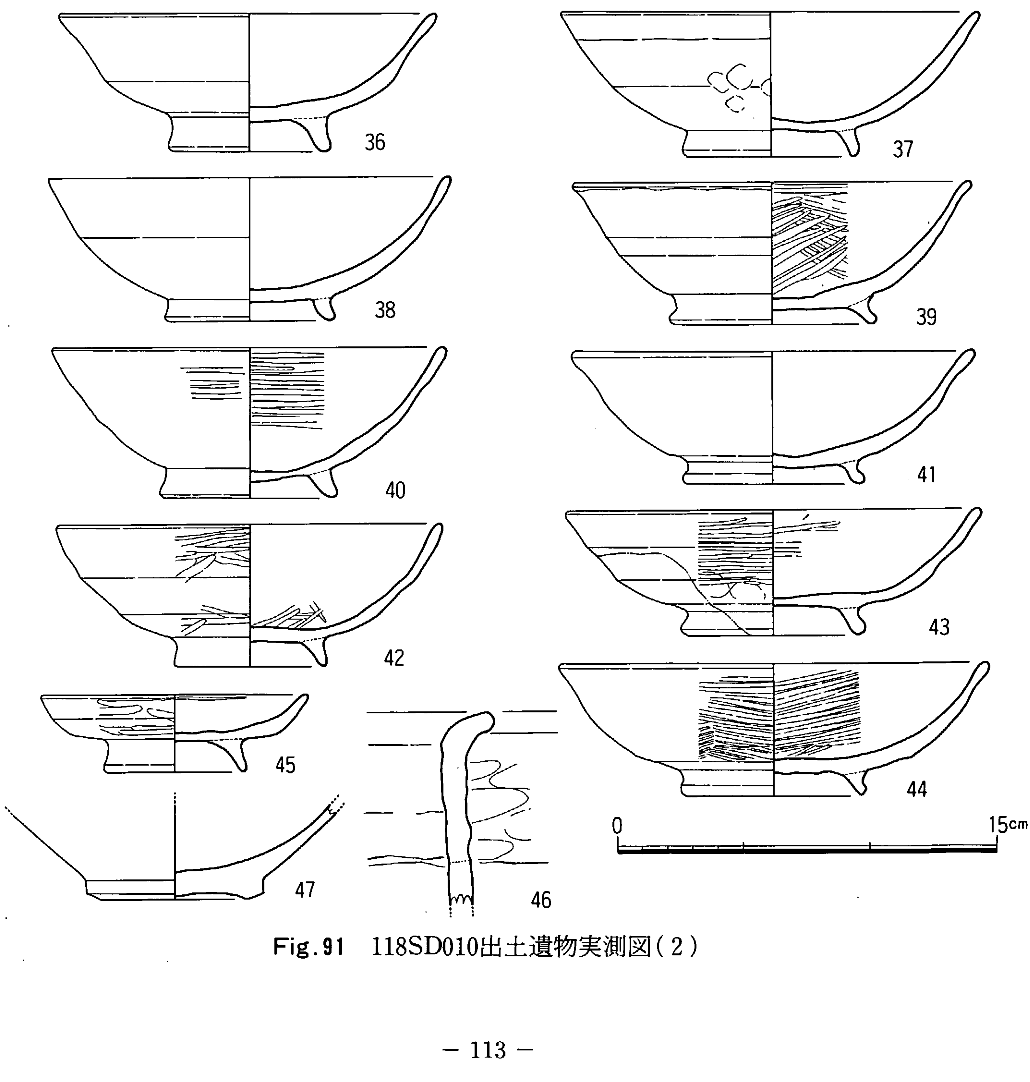


Fig.91 118SD010出土遺物実測図（2）

縁部を除いて黄白色を呈す。A類。

椀c（40〜44） 口径15.3〜17.0cm、器高5.0〜6.0cmを測る。内外面ともミガキｃを施す。B類。

小皿c（45） 口径10.6cm、器高3.1cm、高台径5.6cmを測り、体部内外面にミガキｃを施す。B類。

白磁

椀（47） 高台径7.0cm、高台を浅く削りだし、灰白色のやや粗めの素地にわずかに空色味を帯びた半透明の釉が施される。Ⅳ類。

118SD010最上層（Fig.92）

土師器

小皿a（１） 口径9.5cm、器高1.2cm。底部はヘラ切りされ板状圧痕が残る。

丸底坏a（３） 口径15.3cmに復原される。磨耗のため調整不明。

椀c２（４） 口径15.7cm、器高5.3cm、高台径7.2cm、体部は緩やかな丸味をもつ。

緑釉陶器

椀（２） 小片だが椀と考えられる。釉はハケ塗りのためか、暗緑色と淡緑灰色の濃淡のムラがある。須恵質。

白磁

椀（５） 復原口径17.4cm。体部上位まで削り、淡い空色の透明釉を施す。Ⅳ類。

118SD010上層（Fig.92）

土師器

小皿a１（６〜９） 口径8.6〜9.4cm、器高0.8〜1.4cm。底部は６は糸切り、７〜９はヘラ切りされる。

小皿a２（10） 口径9.2cm、器高0.8cm。口縁部内側に浅い沈線を巡らせる。底部はヘラ切り後ナデを行なっている。

皿a（11） 口径14.8cm、器高1.9cmを測る。黄白色を呈する。底部はヘラ切りされ黒灰色になっている。

丸底坏a（12〜20） 口径14.6〜16.95cm、器高3.2〜3.9cm。茶白色から淡茶灰色を呈し、16・17・19は磨耗して内面の調整は不明。それ以外はミガキｂを行なう。

鍋（25） 口径39cm前後に復原される。胎土は砂粒を多く含み粗い。内面の体部上位は斜め方向にヘラ状工具でナデを行ない、体部下位は平滑になっている。外面もやや幅広のヘラ状工具で口縁部直下まで横方向になでる。外面は帯状に黒褐色に焦げたあとが巡る。

黒色土器

椀c２（23） 口径16.0cm、器高5.7cm、高台径7.1cm。内面にミガキｃを行なう。A類。

椀c（21・22・24） 21は高台径7.0cmを測り、内外面にミガキｃを施す。22は口径17.2cmに復原され、内外面にミガキｃを施し口縁部は内湾する。24は口径16.2cm、器高5.8cmを測り、

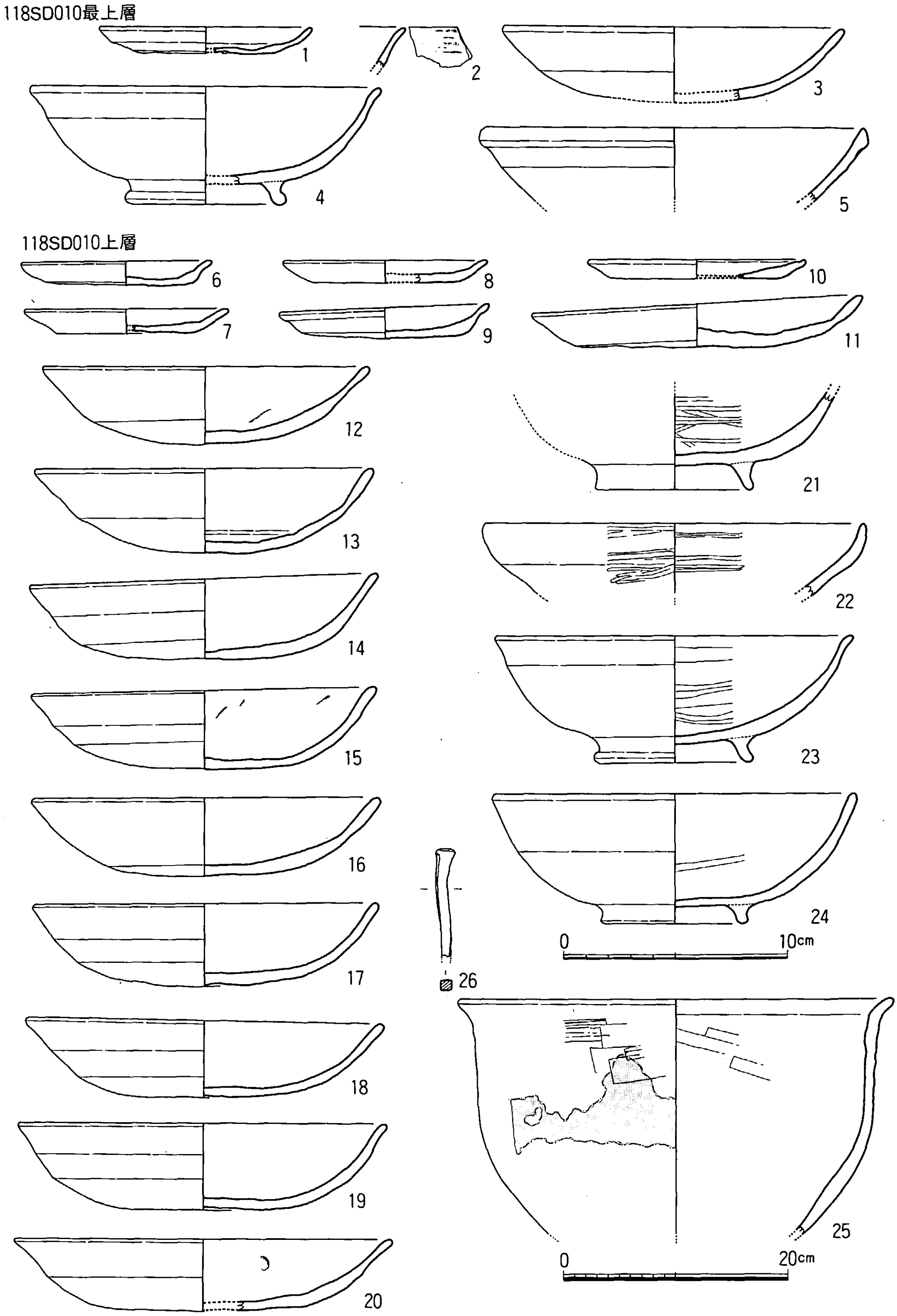


Fig.92　118SD010最上層・上層出土遺物実測図

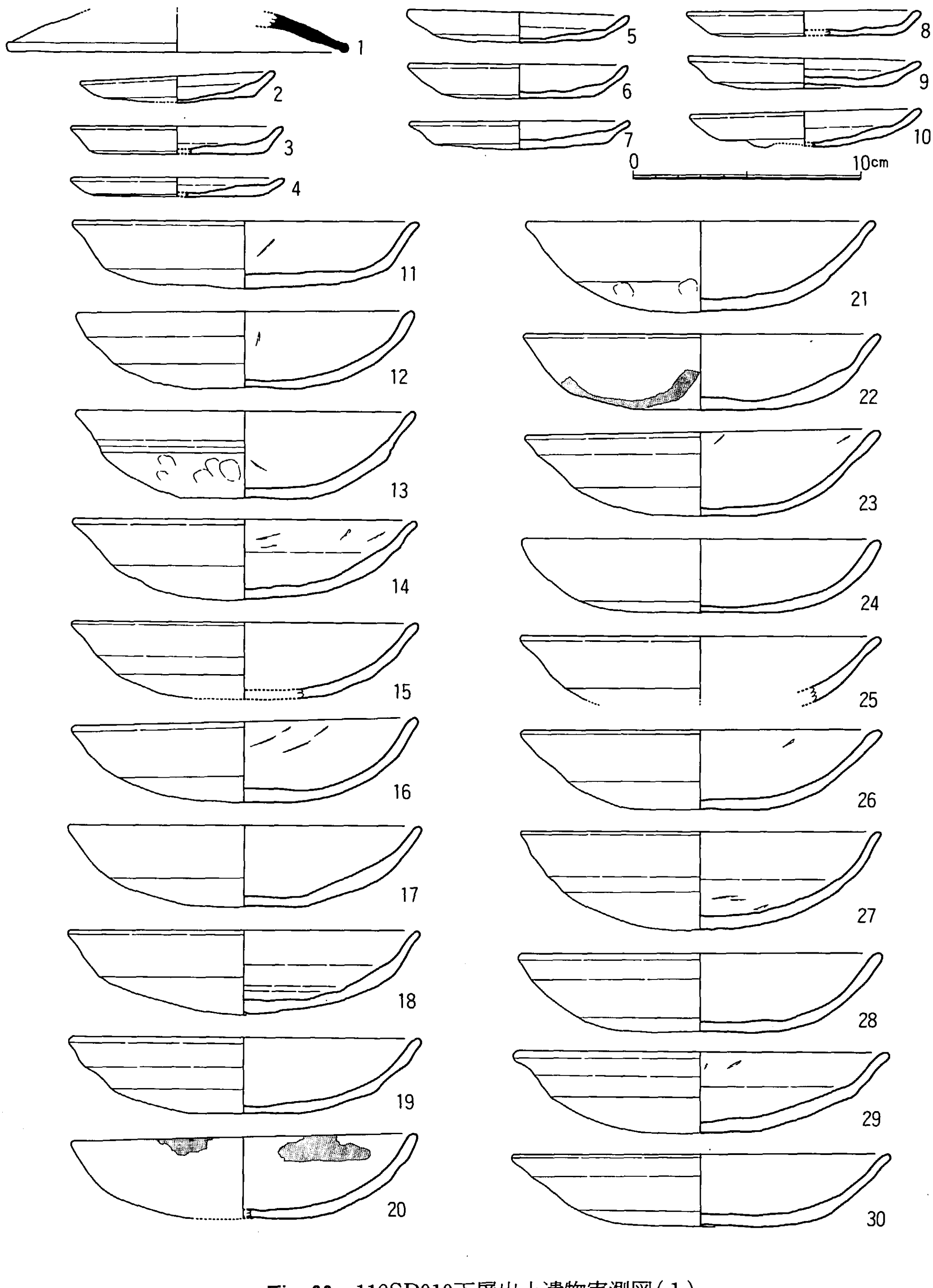


Fig.93 118SD010下層出土遺物実測図（1）

内面にミガキｃを行なうが、外面は不明。Ｂ類。

金属製品

釘（26） 鉄製。残存長4.8cm。先端部を欠損する。

118SD010下層（Fig.93・94）

須恵器

蓋３（１） 口径15.0cmに復原される。口縁部内側に浅い沈線を巡らし、端部を画している。混入品と考えられる。

土師器

小皿ａ１（２～10） 口径8.65～10.2cm、器高0.8～1.6cmを測る。５は不明だが、他はすべ

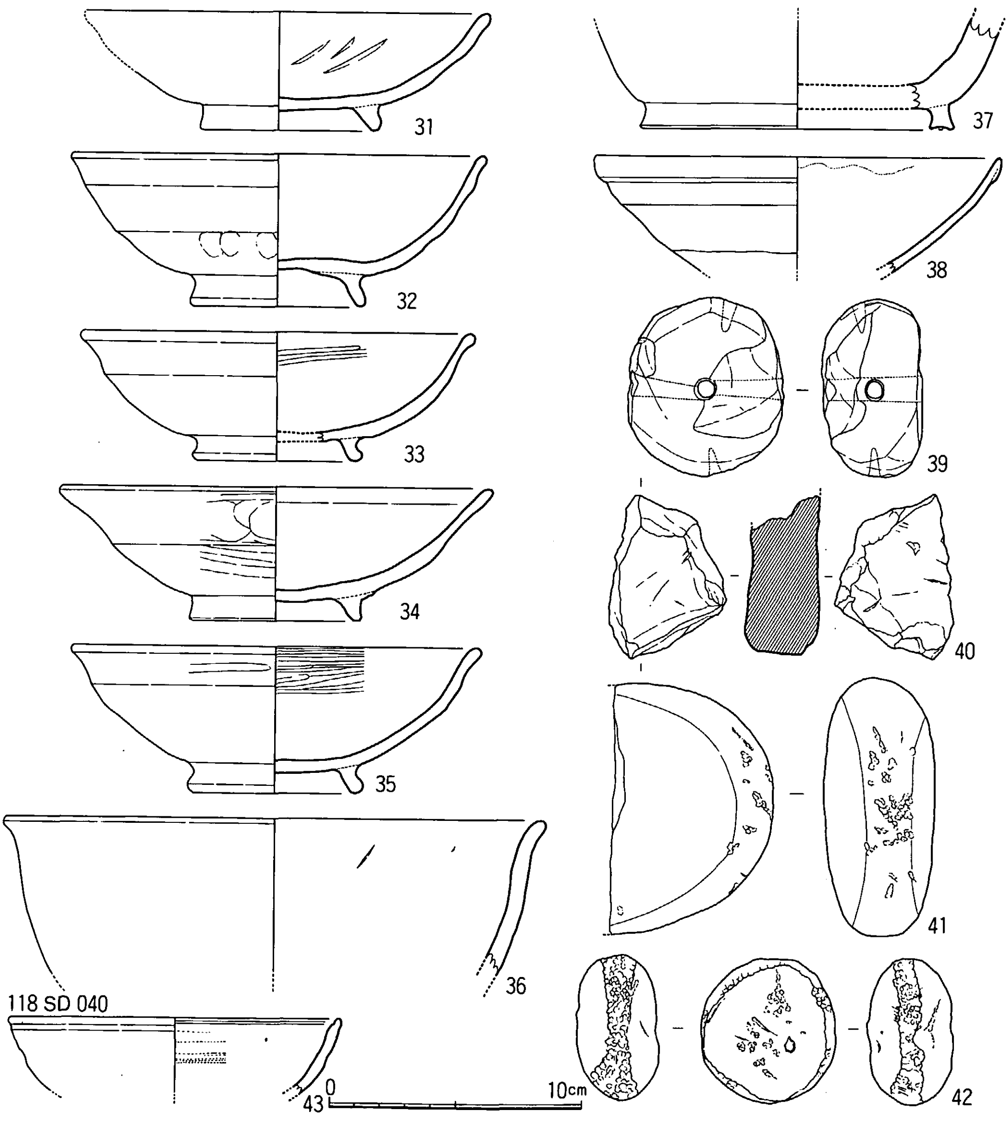


Fig.94 118SD010下層出土遺物実測図（２）

てヘラ切りされ、10は黒灰色を呈す。

丸底坏a（11～30） 口径14.8～16.6cm、器高3.0～4.3cm。15・18・24・30は磨耗のため不明だが、他は内面にミガキｂを行なう。20・22は一部に黒灰色の煤が付着する。

丸底坏c（31） 口径16.0cm、器高4.7cm、高台径7.1cmを測り、内面にミガキｂを行なう。

椀c２（32～34） 口径15.6～17.1cm、器高5.1～6.1cm、高台径6.7～7.0cmを測る。32は調整不明、33は内面上位にミガキｃ、下位にミガキｂを、34は内面にミガキｂ、外面にミガキｃを行なう。

甕（36） 口径21.4cm前後に復原される。多量の砂粒を含み外面は赤褐色を呈し黒色の炭化物が付着する。内面にヘラのあたりが残る。

黒色土器

椀c（35） 口径16.2cm、器高5.8cm、高台径6.9cmに復原される。内面と外面口縁部に丁寧なミガキｃを施し、内外面とも磨耗した箇所以外は漆黒色で光沢があり、黒色の顔料を塗布していると考えられる。Ｂ類。

灰釉陶器

壺（37） 高台径12.4cmに復原される。明灰色の粗い素地で、体部下位は横ナデを行なう。内底部に緑灰色の釉がまだらに残っている。

白磁

椀（38） 口径は16.1cm。外面体部上位まで削り、やや濁った青色の透明釉を施す。口縁端部は折り曲げて玉縁状にした痕跡が観察できる。Ⅳ類。

石製品

器種不明（39） 軽石製で、縦横両方向から径0.7～0.8cm程の孔を貫通させる。浮子と考えられる。

砥石（40） 上下二面を使用。残存長6.3cm、幅4.6cm、厚さ2.9cm。材質は砂粒砂岩。

叩き石（41・42） 41は残存長10.0cm、幅6.5cm、厚さ4.4cm。材質は花崗岩と考えられる。42は残存長5.7cm、幅5.3cm、厚さ3.3cm。材質は火成岩。丸味のある部分に敲打痕が残る。

118SD040（Fig.94）

土師器

椀（43） 口径は13.2cm前後を測る。胎土は橙茶灰色を呈し、精選されている。内面は丁寧なミガキｃを行ない、口縁端部の内側に鋭い沈線が巡る。

その他の遺構出土遺物

118SX002灰茶色土（Fig.95）

須恵器

蓋c３（１・２） 口径13.5・15.5cm。いずれも天井部を削り、口縁端部を断面三角形につくる。

蓋３（３・４） 口径13.6・14.6cm。天井部は３はヘラ切り後ナデ調整され、４は粗く削る。

口縁端部は断面三角形を呈するがシャープさに欠ける。

坏c（5・6） 口径12.8・11.6cm、器高4.7・4.0cmを測る。青灰色から暗灰色を呈し、体部下位にやや丸味があり口縁部は外反する。

土師器

皿b（7） 口径は15.7cm前後を測る。橙茶灰色を呈し外面の一部は黒灰色になっている。磨耗のため調整不明。

甕（8） 口径16.6cmに復原される。胴部内面はヘラ削りと思われ、外面は胴部と口縁部の

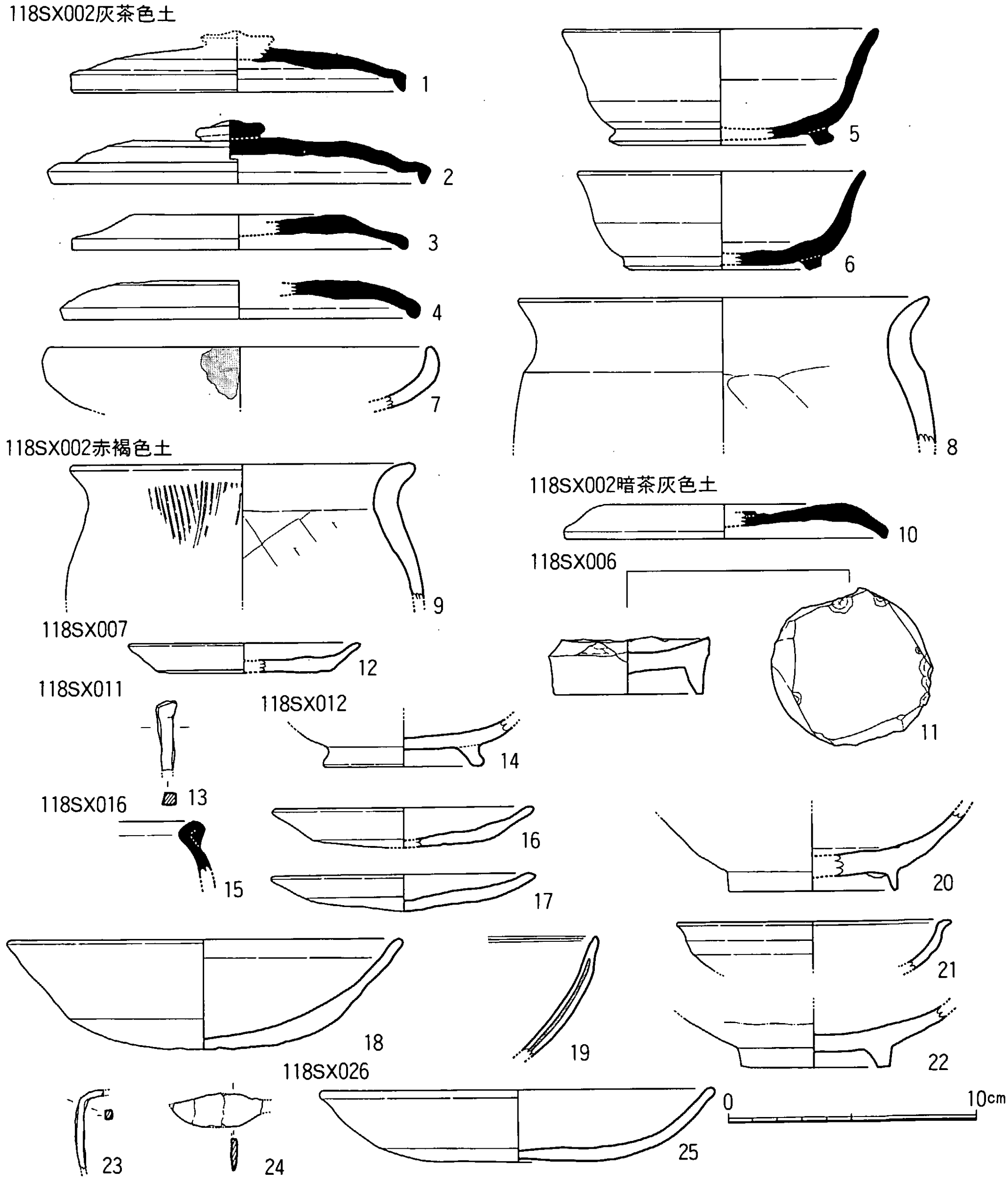


Fig.95 その他の遺構出土遺物実測図

境に稜をなす。

118SX002赤褐色土（Fig.95）

土師器

甕a（9） 口径は14.0cm前後を測る。橙茶灰色から褐色を呈し、胴部内面はヘラ削り、外面はハケ調整を行なう。

118SX002暗茶灰色土（Fig.95）

須恵器

蓋3（10） 口径13.0cm。天井部はヘラ切り後ナデ調整され、偏平なボタン状のつまみを貼付する。内面に焼成のムラがあり重ね焼きの跡と考えられる。

118SX006（Fig.95）

白磁

椀（11） 高台径6.0cmを測る。高台際を円盤状に打ち欠いてつくった可能性がある。V類。

118SX007（Fig.95）

土師器

小皿a1（12） 口径9.4cm、器高1.2cmに復原される。底部はヘラ切り。

118SX011（Fig.95）

金属製品

釘（13） 鉄釘。残存長2.9cm。

118SX012（Fig.95）

黒色土器

椀c（14） 高台径6.4cmを測る。磨耗のため調整不明。B類。

118SX016（Fig.95）

須恵器

鉢（15） 胎土は明灰色を呈し精選されている。体部上位を内側に屈曲させ口縁端部を外側に折り曲げ玉縁状につくる。篠窯系。

土師器

小皿a1（16・17） 口径10.05・10.7cmを測る。底部はヘラ切りし、板状圧痕が残る。

丸底坏a（18） 口径16.0cm、器高4.5cmを測る。内面にミガキbを行なう。

瓦器

椀（19） 胎土は明黒灰色を呈し精選されている。口縁部内側に浅い沈線をもち、内面は磨きを行なったと考えられる。焼成不良。畿内産と考えられる。

越州窯系青磁

椀（20） 高台径6.8cmを測る。素地は淡茶褐色で精選され、濃い緑灰色の光沢のある釉が施される。外面底部に白色の目土が残り、細い高台が貼付される。III類。

白磁

椀（22） 高台径6.0cm。体部下位を削り、淡く黄色味をおびた光沢のある透明釉を外面の体部下位まで施す。II類。

皿（21） 口径11.0cm前後を測る。体部は丸味があり口縁端部が外側に屈曲する。わずかに空色味を帯びた半透明釉が施されている。V－2類。

金属製品

刀子（24） 鉄製で刃部のみ残る。残存長3.7cm。

釘（23） 鉄製。頭部と先端部を欠く。残存長3.3cm。

118SX026（Fig.95）

土師器

丸底坏a（25） 口径16.0cm、器高2.9cmに復原される。内面はミガキｂを行なう。

茶褐色土出土遺物（Fig.96）

土師器

小皿a1（1） 口径9.6cm、器高1.2cmを測る。底部はヘラ切りされ、体部の一部は黒変する。

丸底坏a（2・3） 口径15.2・15.8cmに復原される。3は内面にミガキｂを行なったと考えられる。2は押し出しが不十分で体部と底部の境に屈曲が残る。

鍋（4） 胎土は砂粒を含みやや粗い。内面は丁寧にナデ調整したと考えられる。外面は口縁部まで黒色の炭化物が付着する。

黒色土器

椀（5） 口径15.9cmに復原される。内外面にミガキｃを行なうが粗い。口縁部内側は浅く

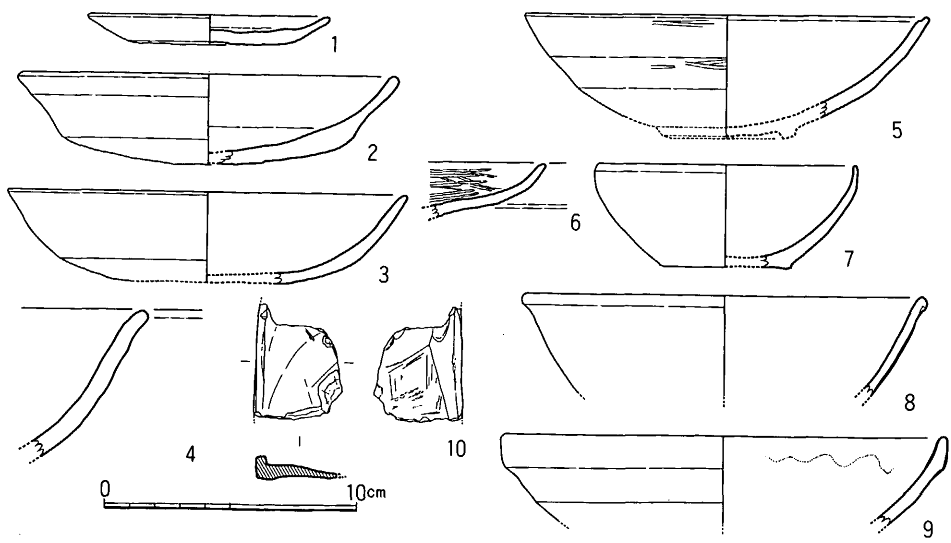


Fig.96 茶褐色土出土遺物実測図

段がつく。B類。

皿（6） 内面に丁寧なミガキｃを施す。外面は横ナデと考えられる。B類。

越州窯系青磁

坏（7） 口径10.4cm、器高4.1cm、底径5.2cmに復原される。素地は明灰色を呈し精選され、灰緑色の釉を全面に施す。外面底部に目跡あり。Ｉ－３類。

白磁

椀（8・9） ８は口径16.0cmに復原される。口縁端部を外側に折り曲げ、空色をおびた釉を厚めに施す。Ｖ－３類。９は口径17.6cm。口縁は大きめの玉縁をつくり、やや青味をおびた半透明釉が施される。Ⅳ類。

石製品

硯（10） 残存長4.5×3.5×1.0cm。暗青灰色を呈する方形の石硯。材質は粘板岩。Ⅲ－Ａ類。

表土出土遺物（Fig.97）

瓦器

椀（1） 高台径6.4cmに復原される。胎土は精選され、明灰色から黒灰色を呈す。内面はミガキｃを行なったと考えられる。外面体部中位の凹凸は指頭圧痕か。小さく低めの高台を貼付する。

（森田レイ子）

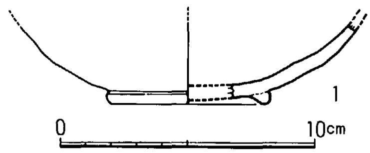


Fig.97 表土出土遺物実測図

５）小結

当該調査の成果をまとめると以下のようになる。

・118SF100は、当該調査区の北東部に隣接している条坊跡87次調査区にて検出された道路87SF100の南延長部分であることが判明した。

・道路西部に掘立柱建物を２棟、井戸２基を検出したことにより、北に隣接している条坊106次調査同様、平安時代中期に居住空間としての土地利用がなされていたと推定できる。

・奈良時代において形成されたとみられる遺構の中で、性格が判断できる顕著な遺構は確認できなかった。

・縄文時代の遺構（118SD040）を検出したことから、当該期の遺跡が周辺に展開していると考えられる。

（中島恒次郎）

5. 第141次調査

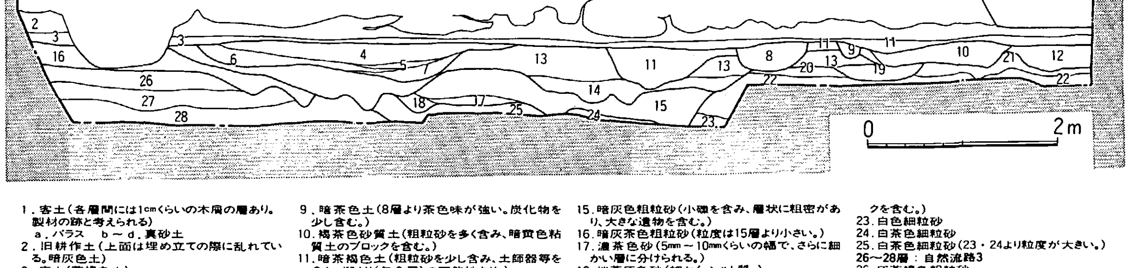
1）調査に至る経過

調査地は太宰府市通古賀3丁目236外（旧地名：大字通古賀字権入）に所在する。平成2年5月31日にナガタ建設㈱永田義信氏より倉庫建設の計画にともない、埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。対象地は鏡山猛氏推定条坊案右郭九条六・七坊に位置しており、坊路が検出される可能性があった。教育委員会文化課は平成4年9月16日に試掘調査をおこない、対象地の西側約4/5は鷺田川の氾濫原にあたり、遺構が残存しないことを確認した。このため調査区を東側約1/5範囲に設定することで発掘調査をおこなう協議にはいった。その結果教育委員会が受託事業として発掘調査をおこなうこととなった。調査期間は平成5年9月20日から同年11月4日までである。対象面積は3203㎡、調査面積は約600㎡である。調査は城戸康利が担当した。

2）層位（Fig.98）

調査地は御笠川と鷺田川に挟まれた、標高28～29mを測る沖積地に位置する。遺構面は一層で、全体に北東から南西に低くなっている。現地表から1m程で旧水田面に達し、約0.2mの耕作土、約0.1mの床土が検出される。以下薄い淡灰色土の下に遺構が展開する。ただし調査区南端は淡灰色土の下に黒色土を挟む。淡灰色土には近代までの、黒色土には12世紀代までの遺物を包含している。

遺構は8～12世紀代のものが検出されたが、8世紀代の柱穴はかなり浅く、削平されているものと考えられる。遺構面の地盤は新しい堆積から古い堆積が南西から北東方向に移行している。その中の白灰色砂質土（141SD160）は8世紀代までの遺物を包含しており河川氾濫時の堆積または自然流路の堆積と考えられる。



1．客土（各層間には1cmくらいの木屑の層あり。製材の跡と考えられる）
a．バラス　b～d．真砂土
2．旧耕作土（上面は埋め立ての際に乱れている。暗灰色土）
3．床土（茶褐色土）
4～7層：溜まりの層か（包含層）？
4．灰茶色土（砂礫混じり。土師器片等をやや多く含む。）
5．灰茶色土（炭化物・砂を含む。）
6．淡灰茶色土（シルト質。炭化物を含む。）
7．淡灰茶色土（シルト質。下位は砂混じりに漸移する。）
8．暗茶色土（砂混じり。硬質。Pitの可能性あり。）
9．暗茶色土（8層より茶色味が強い。炭化物を少し含む。）
10．褐茶色砂質土（粗粒砂を多く含み、暗黄色粘質土のブロックを含む。）
11．暗茶褐色土（粗粒砂を少し含み、土師器等を含む。溜まり（包含層）の可能性あり。）
12．暗茶褐色土（11層とほぼ同じだが、砂が11層に比べやや多い。溜まりもしくは遺構。）
13・14層：自然流路①（S-170）または溜まり
13．白黄茶色土（シルト質で砂を含む。硬質で土師器片を少し含む。）
14．白黄茶色土（13層よりシルト質で、粗粒砂は含まない。軟質。）
15～19層：自然流路1
15．暗灰色粗粒砂（小礫を含み、層状に粗密があり、大きな遺物を含む。）
16．暗灰茶色粗粒砂（粒度は15層より小さい。）
17．濃茶色砂（5mm～10mmくらいの幅で、さらに細かい層に分けられる。）
18．淡茶灰色砂（細かく、シルト質。）
19．白茶灰色砂（層内をさらに細分でき、下位へ茶色味が強くなる。）
20～25層：自然流路2
20．白灰色砂（細粒砂ぐらいの粒度）
21．白黄茶色土（13・14層に近いが、13・14層より茶色味が強く、砂質である。遺物を含む。）
22．灰褐色粗粒砂（砂粒が大きく、須恵器・土師器等大きな破片を含む。下位は黄色粘土ブロックを含む。）
23．白色細粒砂
24．白茶色細粒砂
25．白茶色細粒砂（23・24より粒度が大きい。）
26～28層：自然流路3
26．灰茶褐色粗粒砂
27．暗灰褐色粗粒砂
28．暗灰褐色粗粒砂（暗黄色粘土ブロックを多く含み、22層に含まれるブロック土によく似ている。）
28層からは遺物は出土していない。
※自然流路2と3の新古関係は不明。2・3→1は明らか。

Fig.98　条坊141次調査基本土層実測図（141SD160・170土層実測図）

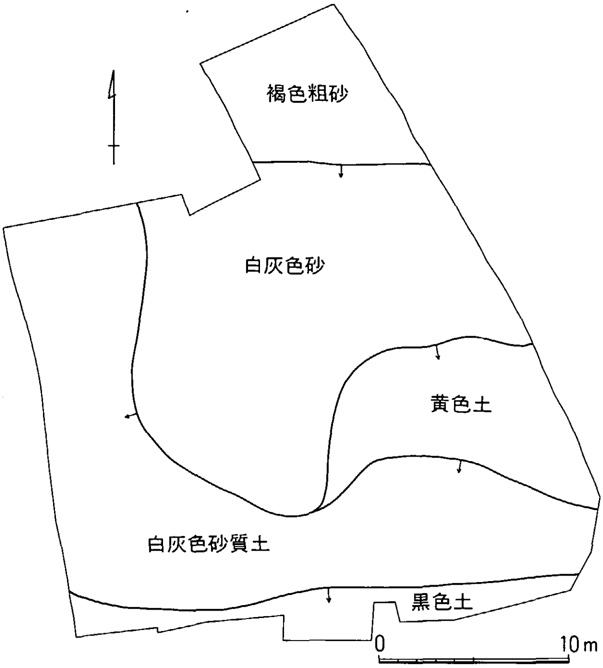


Fig.100　遺構検出面での土色変化模式図（1/400）

3）遺構

掘立柱建物

141SB110　東西4間（7.05m）、南北3間（4.50m）の掘立柱建物である。柱間は東西列が西から1.70・1.80・1.75・1.80m、南北列が北から1.45・1.45・1.60mと梁行に較べて桁行がやや長くなっている。柱痕跡はa・e・h・j・l・m・nで確認され、桁行北側で東から1.85・1.85・1.75mであり、推定される柱径は約0.2mである。柱掘り方はやや不整形な隅丸方形を呈しており、一辺約0.7〜0.9mである。深さは0.1〜0.5m程で、東側の方が残りが良い。埋土は明黄色の粘質土と灰色系の砂質土で構成される。とくに叩き締めた痕跡はみられない。主軸の振れはN-3°44′32″-Eである。141SD010・SE085に切られている。

141SB130　南北2間（3.6m）、東西1間（1.75m）の掘立柱建物である。柱間は南北列が北から1.70・1.90mを測る。掘り方は略円形で、径は0.40〜0.25m程である。深さは約0.3〜0.5mであり、埋土はおもに暗茶色土のものであった。主軸の振れはN-1°54′33″-Eである。

141SB140　東西2間（3.3m）、南北1間（3.3m）の正方形に復原される掘立柱建物である。柱間は東西列が1.65m等間である。掘り方は略円形で、径約0.2〜0.5mである。深さは約0.3mであり、埋土は暗茶色土である。主軸の振れはN-2°45′03″-Eである。

遺構番号	掘り方番号	遺構任意中点座標		方位(計測振れ)	方位(南北軸換算)
		X	Y		
141SB110	a	56,195.80	−45,451.42	N-3°44′32″-E	N-3°44′32″-E
	k	56,196.25	−45,458.30		
141SB130	a	56,180.55	−45,452.50	N-1°54′33″-E	N-1°54′33″-E
	c	56,176.95	−45,452.62		
141SB140	a	56,186.89	−45,452.67	N-2°45′03″-E	N-2°45′03″-E
	b	56,183.56	−45,452.83		
141SB150	a	56,187.34	−45,451.10	N-5°25′34″-E	N-5°25′34″-E
	f	56,187.70	−45,455.07		
141SA155	a	56,189.74	−45,460.05	N-96°23′50″-E	N-1°23′50″-E
	f	56,189.43	−45,447.34		

Tab.6　条坊141次調査主要遺構座標値（建物・柵）

141SB150　東西2間（4.0m）、南北1間（2.8m）の東西棟の掘立柱建物である。柱間は東西列が2.0m等間である。掘り方は略円形で、径約0.3〜0.4m

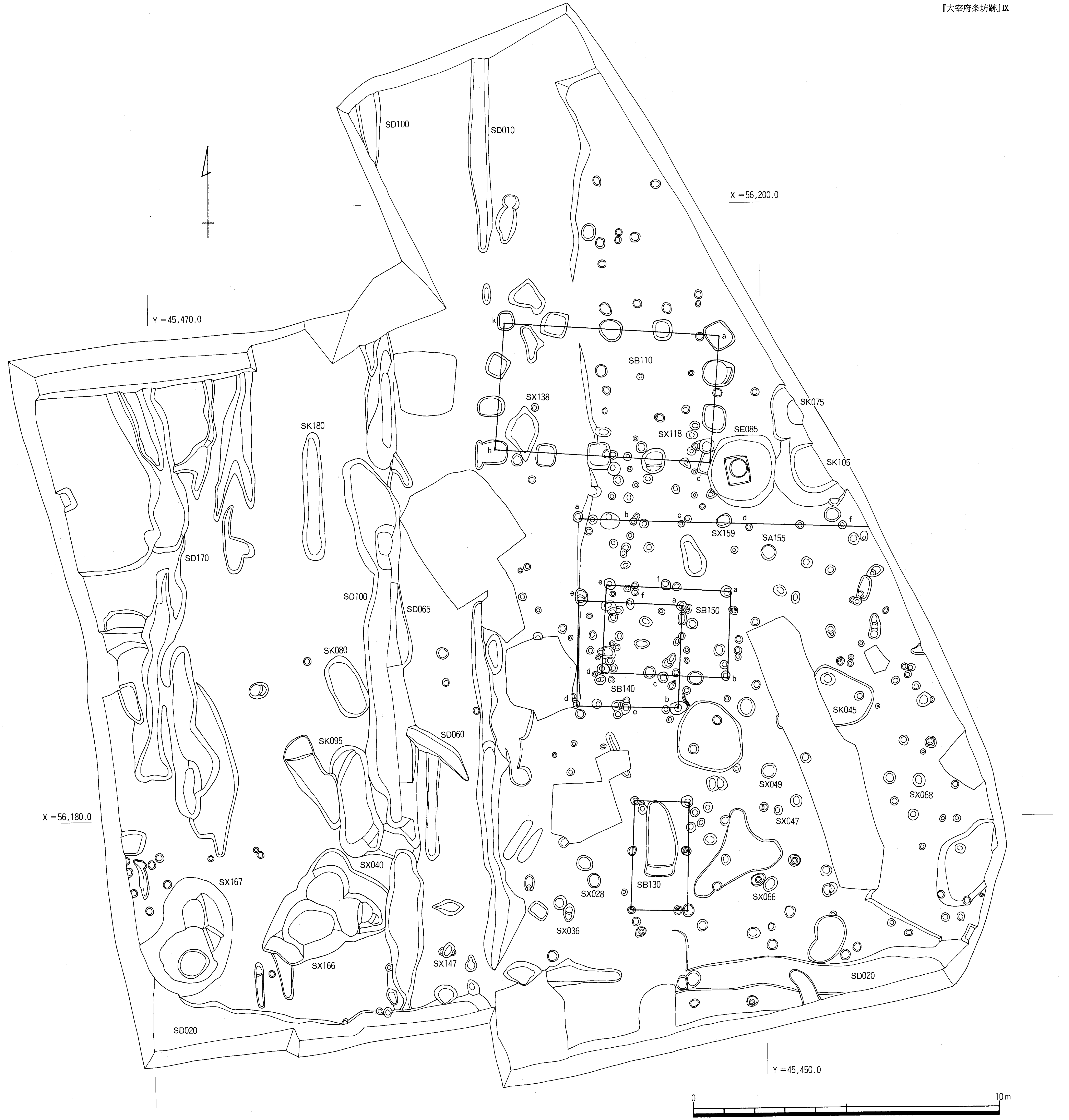


Fig. 99 条坊141次調査遺構実測図（1/100）

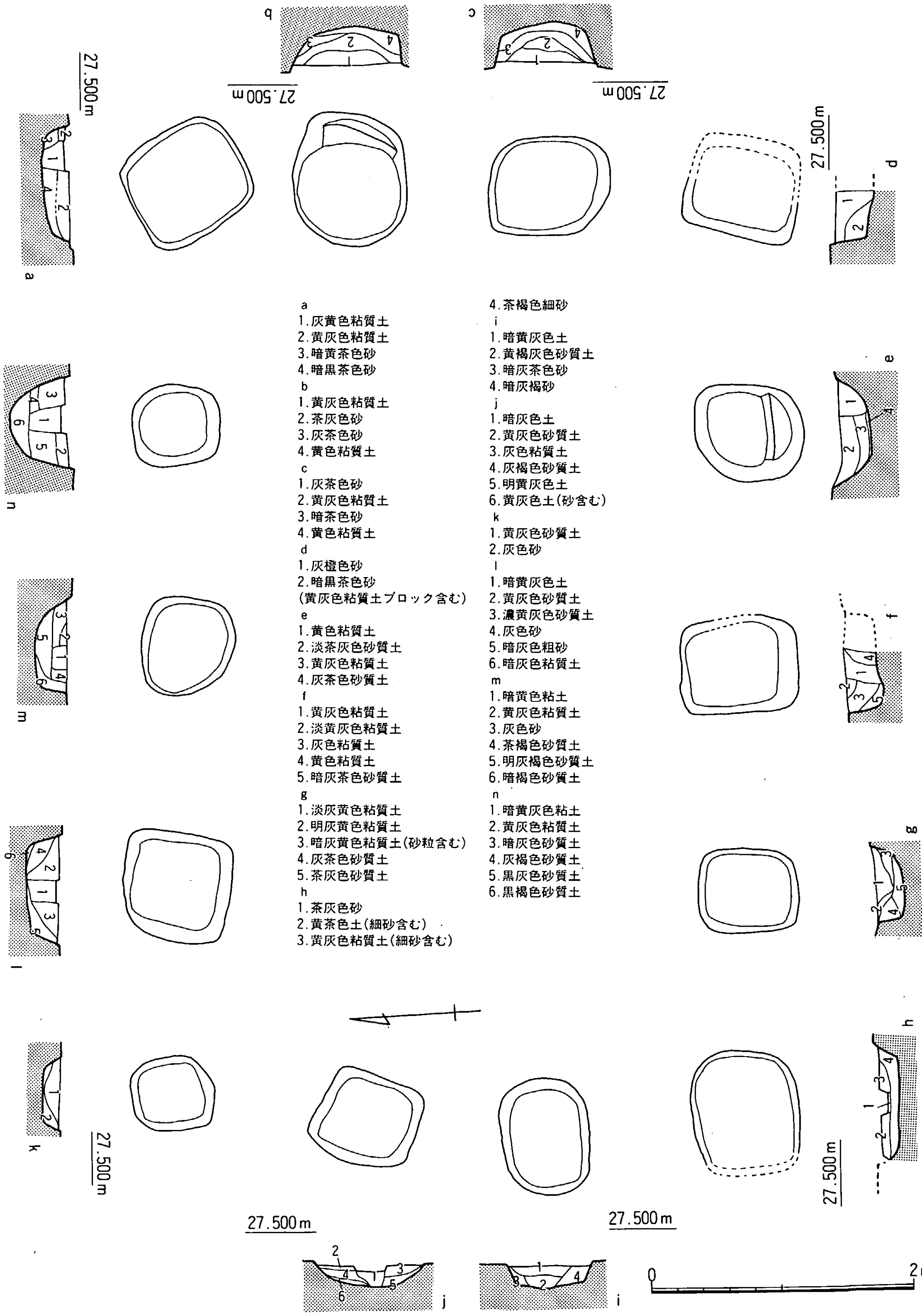


Fig.101　141SB110遺構実測図および土層断面図(1/50)

で深さは0.2m程である。主軸の振れはN－5°25′34″－Eである。141SB140と重複しているが、先後関係は不明である。

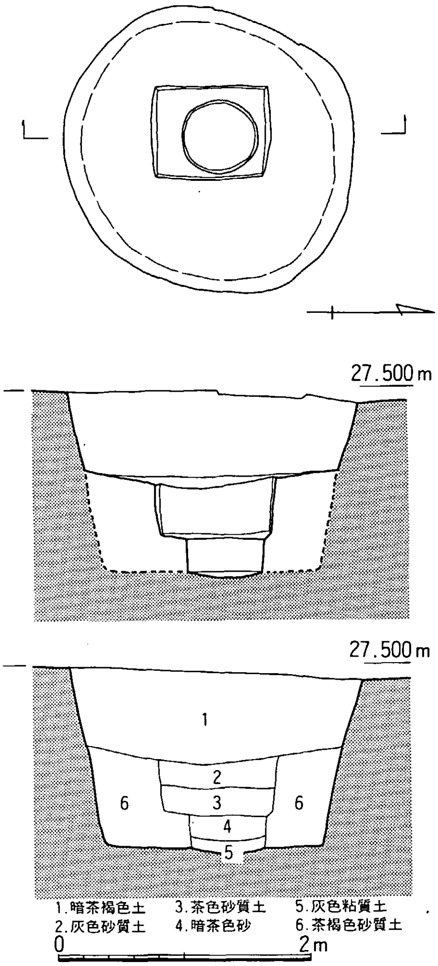


Fig.102 141SE085遺構実測図および土層断面図（1/60）

柵列

141SA155 東西方向の柵列と考えられる。6間（9.5m）以上で東側は調査区外に延びている。柱間は一定せず、西から1.85・1.60・2.15・1.70・1.40mである。西側の延長は穴底のレベルを考えると削平されている可能性もあるが、141SD010との関係を考えると141SD010の手前で止まる可能性が強い。掘り方はほぼ円形で、径は0.2～0.3m、深さは0.1m弱である。軸の振れはN－91°23′50″－Eで、南北軸で換算するとN－1°23′50″－Eとなる。

井戸

141SE085 調査区東端で検出した井戸である。141SB110dを切っている。井戸枠は上面から約0.8mの深さでプランを確認した。方形板組で底に円形の曲物を据えていたと推定できるが、木質は全く残存していなかった。枠は長辺約0.95m、短辺約0.7mの長方形を呈する。深さは約0.45m分を検出した。曲物は東に偏って設置されている。径は約0.6mで、深さは約0.3mである。掘り方は2.3～2.4mの略円形である。井戸底の標高は26.1mである。地山が砂層であることから、溜井ではなく湧水を利用するものであったと考えられる。

溝・流路

141SD010 調査区はほぼ中央で断続的に約29mにわたり検出した南北方向の溝である。東側に平行して走る141SD100と対になって道路の側溝を構成していると考えられる。幅は広いところで約1.0m、深さは約0.2mを測る。断面は緩いU字状をしている。埋土は全体に暗灰色から灰茶色の粘質土である。溝の振れはN－0°26′52″－Wである。

141SD020 調査区の南端で検出した東西方向の溝である。断続的に26m分を検出した。西端は北側に広がっている。幅は最大で1.4m以上、深さは0.3mである。断面は緩い逆台形をしており、埋土は黒色土を含む淡い灰黄色の粘質土である。やや蛇行しており自然流路の可能性も残る。

141SD060 141SD065・100を切っている東西方向の溝である。幅0.6m、深さ約0.2mを測り、

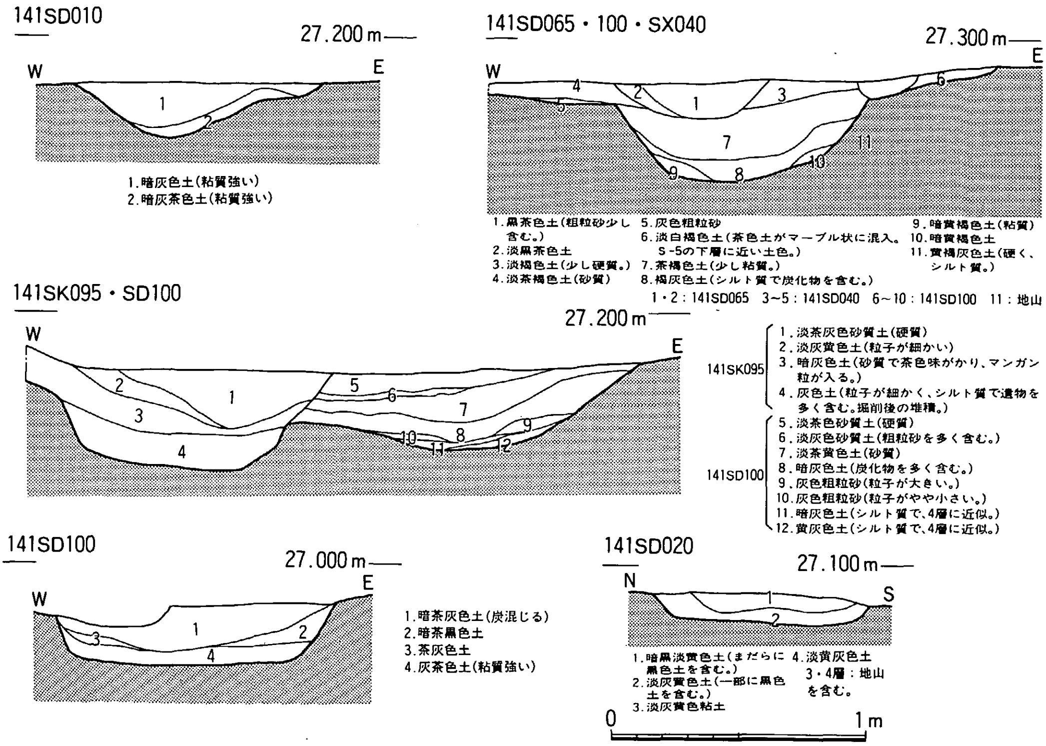


Fig.103 溝土層断面図(1/30)

断面形はU字状をしている。埋土は黒茶色の炭混じり土である。遺物はⅧ期までのものを含むが、切りあいを考えると12世紀代以降の所産と考えられる。溝の振れはN-56°37′06″-Wである。

141SD065 調査区中央で141SD100と重複して検出した溝である。長さ約6m分で幅約0.6m、深さ約0.15mで、断面偏平なU字状をしている。埋土は砂粒を含む黒茶色土である。141SD100とまったく重複しているが、141SD100との間に141SX040が存在しているので141SD100が埋没後141SX040が堆積し、さらにその後に141SD065が掘られていることがわかる。溝の振れはN-4°34′26″-Wである。

141SD100 141SD010と対になっている南北の溝である。道路側溝と考えられる。長さ約29mにわたり検出した。幅は約1～1.5m、深さは約0.7～0.9mと場所によってばらつきがある。ひとつは北側が削平が大きく溝の残りが悪いことが挙げられるが、溝底のレベルが違うのは使用

遺構番号	P*位置	遺構任意中点座標		方位
		X	Y	
141SD010	北P	56,204.59	−45,459.10	N-0°26′52″-W
	南P	56,175.16	−45,458.87	
141SD100	北P	56,202.34	−45,462.77	N-1°50′18″-W
	南P	56,174.61	−45,461.88	

＊北Pは溝検出北端に近い位置の任意中点　＊X方向の-値は政庁から南へ移動したことを示す
南Pは溝検出南端に近い位置の任意中点　＊Y方向の-値は中軸線から西へ移動したことを示す

Tab.7 条坊141次調査主要遺構座標値(溝)

されていたときからのものと考えられ、部分的な掘り直しなどを想定できる。溝の断面はおおよそ逆台形からU字状を呈している。埋土は細かな砂質のものから粘質土で構成されている。溝の振れはN-1°50′18″-Wである。

141SD160 調査区の南から北西部分で検出した大きな流路跡もしくは氾濫原である。流れは東から西方向と考えられる。西側を流れる現鷺田川の氾濫原であろう。土層の断面観察によると一度での堆積ではなく三度以上によるものと考えられる。堆積後には9世紀以降の遺構が乗っている。

141SD170 調査区西側で検出した南北方向の流路である。幅は約3.5～1.5m、深さ0.6mを測る。流れは南から北と考えられる。141SD160と同じく現鷺田川の氾濫原か旧河道の一部であろう。埋土は白黄茶色の砂質土である。141SD160の一部と考えてもよいかもしれない。

土壙

141SK045 攪乱で一部削平されている、不整形の土壙である。長軸約2.0m、短軸約1.5m、深さ約0.1mを測る。埋土は炭化物を含む黒茶色土である。土壙底からピットを検出したが、土壙とは直接の関係はないと考えられる。

141SK075 141SK105と切り合っている土壙で、多くが調査区外へ続いている。プランは略円形と考えられ二段掘りになっている。上段の直径約2.0mと推定される。下段は約0.9m、一段

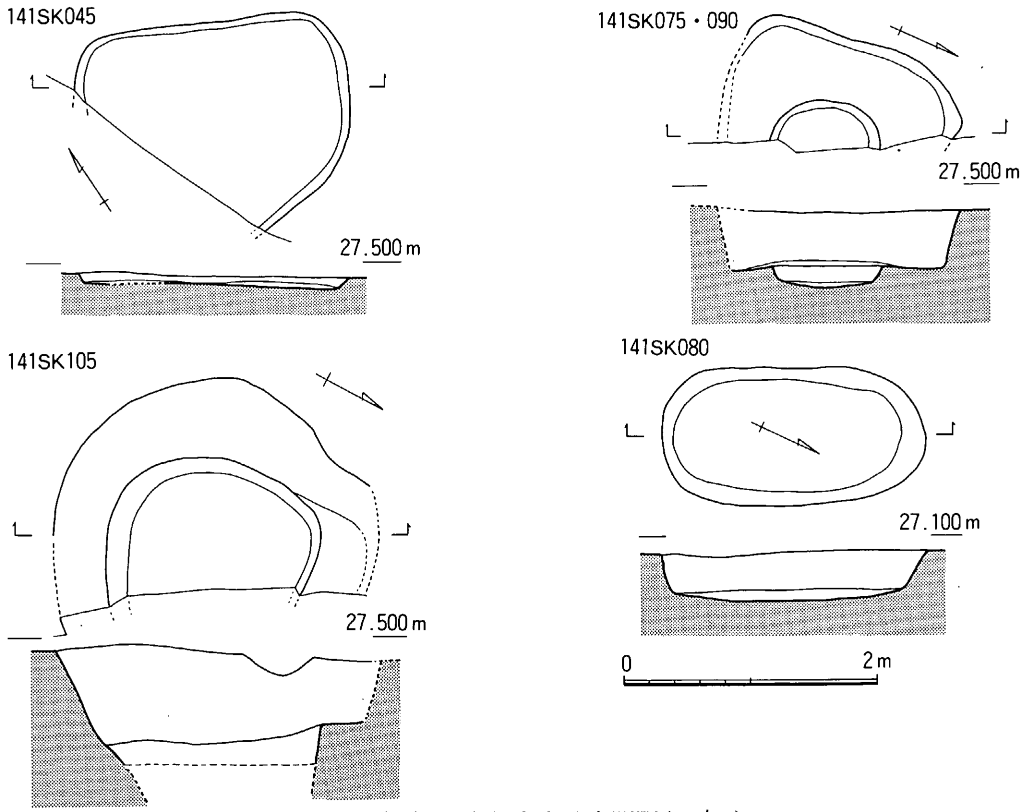


Fig.104 条坊141次調査土壙実測図（1/60）

目までの深さが約0.45m、二段目の深さ約0.15mである。

141SK080　141SD100のすぐ西側で検出した長円形の土壙である。長軸約2.1m、短軸約1.1m、深さ約0.4mを測る。埋土は薄い灰色から茶色をした砂質土で141SK095の埋土に似ている。

141SK095　141SD100の西側で141SD100を切っている長円形の土壙である。長軸約3.6m、短軸約1.0mを測る。埋土は灰色から茶色をした砂質土で上層は硬質である。

141SK105　調査区東端で141SK075に切られていて、約半分は調査区外に続いている。プランは円形と推定され、径約2.5mである。深さは約1.0m下げた所で、壁の崩落の危険があったため掘削を止めた。井戸の可能性も残る。

141SK180　141SD100の西側で検出した長土壙である。長軸約4.1m、短軸約0.7m、深さ約0.1mを測る。

その他の遺構

141SX028　楕円形のピットである。長軸約0.5m、短軸約0.4m、深さ約0.3mを測る。

141SX036　楕円形で二段掘りのピットである。長軸約0.6m、短軸約0.3m、深さが一段目約0.2m、二段目約0.3mを測る。

141SX040　141SD100・SK080・SK095の埋没後に堆積した溜まりと考えられる。または141SD065に切られているので堆積時期は、その間である。不整形で長辺約10.0m、短辺約3.0m、深さ約0.1mを測る。埋土は粗い砂を少し含んだ黒茶色土である。反転した西側の調査区では確認できなかった。141SX166やS-173に相当すると考えられる。

141SX047　直径約0.4mと0.3mのピット群である。深さはそれぞれ約0.2mと0.15mである。

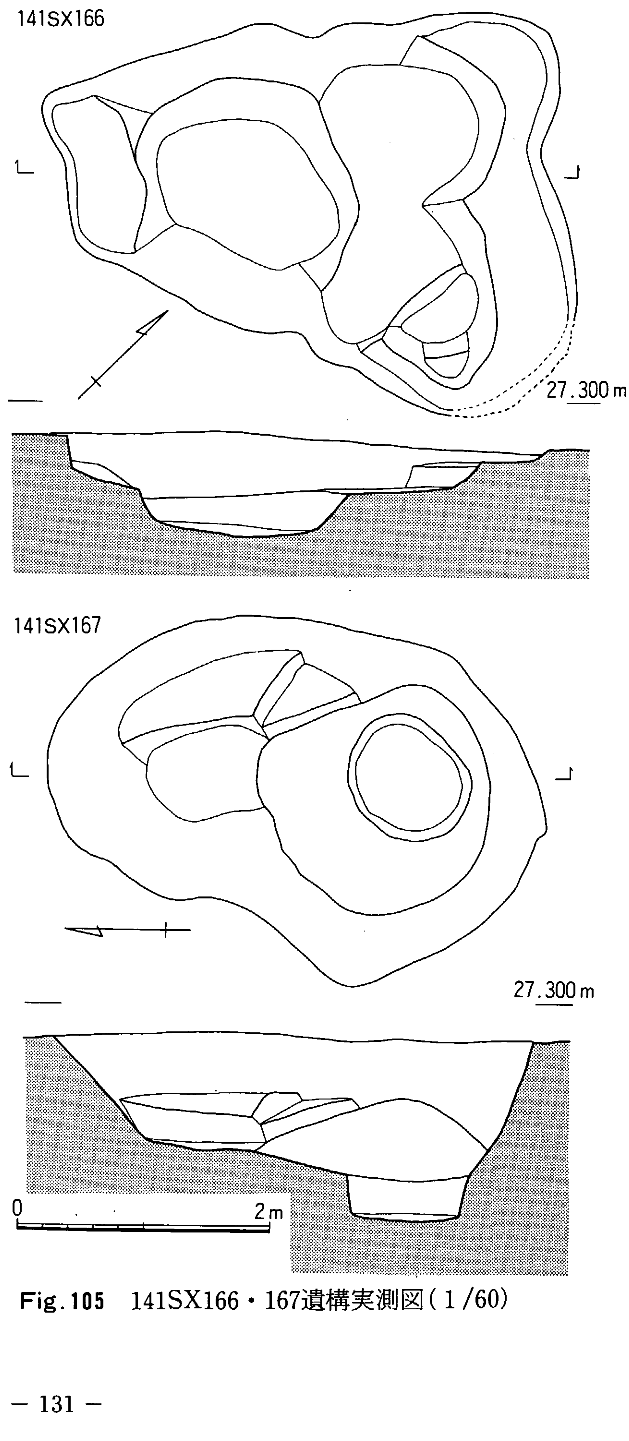


Fig.105　141SX166・167遺構実測図（1/60）

141SX049 直径約0.5m、深さ約0.05mを測るピットである。

141SX066 長円形をしたピットである。長軸約0.5m、短軸約0.4m、深さ約0.4mを測る。

141SX068 直径約0.4m、深さ約0.3mを測るピットである。

141SX118 楕円形をしたピットである。長軸約0.4m、短軸約0.3m、深さ約0.25mを測る。

141SX138 直径約0.25m、深さ約0.2mを測るピットである。

141SX147 不整形の粗い砂が詰まったピット群である。人工のものでなく、自然現象による窪みと考えられる。長辺が約0.6m、短辺約0.4m、深さ約0.1mである。

141SX159 隅丸長方形のピットである。長辺北側はオーバーハングしている。長辺約0.5m、短辺約0.4m、深さ約0.4mを測る。

141SX166 不整形の大きな溜まりと考えられる。長軸約4.5m、短軸約2.5m、深さ約0.7mを測る。埋土は上半が白色または茶色の礫混じりの砂層である。下半は底に向かって灰色シルトから小礫から大礫へと変化している。遺物は各層から出土している。土層の堆積状況からみて自然堆積と考えられる。

141SX167 調査区西端で検出した溜まりと考えられる楕円形の遺構である。141SD020にきられており、141SD170を切っている。長軸約4.0m、短軸約3.0mを測る。深さは最深部で約1.4mを測る。掘り方は一見すると井戸のようであるが埋土は141SX166と同様砂礫で構成されており、自然堆積と考えられる。 (城戸康利)

4）出土遺物

掘立柱建物出土遺物

141SB110 (Fig.106)

須恵器

坏c（1） 底部の破片で、推定高台径10.0cmを測る。内外面とも横ナデを施し、内面は淡灰色、外面は暗灰色を呈する。焼成は良好で硬質。柱掘り方ａ出土。

小坏（2） 口径9.8cmを測り、底部を欠損する。内外面とも横ナデを施し、暗褐灰色を呈する。焼成は良好で硬質。柱掘り方ｅ出土。

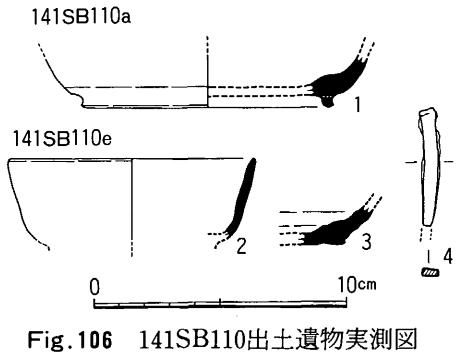


Fig.106 141SB110出土遺物実測図

坏a（3） 底部から体部にかけての破片で、底径は5.4～6.4cmくらいと思われる。底部はヘラ切りで、体部外面はヘラ削り後ナデを施す。内面は横ナデ後、底部に不定方向のナデを加える。焼成はやや良好で軟質、褐灰色を呈する。柱掘り方ｅ出土。

金属器

釘（4） 鉄製で、断面は長方形を呈する。現存長4.7cmを測る。柱掘り方ｅ出土。

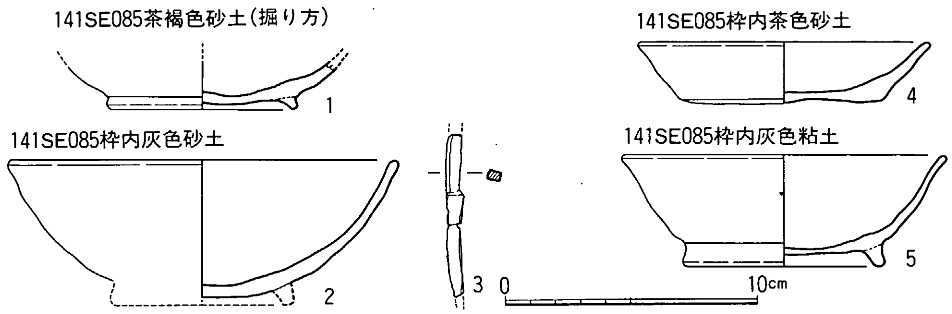


Fig.107　141SE085出土遺物実測図

井戸出土遺物

141SE085掘り方（Fig.107）

黒色土器

椀c（1）　底部の破片で、推定高台径7.6cmを測る。内面はミガキc、外面は横ナデを施す。内面暗灰黒色、外面暗灰色を呈する。B類。茶褐色砂土出土。

141SE085枠内（Fig.107）

土師器

坏a（4）　口径11.6cm、器高2.5cm、底径8.1cm。底部はヘラ切り。内外面とも横ナデを施し、見込みにはさらに不定方向のナデを加える。淡茶色を呈する。茶色砂土出土。

坏c（5）　口径12.9cm、器高4.45cm、高台径8.0cm。内外面とも横ナデを施し、見込みにはさらに不定方向のナデを加える。底部外面の調整は不明である。淡茶色を呈する。灰色粘土出土。

黒色土器

椀c（2）　口径15.5cm。内面はミガキc、外面は横ナデを施し、底部外面には板状圧痕が残る。高台は剥落している。内面暗茶黒色、外面淡黄茶色を呈する。A類。灰色砂土出土。

金属器

釘（3）　鉄製で、断面は正方形を呈する。現存長6.5cm。灰色砂土出土。

溝・流路出土遺物

141SD010（Fig.108）

土師器

小皿a（1・2）　1は口径10.2cm、器高1.8cm、底径7.0cm。底部はヘラ切り。その他は横ナデを施し、見込みにはさらに不定方向のナデを加える。微細な雲母片を含み、淡茶色を呈する。2は口径11.2cm、器高1.8cm、底径7.4cm。底部にはヘラ切り後、板状圧痕が残る。白色砂粒を多く含み、淡黄茶色を呈す。

椀a（3）　口径13.2cm、器高3.8cm、底径7.5cm。底部はヘラ切り。淡褐茶色を呈す。

椀c（4）　口径14.4cm、器高5.95cm、高台径9.2cm。底部はヘラ切りで、細く高い高台を持

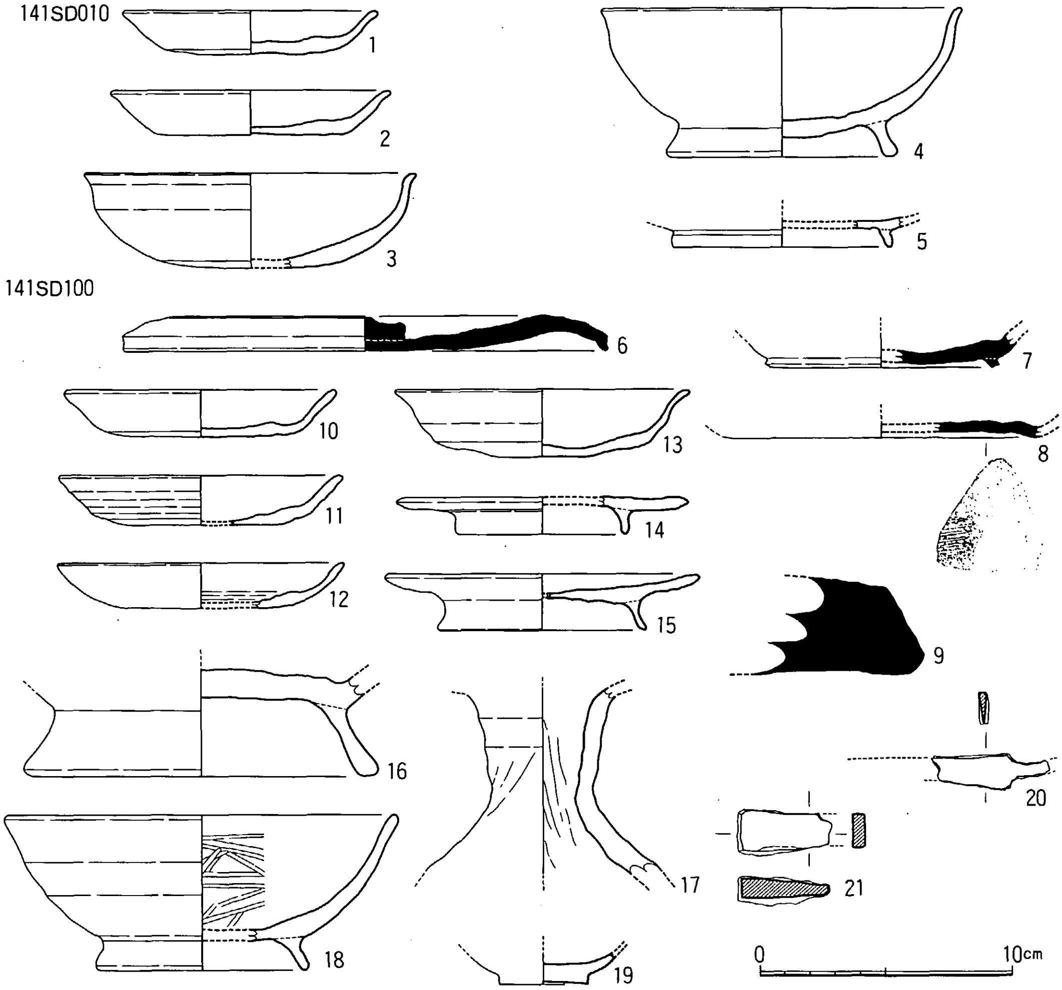


Fig.108　141SD010・100出土遺物実測図

つ。外面は横ナデを施すが、内面は磨滅が著しく、調整は不明。淡白茶色を呈する。

緑釉陶器

器種不明（５）　底部の小破片で、全体の器形は不明。推定高台径8.8cmを測る。胎土は暗灰色を呈し、硬質で、内外面とも施釉される。釉は光沢がある暗緑色で、全体に非常に細かい貫入が入る。皿ないしは椀と考えられる。

141SD100（Fig.108）

須恵器

蓋c３（６）　口径19.2cm、器高1.4cm。大きく歪む。天井部はヘラ削り後、偏平なつまみがつく。その他は横ナデ後、天井部内面に不定方向のナデを加える。白色砂粒を多く含み、硬質で、暗灰色を呈す。

坏c（７）　底部の破片で、推定高台径9.3cmを測る。底部はヘラ切り。硬質で、灰色を呈す。

皿（８）　推定底径12.0cmを測る。内外面ともナデを施し、底部外面にはさらにハケ目を入

れる。小破片で全体の形状がわからないため、他の器形の可能性も考えられる。硬質で、淡灰色を呈す。

器種不明（9） 平瓦を厚くしたような形状で、全体に横ナデあるいは不定方向のナデを施す。上面角には、ナデ調整時に生じたと思われる余剰粘土の皺が残る。白色砂粒を多く含み、やや硬質で、茶灰色を呈する。全体の形状が推定できない。

土師器

小皿a（10～12） 口径10.8～11.4cm、器高1.8～2.0cm、底径7.3～7.8cm。底部はすべてヘラ切りで、11はヘラ切り後、不定方向のナデを施す。その他の部分はすべて横ナデを施し、10・11はさらに見込みに不定方向のナデを加える。10は淡黄茶色、11は淡白茶色、12は淡茶色を呈す。

坏a（13） 口径11.7cm、器高2.7cm、底径8.5cm。体部は外側へ開き、上位で外反する。底部はヘラ切り。白色砂粒を多く含み、淡黄茶色を呈す。

小皿c（14・15） 14は口径11.6cm、器高1.55cm、高台径6.8cm。底部の調整は不明。白色砂粒を多く含み、淡橙茶色を呈す。15は口径12.5cm、器高2.25cm、高台径8.3cm。底部には板状圧痕が残る。その他は横ナデを施す。白色砂粒を多く含み、淡茶白色を呈する。

大椀c（16） 底部のみ残る。推定高台径14.0cm。底部外面は磨滅が著しく調整は不明。その他は横ナデを施し、見込みにはさらにハケ調整を行なった後、ナデを加える。白色砂粒をかなり多く含み、淡茶色を呈す。

壺（17） 頸部の破片である。外面と口縁部内面付近に、横ナデを施す。内外面ともにしぼり痕が残り、内面には指頭痕も残る。淡茶色を呈す。

黒色土器

椀c（18） 口径15.6cm、器高6.2cm、高台径8.5cm。底部はヘラ切り。外面は横ナデ、内面はミガキｃを施す。内面は茶黒色、外面は淡黄茶色を呈する。A類。

緑釉陶器

小椀（19） 推定底径3.5cm。底部は糸切り後未調整で、周りにナデを施し高台風に仕上げる。胎土は淡橙色でやや軟質。釉は光沢のある淡白緑色で、極く薄くかかる。小皿の可能性もある。

金属器

刀子（20） 鉄製。切先部分と茎部分の一部を欠損する。現存長4.7cm。

器種不明（21） 鉄製で一部欠損しており、全体の形状が定かではない。現存長3.75cm。

141SD020 (Fig.109)

土師器

小皿a（1） 口径10.6cm、器高2.4cm、底径7.4cm。体部は直線的に立ち上がり、底部との境は明瞭である。底部はヘラ切り後未調整で、凹凸が激しい。その他は横ナデを施す。白色砂粒を非常に多く含み、淡桃茶色を呈する。

丸底坏a（2） 口径14.8cm、器高3.7cm。底部はヘラ切り後板状圧痕が残る。白色砂粒をか

なり多く含み、淡黄茶色を呈す。

大椀c（3） 口径19.0cm、器高7.35cm、高台径10.4cm。体部は直線的に立ち上がる。体部外面下半から底部にかけて、ヘラ削りを行なう。その他は横ナデを施し、見込みにはさらに不定方向のナデを加える。白色砂粒を多く含み、明茶橙色を呈する。

鉢（4） 口縁から体部にかけての小破片で、推定口径19.4cmを測る。外面に、口縁端部形成のための、やや強い横ナデ跡が残る。白色砂粒を非常に多く、雲母を少量含み、淡黄茶色を呈する。

竈（5） 小破片のため全体の形状は不明。移動式竈の、上部孔から焚口上部の廂にかけての部分と思われる。内面上端部やや下からヘラ削りを施し、そのためにやや緩い稜がつく。その他の部分は横ナデを行なう。淡茶色を呈するが、火を受けたためか、廂端部から下側が部分的に黒変する。

焼塩壺（6・7） 6は体部の小破片であるが、外面に指頭痕、内面に布圧痕が残る。あまり大きな砂粒を含まず、やや硬質で、内面朱橙色、外面橙茶色（一部灰色）を呈する。I類か。7は表面の磨滅が著しいが、内面に指頭痕を残す。やや大粒の砂粒を多く含み、軟質で橙茶色を呈する。II類。

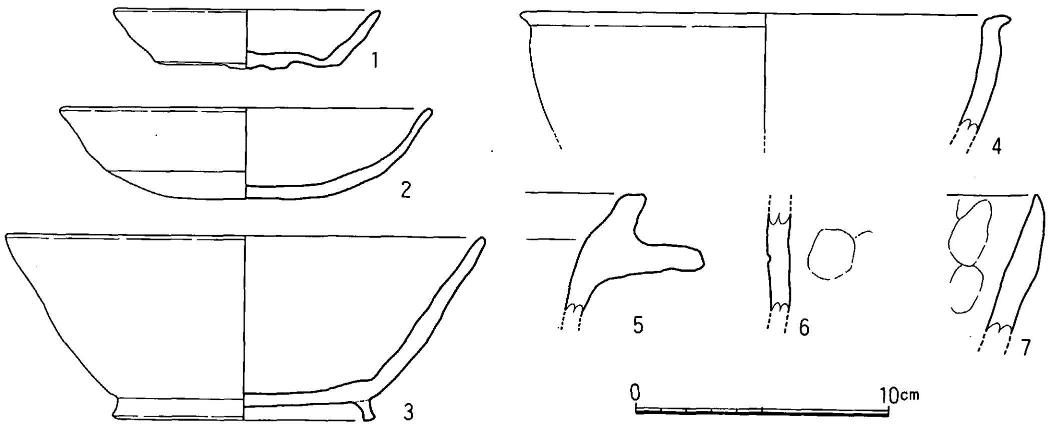


Fig.109 141SD020出土遺物実測図

141SD060 (Fig.110)

須恵器

小甕（1） 推定口径12.2cmを測る。全体に横ナデを施し、口縁端部は外側に傾く平坦面を持つ。小破片のため小甕以外の器形も考えられる。茶灰～灰色を呈する。

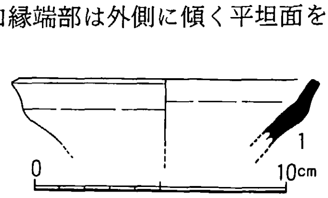


Fig.110 141SD060
出土遺物実測図

141SD065 (Fig.111)

土師器

小皿a（1・2） 1は口径10.0cm、器高1.4cm、底径7.9cm。全体に磨滅が著しく、底部の調整は判然としない。白色砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈す。2は口径10.8cm、器高1.5cm、底径7.8cm。底部にはヘラ切り後、約5.0mm幅の板状圧痕が残る。

その他は磨滅が著しく調整不明。白色砂粒をかなり多く含み、橙茶～灰茶色を呈す。

坏a（３） 口径11.0cm、器高2.2cm、底径6.5cm。底部はヘラ切り。淡橙黄色を呈す。

椀c（４～６） ４は高台径8.3cm。底部はヘラ切り後、細く高い高台がつく。その他は横ナデを施し、見込みにはさらに、ハケ様のもので丸くなでつけた痕跡が残る。橙茶色を呈する。５は高台径8.0cm。底部はヘラ切り。白色砂粒、雲母を少量含み、黄茶色を呈す。６は口径15.8cm、器高5.85cm、高台径8.8cm。高台はやや中央寄りにつく。体部は低い腰部から緩やかに立ち上がり、端部でわずかに外反する。底部はヘラ切り。白色砂粒をかなり多く含み、橙黄色を呈す。

壺（７） 推定底径11.8cmを測る。底部処理は磨耗が著しく不明。体部は内外面とも横ナデを施す。底部外面との境にやや強いナデが巡るが、意図的なものかどうかは不明。白色砂粒を非常に多く含み、内面黄灰色、外面白黄色を呈し、体部外面が一部黒変する。

鍋脚（８） 鍋本体との接合部分から剝離しており、端部を欠損する。現存長10.2cm。断面はほぼ円形に近く、縦方向のナデによって仕上げられる。接合後仕上げたものと思われ、接合部下方に、手がはいりにくかったのか、未調整部分が残る。白色砂粒を非常に多く含み、茶灰色を呈する。

白磁

皿（９） Ⅰ-１類の底部の破片と考えられる。推定高台径6.15cm。高台は丁寧な削り出しによるもので、内面から外面下半まで施釉される。釉は乳白色で光沢があり、極く薄くかかる。

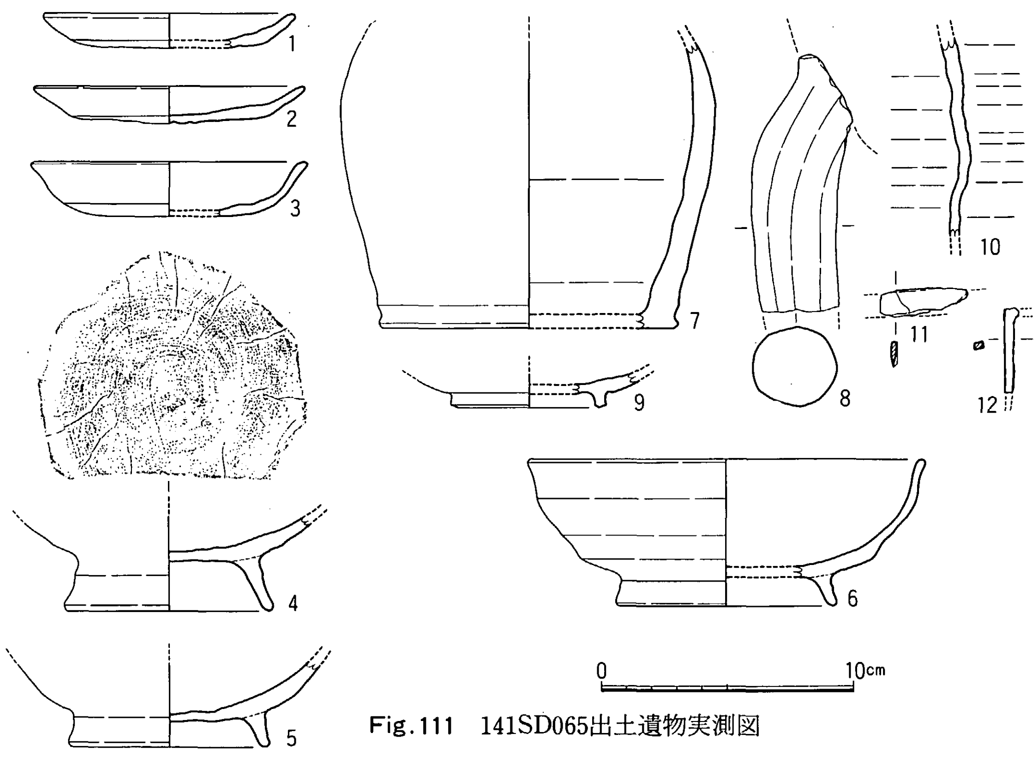


Fig.111 141SD065出土遺物実測図

朝鮮系無釉陶器

壺（10）　体部の一部と思われる。内外面とも横ナデを施し、成形時に、粘土を右上方に引き上げたと思われる痕跡が、外面に残る。硬質で、断面は黒灰色、表面は内外面とも光沢のある黒色を呈する。焼成前に何か塗布したのではないかと考えられる。

金属器

刀子（11）　鉄製で、切先部分と茎部分を欠損する。現存長3.5cm。

釘（12）　鉄製。両端部分を欠損する。断面は正方形を呈し、頭部は平たく押しつぶしている。現存長3.4cm。

141SD160（Fig.112～116）

須恵器

蓋a１（１）　口径12.9cm、器高2.3cm。天井部はヘラ切り後軽くなでつけ、ヘラ記号を付す。その他は横ナデを行ない、かえりは口縁端面よりもわずかに下方へ出る。硬質で青灰色を呈する。

蓋１（２・３）　２は口径12.4cm。器高がやや高めのドーム状を呈する。天井部はヘラ切り後ナデ、その他は横ナデを施し、天井部内面は不定方向のナデを加える。かえりは口縁端面よりも、わずかに内側へ後退する。硬質で、暗黒灰色を呈する。３は口径16.2cm。天井部は回転ヘラ削りを施す。その他は横ナデを施し、かえりは口縁端部と同一水平面をなす。天井部内面が平滑になっており、かえり部分まで薄い墨痕が残ることから、硯に転用したものと考えられる。硬質で、暗灰色を呈す。

蓋c１（４・５）　４は口径15.2cm。天井部は回転ヘラ削り後、宝珠状のつまみがつく。その他は横ナデを施し、天井部内面にはさらに不定方向のナデを加える。かえりは口縁端部と同一水平面をなす。やや硬質で、淡灰茶色を呈す。５は口径18.2cmを測るが、歪みが大きい。天井部は回転ヘラ削り後、偏平な擬宝珠状のつまみがつく。その他は横ナデを施し、かえりは口縁端面より大きく内側へ後退する。硬質で、暗灰色を呈し、内側には漆様のものが一面に付着する。

蓋２（６）　口径16.0cm。内外面とも横ナデを施す。全体に薄いつくりで、白色砂粒を非常に多く含み、やや軟質に焼け、灰橙色を呈する。蓋以外の可能性もある。

蓋c２（７）　口径16.0cm、器高2.0cm。天井部はヘラ削り後、偏平な擬宝珠状のつまみがつく。その他は横ナデを施し、天井部内面にはさらに不定方向のナデを加える。白色鉱物を非常に多く含み、硬質で、灰色を呈す。

蓋c３（８～10）　口径15.0～16.0cm、器高2.15～3.35cm。いずれも偏平なボタン状のつまみがつき、口縁端部は精粗の差があるが断面三角形を呈している。胎土には白色砂粒が多く混入しており、焼成および還元も良好。８・９は天井部ヘラ切り後ナデを施し、９のみ体部との境付近のみヘラ削りを加える。10はやや器高が高くドーム状を呈する。８～10とも天井部以外は横ナデを施し、天井部内面にはさらに不定方向のナデを加える。

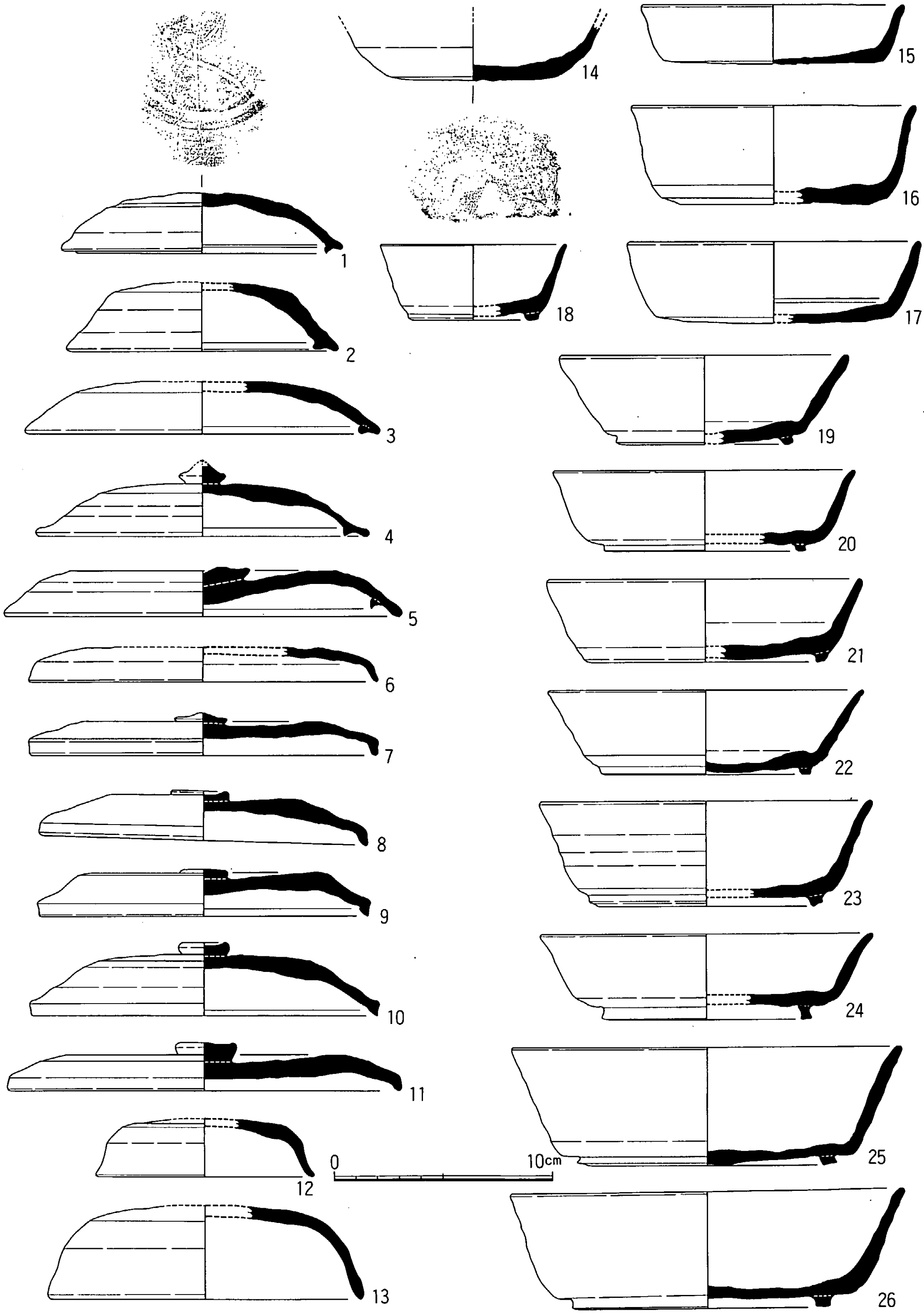


Fig.112　141SD160出土遺物実測図(１)

大蓋c 3 （11） 口径18.0cm、器高2.2cm。天井部は回転ヘラ削り後、ボタン状のつまみがつく。その他は横ナデを施し、天井部内面にはさらに不定方向のナデを加える。口縁端部は丸味が強く、内側へ稜を持たない。硬質に焼けるが、還元不良。

壺蓋（12・13） 12は口径10.0cm。天井部は回転ヘラ削り、その他は横ナデを施し、天井部内面にはさらに不定方向のナデを加える。硬質で、淡灰～灰色を呈する。13は口径14.4cm。天井部はヘラ削り、その他は横ナデを施し、天井部内面にはさらに不定方向のナデを加える。天井部と体部との境は明瞭でなく、緩やかなドーム状を呈する。白色砂粒を多く含み、内面灰色、外面淡青灰色を呈す。

坏a（14・16・17） 14は底径7.6cm。底部はヘラ切り後ナデを施し、ヘラ記号を加える。その他は横ナデを施し、見込みにはさらに不定方向のナデを加える。焼成不良で、内面淡茶色、体部外面淡灰色、底部外面灰色を呈す。16は口径13.0cm、器高4.55cm、底径10.3cm。体部下半より底部にかけてヘラ削り、その他は横ナデを施し、見込みにはさらに不定方向のナデを加える。白色砂粒を非常に多く含み、硬質で、内面淡茶灰色、外面灰茶色を呈す。壺蓋の可能性も考えられる。17は口径13.4cm、器高3.8cm、底径10.7cm。底部はヘラ切り後ナデ、その他は横ナデを施し、内面には工具による横ナデ跡が残る。底部外面と体部の境から上方へ約8.0mmの幅が、磨れて平滑になっている。硬質で、淡灰色を呈す。

小坏c（18） 口径8.6cm、器高3.5cm、高台径6.0cm。底部の処理は不明。その他は横ナデを施し、見込みにはさらに不定方向のナデを加える。白色砂粒を非常に多く含み、硬質で、暗灰色を呈す。

坏c（19～24） 口径13.2～15.2cm、器高3.75～4.85cm、高台径8.1～11.0cm。底部の処理は、19・20・22・24がヘラ切り後ナデを施し、22には2.5～4.0mm幅の板状圧痕も残る。21・23については不明。いずれも見込みにはさらに不定方向のナデを加える。19・23はやや焼成不良で、淡黄灰色を呈すが、その他は硬質で、淡灰～灰色を呈する。

大坏c（25・26） 25は口径17.8cm、器高5.45cm、高台径11.8cm。底部はヘラ切りで、その他は横ナデを施す。やや軟質に焼け、淡白茶色を呈する。26は口径18.0cmを測るが、歪みが著しい。底部はヘラ切り後、簡単なナデを施す。その他は横ナデを施し、見込みにはさらに不定方向のナデを加える。白色砂粒を多く含み、硬質で、淡灰～暗灰色を呈す。

皿a（15・27～30） 口径12.0～21.0cm、器高1.8～2.75cm、底径10.0～18.0cm。底部の調整は15・27・29がヘラ切り、28・30が回転ヘラ削りである。いずれも見込みに不定方向のナデを加えている。27・29・30はやや焼成不良、淡灰色を呈す。15・28は硬質で、淡灰～茶灰色を呈す。

高坏（31） 口径21.0cm。内外面とも横ナデを施し、見込みにはさらに不定方向のナデを加える。外底中央付近には、軸部の剝離痕が残る。硬質で、淡灰色を呈し、外面の方が灰色味が強い。

小壺（32・33） 32は口径10.5cm、肩部の径は12.6cmを測る。内外面とも横ナデを施す。体

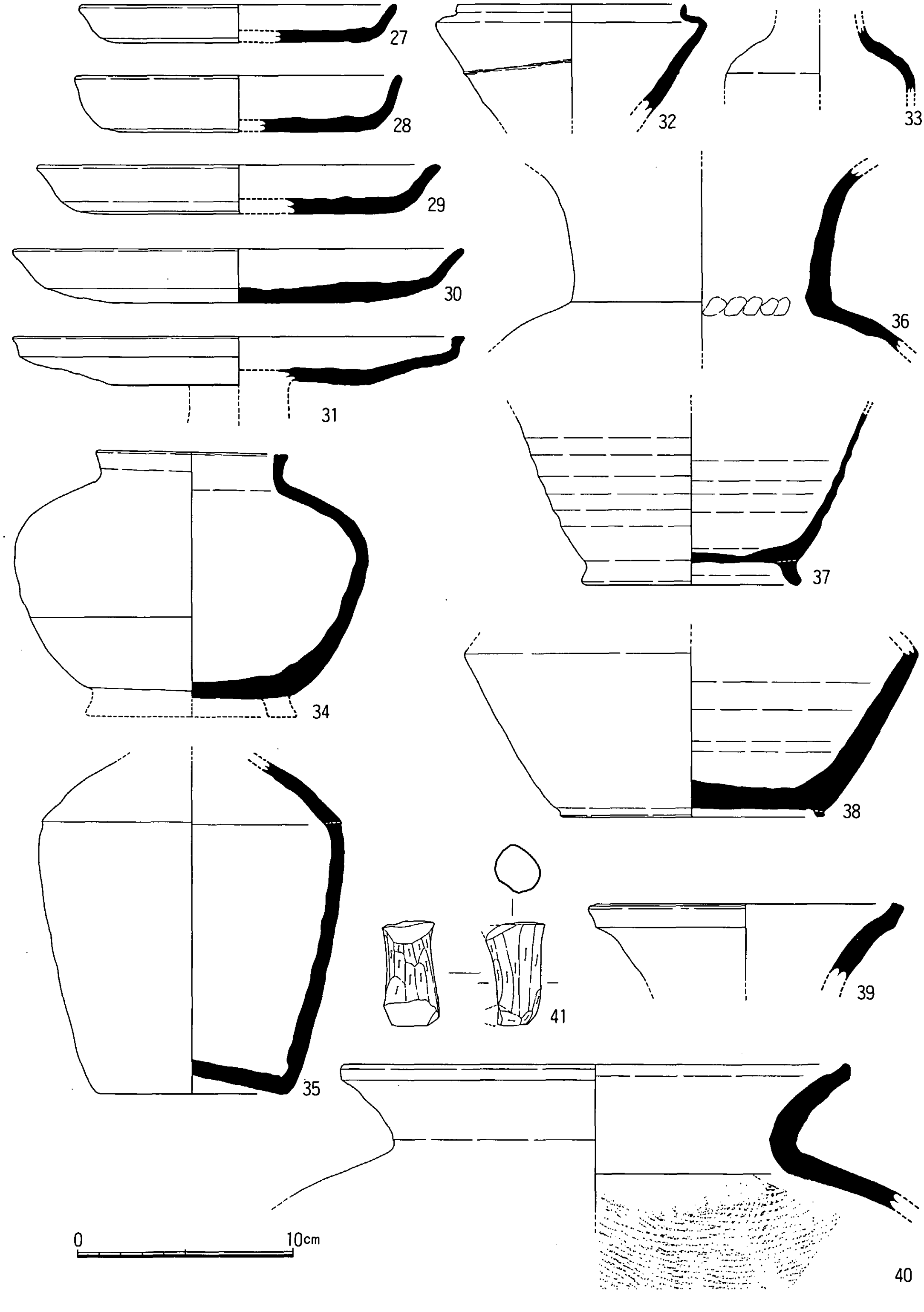


Fig.113　141SD160出土遺物実測図(2)

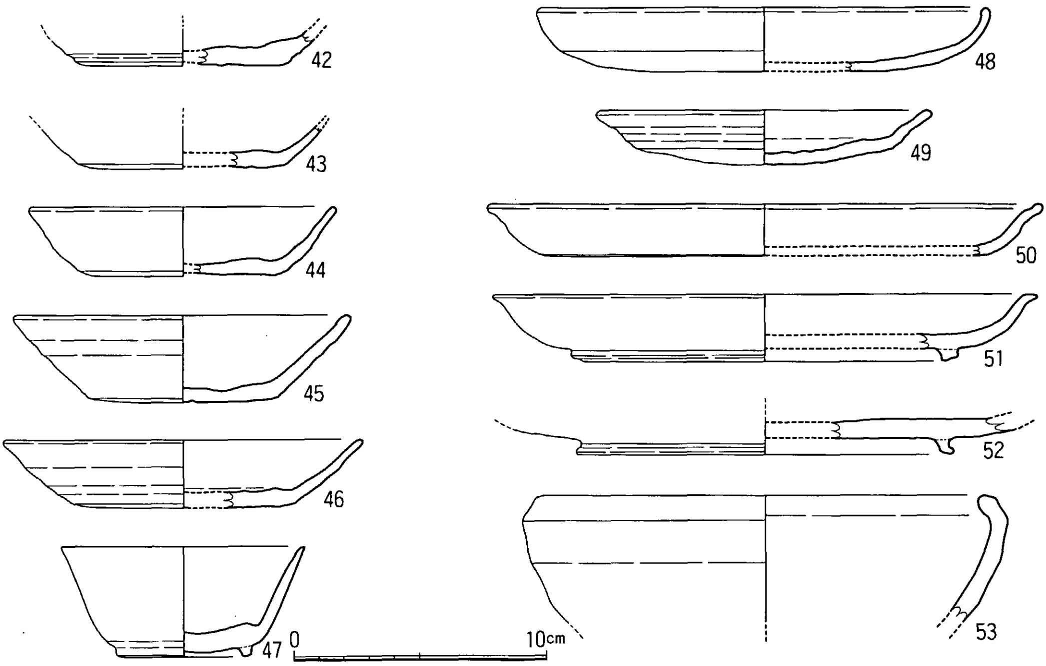


Fig.114 141SD160出土遺物実測図(3)

部中ほどに、重ね焼きによる粘土の溶着痕が残り、これより上位で暗灰色、下位で灰色を呈す。内面は淡茶灰色を呈する。33は肩部の小片である。内外面とも横ナデを施し、硬質で、淡灰茶色を呈する。

壺（34～38） 34は壺aで、口径8.9cm。底部はヘラ切りで、高台剝離痕が残る。体部下半にヘラ削りを行なう他は、横ナデを施し、体部内面下半から底部にかけては、さらに不定方向のナデを加える。硬質で、内面暗灰赤色、外面暗灰色を呈する。35は壺fと考えられ、頸部より上方を欠損する。底径8.9cm、体部の最大径は14.2cmを測る。肩部で上下を接合しており、外面は肩部より上位で横ナデ、下位で横方向のハケ調整後ナデ、さらに体部下方から底部にかけては、回転ヘラ削りを施す。内面は全体に横ナデ、底部内面には不定方向のナデを施す。硬質で、内面灰色、外面茶灰色を呈する。36は内外面とも横ナデを施し、頸部と肩部の接合部内面には、接合時の指頭痕が残る。硬質で、茶灰色を呈し、外面肩部には濃褐色の自然釉がかかる。搬入品と考えられる。37は高台径10.2cmを測り、内外面とも横ナデを施す。非常に器壁が薄く、体部下半には補修痕跡が残る。微細な雲母片を多く含み、やや硬質で、淡灰茶色を呈す。38は壺bで、高台径12.3cm。肩より上方が、接合部より剝離するかたちで欠損する。底部の調整は不明。体部外面は回転ヘラ削りを行ない、肩部付近には接合時のナデが加わる。内面は横ナデを施し、底部にはさらに不定方向のナデを加える。白色砂粒を非常に多く含み、器面は粗く、淡～暗青灰色を呈す。

甕（39・40） 39は口縁の破片で、推定口径14.6cmを測る。外反した頸部から上方にのびる

口縁部がつく。端部は平坦につくる。焼成がやや不良で、内面橙茶色、外面黄茶色を呈す。40は推定口径23.7cm。体部内面は平行タタキ、その他は横ナデを施す。硬質で、内面暗灰色、外面灰色を呈し、外面から頸部内面にかけて、部分的に自然釉がかかる。

脚（41）　上端は剝離面で鉢などにつく脚だと思われる。先端を欠損するが、全体にヘラ削りによる丁寧なつくりである。高さ4.9cm。白色砂粒を多く含み、硬質で、灰色を呈す。

土師器

坏a（42～46）　口径12.2～14.3cm、器高2.75～3.45cm、底径7.55～8.8cm。底部はヘラ切りで、その他は横ナデを施し、44～46は見込みに不定方向のナデを加える。色調は明橙～橙茶色を呈す。

小坏c（47）　口径9.6cm、器高4.4cm、高台径5.3cm。磨滅が著しく、底部処理は不明。淡赤褐色を呈す。

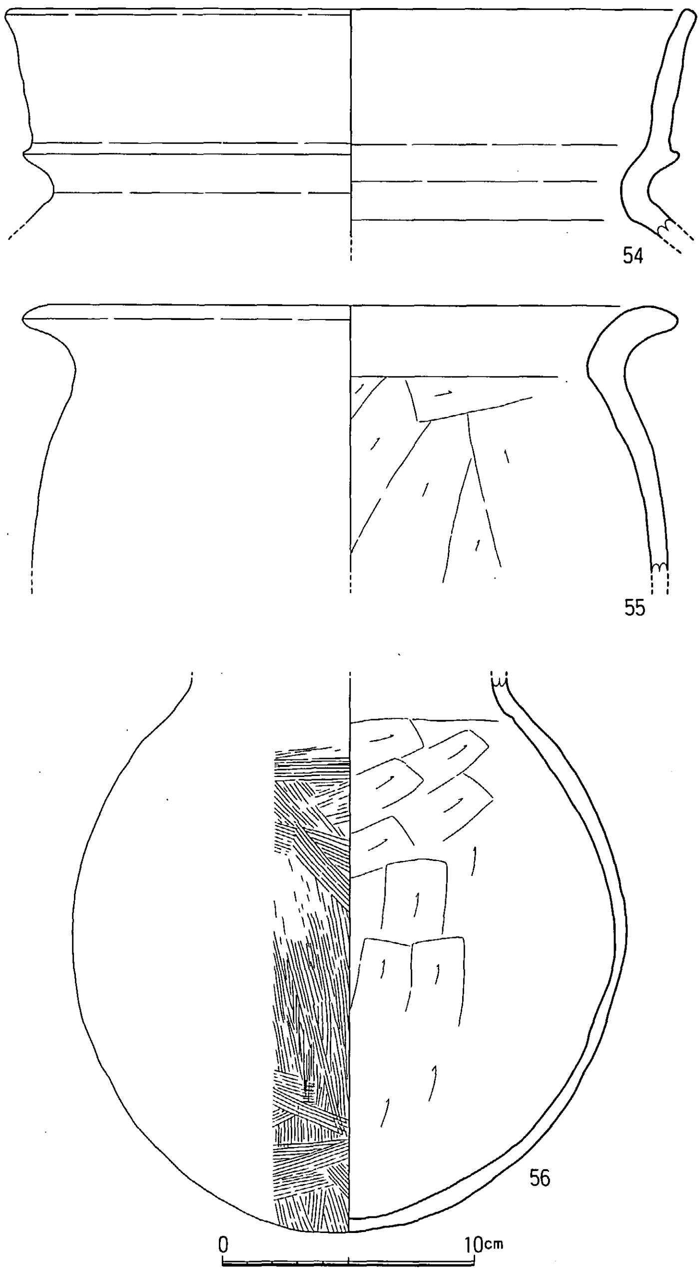


Fig.115　141SD160出土遺物実測図（4）

皿（50）　口径22.0cm。底部の調整は不明。その他は横ナデを施す。橙茶色を呈する。

皿a（49）　口径13.4cm、器高2.2cm、底径10.2cm。底部はヘラ切りで、その他は横ナデを施す。硬質に焼け、暗橙茶色を呈する。

皿b（48）　口径18.0cm、器高2.6cm、底径16.2cm。全体に磨滅が著しい。濃橙茶色を呈す。

皿c（51・52）　51は口径21.6cm、器高2.7cm、高台径15.4cm。磨滅が著しい。淡黄茶色を呈す。52は高台径15.0cm。全体に横ナデを施す。淡桃橙色を呈する。

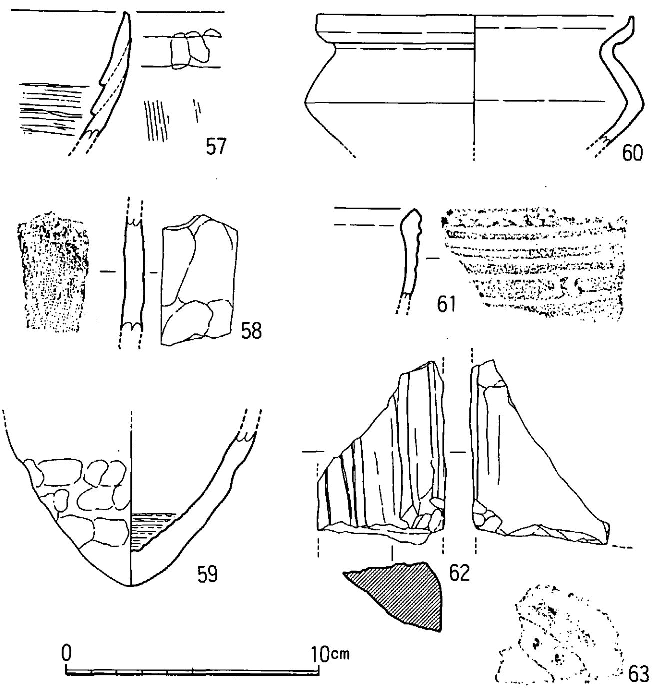


Fig.116 141SD160出土遺物実測図(5)

鉢(53) 口径18.25cm。体部下半はヘラ削り、その他は横ナデを施す。橙茶色を呈する。

壺(54) 推定口径27.4cmを測る。体部内面はヘラ削りを行ない、頸部との境は稜をなす。その他は横ナデを施す。細かい白色砂粒を非常に多く含み、橙茶色を呈する。

甕(55・56) 55は口径26.0cm。体部内面はヘラ削り、外面はハケ調整、口縁部は内外面とも横ナデを施す。白色砂粒、微細な雲母片を多量に含み、明淡橙茶色を呈する。56は口縁部を欠損する。内面はヘラ削り、外面はやや細かいハケ調整を施す。白色砂粒をかなり多く含み、内面淡灰褐色、外面淡茶色を呈する。

焼塩壺(57～59) 57はII類と思われる破片で、粘土紐の接合痕跡が明瞭である。内面は横方向、外面は縦方向のハケ調整を施し、口縁部付近はナデによって仕上げる。白色砂粒を多く含み、やや硬質で、淡桃茶色を呈する。58はI類と思われる破片である。外面に指頭痕、内面に布目痕が残る。布目は非常に目の細かいものと、やや粗めのものの二種に分けられる。白色砂粒をやや多く含み、硬質に焼け、茶灰色を呈する。59はII類と思われる底部の破片である。外面に指頭痕、内面には同心円の当て具痕が残る。白色砂粒を非常に多く含み、軟質でくすんだ橙茶色を呈する。

縄文土器

浅鉢(60) 口径12.5cm。底部を欠損する。胴中位で強く屈曲して稜をなし、口縁は外へ開き、端部で直立する。全体に横ナデを施す。極く小さな白色砂粒を少量含み、暗褐色を呈する。黒川式(後期)と考えられる。

鉢(61) 口縁部の小破片で肥厚した口縁を持ち、外面に沈線による文様を施す。胎土はやや粗く、白色砂粒、鉱物を非常に多く含み、暗黒褐色を呈す。鐘崎式(後期)と考えられる。

石製品

砥石(62) 二面残るうちの一面は、使用のために表面が平滑になる。もう一面は縦筋が数条残り、刃を立てて研ぐのに使用されたものかどうかは判断できない。砂岩製で、淡茶褐～暗

黒茶色を呈す。現存長7.3cm、幅5.1cm、厚さ5.5cm。

瓦類

軒丸瓦（63） 小片のため分類不明。白色砂粒を多く含み、焼成がやや不良で、淡灰茶色を呈す。

141SD170（Fig.117）

須恵器

蓋３（１） 口径12.8cm。天井部はヘラ切り後ナデを施す。その他は横ナデを施し、天井部内面にはさらに不定方向のナデを加える。硬質で、青灰色を呈し、口縁端部内面から体部外面中位にかけて、部分的に自然釉がかかる。

坏c（２） 口径12.2cm、器高3.2cm、高台径9.0cm。底部はヘラ切り後、軽くナデを施す。その他は横ナデを施し、見込みにはさらに不定方向のナデを加える。硬質で、暗灰色を呈す。

壺（３） 体部下半から底部にかけての破片で、推定底径12.8cmを測る。内面は粗い横ナデを施した後、部分的に粗い布目痕がつく。体部外面は右下りの平行タタキを施したのち、軽く

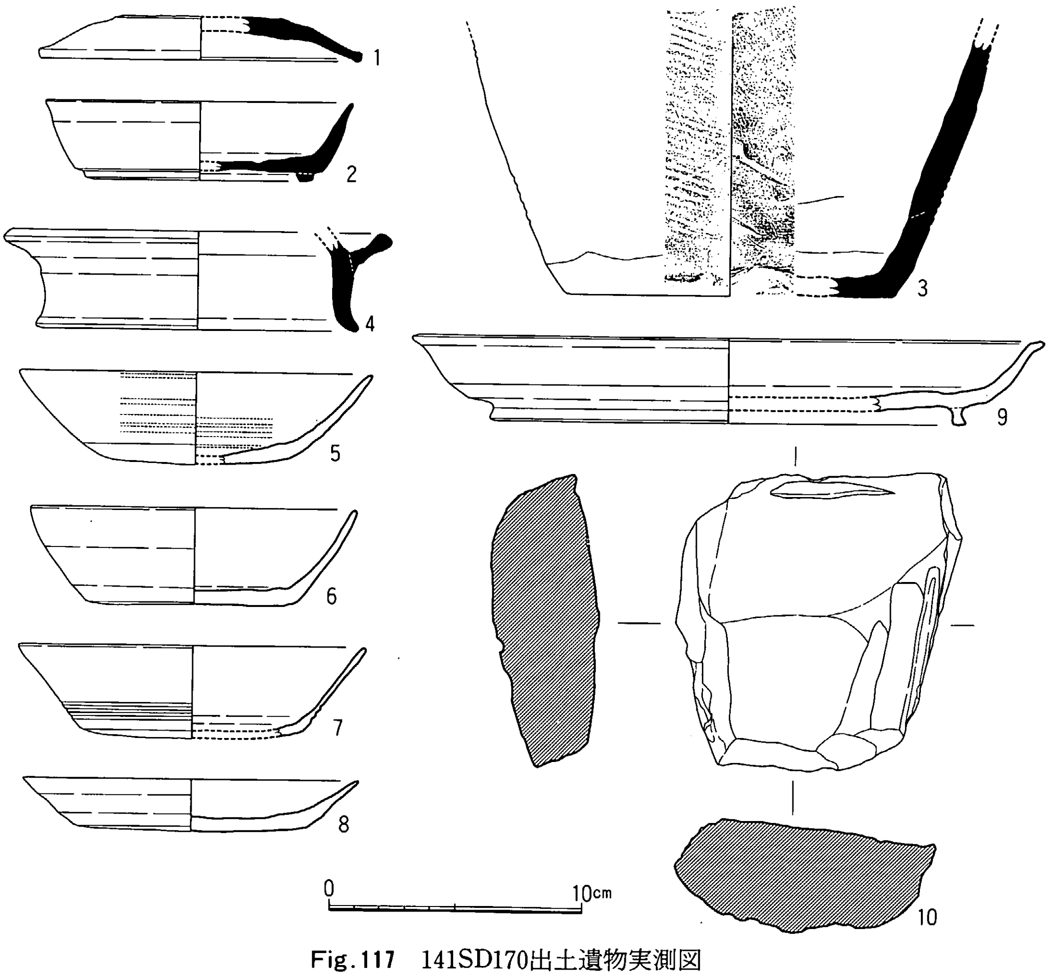


Fig.117　141SD170出土遺物実測図

ナデを行ない、最下部に回転ヘラ削りを施し、底部との境を形づくる。1.0〜2.0㎜の黒灰色軟質粒子を含み、焼成がやや不良で、明灰色を呈す。

硯（４） 最大径15.4cm、底径12.8cm。円面硯の外堤から圏台にかけての破片と思われる。全体に横ナデを施し、圏台に外堤を接合した跡が残る。内外面とも黒灰色を呈し、部分的に自然釉がかかる。

土師器

坏a（６・７） いずれも底部処理はヘラ切りで、その他は横ナデを施す。６は口径12.9cm、器高3.9cm、底径8.3cm。白色鉱物を含み、内面から体部外面上半にかけては明橙色、以下黄色を呈する。７は口径13.8cm。外面体部下半に、浅い沈線様のものが三条巡るが、意図的なものかどうかはわからない。赤色粒子を少量含み、明橙〜黄白色を呈す。

坏d（５） 口径14.0cm、器高3.7cm、底径7.6cm。ヘラ切り後、底部から体部下位にかけて回転ヘラ削りを施す。その他は内外面とも横ナデ後、粗いミガキａを施す。金雲母を含み、明〜暗橙色を呈する。また、炭化物が底部内外面に顕著に付着している。

皿a（８） 口径13.3cm、器高2.1cm、底径9.2cm。底部はヘラ切り後、軽くナデを施す。その他は横ナデを施し、見込みにはさらに不定方向のナデを加える。明橙色を呈す。

大皿c（９） 口径25.0cm、器高3.4cm、高台径18.8cm。体部外面下半から底部にかけて回転ヘラ削りを施した後、高台を貼付。明橙色を呈す。

石製品

砥石（10） 使用痕跡は１面のみ確認した。表面は平滑になっており、中央で横に稜が入る。右下に縦方向が３条、上に横方向が１条と、角を研いだ様な跡が溝状に残る。やや軟質で多孔質の火成岩製で、灰白色を呈する。現存長11.8cm、幅11.3cm、厚さ4.6cmを測る。

土壙出土遺物

141SK045（Fig.118）

土師器

小皿a（１〜３） 口径9.8〜10.4cm、器高1.2〜1.9cm、底径7.6〜8.3cm。底部処理は１・３がヘラ切り、２は不明。１の底部外面には板状圧痕が残り、２・３は見込みに不定方向のナデ痕跡が残る。色調は淡黄茶〜淡茶色を呈す。

丸底坏a（４〜７） 口径15.4〜16.2cm、器高3.15〜3.6cm。底部はヘラ切り後、丸く押し出す。７には約1.5㎜幅の板状圧痕が残る。その他は横ナデ、内面はミガキｂを施す。白色砂粒を多く含み、淡茶〜淡灰茶色を呈する。

黒色土器

椀c（８） 口径15.8cm。高台が剝落している。底部はヘラ切り。体部外面下半は横ナデ、その他は内外面ともミガキｃを施す。白色砂粒を多く含み、暗褐黒色を呈する。Ｂ類。

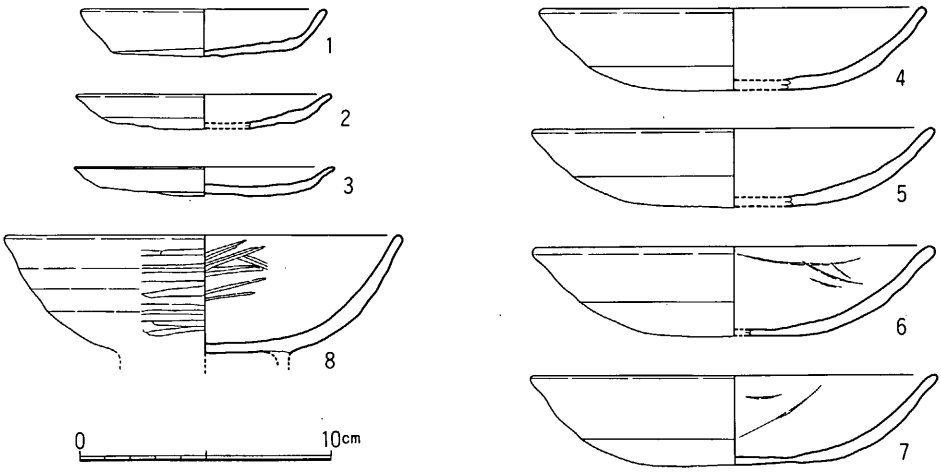


Fig.118　141SK045出土遺物実測図

141SK075（Fig.119）

朝鮮系無釉陶器

壺（1）　肩部の破片である。内外面とも横ナデを施す。内面暗青灰色、外面暗灰色、断面暗赤色を呈する。

141SK080（Fig.119）

土師器

小皿a（2・3）　2は口径10.6cm、器高1.8cm、底径7.7cm。底部はヘラ切り。白色砂粒を多く含み、灰茶色を呈する。3は口径11.4cm、器高1.7cm、底径7.6cm。磨滅が著しく、底部の調整は不明。白色砂粒を多く含み、橙茶色を呈する。

坏a（4）　口径12.2cm、器高1.85cm、底径9.0cm。磨滅が著しく、底部の調整は不明。全体に淡茶色を呈し、底部内外面は灰色味を帯びる。

椀c（5）　底部から体部にかけての破片で、推定高台径7.5cmを測る。底部はヘラ切り後、高台を貼付。淡黄茶色を呈す。

緑釉陶器

皿（6）　推定高台径7.1cm。小片のため全形が不明で、皿以外の器形の可能性もある。底部は糸切り後、高台を貼り付ける。釉は全体に極く薄くかけたのち、畳付部分のみカキ取る。光沢があり、淡黄緑色を呈す。胎土は茶灰色を呈し、硬質に焼ける。

141SK095（Fig.119）

須恵器

壺（7）　口縁部の小片で、推定口径18.2cmを測る。内外面とも横ナデを施す。白色砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。

土師器

小皿a（8・9）　8は口径11.2cm、器高1.9cm、底径9.0cm。磨滅が著しいが、底部には切

り離し後、細かいハケ目様の筋が残る。淡茶色を呈す。９は口径11.6cm、器高2.05cm、底径8.1cm。底部はヘラ切り。その他は横ナデを施し、見込みにはさらに不定方向のナデを加える。淡橙茶色を呈す。

坏a（10） 口径13.6cm、器高3.9cm、底径9.6cm。底部はヘラ切り。その他は横ナデを施し、見込みにはさらに不定方向のナデを加える。白色砂粒を多く含み、淡白茶色を呈す。

小椀c（11） やや歪んでいるが、口径8.7cm、器高3.45cm、高台径4.9cmを測り、高台の一部を欠損するのみである。底部処理は不明であるが、全体に横ナデを施し、見込みにはさらに不定方向のナデを加える。内面暗茶色、外面淡茶色を呈する。

椀（12） 口径14.2cm。磨滅が著しく、調整は不明。淡橙茶色を呈す。

黒色土器

椀c（13） 底部の小片で、推定高台径7.9cm。高台貼り付け後、内外面ともミガキｃを施す。内面のミガキは幅5.0㎜とやや粗い。内外面とも黒色を呈す。Ｂ類。

141SK105（Fig.120）

土師器

脚付鍋（１） 体部下半から脚にかけての破片で、推定底径17.5cmを測る。外面上半はハケ調整、下半はヘラ削りを施すと思われ、脚には取り付けの際の指頭痕が残る。内面は横ナデを行なう。白色砂粒を非常に多く含み、内面淡茶色、外面淡橙色を呈す。また外面下半には、一

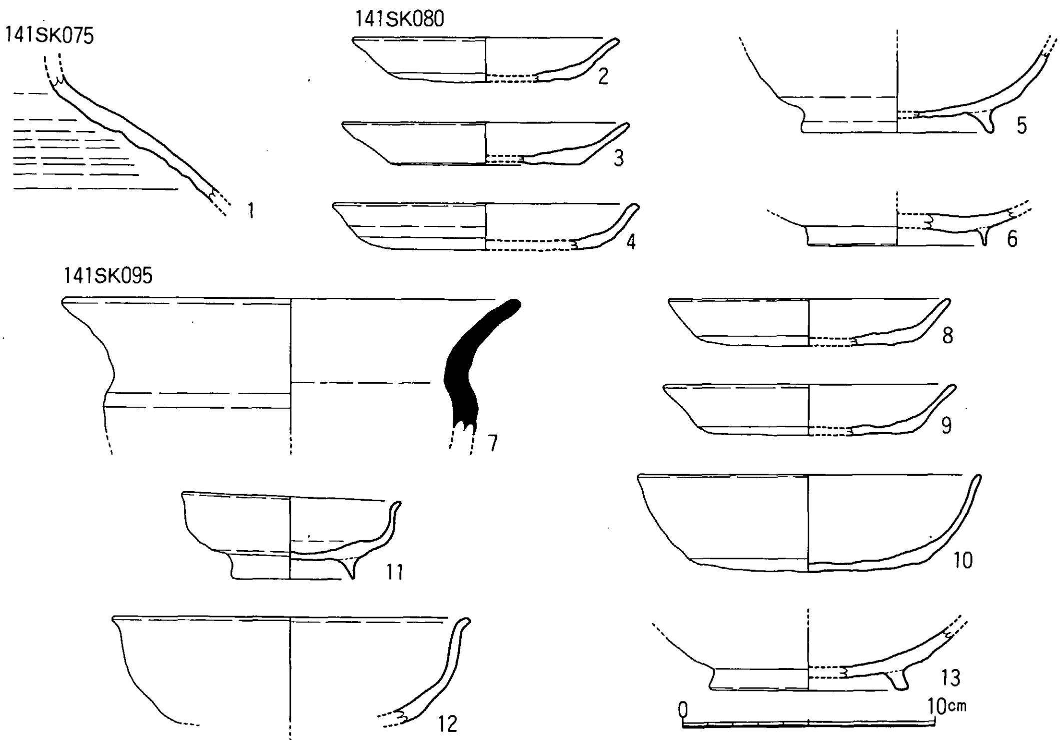


Fig.119 141SK075・080・095出土遺物実測図

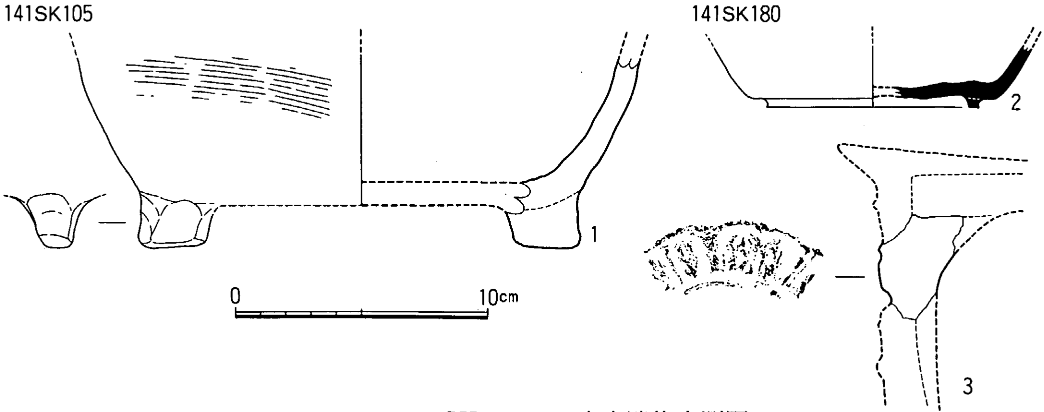


Fig.120　141SK105・180出土遺物実測図

面に煤が付着する。

141SK180（Fig.120）

須恵器

坏c（2）　高台径8.4cm。底部はヘラ切り後、軽いナデを施し、断面正方形の高台を貼り付ける。その他は横ナデを施し、見込みには不定方向のナデを加える。硬質で、暗灰色を呈す。

瓦類

軒丸瓦（3）　瓦当の一部が残存するのみで、花弁部分の風化が著しい。白色鉱物を多く含み、明灰色を呈する。

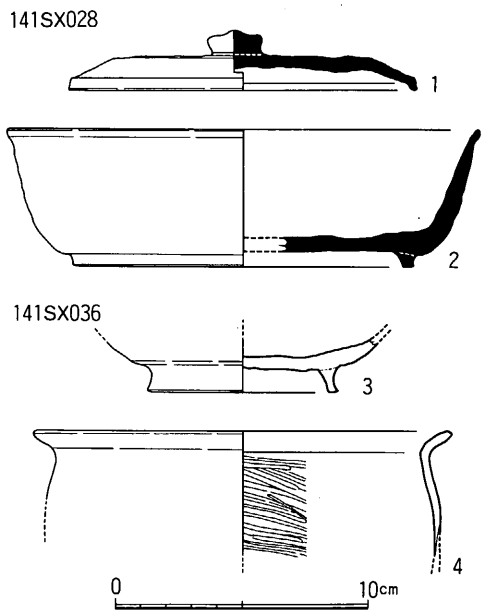


Fig.121　141SX028・036出土遺物実測図

その他の遺構出土遺物

141SX028（Fig.121）

須恵器

蓋c3（1）　口径13.8cm、器高2.4cm。天井部はヘラ削り後、擬宝珠状のつまみがつく。その他は横ナデを施し、天井部内面にはさらに不定方向のナデを加える。硬質で、内面淡灰色、外面暗灰色を呈す。

大坏c（2）　口径18.8cm、器高5.5cm、高台径13.55cm。底部はヘラ切りで、その他は横ナデを施し、見込みにはさらに不定方向のナデを加える。白色砂粒を多く含み、硬質で、淡茶灰色を呈す。

141SX036（Fig.121）

土師器

椀c（3） 底部の破片で、高台径7.5cmを測る。外底部には3.0～6.0㎜幅の板状圧痕が残る。白色砂粒を多く含み、淡茶～淡褐色を呈す。

黒色土器

甕（4） 口縁から体部にかけての小片で、推定口径16.6cmを測る。全体に薄いつくりで、体部内面にミガキｃを、その他は横ナデを施す。外面暗橙茶色、内面暗黄茶～黒色を呈す。A類。

141SX040 (Fig.122)

土師器

小皿a（1） 口径10.6cm、器高1.5cm、底径7.3cm。磨滅が著しく、調整は不明。白色砂粒を多く含み、外面淡茶色、内面淡白茶～暗茶灰色を呈す。

坏a（2） 口径10.8cm、器高2.1cm、底径6.6cm。底部はヘラ切りで、その他は横ナデを施す。白色砂粒、雲母片を多く含み、淡灰茶色を呈する。

坏a（3・4） 3は口径11.4cm、器高2.25cm、底径7.8cm。4は口径12.2cm、器高2.0cm、底径8.4cm。3・4とも底部はヘラ切り。白色砂粒を多く含み、3は淡茶色、4は淡橙色を呈す。

小皿c（5） 口径12.2cm、器高1.95cm、高台径7.7cm。底部はヘラ切り。白色砂粒、雲母片を含み、淡橙色を呈す。

石製品

磨り石（6） 磨り面の右側一辺が斜めに磨り減る。砥石のように石を固定して、研ぎたい

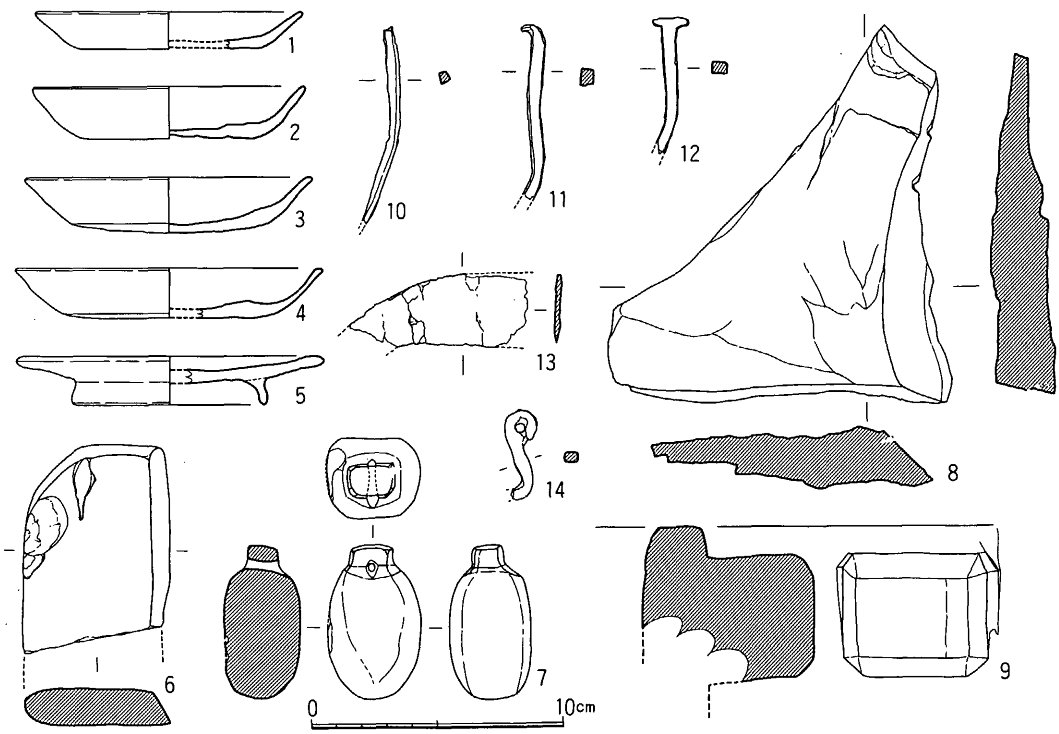


Fig.122 141SX040出土遺物実測図

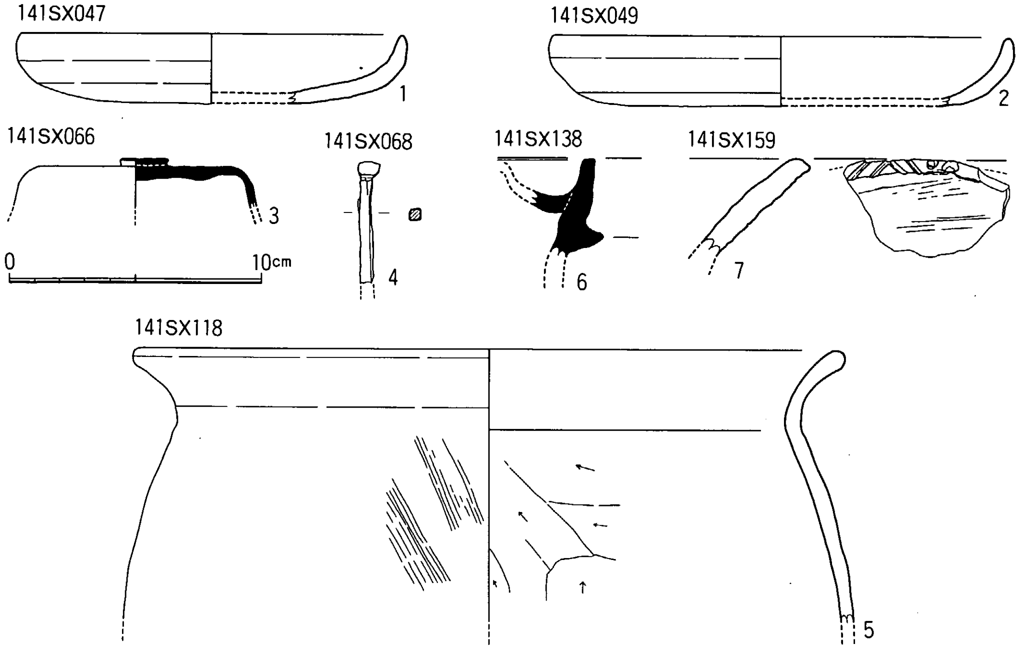


Fig.123　その他の遺構出土遺物実測図

ものを動かすのではなく、石自体を動かして磨ったものと考えられる。変成岩製で淡緑灰色を呈する。現存長8.3cm、幅5.9cm、厚さ1.55cm。

権衡（7）　滑石製で、淡灰色を呈する。頭部に方柱状の紐通し用の鈕を作り出し、身部は角をおとし丸く形づくる。鈕には2.0～4.5mm幅の円孔を穿つ。吉村靖徳氏分類によるⅠ－a類。重さ121.4ｇを量り、古代の３大両が約126ｇであることからすると、完形品であれば、かなり近い値になるかもしれない。また身部に鋭利なもので抉り取ったような傷が残るが、重量調節の可能性は現状では判断できない。長さ6.2cm、幅3.7cm、厚さ3.2cm。

砥石（8）　２面に使用痕跡を確認し、１面のみが使用頻度の高さを物語るように平滑である。頁岩製で、暗茶灰色を呈する。現存長15.0cm、幅13.6cm、厚さ2.6cm。

石鍋（9）　滑石製で淡茶灰色を呈する。口縁部の小片であるが、推定口径27.6cmを測る。口縁端面から約1.0cm下に、やや横長方形の耳を有する。全体に丁寧な削り出しによるもので、森田分類Ａ－２群に該当する。また、耳下面から横面にかけて、一面に煤が付着する。

金属器

釘（10～12）　鉄製で、頭部を平たくつぶし、断面は正方形を呈する。現存長5.4～7.8cm。

鎌（13）　鉄製で、鎌先近くの破片である。現存長7.0cm。

器種不明（14）　鉄製で、断面方形の釘状のものの一端を丸く折り曲げて輪にし、形状から掛け金の一部の可能性がある。現存長3.6cm。

141SX047（Fig.123）

土師器

皿b（1） 口径15.5cm、器高2.8cm、底径10.9cm。体部下半から底部にかけて、手持ちヘラ削りを施す。その他は横ナデを行なう。白色砂粒を多く含み、橙茶色を呈する。

141SX049 (Fig.123)

土師器

皿b（2） 口径18.4cm、器高2.8cm、底径14.4cm。体部下半から底部にかけて、手持ちヘラ削りを施す。その他は横ナデを行なう。白色砂粒、雲母片を少量含み、明橙茶色を呈する。

141SX066 (Fig.123)

須恵器

壺蓋c（3） 口縁部を欠く。天井部はヘラ削り後、偏平なボタン状のつまみがつく。その他は横ナデを施し、天井部内面にはさらに不定方向のナデを加える。白色砂粒を多く含み、硬質で、内面暗茶灰色、外面暗赤灰色を呈する。

141SX068 (Fig.123)

金属器

釘（4） 鉄製で、断面は正方形を呈し、頭部は平たくつぶされる。現存長4.8cm。

141SX118 (Fig.123)

土師器

甕（5） 口径28.2cm。内面はヘラ削り、外面は縦方向のハケ調整後、ナデを施す。口縁部は横ナデを行なう。白色砂粒を非常に多く含み、暗褐灰色を呈す。

141SX138 (Fig.123)

須恵器

硯（6） 6は円面硯の外堤付近と思われる小破片である。外堤の外側に突帯、内側に陸部を接合し、横ナデと不定方向のナデを施す。陸接合時に、下側はあまり手を加えておらず、外堤との境が顕著である。硬質で、暗灰色を呈し、陸下面及び突帯下面に灰が付着している。円面硯以外の可能性もある。

141SX159 (Fig.123)

縄文土器

鉢（7） 口縁部の小破片である。やや外反しながら、大きく外へ開く鉢と思われる。内外面とも横方向の貝殻条痕が残り、口縁端面には刻み目が残る。白色砂粒を非常に多く含み、淡茶橙色を呈する。

141SX166 (Fig.124)

須恵器

甕（1・2） 1は口径22.2cm。内外面とも横ナデを施す。硬質で、暗茶灰色を呈する。2は口径22.0cm。内外面とも横ナデを施す。白色砂粒を多く含み、硬質で、暗灰色を呈する。

平瓶（3） 底部の破片で、高台径18.8cmを測る。外面はヘラ削り後、断面台形の高台を貼

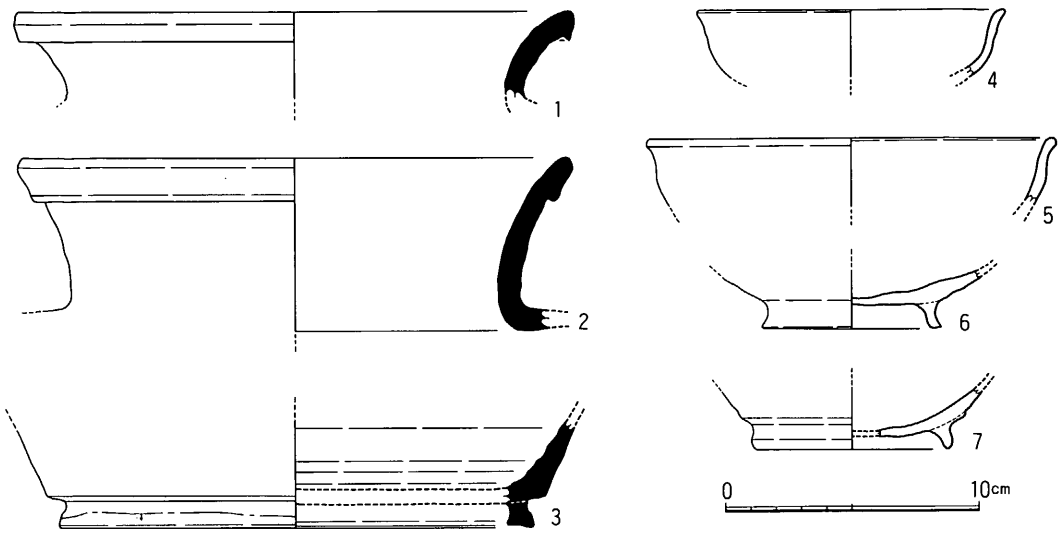


Fig.124　141SX166出土遺物実測図

り付ける。内面は横ナデを施し、見込み及び高台外側に濃緑茶色の自然釉がかかる。白色砂粒を多く含み、硬質で、淡茶灰色を呈す。141SX167出土遺物（Fig.125-2）の平瓶と同一個体の可能性がある。

土師器

椀（4・5）　いづれも内外面とも横ナデし、4は口径12.2cm。淡橙茶色を呈する。5は口径16.2cm。白色砂粒を多く含み、灰茶色を呈する。

椀c（6・7）　6は高台径7.1cm。底部外面には3.0～6.5mm幅の板状圧痕が残る。その他は横ナデを施す。白色砂粒を多く含み、淡茶色を呈する。7は高台径8.0cm。底部及び内面は、磨滅が著しく調整不明。その他は横ナデを施す。淡茶色を呈する。

141SX167（Fig.125）

須恵器

小壺（1）　口径7.8cm、器高4.8cm、底径6.7cm。体部下半から底部にかけては、ヘラ削りを施す。その他は横ナデを施し、見込みにはさらに不定方向のナデを加える。白色砂粒を多く含み、硬質で、暗灰色を呈す。

平瓶（2）　把手取り付け部分の小片である。把手は本体に取り付けた後、丁寧な縦方向のヘラ削りで仕上げる。本体内面は横ナデ、外面はなでた跡を平滑にする。把手内側には、濃茶緑色の自然釉がつく。硬質で、淡茶灰色を呈す。

土師器

坏a（3・4）　3は底径6.45cm。底部は糸切りで、一度失敗して途中まで切り離しかけた跡が、段状に残る。白色砂粒を多く含み、濃橙茶色を呈す。4は口径12.6cm、器高3.45cm、底径8.8cm。底部はヘラ切り後、約7.0mm幅の板状圧痕が残る。その他は横ナデを施し、見込みには不定方向のナデを加える。白色砂粒を非常に多く含み、淡橙茶色を呈す。

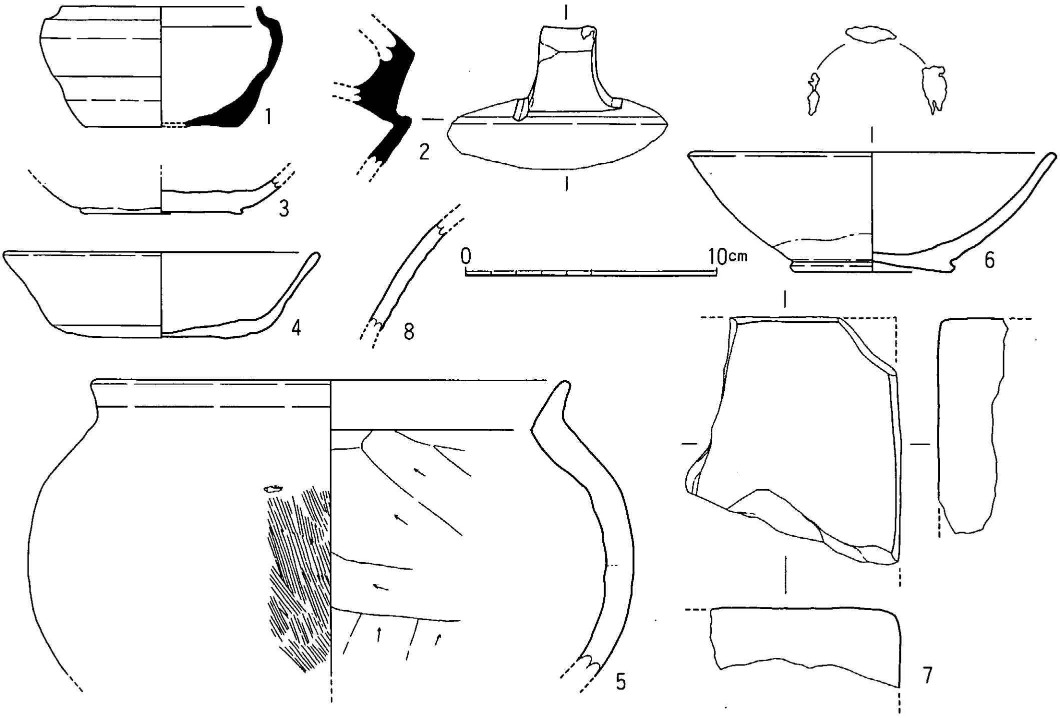


Fig.125　141SX167出土遺物実測図

甕a（5）　口径19.0cm。内面はやや雑なヘラ削り、外面は縦方向のハケ調整を行ない、口縁部付近には横ナデを施す。口縁端部外面から4.0cm位下のところに粘土くずが付着し、それより下位には一面に煤が付着する。白色砂粒、角閃石、雲母片を多く含み、橙茶色を呈する。

越州窯系青磁

椀（6）　II-2ｃ類で口径14.6cm、器高4.8cm、高台径6.55cm。体部外面下半はヘラ削り後横ナデ、底部はヘラナデを施す。釉は緑味の強いオリーヴ色で光沢があり、全体に細かい貫入が入る。体部外面下半まで薄く施釉する。見込みに4ヶ所に復原される白色の目跡が残る。

瓦類

塼（7）　現存長8.5×9.9cm。磨滅が著しく、調整については不明。白色砂粒を非常に多く含み、やや軟質で、淡茶色を呈する。

縄文土器

鉢（8）　口縁付近と思われる小片で磨滅が著しく、内外の調整については不明。白色砂粒、角閃石を非常に多く含み、軟質で、灰茶色を呈する。

淡灰色土出土遺物（Fig.126）

須恵器

蓋（1）　天井部と思われる小破片である。焼成前に外面に、ヘラ描きもしくはヘラ記号を施す。硬質で、暗灰色を呈する。

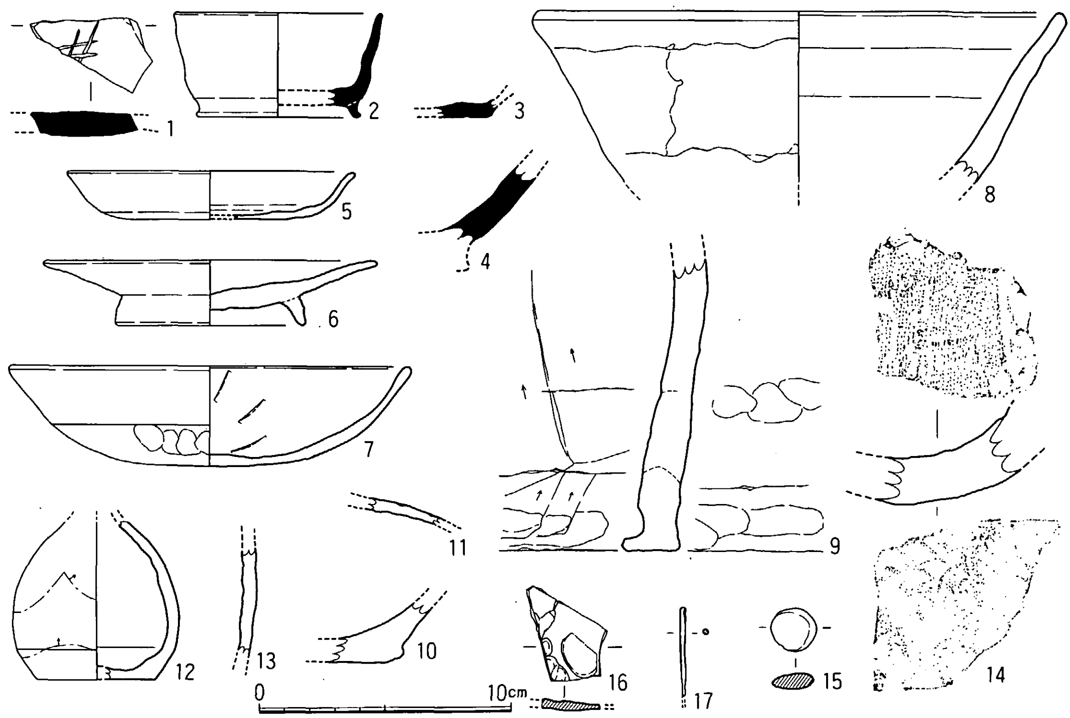


Fig.126　淡灰色土出土遺物実測図

小坏c（2）　口径8.3cm、器高4.15cm、高台径6.55cm。全体に横ナデを施し、見込みには不定方向のナデを加える。白色砂粒を多く含み、硬質で、暗青灰色を呈す。

坏a（3）　底部の極く小片である。底部はヘラ切りで、その他は横ナデを施す。見込みから体部へと立ち上がる境の凹みに赤色顔料が付着する。硬質で、淡茶灰色を呈す。

壺（4）　壺の底部と考えられる。内外面とも横ナデを施す。内面には2.0mm前後の白色砂粒が混じった暗赤色の付着物が、一面に付着する。焼成後のものと思われるが、成分は不明。やや軟質で、淡茶灰色を呈する。

土師器

坏a（5）　口径11.5cm、器高1.95cm、底径8.8cm。底部はヘラ切り後、板状圧痕が残る。その他は横ナデを施し、見込みにはさらに不定方向のナデを加える。白色及び赤色粒子を含み、黄白色を呈する。

小皿c（6）　口径13.3cm、器高2.6cm、高台径7.6cm。底部はヘラ切り後ナデ、その他は横ナデを施し、見込みにはさらに不定方向のナデを加える。白色砂粒を多く含み、明橙茶～淡橙茶色を呈する。

丸底坏a（7）　口径16.0cm、器高4.0cm。底部はヘラ切り後まるく押し出し、指頭痕が残る。その他は横ナデ、内面はナデ後ミガキｂを施す。黄白色を呈する。

鉢（8）　口径21.2cm。内外面とも雑な横ナデのため、外面には粘土の継ぎ目、内面にはハケ目様のものが薄く残る。内面下半は使用に伴ってか、壁の一部がピット状に剝離している。

赤色粒子、白色鉱物を多く含み、明橙黄色を呈す。

竈形土製品（9） 内面は強く粗いヘラ削り後、底部付近を横方向に強くなでる。外面は体部に指頭痕、底部に繊維の圧痕が残る。赤色粒子、白色鉱物を含み、内面橙～くすんだ灰茶色、外面はくすんだ灰黄色を呈する。内面は外面よりもわずかに赤化しているが、強く熱を受けているとは断定できず、竈と断定するのは困難である。

越州窯系青磁

椀（10） II-3類の小片である。底部はヘラ削り、その他は横ナデを施し、体部外面下半まで施釉する。釉は磨滅が著しく、光沢の無いくすんだオリーヴ色を呈する。また底部には9ヶ所前後に復原できる目跡が残る。胎土は微細な黒色斑点を含み、淡灰茶色を呈す。

壺（11） 褐釉壺の肩部小片と考えられる。外面にのみ施釉され、内面には所々に、はねた釉がつく。釉は茶褐色で光沢がなく、全体に細かな貫入が入る。胎土は黒色斑点を含み、淡灰色を呈する。

灰釉陶器

小壺（12） 底径4.7cm。頸部を欠損するが、割れ口は平滑になっており、欠損したあと磨いて、再利用したものと考えられる。底部は回転糸切り。外面は横ナデ、内面は横ナデを施す。体部下半から上に淡い白味がかった透明釉、体部中程から上にくすんだ緑灰色の透明釉がかかる。また底部内面に一部自然釉がかかり、白味がかった方の釉は自然釉の可能性もある。胎土は白色の小粒子を少量含み、白味がかった灰色を呈す。

朝鮮系無釉陶器

壺（13） 体部の破片と考えられる。内面は横ナデ、外面は叩きを施した後、横ナデを行なう。白色砂粒を多く含み、硬質で、暗青灰色、断面暗赤色を呈する。

瓦類

平瓦（14） 凹面にはやや粗い布目痕が残り、凸面は叩きを施した後、文様を施す。白色砂粒を非常に多く含み、硬質で、灰色を呈す。

石製品

平玉石（15） 泥岩様の石で、碁石に近似し、偏平な円形に加工している。全体に平滑で、暗い小豆色を呈する。1.85×1.7cm、厚さ0.7cmを測る。

金属器

鏡（16） 16は銅鏡の一部と考えられる。背面に勾玉様の文様を施すが、腐食のため判然としない。やや光沢のある黒褐色を呈し、現存長4.4×3.0cm、厚さ0.4cmを測る。

器種不明（17） 針のような形状を呈する鉄製品で、現存長3.6cmを測る。

暗灰色土出土遺物（Fig.127・128）

須恵器

蓋2（1） 口縁部の細片で、推定口径14.8cmを測る。内外面とも横ナデを施し、硬質で、淡灰色を呈する。

蓋a3（2） 口径13.4cm、器高1.9cm。天井部は回転ヘラ削り、その他は横ナデを施し、天井部内面にはさらに不定方向のナデを加える。白色砂粒を多く含み、硬質で、内面灰色、外面茶灰色を呈する。

蓋c3（3～7） 口径14.7～15.8cm、器高1.3～4.0cm。3～6は天井部回転ヘラ削り。7はヘラ切り後ナデを施す。天井部内面にはさらに不定方向のナデを加える。すべて硬質に焼け、3は明灰色、4は暗黒灰色、5は内面淡灰色、外面暗灰～淡灰色、6は暗灰色、7は青灰色を呈する。

坏a（8） 口径13.8cm、器高3.8cm、底径10.4cm。底部処理はヘラ切り後ナデを施し、見込みには不定方向のナデを加える。硬質で、淡茶灰色を呈す。

小坏c（9） 口径9.6cm、器高3.9cm、高台径7.25cm。底部の調整は不明。見込みには不定方向のナデを加える。白色砂粒を多く含み、硬質で、暗灰色を呈する。

坏c（10～16） 口径13.3～15.0cm、器高3.5～5.95cm、高台径8.9～11.2cm。底部はヘラ切りで、12・16は切り離し後ナデを加える。14以外は、見込みには不定方向のナデを施す。10にはヘラ記号らしきものの一部が残り、白色及び黒色砂粒を非常に多く含み、やや軟質で、内面灰色、外面茶灰色を呈する。他はすべて硬質に焼けている。11は淡灰色、12は内面明青灰色、外面明灰色、13・14は灰色、15は内面灰色、外面青灰色、16は茶橙色を呈する。その他、図示していないが、口縁から体部にかけての坏片で、内面下半一面に墨痕がつくものもある。

大坏c（17・18） 17は口径17.0cm、器高5.5cm、高台径11.5cm。18は口径18.6cm、器高5.9cm、高台径12.1cmを測る。いづれも硬質で、底部処理はヘラ切りで、17はさらにナデ調整を行なう。両者とも見込みには不定方向のナデを加えている。17は淡灰色を呈し、18は内面淡灰色、口縁部外面から高台にかけて暗黒灰色、底部は淡茶灰色を呈している。

皿a（19・20） 19は口径19.0cm、器高3.2cm、底径16.0cm。20は口径19.2cm、器高3.55cm、底径16.6cm。底部はヘラ切り後ナデを施し、見込みには不定方向のナデを加える。硬質で、19は淡灰色、20は極く淡い灰色を呈す。

鉢（21） 口縁部の小片で、推定口径21.5cmを測る。非常に薄いつくりで、内外面とも横ナデを施す。白色砂粒を多く含み、硬質で、暗青灰色を呈する。

土師器

皿b（22） 推定口径14.2cmを測る。体部下半から底部にかけて手持ちヘラ削り。微細な雲母片を少量含み、内面暗橙茶色、外面体部暗灰色、底部暗橙色を呈す。

大坏c（23） 口径18.4cm、器高4.75cm、高台径13.8cm。底部はヘラ切り後ナデを施す。明橙色を呈す。

焼塩壺（24～29） 27はⅠ類、他はⅡ類と考えられる。24は口径10.0cmを測り、外面に指頭

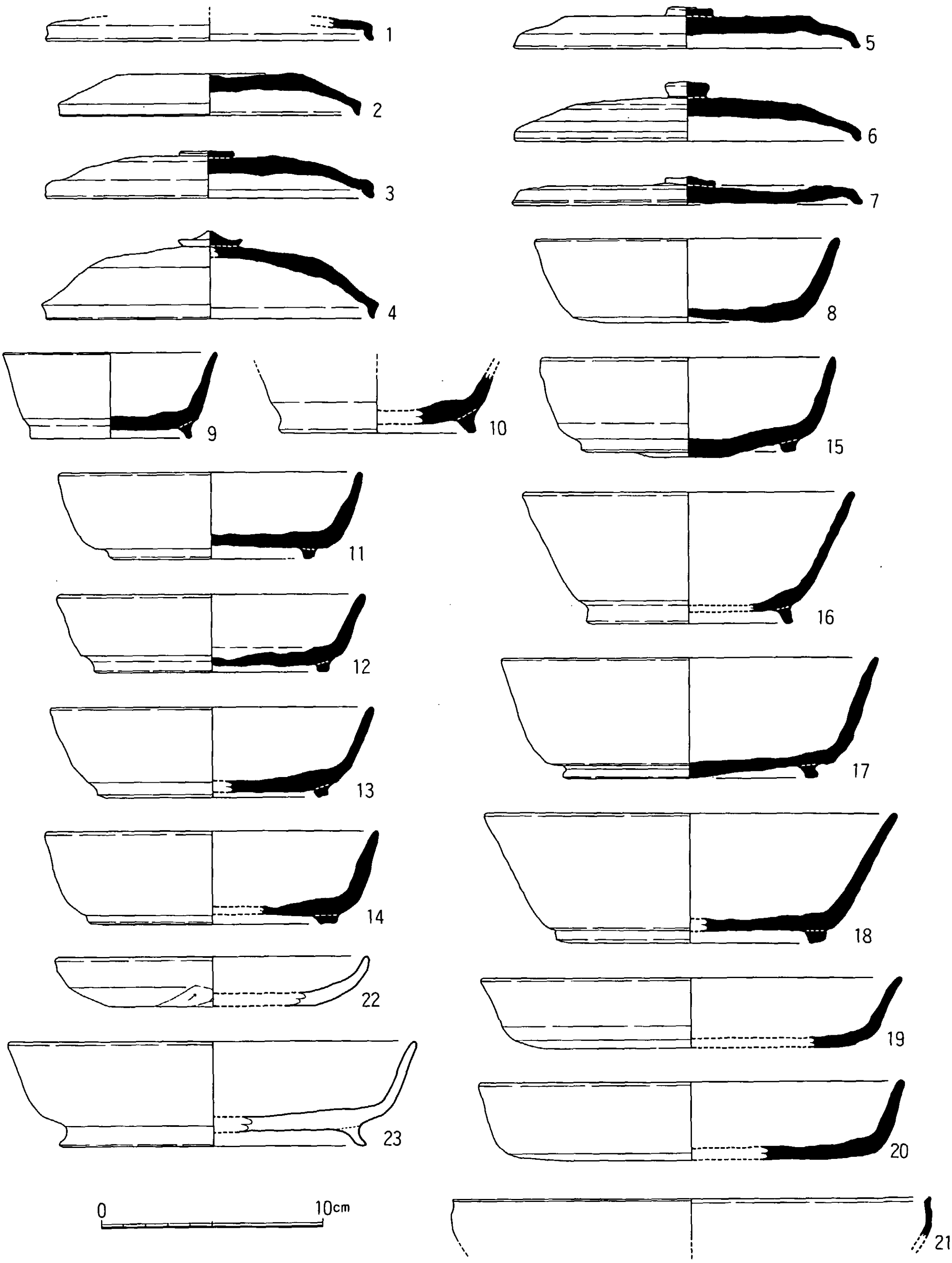


Fig.127　暗灰色土出土遺物実測図(1)

痕が明瞭に残る。内面の調整は不明である。微細な白色砂粒を少量含み、やや硬質で、内面は淡橙色、外面は淡黄茶色を呈す。25は外面に指頭痕が残り、内面は型抜きのためか、凹凸が激しい。白色砂粒を非常に多く含み、軟質で、内面はくすんだ橙色、外面は淡橙茶色を呈する。26は内面に目の粗い布目痕が残る。白色及び茶色砂粒を多く含み、やや硬質で、淡桃茶色を呈する。27は内面に目の細かな布目痕が残り、拓本右端にあたる布端と思われるところで、粘土が盛り上がっている。白色砂粒を非常に多く含み、やや硬質で、くすんだ橙色を呈す。28は薄いつくりで、口縁端部が内傾する。内面に目の細かな布目痕、外面に指頭痕が残る。白色砂粒を多く含み、軟質で、明橙茶色を呈する。29は内面下半に横方向、外面に縦方向のハケ調整を施し、外面はさらにナデを加えたと思われる。体部上半は内外面ともに横方向のナデ、外面上半には指頭痕が残る。白色砂粒を多く含み、やや硬質で、淡黄茶色を呈する。

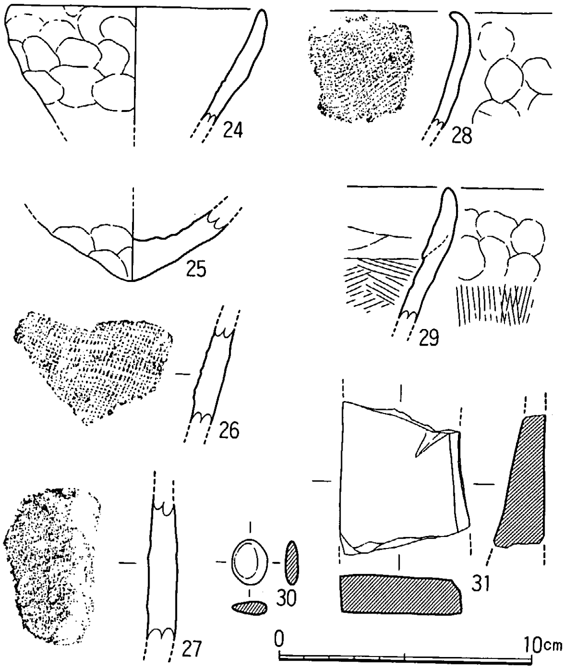


Fig.128 暗灰色土出土遺物実測図(2)

石製品

平玉石 (30) 堆積岩を磨いて、偏平に丸く形づくったと思われる。表面は非常に滑らかで、光沢があり、淡灰茶色を呈する。1.45×1.8cm、厚さ0.57cmを測る。

砥石 (31) 右面の一部を除く全面を使用し、表面は非常に滑らかである。砂岩製で、色調は淡黄色と淡桃色の縞模様をなす。現存長6.05cm、幅5.15cm、厚さ2.0cm。

表土出土遺物 (Fig.129)

須恵器

蓋3 (1) 口径16.1cm。天井部はヘラ削り、その他は横ナデを施す。体部外面と口縁部内外面の境付近に重ね焼きの跡が残る。硬質で、淡青灰～暗青灰色を呈す。

坏c (2) 高台径8.4cm。体部下半から底部にかけてヘラ削りを行なった後、高台を貼り付けたと思われる。その他は横ナデを施し、見込みにはさらに不定方向のナデを加える。硬質で、淡青灰色を呈す。

土師器

蓋 (3) 口径14.4cm。磨滅が著しく、内面については調整不明。外面は横ナデを施す。内面明黄白色、外面淡灰色を呈す。

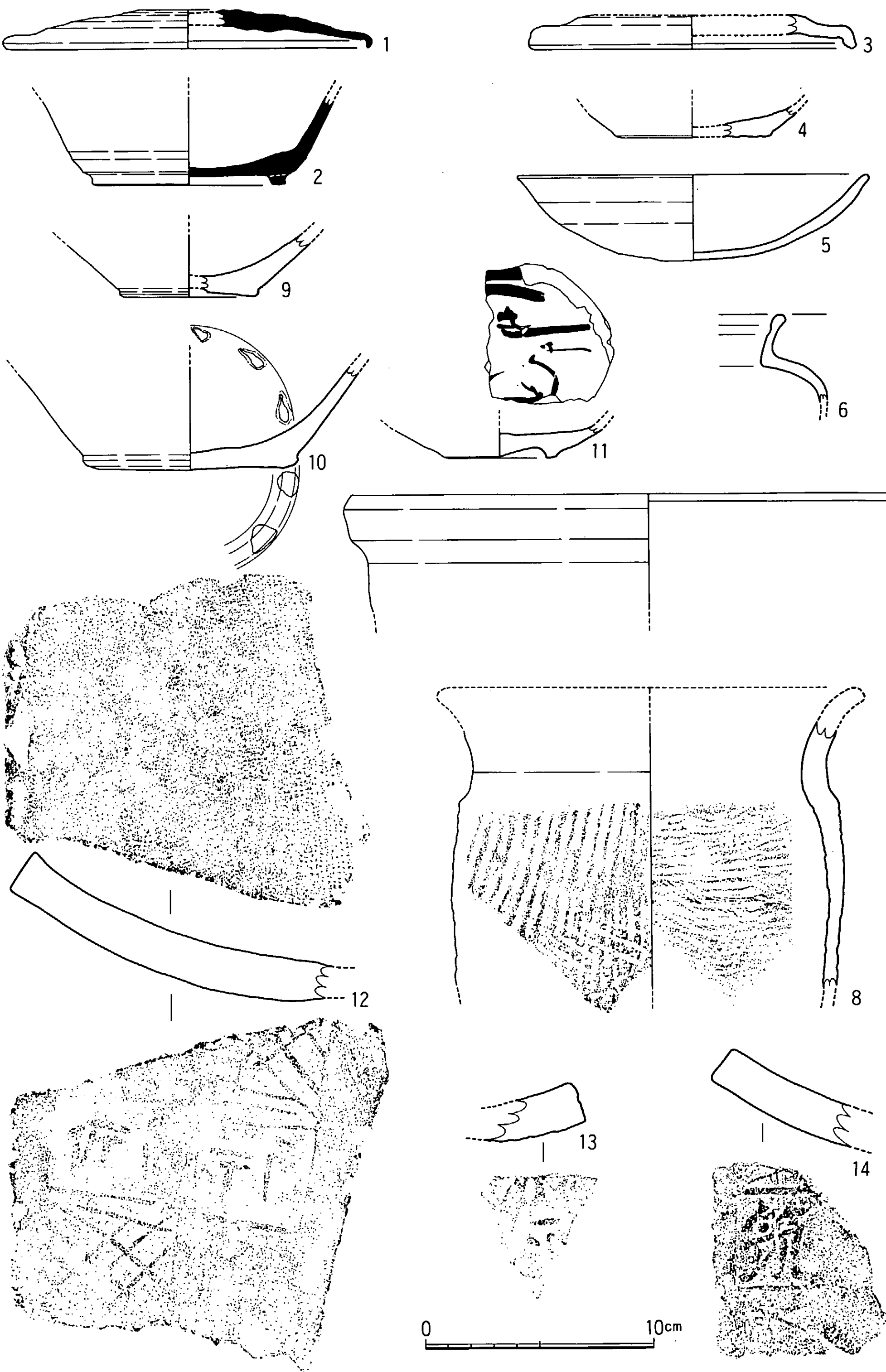


Fig.129　表土出土遺物実測図

坏a（4） 底径6.7cm。外面は磨滅が著しく、調整不明。内面は横ナデを施す。淡赤橙色を呈す。

丸底坏a（5） 口径15.4cm、器高3.8cm。完形品であるが、全体に磨滅が著しく調整不明で、底部に板状圧痕が確認できる。白色砂粒を多く含み、淡黄白～淡黄灰色を呈する。

壺（6） 壺と考えられる破片で、口径は34.0cm位と思われる。全体に磨滅が著しいが、頸部外面には横ナデの痕跡が残る。やや硬質で、灰茶色を呈す。

鉢（7） 口縁部の破片で、推定口径26.4cmを測るが、やや歪んでいる。口縁部外側に粘土を貼り付け、二重口縁風に形づくる。白色砂粒を非常に多く含み、淡茶色、内面一部暗褐色を呈する。

製塩土器（8） 玄界灘式と考えられる。体部外面に叩き痕、内面に当て具痕が残る。口縁付近は横ナデを施す。白色砂粒を非常に多く含み、外面明黄褐色、体部下半及び内面は茶褐色を呈す。

越州窯系青磁

椀（9・10） 9はI－1a類で、高台径6.1cmを測る。高台畳付を除いて施釉される。釉は緑灰色を呈し、光沢がある。胎土はきめ細かく、明灰白色を呈する。10はII－3類で、高台径9.5cmを測る。体部下半まで施釉されるが、一部底部付近まで流れる。釉は茶色がかった濃オリーヴ色で光沢があり、全体に細かな貫入が入る。見込みおよび底部外面に目跡が残り9ヶ所に復原でき、見込みの目跡は白色を呈している。胎土は微細な黒色斑点を含み、灰褐色を呈する。

肥前系磁器

椀（11） 高台径4.9cm。全面施釉後、高台畳付部分の釉をカキ取る。釉は青みがかった透明釉で光沢があり、やや厚くかかる。呉須はやや黒みがかった青色に発色する。胎土は白灰色を呈す。

瓦類

平瓦（12～14） すべて文字瓦である。12はII－5類。凹面には粗い布目痕、凸面には叩き痕に『佐』の正字が入る。端面は丁寧にヘラ切りされている。石英、長石粒を多く含み、端面は黒灰色、他は灰色を呈す。13はごく小片であるが、凹面に粗い布目痕、凸面に文字の一部が残る。白色砂粒を多く含み、淡茶～暗褐色を呈する。14はVI－3類。磨滅が著しいが、凹面には布目痕、凸面には「筑」と考えられる文字が残る。端面はヘラ切りされる。白色砂粒を多く含み、淡灰白色を呈する。

その他の石製品（Fig.130）

剝片（1・2） 1・2は黒曜石の剝片で、大剝離面の周囲に二次加工を施すものである。1の背面の剝離面は、上下二方向からの剝離をおこなう。1は現存長4.3cm、幅1.65cm、厚さ0.31cm。攪乱出土。2は現存長4.6cm、幅2.6cm、厚さ0.5cm。SD160出土。

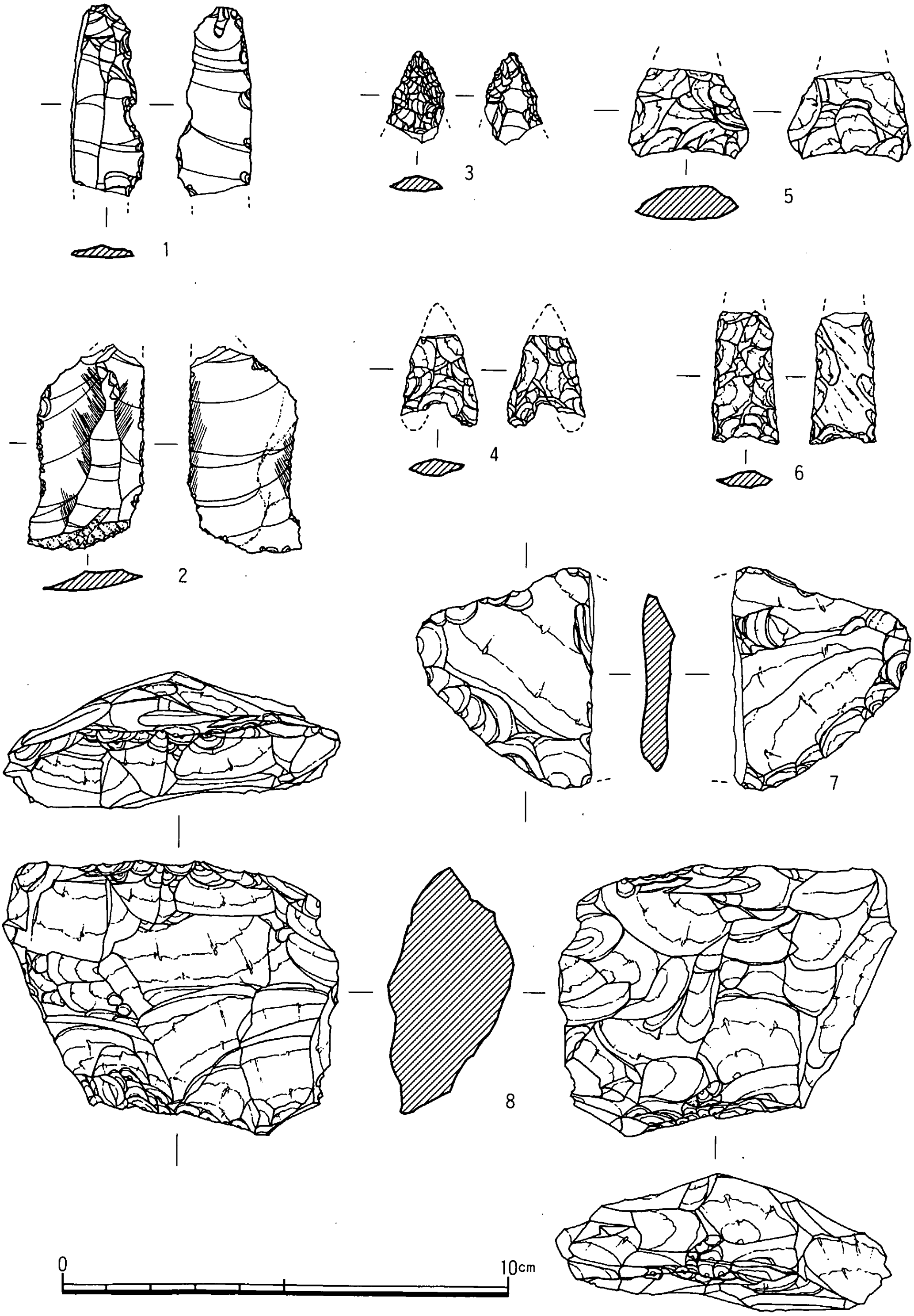


Fig.130　条坊141次調査出土石製品実測図（2／3）

鏃（3～6）　3は黒曜石製である。片面は全面に二次加工を施すが、もう一方は周辺のみを整える。現存長2.05cm、幅1.3cm、厚さ0.38cm。141SK105出土。

4～6は安山岩製である。やや深めに抉りを入れるタイプ（4）と、下辺をわずかに内湾させるタイプ（5・6）に分けられる。4は現存長2.05cm、幅1.75cm、厚さ0.41cmで、暗黒灰色を呈する。141SD160出土。5は現存長2.0cm、幅2.7cm、厚さ0.79cmで暗灰色を呈する。141SX118出土。6は現存長3.0cm、幅1.45cm、厚さ0.39cmで、黒灰色を呈する。141SX167出土。

器種不明（7）　7は安山岩製であるが、全容がわからず、性格は不明である。おもに周辺部に二次加工を施す。現存長4.95cm、幅4.0cm、厚さ0.75cmで、暗灰色を呈する。141SX147出土。

石核（8）　8は安山岩製で、上下二面を打面とし、上下からの横に長い剝離痕が入り組んで認められる。長さ6.1cm、幅7.5cm、厚さ3.0cmで、淡灰色を呈する。141SK095出土。

（谷由紀子）

5）小結

各遺構の年代と所見を記述してまとめとする。

掘立柱建物・柵列

141SB110はⅥ期までの範囲で捉えられる。141SB130・140・150・SA155はいずれもⅨ～Ⅹ期のものと考えられる。各遺構とも振れは似ており、相互に関連した遺構であるか、地形的規制がかかっていたと思われる。141SB140・150は立て替えの可能性もある。

井戸

141SE085はⅨ～Ⅹ期のものと考えられる。141SB130・140・150・SA155と関連する可能性がある。

溝・流路

141SD010・100はⅨ～Ⅹ期に埋没していった溝と考えられる。対になって道路の側溝を形成するが、路面そのものは削平され残存していない。溝の芯芯距離はほぼ3.0mである。141SD020はXIII期のもので、包含層の一部として調査区南側に存在していた黒色土の最下層部分と考えられる。141SD065は141SD100に重複しており、これを踏襲したものと考えられる。時期はⅪ～Ⅻ期と捉えられる。対応する平行な溝は検出されず、道路側溝との認定はできない。141SD160・170は鷺田川の氾濫による自然堆積である。かなり大きな氾濫であったと思われ縄文時代後期からの遺物を含んでいた。また8世紀代を中心とした遺物を多く出土した。

土壙

141SK045はⅪ～Ⅻ期と考えられる。141SK075・105は切り合っておりSK105が先行するが時期的にはどちらもXIII期のものとして捉えられる。141SK080・095はⅨ～Ⅹ期のものと考えられ141SD100よりは新出する。141SK180はⅥ～Ⅶ期のもので141SD160・170の堆積後のものと理解される。

その他の遺構

141SX040は141SD100・SK080・095に被り、141SD065が切り込んでいる。したがってX〜XI期のものと捉えられる。堆積の理由は明らかでないが、やはり河川による堆積物と推測される。141SX166〜167はXI〜XII期の範囲と考えられる。埋土の状況から自然堆積と考えられ人工的な穴（例えば井戸など）が141SX040と同様の状況で破壊・埋没したことが考えられる。

以上の所見から今回の調査では次のようなことが推測される。

・VI期以前に大型の掘立柱建物が存在したこと。

・VI期頃に鷺田川の氾濫があり調査区南東から北西にかけて土砂の流失と再堆積があったこと。したがって旧地形は北東側に高くなっており、現況では北東側が一番削平を受けていると考えられること。また河川の氾濫はXI〜XII期・XIII期以降にもあったこと。

・141SD010・100・SA155・SB130・140・150が関連して存在した可能性があること。その際に141SD010・100の東側が生活空間として利用されているのに対し、西側はほとんど利用されていなかったらしいこと。

（城戸康利）

6．試掘調査（通古賀２丁目250－２他）

１）調査に至る経過

平成６年５月に地権者である北橋信子・北橋信之氏より専用住宅建て替えに関わって、埋蔵文化財の取り扱いの有無に関する事前審査問い合わせが、文化課文化財保護係になされた。当該地は大宰府条坊跡第87次調査ならびに第106次調査の所見から平安時代後期に埋没した条路が検出される可能性が極めて高いことから、埋蔵文化財の状況把握のため試掘調査が必要と判断した。また埋蔵文化財が確認された場合について、建築に際し保護措置に関しての協議を実施した。その結果、基礎工事の設計変更による文化財保護措置について合意を得たため、平成６年８月18日埋蔵文化財の状況把握のための試掘調査を実施した。

２）試掘調査

観世区画整理事業に伴う真砂土が、現況地表面から約100cm盛り土されており、その下位に旧耕作土が検出された。耕作土および床土除去後、地表面から約150cm下位より遺構が検出された。検出できた遺構は溝２条で、試掘調査トレンチの北端部分は、新しい攪乱もしくは河川

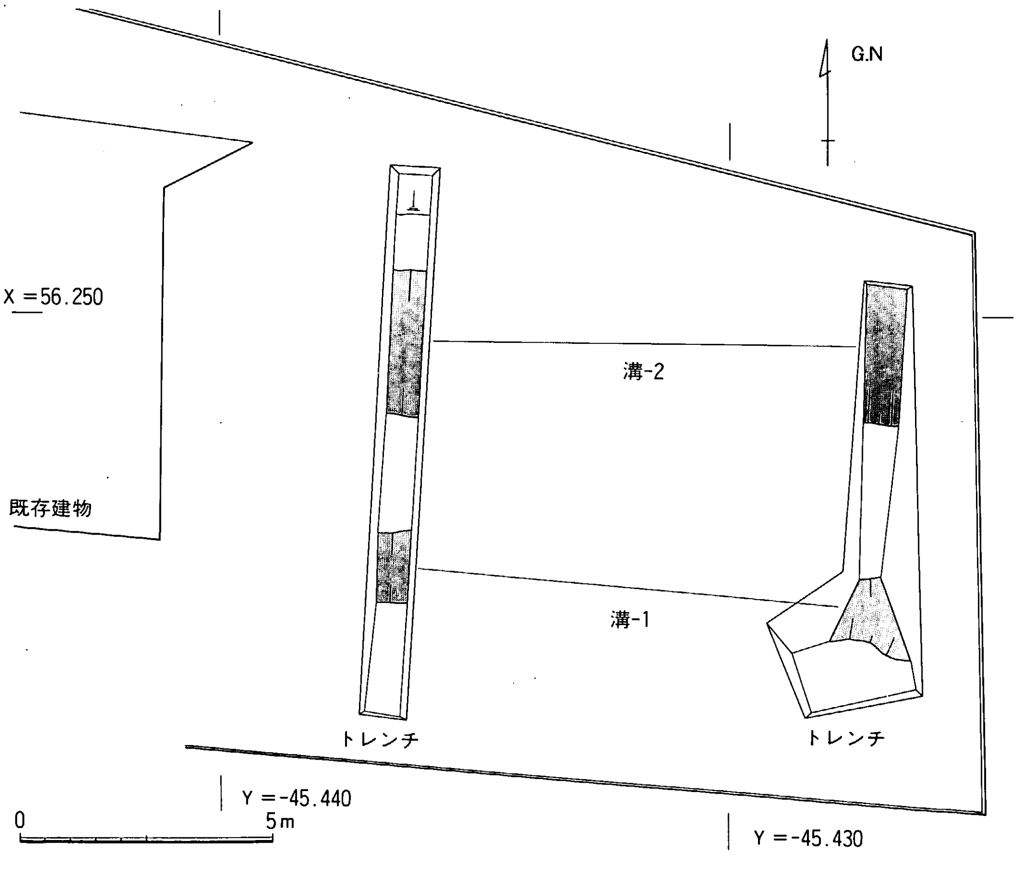


Fig.131　試掘調査検出遺構実測図(アミ部分は溝遺構)

の氾濫によると考えられる青灰色粘土層が堆積していた。検出できた溝からは土師器・椀C 2の破片が出土しており、遺物の存続幅から平安中期末頃のものと推定できる。試掘トレンチの設定位置および検出した溝 2 条について平板測量による図化を行い、座標値を求め 1 /100の実測作業を行った。その結果、当該地の東に隣接している大宰府条坊跡第87次調査にて検出した溝87SD005および87SD040の西側延長部分にあたることが判明し、87次調査にて検出した道路87SF150の西側への延長を確認した。諸記録作成後重機にて埋め戻しを行い、協議に基づいて文化財保護措置をとっていただいた。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(中島恒次郎)

試掘調査(通古賀2丁目)

遺構番号	抽出Point	遺構任意中点座標		方位角
		X座標	Y座標	
溝－1	EP	56.243.875	－45.427.400	N85°13′25″E
	WP	56.244.650	－45.436.675	
溝－2	WP	56.249.150	－45.436.500	

Tab. 8　試掘調査検出溝の座標値

Ⅳ．各調査出土金属の保存処理

1）はじめに

今回の各調査で出土した金属製品は、釘を中心とする鉄製品90数点と、鏡片１点を含む青銅製品数点を合わせた総数100点余りである。これらについて、出土後の劣化を食い止め、今後の調査研究、保管、展示に耐え得る強度を持たせることを目的として保存処理を実施した。現段階では、一般的に実用化されている脱塩装置や樹脂含浸装置等の設備が整っていない為、応急的な方法で処理を行った。以下にその工程を記す。

2）鉄製品の保存処理

（１）処理前観察

出土鉄製品の大半は釘であり、その他刀子、金具、鎌先、不明鉄片が数点ずつある。遺物の殆どは土壌や錆で覆われているものの、際だった錆膨れ等は認められない。しかし中には、堅牢に見える表面とは裏腹に内部が侵食され空隙を生じているものや、層状に剥離寸前の脆弱なものも見受けられた。又、木質等の他部材の付着は観察した限りでは確認できなかった。

いずれにせよ、このまま放置しておけば、錆化、崩壊は必至である。

（２）付着物除去

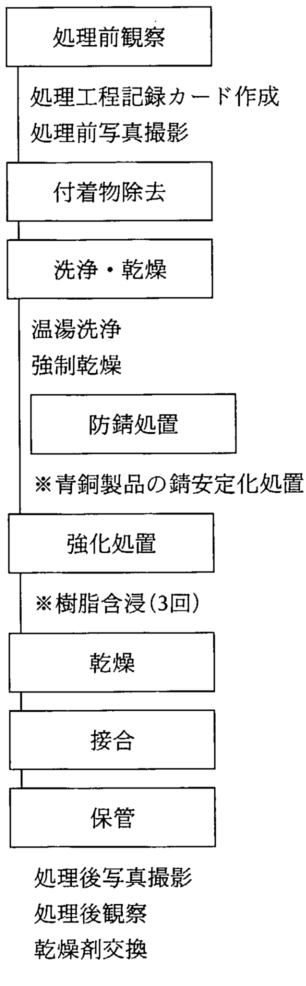
遺物に付着していた土壌、錆、砂礫等を筆、針先、カッターナイフ、ニッパー、精密加工用グラインダー（ミニター社製D.C.パワーパックスタンダードタイプ。型式：C-150）を用いて、オリジナルな形を損なわない様慎重に取り除いた。劣化が特にひどく、脆弱なものはアクリル系樹脂（商品名：パラロイドB-72）の５％アセトン溶液を数回塗布し、仮強化してから除去した。

（３）洗浄・乾燥

温湯で、表面の土壌や錆粉等を筆を用いて洗浄し、約80°Cの湯に１～２時間浸漬させて錆の一因となる塩化物を除去した。次に、水気をよく拭き取った後、105°C前後に設定した定温乾燥器（ヤマト科学社製Drying Oven。型式：DX31）で１日間強制乾燥させた。

（４）強化処置

アクリル系樹脂の５％アセトン溶液中で常圧含浸後、１週



Tab. 9　出土金属製品の保存処理

間風乾させる工程を3回繰り返した。脆弱なものについては、更に10%の同溶液を添加した。アセトンの性質上空気中の水分を吸収し、遺物表面が白くなる場合があるが、同樹脂の3%キシレン溶液を塗布して表面仕上げとした。

（5）接合

セルロース系接着剤（商品名：セメダインC）、エポキシ樹脂系接着剤（商品名：セメダインハイスーパー）を使用した。

エポキシ樹脂系接着剤を使用の際には、後で取り外すのが容易でない為接合面のずれや小破片の接合には充分注意したが、接合部を取り外す必要が生じた時にはヘアードライヤーで接合部を温め、接着剤を軟化させ完全に取り除いてから再接合した。

3）青銅製品の保存処理

（1）処理前観察

青銅製品は鏡片1点、銅銭17枚の他、不明片数点である。

鏡片は土壌等の付着物も殆ど無く暗黒緑色の地金が露呈している。鏡背には文様が認められ、一部で緑錆とその下の地金付近に赤褐色状の酸化膜が見られる。鏡面は腐食が進行し、表面層を持ち上げる様に膨張し、小さな無数の亀裂が入っている。面半分に緑錆が生じ砂礫を固化しているが、ブロンズ病と思われる錆の発生は確認していない。

銅銭は4～5枚が密着した状態で出土し、銭銘がかろうじて「乾元大宝」と判読できる。微粒子状の土が全面に付着しており、方郭内にも入り込んでいる。ブロンズ病と思われる灰緑色の錆が発生しているものや、薄く膜状に剝落しそうな危険な状態のものもある。

他の不明片に関しては、土壌や緑錆で覆われ比較的安定したものが殆どであり、特記すべき事項は見られない。

（2）付着物除去

主に筆、ブラシ、針先を用いて丁寧に取り除いたが、砂礫を取り込んで固化したもの等比較的大きな錆は、カッターナイフやニッパーで除去した。銅銭は無理に剝がすと損壊の恐れがあるのでそのままの状態で表面のみを軽くブラッシングした。鉄製品と同様、脆弱なものは先に強化処置を施した。

（3）洗浄・乾燥

方法は鉄製品と同じであるが、強制乾燥の際、高温時における亀裂発生や劣化促進の危険を考慮し、50°C前後で長時間かけて乾燥させた。銅銭は洗浄中の機械的損壊を避ける為、この工程を省略した。

（4）防錆処置

ブロンズ病発生の原因となる塩化物イオン含有錆を非活性化させる方法として、ベンゾトリアゾール法を採用した。ベンゾトリアゾールの1.5%エタノール溶液中に、遺物を漬けておくのであるが、以前は常圧含浸として一昼夜そのまま放置して置いたが、溶液浸透をより効果的

なものとする為に真空デシケーター（伸栄産業社製。型式：V-12）を使用し減圧含浸した。その際遺物は液中での崩壊を防ぐためガーゼで保護した。

銅銭は、前者の方法で処置した。

（5）強化処置

防錆処置後、1週間程風乾させた後、鉄製品と同様5％のアクリル系樹脂溶液の常圧含浸・乾燥の工程を2回繰り返した。緑錆が鮮やかな色調になるのは否めないが、表面仕上げとして同樹脂の3％キシレン溶液を塗布した。

（6）接合

エポキシ樹脂系接着剤を使用した。

4）保管

現段階では、遺跡毎に乾燥剤（シリカゲル）を封入した透明のアクリルケースに入れて保管しているが、シリカゲル交換時や必要に応じて処理後の観察を続けている。保管場所は特別な収蔵庫という訳ではないので、アクリルケースの蓋の閉じ口にビニールテープを貼り、空気の侵入を最小限に留め乾燥状態を保ち、直射日光にさらさない、衝撃を与えない、急激な温度変化をもたらさない等の点に注意している。

ここで実施した処理はあくまでも応急的なものなので、再処理が必要となる場合も想定しながら今後も定期的観察を継続する事が必要不可欠である。（下川可容子）

V. 調査のまとめ

1.条坊関連遺構の検討

今回の調査地域では、4地点の調査地から大宰府条坊を考える上で重要ではないかと考えられる南北方向及び東西方向の並行する溝が複数検出された。ここではこれらの遺構を大宰府政庁南門（X＝56,708.68　Y＝－44,820.73/国土座標第VI座標系）及び大宰府政庁中軸線(GN-0°34′24″-Eの振れを有し、南門中点を通過する線/以下中軸線とする）を基準として数値化し、今後の条坊研究の参考資料として捉えられるようにという目的で簡単に整理しておきたい。

なお、ここで取り扱う数値は、すべて国土座標から得られた数値を中軸線の振れを考慮して計算し直したものである。また、各遺構の内容については本文で詳細が報告されているので、ここでは必要なことのみを記述する。

第87次調査

東西路87SF150は距離も短くデータとしては満足できるものではないが、政庁南門中心から道路中心までの距離は467.8mを測るものである。

南北路87SF100は東西側溝でやや方位の異なりをみせるが、平均したものを道路の中心とみなして計算すると、中軸線から西へ591.0mの数値が得られる。

いずれも遺構の埋没は大宰府XII期（11世紀後半〜12世紀前半）であるが、東側溝が切っている井戸87SE015の埋没が大宰府X期（10世紀後半〜11世紀前半）であることから、この道路遺構の上限の年代が窺える。

第106次調査

106SF100は南北方向の道路遺構と考えられるが、主軸（ここでは両側溝の振れを平均したもので示す）をN-7°43′-Eと大きく東に振っている。側溝の埋没は大宰府VI A期とされるが、埋没遺物の中心となる時期は大宰府V期である。つまり8世紀後半に遺物の主体があり、9世紀初頭に完全に埋没したと考えられる。主軸の振れが大きいので数字としては参考程度にとどまるが、中軸線から平均的な道路中心位置までの距離は、610.5m程度である。

第118次調査

118SF100は、87SF100の延長部分とみられる。残存する範囲での道路中心と中軸線との距離は592.0mである。

第141次調査

南北に並行する2条の溝が検出された。いずれも連続する長い土壙状を呈しているが当初は一連の溝であったことは確実と判断される。この両溝に挟まれた空間は道路遺構と考えてもよさそうである。溝の振れは両者平均するとN-1°8′35″-W程度でこれを道路遺構の振れと仮定しておく。なお、中軸線から道路の中心までの距離は634.7mで、埋没の時期は大宰府X期（10

世紀後半〜11世紀前半）とみられる。

試掘調査15－712地点（通古賀2丁目250-2他）

確認した2条の東西方向の溝は、その位置関係から南側の溝1は87SD005の西延長部、北側の溝2は87SD040の西延長部であることは明らかである。このことから条87次で検出した溝のコーナー部分は－氾濫のため四つ角であったとは断定できないものの－交差点と認識できる可能性が高いものと思われる。

また、この地点の西側トレンチでの両遺構及び条87次の成果を平均すると、この東西道路の振れはN-89°59′-E程度となり、ほぼ真東西に近い数値となる。東西方向の道路遺構の振れの参考としたい。

これらの成果を模式図にしたのがFig.132である。それぞれの詳細な位置関係はそこに掲げたので参照していただきたい。

さて注意すべき点をいくつか述べてまとめとしたい。

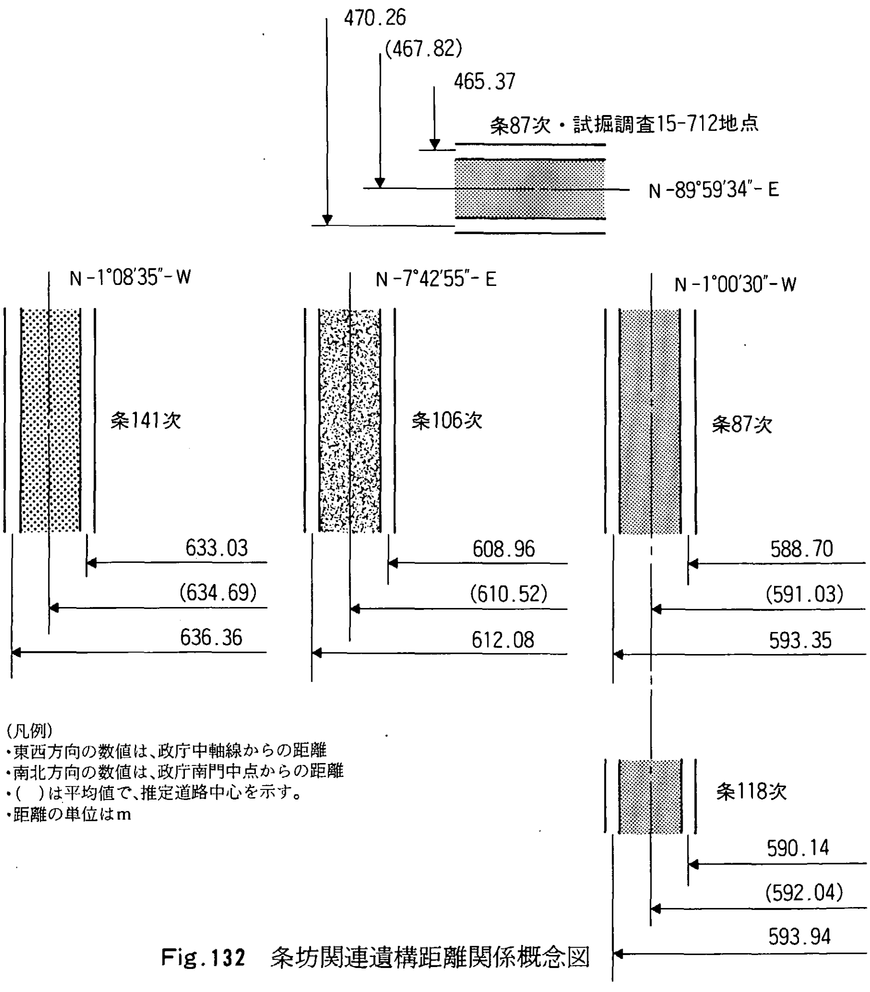


Fig.132　条坊関連遺構距離関係概念図

今回の調査では時期の異なる道路遺構を4条検出することができた。これまでの調査では時期差の認められる条坊関連遺構はきわめて近接した位置で、あるいは重複して検出されることが多かったが、ここではおよそ20mの間隔をおいて検出されている。これらの遺構が各時期においてどのような設計に基づいて建設されたのか、現状では判断が困難である。そこで各時期別に周辺の遺構あるいは類似遺構を抽出することで今後の見通しを立てておきたい。

まず、奈良時代後半に遺物の中心があり、平安時代初頭に埋没したと考えられる106SF100は座標北に対して東に7°45′前後の振れを有しており、推定朱雀大路及びその周辺で検出されている南北路が真南北に近い振れであることと比べると、大きく東に振っていることは明らかである。

この視点で隣接する条87次をみると、掘立柱建物87SB045の振れが注意される。この建物の振れはN-8°0′-E程度で、106SF100に近い振れと言えそうである。時期的にもおそらく近接した頃のものであり、同時に存在していた可能性も十分考えられる遺構である。

さらに周辺における過去の調査成果では、この地点の近く（北西に約170m）で調査された大宰府条坊跡第2次調査SD001も東に大きく振れており、関係が注意されるところである。2SD001は8世紀前半から中頃と考えられるもので、第13トレンチで検出した溝の東肩の1点と第16トレンチで検出した東肩の1点を結んだ振れがN-16°42′-E前後である。106SF100とはさらに大きな異なりをみせているが、87SB045を含めて、時期的に広く奈良時代の範囲で捉えるとすれば、この周辺地域にやや大きく東に振る未知の区画が存在していた可能性が考えられる。

未知の区画の規模、年代など未解明のことがきわめて多いが、今後の調査における注意すべき視点として捉えておきたい。

次に10世紀代に位置づけられる道路について考えておきたい。今回報告した条141次の道路遺構の埋没した時期は大宰府X期（10世紀後半～11世紀前半）とみられる。これに近い時期の道路遺構あるいは道路の側溝とみられる南北溝は条34次、条64次、最近では条168次で検出されているが、この溝との具体的な関連を指摘できるまでには整理が進行していない。しかし、近しい時期の溝が複数地点で検出されていることは、これまで推定してきた大宰府政庁第II期と同第III期に並行する都市区画以外に、ちょうどその中間にあたる時期で未知の区画が存在していたことを窺わせるものである。またこの区画の埋没年代は、次の政庁第III期に並行する条坊区画成立の上限の年代を示唆するものであり、きわめて重要なものである。

11世紀後半～12世紀前半に埋没したと位置づけられる道路87SF100等は、遺構の埋没年代から政庁第III期に並行する条坊区画と一連のものである可能性が考えられる。

まず南北路である87SF100と118SF100との間には遺構の残存状況の悪さから確実な連続性は確認できていない。しかも道路中心までの中軸線からの距離もおよそ1mの違いがあり、個々の方位も若干異なっている。しかし条16次、条44次等で以前検討した[1)]ように、この時期の大宰府条坊は巨視的にみると直線的ながら、微視的にみるとかなりの蛇行や歪みが存在す

る。この点を考慮すれば、今回検出の南北路も一連のものである可能性はきわめて高いと言える。以下これらが一連のものであるという前提で話を進める。

検出された両者を統合すると道路中心の平均した振れはN－1°5′44″－E前後になる。また中軸線からの距離は591～592m程度という数字が得られる。この数字は中軸線から観世音寺の中心までの距離（594.740m）[2]にきわめて近似している。観世音寺から南に延びる同時期の南北路の存在もこれまでの調査で確認されており（条71次・88次・90次）、中軸線を挟んで東西対称の位置に南北路が設定されていたことが考えられる。

次に条87次及び試掘15-712で検出された東西路について整理しておく。いずれもデータ化した距離が短いので両者をあわせたもので整理する。北側溝の平均の振れはN-89°26′18″-E、南側溝ではN-90°32′51″-E、平均するとN-89°59′34″-Eとなりほぼ真東西に近いものであることが知られる。

東西路の検出はこれまでの調査で数例が知られているが、この地点の東側約400～500mの地点で検出されている東西路（条60次・61次・75次）と連続していた可能性が考えられる。途中に御笠川の氾濫源が入り込んでおり、この両者を結ぶ区間で今後道路遺構の確認される期待はもてないが、遺構の埋没時期、方向性、形状などが近似するもので一連のものと判断している。

以上今回報告した遺構を大宰府都市の中に当てはめて検討してみた。新たな所見を得たもの、過去の調査との関連性を示唆できたものなど様々であるが、発掘調査（現場作業）の増加数に比べて整理の進行が著しく遅れており、自分たちの間では様々な関連を考慮して、条坊復原が部分的ながらも可能な状態であるにもかかわらず、報告書として公開できていないことから、十分なデータを提供できないのが現状である。さらに1/100略測図より得た粗いデータと1/20遺構実測図から得たデータを混同して使用しないという立場から、今回も未報告地点を含めた詳細な検討は行わなかった。鈍行列車のような速度ながら順次整理は進行しているので、今後の整理の過程で追々検討を加えて行くことを述べることで、ご了解を求めたい。(狭川真一)

脚注

1）拙稿（1995）「条坊関連遺構の検討」『大宰府条坊跡Ⅶ』（太宰府市の文化財第28集）太宰府市教育委員会

2）観世音寺中心の座標は、報告書（栗原和彦ほか（1992）『大宰府史跡－平成3年度発掘調査概報－』九州歴史資料館）掲載の講堂遺構実測図（同書第2図）から計測した。計測は講堂各隅を結ぶ対角線の交点を中心と認識し、計測結果は（X＝56,883.65、Y＝－44,224.21）である。また594.740mという数値は政庁中軸線から観世音寺の講堂までの距離であり、観世音寺中軸線が政庁とはわずかに異なる振れを有していることから、観世音寺中軸線上にある他の建物では若干異なった数値になる可能性がある。したがって今回の数値は、政庁南門（または正殿）と観世音寺講堂が建設当初の基準点として存在していたことを証明しているわけではない。

2．定量分析への試み－条87SE015・条98SE002出土資料への適用－

A．分析に先立つ前提

報告にて記述してきたように、87次調査SE015および98次調査SE002からは一括廃棄資料として多量の土師器が出土している。この一括廃棄資料の選別（定性分析）を行なった結果、別表として上げた遺物出土一覧に示した遺物がこの遺構から出土している。ではそれぞれの量については、どのような傾向にあるのかの検討を漠然と思い立ち、実際に定量分析を実施した。ここでは、その際に気付いた点ならびに現状における定量分析の有効性と限界について明示し、今後の資料検討に役立てることができたらと思い、記述することにした。実作業は、筆者と上村英士氏の２名が行なった。実作業時間は不慣れなためか約１週間を要した。なお筆者とともに分類から計測、数量化の作業を実施してくれた上村英士氏に心より感謝します。

a．定量分析の意義

発掘調査によって出土した様々な資料を、室内にて整理し発掘調査の所見を考慮しつつ解釈を導き出してゆく。その解釈のレベルは調査担当者の意識如何に関わっており、「事実」の報告から使用されていた社会構造の理解までを視野に入れた報告まで様々である。文化財行政内における報告にどこまでのレベルが必要なのかは、個々人の見解によって分かれるが、筆者等は教育行政の一環としての発掘調査の実施と考えているため、当時の社会構造の復原までを視野に含めて、現状で可能な範囲内での諸資料の提示が責務であると考える。したがって、今回の定量分析に関しても、将来の復原作業の基礎作業として試みを実施した。

さて定量分析の意義については、他者との比較の材料として文字通り量の概念を適用することにある。理論的には一遺構内出土遺物の解釈にはじまり、一集落、墓群など単位遺跡[1]内でのものの使用状況を把握するのに極めて説明的かつ客観的な資料の提示が可能となるはずである。しかし結果を導きだす諸過程における問題点もあり、安易に適用することへは懐疑的にならざるを得ず、客観性についても疑問が残る。したがって、諸過程にて想定できる主観性について明示し、様々な作業仮説を踏まえたうえで、実資料の操作が必要となり、数値として表現された資料の有効性と限界を踏まえた論旨の展開が必要となろう。平成７年の中世土器研究会席上において、河野眞知郎氏が発言された「数値に何が表現されているのかを踏まえておく必要がある」という言葉に全てが表現されていると考える。

また各地域間での相対編年の確立のために必要不可欠なものとして、広域流通品の在地食器相への位置づけがある。現在一般的に行なわれている現象面の把握には、画期内様相の把握に基づく並行関係の確認である。つまり様相差に基づく画期を設定し、続く作業として遺構の形成時期認定の要素抽出に基づく時間軸への位置づけがなされている。この際行なわれているのが定性分析に基づく時間軸上への位置づけであろう。しかし定性分析の有効性と限界を誤認すると、現場での見解を一変させる結果を導き出す可能性もある。結果として一遺構の時間軸上

での位置づけの判断如何によって、相対的な位置づけに狂いが生じている例があり、正否を巡って現在議論が討わされている。このような課題に関しても定量の概念を適用することによって、遺構内に存在している型式の量の把握にはじまり、時間軸上での推移をより現実的に検討することが可能になると考える。いわゆるSeriation Method（R.C.DUNNELL、1970 G.L.COWGILL、1972 横山、1985）が可能となる。

b．方法の検討

自然科学の分野においては、定性から定量へと研究の深化が日夜繰り広げられているが、考古学の分野においても80年代に入り、資料の増大に伴う資料解釈の方法として、量の概念が導入されるようになってきている。これは対象資料の位置づけを量という概念の導入によって、定性以上に「科学的」に比較し検討を加えようとするものであり、「科学的」な説得力のある説明の方向性としては望ましいと思われる。しかし数字の魔力は、いとも簡単に「科学的」と見なされ、一人歩き[2)]の材料としては格好な餌とも成りえることから、慎重な対応が必要となる。

i）分類

個体へ結び付ける上で、基礎作業となる。この基礎作業を怠るとその後の作業が無意味となり、「科学的」な方向から逸脱し、「幻想」の世界の虜となり数値化という行為によって一人歩きの餌を蒔き散らしたことになりかねない。最も基礎的で忍耐のいる作業であり、かつ「幻想」の世界への餌が目の前をちらつくことから、後の諸作業よりも主観が介在しやすい作業である。したがって如何に主観を排除し、客観性を高めるのかが最重要課題である。そのためには、分類基準を属性レベルで明確化し、各設定属性の相関に基づく型式化を行なった上で分類作業を実施する必要がある。また「悩む」遺物については、たとえ冷酷と罵られようとも切り捨てる勇気を持ち合わせておく必要もある。「悩む」ことは迷いにつながり「幻想」の世界への扉を叩く恐れが多分にあるからである。しかし「悩む」行為を極力少なくするためには、やはり分類の基準を明確化し作業を実施してゆくこと以外には、現状で思い付かない。

ii）個体数

食器組成を導き出す上で、如何に廃棄当時の個体数に近い数字を導き出すのかということが、まず前提条件として必要になってくる。この課題は簡単なようで、極めて難しい側面を有している。

時間的余裕、作業人員の確保など十分な体制が整うならば、可能なかぎり接合作業を実施し、個体復原を行なう必要がある。しかし体制が整う整わないに関わらず、やはり破片資料が皆無になるには、よほど条件が揃わないかぎり困難といえよう。では、個体復原が不可能であるならば、どのような方法を用いて型式の定量を行ない、量の概念で表記することができるのであろうか。この課題に関しては、先学等によって様々な方法が案出されている。破片を単純に積算する破片数量法、各型式の重量を計測する重量法、同一口縁径にあてはまる破片を円周内に

配列し、全周させた段階で一個体とみなす方法（口縁部計測法)、各型式の個体平均重量で型式全重量を除算し個体数を導き出す方法等がある。各方法とも苦慮した結果導き出されたもので、いずれの方法も作業仮説上に立脚しており、使用ないしは廃棄当時の個体数を的確に数量化し得たとは言いがたい課題を有している。主観を排除し可能なかぎり過去の個体数に近づける意味からいくつかの方法を試み、導き出された結果を相互比較して、各型式の定量化の客観性を高める方法が取られているのが現状であろう。

今回の分析でも、やはり先学が試みた数種の方法を同一資料に適用し、傾向を読み取ってみたい。

適用する方法は、ｉ）破片数量法、ii）口縁部計測法を用いる。また第３の方法として検討を試みた作業として、iii）各型式の個体平均重量で型式全重量を除算し個体数を導き出す方法があるが、作業条件となる形式の認定が困難な状況では、確実性は極めて低いと考える。つまり分析対象とした87SE015・98SE002出土資料のように土師器・椀ｃと椀ａの口縁部は同一形態を有することからくる分類限界が存在しており、形式全重量の計測が困難となる。

iii）廃棄された時代の食器組成にどう反映させるのか？

共時性を想定させ得る資料には、発掘調査によって我々の目の前に出現する事象として、墓への副葬品や供献品などのような一括埋納資料および今回分析対象資料として取り上げた廃棄行為に伴うと想定できる一括廃棄資料があろう。前者の一括埋納資料の場合、葬送や埋納行為を行なった人々の意識の投影の結果として、極めて示威的な側面が強いと考えられる（中島、1992　狭川、1993）のに対して、廃棄行為に伴う資料の場合、埋納という行為に比して幾分かは示威性が低いのではないかと考えられる。しかしこれとて作業仮説上に成り立つ妄想である可能性も否めない。したがって、縄文時代の土器研究に用いられてきている廃棄に関わる提言（樋口、1972　岡村、吉岡、1981）を視野に入れた廃棄行為の類型化が必要となってこよう。

さて一括廃棄資料は文字通り廃棄行為を想定させ得る状況で出土した遺物のことであり、極めて共時性の高い資料群に位置づけることが可能であろう。はたして共伴＝共時であろうか。廃棄行為自体の共時性は、長期にわたる廃棄行為を除けば極めて可能性が高いものであろうが、鎌倉での遺物接合作業によって導き出された他遺構出土資料との接合関係が物語るように周囲に存在しているゴミの混入を考慮すると、考古遺物の共伴が等しく使用の共時性に結びつくとは即断できないことになる。では実際の調査によって出土する遺物からどのように考え共時性と共伴を弁別するのかについて検討を加える必要がある。この課題に関しては、共伴事例の複数化を確認すること以外に無いであろう。また個別事象としては、先の共伴例の複数化を確認した上で、細片資料の除去が必要となってこよう。この際の細片の分類根拠が必要となってくるが、これは特に陶磁器の出土に誤認材料が潜んでいるといえる。筆者自身も条87SE015の出土資料を抽出報告した際（中島、1990)、越州窯系青磁椀Ｉ類の破片を共伴資料として提示した。この破片自体が廃棄された際の共時性は高いであろうが、使用に際しての共時性に関して

は、口縁部のみの破片資料であること、ならびに出土した共伴資料中に高台部らしき破片が存在しないことから、ゴミとして混入した可能性も否めない。したがって陶磁器など細片資料の取り扱いに関しては、慎重な取り扱いが必要となろう。この問題は等しく土師器・須恵器に関しても同様であるが、とかく目立つ物に対しては寛容になってしまうのでことさらに注意が必要と考える。

以上の前提作業を踏まえた上で当時の食器組成へ還元する方法は、定量分析事例を増やした後、分析事例個々の相対的位置づけから導き出すしか方法は無いであろう。

ⅳ）定量値＝遺跡のもつ特性か？

今回報告するように特定の遺構出土資料のみの定量値では、述べるまでもなく遺跡全体の性格を判断するだけの材料とは成りえない。したがって、今回の報告で導き出された結果は、87SE015・98SE002に廃棄された食器の内容を数値化したにすぎないことになる。しかし、廃棄という同一の物差しで類型化する試みとしては、今後の一括廃棄資料の定量化を進めることで明らかになってくると考えられる。

一方定量化の検討作業という側面からも今回の分析を実施した。これらの検討を深化させることは、単位遺跡などの一定の空間から出土する遺物の定量化を実施することで、現在漠然と語られる空間差の傾向を量によって明示できるのではないかと考えている。また遺跡出土全資料の定量化に関しても、対象資料の原位置保持の保障に関して等、解決しなければならない検討課題が山積しており、今後の発掘調査時の視点にかかってくるものと考えられる。

将来の方向としては、任意遺跡出土資料全ての定量化を実施し、結果として単位遺跡全体の傾向を把握してゆく段階を指向すべきであろうと考える。

B．方法

a．分類

まず土師器、須恵器、陶磁器等、焼き物の種別によって分類を行なう。その後各焼き物の中で、各形式ごとに選別する。幸いにも今回取り上げた87SE015・98SE002出土資料中には、土師器と須恵器の弁別に苦慮する資料は無かったため、焼き物種別の分類には主観性の介在する可能性は極めて低いと考えられる。しかし奈良時代の資料中には、焼き物種別の分類に苦慮する資料が存在するため、当該時期の資料の分析には主観性が介在する可能性が高くなると考えられる。さて同一焼き物内における形式の分類には、以下の属性を基準として用いた。なお87SE015・98SE002出土資料の分類に必要な形式名のみを抽出しており、形式認定のための属性ならびに形式名は太宰府市教育委員会にて用いている基準（山本、1984）を適用している。

［供膳具］

椀c　ｉ）高台を有する。　ii）体部立ち上がりが急。　iii）口縁端部が外傾している。

椀c１：体部形状が直線的。　椀c２：体部形状が丸い。

椀a　i）高台を有しない。　ii）体部立ち上がりが急。　iii）体部形状が丸い。
iv）口縁端部が外傾している。

坏a（×小皿a 1）　i）高台を有しない。　ii）体部が直線的に立ち上がる。

小皿a 2　i）高台を有しない。　ii）偏平で器高が低い。　iii）口縁端部内面に溝が一条巡る。

皿c　i）高台を有する。　ii）坏部の器厚が薄い。　iii）体部の立ち上がりが無い。

器台　i）坏部円孔あり。　ii）坏部の器厚が厚い。　iii）体部の立ち上がりが無い。
iv）脚部に指頭圧痕跡が多数残る。

［**煮沸具**］

甕a　i）外面に刷毛痕跡あり。　ii）器厚が厚い。　iii）胎土が粗い。　iv）体部形状が丸い。　v）頸部形状が「く」の字状を呈する。　vi）煤が付着する。

甕b　i）外面に叩き痕跡あり。　ii）器厚が厚い。　iii）胎土が粗い。　iv）体部形状が丸い。　v）頸部形状が「く」の字状を呈する。　vi）煤が付着する。

各形式の中で抽出した属性は、実際の分類の際思考したものを記述している。また形式認定のための属性が全て揃う資料の方が少なく、破片資料を扱う場合の欠点であろう。この場合の対処方法として、分類に等級をつけ、上記の形式をAレベルとし、認定属性が欠如するにつれて、以下Bレベル、Cレベルへと等級を落として考えて行く。概念表を以下に示す。また全く分類不可能な資料の処遇として、胎土の精製、粗製によっても分類した。この分類には、供膳具である器台と煮沸具である甕が同一分類（粗製品）に混在している可能性が高い。この分類項目は、Dレベルとして弁別した。

Aレベル	Bレベル	Cレベル
椀a	椀	供膳具
椀c		
坏a	坏	
皿c	皿	
器台	器台	
甕a	甕	煮沸具
甕b		

分類に際し、やはり「迷う」資料が存在している。このような資料に関しては、迷うことなく「分類不能」資料として排除した。理由としては、認定属性個々を分析対象とする資料に冷静に適用した場合、いずれかが欠如ないしは不明瞭であることが往々にしてあるためで、資料に内包されている属性認定に困難な部分があると判断した。「迷う」ことすなわち主観の入り込む隙間を与えることになると考えたことによる。しかし、「分類不能」資料であっても、極めて細片でない限り、上記に示した各レベルを設定したことにより、いずれかに含み得ることができた。

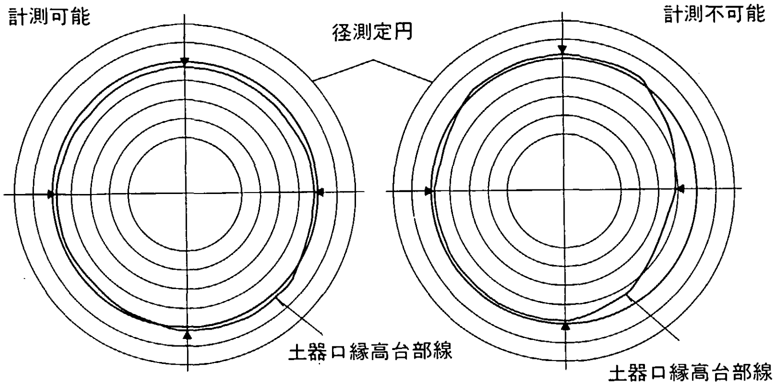


Fig.133　歪み資料選別基準

逆に、形式の認定が可能な資料については、形式から型式へと分類してゆく必要がある。これは先述したように一括資料の時間軸上での位置づけに不可欠な課題であると考えられる。この課題については、別に論考してゆくため詳述は避ける。実際の型式認定については、以下に示す作業条件を設定し進めた。

型式の認定には、形式内における口径ないしは高台径による分類を適用した。作業仮説として山本信夫による成果に基づいている（山本、1988)。この分類の際の作業条件として、１）破片計測法による残存率ごとの径測定を行ない分類を実施した。すなわち１/１、１/２、１/４、１/４以下、分類不可能の５段階に分け、１/１、１/２、１/４までの残存資料に関して径計測を行ない、それぞれの径により分類を行なった。述べるまでもなく細片化するにつれて有効性が低下してくる。２）歪みの生じた資料の取り扱いとして、同心円を４分割し各直線上において３点以上許容（Fig.133左側　▲印部分）する資料を用い、各点によって示された値の平均値を用いた。２点以下（Fig.133右側　▲印部分）の場合は歪みが著しい資料として計測資料から除外した。

b．復原率と完形品出土率

膨大とも思える資料を定量するにあたって、導き出された値の有効性と限界を表記する手段として、全破片総数中に占める対象破片数もしくは対象個体数の割合を数値化し、復原率という言葉で表現した。述べるまでもなく、復原率が高いほど形式認定の度合いないしは個体への還元度が高く、当時の食器組成復原に極めて近しい値となろう。これに対し、復原率が低い場合、その後の処理で導き出される値への信頼度が比例して低くなり、導き出される結論も、多くの作業仮説上での立論となり、可能性の問題として処理せざるを得ない。

復原率低下の原因としては、１）調査段階での遺物取り上げ時の個体認識の甘さ、２）遺物細片化による復原作業の不十分さないしは困難さ、が大きくあげられ、それぞれの原因を作り出した諸要因が当時の行為に基づくものか現在の行為に基づくものであるのかの判断が不明確となり、確定要素の稀弱さからくる未解決課題を内在していることになる。当時の行為による原因に関しての解決方法は、調査現場での遺物取り上げ時での条件認識、つまり当時のどのような行為によって、考古事象として現在調査現場に生起してきているのかを、認識することである程度解決できるものと考える。換言するならば、一括埋納か一括廃棄か、一緒資料（単なる集合資料）かの弁別が必要となる。現在の整理現場での要因解決については、十分な整理時

間と経済的背景が必要となろうが、行政現場では許される範囲が自ずと限られていることから、発掘調査現場での個体認識と取り上げによって、その後の整理作業の簡便化を図ってやる必要があろう。現在筆者が思い付く範囲での記述であるので、今後経験の積み重ねで解決方法は立案してゆきたい。

全ての作業は、先述した復原率の数値上に立脚しているといっても過言ではない。したがって、以下に述べる完形品出土率の算出ならびに各形式の組成についても、復原率の如何によっては机上の推察でしかない。完形品出土率の算出については、中井（1995）に詳しい。つまり廃棄の場であれ、埋納の場であれ、どのような状況でなされた行為による産物であるのかを推定する方法として、完形品出土率を算出するというものである。全破片総数で個体復原（完形品復原個体）数を除算するもので、完形品出土率が高率のものほど、文字通り完形品にて埋没してしまったと考えることができる。ただし等しく一括行為ということを限定する根拠ではないことを注意しておく必要がある。あくまでも完形品の状態で何らかの行為が及ぼされた結果であり、廃棄の同時性については現場での検証が優先される。しかしいづれにしても中井の視点は、想定できる時間の長短はあるにしろ、考古遺物に及ぼされた行為に何らかの法則性を見つけ出し、解釈を加えようとする意図が感じられ、今後事例研究を深化させてゆくべきものと考えている。別視点で捉えるならば、廃棄資料中におけるゴミ資料の除去にも役立ちそうである。実験の必要があろう。

c．定量

極力主観を排除し、設定した属性に基づく形式認識を用いて数値化してゆく、この作業中には、復原率の低下を気にせず、極めて機械的作業で行ってゆく必要がある。こうすることが、自己客観であろうとも、客観的視野に近づける第一歩と考えている。定量分析に必要なことは結果として導き出される数値も大事であろうが、数値が導き出されるまでの過程がさらに重要であろうと考えている。この過程に主観を持ち込めば結果をいかに統計処理しようと、導き出される数値は想い出の中に浮かび上がる幻影に等しい。したがって、客観的数値は、定量分析者の分析精度の精粗に関ってくる重要な問題であると理解している。数値化することのみが分析再現性の保証と客観化につながると誤認してはいけない。これは等しく自然科学分析でも追求されている重要課題である。その意味でも復原率の提示が、導き出された定量結果の有効性と限界を同時に提供し、そこから立論される結論への信頼度（限界点も含む）を表現することになる。

ここでの試みは、筆者自身漠然と抱いていた憧れを、実際に行動に起こしてみた結果である。したがって、後述するように復原率の低下が導き出され、定量作業中に何を導き出そうとしているのか疑心暗鬼になった。しかし今後の諸作業への足掛かりとして記録しておく必要性を考え、定量分析を実施した。実施した分析法は、真新しいものではなく、一般的な方法である1）破片数量法、2）口縁部計測法を用いた。ただし2）の口縁部計測法は、宇野（1981）に

よって提示された方法よりは厳密性に欠けている。つまり半径５㎜単位で描かれた同心円上での計測で、同一円周内、この場合５㎜を許容範囲として同一円周個体と認識し、合わせて１/１・１/２・１/４の残存率を記述し、個体数算出の根拠とした。

重量法に関しては、当初実施する予定でいたが、別形式同一形態の部位（土師器・椀ｃと椀ａの口縁部形態）が存在していることに気付き、今回は断念した。

以上の方法の検討に基づき実際の分析結果を見てみよう。

C．成果

b．復原率と完形品出土率

条87SE015出土資料

Tab.14に見るように、瓦を含んだ全破片総数は5222点、瓦を除いた食器のみの全破片数は5200点を数えた。各レベルによる破片数については、遺物選別の際抽出していた実測可能ないしは口径および底径の計測可能資料群（抽出資料）と、未実測資料として収納していた資料群（未抽出資料）の２者について全資料を定量し、その結果を、Tab.10・11に表記した。特に目だっているのが土師器・形式認定不可能資料で3886点を数える。この要因としては、調査現場での一括性の把握にのみ注意が向き、個体認識に甘さが生じたため、結果として整理作業に接合時間の長期化をきたし、同時に作業効率の低下を引き起こしてしまったことにある。したがって述べるまでもなく、復原率は、Tab.14に示すように、Dレベル復原率を除いた各レベルとも30％を割るという最悪の結果となってしまった。したがって、以下に記述してゆく食器組成に関しても、参考事例としての意味しかなしていない。今後の調査現場での処理から詰めた定量分析を実施し、検証してゆくしかないと考えている。当然のことながら完形品出土率に関しても今回は算出していない。

条98SE002黒色土出土資料

Tab.15に見るように、瓦を含んだ全破片総数は1589点、瓦を除いた食器のみの全破片数は1584点を数えた。先の方法同様に各レベルによる破片数の結果は、Tab.12・13に表記した。結果としてやはり調査現場での処理に不十分さが存在していることから、土師器・形式認定不可能資料が1229点存在しており、復原率の低下を引き起こしてしまった。先の87SE015の定量処理同様、今回は参考資料としてとどめておくしかないと考える。当然のことながら前者同様完形品出土率の算出は控えた。

なお両遺構の完形品出土率の算出は、各形式の１/１資料数を加算し、総破片数で除算することで求めることができる。

c．定量

ｉ）破片数量法

条87SE015出土資料

1)未抽出資料

分類形式：土師器・椀C2

	高台径			
	数量			
	1／1	1／2	1／4	小計
5.0cm～5.9cm		1		1
6.0cm～6.9cm	2	4	8	14
7.0cm～7.9cm	9	4	8	21
8.0cm～8.9cm	6	3	1	10
9.0cm～9.9cm	1			1
10.0cm～10.9cm				0
小計	18	12	17	
1／4以下	31			
計測不可能	20			
総破片数	98			

分類形式：土師器・椀a

	口縁径	
	数量	
1／4以下	28	
計測不可能	22	
総破片数	50	

分類形式：土師器・坏a(×小皿a1)

	口縁径			
	数量			
	1／1	1／2	1／4	小計
10.0cm～10.9cm			5	5
11.0cm～11.9cm			10	10
12.0cm～12.9cm			2	2
13.0cm～13.9cm				0
14.0cm～14.9cm				0
15.0cm～15.9cm				0
小計	0	0	17	
1／4以下	253			
計測不可能	27			
総破片数	297			

分類形式：土師器・坏a

	数量	
計測不可能	1	
総破片数	1	

分類形式：土師器・小皿a2

	数量	
1／4以下	1	
総破片数	1	

分類形式：土師器・甕b

	口縁径	
	数量	
計測不可能	6	
総破片数	6	

分類形式：黒色土器A類・椀C2

	口縁径	
	数量	
計測不可能	2	
総破片数	2	

分類形式：黒色土器B類・椀C2

	口縁径	
	数量	
計測不可能	4	
総破片数	4	

分類形式：土師器・椀

	高台径			
	数量			
	1／1	1／2	1／4	小計
13.0cm～13.9cm		1		1
小計	0	1	0	
1／4以下	253			
計測不可能	20			
総破片数	274			

2)抽出資料

分類形式：土師器・椀C2

	高台径			
	数量			
	1／1	1／2	1／4	小計
5.0cm～5.9cm				0
6.0cm～6.9cm				0
7.0cm～7.9cm	2	2		4
8.0cm～8.9cm	4		3	7
9.0cm～9.9cm		1		1
10.0cm～10.9cm				0
小計	6	3	3	
1／4以下	3			
計測不可能				
総破片数	15			

分類形式：土師器・椀a

	口縁径			
	数量			
	1／1	1／2	1／4	小計
10.0cm～10.9cm				0
11.0cm～11.9cm			2	2
12.0cm～12.9cm		1	1	2
13.0cm～13.9cm	1		4	5
14.0cm～14.9cm				0
15.0cm～15.9cm			1	1
小計	1	1	8	
1／4以下	5			
計測不可能				
総破片数	15			

分類形式：土師器・坏a(×小皿a1)

	口縁径			
	数量			
	1／1	1／2	1／4	小計
10.0cm～10.9cm	8	7	12	27
11.0cm～11.9cm	12	19	32	63
12.0cm～12.9cm	7	7	3	17
13.0cm～13.9cm		2	2	4
14.0cm～14.9cm				0
15.0cm～15.9cm			1	1
小計	27	35	50	
1／4以下	17			
計測不可能				
総破片数	129			

分類形式：黒色土器B類・椀C2

	高台径			
	数量			
	1／1	1／2	1／4	小計
8.0cm～8.9cm		1		1
小計	0	1	0	
1／4以下				
計測不可能				
総破片数	1			

分類形式：土師器・皿C

	高台径			
	数量			
	1／1	1／2	1／4	小計
12.0cm～12.9cm	2			2
13.0cm～13.9cm			1	1
小計	2	0	1	
1／4以下破片				
分類不可能				
総破片数	3			

分類形式：土師器・椀

	高台径			
	数量			
	1／1	1／2	1／4	小計
11.0cm～11.9cm			1	1
12.0cm～12.9cm			1	1
小計	0	0	2	
1／4以下破片	13			
分類不可能				
総破片数	15			

Tab.10　分類項目の数量(1)(条坊87次SE015出土資料)

分類形式：土師器・小皿

	数量	
1/4以下	6	
総破片数	6	

分類形式：土師器・高台

	高台径			
	数量			
	1/1	1/2	1/4	小計
6.0cm〜6.9cm	4		4	8
7.0cm〜7.9cm	2	5	13	20
8.0cm〜8.9cm			4	4
9.0cm〜9.9cm			1	1
10.0cm〜10.9cm				0
11.0cm〜11.9cm				0
小計	6	5	22	
1/4以下	100			
計測不可能	82			
総破片数	215			

分類形式：土師器・器台

	数量	
	坏部	脚部
計測不可能	31	11
総破片数	42	

分類形式：土師器・甕

	数量	
計測不可能	80	
総破片数	80	

分類形式：瓦

	数量	
	格子叩き	縄目叩き
計測不可能	8	2
叩き不明	10	
総破片数	20	

分類形式：黒色土器A類・椀

	口縁径	
	数量	
計測不可能	12	
総破片数	12	

分類形式：黒色土器B類・椀

	口縁径	
	数量	
計測不可能	3	
総破片数	3	

分類形式：黒色土器A類

	数量	
計測不可能	7	
総破片数	7	

分類形式：黒色土器B類

	数量	
計測不可能	1	
総破片数	1	

分類形式：土師器・形式認定不可能資料

	数量	
	精製品	粗製品
計測不可能	3847	39
総破片数	3886	

分類形式：土師器・小皿

	数量	
1/4以下	4	
総破片数	4	

分類形式：土師器・高台

	高台径			
	数量			
	1/1	1/2	1/4	小計
6.0cm〜6.9cm	1			1
7.0cm〜7.9cm	1			1
8.0cm〜8.9cm				0
9.0cm〜9.9cm				0
10.0cm〜10.9cm			1	1
11.0cm〜11.9cm				0
小計	2	0	1	
1/4以下	1			
計測不可能				
総破片数	4			

分類形式：土師器・器台

	数量	
	坏部	脚部
計測不可能	8	
総破片数	8	

分類形式：瓦

	数量	
	格子叩き	縄目叩き
計測不可能	2	
叩き不明		
総破片数	2	

分類形式：黒色土器A類・椀

	口縁径	
	数量	
計測不可能	1	
総破片数	1	

分類形式：黒色土器B類・高台

	口縁径	
	数量	
計測不可能	1	
総破片数	1	

分類形式：土師器・甕

	数量	
1/4以下	8	
計測不可能	1	
総破片数	9	

分類形式：その他の資料(搬入品)

	数量	
須恵器	3	
緑釉陶器	2	
越州青磁椀Ⅰ類	3	
越州青磁椀Ⅱ類	2	
総破片数	10	

Tab.11　分類項目の数量(2)(条坊87次SE015出土資料)

1)未抽出資料

分類形式：土師器・椀C2

	高台径			
	数量			
	1/1	1/2	1/4	小計
5.0cm～5.9cm				0
6.0cm～6.9cm				0
7.0cm～7.9cm	1			1
8.0cm～8.9cm	1			1
9.0cm～9.9cm				0
10.0cm～10.9cm				0
小計	2	0	0	
1/4以下				
計測不可能	1			
総破片数	3			

分類形式：土師器・椀a

	口縁径	
	数量	
1/4以下	4	
計測不可能	8	
総破片数	12	

分類形式：土師器・坏a(×小皿a1)

	口縁径			
	数量			
	1/1	1/2	1/4	小計
9.0cm～9.9cm			10	10
10.0cm～10.9cm			8	8
11.0cm～11.9cm				0
12.0cm～12.9cm				0
13.0cm～13.9cm				0
14.0cm～14.9cm				0
小計	0	0	18	
1/4以下	104			
計測不可能				
総破片数	122			

分類形式：土師器・小皿a2

	数量			
	1/1	1/2	1/4	
11.0cm～11.9cm			1	
1/4以下	14			
総破片数	15			

分類形式：土師器・甕a

	口縁径	
	数量	
計測不可能	2	
総破片数	2	

分類形式：土師器・椀

	口縁径			
	数量			
	1/1	1/2	1/4	小計
11.0cm～11.9cm		1		1
小計	0	1	0	
1/4以下	49			
計測不可能	1			
総破片数	51			

分類形式：土師器・小皿

	数量	
1/4以下	29	
総破片数	29	

分類形式：土師器・高台

	高台径			
	数量			
	1/1	1/2	1/4	小計
6.0cm～6.9cm	1	1		2
7.0cm～7.9cm	1		3	4
8.0cm～8.9cm				0
9.0cm～9.9cm				0
10.0cm～10.9cm				0
11.0cm～11.9cm				0
小計	2	1	3	
1/4以下	9			
計測不可能	23			
総破片数	38			

2)抽出資料

分類形式：土師器・椀C2

	高台径			
	数量			
	1/1	1/2	1/4	小計
5.0cm～5.9cm				0
6.0cm～6.9cm				0
7.0cm～7.9cm	4			4
8.0cm～8.9cm	1			1
9.0cm～9.9cm				0
10.0cm～10.9cm				0
小計	5	0	0	
1/4以下				
計測不可能				
総破片数	5			

分類形式：土師器・椀a

	口縁径			
	数量			
	1/1	1/2	1/4	小計
10.0cm～10.9cm				0
11.0cm～11.9cm				0
12.0cm～12.9cm	10			10
13.0cm～13.9cm	1			1
14.0cm～14.9cm	1			1
15.0cm～15.9cm				0
小計	12	0	0	
1/4以下				
計測不可能				
総破片数	12			

分類形式：土師器・坏a(×小皿a1)

	口縁径			
	数量			
	1/1	1/2	1/4	小計
10.0cm～10.9cm	30			30
11.0cm～11.9cm	4			4
小計	34	0	0	
総破片数	34			

分類形式：土師器・小皿a2

	口縁径			
	数量			
	1/1	1/2	1/4	小計
10.0cm～10.9cm	1			1
11.0cm～11.9cm	2			2
小計	3	0	0	
総破片数	3			

分類形式：黒色土器B類・皿a

	高台径			
	数量			
	1/1	1/2	1/4	小計
11.0cm～11.9cm		2		
小計	0	2	0	
1/4以下				
計測不可能				
総破片数	2			

分類形式：土師器・把手

	数量	
1/4以下		
計測不可能	1	
総破片数	1	

分類形式：その他の資料(搬入品)

	数量	
須恵器		
緑釉陶器		
越州青磁椀Ⅰ類	1	
白磁XI類か？	1	
総破片数	2	

Tab.12　分類項目の数量(1)(条坊98次SE002出土資料)

分類形式：土師器・甕

	数量	
計測不可能	20	
総破片数	20	

分類形式：瓦

	数量	
	格子叩き	縄目叩き
計測不可能	3	
叩き不明	2	
総破片数	5	

分類形式：黒色土器A類・椀

	数量	
計測不可能	1	
総破片数	1	

分類形式：黒色土器B類・椀

	数量	
計測不可能	3	
総破片数	3	

分類形式：土師器・形式認定不可能資料

	数量	
	精製品	粗製品
計測不可能	1229	0
総破片数	1229	

Tab.13　分類項目の数量（2）(条坊98次SE002出土資料)

破片数量法による定量結果をTab.14に示した。小形の器種である坏a（×小皿a）が最も多く、次いで椀形態が多い。他の器種に関しては器台が7.34%と占めているほかは、微量となる。復原Cレベルの定量結果が物語るように、供膳形態が90%以上を占めており、煮炊きに関連しての食器廃棄の可能性は薄いといえる。また、復原Bレベルの定量結果からは在地産食器がやはり90%以上を占めていることが読み取れ、陶磁器廃棄に消極的であったとも考えられる。ただしこの分析結果のみでは、消費に消極的であったかどうかは判然としない。単位遺跡全体での時空間軸上での変異を検討する必要があろうと考える。

条98SE002黒色土出土資料

前者の分析結果同様の傾向にある（Tab.15)。ただし87SE015で希薄であった土師器・椀aと小皿a2の出土率が高い。他調査区域での遺構出土資料の経験的観測に基づくならば、遺構差に還元できるものと考えられ、時空間差まで評価できる差異ではないであろうと考えられる。

また復原Cレベルの定量結果が物語るように、供膳形態が90%以上を占めており、煮炊きに関連しての食器廃棄の可能性は薄いといえる。また、復原Bレベルの定量結果からは在地産食器がやはり90%以上を占めていることが読み取れ、陶磁器廃棄に消極的であったとも考えられる。ただしこの分析結果のみでは、消費に消極的であったかどうかは判然としない。単位遺跡全体での時空間軸上での変異を検討する必要があろうと考える。

ii）口縁部計測法

条87SE015出土資料

口縁部計測法による推定個体数に基づく組成比率を示した（Tab.14)。ここでは、土師器・椀類、坏a（×小皿a）類、小皿c類のみが口縁部計測法に適合する形式で、他の形式に関しては、Tab.14に記載したように作業仮説上に立脚している。

主体を占める形式としては、坏a（×小皿a）が50%近くの比率を占めており、ついで椀c2類が30%近くを占めている。組成比率が示すように供膳具が主体を占めていることが読み取れる。この傾向は破片数量法による結果とほぼ同様の結果を導き出している。また、高台など

一個体としての破片を見い出し難い陶磁器類をゴミ等の混入品として除外した場合の組成比を合わせて算出した。陶磁器の出土量が在地産食器に対して微量であるため、比率には大差ない結果を得た。

条98SE002黒色土出土資料

口縁部計測法による推定個体数に基づく組成比率を示した（Tab.15）。ここでは、土師器・椀類、坏a（×小皿a）類、小皿a 2、小皿c類のみが口縁部計測法に適合する形式で、他の形式に関しては、Tab.15に記載したように作業仮説上に立脚している。

主体を占める形式としては、坏a（×小皿a）が60%近くの比率を占めており、ついで椀a類

	総数に占める割合	食器に占める割合	破片数
総破片数			5222
総破片数(瓦除外)			5200
復原率(A)	13.04%	13.10%	681
復原率(B)	20.78%	20.87%	1085
復原率(C)	25.01%	25.12%	1306
復原率(D)	99.58%	100.00%	5200

復原Aレベル(口縁部計測法)

形式	1／1総数	1／2総数	1／4総数	1／2個体数	1／4個体数	推定個体数	全体に占める割合	割合(陶磁器除外)
土師器　椀C2	24	15	20	8	5	37	29.84%	31.62%
土師器　椀a	1	1	8	1	2	4	3.23%	3.42%
土師器　坏a(×小皿a1)	27	35	67	18	17	61	49.19%	52.14%
土師器　小皿a2	0	0	0	0	0	0	0.00%	0.00%
土師器　皿c	2	0	1	0	0	2	1.61%	1.71%
土師器　器台	11	0	0	0	0	11	8.87%	9.40%
土師器　甕a	0	0	0	0	0	0	0.00%	0.00%
土師器　甕b	0	0	0	0	0	0	0.00%	0.00%
黒色土器B類　椀C2	0	1	0	1	0	1	0.81%	0.85%
黒色土器A類　椀C2	0	0	0	0	0	0	0.00%	0.00%
須恵器　鉢	1	0	0	0	0	1	0.81%	0.85%
緑釉陶器	2	0	0	0	0	2	1.61%	—
越州窯系青磁	5	0	0	0	0	5	4.03%	—
					合計	124	100.00%	100.00%
					合計(陶磁器除外)	117		

※1／4総数中における土師器器台､緑釉陶器・越州窯系青磁についでは､脚部の数および破片を示す。

復原Aレベル(破片数量法)

形式	総破片数	割合
土師器　椀C2	113	16.59%
土師器　椀a	65	9.54%
土師器　坏a(×小皿a1)	426	62.56%
土師器　小皿a2	1	0.15%
土師器　皿c	3	0.44%
土師器　器台	50	7.34%
土師器　甕a	6	0.88%
土師器　甕b	0	0.00%
黒色土器B類　椀C2	5	0.73%
黒色土器A類　椀C2	2	0.29%
須恵器　鉢	3	0.44%
緑釉陶器	2	0.29%
越州窯系青磁	5	0.73%
合計	681	100.00%

復原Bレベル(破片数量法)

器種	総破片数	割合
土師器　椀	467	43.04%
土師器　皿	440	40.55%
土師器　器台	50	4.61%
土師器　甕	95	8.76%
黒色土器B類　椀	8	0.74%
黒色土器A類　椀	15	1.38%
須恵器　鉢	3	0.28%
緑釉陶器	2	0.18%
越州窯系青磁	5	0.46%
合計	1085	100.00%

復原Cレベル(破片数量法)

器種	総破片数	割合
供膳具	1211	92.73%
煮沸具	95	7.27%
合計	1306	100.00%

復原Dレベル(破片数量法)

器種	総破片数	割合
精製品	5016	96.46%
粗製品	184	3.54%
合計	5200	100.00%

Tab.14　定量分析結果(条坊87次SE015)

が20%近くを占めている。組成比率が示すように供膳具が主体を占めていることが読み取れる。この傾向は破片数量法による結果とほぼ同様の結果を導き出している。また、細片資料であるため一個体として見なし難い陶磁器類をゴミ等の混入品として除外した場合の組成比を合わせて算出した。陶磁器の出土量が在地産食器に対して微量であるため、比率には大差ない結果を得た。

iii）両分析法の結果の比較

おおまかな組成の大小に関しては二遺構の定量分析結果は、同様の結果を導き出せたといえる。しかし、実際の数値として見た場合、差が大きいことが読み取れよう。特に数量の多い形

	総数に占める割合	食器に占める割合	破片数
総破片数			1589
総破片数(瓦除外)			1584
形式認定復原率(A)	13.34%	13.38%	212
形式認定復原率(B)	20.01%	20.08%	318
形式認定復原率(C)	22.34%	22.41%	355
形式認定復原率(D)	99.69%	100.00%	1584

復原Aレベル(口縁部計測法)

形式	1／1総数	1／2総数	1／4総数	1／2個体数	1／4個体数	推定個体数	全体に占める割合	割合(陶磁器除外)
土師器　椀C2	7	0	0	0	0	7	10.94%	11.29%
土師器　椀a	12	0	0	0	0	12	18.75%	19.35%
土師器　坏a(×小皿a1)	34	0	18	0	5	39	60.94%	62.90%
土師器　小皿a2	3	0	1	0	0	3	4.69%	4.84%
土師器　皿c	0	0	0	0	0	0	0.00%	0.00%
土師器　器台	0	0	0	0	0	0	0.00%	0.00%
土師器　甕a	0	0	0	0	0	0	0.00%	0.00%
黒色土器B類　皿a	0	2	0	1	0	1	1.56%	1.62%
黒色土器B類　椀C2	0	0	0	0	0	0	0.00%	0.00%
黒色土器A類　椀C2	0	0	0	0	0	0	0.00%	0.00%
須恵器　鉢	0	0	0	0	0	0	0.00%	0.00%
白磁	1	0	0	0	0	1	1.56%	—
越州窯系青磁	1	0	0	0	0	1	1.56%	—
					合計	64	100.00%	100.00%
					合計(陶磁器除外)	62		

※1／4総数中における土師器器台、緑釉陶器・越州窯系青磁については、脚部の数および破片を示す。

復原Aレベル(破片数量法)

形式	総破片数	割合
土師器　椀C2	8	3.77%
土師器　椀a	24	11.32%
土師器　坏a(×小皿a1)	156	73.58%
土師器　小皿a2	18	8.49%
土師器　甕a	2	0.94%
黒色土器B類　皿a	2	0.94%
白磁	1	0.47%
越州窯系青磁	1	0.47%
合計	212	100.00%

復原Bレベル(破片数量法)

器種	総破片数	割合
土師器　椀	83	26.10%
土師器　皿	205	64.47%
土師器　器台	0	0.00%
土師器　甕	22	6.92%
黒色土器B類　皿	2	0.63%
黒色土器B類　椀	3	0.94%
黒色土器A類　椀	1	0.31%
白磁	1	0.31%
越州窯系青磁	1	0.31%
合計	318	100.00%

復原Cレベル(破片数量法)

器種	総破片数	割合
供膳具	332	93.52%
煮沸具	23	6.48%
合計	355	100.00%

復原Dレベル(破片数量法)

器種	総破片数	割合
精製品	1561	98.55%
粗製品	23	1.45%
合計	1584	100.00%

Tab.15　定量分析結果(条坊98次SE002)

式に関して誇張される傾向にあり、両者の数値に２倍程度の差が見い出せる形式も存在してしまっている。したがって、今回の分析によって導き出された結果は、数値としては評価し難いといえる。しかし、両遺構とも供膳具が主体を占めていることを指摘することは可能であろう。また、陶磁器が極めて微量ないしはゴミとして混入している可能性も指摘することはできるであろうと考える。

やはり、復原率の低下が定量分析の結果に推論を多く介在させる結果となった。また同時に２つの方法を用いて分析を試みたが、両者の分析結果を比較した場合、数値上で誇張傾向にある形式が存在する結果となった。これは両分析法が有効ではないと指摘しているのではない。両者とも有効性と限界を持ち合わせており、分析対象資料によって使い分ける必要性を確認したといえる。したがって今回の誇張傾向を引き出した要因は、分析方法に問題があるのではなく、復原率の低下をもたらした現場処理に全ての要因が存在していると指摘できよう。

Ｄ．課題

使用当時の食器組成ならびに遺跡の性格を考える上で、何らかの手立てを模索する意味から、遺物の定量化の試みを検討してきた。先述してきたように復原率が如実に物語っているように、今回の定量値の信憑性には、いささか疑念を抱かざるを得ない。やはり、一括資料の定量作業の簡便化と正確化を図るためには、現場での遺物抽出方法の改善が最も求められるところであろう。個体復原を簡便にかつ合理的に実施することが、定量値への信憑性を高めることになる。したがって現場での遺物取り上げを、可能なかぎり個体ごとに取り上げてゆく必要性を強く感じた。これも調査に関わる諸条件が伴ってくることであるが、今後は条件獲得のための手段を案出する必要性も感じている。可能なかぎり個体ごとに取り上げてゆくことで、限られた整理作業時間を有効に意味ある作業とするために必要であろうし、何よりも定量作業の汎用性も高まってくるものと考える。やはり「全ては現場から」ということになる。

長々と定量化の試みに対する課題と実際について述べてきた。以下に抽出できた成果と今後検討すべき課題を列記しておく。

（実作業面）

ａ）復原作業の簡便化を図る必要から、調査現場での個体認識を着実に実施しておく必要がある。

ｂ）形式分類作業時の属性レベルでの分類の基準化と、基準に基づく機械的作業の実施。
今回の土師器・椀c２と椀aの口縁部形態の同一形態等のように、各時期によっても分類限界は異なっている。したがって、分類属性の明確化と同時に分類限界を認識しておく必要がある。

ｃ）分類不適合資料の排除に当たって、冷淡であること（分類者の機械化が必要）。

ｄ）混入品（ゴミ等）の排除。

学史上認識されてきた共時性の尊重と疑問を持つ必要がある。前後の画期に属する食器の混在は共時性が高い可能性があるが、大きく離れた画期に属する食器の混在に関しては、他の共伴例の検証に基づき排除する必要があろう。前後の画期に属する食器の混在に関しては、参考資料ながら今回の分析によって、型式の量の変化によって時間軸上での前後関係であることが確認できている。このように量の概念を適用することによって、遺構出土一括資料の従来考えられていた範疇より、現実に即した時間軸上での位置づけが可能になると考えている所以である。

e）輸入陶磁器および搬入品に関する取り扱い。

資料に平等な取り扱いが必要であろう。

d）項目同様に混入品、特にゴミとして混入した可能性が高い場合の細片資料の取り扱いは慎重になる必要があろう。ただし墓への破片副葬など例外的事例（狹川、1993）もあるので、現場での検証が必要であることは述べるまでもない。

f）分類後の数値化に関しては、忍耐と体力が必要となる。

g）数値化した各分類単位ごとの資料は、各部分に分け保管することが、実験の再現性保障と考えるべきであろう。筆者自身将来の再検討の気力が残存していれば、実施してみたいと思っている。

h）数値化する資料の範囲は、ゴミと考えられる資料群までを含んで、各レベルごとに数値化しておく必要がある。多角的な分析に供するために必要であろう（宇野、1992）。

（定量成果）

復原率30%を割る定量結果であったことを前提として、以下に記述する。

a）口縁部計測法に基づく組成と破片数量法に基づく組成を比較すると、大小のおおまかな差異は同様の結果を導き出したが、土師器椀Ｃ２の数値に代表されるように、破片数量法が約１/２減じた結果となっている。したがって、単純に数値化による立論には、やや検討が必要と考えられ、懐疑的にならざるを得ない。やはり復原率を高める努力が必要であろう。復原率が低い場合は、定性レベルでとどめておく必要もある。数値の一人歩きを防止するためにも。

b）組成の大小比でゆくと、供膳具が主体を占めている。特に土師器坏a（×小皿a）の比率が高い。

c）各形式内における法量差は看取しがたい。

d）87SE015出土資料と98SE002黒色土出土資料の比較

・型式の存在量にやや差異がみられる。詳細については、後項にて記述する。

・98SE002黒色土出土資料には、極細片での陶磁器が混入しており、共時性が認め難いことから、土師器・黒色土器のみで構成される廃棄行為と考えられる。「乾元大寳」が共伴していることと関係があるかどうかは、将来に期するしかない。

以上記述してきたように、定量分析には様々な課題が存在している。しかし暗いことばかり記述しても先が無いので、希望の持てる方法を案出する必要がある。先に記述したことと重複するが、やはり「全ては発掘調査現場から」ということ以外にない。全ての処理の始まりは、調査現場での所見と処理にあり、行政内での限られた時間と財源を十分に活用するためにも極めて重要な処理課題といえる。あとは分析者の厳密性が要求される手法であり、主観を如何に排除し自らが分析機械となるかにかかっている。筆者自身、今回の方法の模索は、将来的な単位遺跡ごとの食器組成ないしは、食器使用傾向の把握に対する方法の検討にすぎない。したがって肥前東部にて実践されている遺跡内食器使用傾向の把握（徳永、1991　前田、1993ａ・1993ｂ・1994・1995）のように、遺跡出土資料群全てを定量化することを指向すべきであろうと考えている。その前提作業として出土全資料を適切かつ合理的な方法で定量化する方法を検討し、結果として時間および空間的比較を条坊内および条坊外で実施してゆく必要があろう。

（中島恒次郎）

引用文献

宇野隆夫（1981）「第４章　遺物の考察」『白河北殿北辺の調査』pp.61～88

宇野隆夫（1992）「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告　第40集』pp.215～231

岡村道雄・吉岡恭平（1981）「土器型式の設定と聖山遺跡の土器群」『信濃　第33巻　第４号』pp.28～41

G.L.COWGILL (1972) MODELS, METHODS AND TECHNIQUES FOR SERIATION. Models in Archaeology pp.381～424.

R.C.DUNNELL (1970) SERIATION METHODS AND ITS EVALUATION. American Antiquity Vol.35, No.3 pp.381～319.

徳永貞紹（1991）「本村遺跡出土遺物の位置付け」『本村遺跡（佐賀県文化財調査報告書102）』pp.146～154

狭川真一（1993）「墳墓にみる供献形態の変遷とその背景」『貿易陶磁研究　No.13』pp.１～20

中井淳史（1995）「土器研究の新視覚」『第14回中世土器研究会　研究集会報告資料』pp.18～25

中島恒次郎（1990）「大宰府における搬入土器」『中近世土器の基礎研究　VI』pp.181～192

中島恒次郎（1992）「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究　VIII』pp.113～148

樋口昇一（1972）「土器廃棄に関する一問題」『信濃　第24巻　第12号』pp.72～81

前田達男（1993ａ）「VI．観音遺跡出土容器類の定量分析」『観音遺跡（佐賀市文化財調査報告書46）』pp.26～36

前田達男（1993ｂ）「X．中世容器類の定量分析」『千布二本黒木遺跡（佐賀市文化財調査報告書47）』pp.89～98

前田達男（1994）「VI．中世容器類の定量分析」『大西屋敷Ｉ（佐賀市文化財調査報告書56）』pp.86～96

前田達男（1995）「佐賀市野田遺跡で出土した中世後期容器類の定量分析」『佐賀考古　第３号』pp.57～72

山本信夫（1984）「付編・土器の分類」『大宰府条坊跡　II』pp.１～25

山本信夫（1988）「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究　IV』pp.183～202

横山浩一（1985）「３．型式論」『岩波講座　日本考古学１研究の方法』pp.43～78

脚註

1）調査原因者や調査担当者によって設定された遺跡ではなく、過去存在した集落や墓、役所など性格ごとの遺跡総体を単位遺跡と表現した。同時に存在した遺構群は、相互に関連して存在していることから境界を引くことは困難だが、例えば中世の館跡などある一定空間を占地し、境界を堀等で区画されたものに関しては、この館全体内が単位遺跡となる。用語に関しては適当な語が案出できしだい改定すべきもので、説明の必要性からこの語を使用するにすぎない。

なお調査原因者や調査担当者によって設定された遺跡を、本稿では任意遺跡と呼称する。この呼称に関しても前者同様、適当な語が案出できしだい改定すべきと考えている。

2）本人（分析者）の意志（意図）とは関係なく、他者によって歩かされ活用されること。往々にして本人（分析者）に責任が課せられる。

3．搬入食器の位置付け

A．はじめに

西都大宰府には、様々な人々の往来を物語るかのように、各地にて生産されたとされる各種食器が出土している。これまでの発掘調査成果の検討により、中国産陶磁器等国外からの輸入品や国産の主に畿内周辺からの搬入食器の流入状況が明らかになってきていたが、近年の資料検討によって九州管内諸国にて生産された食器の搬入についても次第に判明してきている。これら大宰府以外で生産された食器の搬入は、当時の人々の動態を知る上で貴重な資料となるばかりか、考古学上での時間尺度の平行関係を把握する上でも重要な位置を占めている。ここでは、後者の課題について取り上げることにする。

考古学上で最優先課題として取り上げられてきた問題として、出土遺物の時間軸上での位置づけがある。いわゆる編年作業であるが、大宰府においても他地域同様に、出土する遺物、特に土師器の編年作業が先学諸氏によって精力的に進められてきた。現在の動向としては、山本（1988・1990　以下山本モデルと記載する）による編年モデルが一応の到達点として、広く理解されている。しかし個々の形式による存続幅の検討など、実際の遺構出土資料へモデルを還元した場合、これまでの理解に基づく編年観[1)]では、一見矛盾が生じているかのような錯覚に捕われる可能性がある。実際、山本モデルによって提示された各画期にまたがる資料群の存在自体、山本自身認めていることである。これには、画期の設定自体に問題があるのではなく、画期設定のレベルと実資料への適用を、別レベルいわば別作業として認識していないことに帰因しているといえる。山本自身はこのことを記述した後、各画期にまたがる資料の提示を行なっているのだが、山本モデルの適用によって導き出される他地域の資料解釈に、やはり編年観からくるズレが生じている。行き着くところ画期設定のレベルと実資料への適用が同一レベルで立論ないしは解釈がなされるため、一見矛盾を内包した結果となり、編年モデルの一遺構化、一小地域化といった「細分」の道を余儀なくされるといった、誤認される悲しい結果となり、結末として先の見えない「迷路」へと埋没してゆくことになりかねない。換言するならば画期内様相の把握の段階から遺構個々の資料解釈へと作業レベルが移行する必要性を認識しておくことが必要であろうと考える。

ここでは搬入食器の位置付けにあたり、前提作業として搬入食器が共伴している遺構出土資料の中で先に在地産食器の位置付けを行ない、どのような在地産食器の様相下に搬入食器個々が共伴しているのかを記述することに目的がある。

B．方法

分析の方法は、前項にて記述してきた量の概念を資料へ適用し、遺構出土資料の時間軸上での位置付けを検討する。量の概念の適用自体、大宰府出土遺物の解釈へは赤司（1989）によっ

て奈良期の資料検討がなされ、また中島（1992）、狭川（1993）によって平安期の資料が示されてきている。赤司の検討には優れた方法と検証が示されているが、その後の比較資料の提示がなされていないことから、残念な結果となっている。また中島・狭川の方法は、定量分析を前面に押し出したかたちでの立論へは至っていない。本稿においても状況は同じであるが、これまで発表されてきた基準資料への量概念を適用し、基準資料の時間軸上での位置付けを検討してみたい。しかし、実際定量作業の困難さは前項にて記述してきたように、実資料を検討すること以外に様々な条件が必要であることが明らかとなっている。したがってここでは、極めて消極的な記述として理解していただきたいのだが、報告書記載の実測図より抽出し型式の数を数値化したい。したがって定量ではなく「半定量[2]」に基づく立論である。ただし、本報告に記載した条87SE015および条98SE002黒色土出土資料に関しては、前項で述べた定量化資料を用いる。

対象とする時期は、山本が設定した（山本、1990）IX期〜XII期までを扱う。これは条87SE015にて共伴した京都系食器群の位置付けを検討する必要からである。また補足として条106SK040出土の土師器甕ｂの位置付けの必要からVII期に関しても記述する。

具体的な方法は、任意抽出資料の型式分類とその量を計測することにあるが、形式に関しては記述の簡略化のため山本モデルによって記載された分類を用いる。また、型式の設定には法量を軸とした設定を行ない、法量値の各種処理によって導き出される数値ごとの個体数量把握に努めた。法量による作業前提は山本モデルによる分析結果に基づいている。また任意抽出資料中に多くを占める土師器・椀Ｃ２、椀a、坏a（×小皿ａ１）の三形式についてのみ数量化を行なった。分析精度は、報告書掲載の任意に抽出された個体によっているため、厳密には埋没当時の個体数に等しいという保証はない。傾向把握のレベルにとどめておきたい。また、法量値の各種処理および個体数量化には、結果の明確化および説明的にする目的で、極めて恣意性の高い処理を行っている。基礎値に関しては、掲載報告書を参照していただきたい。

Ｃ．結果

ｉ）土師器　椀Ｃ２

山本（1990）によって、土師器・椀C2の型式変化が述べられており、時間の経過に伴う高台径の縮小化が示されている。これを数値化したのがTab.16である。抽出した資料は、いずれも大宰府にて出土した資料で、一括廃棄によると考えられる資料を用いた。従来基準資料として広く活用されてきている資料群である。Tab.16に示したように、時間の経過とともに口縁径/高台径の平均値が大きくなっているのが読み取れる。

ii）土師器　椀a

山本（1990）には、椀aとは別形式として分類されているが、ここでは土師器椀aの退化形式として丸底坏aを位置付ける。口縁径/器高の数値を算出したのがTab.17である。先述し

遺構名：条坊16SK090　　IX期

番号	口縁径	高台径	口縁径／高台径
1	12.00	7.90	1.52
2	12.20	8.00	1.53
3	12.40	7.80	1.59
4	12.70	7.90	1.61
5	11.60	7.20	1.61
6	12.60	7.80	1.62
7	13.80	8.50	1.62
8	12.20	7.50	1.63
9	14.60	8.90	1.64
10	12.70	7.70	1.65
11	12.70	7.70	1.65
12	12.80	7.70	1.66
13	13.00	7.80	1.67
14	13.20	7.90	1.67
15	12.40	7.40	1.68
16	12.60	7.50	1.68
17	11.30	6.70	1.69
18	12.40	7.30	1.70
19	14.80	8.70	1.70
20	12.50	7.30	1.71
21	12.50	7.30	1.71
22	12.40	7.20	1.72
23	15.50	9.00	1.72
24	13.10	7.60	1.72
25	12.20	7.00	1.74
26	12.20	7.00	1.74
27	15.00	8.60	1.74
28	13.20	7.50	1.76
29	12.70	7.20	1.76
30	13.20	7.40	1.78
31	12.20	6.80	1.79
32	13.30	7.40	1.80
33	12.80	7.10	1.80
34	14.80	8.20	1.80
35	13.00	7.20	1.81
36	15.40	8.50	1.81
37	14.50	8.00	1.81
38	12.20	6.70	1.82
39	15.00	7.90	1.90
		平均値	1.71

遺構名：南6SK633　　X期

番号	口縁径	高台径	口縁径／高台径
1	15.20	8.50	1.79
2	12.40	6.85	1.81
3	15.40	8.35	1.84
4	14.50	7.70	1.88
5	14.60	7.60	1.92
		平均値	1.85

遺構名：条坊16SK089　　IX期

番号	口縁径	高台径	口縁径／高台径
1	12.70	7.90	1.61
2	12.40	7.40	1.68
3	12.70	7.50	1.69
4	13.20	7.70	1.71
5	14.10	8.20	1.72
6	12.10	7.00	1.73
7	12.00	6.70	1.79
8	12.80	7.10	1.80
9	14.90	8.20	1.82
10	12.80	7.00	1.83
11	13.60	7.10	1.92
12	15.50	8.00	1.94
		平均値	1.77

遺構名：南3SK339　　X期

番号	口縁径	高台径	口縁径／高台径
1	14.50	8.80	1.65
2	12.20	7.40	1.65
3	13.80	8.30	1.66
4	13.05	7.70	1.69
5	14.00	8.20	1.71
6	13.75	8.00	1.72
7	14.50	8.25	1.76
8	12.40	6.90	1.80
9	15.35	8.52	1.80
10	15.40	8.50	1.81
11	12.40	6.77	1.83
12	14.20	7.70	1.84
13	16.30	8.80	1.85
14	14.65	7.90	1.85
15	14.90	7.90	1.89
16	15.90	8.25	1.93
17	16.20	8.30	1.95
		平均値	1.79

遺構名：大99SK2935　　IX期

番号	口縁径	高台径	口縁径／高台径
1	10.00	6.50	1.54
2	9.10	5.90	1.54
3	16.80	10.40	1.62
4	16.00	9.80	1.63
5	8.20	5.00	1.64
6	11.60	7.00	1.66
7	13.40	8.00	1.68
8	10.80	6.40	1.69
9	11.00	6.20	1.77
10	12.00	6.60	1.82
11	9.20	5.00	1.84
12	12.00	6.20	1.94
13	11.80	6.00	1.97
14	10.80	5.30	2.04
		平均値	1.74

遺構名：条坊88SE040　　XI期

番号	口縁径	高台径	口縁径／高台径
1	12.40	7.30	1.70
2	14.00	7.30	1.92
3	14.90	7.20	2.07
4	15.65	7.30	2.14
		平均値	1.96

遺構名：大62SK1525　　XI期

番号	口縁径	高台径	口縁径／高台径
1	14.20	6.80	2.09
2	15.90	7.10	2.24
		平均値	2.16

遺構名：大74SK1950　　XI期

番号	口縁径	高台径	口縁径／高台径
1	14.40	6.90	2.09
2	14.50	6.90	2.10
3	15.30	6.90	2.22
4	15.10	6.60	2.29
		平均値	2.17

Tab.16　土師器　椀C2の計測値(口縁径/高台径)

遺構名：大62SK1525　　XI期

番号	口縁径	器高	口縁径／器高
1	14.90	3.90	3.82
2	15.40	3.70	4.16
3	15.50	3.60	4.31
4	15.80	3.50	4.51
5	15.10	3.30	4.58
		平均	4.28

遺構名：南6SK633　　X期

番号	口縁径	器高	口縁径／器高
1	12.70	4.10	3.10
2	12.70	4.00	3.18
3	12.90	4.00	3.23
4	13.00	4.00	3.25
5	11.80	3.60	3.28
6	12.35	3.70	3.34
7	13.40	4.00	3.35
8	11.80	3.50	3.37
9	12.70	3.60	3.53
		平均	3.29

遺構名：南3SK339　　X期

番号	口縁径	器高	口縁径／器高
1	12.30	4.20	2.93
2	13.05	4.45	2.93
3	12.50	4.20	2.98
4	13.00	4.2	3.10
5	12.50	4.00	3.13
6	12.70	3.90	3.26
7	12.30	3.75	3.28
8	12.80	3.90	3.28
9	12.80	3.90	3.28
10	11.90	3.50	3.40
11	12.90	3.70	3.49
12	12.30	3.10	3.97
		平均	3.25

遺構名：大46SD1330　　XII期

番号	口縁径	器高	口縁径／器高
1	14.80	3.30	4.48
2	14.70	3.90	3.77
3	15.00	3.80	3.95
4	13.60	3.40	4.00
5	16.00	4.00	4.00
6	14.80	3.65	4.05
7	14.60	3.60	4.06
8	14.60	3.60	4.06
9	14.20	3.50	4.06
10	18.00	4.40	4.09
11	15.00	3.65	4.11
12	15.40	3.70	4.16
13	14.20	3.40	4.18
14	14.50	3.45	4.20
15	14.80	3.50	4.23
16	14.40	3.40	4.24
17	15.80	3.70	4.27
18	14.70	3.40	4.32
19	14.70	3.40	4.32
20	15.60	3.60	4.33
21	13.90	3.20	4.34
22	14.80	3.40	4.35
23	17.00	3.90	4.36
24	14.90	3.40	4.38
25	15.00	3.40	4.41
26	15.00	3.40	4.41
27	13.90	3.15	4.41
28	14.60	3.30	4.42
29	15.50	3.50	4.43
30	14.90	3.35	4.45
31	15.60	3.50	4.46
32	15.20	3.40	4.47
33	14.70	3.25	4.52
34	15.50	3.40	4.56
35	15.00	3.30	4.55
36	13.20	2.90	4.55
37	18.00	3.90	4.62
38	15.00	3.20	4.69
39	15.50	3.30	4.70
40	14.80	3.15	4.70
41	13.40	2.85	4.70
42	14.60	3.10	4.71
43	14.60	3.10	4.71
44	13.20	2.80	4.71
45	15.20	3.20	4.75
46	14.80	3.10	4.77
47	14.80	3.10	4.77
48	14.90	3.10	4.81
49	15.50	3.20	4.84
50	15.60	3.20	4.88
51	13.30	2.70	4.93
52	15.00	2.80	5.36
53	14.50	2.70	5.37
54	14.00	2.60	5.38
55	13.60	2.30	5.91
56	13.40	2.20	6.09
57	15.30	2.40	6.38
		平均	4.56

遺構名：大38SD860　　XII期

番号	口縁径	器高	口縁径／器高
1	15.20	3.70	4.11
2	14.60	3.50	4.17
3	14.30	3.40	4.21
4	15.60	3.70	4.22
5	14.70	3.45	4.26
6	14.30	3.35	4.27
7	14.65	3.40	4.31
8	14.95	3.45	4.33
9	15.00	3.45	4.35
10	15.15	3.45	4.39
11	14.95	3.40	4.40
12	14.60	3.30	4.42
13	14.90	3.35	4.45
14	15.45	3.45	4.48
15	15.25	3.40	4.49
16	14.40	3.20	4.50
17	15.30	3.40	4.50
18	15.30	3.40	4.50
19	15.65	3.45	4.54
20	15.20	3.30	4.61
21	15.30	3.30	4.64
22	15.15	3.25	4.66
23	14.50	3.10	4.68
24	14.80	3.15	4.70
25	14.65	3.10	4.73
26	14.70	3.10	4.74
27	14.70	3.10	4.74
28	14.90	3.10	4.81
29	15.55	3.20	4.86
30	14.85	3.00	4.95
31	15.40	3.10	4.97
32	16.25	3.20	5.08
33	14.50	2.80	5.18
34	15.40	2.95	5.22
35	14.85	2.80	5.30
36	16.25	2.60	6.25
		平均	4.64

Tab.17　土師器　椀aの計測値（口縁径/器高）

口縁径／高台径	条16SK090	大99SK2935	条87SE015	条16SK089	南3SK339	南6SK633	条98SE002	条88SE040	大74SK1950	大62SK1525
1.50〜1.59	3	2								
1.60〜1.69	14	6	4	3	4					
1.70〜1.79	14	1	8	4	3	1		1		
1.80〜1.89	7	2	2	3	8	3	2	0		
1.90〜1.99	1	2	2	2	2	1		1		
2.00〜2.09		1					2	2	1	1
2.10〜2.19										1
2.20〜2.29									1	2

Tab.18　土師器　椀C２の個体数(口縁径/高台径)

た遺構出土資料では、十分な資料数に達しなかったため、後続する時期の資料として溝出土資料ではあるが二遺構の算出資料を加えた。結果として、算出した平均値が時間の経過とともに次第に大きくなる傾向が読み取れよう。器高の縮小化が表現されている。器高の縮小化と同時に手法の手抜きが認められるため、丸底坏aは前述した土師器椀aの退化型式つまり同一形式内での変化と捉えた方が蓋然性は高いと考えられる。

以上２形式の処理した数値からそれぞれの範囲に収まる個体数を数値化したのが、Tab.18・19である。補足資料として坏a（×小皿a１）の口縁径ごとの数量をTab.20に示している。

結果として、出土型式の分布中心が次第に変化しているのが読み取れる。しかし、画期として捉えられていた各型式が共伴していることも同時に読み取れることに注意すべきであろう。したがって、食器の変化は漸移的であることが改めて理解できる。ここで量の概念の適用によって、遺構個々の時期が判断できることになる。つまり山本（1990）によって設定された各画期への位置付けとして、遺構より出土した各型式の出土量により、時間軸上での位置付けを判断する。これとて相対的な位置付けに変わりない。しかしこれまで定性的に理解され、漠然と新古が判断されていたレベルから、具体的かつ説明的に記述することが可能となろう。この意味からも、厳密な意味での定量分析の必要性が不可欠となる。

では目的とする条87SE015出土資料群の位置付けについては、どのように理解すべきであろうか。数値が物語っているように、坏a（×小皿a１）は、大宰府IX期に位置づけられる口縁径

口縁径／器高	条87SE015	南3SK339	南6SK633	条98SE002	大62SK1525	大46SD1330	大38SK860
〜2.99	1	3					
3.00〜3.49	8	8	8	4			
3.50〜3.99	7	1	1	5	1	2	
4.00〜4.49	2			6	2	30	15
4.50〜4.99					2	19	16
5.00〜5.49						3	4
5.50〜5.99						1	
6.00〜						2	1

Tab.19　土師器　椀aの個体数(口縁径/器高)

口縁径	条16SK090		大99SK2935		条87SE015		条16SK089		条88SE040		南3SK339		南6SK633		条98SE002		大74SK1950		大62SK1525	
9.0cm～9.9cm	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.72%	10	20.83%	0	0.00%	5	71.43%
10.0cm～10.9cm	21	10.77%	0	0.00%	32	25.81%	5	11.90%	0	0.00%	14	82.35%	49	84.48%	38	79.17%	6	100.00%	2	28.57%
11.0cm～11.9cm	155	79.49%	2	100.00%	73	58.87%	36	85.71%	2	100.00%	3	17.65%	8	13.79%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
12.0cm～12.9cm	19	9.74%	0	0.00%	19	15.32%	1	2.38%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
13.0cm～13.9cm	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
合計(1)	195	100.00%	2	100.00%	124	100.00%	42	100.00%	2	100.00%	17	100.00%	58	100.00%	48	100.00%	6	100.00%	7	100.00%

Tab.20　土師器　坏a(×小皿a１)の個体数

11.0cmの型式が多い傾向にあるが、Ⅹ期のものも25%程度を占めていることから、Ⅸ期＞Ⅹ期ということになろう。同様に、椀Ｃ２および椀aに関しても、Ⅸ期に分布中心を置くとされる遺構出土資料との傾向が数値的に近似していることが解かる。しかし坏a（×小皿a１）の数量同様、Ⅹ期に位置付けられる型式の出土もあり、表現としては、Ⅸ期＞Ⅹ期という記載方法をとるのが望ましいと考える。したがって実年代の推定としては、山本（1990）の成果にのれば、10世紀の第Ⅲ四半期～第Ⅳ四半期の境界付近頃と推定しておく（Tab.24）。実年代の推定に関しては、機械的な算出方法によって導き出された結果であり、今後の検討課題であることは述べるまでもない。

同様の方法を用いて、条106SK040出土土師器甕ｂの位置付けを試みる。何分にもこの甕ｂ自体出土例がなく、単独で時期を推定するには無理がある。そこで共伴した土師器坏aの法量から推定する。法量の近似する遺構として大70SK1800を前後する基準資料を用いて、法量ごとの数量分布を示したのがTab.21である。106SK040出土の土師器坏aの法量ごとの型式の数

分類形式：土師器　坏ａ

口縁径	大43SK1084		大43SE1081		筑国6SK053		条106SK040		大70SK1800		大96SE2845		大74SD205A※		合計	頻度
10.0cm～10.9cm	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.37%	1	20.00%	1	14.29%	3	2.63%
11.0cm～11.9cm	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	44.44%	42	57.53%	3	60.00%	3	42.86%	52	45.61%
12.0cm～12.9cm	0	0.00%	0	0.00%	2	12.50%	5	55.56%	30	41.10%	1	20.00%	3	42.86%	41	35.96%
13.0cm～13.9cm	2	100.00%	2	100.00%	14	87.50%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	18	15.79%
14.0cm～14.9cm	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
合計	2	100.00%	2	100.00%	16	100.00%	9	100.00%	73	100.00%	5	100.00%	7	100.00%	114	

※：器高の低い大宰府Ⅸ期に分布中心を置く新たな型式が一緒に出土している。

Tab.21　土師器　坏aの個体数

各形式の数量比較

分類形式：土師器　椀C2

口縁径／高台径	87SE015	98SE002
1.60〜1.69	4	
1.70〜1.79	8	
1.80〜1.89	2	2
1.90〜1.99	2	
2.00〜2.09		3

分類形式：土師器　椀a

口縁径／高台径	87SE015	98SE002
2.90〜2.99	1	
3.00〜3.09		
3.10〜3.19	1	
3.20〜3.29	3	1
3.30〜3.39	3	2
3.40〜3.49	1	1
3.50〜3.59	2	1
3.60〜3.69	3	
3.70〜3.79	2	2
3.80〜3.89		
3.90〜3.99		2
4.00〜4.09	1	2
4.10〜4.19		1
4.20〜4.29		

Tab.22　条87SE015・条98SE002出土資料の定量値(椀a・椀C_2)

量を見ると、２型式が混在していることが読みとれる。この遺構出土資料と近似した傾向にある基準資料として大70SK1800があるが、この遺構出土資料についても、山本モデルによって単一型式によって構成されると解釈されてきたが、実際のところ量の概念を適用することで、Tab.21・25に示されるように大きく２つの型式によって構成されていることがわかる。したがって、従来の解釈ではやや矛盾が生じているように見えるが、山本モデルにおけるⅦ期とⅧ期の混在した状況を大70SK1800出土資料は有していると解することで理解できるものと考える。量の概念を適用するならば、Ⅶ＞Ⅷ期という表記方法をとることになる（Tab.24)。したがって推定実年代は、９世紀第Ⅲ四半期〜第Ⅳ四半期の境界頃に位置付けることができよう。結果として106SK040出土資料の時期についても同様の解釈から、大70SK1800と同時期もしくは近似した時期に求めることが可能であろう。

D．まとめ

量の概念を適用することで、在地産食器の位置付けをより具体的かつ説明的な解釈へ近づけることができたと考えている。このような方法を紀年銘資料共伴の資料群の解釈を含めて基準資料個々に適用することで、分析対象資料の実年代推定の一根拠と十分なり得ると考える（Tab.24)。したがって、画期内様相の把握とは別作業として遺構出土資料の解釈を実践してゆく必要性があろう。この方法を適用することで、広域流通品による相対編年がより現実味を帯びた検討課題へと昇華できるものと考えている。これまでの検討に基づく結果を表に示したのがTab.24になる。

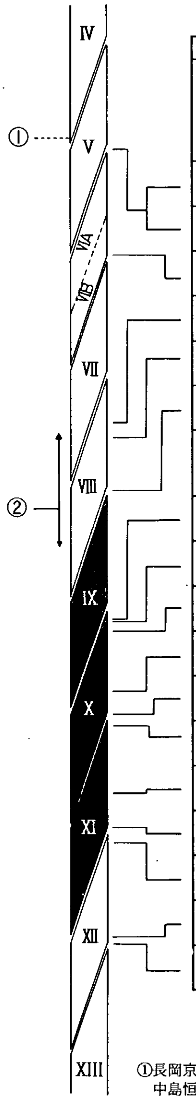
分類形式：土師器　坏a(×小皿a1)

口縁径	87SE015			98SE002			破片数合計(2)
	1/4以上破片数	割合(1)	割合(2)	1/4以上破片数	割合(1)	割合(2)	
9.0cm〜9.9cm	0	0.00%	0.00%	10	100.00%	19.23%	10
10.0cm〜10.9cm	32	45.71%	25.00%	38	54.29%	73.08%	70
11.0cm〜11.9cm	73	94.81%	57.03%	4	5.19%	7.69%	77
12.0cm〜12.9cm	19	100.00%	14.84%	0	0.00%	0.00%	19
13.0cm〜13.9cm	4	100.00%	3.13%	0	0.00%	0.00%	4
破片数合計(1)	128		100.00%	52		100.00%	

破片数合計(1)：同一遺構内での破片数合計
破片数合計(2)：同一口縁径内での破片数合計
割合(1)：同一口縁径内での各遺構間の比率
割合(2)：同一遺構内での出土比率(型式の出土比率)

Tab.23　条87SE015・条98SE002出土資料の定量値(坏a)

大宰府画期



型式 / 遺構＼法量	土師器 坏a 13.0cm〜13.9cm	12.0cm〜12.9cm	11.0cm〜11.9cm	10.0cm〜10.9cm	9.0cm〜9.9cm	8.0cm〜8.9cm	小計
大43SK1084	2 100.00%						2
大43SE1081	2 100.00%						2
筑国6SK053	14 87.50%	2 12.50%					16
条106SK040		5 55.56%	4 44.44%				9
大70SK1800		30 41.10%	42 57.53%	1 1.37%			73
大96SE2845		1 20.00%	3 60.00%	1 20.00%			5
大74SD205A		3 42.86%	3 42.86%	1 14.29%			7
	坏a(×小皿a)						
条16SK090		19 9.74%	155 79.49%	21 10.77%			195
条16SK089		1 2.38%	36 85.71%	5 11.90%			42
条87SE015		19 15.32%	73 58.87%	32 25.81%			124
南3SK339			3 17.65%	14 82.35%			17
南36SK633			8 13.79%	49 84.48%	1 1.72%		58
条98SE002				38 79.17%	10 20.83%		48
条88SE040			2 100.00%				2
大74SK1950				6 100.00%			6
大62SK1525				2 28.57%	5 71.43%		7
大46SD1330							
大38SK860							

型式 / 遺構＼法量	椀C2 1.50〜1.59	1.60〜1.69	1.70〜1.79	1.80〜1.89	1.90〜1.99	2.00〜2.09	2.10〜2.19	2.20〜2.29	小計
大43SK1084									
大43SE1081									
筑国6SK053									
条106SK040									
大70SK1800									
大96SE2845									
大74SD205A									
条16SK090	3 7.69%	14 35.90%	14 35.90%	7 17.95%	1 2.56%				39
条16SK089		3 25.00%	4 33.33%	3 25.00%	2 16.67%				12
条87SE015		4 25.00%	8 50.00%	2 12.50%	2 12.50%				16
南3SK339		4 25.53%	3 17.65%	8 47.06%	2 11.76%				17
南36SK633			1 20.00%	3 60.00%	1 20.00%				5
条98SE002				2 50.00%		2 50.00%			4
条88SE040			1 25.00%		1 25.00%	2 50.00%			4
大74SK1950						1 50.00%		1 50.00%	2
大62SK1525						1 25.00%	1 25.00%	2 50.00%	4
大46SD1330									
大38SK860									

型式 / 遺構＼法量	椀a 〜2.99	3.00〜3.49	3.50〜3.99	4.00〜4.49	4.50〜4.99	5.00〜5.49	5.50〜5.99	6.00〜	小計
大43SK1084									
大43SE1081									
筑国6SK053									
条106SK040									
大70SK1800									
大96SE2845									
大74SD205A									
条16SK090									
条16SK089									
条87SE015	1 5.56%	8 44.44%	7 38.89%	2 11.11%					18
南3SK339	3 25.00%	8 66.67%	1 8.33%						12
南36SK633		8 88.89%	1 11.11%						9
条98SE002		4 26.67%	5 33.33%	6 40.00%					15
条88SE040									
大74SK1950									
大62SK1525			1 20.00%	2 40.00%	2 40.00%				5
大46SD1330			2 3.51%	30 52.63%	19 33.33%	3 5.26%	1 1.75%	2 3.51%	57
大38SK860				15 41.67%	16 44.44%	4 11.11%		1 2.78%	36

Tab.24　型式の出現頻度と変遷

①長岡京右京102次SD10201　784「延暦三」年
　中島恒次郎(1992)「都へ行った土器」「古文化談叢　第28集」
　長岡京より筑前型土師器坏d・皿a(大宰府分類)が出土している。これらの各型式の大宰府での帰属関係の検討は、大102SX2999に出土している型式に求められるのではないかと考えており、型式の出現頻度の検討からTab.24に示した位置に①を置いた。
②大74SD205A　927「延長五」年
　九州歴史資料館(1982)『大宰府史跡　昭和56年度発掘調査概報』
　型式の出現頻度より←→の範囲での型式が混在している。紀年銘資料自体がどの型式に帰属しているのかは、筆者自身調査状況を確認していないため判断できない。

各画期への遺構の位置付けは、Tab.24に表記した遺構から出土している各型式の出現頻度から導き出しているが、筆者自身の機械的な分類に基づく型式の出現頻度に無理が生じている。つまり大70SK1800出土土師器坏aに関して等分類設定基準が1.0cmの範囲での設定のため境界付近にある個体が機械的に区別されている状況にあり、実際のところ分布中心は、Tab.25に示すように12.0cm前後と11.3cm前後に集中している。したがって筆者の主観による時期比定を行っている側面も存在している。細かい分類設定により克服できる課題であろうと考える。

最後に条87SE015と条98SE002の分析基礎値を示すが、両者の分析信頼性を示す復原率を忘れないようにしていただきたい。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（中島恒次郎）

引用文献

赤司善彦（1989）「大宰府出土土器の検討」『九州歴史資料館研究論集　14』pp.81〜94
山本信夫（1988）「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究　Ⅳ』pp.183〜202

山本信夫（1990）「統計上の土器」『九州上代文化論集』pp.349～386
狭川真一（1993）「墳墓にみる供献形態の変遷とその背景」『貿易陶磁研究　No.13』pp. 1～20
中島恒次郎（1992）「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究　Ⅷ』pp.113～148

脚注

1）編年作業から編年モデルの確立に至るまでの考え方の枠組みを指している。

2）任意抽出資料の定量化という意味を有する。述べるまでもなく完全定量ではない。したがって立論限界が明らかに存在している。

抽出資料一覧

大38SD860　九州歴史資料館（1977）『大宰府史跡　昭和51年度調査概報』
大43SE1081　九州歴史資料館（1977）『大宰府史跡　昭和51年度調査概報』
大43SE1084　九州歴史資料館（1977）『大宰府史跡　昭和51年度調査概報』
大46SD1330　九州歴史資料館（1978）『大宰府史跡　昭和52年度調査概報』
大62SK1525　九州歴史資料館（1979）『大宰府史跡　昭和53年度調査概報』
大70SK1800　九州歴史資料館（1982）『大宰府史跡　昭和56年度調査概報』
大74SD205A　九州歴史資料館（1982）『大宰府史跡　昭和56年度調査概報』
大74SK1950　九州歴史資料館（1982）『大宰府史跡　昭和56年度調査概報』
大96SE2845　九州歴史資料館（1986）『大宰府史跡　昭和60年度調査概報』
大99SK2935　九州歴史資料館（1987）『大宰府史跡　昭和61年度調査概報』
南 3 SK339　福岡教育委員会（1976）『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第 3 集』
南 6 SK633　福岡教育委員会（1977）『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第 6 集』
条16SK089　太宰府市教育委員会（1982）『大宰府条坊跡　II』
条16SK090　太宰府市教育委員会（1982）『大宰府条坊跡　II』
条88SE040　中島恒次郎（1990）「大宰府における搬入土器　一篠窯系資料一」『中近世土器の基礎研究　VI』
筑国 6 SK053　福岡教育委員会（1978）『筑前国分寺跡　昭和52年度発掘調査概要』

口縁径	個体数
10.9cm	1
11.0cm	2
11.3cm	7
11.4cm	3
11.5cm	5
11.6cm	8
11.7cm	13
11.8cm	11
11.9cm	15
12.0cm	10
12.1cm	5
12.2cm	13
12.3cm	8
12.4cm	3
12.5cm	3
12.6cm	2
12.7cm	1
12.8cm	1

Tab.25
大70SK1800出土坏a
の法量分布

4．残された課題

A．遺構

ｉ）条坊

今回報告した条87SD005および87SD018の検出によって、条坊に関わる議論が再燃し、現在は条坊存否に関わる課題解決の段階から、具体的な規模、施工時期に関わる課題解決へと段階は移ってしまった。今回報告した調査結果も同様に、3時期の条路痕跡が検出され、条坊施工時期に幾時期か存在していることが明らかとなった。しかしその反面、条坊141次調査にて検出された条路痕跡の成立背景が、地形に規制されているのか均等区割りの結果として必然的に生じているのかなど、数時期にわたる条坊施工背景に関する検討が残されている。その後も条坊内の調査は平成7年度末現在で176次を数え、条坊168次調査による右郭1～3坊までの連続調査によって、奈良・平安前期・平安中期・平安後期の計4時期の条坊痕跡が検出されるなど様々な事象が明らかになりつつある。また別区域である条坊120次調査にて検出した平安前期の大規模な流路や、条坊162次調査にて検出した奈良末に埋没した屈曲する流路など、条坊痕跡の様相が多様化しつつある現実もある。これら多様化する遺構の解釈を含めて、今後の検討課題となろう。

ii）居住空間

都市を区画する道路の検討から、井戸、建物等生活に関わる施設の選地に関する検討が今後必要となってくる。中でも建物の規模等、調査時に可能な限り現場にて検証しつつ確認してゆく努力をしているが、条坊106次調査Ｉ面における調査区北西部のように、小穴が密集する遺構検出状況があると、建物など生活空間の検討に重要な位置を占める遺構の確認限界が生じてくる。今回報告した通古賀周辺では条坊106次調査にて検出された遺構密度がむしろ高い方であるが、市街地の東部、観世音寺より東にいたっては遺構密度がさらに高くなり、十分に遺構性格を認識しつつ調査を展開してゆくには困難な現実がある。

そのような状況下にあったが、報告対象遺跡内における平安中期の建物配置が、想定という限界はあるにしても、提示できたことは幸いであった。しかし区画道路と居住空間の関係など総合的な空間利用状況の解明が明らかでなく、さらに条坊全体を見た場合、利用状況にも自ずと違いが想定されるため、時空間軸に沿った空間利用の解明など残された課題は大きい。

B．遺物

ｉ）食器傾向

各調査より出土した遺物は、縄文期から鎌倉期までの多岐にわたるが、やはり時間分布中心は、平安中期にあたる10世紀代にある。次いで多いのは、奈良期のものが出土している。多くを占める平安中期に位置する食器には、条坊内における焼き物種別による食器構成同様、土師

器が主流を占めており、在地産食器の構成には際だった特徴はない。しかし焼き物個別に見て行くと、供膳具が主流を占め、煮沸具があまり出土していないという傾向にある。居住空間として想定できる条106次調査区においても、顕著な出土傾向にはない。これは遺構面からも、煮炊きを想定させ得る遺構の確認がないことから、台所としての機能を有した施設は、今回の調査範囲内には想定し難いといえる。ただし、当時の食器組成中における煮沸具の占める割合に関して、まだ不明確なため何に起因しているのか、今後の検討課題といえる。

ii）搬入食器

他の条坊内出土傾向同様に、各地にて生産された食器が出土している。具体的に列記すると、国産のもので、近江・美濃・平城京周辺・平安京周辺・篠（丹波）・楠葉（河内）等で、主に都周辺にて生産された製品の搬入が際だっている。焼き物種別でみると、緑釉陶器・須恵器が主体を占めているが、特に注目すべきものとして、平安京にて一般的に用いられている土師器坏[1)]が在地産食器の一括廃棄資料に共伴して出土しており、平安京と大宰府の食器相の相対比較を行なう上で貴重な資料といえる。また土師器を人に密着したレベルの食器と仮定するならば、都からの下向官人の持ち込みである可能性が高く、同時に篠窯にて生産された須恵器鉢など食膳に並ばないと考えられる食器が多く出土していることも考慮すると、都に精通した人間の臭いのする食器構成をとっていると考えられる。

産地不明確な資料として、条106SK040にて出土した土師器甕ｂがある。口縁部外面に鍔を巡らせる特異な形態をとっており、在地色に無い特徴を有している。近似した資料としては、福岡市那珂遺跡19次調査井戸157出土資料（福岡市教委、1993）がある。時期が平安中期とやや下り、形態的にもやや丸みを帯びているため、同一系譜にのるものであるのかどうか疑問がのこるが、いずれにしても北部九州では希少な存在である。鍔を有する甕は畿内摂津国や四国の資料に見られるが、調整技法は異なっているため、同一視できない[2)]。胎土は花崗岩風化土により作られており、成形技法も在地産甕に見られる叩きによって作られていることや、さらに土師器坏埋納遺構から想定される性格も加味して考えるならば、他地域にて生産された製品のアナログ情報[3)]のみを取り入れた在地製品である可能性も考えておく必要があろう。

iii）銭「乾元大寶」共伴資料

98SE002黒色土から多量の食器とともに、「乾元大寶」が出土している。「乾元大寶」共伴資料という極めて実年代推定には良好な条件を有した資料であったが、近接した時期と考えられる条87SE015出土資料との定量分析による比較によって、銭共伴資料の安易な実年代比定に懐疑的な印象を持つ結果となった。要因としては条98の小結にて記載されている史料に求めることが、現象面として生起している事実の解釈には妥当性が高いと考えている。今後共伴事例の増加によって検証されてゆく課題であろう。また合わせて定量分析の結果から、在地産食器で構成される一群の一括投棄が想定でき、このことが先の史料の内容を意味しているのかという課題も残っている。

C．最後に

多岐にわたる遺物、遺構を検出し、調査所見から導き出される解釈と課題について記述してきた。当然のことながら一調査担当者の有する解釈限界は、現実に存在している。この欠を補うことは自らの研鑽もあるが自ずと限界はあるため、様々な人々の解釈を可能にする報告が望まれる。報告遺跡の再検証の意味を込めて、可能な限り調査遺構略測図にはじまり一連の調査時に記載した１次資料[4)]を提示している。１次資料の提示は、換言するならば自らの報告限界を示したことにもなるが、これとて、時間と財政的な裏付けがなければ可能ではない、いわば行政組織内部の理解によって支えられている現実がある。　　　　　　　　　（中島恒次郎）

引用文献

福岡市教育委員会（1993）『那珂　2』

脚注

1）平安京にて土師器坏Ｌに分類されているものと考えられ、平安京内膳町遺跡SK18出土資料にあたり、平安京にて一般的に使用されている食器であるという御教示を伊野近富氏（京都府埋蔵文化財調査研究センター）ならびに鈴木重治氏（同志社大学）より得た。心より謝意を表します。

2）当該資料について、福田正継氏（岡山県古代吉備文化財センター）、尾上実氏（大阪府教育委員会）、森島康雄氏（京都府埋蔵文化財調査研究センター）より御教示を得た。心より謝意を表します。

3）形態・技法等を含めた総体的なもので「見た目」の情報を意味する。形態・技法個々を個別に取り上げた情報は「デジタル情報」として区別する。

上野佳也（1986）『縄文コミュニケーション』海鳴社

4）説明的に記載する必要から調査時の情報欠如を記憶とメモを頼りに再構成された情報で、厳密には未処理資料ではない。

凡　例

1）遺構略測図

・記載遺構の新旧表記は右図のように理解される。　　(旧) ◯→◯→◯ (新)

2）検出遺構一覧

・遺構種別記載のないものについては、遺構は存在していない。

・地区番号はグリッド南東部の番号によって示される。

・遺構の先後関係は、古→新によって示す。

・本報告書記載の遺構のみ、遺構性格記号を付与した番号を記載している。

3）建物柱穴標高一覧

・上端レベル・下端レベルは、現場での基準レベルからの読み値を記載。

・標高（上）：遺構上端標高、標高（下）：遺構下端標高を示す。

・標高平均値に関しては、標高（上）の場合、後世による削平等の影響から当時の標高を保持している可能性が低いことから算出せず、標高（下）のみの平均値を算出した。

4）出土遺物一覧

・原資料を記載するという意図から、遺構性格を加味した記号を用いなかった。対照表として検出遺構一覧を見ていただきたい。

・器種記載内容において、「A×B」の記載については、AないしBに分類できる可能性があり、判断し難いという意味を持つ。

例）壺×水注II（褐彩）、白磁皿II×IV×V類等

・記載内容において「片」記載のものは「破片」を意味する。

・瓦の項目において、(　) 内記載は叩き痕跡の状況を表している。

・数字記載については、以下のように理解される。

$\boxed{3}$ ＝3個体　③＝同一個体3片（1個体）　（3）＝別個体3片

ただし、厳密な定量作業に基づく数値ではない。

5）土器計測表

・計測表中における各項目は以下の要領で理解できる。

A：遺物実測番号および計測番号

B：報告書中における挿図番号

C：見込み部のナデの有無

D：底部における板状圧痕の有無

・各計測位置は、Fig.134に示す位置にて計測を行っている。

・計測値の表現として、「□＋」の記載は、残存する箇所の計測値を示す。

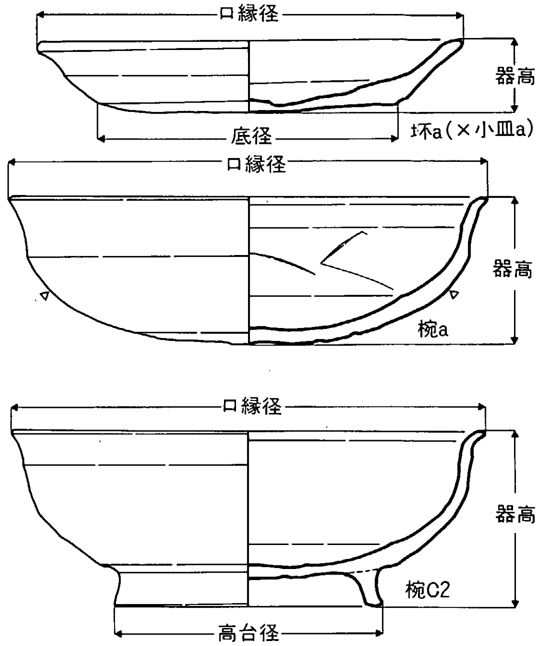
例）3.4＋、5.0＋等

・C・D項目における記載記号は以下のように理解される。

○：有る　　×：無い

？：観察箇所が有るにも関わらず、器面磨耗等によって有無の確認が困難なもの。

未記載：観察箇所が残存していないもの。



（椀aなど底部の丸いものについては、底部屈曲の看取できる箇所（△印）での計測値を示す）

Fig.134　各器種における計測位置

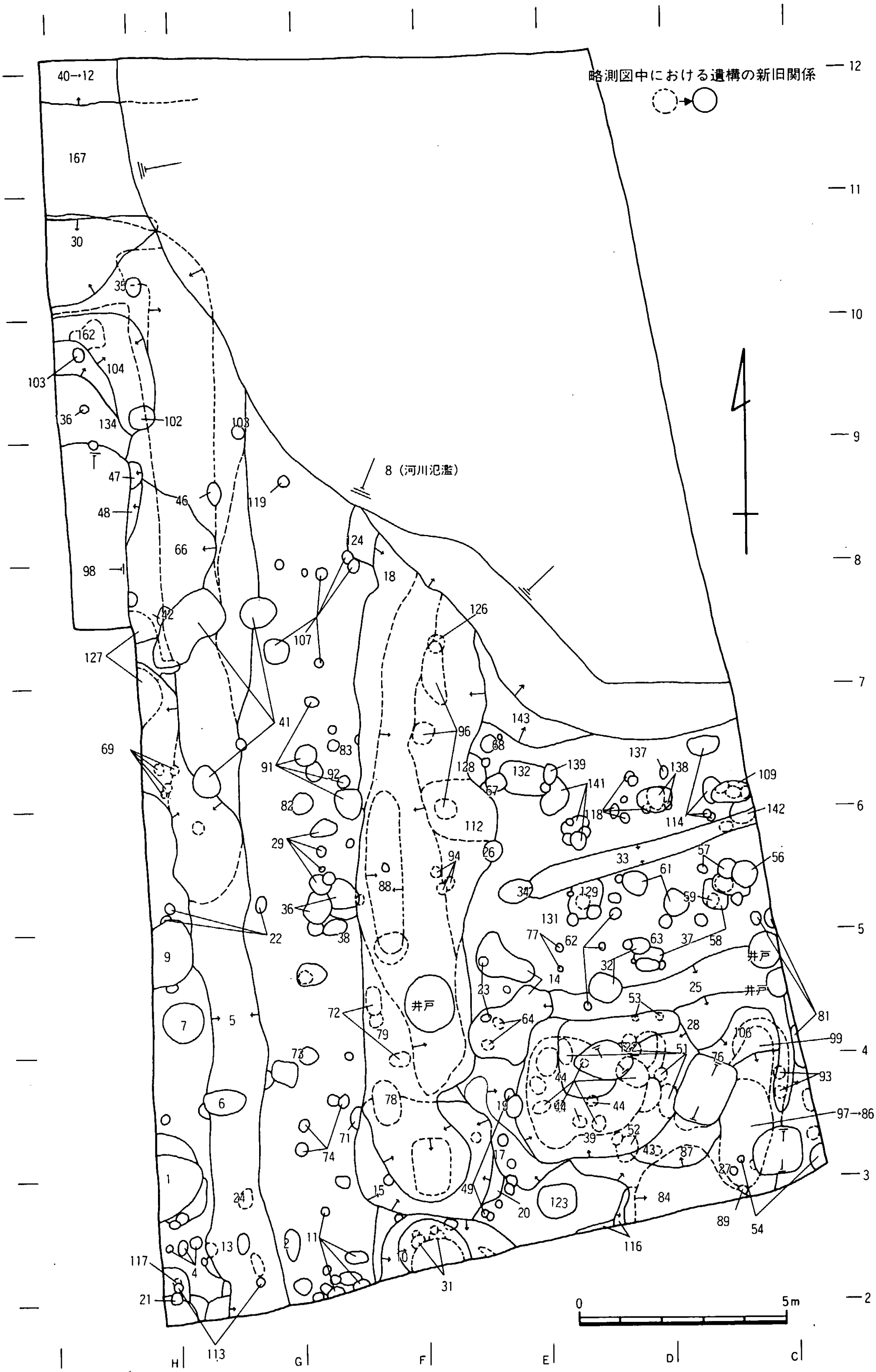


Fig.135　条87次調査遺構略測図(1)

Fig.136　条87次調査遺構略測図(2)

	柱穴記号	上端レベル	下端レベル	標高(上)	標高(下)	高低差	標高下(平均)
SB045	a			28.362	27.93	0.432	27.949
	b			28.38	28.065	0.315	
	c			28.26	27.852	0.408	
	d			28.362	27.762	0.6	
	e			28.262	27.86	0.402	
	f			28.428	28.25	0.178	
	g			28.205	27.699	0.506	
	h			28.43	27.99	0.44	
	i			28.253	28.132	0.121	

条87次調査 遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別		時期	地区
1	87SK001	土壙	埋土は下位より茶灰色土→黒茶色土	平安	H3
2		ピット	埋土は茶灰色土		G2
3		ピット	埋土は茶黒色土　炭化物混入		G2
4		ピット群	埋土は茶灰色土		G2
5	87SD005	溝（道路側溝）	埋土は別記	XII期	Gライン
6		凹み	埋土は黒茶色土	平安	G3
7		土壙	埋土は黒茶色土		G4
8	87SX008	落ち（撹乱）	埋土は灰色土	近世以降	F8
9		土壙			H4
10	87SK010	土壙		XII期	F2
11		ピット	埋土は灰茶色土		F2
12		落ち	埋土は灰茶色土　調査区外へ広がる		H11
13		ピット		平安	G2
14		撹乱	灰色土	近世以降	E4
15	87SE015	井戸	埋土は別記	10c後半	F3
16		ピット			H2
17		ピット群	埋土は灰茶色土	XI期	E3
18	87SD018	溝（道路側溝）	埋土は別記	XII期	F4
19		ピット		近世以降	E3
20	87SK020	土壙	S-20→S-15	9c後半	E3
21		ピット	埋土は黄茶色土		H1
22		ピット群	埋土は灰茶色土		G5
23		ピット	埋土は灰茶色土		E4
24	87SD018	溝	S-18の溝底部分の堆積土		G2
25		整地層			C4
26		ピット	埋土は灰茶色土		E5
27		ピット	埋土は黄白色ブロック土混入茶色土		C3
28		撹乱			D4
29		ピット群	埋土は茶色土	平安	G5
30	87SD005	溝（道路側溝）		XII期	H10
31		ピット	S-31→S-10		F2
32		ピット	埋土は灰茶色土		D4
33	87SD033	溝	埋土は茶色土	平安	D5
34		ピット	埋土は灰茶色土		E5
35	87SD005	溝（道路側溝）		XII期	H9
36		ピット群	埋土は茶色土	平安	F5
37		ピット群	埋土は灰茶色土		C5
38		ピット	埋土は茶色土	平安	F5
39		凹み	埋土は茶黒色土	平安	D3
40	87SD040	溝（道路側溝）	埋土状況は別記	平安	H11
41		土壙	埋土は茶灰色土		G7
42		ピット	埋土は灰茶色土　S-42→S-41		G7
43		ピット	埋土は黒茶色土　炭化物混入		D3
44		ピット群	埋土は茶色土		D3
45	87SB045	掘立柱建物	（II面）	奈良	D3
46		ピット	埋土は茶色土　S-5→S-46	平安	G8
47		ピット	埋土は黒色土　S-5→S-48→S-47		H8

48		凹み	埋土は茶黒色土	平安	H8
49		ピット群			F2
50					
51		凹み	埋土は茶色土	奈良後半	D3
52		凹み	埋土は茶色土	奈良後半	D3
53		ピット群			D4
54		ピット群		奈良後半	C3
55					
56		ピット	埋土は黄茶色土		C5
57		ピット群	埋土は淡黄茶色土	奈良前半	C5
58		ピット		奈良前半	C5
59		ピット	S-59→S-58		C5
60					
61		ピット群		奈良後半	D5
62		ピット		奈良前半	D5
63		ピット		平安	D5
64		ピット群		古代	E4
65					
66	87SX066	落ち	埋土は黒茶色土	平安	H8
67	87SX067	ピット	埋土は茶色土	奈良後半	E6
68		ピット	埋土は灰茶色土	平安	E6
69		ピット群	埋土は灰茶色土		H6
70					
71		凹み	埋土は茶色土		F3
72		ピット	埋土は茶色土		F4
73		ピット	埋土は黄茶色土	中世	G4
74		ピット群	埋土は茶色土	平安	G3
75					
76	87SX076	凹み	埋土は茶色土　S-76→S-43 S-51 S-54→S-27	平安	C3
77		ピット群		平安初期	D4
78		凹み		平安	F3
79		ピット群			F4
80					
81		凹み		奈良	C4
82		ピット		平安中期	G6
83		ピット			F6
84		凹み			D2
85					
86	87SX086	凹み	S-86→S-84	平安前期	C3
87		凹み		奈良後半	D3
88		溝	埋土は黒茶色土	平安	F5
89		ピット	埋土は茶色土		C2
90					
91		ピット群			F6
92		ピット			F6
93		ピット	S-94→S-18		C3
94		ピット群			E5
95					
96		ピット群			E6

97		土壙	S-97→S-86	平安前期	C3
98		撹乱			H7
99		土壙			C3・4
100	87SF100	道路			
101		ピット	埋土は黒茶色土	古代	E5
102		ピット	埋土は茶色土		H9
103		ピット	埋土は茶色土と黒色土の混合土		HG9
104		溝？	埋土は淡茶色土		H9
105					
106		土壙		奈良	C3
107		ピット群	埋土は黄茶色土	古代	F7
108		ピット	S-15→S-108	平安	F3
109		ピット			C6
110					
111		ピット			C3
112	87SE112	井戸	埋土状況は別記	平安中期	E5
113		凹み	埋土は黄茶色土		G2
114		ピット群		平安	C6
115					
116		凹み	埋土は茶色土	奈良中頃	D2
117		ピット		奈良	H2
118		ピット		奈良	D5
119		ピット		平安	G8
120					
121		ピット		古代	G8
122		ピット		奈良	D4
123		凹み		奈良	E2
124		凹み	S-124→S-18	平安	F8
125					
126		ピット	S-18溝底の凹みか？	平安	E7
127		凹み			H7
128		凹み	埋土は黒茶色土	奈良前半	E6
129		凹み		奈良後半	D5
130					
131		ピット		奈良後半	D5
132		凹み		奈良	E6
133		凹み		平安	H9
134		ピット群	埋土は黒茶色土		H9
135					
136		凹み	埋土は茶色粗粒砂		H9
137	87SX137	ピット	埋土は茶色土　遺構内に丸底坏aが完形で２枚出土	XI期以降	D6
138		ピット		奈良後半	D6
139		ピット		平安	E6
140					
141		ピット群		奈良	D6
142		ピット		奈良	C6
143	87SK143	土壙		平安初期	E6
144		整地層		平安初期	CDE3・4
145					

146		ピット群	奈良後半	D3・4
147		ピット	奈良後半	D4
148		ピット群	奈良後半	D5
149		ピット	奈良後半	C5
150	87SF150	道路		
151		ピット		E2
152	87SK152	土壙	奈良	E3
153		ピット	奈良	E4
154		ピット	奈良	D5
155				
156		ピット群	古代	G5
157		整地層		E2
158		ピット群	古代	F6
159	87SK159	土壙	奈良後半	D3
160				
161		ピット　　　焼土混入	奈良後半	E5
162		凹み	平安	H9
163		ピット群	奈良	E4
164		ピット群	奈良	D3
165				
166	87SK166	土壙	奈良前半	E3
167		整地層　　　埋土は黄茶色土　S-167→S-40	奈良後半	H11
168		ピット群	奈良後半	D5
169		ピット群	奈良	E5
170				
171		ピット	奈良前半	D5
172		凹み	奈良	E4
173		ピット群	奈良	E3
174		凹み		F5
175				
176		ピット		H5
177		ピット		D4
178		ピット	奈良末	D4

87次遺物一覧表

S-1

須恵器	破片
土師器	小皿a2、丸底坏a、椀c
黒色土器B	椀c

S-1 黒茶色土

須恵器	坏c、甕
土師器	小皿a2、丸底坏a、椀c、甕、器台
	焼塩壷
黒色土器B	破片
土製品	フイゴ羽口

S-2

土師器	小皿a、坏a、椀a、椀c、器台
黒色土器A	椀
須恵器	鉢(篠)
瓦類	破片

S-3

須恵器	破片
土師器	椀a
黒色土器A	破片
金属製品	鉄釘、破片

S-4

土師器	坏、椀a、椀c、甕a

S-5

須恵器	坏a、坏c、蓋c、蓋3、甕、壷、円面硯、坏、鉢(篠)
土師器	小皿a、坏a、丸底坏a、椀c、高坏、甕b、器台、高台
	大形鉢?
	焼塩壷
黒色土器A	椀c、破片
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	椀;I-2(1)、I(2)、I-2b(1)
白磁	椀;IV(2)
緑釉陶器	破片
灰釉陶器	高台、破片
須恵質土器	鉢(東播)
弥生土器	破片
瓦類	丸瓦、破片(縄目)、磚
石製品	石鍋、滑石製品

S-5 茶色土

須恵器	坏c、坏d、蓋c、蓋3、甕、壷、皿、鉢b?
土師器	小坏、坏a、丸底坏a、椀c、皿c、蓋4、甕、器台
	把手、破片
黒色土器B	椀
越州窯系青磁	椀;I-2(2)、I(2)、I×III(2)、II-3b(1)
白磁	皿;VI(1)
	不明;破片(1)
緑釉陶器	壷口縁、底部(近江?)、破片
陶器	朝鮮系無釉陶器?
瓦類	丸瓦(縄目、格子)、平瓦(縄目、格子)、文字瓦
金属製品	鉄釘、銅製品、鉱滓
土製品	フイゴ羽口
石製品	石鍋、黒曜石片、滑石片

S-5 黒茶色土

須恵器	坏c、甕
土師器	甕、破片
黒色土器A	椀
瓦類	丸瓦
石製品	黒曜石剝片、滑石片

S-5 灰茶色土

須恵器	坏c、蓋1、蓋3、甕、壷、大椀c、坏、鉢a、鉢(篠)
土師器	丸底坏a、椀c、坏c、甕b、器台、把手
	焼塩壷
黒色土器A	破片
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	椀;I(5)、I×III(1)、II-2a(1)、II(1)
	その他;水注×壷II(2)
白磁	椀;II-3c(輪花)(1)、IV?(1)、破片
緑釉陶器	椀、高台、破片
弥生土器	甕
瓦類	軒丸瓦、平瓦(縄目、格子)、丸瓦(格子)、平瓦(格子(老司))
金属製品	鉄釘
土製品	フイゴ羽口
石製品	石鍋? 滑石片

S-5 黄茶色土

須恵器	坏c、蓋c、甕、破片
土師器	椀c、小皿a、破片
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀
緑釉陶器	破片
瓦類	破片(格子)

S-6

須恵器	甕
土師器	椀c、椀a、甕b、甕
緑釉陶器	破片
石製品	滑石片

S-7 茶色土

土師器	小皿a、椀、甕
黒色土器A	破片
緑釉陶器	破片

S-7 茶色砂土

須恵器	甕
土師器	椀c、坏、甕

S-7 灰色粘土

須恵器	甕
土師器	椀c
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	椀;III-b(1)
白磁	その他;II系?壷(1)
金属製品	器種不明(鉄製品)
瓦類	破片(格子)

S-8

須恵器	坏、壷、甕、皿a、高台
土師器	甕、器台
黒色土器A	椀
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	椀;I(1)、II-2a(1)
龍泉窯系青磁	椀;III(1)
白磁	椀;II(2)、II-3×4(1)、IV(2)、V-1?(1)、破片(5)
	皿;未分類(1)
青白磁	破片(1)
中国陶器	壷A'(1)
国産陶器	備前;擂鉢
肥前系陶磁器	破片?
金属製品	鉄釘
瓦類	丸瓦、破片(縄目、格子)
石製品	滑石片

S-9

須恵器	甕
土師器	小皿a、椀c
黒色土器B	破片
越州窯系青磁	椀;I×III(1)

S-10

土師器	小皿a、丸底坏a、破片
土製品	竈

S-10　茶黒色土

須恵器	蓋c、破片
土師器	丸底坏a、小皿a、椀c、甕、器台
黒色土器A	椀c？
黒色土器B	甕
越州窯系青磁	椀；I(1)、II-2(1)
白磁	椀；XII-1b(1)、XII×XIII(1)
	皿；IX(1)、IX-1(1)
金属製品	鉄釘
瓦類	丸瓦

S-10　灰茶色土

須恵器	蓋c3、甕、破片
土師器	丸底坏a、椀c
白磁	椀；XI?(1)
土製品	フイゴ羽口
瓦類	破片

S-10　灰色砂土

須恵器	甕
土師器	高台
青白磁	破片(1)

S-11

土師器	坏
越州窯系青磁	椀；I?(1)

S-12

須恵器	坏c、坏、蓋c、蓋3、甕、破片、鉢(篠?)
土師器	丸底坏a、坏c、小皿a、椀c、大椀c、器台、高台、甑
越州窯系青磁	椀；I(3)、I-2a(1)
白磁	椀；IV(1)、XI×V?(1)、V-4(1)、破片(1)
	皿；XI(1)
緑釉陶器	破片
灰釉陶器	皿、破片
須恵質土器	甕
中国陶器	水注X?
金属製品	器種不明(鉄製品)
瓦類	平瓦(縄目)、破片(縄目、格子)
石製品	滑石片、砥石、風字硯、台石×砥石

S-13

土師器	小皿a、竈、破片
瓦器	椀
黒色土器A	破片
黒色土器B	破片

S-14

須恵器	坏c、蓋c、蓋3、甕
土師器	甕
	焼塩壷
越州窯系青磁	椀；III-b(1)
白磁	皿；II×IV×V(1)
瓦類	破片

S-15

須恵器	鉢、坏a、坏c、蓋3、甕、鉢(篠)
土師器	椀c、椀a、坏a、皿a2、甕b、蓋c、器台
黒色土器A	椀
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	椀；I(1)
	その他；椀×皿I(1)
緑釉陶器	破片
須恵質土器	鉢(東播)
金属製品	鉄；刀子、鎌先、釘
瓦類	平瓦(斜格子)

S-15　掘り方上層

須恵器	坏c、蓋3、蓋、甕
土師器	椀c、坏a、坏d、破片
黒色土器A	椀
越州窯系青磁	椀；I(輪花)(1)
緑釉陶器	破片
灰釉陶器	破片
瓦類	丸瓦、平瓦(格子)、破片(格子)

S-15　掘り方土

須恵器	坏c、蓋3、蓋、甕
土師器	椀c、坏a、坏d、破片
越州窯系青磁	椀；I(3)
	その他；壷×水注II(褐彩)(1)
緑釉陶器	破片
金属製品	鉄釘
瓦類	平瓦(格子)

S-15　黄茶色土

須恵器	坏、蓋c、蓋3、甕
土師器	椀c、坏a、高台
瓦類	破片(格子)
石製品	砥石

S-15　灰色砂土

須恵器	坏c、蓋3、蓋、甕
土師器	椀c、坏a、坏d、破片
越州窯系青磁	その他；坏×合子身I(1)
緑釉陶器	椀、破片
灰釉陶器	破片
瓦類	破片(格子)
石製品	滑石片

S-15　灰色粘土

土師器	坏a、小皿a、椀c、高台

S-15　灰茶色土

須恵器	破片
土師器	椀c、坏a、椀a、甕a・b、小皿a、盤
緑釉陶器	椀、破片
瓦類	丸瓦

S-15　茶色土

須恵器	蓋3、壷
土師器	椀c、坏a
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	椀；I(1)
瓦類	丸瓦、平瓦(格子)

S-16

土師器	破片
黒色土器B	椀c

S-17

須恵器	坏a、坏c
土師器	皿a、甕

S-18

須恵器	坏c、蓋3、蓋
土師器	丸底坏a、大椀c、坏c、甕b、円面硯、高台、破片
黒色土器B	破片
白磁	椀；II？(1)
須恵質土器	鉢
金属製品	鉄釘
瓦類	破片(縄目)
石製品	棒状製品

S-18　茶色土

須恵器	坏a、坏c、蓋3、蓋c、鉢b、甑、甕、鉢(篠)
土師器	丸底坏a、椀c、坏a、小坏c、甕b、盤、器台、竈 焼塩壷
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀
越州窯系青磁	椀；I (6)、II (1)
白磁	椀；II？(1)、IV(3)、IV-1(1)、XII×XIII(1)、破片(1)
青白磁	破片
緑釉陶器	椀、壷? 破片
灰釉陶器	破片
瓦類	平瓦(縄目、二重格子)、丸瓦、軒瓦、破片
石製品	砥石、石鍋、サヌカイト片

S-18　黄茶色土

須恵器	蓋3、甕
土師器	椀c、器台
緑釉陶器	破片
瓦類	平瓦(格子)、軒丸瓦
石製品	黒曜石片

S-18　黒茶色土

須恵器	坏c、坏、蓋c、鉢、転用硯、高坏、蓋3、甕b 壷、鉢(篠)
土師器	丸底坏a、小皿a、椀c2、椀c、大椀、坏a(イト)豊前か? 坏d、甕b、器台、把手、破片
瓦器	椀c、破片
黒色土器A	破片
黒色土器B	椀c、椀、鉢、脚(三足か?)、破片
越州窯系青磁	椀；I (7)、I -2b(1)、II-2(1) その他；坏I (1)
白磁	椀；XI [1](1)、II(2)、II-3(1)、II-5(1)、IV5(4) V-1[1](1)、XII-1b(2) 皿；II-1a[1]、V-2(1)、IV類(1) その他；合子蓋(1)、破片(7)
青白磁	破片
緑釉陶器	椀、皿、香炉蓋、破片
灰釉陶器	椀(輪花)、段皿(輪花)、山茶椀?
金属製品	鉄；釘、鎌の刃先、器種不明
瓦類	平瓦(格子)、丸瓦(格子)、破片(縄目、格子)
石製品	砥石、石鍋、滑石片、黒曜石剝片
土製品	ルツボ

S-19

須恵器	甕
土師器	椀c、坏a
肥前系陶磁器	破片(混入)

S-20

須恵器	甕、破片
土師器	坏a、椀c2、甕a
黒色土器A	椀c2

S-21

須恵器	皿
土師器	破片

S-22

須恵器	坏c
土師器	坏
弥生土器	破片(1)

S-23

須恵器	坏、甕
土師器	焼塩壷

S-24

須恵器	甕
土師器	破片

S-25

須恵器	坏c、蓋3、蓋2、坏、壷e、高坏、甕、鉢b
土師器	蓋3、坏c、坏d、高坏、甕 焼塩壷
黒色土器A	坏d
瓦類	破片

S-26

須恵器	坏c、坏、破片
土師器	坏、甕、破片
弥生土器	破片
金属製品	鉄釘

S-27

須恵器	破片
土師器	破片

S-28

須恵器	坏c、蓋3、蓋4、大蓋3、壷、甕、坏
土師器	坏、甕、器台、把手、破片 焼塩壷(2)
緑釉陶器	破片
金属製品	鉄釘

S-29

須恵器	坏c、破片
土師器	椀c、甕
弥生土器	破片
瓦類	破片

S-30

須恵器	坏c、高台、甕、壷
土師器	丸底坏a、椀c、椀a、器台
黒色土器B	椀c
緑釉陶器	椀
灰釉陶器	破片
金属製品	刀子
瓦類	丸瓦、平瓦(縄目、格子)

S-31

須恵器	甕、破片
土師器	破片

S-32

須恵器	坏c、坏、皿a、蓋3、壷
土師器	椀c、破片
黒色土器A	椀a
瓦類	破片

S-33

須恵器	坏c
土師器	破片
白磁	椀；VI [2](1)、II(2)、V(1)、V-2(1)

S-34

須恵器	坏、蓋c3、壷
土師器	甕 焼塩壷

S-35　茶黒色土

須恵器	坏c、甕、蓋4、高坏
土師器	小皿a、丸底坏a、椀a、小壷、器台
黒色土器B	椀c2
越州窯系青磁	椀；I (1)
白磁	その他；破片(1)
緑釉陶器	破片
瓦類	平瓦(縄目)、破片(格子)

S-36

須恵器	坏
土師器	坏a、椀c、小皿c

S-37

須恵器	坏c、蓋3
土師器	椀c、椀a
瓦類	平瓦(縄目)、破片(格子)

S-38

土師器	坏a、椀c2
黒色土器A	椀

S-39 茶黒色土

須恵器	蓋c3、坏c、蓋3、甕、壷
土師器	坏、小皿a、椀c、甕a
黒色土器B	椀c
白磁	椀；V-2(1)、II(2)、IV(2)
	皿；II-1(1)
	その他；未分類破片(1)
青白磁	青白×小椀XIII(1)、破片(1)
陶器	朝鮮系無釉陶器；甕
金属製品	鉄釘、器種不明（鉄製品）
瓦類	破片(縄)
石製品	黒曜石片

S-40

須恵器	甕、壷
土師器	椀、丸底坏a、甕b
瓦類	平瓦(斜格子)

S-41

須恵器	壷
土師器	丸底坏a、椀c、小皿a、把手、器台、甕
越州窯系青磁	椀；II(1)
白磁	椀；II(1)、II-1(2)、II-3?(1)

S-42

須恵器	甕
土師器	丸底坏a、小皿a、甕

S-43

土師器	破片
緑釉陶器	破片

S-44

須恵器	坏c、蓋c3、蓋3、壷
土師器	蓋c、甕、高坏
金属製品	器種不明（鉄製品）

S-45 a

須恵器	坏c、蓋3、高坏、壷、甕
土師器	皿a、甕
	焼塩壷

S-45 b

須恵器	坏c、蓋3、壷
土師器	甕
	焼塩壷

S-46

須恵器	皿
土師器	椀c、破片
越州窯系青磁	椀；I(2)
緑釉陶器	破片
金属製品	鉄釘
瓦類	破片

S-47

須恵器	甕
土師器	椀c、坏a

S-48

須恵器	破片
土師器	坏a、丸底坏a
黒色土器B	椀c

S-49

須恵器	甕
土師器	坏a
瓦類	破片

S-51

須恵器	蓋3、坏、蓋c
土師器	破片
黒色土器B	破片

S-52

須恵器	坏c、蓋3、甕
土師器	坏、甕
	焼塩壷
瓦類	平瓦(縄目)

S-53

須恵器	破片
土師器	破片
黒色土器B	破片
越州窯系青磁	椀；破片

S-54

須恵器	甕、坏c
土師器	高台

S-56

須恵器	坏c、皿a、蓋3
土師器	坏d、蓋3、甕a
	焼塩壷？

S-57

須恵器	坏、蓋3、高坏
土師器	甕
黒色土器A	破片

S-58

須恵器	坏c、坏、蓋3、蓋c、壷
土師器	椀c、蓋3、甕

S-59

土師器	破片

S-61

須恵器	坏、蓋3
土師器	甕、高台、破片
越州窯系青磁	その他；水注×壷(褐彩)(1)
金属製品	鉄釘、器種不明（鉄製品）
瓦類	破片(格子)

S-62

須恵器	甕、蓋3
土師器	椀c、坏
金属製品	器種不明(鉄製品)
瓦類	平瓦(格子)

S-63

須恵器	蓋3、破片
土師器	椀c、椀
瓦類	破片(縄目)

S-64

土師器	椀c、坏a
金属製品	鉄釘

S-66

須恵器	坏c、椀、蓋3、壺、甕、鉢(篠)
土師器	丸底坏a、小皿a、椀c、高坏、甕、器台
	焼塩壺
黒色土器A	破片
黒色土器B	椀c、破片
白磁	椀；II(6)、II-1(4)、IV(2)、V-2(1)、V-3(1) V-2×VII(1)
	皿；V×VI(1)、破片(段1)(1)
緑釉陶器	破片
灰釉陶器	椀(1)
陶器	朝鮮系無釉陶器破片
弥生土器	破片
瓦類	軒平瓦(縄目、格子)、破片(格子)
石製品	石鍋、滑石片、軽石片

S-67

須恵器	坏c、鉢b、蓋3、大蓋3、高坏
土師器	椀c、高坏、甕
	焼塩壺
緑釉陶器	破片
土製品	土塊

S-68

須恵器	坏c、坏
土師器	椀c
越州窯系青磁	椀；I(1)

S-69

土師器	高台

S-71

須恵器	破片
土師器	坏a、椀c

S-72

須恵器	壺
土師器	椀c
黒色土器A	破片

S-73

土師器	坏c、破片
瓦類	平瓦(格子)

S-74

須恵器	甕
土師器	椀a、椀c
黒色土器A	破片
黒色土器B	破片

S-76

須恵器	蓋c、坏c、皿a、甕
土師器	坏a、坏c、椀c、甕
	焼塩壺
越州窯系青磁	椀；I(3)、II-1[1]、II-2a(1)、II(3)
	その他；坏(褐彩)(1)、水注×壺(褐彩)[1]
瓦類	破片(縄目、格子)

S-77

須恵器	坏c、蓋3、甕
土師器	甕
瓦類	破片
石製品	石鏃(サヌカイト)

S-78

須恵器	破片
土師器	坏c、椀c2、坏a、器台

S-79

須恵器	甕
土師器	破片
黒色土器B	破片

S-80

須恵器	壺蓋a、甕
土師器	坏、破片

S-82

須恵器	蓋3、破片
土師器	坏a、椀c2、小皿a、小皿a2、甕b、甕

S-83

須恵器	坏、蓋3、破片
土師器	椀c、破片
緑釉陶器	破片
瓦類	破片
石製品	剝片(安山岩)

S-86

須恵器	蓋c、坏c、高坏、把手、壺、甕a
土師器	椀c、坏a、坏c
	焼塩壺
黒色土器A	椀c2、坏
越州窯系青磁	椀；I-2b(2)、I-2ウ[1]、II(4)
	皿；I-2(1)
白磁	その他；破片(1)
瓦類	破片(格子)

S-87

須恵器	蓋3、坏c
土師器	甕a、破片
瓦類	破片

S-88

須恵器	坏、甕
土師器	丸底坏a、小皿a、皿c、椀a、椀c2、椀c、坏a、甕b
	器台、高台
黒色土器B	破片
瓦類	破片(格子)
石製品	石鍋

S-89

須恵器	破片
土師器	破片

S-91

須恵器	坏c、蓋3、甕、破片
土師器	坏a、椀c、甕
石製品	サヌカイト片

S-92

須恵器	甕
弥生土器	破片
石製品	礎盤？

S-93

須恵器	破片
土師器	椀c、坏

S-94

須恵器	破片
土師器	破片

S-96

須恵器	破片
土師器	坏a、椀c、椀a
越州窯系青磁	椀；I (1)
白磁	椀；I ? (1)、II (1)、IV(2)、V-3(1)
瓦類	破片

S-97

須恵器	坏a、蓋3、甕b
土師器	椀c

S-98

須恵器	坏c、甕
土師器	小皿a、椀a、椀c2、椀c
国産陶器	擂鉢(近世～)
瓦類	丸瓦(二重格子)、平瓦

S-99

須恵器	坏c、蓋3、硯脚、甕
土師器	坏a、椀c
越州窯系青磁	椀；I (2)
弥生土器	甕
瓦類	破片(格子)

S-100　黒色土

石製品	黒曜石片

S-101

須恵器	甕
土師器	椀c2

S-102

土師器	椀c、甕

S-103

須恵器	甕、鉢(篠)
土師器	椀c、破片
瓦類	破片(格子)

S-104

須恵器	甕、鉢(篠)
土師器	坏a、高坏、破片
黒色土器A	破片
灰釉陶器	椀、壷？
瓦類	破片

S-106

須恵器	坏a、蓋3
土師器	坏c、坏、甕

S-107

須恵器	坏a
土師器	甕
	焼塩壷
瓦類	破片
石製品	安山岩片

S-108

須恵器	破片
土師器	椀a、甕

S-109

須恵器	甕、蓋
土師器	椀c2、坏c
瓦類	破片(格子、文字)

S-111

須恵器	蓋3、坏
土師器	破片

S-112

土師器	丸底坏a
越州窯系青磁	椀；I (2)
白磁	椀；I (2)
	皿；II×椀 IV(1)
青白磁	白×青白(1)
緑釉陶器	破片
灰釉陶器	椀、破片
中国陶器	壷 ?(1)

S-112　茶黒色土

須恵器	蓋c、蓋3、坏c、皿a、高坏、甕、鉢(篠)
土師器	椀c2、坏、高台、甕b、器台
越州窯系青磁	椀；I (1)、III (3)、越×同安(1)
緑釉陶器	破片
金属製品	器種不明 (鉄製品)
瓦類	丸瓦、破片(格子)
石製品	黒曜石片、滑石片、破片

S-112,　灰色土

須恵器	甕、破片
土師器	椀c、丸底坏c、甕a

S-112　灰白色土

須恵器	蓋3、坏
土師器	坏、器台

S-112,　灰茶色土

須恵器	蓋3、甕
土師器	椀c2、甕

S-113

土師器	椀c
緑釉陶器	破片

S-114

須恵器	坏、蓋3
土師器	皿c、高台片
石製品	黒曜石片

S-116

須恵器	蓋3、甕、破片
土師器	破片

S-117

須恵器	破片
土師器	坏

S-118

須恵器	坏c、蓋3
土師器	坏

S-119

土師器	椀c2、坏

S-121

須恵器	破片
土師器	椀c、甕
石製品	黒曜石片

S-122

須恵器	皿a、蓋3、高坏？甕
土師器	坏a、甕
	焼塩壷

S-123

須恵器	坏
土師器	破片

S-124

土師器	器台
黒色土器A	椀c

S-126

須恵器	甕
土師器	器台、破片
白磁	椀；V-2 (1)

S-127

須恵器	坏a、蓋3
土師器	破片
黒色土器A	破片

S-128

須恵器	大蓋3
土師器	坏a、甕
	焼塩壷

S-129

須恵器	蓋3、坏
土師器	甕

S-131

須恵器	坏a、蓋3、坏、高台、甕
土師器	坏c、蓋3、甕
	焼塩壷

S-132

須恵器	坏a、蓋3
土師器	甕a

S-133

須恵器	坏c、甕
土師器	坏a、椀c、小皿a、器台
黒色土器A	破片
瓦類	破片(格子)

S-134

須恵器	高坏、破片
土師器	坏、破片

S-136

土師器	破片

S-137

須恵器	破片
土師器	丸底坏a、破片

S-138

須恵器	坏c
土師器	坏a、甕
黒色土器A	椀

S-139

須恵器	蓋3、甕
土師器	小皿a、椀

S-141

須恵器	坏c、坏、蓋c、蓋3、皿a、硯?
土師器	甕a、破片
越州窯系青磁	椀；II-d(1)

S-142

須恵器	坏c、蓋a、蓋3、壷
土師器	破片

S-143

須恵器	坏c、皿、大坏c、蓋3、把手、高坏、甕a
土師器	椀a、坏a、椀c、坏c、甕a、甕b、大椀c、破片
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	椀；I (1)、II-2 (1)
	その他；水注×壷(褐彩) (1)、狛犬[1]
瓦類	丸瓦(縄目、格子)、平瓦(格子)

S-144

須恵器	坏c、坏d、大椀c、椀c、蓋c、蓋3、把手、高坏、甕a
	壷蓋、壷、皿、甕
土師器	坏d、椀c、蓋3、小甕、甕、高台付盤、竈
	焼塩壷
白磁	椀；IV (1)
弥生土器	甕、破片
瓦類	破片(縄目、格子)
石製品	黒曜石(石鏃、剥片)、サヌカイト片、安山岩片

S-146

須恵器	坏c、坏、蓋3、椀
土師器	坏、甕a

S-147

須恵器	坏c
土師器	甕a
	焼塩壷

S-148

須恵器	蓋c、蓋3、坏
土師器	甕a
石製品	黒曜石剥片、サヌカイト剥片

S-149

須恵器	坏c、蓋3
土師器	坏a、坏d、甕
越州窯系青磁	椀；II-2a(1)
石製品	黒曜石剥片

S-151

須恵器	破片
土師器	破片

S-152

須恵器	坏c、蓋3
土師器	破片

S-153

須恵器	蓋3
土師器	甕a

S-154

須恵器	破片
土師器	甕
	焼塩壷
弥生土器	破片
石製品	黒曜石剥片

S-156

須恵器	蓋3
土師器	椀a、高台

S-157

土師器	破片

S-158

須恵器	坏c
土師器	椀c
	焼塩壷？
弥生土器	甕
瓦類	破片(格子)

S-159

須恵器	坏c、小坏c、蓋3、蓋c3、皿a、大蓋c3、壷蓋a、甕
	把手付甕
土師器	皿a、皿、把手、高台、甕、甕a
	焼塩壷

S-161

須恵器	蓋3
土師器	高台
	焼塩壷

S-162

須恵器	甕、破片
土師器	丸底坏a
瓦類	破片(縄目)

S-163

須恵器	坏c、坏、蓋3、甕
土師器	椀c(混入?)、坏、甕a

S-164

須恵器	坏a、坏、皿a、椀、壷蓋a、蓋3
土師器	甕a
	焼塩壷？
肥前系陶磁器	染付(混入)

S-166

須恵器	坏c、小坏c、坏、蓋c、蓋3、壷蓋、甕a、破片
土師器	皿a、皿b
瓦類	破片
石製品	石斧

S-167

須恵器	坏c、椀、壷b、蓋3、甕、壷? 高坏
土師器	坏a
	焼塩壷
瓦類	丸瓦、平瓦(縄目、格子)
土製品	フイゴ羽口

S-168

須恵器	小坏a、蓋3
土師器	坏a、甕
	焼塩壷
石製品	黒曜石片

S-169

須恵器	坏c、壷、甕
土師器	椀c2、甕

S-171

土師器	大椀a
	焼塩壷

S-172

須恵器	坏、破片
土師器	高台、破片

S-173

須恵器	蓋3、坏
土師器	破片
	焼塩壷？

S-174

須恵器	甕
土師器	高台
弥生土器	破片

S-176

須恵器	破片
土師器	高台片、破片

S-177

須恵器	破片
弥生土器	破片

S-178

須恵器	坏a、坏c
土師器	坏a、蓋3、甕
	焼塩壷？

S-179

須恵器	蓋3、坏c、蓋c

S-181

須恵器	皿a、蓋3、坏、高坏
土師器	破片
	焼塩壷
弥生土器	破片

S-182

須恵器	坏c
土師器	甕

表土

須恵器	坏c、甕a、甕、鉢(篠)
土師器	坏a、丸底坏a、椀c、甕a、甕b、大椀c1、椀c、椀c2
	小皿c、器台、椀、盤、高台
黒色土器B	破片
高麗青磁	椀；III(1)
白磁	椀；II(1)、II-1(1)、IV(2)、IV-1(1)、V-1(1)
	皿；II-1a[1]、V-2(1)
	その他；破片(2)
緑釉陶器	破片
肥前系陶磁器	白磁
弥生土器	大形甕
瓦類	軒丸瓦、平瓦(縄目、格子)

表採

須恵器	坏、甕、蓋3、壷、破片
土師器	坏、椀c、椀、甕b、器台、高台、破片
黒色土器A	椀c2
黒色土器B	椀
白磁	椀；IV(3)、V(1)、V-1(1)
	皿；II-1(1)
	その他；破片(1)
緑釉陶器	破片
瓦類	軒丸片、破片(格子)
石製品	黒曜石片

87次土器の計測表

S-1

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 小皿a2	R-002	1	11.2	0.9	8.0	?	
2	丸底坏a	R-001	2	16.0	3.6	-	?	?
3	黒色土器A椀	R-003	3	-	2.1+	6.0	?	

S-5

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 丸底坏a	R-003	5	14.8	3.1	-	?	○
2	〃	R-004	4	14.7	3.2	-	?	?

S-5 茶色土

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 小皿c?	R-004	13	11.6	1.9	7.0	○	?

S-10

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 小皿a	R-002	2	9.9	1.0	8.6	○	○
2	〃	R-003	3	9.9	1.3	7.5	○	
3	〃	R-001	1	10.0	1.3	7.4	○	○
4	土師器 丸底坏a	R-004	4	14.8	3.2	-		○

S-15

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 小皿c	R-023	56	12.3	2.4	7.7		○
2	〃	R-093	54	12.8	2.6	7.8	○	
3	〃	R-024	53	12.9	2.4	7.4		○
4	〃	c -1		13.2	2.6	7.3		
5	坏a	R-076	1	10.3	1.8	6.3	○	○
6	〃	R-077	2	10.4	2.25	6.4		
7	〃	R-044	3	10.45	1.9	6.5	○	×
8	〃	R-040	57	10.45	2.9	7.0	○	○
9	〃	R-075	4	10.5	1.8	7.4	○	
10	〃	R-048	5	10.6	1.7	7.5		
11	〃	R-071	7	10.6	1.8	7.3	○	○
12	〃	R-056	6	10.6	2.0	6.9	○	○
13	〃	R-072	8	10.6	2.1	7.9	○	
14	〃	R-058	9	10.7	1.9	7.1		○
15	〃	R-064	11	10.9	1.8	6.7	○	
16	〃	R-083	13	10.9	1.95	7.4	○	
17	〃	R-073	12	10.9	2.1	7.0	○	○
18	〃	R-045	10	10.9	2.25	7.1	×	○
19	〃	R-084	14	10.95	1.7	7.65	○	
20	〃	R-049	21	11.0	1.7	7.7		○
21	〃	R-061	15	11.0	1.8	7.5	○	○
22	〃	R-047	31	11.0	2.1	7.4		○
23	〃	R-068	19	11.0	2.1	7.9	○	
24	〃	R-060	32	11.0	2.2	7.7	○	
25	〃	R-055	16	11.1	1.7	8.1		○
26	〃	R-059	17	11.1	1.85	7.2	○	○
27	〃	R-079	18	11.1	2.0	7.5		○
28	〃	R-078	39	11.1	2.6	7.8		○
29	〃	R-062	20	11.2	1.95	7.6	○	○
30	〃	R-002	33	11.2	2.15	8.5	○	○
31	〃	R-053	36	11.25	2.1	7.55	○	○
32	〃	R-054	34	11.3	2.3	8.3	○	○
33	〃	R-080	22	11.35	2.0	8.45		
34	〃	R-052	23	11.4	1.7	8.2		○
35	〃	R-074	24	11.4	2.1	7.5	○	○
36	〃	R-005	35	11.4	2.3	8.2		
37	〃	R-057	40	11.4	2.3	7.7		○
38	〃	R-046	25	11.6	2.0	7.3	○	○
39	〃	R-051	37	11.6	2.1	8.8		○
40	〃	R-081	26	11.65	2.1	8.5		○
41	〃	R-001	38	11.7	2.2	9.0	○	○
42	〃	R-063	41	11.7	2.55	7.1	○	○
43	〃	R-082	27	11.8	1.8	8.3	○	
44	〃	R-010	43	11.8	2.0	8.3	○	○?
45	〃	R-004	42	11.8	2.3	9.3	○	○
46	〃	R-043	28	12.0	1.8	8.0		
47	〃	R-003	44	12.0	2.15	8.6	○	○
48	〃	R-050	46	12.0	2.2	8.7	○	○
49	〃	R-034	45	12.0	2.8	7.4	○	○
50	〃	R-041	29	12.1	1.7	8.2	×	○
51	〃	R-008	30	12.1	1.8	9.2	○?	×
52	〃	R-086	47	12.3	2.0	9.4	○	○
53	〃	R-009	49	12.4	1.9	9.3	○?	○
54	〃	R-007	48	12.4	2.1	8.5		
55	〃	R-042	50	12.4	2.1	9.5	○	○
56	〃	R-035	59	12.45	3.9	10.45		
57	〃	R-036	64	12.55	3.9	9.0		
58	〃	R-032	65	12.55	4.1	9.75		
59	〃	R-031	60	12.6	3.9	8.8		○
60	〃	R-030	61	12.6	4.0	10.45		○
61	〃	R-038	62	13.1	4.3+	9.3		
62	〃	R-037	68	13.3	4.0	8.4		
63	〃	R-033	70	13.4	4.1	9.6		
64	〃	R-029	69	13.6	3.7	8.7		
65	〃	R-028	78	15.0	4.7+	9.2		
66	〃	a -65		10.4	1.3	7.3	○	
67	〃	a -48		10.4	1.5	6.8		
68	〃	a -55		10.4	1.5	7.4	○	○
69	〃	a -61		10.4	1.5	7.0	○	○
70	〃	a -66		10.4	1.5	7.3	○	○
71	〃	a -40		10.6	1.3	7.0	○	
72	〃	a -28		10.6	1.6	7.4	○	
73	〃	a -63		10.6	1.6	7.4	○	
74	〃	a -24		10.6	1.7	7.4	○	○
75	〃	a -20		10.6	2.1	7.4	○	○
76	〃	a -44		10.8	1.5	8.0	○	
77	〃	a -56		10.8	1.5	7.4	○	
78	〃	a -18		10.8	1.6	7.3	?	×
79	〃	a -29		10.8	1.7	7.2	○	○
80	〃	a -4		10.8	2.0	7.5	○	?
81	〃	a -5		10.8	2.0	7.5	○	?
82	〃	a -19		10.8	2.1	7.5	?	○
83	〃	a -50		11.0	1.5	7.3	○	
84	〃	a -53		11.0	1.5	8.0		
85	〃	a -54		11.0	1.5	7.8	○	○
86	〃	a -67		11.0	1.5	7.5	○	
87	〃	a -36		11.0	1.6	8.0		
88	〃	a -6		11.0	1.7	7.0	○	○
89	〃	a -31		11.0	1.7	7.2		
90	〃	a -39		11.0	1.7	7.3	○	○
91	〃	a -47		11.0	1.7	7.7	○	○
92	〃	a -52		11.0	1.7	7.6	○	○
93	〃	a -11		11.0	1.8	8.0	○	○
94	〃	a -26		11.0	1.8	7.2	○	○
95	〃	a -43		11.0	1.8	7.0	○	
96	〃	a -45		11.0	1.8	8.0	○	○
97	〃	a -8		11.0	1.9	7.8	○	○
98	〃	a -14		11.0	1.9	7.8	○	×
99	〃	a -38		11.0	1.9	8.4	○	
100	〃	a -46		11.0	1.9	7.6		
101	〃	a -13		11.0	2.1	7.7	○	○
102	〃	a -15		11.0	2.1	8.2	○	?
103	〃	a -16		11.0	2.1	9.1	○	?
104	〃	a -41		11.2	1.5	8.0	○	
105	〃	a -30		11.2	1.6	7.2	○	○
106	〃	a -42		11.2	1.6	7.9	○	○
107	〃	a -35		11.2	1.7	7.8	○	○
108	〃	a -37		11.2	1.7	7.0		
109	〃	a -27		11.2	1.8	7.5	○	
110	〃	a -7		11.2	1.9	8.0	○	○
111	〃	a -60		11.2	1.9	7.4	○	○

112	〃	a -17		11.2	2.0	8.0	○	○
113	〃	a -25		11.2	2.0	7.7	○	×
114	〃	a -34		11.2	2.1	8.5	○	
115	〃	a -57		11.4	1.6	8.7	○	
116	〃	a -12		11.4	1.8	7.3	○	○?
117	〃	a -51		11.4	1.8	8.4	○	○
118	〃	a -2		11.4	2.0	8.0	○	○?
119	〃	a -32		11.5	1.6	7.9	○	○
120	〃	a -49		11.6	1.6	8.8	○	○
121	〃	a -62		11.6	1.6	8.3	○	○
122	〃	a -33		11.6	1.8	8.3	○	○
123	〃	a -1		11.6	2.1	8.3	○	○
124	〃	a -3		11.6	2.1	8.2	○	○
125	〃	a -68		11.8	1.4	8.4	○	
126	〃	a -23		11.8	1.7	8.5	○	○
127	〃	a -64		11.8	1.7	8.3	○	○
128	〃	a -21		11.8	1.9	8.7	○	○
129	〃	a -59		11.8	2.1	9.0	○	○
130	〃	a -10		12.0	1.6	9.1	○	×
131	〃	a -58		12.0	2.2	8.9	○	○
132	〃	a -9		12.2	1.7	8.2	○	×
133	〃	a -22		12.2	1.7	8.9	○	×
134	皿a2	R-011	51	13.8	1.6+	-		
135	皿c	R-088	52	11.65	2.3	6.9		
136	〃	R-087	55	13.3	2.5	8.15		
137	椀a	R-069	58	11.75	3.45	-		
138	〃	R-067	63	12.9	4.1	-		
139	〃	R-070	66	13.3	3.75	-	○	
140	〃	R-027	67	13.5	3.6	8.6	○	○
141	〃	a -5		11.8	3.3	8.3		
142	〃	a -11		12.4	4.2	8.3		○
143	〃	a -12		12.6	3.8	9.2		
144	〃	a -4		12.6	3.9	8.1		○
145	〃	a -2		12.8	3.4	8.6	○	○
146	〃	a -8		13.0	3.6	9.3	○	
147	〃	a -10		13.0	3.6	8.0		
148	〃	a -6		13.0	3.9	8.2	○	○
149	〃	a -7		13.0	4.0	8.8		
150	〃	a -9		13.2	3.3	9.1	○	
151	〃	a -3		13.2	3.6	9.3		
152	〃	a -1		15.4	4.7	11.2		×
153	椀c	R-026	74	12.4	4.65	7.0	○	○
154	〃	R-094	73	12.8	4.7	7.4		
155	〃	R-065	76	13.0	5.1	8.1		
156	〃	R-039	72	13.1	4.5	6.8		
157	〃	R-019	75	13.8	4.3	8.6		
158	〃	R-006	77	14.2	4.8	8.5		
159	〃	R-021	83	14.7	5.9	8.6	○	○
160	〃	R-017	79	14.8	5.7	8.1	○	
161	〃	R-066	80	14.8	5.9	8.7		
162	〃	R-085	81	14.9	5.6	7.65		
163	〃	R-025	82	15.1	6.0	8.9		○
164	〃	R-022	84	16.3	6.15	8.7	○	○
165	〃	R-020	71	-	3.1+	8.0		
166	〃	c -2		12.6	4.6	7.4	○	○
167	〃	c -3		13.0	4.5	7.9	○	○?
168	〃	c -4		14.6	5.3	8.2		
169	〃	c -1		15.9	6.4	9.2	○	
170	黒色土器B 椀c	R-018	85	15.1	6.0	8.0		○

S-15 灰茶色土

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 小皿a	R-001	1	10.6	1.7	8.3	○	?
2	〃	R-002	3	11.0	1.8	7.7	○	○
3	〃	R-004	2	11.2	1.9	7.9	○	?
4	〃	R-003	4	11.4	1.8	7.6	○	○
5	椀a	R-005	6	12.2	3.0	8.4	○	
6	〃	R-006	5	12.4	3.5	10.7	○	
7	椀c	R-007	7	12.5	4.4	8.1		

S-15 灰色粘土

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　坏a	R-001	8	11.8	1.9	8.6	○	○

S-15 黄茶色土

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　坏a	R-001	9	11.4	2.5	6.1	○	

S-18 黒茶色土

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 丸底坏a	R-016	3	16.0	3.4+	-		
2	〃	R-017	2	15.4	3.4+	-		
3	〃	R-020	1	14.6	3.4+	-		

S-20

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　坏a	R-001	4	11.35	3.0	7.5	?	?
2	〃	R-008	10	12.0	2.6	7.75		○
3	〃	R-003	8	12.0	2.75	7.5		
4	〃	R-005	5	12.0	2.95	7.9		○
5	〃	R-004	7	12.0	3.2	8.25		
6	〃	R-006	11	12.05	2.95	8.1		
7	〃	R-002	6	12.6	2.9	8.1		
8	〃	R-007	9	12.7	2.9	8.6		○
9	〃	R-009	12	13.05	3.65	8.65		○
10	椀c	R-011	13	12.8	3.9	7.6		?
11	〃	R-010	14	13.25	4.1	7.65		○
12	黒色土器A椀c	R-012	15	16.7	5.75	8.9		○

S-25

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	黒色土器A 坏d	R-001	1	14.4	3.1	7.7		

S-45b

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器 蓋3	R-001	1	16.0	0.6+		○	

S-66

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 小皿a	R-005	14	9.2	1.65	7.65	○	○
2	丸底坏a	R-006	19	14.6	3.2	-		
3	〃	R-009	17	14.8	3.0	-		
4	〃	R-008	16	14.8	3.5	-		
5	〃	R-007	18	15.0	2.9	-		○
6	椀c	R-010	15	-	1.8+	5.6		

S-67

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器 坏c	R-001	27	13.5	3.4	8.2	○	
2	蓋3	R-003	28	15.2	1.0			
3	大蓋a3	R-004	30	27.0	1.3			

S-82

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　坏a	R-002	37	11.1	2.5	8.7	○	○
2	椀c	R-001	38	12.2	5.1	6.9	?	

S-86

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　坏a	R-001	41	11.4	3.2	7.5		○
2	椀c	R-002	42	12.8	4.7	9.0	○	

S-112 灰色土

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 丸底坏c	R-001	4	15.0	5.1	7.1		

S-131

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　坏c	R-001	51	13.5	3.8	8.0		

S-137

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 丸底坏a	R-002	54	15.1	3.6	-		○
2	〃	R-003	52	15.2	2.3	-		
3	〃	R-001	53	15.2	3.5	-		

S-143

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　椀c	R-002	16	12.6	4.4	8.0		

S-144

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器　坏c	R-002	2	14.8	4.6	10.0	○	
2	大坏c	R-001	3	18.4	5.95	12.8	○	

S-159

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器　小坏c	R-001	21	11.1	3.45	7.2	○	
2	坏c	R-004	22	13.3	4.1	9.3	○	
3	皿a	R-002	20	15.6	2.2	12.1	?	
4	大蓋c3	R-003	19	19.05	2.5			

S-164

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器 坏	R-001	58	16.0	5.0+	-		

S-166

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器　小坏c	R-001	26	11.1	3.5	7.2	○	
2	坏c	R-002	28	13.2	4.0	9.3	○	
3	〃	R-003	27	14.9	3.9	10.5	○	
4	蓋3	R-004	24	12.8	1.1		○	

S-168

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器 小坏a	R-001	59	9.6	2.3	7.2	○	○

茶褐色土

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　小皿a	R-007	1	9.0	1.1	6.9	○	○
2	椀?	R-004	8	13.1	5.7+	-		

大宰府条坊跡第98次調査検出遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種　別	地区
1	98SE001	井戸　　1→20	
2	98SE002	井戸　　3→2	
3	98SE003	井戸	
4	98SE004	井戸	
5	98SX005	溜まり状遺構	
6	98SE006	井戸　　5→6→7	
7	98SX007	土壙？	
8	98SD008	溝	
9		ピット	
10	98SK010	土壙　　5→10	
11		ピット群　　5→11	
12		土壙	
13	98SK013	土壙	
14	98SK014	土壙　　14→12	
15	98SE005	井戸　　15→13	
16		溝	
17	98SX017	段落ち	
18			
19			
20	98SX020	溜まり状遺構	

98次遺物一覧表

S-1　上面

須恵器	坏c、蓋3、蓋c、甕
土師器	丸底坏a、丸底坏c、小皿c、甕b
黒色土器A	破片
越州窯系青磁	椀；Ⅰ(1)、Ⅰ-1(1)、Ⅱ(1)
高麗青磁	椀；Ⅲ-2a
緑釉陶器	椀(1)
中国陶器	無釉；壺(1)
肥前系陶磁器	染付；破片(1)【混入品】
瓦類	破片
土製品	フイゴ羽口

S-1　黄色土

須恵器	壺、甕
土師器	丸底坏a、丸底坏c、小皿a、器台
越州窯系青磁	椀；Ⅰ(1)
高麗青磁	椀；Ⅰ×Ⅲ
白磁	椀；Ⅳ(1)、Ⅳ-1b(1)
陶器	朝鮮無釉陶器(1)、破片
瓦類	破片

S-1　黒灰色土

須恵器	坏c、蓋3、甕
土師器	丸底坏a、丸底坏c、小皿a、器台 焼塩壺
越州窯系青磁	椀；Ⅰ(1)
高麗青磁	椀；Ⅲ-2×4(1)
白磁	椀；Ⅳ(1)
陶器	朝鮮無釉陶器；壺(1)
弥生土器	鉢
瓦類	破片

S-1　暗灰色土

須恵器	坏c、蓋c、甕
土師器	丸底坏a、丸底坏c、小皿a、椀、把手
越州窯系青磁	椀；Ⅱ(1)
白磁	椀；Ⅰ-1(1)、Ⅳ(1)
瓦類	平瓦(格子)

S-2　上面

須恵器	坏c、甕(朱付着)
土師器	坏a、椀c
瓦類	破片(格子)

S-2　淡茶色土

須恵器	坏c、蓋c、甕
土師器	坏a、椀a
黒色土器B	破片
瓦類	破片

S-2　黒色土

須恵器	甕
土師器	坏a、椀a、椀c、小皿a2
黒色土器B	皿a
越州窯系青磁	椀；Ⅰ(1)
金属製品	銅銭「乾元大宝」、鉄釘

S-2　黒灰色粘土

須恵器	坏c、蓋1、甕
土師器	坏a、椀c、小皿a2
その他の青磁	長沙窯片？(1)
灰釉陶器	破片

S-2　灰色砂

須恵器	坏c、蓋1、蓋3、甕
土師器	椀a、椀c
緑釉陶器	椀
瓦類	破片(格子)

S-2　ウラゴメ

須恵器	坏c、蓋c、蓋3、壺、皿a、甕
土師器	坏a、椀c、蓋c3、皿a、甕
黒色土器A	椀
越州窯系青磁	椀；Ⅰ(1)
瓦類	破片(縄目)

S-3　上面

須恵器	坏c、蓋3、壺、皿a、高坏
土師器	坏、甕
緑釉陶器	椀(輪花)
瓦類	丸瓦片

S-3

須恵器	坏a、坏c、大坏c、蓋c3、蓋1、壺、長頸壺、皿a、甕、高坏
土師器	坏c、皿a、甕a、高坏

S-3　枠内

須恵器	蓋c3、鉢、甕、高坏
土師器	皿？　把手、甕a
瓦類	丸瓦片
石製品	砥石？

S-4　上面

須恵器	坏c、大坏c、蓋c、長頸壺、甕
土師器	坏a
黒色土器B	椀c、破片
白磁	椀；Ⅳ×Ⅺ(1)[混入？]
緑釉陶器	破片
瓦類	破片

S-4

須恵器	坏c、皿a、蓋3、壺、甕、高坏
土師器	坏a、坏c、椀c、蓋3、蓋4、甕
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	椀；Ⅰ(1)
その他の青磁	長沙×越(1)
緑釉陶器	耳皿、破片
灰釉陶器	皿
瓦類	破片(縄目)

S-4　灰色粘土

須恵器	坏c、蓋c、甕
土師器	坏a、坏c
瓦類	平瓦片(縄目)
石製品	石帯「巡方」

S-5　上面

須恵器	甕、蓋c1、蓋a1、坏c、高坏、壺
土師器	皿a、高坏、坏、甕a
黒色土器A	椀

S-5　淡茶色土

須恵器	蓋c1、蓋a1、坏c、高坏、蓋3[混入品]
土師器	椀(暗文)、甕、高坏
瓦類	破片(縄目)[混入品]

S-5　黒褐色土

須恵器	甕、蓋c1、蓋a1、坏c、坏a、壺、大皿a、平瓶
土師器	椀a(暗文)、小皿a(古いタイプ)、高坏、甕
金属製品	鉄釘

S-5　茶褐色土

須恵器	蓋c1、坏a
土師器	坏a(暗文)、甕

S-6　上面

須恵器	甕、蓋3、坏a
土師器	坏、甕

S-6

須恵器	坏c、大坏c、皿a、蓋1、蓋3、長頸壺、鉢、高坏、壺
土師器	坏d、坏c、椀、甕、竈、高坏、脚
	焼塩壺
金属製品	鉄釘
瓦類	平瓦(縄目)
土製品	フイゴ羽口

S-6　枠内

須恵器	坏c、坏a、皿a、蓋c3、甕、壺
土師器	坏d、坏c、坏a
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦(縄目)

S-6　ウラゴメ

須恵器	甕、蓋3、坏c
土師器	坏d、坏c、鉢

S-7

須恵器	壺、蓋3、坏c
土師器	坏、甕
瓦類	破片

S-8　上面表土

須恵器	甕、坏c
土師器	坏、甕
瓦類	破片

S-8

須恵器	甕
土師器	甕、小壺(手捏ね)

S-9

須恵器	坏、甕
土師器	坏c

S-10

須恵器	壺、蓋1、坏c
土師器	甕a、坏c、坏a
黒色土器A	椀c、甕
越州窯系青磁	椀；Ⅰ(1)
その他の青磁	椀；長沙×白×越Ⅰ(1)
瓦類	無文塼

S-11

須恵器	甕、蓋1、蓋3、高坏
土師器	甕、破片
瓦類	平瓦(縄目)

S-12

須恵器	蓋3、甕
土師器	坏
越州窯系青磁	椀；Ⅰ(1)
肥前系陶磁器	染付；破片
金属製品	鉄クサビ
瓦類	破片(近代)

S-13

須恵器	坏、高坏、蓋、甕、鉢(篠)
土師器	椀c
	焼塩壺
越州窯系青磁	椀；Ⅰ(1)、Ⅰ-2ア(1)、Ⅰ-2b(1)
白磁	その他；水注Ⅱ系？(1)
瓦類	平瓦、丸瓦(縄目、格子)
石製品	砥石

S-14

須恵器	坏、蓋3、甕
土師器	坏c、坏a
瓦類	軒平瓦、文字瓦、破片

S-15　青灰色土

須恵器	壺、甕、鉢(篠)
土師器	坏c、椀c
	焼塩壺
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	椀；Ⅰ-2ア(1)
瓦類	平瓦(格子)、丸瓦片

S-15　東

須恵器	甕、壺、蓋3
土師器	椀c
越州窯系青磁	椀；Ⅰ-2ア(1)

S-15　西

須恵器	蓋1
土師器	破片
	焼塩壺
越州窯系青磁	その他；水注Ⅰ(1)
瓦類	破片

S-16

須恵器	坏c、甕
土師器	破片
龍泉窯系青磁	椀；Ⅰ(1)
国産陶器	椀(1)
瓦類	破片(近代)

S-17

須恵器	坏、甕
土師器	破片
白磁	椀；XI(1)

S-20　表土

須恵器	蓋1、高坏、甕、蓋c、長頸壺
土師器	坏？、甕

S-20　上面

須恵器	坏a、坏、高坏、甕、横瓶、蓋？
土師器	甕

表土

須恵器	蓋1、蓋c、蓋3、坏c、坏a、甕
土師器	器台、甕

98次　土器の計測表

S-1　黒灰色土

	器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
1	土師器　小皿a	R-001	4	10.0	1.2	7.0		
2	丸底坏a	R-002	5	15.6	3.8	-		
3	〃	R-003	6	16.0	3.5	-		
4	椀c	R-004	7	14.3	4.6	7.0		

S-1　暗灰色土

	器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
1	土師器　小皿a	R-001	10	10.0	1.15	7.3	○	
2	丸底坏a	R-002	11	14.3	3.9	-		
3	〃	R-004	12	15.2	4	-		
4	〃	R-003	13	15.7	3.9	-		

S-2　上面

	器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
1	土師器　椀c	R-001		15.6	5.9	8.0		

S-2　淡茶色土

	器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
1	土師器　小皿a	R-002		10.4	1.6	7.3	○	○
2	〃	R-003		10.8	1.75	7.6	○	○
3	〃	R-001		11.6	1.7	8.1		

S-2　黒色土

	器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
1	土師器　小皿a	R-014	1	10.1	1.4	7.1	○	○
2	〃	R-021	2	10.2	1.6	7.6	○	○
3	〃	R-009	3	10.2	1.7	8.3	○	○
4	〃	R-058	4	10.2	1.5	6.1	○	○
5	〃	R-003	5	10.2	1.55	6.4	○	
6	〃	R-049	6	10.35	1.4	6.5	○	○
7	〃	R-055	7	10.4	1.4	7.6	○	○
8	〃	R-001	8	10.4	1.4	7.5	○	
9	〃	R-002	9	10.4	1.55	7.7		○
10	〃	R-048	10	10.4	1.55	6.8	○	○
11	〃	R-011	11	10.4	1.6	6.9	○	○
12	〃	R-007	12	10.4	1.8	8.1		
13	〃	R-023	13	10.5	1.25	7.8	○	○
14	〃	R-010	14	10.5	1.6	7.2	○	
15	〃	R-050	15	10.5	1.75	7.2	○	○
16	〃	R-006	16	10.5	1.8	7.9		
17	〃	R-024	17	10.6	1.45	8.0		○
18	〃	R-018	18	10.6	1.65	8.1	○	○
19	〃	R-054	19	10.6	1.7	7.9		
20	〃	R-008	20	10.6	1.85	6.9	○	○
21	〃	R-005	21	10.6	1.8	7.0	○	○
22	〃	R-015	22	10.7	1.8	7.9		○
23	〃	R-013	23	10.7	1.9	7.4	○	○
24	〃	R-057	24	10.8	1.5	7.0		○
25	〃	R-051	25	10.8	1.45	7.9	○	○
26	〃	R-004	26	10.8	1.5	7.4	○	○
27	〃	R-047	27	10.8	1.6	8.3		○
28	〃	R-056	28	10.8	1.8	7.8	○	
29	〃	R-053	29	10.9	1.5	8.1	○	○
30	〃	R-022	30	10.9	1.4	8.0	○	
31	〃	R-016	31	11.0	1.5	8.1	○	○
32	〃	R-012	32	11.1	1.6	8.0	○	○
33	〃	R-026	33	11.2	1.75	7.8		○
34	〃	R-017	34	11.2	1.5	8.5	○	○
35	小皿a2	R-052	35	10.8	1.45	-	○	○
36	〃	R-019	36	11.2	1.0	7.3		○
37	〃	R-025	37	11.2	1.2	6.9	○	○
38	〃	R-020	38	11.6	1.05	7.7		
39	椀a	R-036	39	12.4	3.3	-	○	○
40	〃	R-045	40	12.6	3.2	-	○	○
41	〃	R-046	41	12.6	3.3	-		○
42	〃	R-041	42	12.6	3.25	-	○	○
43	〃	R-039	43	12.6	3.65	-	○	
44	〃	R-035	44	12.8	3.2	-		
45	〃	R-032	45	12.8	3.2	-	○	○
46	〃	R-033	46	12.8	3.6	-	○	
47	〃	R-040	47	12.8	4.0	-	○	○
48	〃	R-044	48	13.0	3.5	-	○	
49	〃	R-034	49	13.0	3.8	-	○	○
50	〃	R-029	50	14.4	4.3	-	○	○
51	椀c	R-037	51	14.6	5.7	7.9		
52	〃	R-031	52	14.8	5.4	7.0		○
53	〃	R-043	53	14.8	5.7	8.0	○	○
54	〃	R-042	54	14.8	5.95	7.15	○	○
55	〃	R-038	55	15.0	6.2	7.3	○	
56	黒色土器B小皿	R-028	57	11.5	1.8	7.3		
57	〃	R-027	58	11.4	2.0	7.0		

S-2　黒灰色粘土

	器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
1	土師器　小皿a	R-004	1	10.0	1.5	7.8	○	○
2	〃	R-002	2	10.3	1.8	7.9	○	○
3	〃	R-003	3	10.8	1.9	8.8	○	
4	〃	R-001	4	11.0	1.6	8.4	○	○
5	椀c	R-006	5	14.6	6.3	8.4	○	
6	〃	R-005	6	15.1	6.15	7.8	○	

S-2　灰色砂

	器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
1	土師器　椀c	R-001		13.8	5.5	8.0		○

S-3

	器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
1	須恵器　蓋c3	R-002	1	15.3	2.9		○	
2	〃	R-001	2	15.6	3.1		○	
3	〃	R-005	3	15.6	1.3		○	
4	〃	R-004	6	19.0	2.5+		○	
5	〃	R-006	4	19.8	1.3+		○	
6	〃	R-003	5	20.5	3.3			
7	坏c	R-010	8	12.8	3.6	9.4	○	
8	〃	R-012	7	14.6	3.8	11.7		
9	土師器　坏c	R-014	18	16.0	5.0	10.8		
10	須恵器　坏c	R-011	9	-	3.3+	12.3	○	
11	土師器　皿a	R-015	19	13.5	2.15	10.0		
12	須恵器　皿a	R-009	10	14.8	1.5	11.2	○	
13	〃	R-008	12	20.4	1.8	17.4	○	

S-3　枠内

	器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
1	須恵器　蓋c3	R-002	1	14.7	1.1			
2	〃	R-001	2	15.8	1.8		○	

S-4

	器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
1	黒色土器A椀c	R-001	2	15.7	6.1	7.0		

S-4　灰色粘土

	器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
1	土師器　椀c	R-001	1	15.8	6.5	7.9		○

S-5　上面

	器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
1	須恵器　蓋a1	R-003	1	14.0	2.2		○	
2	蓋c1	R-004	2	12.7	3.4		○	

S-5　黒褐色土

	器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
1	須恵器　小蓋a1	R-013	1	10.6	2.5		○	
2	〃	R-001	2	10.8	2.3		○	
3	〃	R-011	3	11.3	2.3		○	
4	〃	R-010	4	12.1	2.3		○	
5	〃	R-012	5	12.6	2.0		○	
6	小蓋c1	R-004	6	11.5	3.2		○	
7	〃	R-008	7	12.0	1.9		○	
8	〃	R-002	8	12.1	3.4		○	
9	〃	R-009	9	13.1	3.6		○	
10	〃	R-002	10	13.8	3.5			
11	蓋c1	R-001	11	14.1	3.0		○	
12	〃	R-002	12	14.5	2.9		○	
13	〃	R-003	13	14.8	3.0		○	
14	坏a	R-001	14	10.5	3.1	6.3	○	○
15	〃	R-006	15	12.3	3.7	9.7	○	
16	〃	R-007	16	13.5	3.9	10.3	○	
17	坏c	R-005	17	11.4	4.5	7.6	○	
18	大皿a	R-017	18	23.3	3.9	17.3	○	
19	土師器　小皿b	R-016	20	9.2	2.7＋	-		
20	〃	R-015	21	10.5	2.6	-		
21	〃	R-014	22	11.1	2.5	-		
22	皿b	R-023	26	21.4	3.0＋	-		
23	坏a	R-018	23	12.5	5.05	9.9		
24	大坏a	R-019	24	18.8	6.75	-		

S-6

	器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
1	須恵器　蓋3	R-005	1	13.0	1.7＋		○	
2	〃	R-006	2	13.9	1.6＋		○	
3	〃	R-005	3	14.0	2.5		○	
4	蓋c3	R-009	4	13.0	2.5		○	
5	〃	R-004	5	18.3	2.1＋		○	
6	坏a	R-003	6	12.7	4.0	7.8	○	
7	〃	R-003	7	15.2	3.55	11.3		
8	坏c	R-006	8	14.1	4.3	8.9		
9	〃	R-002	9	14.4	4.3	9.1	○	
10	土師器　坏c	R-007	15	-	2.2＋	10.0		
11	須恵器　皿a	R-001	10	14.9	1.6	12.4		
12	〃	R-001	12	18.8	2.6	14.9	○	
13	〃	R-002	11	20.2	2.5	15.8	○	

条106次調査 遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種	別	時期	地区
1	106SA130	ピット群	埋土は茶色土　(調査後に柵の柱穴を含むことが判明)	10c後半	C2
2		土壙	埋土は茶色土	10c中頃～後半	B6
3		ピット群	埋土は茶色土		D2
4	106SA110	凹み	埋土は茶色土　(調査後に柵の柱穴を含むことが判明)	10c中頃～後半か？	D3
5	106SD035	溝（道路側溝）	埋土は黄茶色土		C4～
6	106SA130	ピット	埋土は茶色土　(調査後に柵の柱穴を含むことが判明)		D1
7	106SB125	ピット	埋土は茶色土　(調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明)	IX期	C2
8		ピット群	埋土は茶色土	IX期	D3
9		凹み	埋土は茶色土（包含層の残存の可能性あり）	10c中頃～後半	C3
10	106SK010	土壙	埋土は茶黄色土（自然埋没）		D4
11	106SX011	土壙	埋土は茶色土（自然埋没）	10c中頃	D1
12		ピット	S-12→S-9	XI期	D3
13		ピット		10c代か？	C3
14	106SB075	ピット群	埋土は茶色土　(調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明)	10c代か？	D4
15	106SD015	溝（道路側溝）	埋土は下位から黄茶色土→黄色土		CD5～
16		ピット	埋土は黄茶色土	奈良	D3
17	106SB125	ピット群	埋土は茶色土　(調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明)	10c中頃～後半？	C4
18	106SB075	ピット	埋土は茶色土　(調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明)	10c後半？	C4
19	106SB075	ピット群	埋土は茶色土　(調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明)	平安	D4
20	106SA130	ピット群	埋土は茶色土　(調査後に柵の柱穴を含むことが判明)	平安	F2
21	106SB080 106SB125	ピット群	埋土は茶黄色土　(調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明)	平安	C5
22	106SB080	ピット群	埋土は茶黄色土　(調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明)	平安	D5
23		ピット群	埋土は茶黄色土	平安	D5
24	106SB075	ピット	埋土は茶黄色土　(調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明)	平安	D4
25	106SK025	土壙	埋土は黒茶色土	XI期	H2
26		ピット	埋土は黒茶色土	平安か？	D5
27		ピット群	埋土は茶黄色土	平安か？	C5
28	106SB075	凹み	埋土は茶色土　(調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明)	9c後半以降	D4
29		凹み	埋土は茶黄色土　S-29→S-28	平安	D4
30	106SK030	土壙	(S-159と同じ遺構)	奈良	E5
31		ピット	埋土は茶黄色土	平安前期	C5
32		ピット	埋土は茶黄色土		D5
33		ピット群	埋土は茶黄色土		C5
34	106SB080	凹み	埋土は黄茶色土　(調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明)	奈良？	C5
35	106SD035	溝（道路側溝）	埋土は黄茶色土　自然堆積	平安初期	4ライン
36		ピット	埋土は茶黄色土		D5
37		ピット	埋土は茶色土	10c代？	D5
38		凹み	埋土は茶色土	10c代？	D5
39		凹み	埋土は黄茶色土	奈良	D5
40	106SK040	埋納土壙		9c後半	D8
41		ピット	埋土は黄茶色土		D5
42		凹み	埋土は黄茶色土		D5
43		凹み	埋土は茶色土	9c中頃以降	C5
44		ピット群	埋土は茶黄色土	9c中頃～後半	B10
45	106SK025	土壙	埋土は黒茶色土　(S-25と同一遺構)	XI期	H2
46		ピット群	埋土は茶黄色土		C10

Fig.137　条坊106次遺構略測図（1/125）

47		ピット群	埋土は茶黄色土		C6
48		ピット群	埋土は茶色土	平安	D4
49		ピット群	埋土は黄茶色土		D3
50	106SX050	凹み	埋土は茶色土　（整地土の可能性あり）	IX期	H5
51		ピット	埋土は黄茶色土	平安	B10
52	106SB115	ピット	埋土は下位から黄茶色土→黒茶色土　(調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明)	平安	B9
53		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良	C9
54		ピット	埋土は黄茶色土	奈良	B9
55		溝	埋土は茶色土　炭化物を混入している　S-55→S-50→S-201	IX期	H4
56		凹み	埋土は茶色土	10c中頃～後半	B9
57		溝（攪乱）	瓦斯管埋設に伴う溝	現代	B11
58		ピット群	埋土は茶黄色土	奈良	C6
59		ピット群	埋土は茶色土	10c中頃～後半	C3
60	106SE060	井戸	枠内埋土は黒茶色粘質土、裏込め埋土は灰茶色砂質土 S-60→S-268→S-262→S-266	9c後半	G8
61		ピット	埋土は茶色土	平安か？	D5
62		溝	埋土は灰色混じり茶色土	近世以降	BC10
63		ピット群		10c中頃～後半	C9
64	106SB080	ピット群	埋土は茶黄色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	10c	C6
65	106SB065	掘立柱建物	II面		CDE8・9
66		ピット	埋土は茶黄色土	古代	C6
67		ピット群	埋土は茶黄色土	平安前期	C6
68		ピット	埋土は黄茶色土	8c末～9c初頭	D6
69		ピット群	埋土は黄茶色土	8c末～9c初頭	C10
70	106SB070	掘立柱建物	II面		J2・3
71		ピット	埋土は茶黄色土		C10
72	106SB115	ピット	埋土は黄茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	8c末～9c初頭	C9
73	106SK073	土壙	埋土は茶色土　自然堆積	10c	C9
74	106SB080	ピット群	埋土は茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）		C9
75	106SB075	掘立柱建物	I面		
76	106SB120	ピット	埋土は茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	10c中頃～後半	D6
77	106SB095	ピット群	埋土は茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	10c後半	E9
78		ピット	埋土は茶色土	IX期以降	E9
79		凹み	埋土は茶黄色土　S-103→S-79	IX期	C7
80	106SB080	掘立柱建物	I面		
81		ピット群	埋土は茶黄色土	古代	D6
82		ピット	埋土は茶色土	平安	D6
83		土壙	埋土は黄茶色土　自然堆積	奈良後半	C9
84		ピット	埋土は茶色土	10c中頃～後半	D6
85	106SB085	掘立柱建物	I面		
86		ピット	埋土は茶色土	平安	C6
87	106SK087	土壙	埋土は黄茶色土	奈良後半	D9
88		ピット	埋土は黄茶色土	奈良後半	D9
89		土壙	埋土は黄茶色土	奈良後半	C9
90	106SB090	掘立柱建物	I面		
91		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良	C9
92		凹み	埋土は茶色土	平安	E9
93		ピット群	埋土は茶色土	平安	E1

94		ピット	埋土は茶色土	平安	D1
95	106SB095	掘立柱建物	I面		
96		ピット群	埋土は茶色土	平安	C8
97		凹み	埋土は茶黄色土	平安	E9
98	106SX098	凹み	埋土は下位より黄色土→茶灰色土→茶色土	平安	F2
99		凹み	埋土は茶色土	平安	B7
100	105SF100	道路			
101	106SB115	ピット群	埋土は茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	平安か？	B7
102	106SB115	ピット群	埋土は茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	平安か？	B8
103		凹み	埋土は茶色土　S-103→S-79	IX期	C7
104	106SB115	ピット群	埋土は黄茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	奈良後半	C8
105					
106		土壙	埋土は黄茶色土	奈良後半	D6
107		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良か？	F2
108		凹み	埋土は茶褐色土（包含層の残存か？）	平安以降	F1
109		土壙？	埋土は茶色土	平安	B7
110	106SA110	柵	I面		
111		ピット	埋土は茶色土	平安	D6
112		土壙	埋土は黄茶色土	奈良後半	D6
113	106SB080	ピット群	埋土は茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	平安	D6
114		ピット	埋土は黄茶色土	平安	D6
115		掘立柱建物	I面		
116	106SB120	ピット群	S-116→S-103　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	平安	C7
117		ピット	埋土は黄茶色土	奈良後半	B8
118		土壙？	埋土は茶色土	平安	C8
119		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良	C5
120	106SB120	掘立柱建物	I面		
121		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良	G2
122		凹み	埋土は黒茶色土	10c中頃～後半	G2
123		土壙	埋土は黄茶色土	8c中頃	C8
124		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良	D9
125	106SB125	掘立柱建物	I面		
126		ピット群	埋土は茶黄色土～茶色土		H6
127		ピット群	埋土は茶色土	平安	H6
128	106SX128	凹み	埋土は茶色土	10c後半	H6
129	106SA130	ピット群	埋土は茶色土　（調査後に柵の柱穴を含むことが判明）	X期	H1
130	106SA130	築地塀か？			
131		凹み	埋土は茶黄色土	平安前期	I5
132	106SX132	凹み	埋土は茶色土	IX期～X期	I6
133	106SB090	ピット	埋土は茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	平安	I5
134		溝	埋土は下位より黄茶色土→茶色土		I5
135					
136		ピット群	埋土は茶色土	平安	I6
137		ピット群	埋土は茶黄色土	古代	H6
138	106SB090	ピット群	埋土は茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	平安	I5
139		ピット群	埋土は茶黄色土	奈良後半	I6
140					
141		凹み	埋土は茶褐色土（包含層の残存）	平安	H7
142		ピット	埋土は茶黄色土	奈良	H6

143		ピット	埋土は茶黄色土	奈良か？	H6
144		ピット群	埋土は茶色土	平安	H7
145					
146		溝？	埋土は黄茶色土	奈良後半	I6
147		ピット	埋土は黄茶色土	奈良後半	I6
148		ピット	埋土は黄茶色土	奈良	H6
149		ピット	埋土は黄茶色土	奈良	E3
150					
151	106SA110	ピット群	埋土は茶色土　(調査後に柵の柱穴を含むことが判明)	平安	F3
152	106SB075	ピット群	埋土は茶色土　(調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明)	平安	E4
153		ピット群	埋土は茶色土	平安	F4
154	106SB085	ピット群	埋土は茶色土　(調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明)	IX期～X期	F3
155					
156		溝	埋土は茶色土	平安	F4
157		ピット	埋土は茶色土	平安	F4
158		ピット群	埋土は茶色土	平安	F4
159		凹み	埋土は茶黄色土	奈良中頃	E4
160					
161	106SB085	ピット	埋土は茶色土　(調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明)	平安	F4
162		ピット	埋土は茶色土	平安	I1
163	106SK163	土壙	埋土は茶色土	IX期～X期	I2
164	106SK164	凹み	埋土は茶色土		I1
165					
166	106SK166	土壙	埋土は茶色土　炭化物混入	IX期～X期	I2
167	106SK167	土壙	埋土は茶色土　炭化物混入	IX期～X期	I2
168		ピット群	埋土は茶色土	平安	I2
169	106SK169	土壙	埋土は茶色土	XI期	E5
170					
171		ピット群	埋土は茶色土	平安	I1
172	106SB075 106SB085	ピット群	埋土は茶色土　(調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明)	平安	F5
173	106SK173	土壙	埋土は茶黄色土	奈良中頃	F5
174		ピット群	埋土は茶黄色土	奈良後半	E5
175					
176		ピット群	埋土は茶色土	平安	E3
177		土壙	埋土は茶黄色土	平安前期	I1
178	106SK178	凹み	埋土は茶色土	XI期	H3
179		ピット群	埋土は茶色土	平安	D7
180					
181		ピット群	埋土は茶黄色土	古代	D8
182		ピット群	埋土は黄茶色土	古代	D7
183		ピット	埋土は茶色土	平安	D7
184	106SK184	凹み	埋土は黒茶色土	IX期	D7
185					
186	106SB085	ピット群	埋土は茶色土　(調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明)	平安	G3
187	106SB085 106SA110	ピット群	埋土は茶色土　(調査後に掘立柱建物・柵の柱穴を含むことが判明)	平安	G3
188		ピット群	埋土は茶黄色土	奈良後半	F5
189		土壙	埋土は茶黄色土　S-15→S-189→S-188→S-172	奈良	F5

190					
191		土壙	埋土は茶黄色土	古代	F5
192		ピット群	埋土は茶黄色土	古代	D8
193		ピット群	埋土は茶色土	平安	H3
194		ピット群	埋土は茶黄色土	古代	D8
195					
196		ピット	埋土は茶黄色土	奈良末	D8
197		ピット群	埋土は茶色土	平安	D7
198	106SK198	凹み	埋土は茶色土	XI期	H3
199	106SB090	ピット群	埋土は茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	平安	GH4
200					
201	106SX050	凹みか？	埋土は茶色土	IX期	H5
202		ピット群	埋土は茶色土	平安	F7
203		ピット群	埋土は茶色土	平安	F6
204		ピット	埋土は茶色土	平安	E6
205					
206	106SB085	ピット群	埋土は茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	平安	F6
207		ピット	埋土は茶色土	古代	F6
208		ピット	埋土は黄茶色土	奈良後半	D9
209	106SB095	ピット群	埋土は茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	平安	E8
210					
211	106SB095	ピット群	埋土は茶黄色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	古代	E8
212	106SB090	ピット	埋土は茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	IX期	H5
213	106SB085 106SB090	ピット	埋土は茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	平安	H5
214		ピット	埋土は茶黄色土	平安	H5
215					
216		ピット群	埋土は茶黄色土	奈良末	F6
217	106SB120	ピット群	埋土は茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	平安	E8
218		ピット群	埋土は黒茶色土	平安	E7
219	106SB120	ピット群	埋土は茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	平安	F8
220					
221	106SX221	凹み	埋土は茶色土	古代	E6
222		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良前半	E8
223		ピット群	埋土は茶色土	平安	E9
224		ピット群	埋土は茶色土	平安	H4
225					
226		ピット	埋土は茶色土	XI期	H3
227		凹み	埋土は茶黄色土	奈良	G4
228		ピット	埋土は茶黄色土	奈良	D7
229	106SB095	ピット群	埋土は茶黄色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	奈良	E8
230					
231	106SB090	ピット群	埋土は茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	平安	I4
232	106SB090	ピット群	埋土は茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	平安	I4
233		ピット群	埋土は茶色土	平安	F7
234		ピット群	埋土は茶色土	平安	F7
235					
236	106SB120	ピット群	埋土は茶黄色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	平安	D8
237		ピット群	埋土は茶色土	平安	I4

238	106SB120	ピット群	埋土は茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	平安	E6
239		ピット	埋土は黄茶色土	奈良	D8
240					
241		ピット群	埋土は茶色土	平安	E7
242	106SB080	ピット群	埋土は茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	平安	E6
243		凹み	埋土は茶黄色土	奈良後半	E6
244	106SB085	ピット	埋土は茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	平安	G6
245					
246	106SX246	凹み	埋土は茶色土	10c後半	F7
247		ピット群	埋土は茶黄色土	奈良	G6
248		ピット	埋土は黄茶色土	奈良	H4
249		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良	E6
250					
251		ピット	埋土は茶黄色土	奈良	E6
252		ピット	埋土は茶黄色土	奈良中頃	D7
253		ピット	埋土は茶黄色土	奈良後半	C8
254		凹み	埋土は茶色土	IX期	H3
255					
256	106SX256	ピット群	埋土は茶色土	IX期	J3
257		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良	I3
258		ピット群	埋土は黄茶色土	古代	G7
259		ピット群	埋土は茶色土	IX期	F8
260					
261	106SB085	ピット群	埋土は茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	平安	G6
262		ピット	埋土は黒茶色土	平安	G8
263		ピット群	埋土は茶色土	平安	G7
264	106SB120	ピット群	埋土は茶色土　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	平安	F7
265					
266		凹み			G8
267		土壙	埋土は黄茶色土　焼土混入	奈良	J3
268		凹み	埋土は茶色土	平安	G8
269	106SB090	ピット群	埋土は茶色土　S-269→S-50　（調査後に掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）	平安	I5
270					
271		ピット群	埋土は茶色土	平安	F7
272		土壙	埋土は黄茶色土	奈良中頃	D6
273		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良前半	C10
274		ピット群	埋土は茶色土	平安	B8
275					
276		ピット	埋土は黄茶色土	奈良後半	B9
277		ピット	埋土は黄茶色土	奈良後半	D7
278		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良後半	E9
279		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良後半	D9
280					
281		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良	F7
282		ピット	埋土は黄茶色土	奈良中頃	C7
283		溝	埋土は黄茶色土	奈良	D6
284		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良中頃	E6
285					
286		ピット	埋土は黄茶色土	奈良	C6

287		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良	E3
288		ピット群	埋土は茶色土	中世	G2
289		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良中頃	E3
290					
291		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良	G1
292		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良	F3
293		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良	G3
294		溝	埋土は黄茶色土	奈良	G3
295					
296		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良	H3
297		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良	I4
298		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良	I3
299	106SX299	凹み	S-298→S-299	奈良前半	I3
300					
301		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良	I4
302		ピット群	埋土は茶色土	平安	H4
303		凹み	埋土は黄茶色土	奈良	G3
304		ピット	埋土は黄茶色土	奈良	I2
305					
306		ピット群	埋土は黄茶色土	奈良	F6
307		ピット	埋土は黄茶色土	奈良	F3

条坊跡１０６次柱穴標高（Ⅰ面）

	柱穴記号	上端レベル	下端レベル	標高（上）	標高（下）	高低差	標高下（平均）
SB075	a	0.70	0.96	28.355	28.095	0.26	28.015
	b	0.79	1.04	28.265	28.015	0.25	
	c	0.73	1.07	28.325	27.985	0.34	
	d	0.69	1.05	28.365	28.005	0.36	
	e	0.76	1.08	28.295	27.975	0.32	
	f	0.77	1.11	28.285	27.945	0.34	
	g	0.75	1.15	28.305	27.905	0.4	
	h	0.77	1.02	28.285	28.035	0.25	
	i	0.68	0.88	28.375	28.175	0.2	
SB080	a	0.67	1.10	28.385	27.955	0.43	27.999
	b	0.75	1.13	28.305	27.925	0.38	
	c	0.79	1.12	28.265	27.935	0.33	
	d	0.72	1.07	28.335	27.985	0.35	
	e	0.70	1.06	28.355	27.995	0.36	
	f	0.74	0.98	28.315	28.075	0.24	
	g	0.70	0.97	28.355	28.085	0.27	
	h	0.80	1.05	28.255	28.005	0.25	
	i	0.71	1.10	28.345	27.955	0.39	
	j	0.64	0.98	28.415	28.075	0.34	
SB085	a	0.71	1.09	28.345	27.965	0.38	28.038
	b	0.79	1.04	28.265	28.015	0.25	
	c	0.73	0.97	28.325	28.085	0.24	
	d	0.77	1.02	28.285	28.035	0.25	
	e	0.66	0.96	28.395	28.095	0.3	
	f	0.66	0.97	28.395	28.085	0.31	
	g	0.73	1.11	28.325	27.945	0.38	
	h	0.77	1.01	28.285	28.045	0.24	
	i	0.74	1.03	28.315	28.025	0.29	
	j	0.74	1.07	28.315	27.985	0.33	
	k	0.79	1.09	28.265	27.965	0.3	
	l	0.71	1.11	28.345	27.945	0.4	
	m	0.64	0.92	28.415	28.135	0.28	
	n	0.65	0.93	28.405	28.125	0.28	
	o	0.89	0.94	28.165	28.115	0.05	
SB090	a	0.73	1.05	28.325	28.005	0.32	28.052
	b	0.84	0.96	28.215	28.095	0.12	
	c	0.78	0.94	28.275	28.115	0.16	
	d	0.66	1.07	28.395	27.985	0.41	
	e	0.64	0.91	28.415	28.145	0.27	
	f	0.70	1.05	28.355	28.005	0.35	
	g	0.87	1.04	28.185	28.015	0.17	
SB095	a	0.73	0.77	28.325	28.285	0.04	28.037
	b	0.73	0.97	28.325	28.085	0.24	
	c	0.73	1.07	28.325	27.985	0.34	
	d	0.78	1.15	28.275	27.905	0.37	
	e	0.76	1.13	28.295	27.925	0.37	
SB115	a	0.69	0.82	28.365	28.235	0.13	28.050
	b	0.75	1.15	28.305	27.905	0.4	
	c	0.70	0.80	28.355	28.255	0.1	
	d	0.70	0.99	28.355	28.065	0.29	
	e	0.71	1.15	28.345	27.905	0.44	

SB115	f	0.70	1.03	28.355	28.025	0.33	
	g	0.81	0.96	28.245	28.095	0.15	
	h	0.67	1.14	28.385	27.915	0.47	
SB120	a	0.71	0.95	28.345	28.105	0.24	27.977
	b	0.73	0.97	28.325	28.085	0.24	
	c	0.78	1.09	28.275	27.965	0.31	
	d	0.72	1.09	28.335	27.965	0.37	
	e	0.80	1.08	28.255	27.975	0.28	
	f	0.71	1.20	28.345	27.855	0.49	
	g	0.91	1.12	28.145	27.935	0.21	
	h	0.79	1.25	28.265	27.805	0.46	
	i	0.75	1.04	28.305	28.015	0.29	
	j	0.72	1.07	28.335	27.985	0.35	
	k	0.73	1.09	28.325	27.965	0.36	
	l	0.90	0.99	28.155	28.065	0.09	
	m	0.80	1.08	28.255	27.975	0.28	
SB125	a	0.82	0.88	28.235	28.175	0.06	28.040
	b	0.76	1.03	28.295	28.025	0.27	
	c	0.74	1.03	28.315	28.025	0.29	
	d	0.77	1.12	28.285	27.935	0.35	
SA110	a	0.77	0.96	28.285	28.095	0.19	28.171
	b	0.75	0.86	28.305	28.195	0.11	
	c	0.75	0.86	28.305	28.195	0.11	
	d	0.70	0.84	28.355	28.215	0.14	
	e	0.68	0.90	28.375	28.155	0.22	
SA130	a	0.80	0.89	28.255	28.165	0.09	28.154
	b	0.75	1.07	28.305	27.985	0.32	
	c	0.79	0.93	28.265	28.125	0.14	
	d	0.77	0.99	28.285	28.065	0.22	
	e	0.69	0.87	28.365	28.185	0.18	
	f	0.69	0.81	28.365	28.245	0.12	
	g	0.66	0.85	28.395	28.205	0.19	
	h	0.67	0.90	28.385	28.155	0.23	
	i	0.67	1.01	28.385	28.045	0.34	
	j	0.64	0.94	28.415	28.115	0.3	
	k	0.64	0.77	28.415	28.285	0.13	
	l	0.65	0.89	28.405	28.165	0.24	
	m	0.66	0.90	28.395	28.155	0.24	
	n	0.64	0.89	28.415	28.165	0.25	
	o	0.65	0.81	28.405	28.245	0.16	

条坊跡１０６次柱穴標高（II面）

SB065	a	0.81	0.92	28.245	28.135	0.11	28.036
	b	0.83	0.99	28.225	28.065	0.16	
	c	0.83	1.14	28.225	27.915	0.31	
	d	0.78	1.11	28.275	27.945	0.33	
	e	0.75	1.00	28.305	28.055	0.25	
	f	0.80	1.10	28.255	27.955	0.3	
	g	0.73	1.00	28.325	28.055	0.27	
	h	0.73	0.99	28.325	28.065	0.26	
	i	0.71	0.92	28.345	28.135	0.21	
SB070	a	1.00	1.12	28.055	27.935	0.12	27.758
	b	0.92	1.40	28.135	27.655	0.48	
	c	1.02	1.37	28.035	27.685	0.35	

106次遺物一覧表

S-1

須恵器	甕
土師器	小皿a、椀c、甑a、器台
黒色土器A	椀c
石製品	碁石、黒曜石片
その他	炭化物

S-2

須恵器	甕、坏c
土師器	椀c、器台、坏a×皿a
瓦類	破片
石製品	滑石片

S-3

須恵器	甕、坏c
土師器	坏a×皿a、破片

S-4

須恵器	甕、坏c
土師器	小皿a、丸底坏a、椀c、甕
	煎熬土器?
黒色土器B	椀c

S-5

須恵器	坏a、坏、蓋3、甕、壷
土師器	甕a
	煎熬土器×焼塩壺

S-6

須恵器	小甕
土師器	高台片

S-7 灰色粘土

須恵器	蓋3、甕
土師器	椀c、椀a、坏、坏×小皿、甑
越州窯系青磁	椀；I-2a (1)
瓦類	破片(格子)
石製品	黒曜石片

S-8

須恵器	坏×皿
土師器	椀a、椀c
黒色土器A	椀c
黒色土器B	破片
白磁	その他；破片(1)

S-9

須恵器	甕、坏c
土師器	坏a、椀c2、椀、甕a
	煎熬土器?
黒色土器A	椀
黒色土器B	椀
金属製品	鉄釘
瓦類	破片(格子)

S-10

須恵器	坏c、蓋c、蓋3、大甕、甕、皿、壷b
土師器	坏、坏c×皿c、甑a

S-10 茶黄色砂

須恵器	蓋3
土師器	蓋c、甕a

S-11

須恵器	坏c、壺、甑、椀、鉢a×椀
土師器	小皿a、椀c2、椀c、椀a、甑
	焼塩壷
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀c2
越州窯系青磁	椀；I (1)
	その他；坏I (1)
白磁	椀；IV (1)
緑釉陶器	椀
灰釉陶器	破片
瓦類	平瓦(格子)
石製品	碁石

S-12

須恵器	坏、破片
土師器	坏a×皿a、椀c2、甑a
黒色土器A	椀c

S-13

須恵器	鉢？
土師器	坏×皿、高台片
緑釉陶器	破片
金属製品	鉄釘

S-14

須恵器	坏c、壷×鉢、甕
土師器	坏c、坏、甕
金属製品	鉄釘？

S-15

須恵器	鉢、坏a×皿a、坏c、小坏、蓋c、蓋1、蓋3、甑 壺b、大坏c、皿c、壺蓋、壺(肥後産？)
土師器	椀c、坏c、甕a、甕、壷、高坏、把手
黒色土器A	椀c1
越州窯系青磁	椀；I ?(1)
金属製品	鉄釘
瓦類	平瓦(格子、縄目、文字)
石製品	碁石、砥石、黒曜石片
土製品	焼土塊、土錘、器種不明

S-15 黄茶色土

須恵器	坏a、蓋3、甕
土師器	丸底坏a、甕a

S-15 黄色土

須恵器	坏c、蓋3、壷、甕
土師器	坏a、甕a
瓦類	破片
石製品	黒曜石片

S-15 黄色ブロック

須恵器	坏、蓋3、壷
土師器	甑a、坏c×皿c

S-15 黄色砂土

須恵器	坏c、蓋3、坏、壷、甕
土師器	甕、坏
瓦類	破片(縄目)

S-16

土師器	壷
黒色土器B	甕

S-17

須恵器	破片
土師器	小皿a、椀c
黒色土器A	破片
瓦類	破片

S-18

須恵器	甕
土師器	坏a×皿a、椀c

S-19

須恵器	甕
土師器	坏、甕

S-20

須恵器	坏、蓋3、破片
土師器	坏×皿、破片
白磁	その他；破片(2)

S-21

須恵器	坏c、甕
土師器	小皿a、坏、甕a
瓦類	破片

S-22

須恵器	坏、蓋3、蓋×高坏、鉢
土師器	椀c2、壺×鉢、甕a、甕
金属製品	器種不明（鉄製品）
土製品	焼土塊、土錘、器種不明

S-23

須恵器	坏×皿
土師器	椀c、甕
黒色土器A	破片
黒色土器B	甕？

S-24

須恵器	坏c、甕
土師器	椀c、小皿a、甕a、甕

S-25

須恵器	坏c、高坏×蓋3、甕、壺×鉢、片口
土師器	小皿a、小皿a2、丸底坏a、丸底坏c、椀c2、壺
黒色土器B	椀
白磁	椀；I(1)
	その他；坏I(1)
金属製品	刀子
瓦類	破片(縄目、格子)
石製品	石鍋（滑石）

S-25　黒茶色土

須恵器	壺、甕、大甕、坏c、坏、破片
土師器	小皿a、丸底坏a、椀c、破片
黒色土器B	椀c、椀
白磁	椀；IV(2)
	その他；破片(1)
瓦類	平瓦(格子)
石製品	滑石片、石鍋加工品
土製品	焼土塊

S-26

須恵器	蓋c、甕
土師器	坏×皿、甕

S-27

土師器	坏a×皿a、坏、甕a
瓦類	破片

S-28

須恵器	大甕、破片
土師器	椀c

S-29

須恵器	坏c、甕
土師器	坏×皿、椀c、甕a

S-30

須恵器	坏a、坏c、蓋3、大甕
土師器	高坏、甕a

S-30　茶黄色土

須恵器	小壺、小坏c、坏c、蓋c3、蓋1、蓋3、小蓋3、小蓋4 甕
土師器	坏c、蓋c、皿b、甕a、把手
黒色土器B	皿？
瓦類	軒平瓦
石製品	滑石片、石鏃（サヌカイト）

S-30　茶黄色砂

須恵器	蓋c3、甕、蓋
土師器	坏×皿、皿b？甕a
石製品	サヌカイト片

S-31

須恵器	蓋3、壺
土師器	坏a×皿a、坏、甕

S-32

土師器	坏c、坏、把手

S-33

須恵器	坏、蓋3
土師器	破片

S-34

須恵器	坏、蓋c、蓋3、甕
土師器	坏×皿、甕
石製品	滑石片

S-35

須恵器	坏c、甕、甑b？壺、蓋、蓋c、蓋3、大坏×大皿
土師器	甕a、甕、破片
	煎熬土器
黒色土器A	破片
金属製品	鉄釘
瓦類	軒丸瓦、平瓦(格子)、破片(縄目)
石製品	滑石片、黒曜石片

S-35　明黄茶色土

須恵器	皿a、小坏c、坏a、坏c、坏、蓋c、蓋3、高坏、甕a 壺b、壺f? 甑、甕
土師器	坏a、坏c、椀c、坏c×皿c、甕a、甕
黒色土器A	椀c、甕
越州窯系青磁	その他；合子身(1)
瓦類	破片(縄目、格子)
石製品	碁石、黒曜石片、サヌカイト片

S-35　暗黄茶色土

須恵器	皿c、小坏c、甕、蓋3、高坏、壷
土師器	把手、甕a
	煎熬土器
黒色土器A	椀c
陶器	朝鮮系無釉陶器
瓦類	破片(縄目、格子)
石製品	碁石、黒曜石片

S-36

土師器	破片
石製品	滑石片

S-37

須恵器	破片
土師器	椀c、甕

S-38

須恵器	坏a、蓋3、坏、壷
土師器	坏×皿、把手、甕a
瓦類	破片

S-39

須恵器	坏
土師器	丸底坏a、椀c、甕a

S-40

須恵器	蓋3、坏、坏×皿
土師器	坏a、大甕b、甕b、甕
黒色土器A	坏

S-41

土師器	破片
	煎熬土器

S-42

須恵器	坏×皿
土師器	甕

S-43

須恵器	坏c
土師器	椀c、甕
瓦類	破片

S-44

須恵器	坏a×皿a、甕
土師器	坏a×皿a、椀c、小皿
瓦類	破片(縄目、格子)

S-45

須恵器	坏c、甕b、甕、破片
土師器	小皿a、小皿a2、椀c2、丸底坏a、丸底坏、甕
瓦類	破片(縄目)
石製品	滑石片

S-45　灰茶色土

須恵器	坏c、蓋3、甕
土師器	小皿a、小皿a2、椀c2、椀c、丸底坏a、丸底坏、甕a 大坏×大皿
瓦類	破片

S-46

須恵器	小坏c
土師器	甕a、坏

S-47

須恵器	坏c、蓋3、壷
土師器	椀c、甕
石製品	碁石

S-48

須恵器	坏c、甕
土師器	椀c
瓦類	破片

S-49

須恵器	破片
土師器	甕、坏

S-50

須恵器	蓋3、坏c、蓋c、甕、壷、鉢、高坏、鉢(篠)
土師器	小皿a、小皿c、中椀a、椀c、大椀c、椀a、坏a、甕 坏c、器台、甕b
黒色土器A	椀c、椀、甕
黒色土器B	椀、蓋c
越州窯系青磁	椀；I(1)、II(1)
緑釉陶器	椀、破片
灰釉陶器	破片
瓦類	軒丸瓦(老司)、平瓦(縄目、格子)
石製品	器種不明、サヌカイト片
土製品	器種不明　竈?
その他	炭化物

S-51

須恵器	蓋3、坏、蓋c
瓦類	破片(格子)

S-52　黄茶色土

須恵器	坏、壷
土師器	破片
白磁	皿；V-2(1)

S-52　黒茶色土

須恵器	蓋3、坏c、甕
土師器	甕a

S-53

須恵器	坏a、坏c、蓋3、坏×皿、甕
土師器	坏a、甕a

S-54

土師器	坏×皿、甕a
瓦類	破片(縄目)

S-55

須恵器	坏、坏c、甕
土師器	小皿a、椀a、椀c、小椀c2、丸底坏a、坏a、高坏 脚付皿
黒色土器A	小皿a
瓦類	破片(縄目、格子)

S-56

須恵器	皿、蓋3、甕
土師器	椀c2、小皿a、皿a、丸底坏、甕a、大盤c
黒色土器B	高台
越州窯系青磁	椀；I-5(1)
石製品	黒曜石片、サヌカイト片

S-57

須恵器	甕、高坏
土師器	破片
国産陶器	擂鉢(近世)、褐釉陶器(近世以降)

S-58

須恵器	坏、甕、高坏、壺
土師器	坏d、甕a

S-59

須恵器	蓋3
土師器	椀c
黒色土器A	破片
瓦類	破片

S-60

須恵器	坏a、蓋3、蓋c、坏a×皿a、皿、壺、甑、高台
土師器	小皿a、皿a、坏c、甕a、蓋3
	煎熬土器
中国陶器	褐釉；椀
瓦類	破片(縄目)
石製品	黒曜石片
土製品	羽口

S-60　黒茶色粘土

須恵器	坏a、蓋3、壺蓋、皿a、坏、壺、甕a、高坏
土師器	坏a、椀c2、椀c1、坏d、坏d×皿、皿a、坏c、坏c×皿c 壺×盤、甑a、高坏
	煎熬土器、焼塩壷
黒色土器A	椀c、椀（混入?）
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦(縄目、格子)、丸瓦、破片(縄目)
石製品	黒曜石片
土製品	フイゴ羽口

S-60　灰茶色砂

須恵器	坏a、坏c、坏、壺b、甕
土師器	皿a、椀c1、甕a、高坏
金属製品	器種不明（鉄製品）
瓦類	平瓦(縄目)
石製品	黒曜石片、サヌカイト片

S-61

須恵器	坏、蓋3、甕
土師器	甕

S-62

須恵器	皿a、坏c、蓋3、壺×高坏
土師器	椀c2、器台
	煎熬土器
白磁	椀；IV(1)、IX(1)
	その他；水注×壺(1)、破片(1)
瓦質土器	擂鉢
国産陶器	急須(近代)
瓦類	破片(格子)、現代瓦
石製品	砥石?

S-63

須恵器	蓋3、破片
土師器	椀c、椀
白磁	椀；II-1(1)

S-64

須恵器	蓋3、坏c、甕
土師器	坏d、坏×皿、甕a、甕
石製品	滑石片

S-65 a

須恵器	破片
土師器	破片
弥生土器	破片

S-65 b

須恵器	坏c
土師器	坏、甕

S-65 c

須恵器	坏c×皿c
土師器	坏

S-65 d

土師器	皿a

S-65 h

須恵器	蓋c
土師器	破片

S-65 i

須恵器	坏
土師器	甕a、破片

S-66

須恵器	坏、蓋3
土師器	坏×皿、甕a
金属製品	鉱滓
石製品	碁石

S-67

須恵器	坏c、蓋3、壺
土師器	坏×皿、甕

S-68

須恵器	蓋3、坏
土師器	坏d、甕a
黒色土器A	椀
瓦類	破片(縄目)

S-69

須恵器	蓋、蓋3、坏
土師器	坏×皿、甕a
白磁	その他；破片(1)
瓦類	破片(縄目)
石製品	黒曜石片

S-70 a

須恵器	坏、蓋3、坏c、甕
土師器	小甕、甕b
	煎熬土器
黒色土器A	椀a(搬入)

S-70 b　柱痕

土師器	坏×皿
黒色土器A	椀a(搬入)
瓦類	破片?

S-70 b　掘方

須恵器	坏
土師器	甕、甕b
	煎熬土器
土製品	焼土塊

S-70 c

須恵器	坏c、甕
土師器	甕a、坏c

S-71

土師器	坏×皿

S-72

須恵器	壷
土師器	椀c
黒色土器A	破片
白磁	皿；破片(1)

S-73

須恵器	坏、大甕b、甕
土師器	小皿a、小皿、椀c、甕a、把手、破片
	焼塩壷
黒色土器A	椀c、破片
瓦類	破片(縄目、格子)
土製品	羽口、竈

S-74

須恵器	坏、蓋
土師器	坏a×皿a、椀c
越州窯系青磁	その他；把手(1)

S-76

須恵器	蓋c、坏c、皿a、甕
土師器	椀c、甕a

S-77

須恵器	坏c、甕
土師器	坏a、丸底坏、甕a
黒色土器A	椀
黒色土器B	椀
土製品	器種不明

S-78

須恵器	蓋3、甕
土師器	椀c、小皿
黒色土器B	破片
白磁	椀；XII×XIII(1)
	その他；破片(1)
緑釉陶器	破片

S-79

須恵器	蓋c、甕
土師器	小皿a
黒色土器A	椀c
白磁	皿；破片(1)
瓦類	破片(格子)

S-81

須恵器	坏c、小坏c、甕
土師器	甕a
瓦類	破片(縄目)

S-82

須恵器	蓋3、破片
土師器	坏d、坏c、甕
	焼塩壷
黒色土器B	破片
緑釉陶器	香炉

S-83

須恵器	坏、蓋
土師器	小皿a、甕
石製品	黒曜石片、安山岩片

S-84

須恵器	坏、蓋3
土師器	小皿a
瓦類	軒平瓦(縄目)

S-86

須恵器	坏c
土師器	椀c、甕a

S-87

須恵器	蓋3、坏、皿a、甕
土師器	甕a、坏×皿
石製品	サヌカイト片

S-88

須恵器	蓋3、甕
土師器	大皿a、甕a
肥前系陶磁器	染付

S-89

須恵器	蓋3、坏c、壷a、甕
土師器	甕a

S-91

須恵器	坏×皿、蓋3
土師器	大椀×大皿

S-92

須恵器	甕
土師器	坏a、坏c×皿c
黒色土器B	破片

S-93

須恵器	坏c、蓋3、壷、甕a
土師器	甕a、坏×皿
黒色土器B	椀
青白磁	破片(1)

S-94

須恵器	甕
土師器	坏c、椀c、坏a×皿a
瓦類	破片

S-96

土師器	椀c2、坏c、把手、甕
緑釉陶器	破片

S-97

須恵器	坏c、蓋3、大坏×甕
土師器	甕a
瓦類	破片
石製品	黒曜石片、碁石

S-98

須恵器	坏c、蓋3、高坏、大甕、甕
土師器	椀c、甕

S-98 黄色土

須恵器	坏c、皿a、蓋a3、蓋c、蓋3、坏、甕、大甕、甕
土師器	坏×皿、皿b、壺、甕a、甕、焼塩壺
石製品	碁石
土製品	焼土塊

S-98 茶灰色土

須恵器	坏c、蓋3、鉢a、大甕、甕
土師器	皿a、皿b、甕、甕a、甕、高坏
弥生土器	破片
石製品	安山岩片
土製品	焼土塊

S-99

須恵器	蓋3
土師器	小皿a、甕
瓦類	破片(縄目)

S-101

須恵器	坏、蓋3、甕
土師器	坏×皿、甕a

S-102

須恵器	坏、蓋3、甕
土師器	坏a×皿a、甕

S-103

須恵器	坏a、坏c、坏、蓋3、甕a、蓋3×高坏、甕
土師器	椀c1、椀c2、小皿a?、小皿a2、丸底坏a、坏、甕a 器台
黒色土器A	椀c、椀
黒色土器B	椀c
白磁	皿；XI?(1)
金属製品	鉄：器種不明
瓦類	丸瓦(縄目)、平瓦(格子)、破片
石製品	珪化木

S-104

須恵器	坏c、蓋c、甕
土師器	坏×皿、甕a
瓦類	破片
石製品	黒曜石片

S-106

須恵器	坏c、甕
土師器	甕a
土製品	焼土塊

S-107

須恵器	甕
土師器	甕
石製品	黒曜石片

S-108

須恵器	鉢a
土師器	坏c、坏、甕

S-109

須恵器	坏a、皿
土師器	甕a

S-111

須恵器	坏c、甕、甕、蓋3、坏
土師器	坏×皿、甕

S-112

須恵器	坏c、大甕
土師器	甕
石製品	黒曜石片

S-113

須恵器	坏a
土師器	坏a×小皿a、坏
石製品	サヌカイト片

S-114

須恵器	坏、蓋3
土師器	甕、破片

S-116

須恵器	蓋3、坏c、坏、蓋×皿、甕
土師器	坏c、蓋c、蓋3、大甕a、甕a

S-117

土師器	坏a×皿a、壺? 焼塩壺

S-118

須恵器	蓋a、蓋3、甕
土師器	坏d?、破片
瓦類	破片(縄目)、文字瓦(格子)

S-119

須恵器	破片
土師器	椀c、甕

S-121

須恵器	坏、甕
土師器	甕a、破片（弥生×縄文）

S-122

須恵器	坏c、甕
土師器	小皿a、坏a、甕
石製品	黒曜石片
縄文土器	破片

S-123

須恵器	坏c、皿a、蓋3、甕
土師器	甕a
石製品	碁石

S-124

須恵器	坏c
土師器	坏×皿、甕

S-126

須恵器	蓋
土師器	坏×皿、破片
	焼塩壷

S-127

須恵器	坏
土師器	坏、甕

S-128

須恵器	坏c、壷b
土師器	小皿a、丸底坏a、坏、甕a
黒色土器A	椀c
瓦類	破片(縄目)
石製品	碁石

S-129

須恵器	蓋3、坏
土師器	椀c2、丸底坏?
瓦類	破片

S-131

須恵器	坏、壷
土師器	椀c2、甕

S-132

須恵器	坏a、坏c、蓋3、小壷f、小壷、壷蓋、甕
土師器	小皿a2、小皿a、椀c、丸底坏a、丸底坏c、椀a、甕
	坏a×皿a、皿c?
黒色土器A	破片
黒色土器B	小皿a、破片
越州窯系青磁	椀；I(1)
白磁	椀；II(1)
	皿；II系(1)
金属製品	鉄釘、器種不明（銅製品？）
瓦類	軒丸瓦(老司)、平瓦(格子)
石製品	石鍋（滑石）

S-133

須恵器	破片
土師器	椀c、小皿c、甕
瓦類	破片(格子)

S-134

須恵器	壷、坏c、蓋3、甕
土師器	椀c、椀c2、坏a?、小皿a、破片
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀
瓦類	破片(格子)
土製品	竈

S-136

須恵器	坏、壷、甕
土師器	坏d、坏、小皿、椀c、甕

S-137

須恵器	坏、蓋c、甕
土師器	蓋c、蓋3、椀c、甕a

S-138

須恵器	蓋3、甕、壷
土師器	丸底坏a、小皿a、椀c、甕
瓦類	破片

S-139

須恵器	蓋3、甕
土師器	甕、坏×皿、小皿a
黒色土器A	椀c

S-141

須恵器	坏c、蓋4、蓋c、蓋3、甕、鉢?
土師器	甕a、坏c、丸底坏、把手
瓦類	破片(縄目)
石製品	碁石
土製品	焼土塊

S-142

須恵器	坏×皿、坏、蓋3、壷、高坏、甕
土師器	甕a、坏c×皿c、坏、甕
瓦類	破片

S-143

須恵器	坏
土師器	坏d、甕

S-144

須恵器	坏a、坏c
土師器	坏d、壷、甕、小皿
瓦類	破片

S-146

須恵器	坏c、坏、壷
土師器	甕
瓦類	破片(縄目)

S-147

須恵器	坏c
土師器	甕a、蓋3

S-148

土師器	甕a

S-149

須恵器	甕
土師器	甕a

S-151

須恵器	甕
土師器	坏×皿、破片

S-152

須恵器	坏c、蓋3、壷、甕、鉢(篠)
土師器	椀c、坏×皿、甕a、甕
瓦類	破片

S-153

須恵器	坏c、皿、甕
土師器	坏、甕a、甕
	焼塩壷
黒色土器A	椀c
石製品	石鍋（滑石）

S-154

須恵器	壷
土師器	丸底坏、椀c、甕a
金属製品	鉄釘

S-156

須恵器	蓋3
土師器	丸底坏a、坏c、甕a、甕
瓦類	破片(縄目)

S-157

須恵器	坏c、坏a、甕、高坏×蓋3、小壺
土師器	椀a、甑a、小皿a、器台
黒色土器A	椀
瓦類	軒平瓦

S-158

須恵器	蓋c3、蓋4、皿
土師器	坏c、甕a、破片

S-159

須恵器	坏c、蓋c3、甕
土師器	甕a
瓦類	破片

S-161

須恵器	坏×皿、坏c、甕、蓋3、壺
土師器	坏×皿、甕

S-162

須恵器	蓋3
土師器	小皿a、椀c、甕a、甕
瓦類	破片

S-163

須恵器	甕
土師器	小皿a、大椀c、椀c2、小椀c、甕b、椀a
金属製品	鉄釘
瓦類	平瓦(格子)
石製品	碁石、滑石製品
土製品	焼土塊

S-164

須恵器	小壺、甕
土師器	椀c、坏a、小皿a、甕b
越州窯系青磁	椀；I-2(1)
緑釉陶器	破片
灰釉陶器	段皿?
瓦類	破片(格子)

S-166

土師器	椀a、椀、小皿a、小椀c、小皿c、甑
黒色土器B	椀
石製品	サヌカイト片
土製品	竈

S-167

土師器	椀a、椀c1、椀c2、椀、坏a、中椀a、中椀c、小皿a 器台、甕
金属製品	鉄釘

S-168

須恵器	坏c
土師器	坏、甕

S-169

須恵器	坏a×皿a、蓋3、大甑、甑
土師器	坏c、丸底坏a、小皿a
黒色土器B	椀
灰釉陶器	破片
石製品	滑石製品

S-171

土師器	小皿a、椀c
瓦類	破片(格子)

S-172

須恵器	坏a、坏c、蓋c、甕
土師器	甕a

S-173

須恵器	蓋3、坏c、蓋c3、鉢b、小蓋a3、皿a、甕
土師器	椀c2、小皿a、坏、脚付坏、甕a、破片
黒色土器A	椀
黒色土器B	椀
石製品	黒曜石片

S-174

須恵器	坏c、蓋3、甕
土師器	坏a、坏c、甕a
瓦類	破片
石製品	黒曜石片

S-177

須恵器	坏c、甕
土師器	椀c、甕a、大鉢
瓦類	平瓦(格子)

S-178

須恵器	坏、坏c、蓋3、壺蓋、甕、壺?
土師器	丸底坏a、小皿a、小皿a2、小皿c、椀c2、甕
黒色土器A	椀c
灰釉陶器	破片
金属製品	鉄釘
石製品	滑石片

S-179

須恵器	甕、壺
土師器	椀、坏d、椀c、破片
石製品	碁石、黒曜石片

S-181

須恵器	蓋3、蓋c、坏a、甕
土師器	坏、甕a

S-182

須恵器	坏
土師器	甕
弥生土器	破片
石製品	黒曜石片

S-183

須恵器	坏c、蓋3、壺
土師器	坏×皿、甕a
瓦類	破片(縄目)

S-184

須恵器	坏c、蓋c、蓋3、甕b、甕、壷
土師器	小皿a、小皿c、椀a、巾椀a、椀c2、甕a、甕b、甕 高坏、器台、破片
黒色土器A	椀
黒色土器B	椀
越州窯系青磁	椀；I(3)、I-2ア(1)、I-2ウ(1)
緑釉陶器	椀、段皿?、破片
灰釉陶器	椀、皿、段皿
瓦類	破片(縄目、格子、二重格子)
その他	木炭

S-186

須恵器	蓋3、蓋c、坏c
土師器	坏×皿、椀c2、甕

S-188

須恵器	坏c、蓋3
土師器	坏、破片
黒色土器A	破片

S-189

須恵器	坏c、蓋c3、坏d、坏、甕
土師器	小皿a、坏、甕a 焼塩壷
黒色土器A	破片
瓦類	破片(縄目、格子、二重格子)

S-191

須恵器	坏c
土師器	坏×皿、甕

S-192

須恵器	坏c、甕
土師器	坏×皿、坏c、坏、甕a、甕
黒色土器A	破片
瓦類	破片
石製品	黒曜石片

S-193

須恵器	坏、蓋
土師器	丸底坏a
土製品	焼土塊

S-194

須恵器	坏c、壷、蓋c
土師器	坏c、甕a
石製品	黒曜石片

S-196

須恵器	坏c、甕、蓋3
土師器	甕
石製品	黒曜石片、碁石

S-197

須恵器	坏c、甕、坏a×皿a
土師器	甕a
石製品	黒曜石片

S-198

須恵器	坏c、甕、高坏、壷、鉢、鉢(蓋?)
土師器	小皿a、小皿a2、坏c、丸底坏a、椀c2、大椀c、壷 器台
黒色土器A	椀
黒色土器B	椀c2、椀c、破片
越州窯系青磁	椀；I②(S-198茶色土と接合)
高麗青磁	椀
白磁	椀；IV(2)、IV?(2)、V-1×VIII(1)
陶器	朝鮮系無釉陶器
瓦類	破片(格子)
石製品	焼石、石鍋
土製品	竈、羽口

S-198 茶色土

須恵器	坏c、坏、甕、小壷、壷、蓋c
土師器	小皿a、小皿a2、坏a、丸底坏a、椀c2、甕a
黒色土器B	椀c2
越州窯系青磁	椀；I(1)(S-198と接合)、II-2(1)、III
高麗青磁	椀III
灰釉陶器	壷?
瓦類	破片(格子)
石製品	滑石製品、石鍋
土製品	竈、羽口

S-199

須恵器	甕、蓋3
土師器	椀c
黒色土器A	椀
黒色土器B	椀
白磁	皿；XI-5(1)
緑釉陶器	破片
瓦類	破片
石製品	滑石製品

S-201

須恵器	坏c、壷、大甕、甕
土師器	小皿a、小皿c?、椀c2、坏a、椀a、丸椀a、甕
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀c
金属製品	鉄釘
瓦類	破片(縄目、格子)

S-202

須恵器	破片
土師器	甕(精製品)
黒色土器A	椀
黒色土器B	椀

S-203

須恵器	坏、高坏、椀×鉢、小壷、壷、甕
土師器	坏a、小皿a、甕
緑釉陶器	破片
石製品	サヌカイト片

S-204

須恵器	蓋c、坏
土師器	椀c

S-206

須恵器	坏、蓋3、甕
土師器	坏c、蓋3、甕
黒色土器A	椀
緑釉陶器	破片
瓦類	破片

S-207

須恵器	坏、坏c、甕
土師器	坏a、坏、蓋c、甕a
瓦類	破片

S-208

須恵器	坏c、壺
土師器	大甕a、甕
白磁	その他；破片(1)

S-209

須恵器	蓋
土師器	椀c、小皿a、坏a×小皿a、甕、破片

S-211

須恵器	坏
土師器	坏c×皿c、甕a
石製品	黒曜石片
土製品	羽口

S-212

須恵器	大甕
土師器	椀c2、椀a、小皿a、甕b
黒色土器B	破片
白磁	椀；XI-5(1)

S-213

須恵器	壺、甕、甕(転用硯)
土師器	把手、椀c
黒色土器B	破片

S-214

須恵器	坏×皿、甕
土師器	坏

S-216

須恵器	坏×皿、蓋3
土師器	坏×皿、甕

S-217

須恵器	坏×皿、小壺、蓋3
土師器	甕a
黒色土器B	破片
瓦類	破片(縄目)

S-218

土師器	小皿a(糸)、把手、椀c、甕a

S-219

須恵器	甕、高坏
土師器	坏a、坏c、丸底坏a、把手、甕a
黒色土器A	破片

S-221

須恵器	坏、皿a、甕、鉢(篠)
土師器	丸椀a、坏、甕
黒色土器A	椀
越州窯系青磁	椀；I(1)
	その他；水注×壺I(1)
白磁	椀；IV-1b(1)、XI-4(1)
国産陶器	こね鉢、片口(常滑?)
瓦類	丸瓦、破片(格子)
石製品	黒曜石片

S-222

須恵器	坏c、蓋3、壺?、円面硯、甕
土師器	焼塩壺
黒色土器A	椀c

S-223

須恵器	坏c、坏、甕
土師器	小皿a2、大皿c、 丸底坏a、甕a、甕
金属製品	鉱滓
瓦類	破片(格子)

S-224

須恵器	蓋3、壺、坏a×皿a、甕
土師器	椀c、丸底坏、甕
黒色土器B	破片
瓦類	破片

S-226

須恵器	坏c、鉢(篠)
土師器	丸底坏a、椀c2、小皿a、小皿a2

S-227

須恵器	坏c、坏
瓦類	破片

S-228

須恵器	坏×皿、蓋3
土師器	甕

S-229

須恵器	坏、壺b
土師器	甕a
石製品	サヌカイト片

S-231

須恵器	蓋3、坏c、甕
土師器	小坏a、椀a、小皿a、壺
黒色土器B	椀
瓦類	破片(縄目、格子)

S-232

須恵器	蓋3
土師器	坏、甕
瓦類	丸瓦

S-233

須恵器	坏c、蓋
土師器	坏、甕a

S-234

須恵器	坏、坏c、蓋3×高坏
土師器	皿×坏、小皿a、甕a
黒色土器A	破片
瓦類	破片(縄目)
石製品	黒曜石片

S-236

須恵器	坏、蓋3、甕
土師器	甕、破片
黒色土器A	椀c

S-237

須恵器	坏、坏c、蓋3、甕
土師器	坏a、椀c、甕a
瓦類	破片(格子)
石製品	サヌカイト片

S-238

須恵器	坏、壷、甕
土師器	皿a×坏a、坏×皿、甕a、甕

S-239

須恵器	坏、蓋3
土師器	皿b、甕

S-241

須恵器	坏c、坏、蓋3、高坏、甕
土師器	小皿a、皿、甕a、甕
黒色土器A	椀c
金属製品	鉄釘
瓦類	破片

S-242

須恵器	蓋3
土師器	椀c×皿c

S-241

須恵器	坏c、蓋3
土師器	坏×皿、甕
瓦類	破片(縄目)

S-244

須恵器	坏a×蓋a、甕
土師器	丸底坏a、小皿a

S-246

須恵器	蓋c、壷、鉢(篠)
土師器	坏d、椀a×丸底坏a、小皿a、把手、高坏、甕
黒色土器B	椀c
緑釉陶器	椀
瓦類	破片(格子)

S-247

須恵器	小坏c、蓋3、皿a、坏、甕、小甕
土師器	甕
	焼塩壷
石製品	黒曜石片

S-248

須恵器	甕
土師器	坏a、甕
金属製品	鉄釘

S-249

須恵器	蓋3、坏
土師器	坏×皿、甕a
金属製品	器種不明（鉄製品）
瓦類	破片

S-251

須恵器	蓋3、小坏c、壷蓋、甕
土師器	坏d、坏

S-252

須恵器	坏c、蓋3、坏×皿
土師器	坏×皿、甕a
土製品	焼土塊

S-253

須恵器	蓋3、坏
土師器	坏a、皿、甕a

S-254

須恵器	坏c、甕
土師器	小皿a、椀c2、甕a
瓦類	破片(縄目)、平瓦
石製品	黒曜石片

S-256

須恵器	蓋3、壷、甕
土師器	小皿、皿a、皿c、椀c2、椀á、坏c×皿c、甕a、甕
黒色土器A	椀
瓦類	平瓦(格子)

S-257

須恵器	坏c
土師器	甕
黒色土器A	椀
瓦類	破片(縄目)
石製品	軽石片

S-258

須恵器	蓋3、坏c、高坏、甕
土師器	甕a

S-259

須恵器	壷、甕
土師器	小皿a、小皿c、椀c、甕a、甕

S-261

須恵器	蓋c、蓋3、皿
土師器	小皿a、椀c、甕a
瓦類	破片(格子)
土製品	焼土塊

S-262

須恵器	蓋3、坏c、坏、甕、壷蓋
土師器	坏a、甕a
黒色土器A	破片
越州窯系青磁	椀：I(1)
瓦類	破片(縄目)

S-263

須恵器	蓋3、甕、坏×壷
土師器	坏、甕a
黒色土器A	坏
瓦類	破片

S-264

須恵器	坏a、蓋3、甕
土師器	蓋3、椀c、甕a

S-266

須恵器	坏c、甕、甕×瓶f、高坏
土師器	小皿a2、坏a、椀c、坏a×皿a、甕a、甕b
黒色土器B	椀
緑釉陶器	椀、破片
灰釉陶器	椀、破片
瓦類	破片

S-267

須恵器	坏c、蓋c3、坏a、甕
土師器	坏c、坏c×皿c、甕a
	煎熬土器

S-268

須恵器	坏a、坏
土師器	小皿a2、坏、甕a
越州窯系青磁	椀；I(1)
瓦類	破片

S-269

須恵器	坏c、甕
土師器	甕a
瓦類	破片
その他	炭化物

S-271

須恵器	坏c、坏、甕
土師器	坏、甕a

S-272

須恵器	壷蓋、坏c、蓋3、甕
土師器	甕a
瓦類	丸瓦
石製品	サヌカイト片

S-273

須恵器	坏c
白磁	椀；XI-4(1)
土師器	甕

S-274

須恵器	破片
土師器	甕a、坏a×皿a
黒色土器A	破片

S-276

須恵器	坏c、蓋3、甕
土師器	蓋3、椀c、甕a
瓦類	破片

S-277

須恵器	坏c、蓋c
土師器	坏、甕a
瓦類	破片(縄目)

S-278

須恵器	蓋4
土師器	甕a、坏c×皿c、蓋4
黒色土器A	破片

S-279

須恵器	蓋c、蓋3、坏c、甕
土師器	甕
金属製品	鉱滓(銅)
石製品	黒曜石片

S-281

須恵器	蓋3
土師器	甕a
	焼塩壷

S-282

須恵器	蓋3、坏
土師器	甕a

S-283

土師器	甕a

S-284

須恵器	坏c、蓋c、壷、甕、破片
土師器	大椀×大皿、坏d、甕a
瓦類	破片

S-286

須恵器	坏c、蓋3、甕
土師器	坏、甕a
	煎熬土器

S-287

須恵器	坏c、坏、甕
土師器	坏、甕

S-288

須恵器	坏a、坏
土師器	小皿a2、坏、甕a
龍泉窯系青磁	椀；I-5b(1)
石製品	黒曜石片、サヌカイト片

S-289

須恵器	坏c、蓋3、皿、甕
土師器	皿、甕、焼塩壺
石製品	黒曜石片

S-291

須恵器	坏
土師器	甕
石製品	黒曜石片、サヌカイト片

S-292

土師器	甕
土製品	焼土塊

S-293

須恵器	坏a、坏c、甕
土師器	甕
石製品	黒曜石片

S-294

須恵器	破片
土師器	皿a、破片

S-296

須恵器	坏a、坏、甕
土師器	破片

S-297

須恵器	坏×皿、甕
土師器	甕a
瓦類	破片(格子)
その他	炭化物

S-298

須恵器	坏c×皿c、蓋3、壺
土師器	甕a
青磁	破片(1)

S-299

須恵器	坏c、蓋3、蓋1、壺、甕
土師器	皿b、皿c、坏c、大皿c×大坏c、坏c×皿c、小甕、甕a
	焼塩壺、煎熬土器
瓦類	破片(縄目)
石製品	黒曜石片
土製品	焼土塊

S-301

須恵器	坏、蓋3、高坏、甕、蓋?
土師器	坏、甕a
瓦類	破片(格子)

S-302

須恵器	坏、蓋3、壺
土師器	椀c、甕
緑釉陶器	破片

S-303

須恵器	壺
土師器	甕
弥生土器	破片

S-304

須恵器	坏、皿a、甕
土師器	小皿a、甕

S-304

須恵器	蓋3
土師器	甕

S-301

須恵器	甕
土師器	坏×皿
瓦類	破片

茶褐色土

須恵器	坏a、坏c、小坏c、坏c(転用硯)、皿a、円面硯、蓋3 蓋c、鉢、壺a、壺蓋、壺、盤、高坏、高坏×蓋3 大甕、甕b、甕、鉢(篠)
土師器	小皿a、小皿a2、小皿c、坏a、坏d、丸底坏a、椀a 大皿、坏c×皿c、坏a×皿a、椀c2、蓋3、蓋c、托? 小甕、甕a、甕b、小壺、壺b、壺、器台、高坏
	焼塩壺、煎熬土器
黒色土器A	椀c、椀
黒色土器B	小椀c、椀、把手×脚、小皿c、小蓋
越州窯系青磁	椀：I-1 (1)、III (1)
	その他：水注×壺 I (3)
青磁	長沙×白磁(1)、水注 II 把手(1)
白磁	椀：IV (1)
	皿：大皿XI (1)、II (1)
緑釉陶器	段皿、皿
中国陶器	褐釉
陶器	朝鮮系無釉陶器
国産陶器	とっくり、火消し壷
肥前系陶磁器	染付
縄文土器	破片
金属製品	鉄釘、刀子
瓦類	軒丸瓦、平瓦(縄目、格子)、丸瓦(玉縁)、破片(縄目)
石製品	碁石、黒曜石、サヌカイト、石鍋、滑石、軽石、硯
土製品	焼土塊、竃
その他	炭化物

黄色土

須恵器	坏c、坏、小蓋3、蓋a、蓋c、蓋c3、蓋1、蓋c1、蓋3 小鉢、壺、高坏、大甕、甕
土師器	坏a、皿a、丸底坏、椀c2、坏×皿、坏c×皿c、蓋c 高坏、把手、甕a、甕、高台
弥生土器	破片
金属製品	器種不明（鉄製品）
瓦類	破片(縄目、格子)
石製品	碁石、黒曜石片、サヌカイト片、滑石片
土製品	焼土塊、羽口

Z

須恵器	坏c、蓋3、蓋c、甕
土師器	小皿a、坏c、坏×皿a、甕a
瓦類	破片(縄目)
石製品	黒曜石片、安山岩片

撹乱

須恵器	坏
土師器	破片

106次　土器の計測表

S-9

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	黒色土器B 椀c	R-001	1	14.1	5.0+	-		

S-10

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器　坏c	R-002	2	12.6	3.9	8.5	○	
2	蓋3	R-003	1	16.6	3.3			

S-15

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器　坏c	R-001	2	13.0	4.6	9.5	○	×
2	〃	R-002	1	12.5	3.4	7.1	○	?
3	黒色土器A 椀c	R-003	3	17.6	5.1+	-	○	

S-25

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　小皿a	R-006	1	9.8	0.9	7.7	-	○
2	〃	R-001	3	9.9	1.1	8.4	-	-
3	〃	R-002	5	10.2	0.8	7.2	○	○
4	丸底坏a	R-003	6	14.6	3.1	-		○
5	〃	R-007	7	15.2	3.6	-		
6	丸底坏c	R-004	9	14.2	3.8	-		

S-25　黒茶色土

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　小皿a	R-002	12	9.7	1.6	6.8	○	○
2	〃	R-003	13	10.1	1.2	8.2	-	○

S-30

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器　坏c	R-001	10	11.6	3.6	8.1	○	×
2	〃	R-002	11	11.8	3.6	9.0	○	×

S-30　茶黄色砂

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器　蓋c3	R-001	4	16.9	1.4			×

S-30　茶黄色土

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器　小坏c	R-003	9	10.2	3.7	7.8	○	-
2	坏c	R-001	12	12.4	3.5	9.6	○	-
3	〃	R-004	13	13.6	4.6	9.5	○	-
4	小蓋4	R-002	5	10.8	1.4		○	-
5	蓋c3	R-008	6	13.4	1.55		○	
6	〃	R-007	8	17.0	1.9			
7	蓋3	R-006	7	17.4	1.35			
8	土師器　大坏c	R-009	19	19.6	5.0	10.4	-	-
9	皿b	R-011	18	16.6	3.0+	-		
10	〃	R-010	17	17.5	2.5+	-		

S-40

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　坏a	R-001	1	11.6	2.7	6.35	-	○
2	〃	R-005	2	11.6	3.5	7.7	-	○
3	〃	R-004	3	11.8	3.3	7.5	-	○
4	〃	R-007	4	11.8	3.6	7.6	○	○
5	〃	R-008	5	12.0	3.5	7.6	○	○
6	〃	R-002	6	12.0	3.7	7.4	-	○
7	〃	R-003	9	12.2	3.2	6.9	○	○
8	〃	R-010	8	12.2	3.3	7.4	○	
9	〃	R-006	7	12.2	3.6	7.3	○	○
10	〃	R-009	10	12.5	3.6	7.3	○	○

S-45

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　小皿a	R-001	2	9.8	0.8	8.0	-	-
2	〃	R-002	4	10.4	0.8	8.4	-	-
3	丸底坏a	R-003	8	15.4	4.2	-	-	-

S-45　灰茶色土

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　小皿a	R-001	16	9.8	1.2	7.6	○	-
2	〃	R-002	15	11.0	0.9	7.4		
3	椀c	R-003	17	14.8	4.9	7.2		

S-50

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　小皿a	R-002	1	10.0	2.2	7.2	○	○
2	〃	R-003	2	10.05	1.8	7.1	-	○
3	〃	R-008	3	10.4	1.9	8.6		○?
4	〃	R-007	4	10.6	1.8	7.7	○	○
5	〃	R-011	6	10.6	1.8	7.9	×	○
6	〃	R-014	7	10.6	1.8	7.7	-	-
7	〃	R-009	5	10.6	1.9	7.0	-	○
8	〃	R-010	9	10.8	2.0	7.9	○	-
9	〃	R-004	8	10.8	2.1	7.4	-	-
10	〃	R-013	10	10.9	1.9	7.1	-	-
11	〃	R-006	11	11.0	1.5	8.3	×	×
12	〃	R-015	12	11.0	1.85	7.85	○	○
13	〃	R-012	13	11.2	2.0	7.2	-	-
14	小皿c	R-016	16	11.5	2.2	6.9	-	-
15	〃	R-017	18	12.4	2.2	7.2	○	-
16	〃	R-029	17	14.1	3.3	6.9	○	
17	〃	R-020	19	12.4	3.4	-	-	○
18	〃	R-019	20	12.4	4.2	-	-	○
19	中椀a	R-018	21	12.8	3.9	-	○	-
20	〃	R-021	22	12.8	3.9	-	-	
21	〃	R-024	23	13.0	3.6	-	-	
22	〃	R-022	24	13.4	4.2	-	-	
23	〃	R-023	25	14.2	4.4	-	-	
24	椀a	R-026	26	15.2	4.5	-	○	○
25	椀c2	R-027	29	14.7	6.05	7.8	-	
26	〃	R-028	28	15.0	6.0	8.0	-	
27	〃	R-005	30	15.8	6.2	8.6	-	-
28	黒色土器B 椀	R-025	31	14.8	3.5+	-	-	-

S-55

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	土師器　小皿a	R-011	11	10.0	1.9	7.1	-	×
2	〃	R-010	13	10.1	1.7	6.3	-	○
3	〃	R-012	9	10.1	2.1	6.2	-	○
4	〃	R-013	10	10.1	2.2	6.1	-	-
5	〃	R-009	17	10.4	1.8	7.8	-	×
6	〃	R-016	14	10.4	2.05	7.1	-	○
7	〃	R-017	15	10.5	1.8	7.5	-	×
8	〃	R-014	16	10.8	2.3	7.0	-	×
9	〃	R-008	12	11.0	2.1	6.7	○	○
10	丸底坏a	R-005	24	15.0	4.9	-	-	-
11	〃	R-006	25	15.2	4.75	-	-	×
12	中椀a	R-003	20	12.6	4.1	6.7	-	-
13	〃	R-018	19	12.9	4.0	8.8	-	○
14	〃	R-002	21	13.0	3.8	6.1	-	×
15	〃	R-004	22	13.4	4.1	6.2	○	○?
16	〃	R-001	23	13.6	4.6	7.1	-	○
17	椀c	R-007	26	10.2	6.3	8.4	-	○
18	黒色土器B 小皿a	R-015	18	10.4	2.0	7.5	○	-

S-56

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	土師器　小皿a	R-002	6	10.2	0.8	7.3		○

S-60　黒茶色粘土

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	須恵器　蓋3	R-005	7	15.45	2.3			
2	土師器　椀c	R-002	12	14.8	6.25	8.6	×	
3	〃	R-001	13	15.2	6.1	8.3	×	
4	〃	R-007	14	17.45	6.75	10.2		
5	皿a	R-008	15	18.1	1.7	14.5		

S-60　灰茶色砂

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	土師器　椀c	R-002	4	14.9	6.1	8.2		
2	皿a	R-001	3	14.0	1.4	10.65	○	

S-62

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	須恵器　皿a	R-001	27	14.6	2.9	12.2		

S-70a

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	黒色土器A　椀	R-001	4	13.0	5.9	-		

S-70c

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	須恵器　坏c	R-001	3	-	1.6+	8.4	○	

S-73

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	土師器　小皿a	R-001	2	10.0	1.0	8.1		
2	大坏a	R-002	1	16.0	5.5	9.6		

S-87

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	須恵器　皿a	R-002	5	17.2	2.4	14.0		
2	蓋3	R-001	4	14.9	1.8		○	

S-98　黄色土

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	須恵器　坏c	R-002	7	10.8	4.0	7.0	○	
2	〃	R-001	9	13.0	3.9	8.8	○	○?
3	〃	R-007	8	13.4	3.9	9.6		
4	〃	R-005	10	14.8	4.4	8.8	○	
5	皿a	R-003	11	14.0	2.9	11.2		
6	小蓋3	R-006	5	11.6	1.4		○	
7	蓋3	R-004	6	17.2	2.0+		○	
8	土師器　皿b	R-008	12	18.6	3.3+	-		

S-98　茶灰色土

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	須恵器　坏c	R-001	3	12.6	3.0	8.4	○	
2	〃	R-002	4	13.0	3.6	9.5	○	
3	蓋3	R-003	1	12.4	1.3		○	
4	〃	R-004	2	20.9	1.4		○	

S-103

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	土師器　椀c2	R-001	9	-	3.5+	7.4	○	

S-122

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	土師器　小皿a	R-001	10	9.9	1.1	7.8		○

S-128

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	土師器　小皿a	R-004	11	9.6	0.9	6.9	○	○
2	〃	R-003	12	10.0	1.0	8.5		○
3	〃	R-005	13	10.0	1.0	8.2		
4	〃	R-001	15	10.2	1.2	7.9		○
5	〃	R-002	14	10.2	1.3	7.8	○	

S-132

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	土師器 小皿a	R-003	30	9.3	1.4	7.2		
2	〃	R-002	24	9.6	0.8	7.7	○	○
3	〃	R-004	25	9.8	1.3	6.7		○
4	〃	R-008	21	9.8	1.3	7.1	○	○
5	〃	R-009	18	9.8	1.4	7.7	○	○
6	〃	R-006	17	9.9	0.9	8.0	○	
7	〃	R-010	22	10.0	1.5	7.7	○	○
8	〃	R-005	26	10.1	1.0	7.5	○	
9	〃	R-007	19	10.8	1.3	8.3		○
10	小皿a2	R-012	27	10.6	1.0	7.3		
11	小皿a2?	R-011	23	11.0	0.85	6.3		
12	丸底坏a	R-016	31	15.4	4.0	-		
13	〃	R-018	32	16.0	3.9	-		

14	丸底坏c	R-017	33	15.6	5.0	6.6		
15	中椀a	R-015	30	12.4	4.4＋	-		
16	皿c	R-014	29	-	2.2＋	7.6		
17	黒色土器B 小皿a	R-013	28	11.4	1.5	-		

S-134

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 小皿a	R-001	28	10.4	2.1	7.3	○	○

S-138

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 小皿a	R-002	29	10.0	1.1	8.5		

S-159

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器 坏c	R-001	38	15.4	4.1	10.6	○	
2	蓋c3	R-002	37	14.5	1.9+		○	

S-163

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 小皿a	R-006	7	10.4	1.8	6.6	○	○
2	〃	R-004	9	10.5	2.1	5.9		○
3	〃	R-014	11	10.6	1.7	7.4	○	○
4	〃	R-005	14	11.0	1.9	6.4		
5	丸底坏a	R-009	8	10.5	1.7	-		
6	〃	R-011	10	10.5	1.8	-	○	×
7	〃	R-008	12	10.6	1.8	-		○
8	〃	R-010	13	10.8	2.2	-		○
9	〃	R-007	15	14.0	3.55	-		
10	小椀c	R-013	16	9.2	3.3＋	-	○	
11	椀c	R-002	18	12.0	4.65	5.6	○	○
12	〃	R-001	19	14.4	5.9	7.3		
13	〃	R-003	17	14.6	5.0＋	-		○
14	〃	R-012	20	-	4.1＋	7.2	○	

S-164

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 小皿a	R-003	39	10.0	1.75	7.2		

S-166

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 小皿a	R-001	21	10.5	2.0	7.6	○	○?
2	小皿c	R-003	22	12.2	1.7+	-		
3	小椀c	R-002	23	11.0	3.5	7.0	○	

S-167

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 小皿a	R-002	24	10.2	1.9	6.9		○
2	椀a	R-001	25	10.4	2.0	7.4	○	○
3	〃	R-003	26	12.2	4.1	-	○	○
4	〃	R-004	27	13.0	4.6	-		○
5	椀c	R-005	29	12.2	4.0+	-		○
6	〃	R-006	30	14.2	6.1	8.0	○	
7	〃	R-007	28	-	3.9+	6.6	○	○

S-169

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 小皿a	R-001	33	9.6	1.4	8.2	○	○
2	〃	R-003	34	10.1	1.1	7.4		
3	〃	R-002	35	10.2	1.1	7.6	○	○
4	丸底坏a	R-004	36	12.0	2.9	-		
5	〃	R-005	37	15.1	3.3	-		

S-173

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器 蓋a3	R-001	38	11.2	1.6		○	
2	蓋c3	R-002	39	15.2	2.2		○	
3	土師器 脚付坏	R-003	41	-	2.2+	7.4		
4	椀c2	R-004	40	-	3.1+	8.2		○

S-178

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 小皿a	R-001	42	10.5	1.3	7.6	○	○
2	小皿a2	R-002	43	10.8	0.7	7.8	○	○
3	小皿c	R-003	44	11.6	1.9	6.6		○
4	丸底坏a	R-004	46	15.5	3.5	-		
5	〃	R-005	45	16.4	3.4	-		○
6	椀c2	R-007	47	15.5	5.3	7.3		
7	〃	R-006	48	16.1	6.2	7.6		

S-184

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 小皿a	R-010	51	10.1	1.9	7.2		
2	〃	R-012	53	10.4	1.3	8.3	○	○
3	〃	R-004	52	10.4	1.6	7.3	○	○
4	〃	R-005	54	10.4	1.7	7.8	○	○
5	〃	R-006	55	10.5	2.0	7.5	○	○
6	〃	R-008	57	10.8	2.1	7.8		○
7	〃	R-007	56	10.9	1.7	8.4	○	○
8	小皿c	R-014	61	11.9	2.6	7.2		
9	坏a	R-013	58	10.7	2.2	7.8		○
10	〃	R-011	59	11.0	2.2	8.0		
11	〃	R-009	60	11.0	2.5	7.0		○
12	中椀a	R-016	62	12.0	3.5	-		○
13	〃	R-015	63	12.7	4.1	-		○

S-189

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器 坏c	R-002	43	12.6	4.5	8.8	○	
2	蓋c3	R-001	42	13.6	1.0		○	

S-198

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 小皿a	R-005	1	9.6	1.2	7.9		
2	〃	R-008	2	9.8	0.9	7.0	○	
3	〃	R-003	4	9.8	1.0	7.1		
4	〃	R-006	3	9.8	1.2	7.5		○
5	〃	R-007	5	10.0	1.2	8.0	○	○
6	〃	R-002	6	10.2	1.1	8.5	○	○

7	〃	R-001	7	10.2	1.2	8.1		○
8	〃	R-004	8	10.4	1.2	7.9	○	○
9	〃	R-009	9	10.6	0.9	7.6		○
10	〃	a-6		9.8	0.8	7.4		
11	〃	a-3		10.4	1.0	7.8	○	
12	〃	a-4		10.4	1.0	7.8		
13	〃	a-5		10.6	1.0	8.3	○	
14	〃	a-2		10.6	1.2	8.2		
15	〃	a-1		10.8	1.2	8.8		
16	丸底坏a	R-010	10	14.4	3.1	-		
17	〃	R-011	11	15.2	3.4	-		
18	〃	R-012	12	16.0	3.6	-		
19	椀c2	R-014	13	-	4.0+	6.6		
20	黒色土器B 椀c	R-013	14	15.6	3.4	-		

S-198　茶色土

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 小皿a	R-018	16	9.6	1.0	7.2	○	
2	〃	R-015	18	9.6	1.1	7.0		○
3	〃	R-009	20	10.0	1.1	7.6	○	○
4	〃	R-011	7	10.0	1.1	7.8		○
5	〃	R-017	19	10.0	1.3	7.6	○	○?
6	〃	R-014	21	10.2	1.2	7.3	○	○
7	〃	R-013	22	10.4	1.1	7.4		○
8	〃	R-012	23	10.5	1.0	8.0		○
9	〃	R-010	25	10.6	1.1	8.0	○	○
10	〃	R-016	24	10.8	1.0	8.2		○
11	〃	a -5		9.4	0.8	7.2	○	
12	〃	a -3		9.6	1.2	7.3		
13	〃	a -4		10.0	1.0	8.0	○	○
14	〃	a -8		10.0	1.1	7.2	○	○
15	〃	a -1		10.2	0.8	8.0	○	○
16	〃	a -7		10.4	1.0	8.1	○	
17	〃	a -6		10.4	1.1	8.1		○
18	〃	a -2		10.8	1.2	8.8	○	○
19	〃	a -9		10.0	0.8	7.3	○	
20	〃	a -10		10.0	1.0	6.8	○	
21	小皿a2	R-019	27	10.2	0.6	6.3	○	○
22	〃	R-020	26	10.4	1.1	7.8	○	
23	〃	R-021	28	11.4	1.0	7.9	○	○
24	坏a	R-007	29	10.6	2.0	8.1		○
25	〃	R-008	30	11.6	2.2	7.5		○
26	丸底坏a	R-005	31	13.8	3.4	-		
27	〃	R-006	32	15.6	3.1	-		
28	〃	R-004	33	16.0	3.4	-		
29	〃	R-003	34	16.4	3.8	-		
30	丸底坏c×椀c	R-022	35	14.9	5.1	7.0		○
31	黒色土器B 椀c	R-023	36	16.4	5.8	6.2		○

S-201

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 小皿c?	R-001	15	12.1	1.1	7.3		
2	坏a	R-002	14	10.8	2.3	7.6		○
3	中椀a	R-003		12.4	3.2	-		○
4	椀c2	R-004	27	14.4	5.7	8.3		

S-212

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　小皿a	R-004	2	10.8	1.9	7.2		
2	中椀a	R-001	3	13.0	3.5+	-		
3	椀a	R-002	4	16.4	4.2	12.0		○
4	椀c2	R-003	5	-	3.5+	7.7		

S-226

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　小皿a	R-001	5	10.0	1.6	8.7		
2	小皿a2	R-002	6	10.2	0.8	7.9		
3	丸底坏a	R-003	7	12.4	2.6	9.7		
4	丸底坏c×椀c	R-004	8	14.2	3.9+	-		○

S-246

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 小皿a	R-002	11	10.6	1.8	7.5		

S-247

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器　皿a	R-001	14	18.8	2.4	16.5	○	

S-252

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器　坏c	R-001	15	13.0	3.3	9.6	○	

S-254

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　小皿a	R-001	16	9.8	1.4	7.5		
2	椀c	R-002	17	-	3.4+	8.2		

S-256

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 小皿c	R-001	20	11.1	2.2	7.0		
2	〃	R-002	19	11.2	2.1	6.4		
3	椀a	R-004	21	13.6	3.0+	-		
4	椀c	R-003	22	-	2.4+	8.2		

S-259

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　小皿c	R-001	24	11.2	1.9	6.6		×

S-262

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　坏a	R-001	26	11.7	3.9	5.9	○	

S-267

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器　蓋c3	R-002	45	15.1	2.9			

S-268

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　小皿a2	R-001	28	12.0	0.9	8.6	○	○

S-273

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器　坏c	R-001	29	14.1	5.45	9.4	○	×

S-284

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　坏d	R-001	31	13.9	3.7	6.8		

S-289

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器　蓋3	R-001	33	13.0	1.6+			

S-293

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器　坏c	R-001	34	-	2.2+	11.1		

S-299

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器　坏c	R-001	36	14.2	5.7	10.25	○	○
2	蓋1	R-003	35	15.0	2.2+			
3	土師器　皿b	R-005	37	16.4	2.7+	-		
4	皿	R-004	38	18.6	2.2+	-		
5	皿c	R-002	39	21.0	2.7	15.0		

茶褐色土

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器　坏c	R-009	2	13.4	3.8	8.2		
2	皿a	R-043	3	18.0	1.8	13.8	○	
3	土師器　小皿a	R-017	4	9.2	1.1	6.8	?	
4	〃	R-015	5	9.4	1.1	6.8	○	○
5	〃	R-034	6	9.5	1.0	7.2	○	
6	〃	R-039	7	9.6	1.0	7.4	○	○
7	〃	R-038	8	9.6	1.2	7.0	○	
8	〃	R-033	9	9.7	0.9	7.3		
9	〃	R-041	10	9.7	1.2	7.0		
10	〃	R-014	12	10.0	0.9	7.8		
11	〃	R-024	11	10.0	0.9	8.0	?	
12	〃	R-062	13	10.0	1.2	6.6		
13	〃	R-020	14	10.0	1.3	8.5	?	○
14	〃	R-035	15	10.1	1.1	7.6		
15	〃	R-037	16	10.2	0.8	8.0	?	?
16	〃	R-013	17	10.2	0.9	7.5	○	
17	〃	R-023	18	10.2	0.9	7.7	?	
18	〃	R-016	21	10.2	1.1	7.8	○	○
19	〃	R-026	20	10.2	1.1	8.0	?	○
20	〃	R-031	19	10.2	1.1	7.8	○	○
21	〃	R-032	22	10.2	1.1	7.4	○	○
22	〃	R-029	23	10.2	1.3	6.9	?	○?
23	〃	R-027	24	10.2	1.4	7.9	○?	○
24	〃	R-028	25	10.3	1.3	8.1	?	○
25	〃	R-025	27	10.4	1.0	7.9	?	×
26	〃	R-018	26	10.4	2.0	7.8	?	○
27	〃	R-040	28	10.6	1.2	8.5	○	
28	〃	R-036	30	10.8	0.9	8.0	○	○
29	〃	R-019	29	10.8	1.0	8.3	?	○
30	〃	R-022	31	10.8	1.2	8.4	○	○
31	小皿a2	R-030	33	10.2	1.1	8.4		○
32	〃	R-011	34	10.6	1.1	7.4	○	○
33	〃	R-012	35	11.0	1.0	7.6		○
34	小皿c	R-042	36	11.4	2.2	8.2		
35	坏a×小皿a	R-021	32	11.7	1.7	9.1	?	○
36	丸底坏a	R-051	37	12.4	3.4	-		○
37	〃	R-055	40	13.3	3.1	-		○
38	〃	R-057	38	13.6	2.8	-		
39	〃	R-047	39	13.8	3.0	-		○
40	〃	R-050	42	13.8	3.1	-		
41	〃	R-049	44	14.2	4.0	-		
42	〃	R-045	45	14.6	3.5+	-		
43	〃	R-054	47	15.0	4.0	-		
44	〃	R-046	46	15.2	3.1	-		
45	〃	R-052	48	15.6	3.1	-		
46	〃	R-048	50	15.6	4.1	-		
47	〃	R-053	49	15.8	3.5	-		
48	〃	R-056	51	15.8	3.9	-		
49	椀a	R-044	41	12.6	4.0	9.4		×
50	椀c	R-058	52	14.6	5.3	-		
51	黒色土器B 小皿c	R-010	56	10.9	2.4	8.0		

黄色土

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	須恵器　蓋c1	R-004	1	13.9	2.3		○	×
2	蓋c3	R-001	2	14.6	2.4		○	×
3	蓋3	R-003	3	12.4	-		○	×
4	〃	R-002	4	12.5	-		○	×

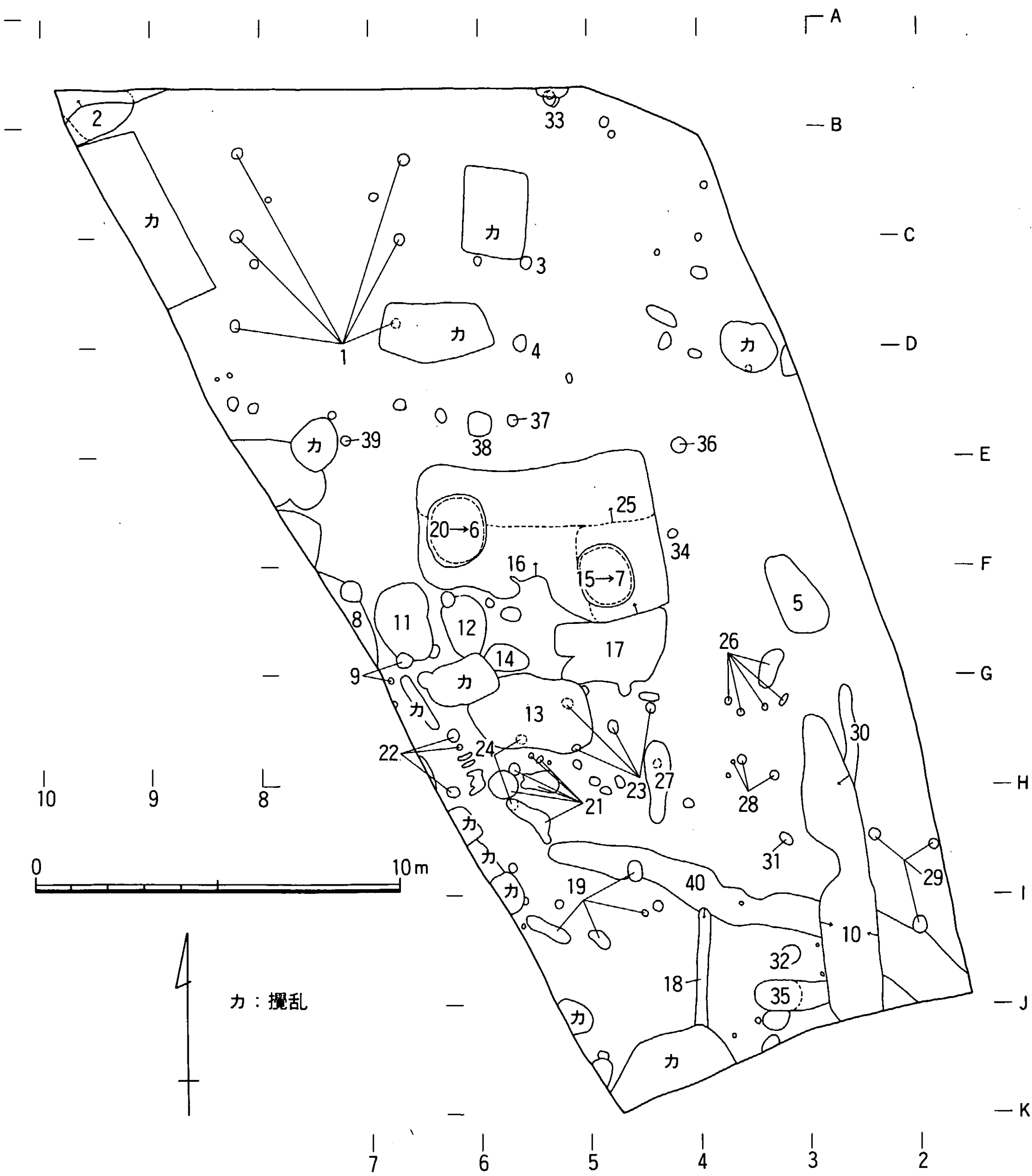


Fig.138　条118次調査遺構略測図

条118次調査 遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種　別		地区
1	118SB001	掘立柱建物		C8他
2	118SX002	整地層		B9
3	118SB045	掘立柱建物　（調査後、掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）		D5
4	118SB045	掘立柱建物　（調査後、掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）		D5
5	118SK005	土壙		G3
6	118SX006	凹み		F6
7	118SX007	凹み		F4
8	118SX008	凹み		G7
9	118SX009	ピット		G6
10	118SD010	溝（道路側溝）		2ライン
11	118SX011	凹み		G6
12	118SX012	凹み		G6
13	118SX013	凹み		H5
14	118SX014	凹み		G5
15	118SE015	井戸		G4
16	118SX016	凹み		F5他
17	118SX017	凹み		G4
18	118SD018	溝（道路側溝）		J4
19	118SX019	ピット		J5
20	118SE020	井戸		F6
21	118SX021	ピット		H5
22	118SX022	ピット		H6
23	118SX023	ピット		H4
24	118SX024	ピット		H5
25	118SK025	土壙		F5
26	118SX026	ピット		H3
27	118SX027	凹み		H4
28	118SX028	ピット		H3
29	118SX029	ピット		I2
30	118SD030	溝（道路側溝）		H2
31	118SX031	ピット		I3
32	118SX032	ピット		J3
33	118SX033	ピット		B5
34	118SX034	ピット		F4
35	118SX035	凹み		J3
36	118SB045	掘立柱建物　（調査後、掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）		E4
37	118SB045	掘立柱建物　（調査後、掘立柱建物の柱穴を含むことが判明）		E5
38	118SX038	土壙		E6
39	118SX039	ピット		E7
40	118SD040	自然流路	縄文	I4
41				
42				
43				
44				
45	118SB045	掘立柱建物		D5他

118次遺物一覧表

S-1

須恵器	壷a
土師器	破片
瓦類	破片

S-2 赤褐色土

須恵器	蓋3、蓋c
土師器	高坏、甕

S-2 灰茶色土

須恵器	坏c、蓋c3、蓋3、高坏、壷b、甕
土師器	皿b、坏c、甕
瓦類	破片(縄目)
石製品	黒曜石片

S-3

須恵器	破片
土師器	甕、碗a
黒色土器A	破片

S-4

須恵器	破片
土師器	坏、甕

S-4 ウラゴメ

土師器	坏、甕

S-4 柱痕

土師器	甕、椀c2
黒色土器A	破片

S-5

須恵器	甕、坏c×皿c、坏c
土師器	丸底坏a、椀c、坏a、破片
瓦器	椀(楠葉?)
黒色土器A	破片
黒色土器B	椀
越州窯系青磁	椀;I(1)
瓦類	破片(格子)
金属製品	釘?、鉱滓?
土製品	瓦玉?

S-6

須恵器	甕、破片
土師器	丸底坏a、椀c2、甕、脚付皿×坏
白磁	椀;IV(2)、V(1)、II(2)、V-3(1)、破片(2)
	その他;破片
瓦類	破片(縄目)

S-7

須恵器	甕、蓋c、蓋b、坏
土師器	小皿a、丸底坏a
白磁	椀;II-1(1)、II(3)、破片(2)
	皿;VI×VII(1)

S-8

須恵器	甕
土師器	丸底坏a、壷片、甕、椀c
越州窯系青磁	椀;I(1)
陶器	朝鮮系無釉陶器(1)
金属製品	鉱滓

S-9

須恵器	破片
土師器	坏

S-10

須恵器	鉢b、小壷、蓋3、坏c、甕、破片
土師器	脚付鍋、丸底坏a、小皿a、椀c2、器台、坏a、小壷甕、坏c
	焼塩壷
瓦器	椀(楠葉)
黒色土器A	椀c2
黒色土器B	椀c2、小皿c
越州窯系青磁	その他;破片I類(1)
白磁	椀;IV(1)
陶器	朝鮮系無釉陶器(1)
瓦類	平瓦(格子、縄目)
石製品	滑石片、サヌカイト片
土製品	塊

S-10 最上層

須恵器	蓋3、坏c、甕
土師器	丸底坏a、小皿a、椀c2、甕、破片
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀c、椀
越州窯系青磁	椀;I(1)
	その他;破片(1)
白磁	椀;III、IV(1)
緑釉陶器	破片
瓦類	平瓦(格子)
金属製品	器種不明(鉄製品)、鉄釘
木製品	炭化物
石製品	石鍋(滑石製)

S-10 上層

須恵器	蓋3、坏c、甕、高坏、破片
土師器	丸底坏a、小皿a、坏a、鍋、竈?、皿a、椀c 小壷、甕、小皿a2、小坏a
黒色土器A	椀c、破片
黒色土器B	椀c2、小皿a、椀
越州窯系青磁	椀;I-2b(1)
	その他;鉢I(1)
長沙窯系青磁	破片(1)
白磁	椀;IV(2)、XI?(2)
灰釉陶器	破片
陶器	無釉陶器(水注)(1)、朝鮮系無釉陶器
瓦類	破片(格子、縄目)
金属製品	鉄釘
石製品	滑石片、黒曜石片
土製品	塊

S-10 下層

須恵器	甕、蓋3、坏c、壷(灰釉?)
土師器	丸底坏a、甕、器台、小皿a、坏a、椀c2、丸底坏c 小壷、鍋、破片
黒色土器B	椀c、甕?
越州窯系青磁	椀;II(1)
白磁	椀;IV(2)
	皿;XI-5?(1)
灰釉陶器	壷
陶器	朝鮮系無釉陶器
瓦類	平瓦(格子、縄目)
石製品	砥石、黒曜石片、叩石、軽石片

S-11

土師器	坏、丸底坏片
黒色土器B	破片
白磁	その他;破片(1)
瓦類	平瓦
金属製品	鉄釘

S-12

須恵器	坏a、高坏
土師器	小皿a、丸底坏a
黒色土器B	椀c
白磁	椀；XI ?(1)
緑釉陶器	破片
瓦類	破片（格子）

S-13

須恵器	坏c、甕
土師器	椀c2、甕、坏a
白磁	椀；V(1)、破片(1)
緑釉陶器	破片(1)
瓦類	破片

S-14

須恵器	壷
土師器	椀c、破片
黒色土器A	破片
石製品	滑石片

S-15 青灰色土

須恵器	坏c、蓋3、甕、蓋c、高坏？
土師器	甕？、丸底坏a、小皿a、椀c2、鉢？、坏a（墨書） 壷
	焼塩壷
黒色土器A	椀c2
黒色土器B	椀c2
越州窯系青磁	椀；I -2(1)、II-2 a(1)
	その他；香炉脚 I×III(1)
白磁	椀；IV(2)
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦（格子）

S-15 暗灰色土

須恵器	甕、壷e、壷d×f、蓋3、壷口縁(瓦質)、皿a、壷b 坏c
土師器	甕、甑、丸底坏a×c、椀c、小皿a、丸底坏a、坏d 坩(小壺)、器台
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	椀；I (1)、II ？(1)
	越×高麗(1)
白磁	椀；II (2)、IV(1)、V-1(1)、破片(1)
	皿；VII-1 a(1)
	その他；壷(1)
緑釉陶器	破片
瓦類	破片(縄目、格子)
金属製品	鉄釘
石製品	滑石片
土製品	瓦玉？

S-15 曲物内

土師器	椀c、小皿a
瓦類	破片

S-16

須恵器	坏c、蓋3、壷d、甕、壷f、鉢(篠)
土師器	丸底坏a、小皿a、椀c、甕、壷片(高台付)、破片
瓦器	破片(楠葉)
黒色土器A	破片
越州窯系青磁	椀；III(1)
	その他；水注×壷I(1)、越×高麗(1)
白磁	椀；II(6)、II-1(2)、II-5(1)、V(1)、V-1(2)、V-1×2(3) V-2(1)、V-2 ? (1)、V-3(1)、IV(6)、IV×XI(1) XI(1)、I×XI(2)、XIII(1)、西村タイプ(1)、破片(1)
	皿；V-2(2)、V～VII(3)、IV～VI(1)、III×II-1a(1)
	その他；水注・注口(1)、水注(1)、破片(19)
青白磁	破片(1)
緑釉陶器	段皿、破片
陶器	中国陶器？
瓦類	平瓦（格子）
金属器	刀子、鉄釘
石製品	滑石片

S-17

須恵器	蓋、甕
土師器	椀c、丸底坏a
越州窯系青磁	椀；I (1)
白磁	椀；IV(1)、破片(1)
緑釉陶器	破片
瓦類	破片

S-18

須恵器	甕
土師器	甕
瓦類	破片

S-19

須恵器	坏c、甕
土師器	坏a、甕
黒色土器A	破片
黒色土器B	破片
瓦類	破片

S-20 暗灰色土

須恵器	蓋3、坏c、甕、蓋c
土師器	器台、丸底坏a、高坏脚、椀c2、皿a、小皿a、甕 坏a、破片
黒色土器A	椀
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	椀；II(2)
	その他；水注×壷(1)
白磁	椀；IV(1)
	皿；II-1 a(1)
緑釉陶器	破片(長門？)、段皿、破片
陶器	壷
瓦類	平瓦（格子）
石製品	石鍋(滑石製)

S-20 枠内

須恵器	小坏c、蓋、甕
土師器	丸底坏a、椀c、椀
黒色土器B	破片
緑釉陶器	破片

S-20 曲物内

土師器	小皿a、丸底坏a
瓦類	破片

S-21

須恵器	甕
土師器	坏
灰釉陶器	破片

S-22

須恵器	坏
土師器	甕
瓦類	破片(縄目)

S-23

須恵器	坏、坏a
土師器	坏a、坏c、皿
白磁	その他；破片
石製品	石鍋(滑石製)

S-24

須恵器	甕
土師器	椀c2
黒色土器A	椀
黒色土器B	破片
石製品	石英片

S-25

須恵器	坏c、壷b、甕、こね鉢、壷a、鉢b、蓋3
土師器	丸底坏a、甕、小皿a、椀c、坏d
黒色土器A	破片
黒色土器B	破片
越州窯系青磁	椀；II（輪高台）
白磁	椀；II (7)、II-1 (1)、II-5 (1)、I (1)、I×XI-1 (1) IV(5)、V-1×2(2)、V-2(1)、V-2b(1)、破片(3)
	皿；XI(1)、II×III-1a
	その他；小壷 II (1)、破片(9)、破片?(1)
緑釉陶器	破片
須恵質土器	鉢(東播)
陶器	朝鮮系無釉陶器
中国陶器	四耳壷 III
金属製品	鉄釘
瓦類	破片（縄目、格子）

S-26

須恵器	蓋3、坏
土師器	丸底坏a、坏c

S-27

須恵器	破片
土師器	坏c
瓦器	破片

S-28

須恵器	蓋3
土師器	甕、坏
瓦類	破片（格子）

S-29

須恵器	破片
土師器	破片

S-30

須恵器	破片
土師器	椀c、坏d、甕、破片
	焼塩壷

S-31

土師器	破片
瓦類	破片

S-32

須恵器	破片
土師器	椀c、小皿a、甕

S-33

須恵器	破片
土師器	甕、破片

S-34

土師器	坏

S-35

土師器	甕、破片

S-36　ウラゴメ

須恵器	蓋、坏
土師器	坏、坏c

S-36　柱痕

須恵器	坏c
土師器	坏、椀c、甕

S-37　ウラゴメ

須恵器	破片
土師器	坏、甕

S-37　柱痕

須恵器	蓋3、甕
土師器	甕b、椀c2、皿a×坏a
黒色土器A	破片

S-38

須恵器	蓋1、皿、坏
土師器	甕

S-39　柱痕

土師器	破片、蓋？、甕
黒色土器A	破片

S-40

土師器	皿、破片
土製品	器種不明
石製品	サヌカイト片

攪乱

須恵器	壷蓋、坏a、蓋3、甕
土師器	丸底坏a

暗茶褐色土

須恵器	甕
土師器	坏c、丸底坏a、椀c、鍋
白磁	椀；IV、V
瓦類	破片

茶褐色土

須恵器	蓋3、坏c、壷×甕、坏d
土師器	丸底坏a、小皿a、甕、椀c、蓋c、鍋
瓦器	椀c（楠葉か？）
黒色土器A	椀c
黒色土器B	鉢×皿a、椀c
越州窯系青磁	椀；I(6)、大椀I？(1)
	その他；耳壷I(1)、坏I-3(2)、鉢I(1)
白磁	椀；IV(3)、II(2)、V-3(1)、I？(1)、II-5(1)、V(1) V-1×II(2)、V(1)、V-1×2(2)、V-2×VII(1)、V-2(1)
緑釉陶器	破片、椀
陶器	朝鮮系無釉陶器
瓦類	破片(格子)、丸瓦
石製品	石硯(粘板岩)

118次　土器の計測表

S-2　灰茶色土

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	須恵器　坏c	R-002	6	11.6	4.0	8.0	○	
2	〃	R-001	5	12.8	4.7	9.0	○	
3	蓋c3	R-004	1	13.5	1.8+			
4	〃	R-003	2	15.5	2.6			
5	蓋3	R-005	3	13.6	1.5			
6	〃	R-006	4	14.6	1.55			
7	土師器　皿b	R-008	7	15.7	2.5+	-		

S-2　暗茶灰色土

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	須恵器　蓋c3	R-001	10	13.0	1.4			

S-3

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	土師器 丸椀a	R-001	1	13.0	2.8+	-		

S-5

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	土師器 丸底坏a	R-002	1	15.2	3.9	-		
2	〃	R-001	2	15.3	3.5	-		
3	〃	R-003	3	15.6	3.7	-		
4	椀c	R-004	4	-	3.2+	6.7		

S-7

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	土師器　小皿a	R-001	12	9.4	1.2	7.2		

S-10　最上層

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	土師器　小皿a	R-005	1	9.5	1.2	6.6	○	○
2	丸底坏a	R-003	3	15.3	3.2+	-		
3	椀c	R-004	4	15.7	5.3	7.2		

S-10　上層

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	土師器 小皿a（糸）	R-004	6	8.6	1.1	6.6		
2	小皿a（ヘラ）	R-012	7	9.15	1.1	6.4	?	
3	小皿a（糸）	R-005	10	9.2	0.8	7.8		
4	小皿a（ヘラ）	R-013	8	9.2	1.0	6.1	○	
5	〃	R-011	9	9.4	1.4	7.5	?	
6	丸底坏a	R-009	12	14.6	3.5	-	?	○
7	〃	R-015	13	15.1	3.8	-	?	
8	〃	R-006	17	15.4	3.6	-		○
9	〃	R-014	15	15.4	3.6	-		
10	〃	R-007	14	15.5	3.55	-		○
11	〃	R-002	16	15.6	3.5	-		○
12	〃	R-010	18	16.0	3.5	-		
13	〃	R-001	19	16.5	3.9	-		○
14	〃	R-003	20	16.95	3.2	9.1		
15	皿a	R-008	11	14.8	1.9	11.3	?	○
16	黒色土器A 椀	R-016	23	16.0	5.7	7.2	?	
17	黒色土器B 椀c	R-018	24	16.2	5.8	6.6		
18	〃	R-017	22	17.2	3.2+	-		
19	〃	R-019	21	-	4.3+	7.0		

S-10

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	土師器 小皿a(ヘラ)	R-026	4	9.0	1.1	7.6	○	○
2	〃	R-028	5	9.0	1.2	7.0	○	
3	〃	R-009	3	9.1	1.1	7.1		○
4	〃	R-010	6	9.2	1.1	7.2	○	○
5	小皿a (糸)	R-024	7	9.3	1.2	6.4	○	
6	小皿a (ヘラ)	R-016	8	9.4	1.1	7.4	○	○
7	〃	R-011	9	9.6	1.8	7.6		
8	〃	R-027	11	9.8	1.2	7.8		
9	〃	R-014	10	9.8	1.35	7.5		○
10	〃	R-025	12	9.9	1.1	7.3	○	○
11	〃	R-015	13	9.9	1.3	7.5		○
12	丸底坏a	R-030	14	14.2	3.0	-		
13	〃	R-040	15	14.8	3.3	-		○
14	〃	R-029	16	14.8	3.5	-		
15	〃	R-038	20	14.8	3.0+	-		
16	〃	R-006	17	15.0	3.3	-		○
17	〃	R-035	18	15.2	3.1	-		○
18	〃	R-007	19	15.2	3.55	-		○
19	〃	R-039	33	15.3	3.0	-		
20	〃	R-008	21	15.3	3.4	-		
21	〃	R-041	22	15.3	3.9+	-		
22	〃	R-047	23	15.4	3.0	-		
23	〃	R-033	24	15.4	4.0	-		
24	〃	R-032	25	15.5	3.2	-		
25	〃	R-004	26	15.5	4.3	-		○
26	〃	R-036	27	15.6	3.2	-		
27	〃	R-005	29	15.6	3.65	-		○
28	〃	R-034	28	15.6	4.0	-		
29	〃	R-042	30	15.7	2.9	-		
30	〃	R-043	31	15.7	3.6	-		○
31	〃	R-031	32	15.8	3.0	-		○
32	〃	R-037	34	15.8	3.3	-		○
33	〃	R-012	35	15.8	3.5	-		○
34	椀c	R-003	36	15.0	5.5	6.4		
35	〃	R-002	38	15.9	5.75	6.8		
36	〃	R-001	37	16.6	5.8	7.0		○
37	黒色土器B 小皿c	R-045	45	10.6	3.1	5.6		
38	椀c	R-013	42	15.3	5.7	6.05	○	○
39	〃	R-019	40	15.6	6.0	7.1		
40	〃	R-046	41	16.0	5.3	7.2		○
41	〃	R-018	43	16.4	5.0	7.3		
42	〃	R-020	44	17.0	7.3	7.35		

S-10　下層

	器　種	A	B	口　径	器　高	底　径	C	D
1	土師器　小皿a	R-007	2	8.65	1.2	6.65	○?	○
2	〃	R-013	3	9.4	1.7	7.8	○	○
3	〃	R-012	4	9.5	0.8	7.5		
4	〃	R-009	7	9.8	1.2	7.6	○?	○
5	〃	R-008	5	9.8	1.3	7.6		
6	〃	R-005	6	9.8	1.5	6.6	○	○
7	〃	R-006	9	10.1	1.3	8.0	○	○
8	〃	R-011	10	10.1	1.6	7.2	○	○
9	〃	R-010	8	10.2	1.1	8.3		○
10	坏a	R-002	11	15.2	3.0	-	○	
11	丸底坏a	R-023	12	14.8	3.4	-		
12	〃	R-022	13	14.9	3.8	-		○
13	〃	R-003	14	15.1	3.5	-	○	
14	〃	R-015	16	15.2	3.5	-		○
15	〃	R-018	20	15.2	3.6	-		○
16	〃	R-032	15	15.2	3.35+	-		○
17	〃	R-016	19	15.4	3.4	-		
18	〃	R-020	17	15.4	3.6	-		○
19	〃	R-004	18	15.4	3.7	-		
20	〃	R-024	21	15.4	3.9	-		○
21	〃	R-029	22	15.6	3.3	-		
22	〃	R-017	23	15.6	3.6	-		
23	〃	R-019	24	15.7	3.2	-		
24	〃	R-025	26	15.8	3.5	-		○
25	〃	R-001	27	15.8	4.3	-	○	○
26	〃	R-030	25	15.8	2.8+	-		
27	〃	R-026	28	16.0	3.5	-		○
28	〃	R-014	29	16.4	3.6	-		○
29	〃	R-027	30	16.6	3.2	-		○
30	丸底坏c	R-043	33	15.6	5.1	6.7		

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
31	〃	R-031	31	16.0	4.7	7.1		○
32	〃	R-033	32	16.4	6.1	7.0		○
33	椀c	R-028	34	17.1	5.3	6.75		×
34	黒色土器B 椀c	R-021	35	16.2	5.8	6.9		

S-12

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	黒色土器B 椀c	R-001	14	-	1.9+	6.4		

S-15　青灰色土

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　小皿a	R-002	6	9.0	1.5	6.7	○	○
2	〃	R-006	7	9.1	0.8	6.6		
3	〃	R-005	8	9.7	0.8	7.9	○	
4	〃	R-003	10	10.0	0.8	7.8	○	○
5	〃	R-004	9	10.6	1.3	8.1	○	○
6	丸底坏a	R-007	11	14.0	3.4	-		
7	〃	R-009	12	14.6	2.9	-		
8	〃	R-008	13	15.0	2.5	-		

S-15　青灰色土

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　小皿a	R-002	1	9.2	1.2	7.5	○	○?
2	〃	R-003	2	9.8	1.0	8.2	○	
3	坏a	R-005	3	-	0.8+	8.0	○	○
4	丸底坏a	R-004	4	14.4	3.2	-		

S-16

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　小皿a	R-001	16	10.1	1.7	7.2	○	○
2	〃	R-002	17	10.7	1.5	8.1	○	○
3	丸底坏a	R-003	18	16.0	4.5	11.0		○

S-20　暗灰色土

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　小皿a	R-001	16	9.8	0.9	7.7		
2	〃	R-002	17	10.4	1.6	7.1		
3	〃	R-003	18	12.5	1.7	8.5		
4	丸底坏a ?	R-004	20	14.6	3.8	-		
5	〃	R-005	19	15.4	4.0+	-		

S-25

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 丸底坏a	R-001	5	13.4	2.7+	-		○

S-26

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 丸底坏a	R-001	25	16.0	2.9	-		○

S-40

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器　坏？	R-001	43	13.2	3.0+	-		

茶褐色土

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	土師器 小皿a	R-001	1	9.6	1.2	6.6		
2	丸底坏a	R-003	2	15.2	3.6	-		○
3	〃	R-002	3	15.8	3.6	-		
4	黒色土器B 椀	R-006	5	15.9	-	-		

撹乱

	器　種	A	B	口　径	器 高	底　径	C	D
1	瓦器　椀c	R-001	1	-	3.2+	6.4		

条坊跡118次柱穴標高

SB001	a	0.93	0.99	28.125	28.065	0.06	28.048
	b	0.93	0.99	28.125	28.065	0.06	
	c			29.055	29.055	0	
	d	0.95	1.01	28.105	28.045	0.06	
	e	0.95	1.04	28.105	28.015	0.09	
	f	0.95	1.01	28.105	28.045	0.06	
	g	0.94	1.00	28.115	28.055	0.06	
SB045	a	0.90	1.20	28.155	27.855	0.3	27.898
	b	0.93	0.98	28.125	28.075	0.05	
	c	0.92	0.98	28.135	28.075	0.06	
	d	0.92	1.30	28.135	27.755	0.38	
	e	0.94	1.30	28.115	27.755	0.36	
	f	0.93	1.18	28.125	27.875	0.25	

Fig. 139　条141次調査遺構略測図

条141次調査 遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別		時期	地区
1	141SK001	土壙	埋土は黒灰色粘。	XI～	B0
2		ピット群		平安	A2
3		ピット		平安	A2
4		ピット		平安	A3
5	141SD100	道路側溝	埋土は暗茶灰色土。	IX～X	A6
6		ピット		古代	A2
7		ピット			A2
8		ピット		平安	A4
9		ピット		古代	A4
10	141SD010	道路側溝	埋土は暗灰色土。	IX～X	A5
11		ピット群		9c中～	A0
12		ピット群		平安	A3
13		ピット			A5
14	141SD020	溝	S-168と同一遺構。自然流路の可能性あり。埋土は灰茶色土。	XII～	Aライン
15	141SD020	溝	埋土は暗灰色土。自然流路の可能性あり。	XII	Aライン
16		溝か溜まり			A2
17		ピット		古代	A3
18		ピット群		古代	B0
19		ピット		8c	A7
20	141SD020	溝	埋土は暗灰色土。自然流路の可能性あり。	9c後半～	Aライン
21		ピット		古代	A7
22		ピット		古代	A6
23		砂溜まり		古代	B6
24		ピット		古代	AB5
25		溝か	埋土は暗灰色土。	古代	A5
26		ピット群	攪乱の可能性あり。	古代以降	B5
27	141SB130	ピット群	(調査後、群中に掘立柱建物の掘り方を含むことが判明)	古代	B4
28	141SX028	ピット		古代	B4
29		ピット		古代	B4
30		溝か溜まり	埋土は黒茶色土。	VII～VIII	B4
31		ピット	S-35下層	古代	B3
32		ピット	S-35下層		B3
33		ピット			B3
34	141SB130	ピット			B3
35		溜まりか	埋土は暗茶色土。	古代	B3
36	141SX036	ピット		古代	B5
37		ピット			B5
38		ピット群		古代	B2
39		ピット群			C1
40	141SX040	溜まり		IX～X	B7
41		ピット		古代	C1
42		ピット			C1
43	141SB130	ピット		古代	B3
44	141SB130	ピット		古代	B4
45	141SK045	土壙	埋土は黒茶色土。	XII	D1・2
46		土壙		古代	B6
47	141SX047	ピット群		古代	C2

48		ピット	埋土は茶黒色土。	古代	C2
49	141SX049	ピット		古代	C2
50	141SK050	土壙	埋土は黒灰色土。	古代	CD3
51		ピット	埋土は茶黒色土。		C3
52		ピット			C3
53		ピット		古代	B3
54	141SB130	ピット群	(調査後、群中に掘立柱建物の掘り方を含むことが判明)	10c	C3
55		溝		9c～	C6
56		ピット	埋土は茶黒色土。		C3
57		ピット		古代	C3
58		ピット群		古代	D1
59		ピット群		古代	D1
60	141SD060	溝	切り合い上は明らかにS-100より新しい。埋土は黄灰色土。	中世	C6
61		ピット			D2
62		ピット		古代	C4
63	141SB130	ピット		古代	C4
64		ピット	洗浄時にS-81の遺物と混ざっている。		C5
65	141SD065	溝	S-100の上層に同じ方向である。	XII	7ライン
66	141SX066	ピット		古代	B2
67		ピット		古代	B3
68	141SX068	ピット			C1
69		ピット			C1
70	141SD065		S-40と65を合わせたもの。	XI	C6・7
71		ピット群		古代	D3
72	141SB150	ピット群	(調査後、群中に掘立柱建物の掘り方を含むことが判明)		D3
73		ピット群	S-45下層	XII	D2
74		ピット			D3
75	141SK075	土壙			G2
76	141SB140	ピット		平安	D3
77	141SB150	ピット群	(調査後、群中に掘立柱建物の掘り方を含むことが判明)	平安	D3・4
78		ピット群		平安	D4
79		ピット群		平安	D4
80	141SK080	土壙	埋土は黒褐色土。	IX～X	D7
81	141SB140	ピット群	(調査後、群中に掘立柱建物の掘り方を含むことが判明)		D4
	141SB150		洗浄時にS-64の遺物と混ざっている。		
82		ピット			D4
83		ピット		平安	D4
84		ピット		平安	D4
85	141SE085	井戸	掘り方の埋土は茶褐色砂土。枠内は四層に分けられ、上層よ	VIII～IX	F3
			り灰色砂土、茶色砂土、暗茶色砂、灰色粘。		
86	141SB140	ピット群	(調査後、群中に掘立柱建物の掘り方を含むことが判明)		D5
87		土壙	埋土は黒灰色土。	XII	D5
88		溜まり	埋土は灰色砂土。		C5
89		ピット群			E1
90	141SK075	土壙		12c	G2
91	141SA155	ピット群	(調査後、群中に柵列の掘り方を含むことが判明)	平安	F2
92		ピット群			E2
93	141SB150	ピット群	(調査後、群中に掘立柱建物の掘り方を含むことが判明)	平安	E3
94		ピット群		平安	E3

95	141SK095	土壙？	S-80につながるか？　埋土は黒褐色土。	10c	C7
96	141SB140	ピット	(調査後、掘立柱建物の掘り方であることが判明)	平安	E3
97	141SB150	ピット	(調査後、掘立柱建物の掘り方であることが判明)	平安	E4
98		ピット群		平安	E4
99		ピット		平安	C5
100	141SD100	道路側溝	S-5につながるか？　　S-40の下	IX	7ライン
101		ピット	S-10下層	平安	C5
102		ピット		平安	E2
103		ピット群		平安	E1
104	141SB140	ピット群	(調査後、群中に掘立柱建物の掘り方を含むことが判明)	平安	E4
105	141SK105	土壙？	埋土は茶褐色砂土。	平安	F2
106		ピット群			E4
107		ピット		古代	E4
108	141SB150	ピット	(調査後、掘立柱建物の掘り方であることが判明)	古代	E4
109		ピット群		古代	E4
110	141SB110	掘立柱建物		8～9c	H3他
111	141SB140	ピット	(調査後、掘立柱建物の掘り方であることが判明)	古代	E4
112	141SA155	ピット群	(調査後、群中に柵列の掘り方を含むことが判明)	古代	F4
113		ピット群		古代	F4
114		ピット		11c後半	F3
115		ピット		古代	H7
116		溜まり		古代	E3
117		ピット		古代	F3
118	141SX118	ピット			G3
119		溜まり		XII	G2
120	141SK105	溜まり		平安	F2
121		ピット		平安	F3
122		ピット		平安	F4
123		ピット	S-152と同じ。	古代	F4
124		ピット群		平安	H3
125		溜まり	S-166と同一遺構。	XI・XII	B7
126		ピット		古代	H3
127		ピット群		古代	I4
128		ピット群		古代	G4
129		ピット			H4
130	141SB130	掘立柱建物	S-27・34・43・44・54・63で構成される。	9～10c	B4他
131		ピット群		古代	D6
132		ピット		古代	E5
133		ピット		古代	F4
134		ピット		古代	F5
135					
136		ピット		古代	I5
137		ピット		古代	D5
138	141SX138	ピット		古代	G5
139		溜まり		古代	F6
140	141SB140	掘立柱建物	S-76・81・86・96・104・111で構成される。	9～10c	D4他
141		溝	S-10の続きと思われる。	古代	H5
142		ピット		古代	A1
143		ピット		古代	A2

144		ピット		古代	B1
145					
146		ピット		平安	A3
147	141SX147	ピット群		古代	A6
148		ピット			A7
149		ピット群		古代	E5
150		掘立柱建物	S-72・77・81・93・97・108で構成される。	9～10c	D4他
151		ピット		古代	E5
152	141SA155	ピット群	(調査後、群中に柵列の掘り方を含むことが判明)	古代	F4
153		ピット群		古代	F4
154		ピット群		古代	F4
155	141SA155	柵列	S-91・112・152・161で構成される。	9～10c	F3他
156		ピット群		古代	G3
157		ピット		古代	G4
158		ピット群		古代	F3
159	141SX159	ピット群		古代	F3
160	141SD160	溜まり	茶褐色砂・茶色粗砂で構成される。	8c後半	南西部
161	141SA155	ピット	(調査後、柵列の掘り方であることが判明)	古代	F3
162		ピット		古代	F4
163		ピット		古代	F4
164		ピット		古代	F4
165					
166	141SX166	溜まり	S-125と同一遺構。埋土は砂(灰・茶・暗茶色のマーブル)。	XI・XII	A7
167	141SX167	溜まり	S-166につづくか。167→168。砂(灰・茶・暗茶色のマーブル)。	12c～	A9
168	141SD020	溝	S-14と同一遺構。自然流路の可能性あり。埋土は灰茶色土。	12c～	Aライン
169		溜まり	埋土は白灰色砂。浅い。166←169。	8c	A8
170	141SD170	流路		9c前半	9ライン
171		溝か	埋土は白灰色砂。	8c	A8
172		ピット	埋土は暗茶色土。	古代	A8
173		溜まり	埋土はマーブル砂。	8c	C7
174		ピット群	埋土は暗茶色土。	古代	B8
175					
176		ピット群	埋土は暗茶色土。	平安	B9
177		ピット	埋土は暗茶色土。	平安	B9
178		ピット群	埋土は暗茶色土。	平安	B9
179		ピット	埋土は茶褐色砂土。	平安	B9
180	141SK180	土壙	埋土は砂混じりの暗灰色土。浅い。	8c	F7
181		ピット		8c	B9
182		ピット		8c～	F10
183		ピット		平安	D8
184		ピット		8c～	D7
185		ピット	埋土は黒茶色土で硬い。	8c～	F7

条坊跡141次柱穴標高

	柱穴記号	上端レベル	下端レベル	標高（上）	標高（下）	高低差	標高下（平均）
SA155	a	1.19	1.28	27.31	27.22	0.09	27.357
	b	0.97	1.28	27.53	27.22	0.31	
	c	0.98	1.03	27.52	27.47	0.05	
	d	1.01	1.04	27.49	27.46	0.03	
	e	1.04	1.09	27.46	27.41	0.05	
	f	1.03	1.14	27.47	27.36	0.11	
SB110	a	1.04	1.37	27.46	27.13	0.33	27.046
	b	1.10	1.49	27.40	27.01	0.39	
	c	1.05	1.52	27.45	26.98	0.47	
	d	0.99	1.39	27.51	27.11	0.40	
	e	0.99	1.32	27.51	27.18	0.33	
	f	0.98	1.33	27.52	27.17	0.35	
	g	1.24	1.59	27.26	26.91	0.35	
	h	1.26	1.55	27.24	26.95	0.29	
	i	1.24	1.47	27.26	27.03	0.23	
	j	1.22	1.47	27.28	27.03	0.25	
	k	1.22	1.37	27.28	27.13	0.15	
	l	1.20	1.46	27.30	27.04	0.26	
	m	1.10	1.42	27.40	27.08	0.32	
	n	1.07	1.60	27.43	26.90	0.53	
SB130	a	1.17	1.37	27.33	27.13	0.20	27.042
	b	1.18	1.50	27.32	27.00	0.32	
	c	1.31	1.63	27.19	26.87	0.32	
	d	1.35	1.48	27.15	27.02	0.13	
	e	1.27	1.40	27.23	27.10	0.13	
	f	1.25	1.37	27.25	27.13	0.12	
SB140	a	1.01	1.18	27.49	27.32	0.17	27.160
	b	1.12	1.42	27.38	27.08	0.30	
	c	1.10	1.35	27.40	27.15	0.25	
	d	1.20	1.35	27.30	27.15	0.15	
	e	1.10	1.34	27.40	27.16	0.24	
	f	1.01	1.40	27.49	27.10	0.39	
SB150	a	1.01	1.25	27.49	27.25	0.24	27.218
	b	1.04	1.29	27.46	27.21	0.25	
	c	1.04	1.23	27.46	27.27	0.19	
	d	1.11	1.31	27.39	27.19	0.20	
	e	1.03	1.35	27.47	27.15	0.32	
	f	1.01	1.26	27.49	27.24	0.25	

大宰府条坊跡　第141次

S-1

須恵器	坏c、蓋3
土師器	椀c、甕、蓋c、坏d、坏a、丸底坏c?、高坏
	焼塩壷
黒色土器A	椀c、甕?
越州窯系青磁	椀；I(1)
白磁	椀；I(1)
瓦類	平瓦(縄目、斜格子)、丸瓦(斜格子)

S-2

須恵器	坏c、甕
土師器	坏a、坏c?
黒色土器A	椀c

S-3

須恵器	坏c、蓋3
土師器	坏a

S-4

須恵器	坏
土師器	椀c、甕
黒色土器A	破片

S-5

須恵器	甕、蓋c3、坏c、小壷?、鉢
土師器	椀c、甕、坏a、小皿a
	焼塩壷
黒色土器A	椀c
瓦類	平瓦(縄目、斜格子、格子)
石製品	石鍋(滑石)
金属製品	鉱滓、器種不明（鉄製品)

S-6

須恵器	蓋4、坏、鉢×蓋
土師器	破片
黒色土器A	椀c

S-7

須恵器	甕、坏c
土師器	甕

S-8

須恵器	坏c、蓋3、甕
土師器	坏、甕
	焼塩壷
黒色土器A	破片
瓦類	平瓦(縄目)

S-9

須恵器	蓋3、甕
土師器	甕

S-10

須恵器	甕、蓋3、蓋c、坏c、壷
土師器	椀c、坏a、甕、小皿a、椀a
	焼塩壷
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀
越州窯系青磁	椀；I-2a(1)、I(2)、II(1)
緑釉陶器	椀×皿(1)
瓦類	平瓦(縄目、斜格子)、丸瓦(片)
石製品	石鍋(滑石)、剥片(黒曜石)
金属製品	板状鉄製品、破片

S-11

須恵器	破片
土師器	皿
	焼塩壷

S-12

須恵器	坏c、甕、蓋3
土師器	皿、坏c×椀c、甕
	焼塩壷
黒色土器A	椀
瓦類	平瓦(格子)

S-13

須恵器	破片
土師器	破片

S-14

須恵器	坏c、甕、坏a、蓋c
土師器	甕、坏?、椀c?、小皿a?
	焼塩壷
黒色土器A	椀c
白磁	椀；IV(4)、IV×II(1)
	破片(1)
須恵質土器	鉢
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦(斜格子)
石製品	剥片(黒曜石)

S-15

須恵器	坏c、蓋c、蓋3、甕、高坏、壷?
土師器	坏a、丸底坏a、坏c、甕、椀c、小皿a
	焼塩壷
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀c
緑釉陶器	破片(1)
瓦類	平瓦(斜格子、平行タタキ)

S-16

須恵器	蓋、高坏、坏d、皿a×坏a
土師器	甕
	焼塩壷

S-17

須恵器	坏
土師器	甕、坏a

S-18

須恵器	坏、甕
土師器	甕、坏a
瓦類	破片

S-19

須恵器	蓋c
土師器	高坏

S-20

須恵器	坏c、蓋3、甕、壷、鉢a3
土師器	坏a、甕、鉢
	製塩土器(玄海灘式)、焼塩壷
黒色土器A	破片
黒色土器B	破片
越州窯系青磁	水注×壺(瓜割?)、破片(1)

S-21

須恵器	甕

S-22

須恵器	坏、甕、蓋3
土師器	椀c、甕

S-23

須恵器	蓋4、甕
土師器	椀c
越州窯系青磁？	破片(1)
瓦類	破片

S-24

須恵器	坏
土師器	破片
黒色土器A	破片

S-25

須恵器	坏c、蓋3
土師器	甕
	焼塩壷？
黒色土器A	破片
土製品	焼土塊

S-26

須恵器	坏
土師器	甕

S-27

須恵器	蓋3
土師器	甕

S-28

須恵器	大坏c、蓋c3
土師器	甕
	焼塩壷

S-29

須恵器	高坏、坏c、蓋3
土師器	甕、蓋3
瓦類	破片

S-30

須恵器	坏c、蓋3、甕
土師器	坏a、椀、甕、蓋
	焼塩壷
黒色土器A	椀c
瓦類	破片

S-31

須恵器	坏
土師器	破片
黒色土器A	椀c
白磁	椀；I-1(1)

S-32

土師器	蓋c

S-33

須恵器	壷、蓋3
土師器	甕

S-34

須恵器	蓋、坏
土師器	破片

S-35

須恵器	坏c、甕、蓋3、壷
土師器	坏a、高坏、甕、椀c
黒色土器A	椀c
瓦類	丸瓦(縄目)、平瓦(斜格子)
石製品	平玉石

S-36

須恵器	甕、蓋3
土師器	鉢、椀c、甕
黒色土器A	甕

S-37

土師器	坏
黒色土器A	破片

S-38

須恵器	破片
土師器	甕、皿×坏
黒色土器A	破片

S-39

須恵器	破片
土師器	破片
黒色土器A	破片

S-40

須恵器	甕、壷、坏c、皿a、蓋1、蓋3、蓋4、蓋c
土師器	椀c、甕、坏a、竈、皿c、坏d、器台、小皿c、小皿a
	小皿a×坏a
黒色土器A	破片
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	椀；I(5)、I-1×I-2イ(1)、II(3)、I-2(1)、II-3(1)
	壷×水注；破片(1)
青磁	破片(1)
緑釉陶器	破片(1)
瓦類	平瓦(縄目)、軒丸瓦、丸瓦(縄目、斜格子)
石製品	石鍋(滑石)、おもり(滑石)、砥石(頁岩)
	すり石(変成岩)
縄文式土器	破片
金属製品	鉄製鎌、鉄釘、器種不明(鉄製品)

S-41

土師器	坏、椀c、甕

S-42

須恵器	破片
土師器	破片

S-43

須恵器	坏c、甕、鉢？
土師器	坏、甕
黒色土器A	椀

S-44

須恵器	蓋3、壷、坏c
土師器	焼塩壷
黒色土器A？	破片
越州窯系青磁	椀；I(1)

S-45

須恵器	坏？、蓋、甕
土師器	丸底坏a、小皿a、甕、椀c、坏a
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	破片(1)
瓦類	丸瓦(斜格子)、平瓦(斜格子)

S-46

土師器	甕
越州窯系青磁	椀；I-1(1)
瓦類	平瓦(格子)

S-47

須恵器	椀×坏
土師器	皿b、椀×坏

S-48

土師器	坏×椀、甕

S-49

須恵器	甕、壷
土師器	皿b

S-50

須恵器	蓋3、坏c、甕
土師器	椀c、坏a、甕×鉢
黒色土器A	椀c

S-51

土師器	坏
瓦器	破片
黒色土器A	破片
越州窯系青磁	椀；I(1)

S-52

土師器	破片

S-53

須恵器	蓋、甕×壷
土師器	坏、椀c
黒色土器A	破片

S-54

須恵器	坏c、蓋c3
土師器	椀、甕
黒色土器A	椀c

S-55

須恵器	坏c、蓋c、蓋3
土師器	甕
土製品	焼土塊

S-56

土師器	破片
黒色土器A	破片

S-57

土師器	椀c、坏
越州窯系青磁	坏；II(1)

S-58

須恵器	蓋3
土師器	甕、椀c、坏

S-59

土師器	甕、椀c
黒色土器A	椀c
瓦類	平瓦(斜格子)

S-60

須恵器	壷、高坏、甕、蓋、小甕？
土師器	甕
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	椀；I(2)
瓦類	平瓦(斜格子)

S-61

須恵器	破片
土師器	破片
黒色土器A	破片

S-62

須恵器	甕、蓋3、坏c
土師器	坏a
緑釉陶器	皿(1)

S-63

須恵器	坏c
土師器	甕
黒色土器A	椀c

S-65

須恵器	甕、坏c、蓋1、蓋3、蓋4、壷
土師器	椀c、甕、丸底坏a、小皿a、坏a、鍋脚
	焼塩壷？
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀
越州窯系青磁	椀；I(1)、II(1)
	破片(2)
白磁	椀；I(1)
	皿；I-1(1)
灰釉陶器	壷(1)
朝鮮無釉陶器	壷(1)
瓦類	丸瓦(斜格子)、平瓦(縄目、すりけし、斜格子)
金属製品	鉱滓、鉄釘

S-66

須恵器	壷蓋c
土師器	甕、坏d？
黒色土器A	破片
石製品	滑石片

S-67

須恵器	破片
土師器	甕、蓋4、坏a×小皿a、坏a

S-68

須恵器	甕、蓋c
土師器	坏a、甕
土製品	焼土塊
金属製品	鉄釘

S-69

土師器	甕

S-70

須恵器	蓋3、甕、壷d、坏c、高坏
土師器	器台、椀c、甕、小皿a、壷、坏a、蓋c、蓋3、蓋4 小皿a2？
	焼塩壷
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	椀；I-1(2)、I(1)、II(3)
白磁	椀；XI×II(1)
	破片(1)
緑釉陶器	破片(1)
灰釉陶器	破片(1)
朝鮮無釉陶器	破片(1)
瓦類	丸瓦(格子)、平瓦(斜格子、縄目)
石製品	平玉石
金属製品	鉄製刀子、鉄釘

S-71

須恵器	甕
土師器	破片
黒色土器A	破片
瓦類	平瓦(縄目)

S-72

須恵器	甕×壷
土師器	椀c、甕
黒色土器A	破片
黒色土器B	破片
土製品	焼土塊

S-73

須恵器	蓋
土師器	椀c、丸底坏
白磁	椀；XI×II(1)
瓦類	破片

S-74

須恵器	坏c
土師器	坏a、椀c

S-75

須恵器	坏c
土師器	甕、椀c、坏×椀、小皿a
黒色土器B	椀？
瓦類	平瓦(斜格子)

S-76

須恵器	破片
土師器	坏、甕
瓦器？	破片
土製品	瓦玉

S-77

須恵器	破片
土師器	甕、坏a、椀c
黒色土器A	破片

S-78

須恵器	甕、壷×鉢、坏c
土師器	椀c、坏a
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	椀；I-1b(1)、II(1)
瓦類	平瓦(縄目)
石製品	平玉石

S-79

須恵器	甕、鉢×壷
土師器	椀c

S-80

須恵器	壷、坏c、甕、蓋3
土師器	甕、椀c、坏a、小皿a
黒色土器A	破片
黒色土器B	椀
緑釉陶器	椀×皿(1)
瓦類	平瓦(斜格子)、軒丸瓦

S-81

須恵器	蓋3
土師器	坏a、椀c、甕
黒色土器A	破片

S-82

土師器	椀c、甕
黒色土器A	破片

S-83

土師器	坏、甕
黒色土器A	破片

S-84

須恵器	破片
土師器	甕、坏

S-85 枠内灰色砂土

須恵器	坏c、蓋1、蓋3、甕
土師器	椀c、坏a、甕 製塩土器？
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	椀；I-2b(1)□、I×III(2)、II-2(1)、II(2)、I(4) I×II(1)
青磁	椀(1)
瓦類	平瓦(縄目、斜格子、格子)
石製品	平玉石、剥片(黒曜石)
金属製品	鉄釘、棒状銅製品

S-85 枠内茶色砂土

須恵器	甕、蓋3
土師器	甕、椀c、坏a
黒色土器A	椀c
瓦類	平瓦(格子)、丸瓦(斜格子)
石製品	滑石片

S-85 枠内暗茶色砂

須恵器	破片
土師器	坏
黒色土器A	破片

S-85 枠内灰色粘

土師器	椀c

S-85 茶褐色砂土

須恵器	甕、蓋、壷
土師器	甕、高坏、坏a 焼塩壷
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀c
瓦類	平瓦(縄目)

S-86

土師器	椀c、坏
黒色土器A	破片

S-87

須恵器	坏、甕
土師器	坏、甕、椀c、小皿a2、丸底坏c
黒色土器A	破片
白磁	椀；XI(2)

S-88

須恵器	破片
土師器	坏

S-89

須恵器	破片
土師器	破片

S-90

須恵器	甕×壷
土師器	甕、鍋×鉢、坏a、椀c、坏×椀、小皿a、器台？
黒色土器B	椀
龍泉窯系青磁	椀；破片(1)
朝鮮無釉陶器	壷

S-91

須恵器	破片
土師器	坏
黒色土器A	破片

S-92

須恵器	破片
土師器	坏、椀c

S-93

須恵器	破片
土師器	椀c
黒色土器A	破片
灰釉陶器?	破片

S-94

須恵器	破片
土師器	椀c、坏
黒色土器A	破片

S-95

須恵器	甕、壷、蓋3、坏c、椀、鉢、蓋c
土師器	小椀c、椀c、器台、坏a、甕、蓋、椀、小皿a×坏a
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	椀;I(3)、II(1)　椀×皿;III(1)
越×高青磁?	大形製品破片(1)
緑釉陶器	椀(1)
瓦類	平瓦(縄目、斜格子)
石製品	剥片(黒曜石)、石核(安山岩)
金属製品	鉄釘

S-96

土師器	破片
黒色土器A	破片

S-97

須恵器	坏c
土師器	坏、椀c

S-98

土師器	破片
黒色土器A	破片

S-99

須恵器	破片
土師器	破片
瓦類	平瓦(斜格子)

S-100　淡黄色粘

須恵器	鉢、蓋3、甕、坏c、皿?
土師器	甕、坏
黒色土器A	椀c
瓦類	平瓦(縄目)
石製品	剥片(安山岩)

S-100

須恵器	坏c、壷b、蓋c、甕、壷蓋、不明製品
土師器	椀c、器台、甕、坏a、皿c、坏d?、壷、小皿c 大椀c、小皿a 焼塩壷
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	椀;I-2(2)、I(1)、II(3)
白磁	椀;I(1)
緑釉陶器	小椀×小皿(1)、椀(1)
瓦類	平瓦(斜格子、格子)　丸瓦(斜格子、格子)
石製品	剥片(安山岩)、石鍋(滑石)
縄文式土器	破片
金属製品	鉄製刀子

S-101

土師器	坏、甕?

S-102

土師器	椀c
瓦類	平瓦(二重格子)

S-103

須恵器	破片
土師器	甕、坏
黒色土器A	破片

S-104

須恵器	破片
土師器	坏、椀c、甕
黒色土器A	破片

S-105

須恵器	鉢、蓋c、坏c
土師器	坏a、椀c、脚付鍋
黒色土器A	椀
越州窯系青磁	椀;I(1)、II(1)
瓦類	平瓦(縄目、斜格子、二重格子)
石製品	破片(安山岩)

S-106

土師器	破片

S-107

土師器	坏a、甕
黒色土器A	椀

S-108

須恵器	甕
土師器	椀、坏
瓦類	平瓦(斜格子)
石製品	剥片(黒曜石)

S-109

須恵器	破片
土師器	甕、坏 焼塩壷
黒色土器A	破片
瓦類	破片

S-110a

須恵器	蓋、坏c
土師器	破片

S-110b

土師器	破片

S-110c

土師器	破片

S-110d

土師器	破片

S-110e

須恵器	小壷、坏、小坏、坏a
土師器	甕
縄文土器?	破片
金属製品	鉄釘

S-110f

須恵器	破片

S-110g

土師器	破片

S-110h

須恵器	甕
土師器	椀×坏、坏d
越州窯系青磁？	破片

S-110i

土師器	破片

S-110j

須恵器	蓋
土師器	破片
石製品	剝片(安山岩)

S-110m

須恵器	破片
土師器	破片

S-111

須恵器	蓋、坏
黒色土器A	破片
瓦類	平瓦(片)

S-112

土師器	甕、坏、椀×坏

S-113

須恵器	甕
土師器	椀c
黒色土器A	破片

S-114

須恵器	坏c
土師器	椀、坏、小皿a？
金属製品	鉄釘

S-115

須恵器	蓋3
土師器	破片

S-116

土師器	椀×坏
黒色土器A	破片
瓦類	平瓦(すりけし)
石製品	剝片(黒曜石)

S-117

土師器	椀
黒色土器A	破片
瓦類	平瓦

S-118

須恵器	甕
土師器	甕、坏a、椀c
石製品	石鏃(安山岩)

S-119

土師器	丸底坏a、甕
石製品	器種不明(滑石製品)

S-120

須恵器	甕、甕×壷、坏、高坏
土師器	甕、坏
越州窯系青磁	椀；I(1)
瓦類	平瓦(斜格子、格子、すりけし、縄目)、軒丸瓦
石製品	石鏃(黒曜石)

S-121

土師器	破片

S-122

土師器	破片

S-123

須恵器	甕
土師器	椀c
黒色土器A	椀c

S-124

土師器	坏
黒色土器A	破片

S-125

須恵器	蓋1、蓋3、甕
土師器	蓋c、椀c、坏a、甕
黒色土器A	破片
白磁	椀；IV(1)(混入)
瓦類	平瓦(すりけし、斜格子、格子、縄目)

S-126

土師器	坏、甕
黒色土器A	破片

S-127

須恵器	破片
土師器	甕
	焼塩壷

S-128

須恵器	蓋4
土師器	甕、椀c
黒色土器A	破片
黒色土器B	椀c

S-129

土師器	破片

S-131

須恵器	壷
土師器	坏
黒色土器B	破片

S-132

土師器	破片
黒色土器A	破片

S-133

須恵器	破片
土師器	甕、椀c
黒色土器A	破片
黒色土器B	破片
瓦類	破片

S-134

土師器	破片

S-136

須恵器	坏
黒色土器A	破片

S-137

須恵器	甕、壷？
土師器	椀c
黒色土器A	椀c
黒色土器B	破片
瓦類	平瓦(斜格子)

S-138

須恵器	甕、蓋c、蓋3、坏c、円面硯？
土師器	坏d？、甕、坏a
瓦類	破片

S-139

須恵器	破片
土師器	破片
黒色土器B	破片
瓦類	丸瓦(格子)

S-141

土師器	椀c
黒色土器A	破片
黒色土器B	破片
瓦類	平瓦

S-142

須恵器	坏
土師器	破片

S-143

須恵器	蓋3
土師器	甕、坏×椀

S-144

土師器	破片

S-146

土師器	坏、甕
瓦類	平瓦(斜格子)

S-147

須恵器	甕、坏c、高坏、蓋3
土師器	甕、坏
	焼塩壷
黒色土器A	椀c
白磁	皿；VI？(1)
瓦類	平瓦(縄目、格子)
石製品	器種不明(安山岩)、剥片(安山岩)

S-149

須恵器	甕、蓋3
土師器	椀c、甕
黒色土器A	破片

S-151

土師器	甕、坏×小皿
黒色土器A	破片

S-152

土師器	甕

S-153

須恵器	破片
土師器	坏
青磁？	椀×坏、破片(1)

S-154

須恵器	破片
土師器	破片
黒色土器A	椀c

S-156

土師器	坏

S-157

須恵器	破片

S-158

須恵器	破片

S-159

須恵器	破片
土師器	椀c
黒色土器B	破片
瓦類	平瓦(縄目、斜格子)
石製品	剥片(黒曜石)
縄文土器	鉢

S-161

土師器	椀c

S-162

土師器	破片

S-163

須恵器	破片
土師器	破片

S-164

土師器	破片

S-166

須恵器	蓋c、蓋1、蓋3、甕、鉢？、壷a、壷b、大蓋、高坏
	皿a、坏c、坏a、平瓶×壷
土師器	高坏脚、蓋c、椀c、器台、甕、坏d、坏a、小皿c
	丸底坏a、椀
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	椀；I(3)、II(2)
青磁	破片(1)
白磁	椀；V(1)、VIII(1)、I(1)、V×VIII(1)
	皿；IX(1)
	破片(3)
瓦類	平瓦(斜格子、縄目、文字)、丸瓦(縄目、斜格子)
縄文土器	破片

S-167

須恵器	高坏、甕、蓋1、蓋c3、蓋4、坏a、坏c、小壷、壷a
	壷e、皿a、平瓶
土師器	皿a、甕、坏c、椀c、鉢？、坏a(ヘラ)、坏a(イト)
	小皿a、高坏、器台、竈
	焼塩壷
黒色土器A	椀c
黒色土器B	破片
越州窯系青磁	椀；I-1b(1)、I-2(1)、I-2a(1)、I(3)
	II(3)、II-2c(1)
	皿；I-2(1)
龍泉窯系青磁	皿；破片(1)
白磁	椀；II(1)、IV(1)、破片(3)
	皿；破片(1)
	破片(6)
緑釉陶器	皿(2)、椀(1)、破片(1)
瓦類	平瓦(縄目、格子)、丸瓦(斜格子)、塼
石製品	剥片(黒曜石、安山岩)、平玉石、石鏃(安山岩)
土製品	ふいご羽口
縄文土器	鉢
金属製品	鉱滓、鉄釘

S-168

須恵器	甕、蓋3、蓋c、壷蓋、坏c
土師器	竈、甕、椀c、大椀c、坏a、坏d
	焼塩壷
黒色土器A	破片
越州窯系青磁	椀；I-1(1)、II(1)
	破片(1)
同安窯系青磁	椀；I(1)
白磁	椀；II(1)、IV(2)、V(1)、破片(2)
	皿；破片(1)
緑釉陶器	破片(1)
灰釉陶器	椀(1)
褐釉陶器	破片(1)
白釉陶器	破片(1)
暗緑釉陶器	椀(2)
染付	破片(1)
近世陶器	透明釉椀；破片(1)
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦(斜格子)
石製品	滑石片、剥片(黒曜石)
縄文土器？	破片

S-169

須恵器	甕、蓋2、蓋4、坏c
土師器	破片

S-170

須恵器	甕、坏a、坏c、皿a、蓋3、蓋4、蓋c、壷b、高坏、鉄鉢 硯？
土師器	坏a、坏d、高坏、皿a、大皿c、蓋4、椀c、甕
	焼塩壷
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	椀；I(1)
	水注×壷(2)
瓦類	平瓦(縄目、斜格子)　丸瓦
石製品	剥片(安山岩)、砥石(火成岩)
土製品	焼土塊、瓦玉

S-171

須恵器	甕、蓋4
土師器	甕×壷

S-172

土師器	破片

S-173

須恵器	甕、壷a、坏c、蓋1、蓋3、皿a、高坏
土師器	甕、高坏、壷、蓋3
	焼塩壷
瓦類	平瓦(縄目、斜格子)
石製品	剥片(安山岩、黒曜石)、平玉石(大)

S-174

須恵器	甕
土師器	破片
弥生土器？	破片

S-176

須恵器	坏c
土師器	甕
瓦類	平瓦(縄目)

S-177

須恵器	蓋3、坏c
土師器	坏
瓦類	破片

S-178

須恵器	坏a、甕
土師器	坏、甕
黒色土器A	椀c
瓦類	平瓦(斜格子)

S-179

須恵器	蓋c、蓋3、甕
土師器	皿a、甕、蓋3、椀c
瓦類	破片

S-180

須恵器	坏c、甕、蓋3
土師器	坏c、坏d、甕
瓦類	軒丸瓦
石製品	剥片(黒曜石)

S-181

須恵器	甕、蓋3
土師器	坏c、坏d、甕
	焼塩壷
瓦類	破片(縄目)

S-182

須恵器	甕、蓋c
土師器	坏

S-183

須恵器	甕、坏c
土師器	坏、甕

S-184

土師器	甕

S-185

須恵器	甕
土師器	破片

淡灰色土

須恵器	甕、坏a、坏c、高坏、高坏(古墳)、小坏c、壷b、壷？ 鉢a3、蓋3、蓋4、蓋？(ヘラ描き有)
土師器	壷、小皿a、小皿c、坏a、坏c、坏d、丸底坏a、鉢 丸底坏c、器台、皿a、皿c、椀c、竈？、甕、高坏 蓋3
	焼塩壷
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	椀；I(9)、I-2(2)、II(4)、II-3(3)
	壷×水注；破片(1)
	褐釉；壷(1)
	器種不明；破片(1)
越×長沙	壷×水注(1)
龍泉窯系青磁	椀；破片(1)
青磁	椀；破片(1)
	器種不明；破片　(1)
白磁	椀；II(4)、IV(1)
	皿；IX(2)、破片(1)
	器種不明；破片(6)
緑釉陶器	皿？(1)、破片(2)
灰釉陶器	小壷(1)
朝鮮無釉陶器	壷(1)
褐釉陶器	椀(1)
染付	破片(4)
瓦類	平瓦(文様、斜格子、縄目)　丸瓦(片)
石製品	平玉石、剥片(安山岩、黒曜石)、石鍋(滑石)
縄文土器	破片
弥生土器？	破片
土製品	焼土塊
金属製品	鉄釘、銅鏡、針状鉄製品、板状鉄製品

暗灰色土

須恵器	壷a、壷b、皿a、坏、坏a、坏c、大坏c、小坏c、高坏 蓋2、蓋a3、蓋c3、鉢、甕、鉢×壷
土師器	坏c、坏d、大坏c、高坏、甕、蓋3、皿b
	焼塩壷、製塩土器
瓦類	平瓦(縄目)　丸瓦(すりけし)
土製品	焼土塊
弥生土器?	破片
石製品	剝片(黒曜石、安山岩)、砥石(砂岩)、平玉石(堆積岩)
金属製品	器種不明（鉄製品)

茶褐色砂

須恵器	蓋1(転用硯)、蓋1、蓋2、蓋a1、蓋c1、蓋c2、蓋c3 大蓋c3、壷蓋、壷蓋a、坏a×壷蓋a、壷口縁、壷、壷a 壷b、壷f、壷(搬入品)、小壷、皿a、鉢、脚、椀c 坏a、坏c、小坏c、大坏c、高坏、甕
土師器	壷、壷(古墳)、鉢、皿a、皿b、皿c、皿、甕、高坏脚 坏a、坏c、坏d、大坏c、竃、蓋3、椀c
	焼塩壷、製塩土器
黒色土器A	椀c
白磁	椀；I(1)
灰釉陶器	壷?(3)
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦(すりけし)、軒丸瓦
石製品	平玉石、剝片(安山岩、黒曜石)、石鏃(安山岩) 凹み石(火成岩)、すり石(火成岩)
土製品	ふいご羽口
縄文土器	浅鉢、鉢
金属製品	器種不明(鉄塊)

茶色粗砂

須恵器	蓋3、蓋c、坏a、坏c、壷a、壷b、鉢、甕、壷b?
土師器	坏a、坏c、坏d、皿a、甕、小坏c
瓦類	平瓦(縄目)
石製品	砥石(砂岩)、剝片(黒曜石)

撹乱

石製品	剝片(黒曜石)

表土

須恵器	坏a、坏c、蓋2、蓋3、蓋4、蓋c、甕、壷、小壷 高坏、皿a
土師器	鍋、甕、坏a(ヘラ)、坏a(イト)、坏d、丸底坏a 高坏、蓋c、蓋、椀c、小皿a、鉢、壷?
	焼塩壷、製塩土器
黒色土器A	椀c、甕×鉢
越州窯系青磁	椀；II-3(1)、II(1)、I-1a(1)
白磁	破片(3、近代以降)
陶器	破片(2、近代以降)
染付	肥前系；椀(1)
	破片(3)
瓦類	平瓦(縄目、文字、いぶし)、丸瓦(片)
石製品	滑石製品、剝片(黒曜石)
縄文土器?	破片

大宰府条坊跡　第141次

S-5

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器小皿a	R-001	10	10.8	1.9	7.8	○	
2	須恵器蓋c3	R-003	6	19.2	1.4			
3	黒色土器A椀c	R-002	18	15.6	6.2	8.5		

S-10

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器小皿a	R-001	1	10.2	1.8	7.0	○	
2	〃	R-002	2	11.2	1.8	7.4	?	○
3	椀a	R-003	3	13.2	3.8	7.5		
4	椀c	R-004	4	14.4	6.0	9.2		

S-15

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器小皿a	R-001	1	10.6	2.4	7.4	?	
2	丸底坏a	R-002	2	14.8	3.7	-		○

S-28

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	須恵器大坏c	R-002	2	18.8	5.5	13.6		
2	蓋c3	R-001	1	13.8	2.4			

S-30

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器坏a(ヘラ)	R-002		12.4	3.3	7.4		
2	〃(?)	R-001		12.5	3.4	7.7		

S-36

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器椀c	R-002	3	-	2.2+	7.5		○

S-40

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器 小皿a(?)	R-009	1	10.6	1.5	7.3		
2	小皿c	R-003	5	12.2	2.0	7.7		
3	小皿a×坏a	R-008	2	10.8	2.1	6.6		
4	坏a	R-001	3	11.4	2.3	7.8		
5	〃	R-002	4	12.2	2.0	8.4		

S-45

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器小皿a	R-003	1	9.8	1.9	7.6		○
2	〃(?)	R-002	2	10.2	1.4	8.3	○	
3	〃(ヘラ)	R-001	3	10.4	1.2	8.2	○	
4	丸底坏a	R-004	4	15.4	3.3	-		
5	〃	R-006	5	16.0	3.2	-		
6	〃	R-005	6	16.0	3.6	-		
7	〃	R-007	7	16.2	3.6	-		○
8	黒色土器B椀c	R-008	8	15.8	4.7+	-		

S-47

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器皿b	R-001	1	15.5	2.8	10.9		

S-49

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器皿b	R-001	2	18.4	2.8	14.4		

S-65

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器小皿a(?)	R-001	1	10.0	1.4	7.9		
2	椀c	R-002	5	-	3.4+	8.0		

S-70

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器 小皿a	R-002	2	10.8	1.5	7.8		○
2	坏a	R-001	3	11.0	2.2	6.5		
3	椀c	R-004	4	-	3.8+	8.3	○	
4	〃	R-003	6	15.8	5.9	8.8		

S-80

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器小皿a	R-001	2	10.6	1.8	7.7		
2	小皿a(?)	R-002	3	11.4	1.7	7.6		
3	坏a(?)	R-003	4	12.2	1.9	9.0		
4	椀c	R-004	5	-	3.2+	7.5		

S-85　枠内灰色砂土

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	黒色土器A椀c	R-001	2	15.5	5.5+	-		?

S-85　枠内茶色砂土

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器坏a	R-001	4	11.6	2.5	8.1	○	

S-85　枠内灰色粘

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器坏c	R-001	5	12.9	4.5	8.0	○	

S-85　茶褐色砂土

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	黒色土器B椀c	R-001	1	-	1.9+	7.6		

S-95

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器小皿a×坏a(?)	R-005	8	11.2	1.9	9.0		
2	〃(ヘラ)	R-004	9	11.6	2.1	8.1	○	
3	坏a	R-002	10	13.6	3.9	9.6	○	
4	小椀c	R-001	11	8.7	3.5	4.9	○	
5	椀	R-003	12	14.2	4.2+	-		
6	黒色土器B椀 c	R-006	13	-	2.4+	7.9		

S-100　淡黄色粘

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	須恵器坏c	R-001	7	-	1.3+	9.3		

S-100

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器小皿a	R-004	11	11.3	2.0	7.7	○	
2	〃	R-003	12	11.4	1.8	7.3		
3	小皿c	R-001	14	11.6	1.6	6.8		
4	〃	R-006	15	12.5	2.3	8.3		○
5	坏a	R-007	13	11.7	2.7	8.5		
6	大椀c	R-009	16	-	4.3+	14.0		

S-107

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器坏a	R-001		12.0	3.7	6.8		

S-110 a

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	須恵器坏c	R-001	1	-	2.1+	10.0		

S-110 e

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	須恵器小坏	R-001	2	9.8	3.3+	-		

S-166

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器椀	R-004	4	12.2	2.7+	-		
2	椀	R-001	5	16.2	2.6+	-		
3	椀c	R-002	6	-	2.3+	7.1		○
4	椀c	R-003	7	-	2.5+	8.0		

S-167

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器坏a	R-001	4	12.6	3.5	8.8	○	○
2	〃(イト)	R-002	3	-	1.5+	6.5		

S-168

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器大椀c	R-001	3	19.0	7.4	10.4	○	

S-170

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器 坏a	R-001	6	12.9	3.9	8.3	?	×
2	〃	R-002	7	13.8	3.6+	8.8	?	?
3	坏d	R-003	5	14.0	3.7	7.6		
4	皿a	R-004	8	13.3	2.1	9.2	○	×
5	大皿c	R-008	9	25.0	3.4	18.8		
6	須恵器坏c	R-006	2	12.2	3.2	9.0		
7	蓋3	R-007	1	12.8	1.7+			

S-180

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	須恵器坏c	R-001	2	-	2.5+	8.4		

淡灰色土

	器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
1	土師器小皿c	R-001	6	13.3	2.6	7.6	○	
2	坏a	R-009	5	11.5	2.0	8.8	○	○
3	丸底坏a	R-010	7	16.0	4.0	-		
4	須恵器小坏c	R-005	2	8.3	4.2	6.6		

暗灰色土

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器大坏c	R-002	23	18.4	4.8	13.8		
2	須恵器坏a	R-011	8	13.8	3.8	10.4		
3	小坏c	R-008	9	9.6	3.9	7.3		
4	坏c	R-022	15	13.3	4.5	9.8		
5	〃	R-004	11	13.7	4.0	9.3		
6	〃	R-032	12	13.9	3.5	10.6		
7	〃	R-006	13	14.6	4.0	10.4		
8	〃	R-003	14	15.0	4.3	11.2		
9	〃	R-001	16	15.0	6.0	9.3		
10	〃	R-009	10	-	2.7+	8.9		
11	大坏c	R-005	17	17.0	5.5	11.5		
12	〃	R-007	18	18.6	5.9	12.1		
13	皿a	R-010	19	19.0	3.2	16.0		
14	〃	R-012	20	19.2	3.6	16.6		
15	蓋a3	R-013	2	13.4	1.9			
16	蓋c3	R-015	4	14.7	4.0			
17	〃	R-031	3	14.8	2.2			
18	〃	R-033	5	15.6	1.9			
19	〃	R-014	6	15.7	2.7			
20	〃	R-016	7	15.8	1.3			
21	蓋2	R-017	1	14.8	1.1+			

茶褐色砂

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器坏a	R-051	44	12.2	2.8	8.3	○	
2	〃	R-052	45	13.4	3.5	7.6	○	
3	〃	R-050	46	14.3	2.8	8.8	○	
4	皿	R-053	50	22	2.1+	-		
5	皿a	R-049	49	13.4	2.2	10.2		
6	皿b	R-047	48	18	2.6	16.2		
7	皿c	R-054	51	21.6	2.7	15.4		
8	〃	R-055	52	-	1.5+	15		
9	須恵器坏a	R-022	17	13.4	3.8	10.7		
10	〃	R-025	14	-	2.5+	7.6		
11	小坏c	R-001	18	8.6	3.5	6.0		
12	坏c	R-003	19	13.2	4.2	8.1		
13	〃	R-004	20	13.8	3.8	9.2		
14	〃	R-005	21	14.4	3.9	11.0		
15	〃	R-006	22	14.5	3.9	9.5		
16	〃	R-007	24	15.2	4.0	9.6		
17	〃	R-002	23	15.2	4.9	10.6		
18	大坏c	R-024	25	17.8	5.5	11.8		
19	〃	R-008	26	18.0	5.4	11.8		
20	皿a	R-026	15	12.0	2.8	10.0		
21	〃	R-027	27	14.8	1.8	12.5		
22	〃	R-029	28	15.2	2.7	12.7		
23	〃	R-030	29	18.8	2.3	15.0		
24	〃	R-028	30	21.0	2.6	18.0		
25	蓋c1	R-019	4	15.2	3.2+			
26	〃	R-018	5	18.2	2.3			
27	蓋c2	R-013	7	16.0	2.0			
28	蓋c3	R-012	8	15.0	2.6			
29	〃	R-015	9	15.2	2.2			
30	〃	R-011	10	16.0	3.4			
31	大蓋c3	R-014	11	18.0	2.2			
32	蓋a1	R-020	1	12.9	2.3			
33	蓋1	R-016	2	12.4	3.1+			
34	〃	R-017	3	16.2	2.4+			
35	蓋2	R-010	6	16.0	1.6+			

茶色粗砂

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器坏a	R-003	43	-	1.8+	8.3		
2	〃	R-002	42	-	1.5+	8.5		
3	小坏c	R-001	47	9.6	4.4	5.3		

表土

	器　種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
1	土師器坏a(?)	R-002	4	-	1.4+	6.7	○	
2	丸底坏a	R-001	5	15.4	3.8	-		○
3	蓋	R-007	3	14.4	1.5+			
4	須恵器坏c	R-003	2	-	3.8+	8.4		
5	蓋3	R-005	1	16.1	1.7+			

出土金属製品一覧

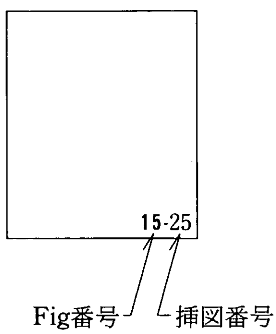
S-番号	遺構番号	種別	Fig.	挿図No.
条８７次				
3		鉄釘	-	-
5	87SD005　灰茶色土	鉄釘	-	-
	87SD005　茶色土	鉄釘、小銅片	-	-
7		鉄製環状金具	-	-
8	87SD008	鉄釘	-	-
10	87SD010	鉄釘	-	-
12	87SD012	不明鉄片	-	-
15	87SE015	刀子２点、鉄釘５点	13	11～15
		不明鉄片	-	-
18	87SD018	鉄釘	-	-
	87SD018　茶黒色土	鉄鎌、鉄釘	-	-
		不明鉄片	-	-
	87SD018　黒茶色土	不明鉄片	20	20
26	87SX026	鉄釘	22	11
30	87SD030	刀子	-	-
39	87SX039　茶黒色土	鉄釘２点、不明鉄片	22	12
44		不明鉄片	-	-
46		鉄釘	-	-
61		不明鉄片	-	-
62		鉄釘	-	-
64	87SX064	鉄釘	22	13
84	87SX084	鉄釘	-	-
112	87SK112　茶黒色土	不明鉄片	-	-
162		工具？	-	-
	茶褐色土	刀子	26	11
条９８次				
2	98SE002　黒色土	銅銭１７枚、鉄釘	PL17	-
4	98SE004	不明鉄片	-	-
5	98SX005　黒褐色土	鉄釘	-	-
12		工具？	-	-
16		鉄釘	-	-
条１０６次				
9	106SX009	鉄釘	-	-
13		鉄釘	-	-
14		鉄製留金具	-	-
15	106SD015	鉄釘	-	-
22		鉄釘	-	-
25	106SX025	刀子	-	-
35	106SD035	鉄釘	-	-
60	106SE060	鉄釘	-	-
103	106SX103　灰茶色砂	不明鉄片	-	-
132	106SX132	鉄釘、不明銅片	74	34
154	106SX154	鉄釘	74	35
163	106SK163	鉄釘	-	-
167	106SK167	鉄釘２点	68	32
178	106SX178	鉄釘	75	49
201	106SX201	鉄釘	-	-
241	106SX241	不明鉄片	-	-
248		鉄釘	77	10
249		不明鉄片	-	-
	茶褐色土	刀子、鉄釘	80	65～67
	黄色土	不明鉄片	-	-
条１１８次				
5	118SK005	鉄釘	-	-
10	118SD010	鉄釘２点、工具	92	26
11	118SX011	鉄釘２点	95	13
15	118SE020　暗灰色土	鉄釘	88	15
16	118SX016	鉄釘５点、刀子	95	23･24
25	118SK025	鉄釘	89	10

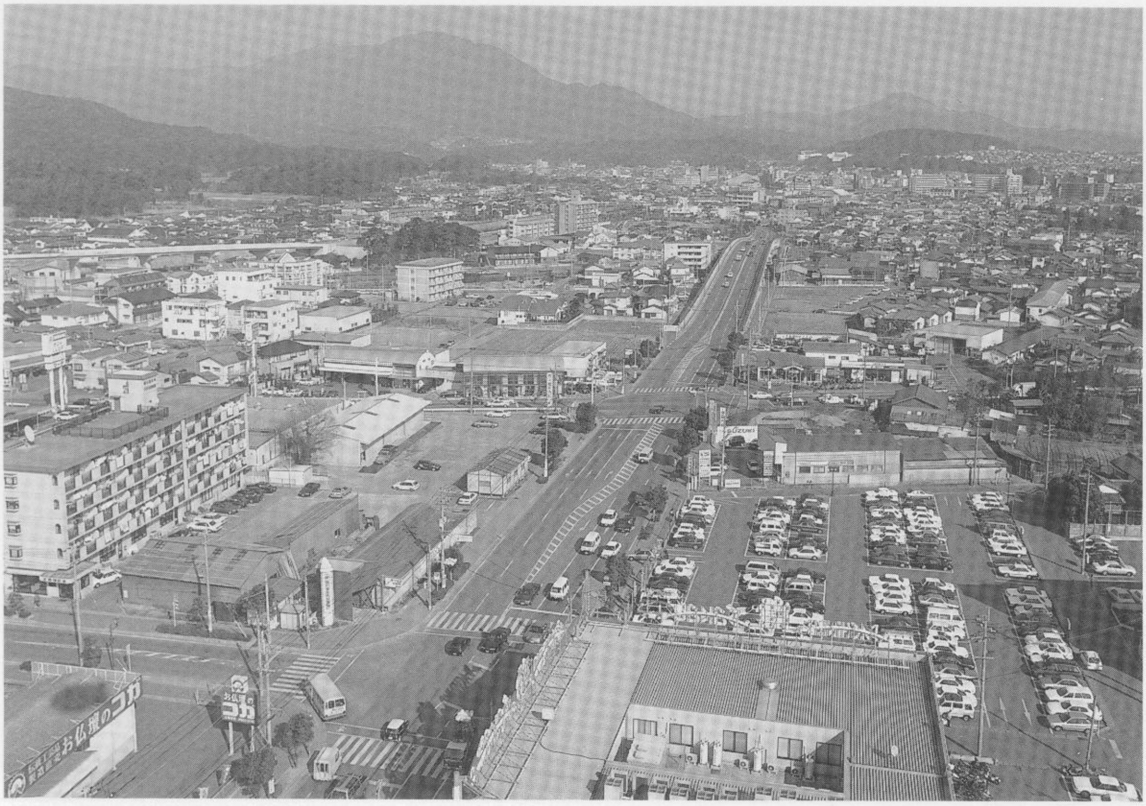
条１４１次				
5	141SD100暗茶灰色土	鉄釘、工具	108	20
10	141SD010	不明鉄片	-	-
40	141SX040	鉄釘４点、鉄鎌	122	10～13
		金具２点	122	14
65	141SD065	鉄釘	111	12
68	141SD068	鉄釘２点	-	-
70	141SD065	鉄釘、刀子	111	11
85	141SE085灰色砂土	鉄釘、不明銅片	107	3
95	141SK095	鉄釘	-	-
100	141SD100	工具？	108	21
110	141SB110	不明鉄片	-	-
114		鉄釘	106	4
167	141SX167	鉄釘２点	-	-
	淡灰色土	銅鏡片、鉄釘	126	16・17
		不明鉄片	-	-
	暗灰色土	不明鉄片	-	-
	茶褐色砂	不明鉄片	-	-
	淡茶色土	鉄釘	-	-

写　真　図　版

凡　例

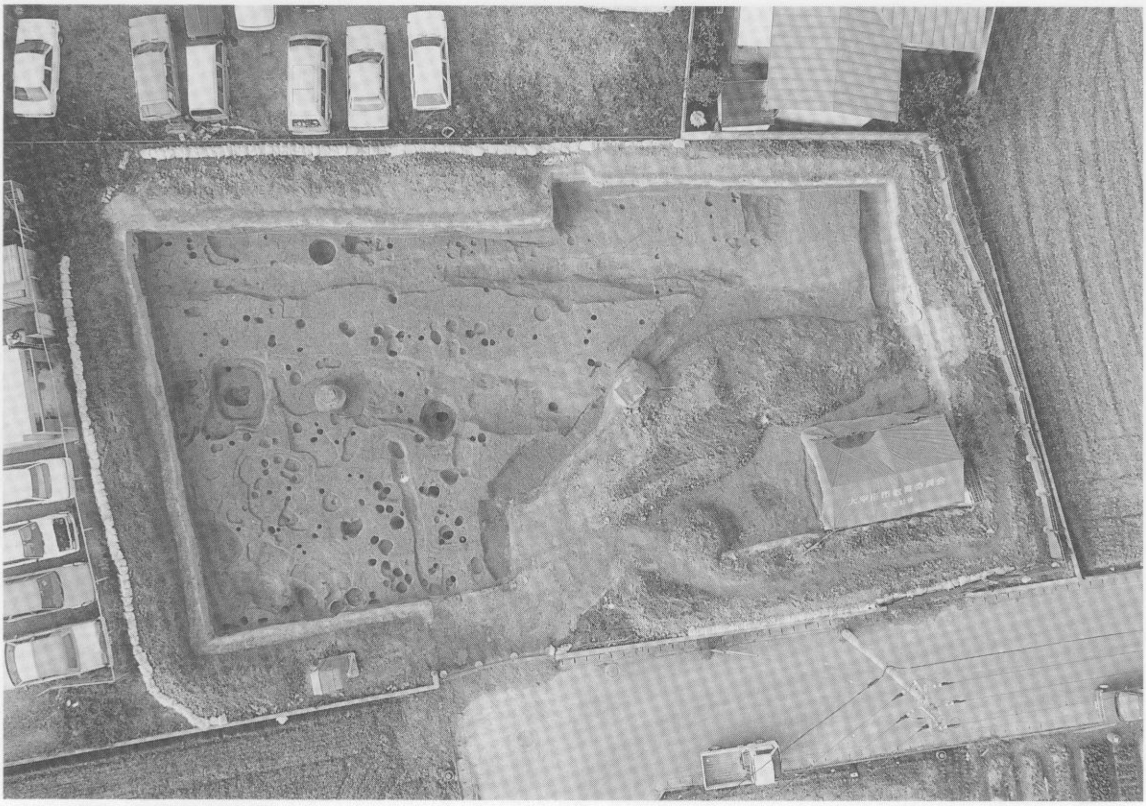
写真図版右下の番号は、
以下の要領で理解できる。



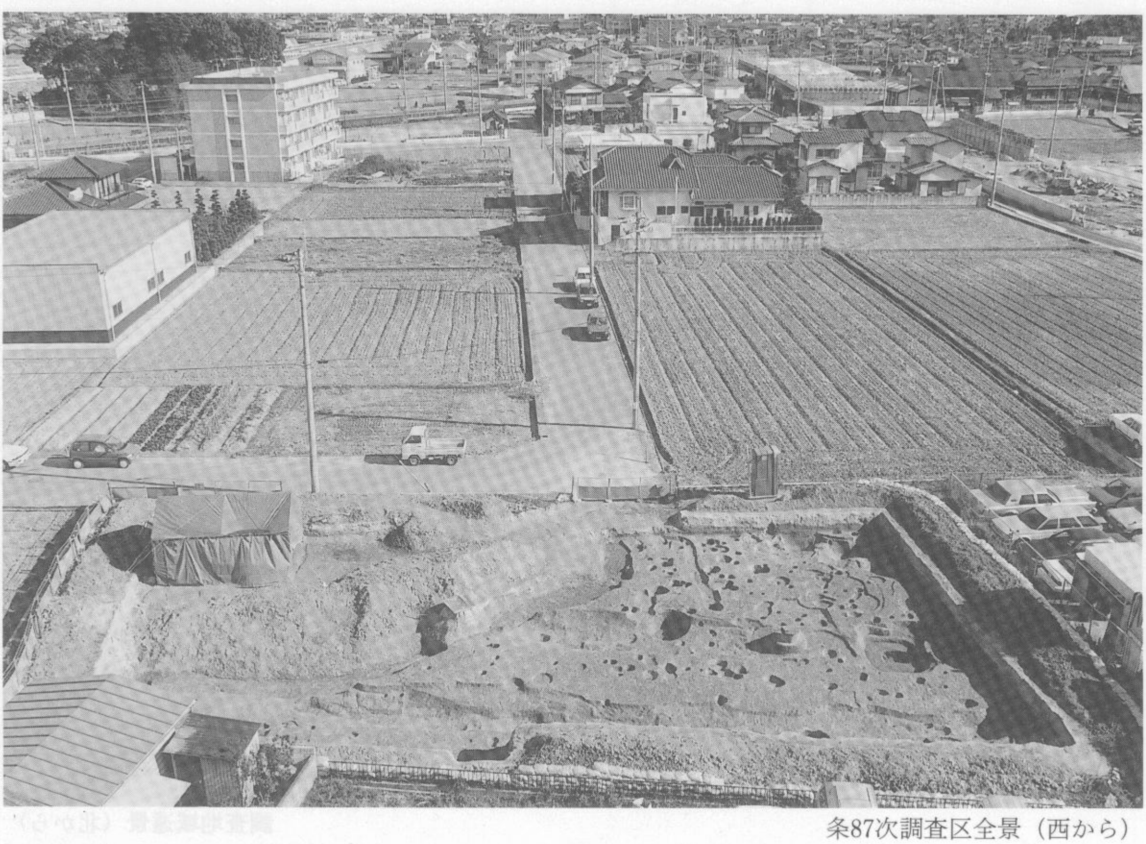


調査地域現況（西から）

調査地域遠景（北から）



条87次調査区全景（上が西）



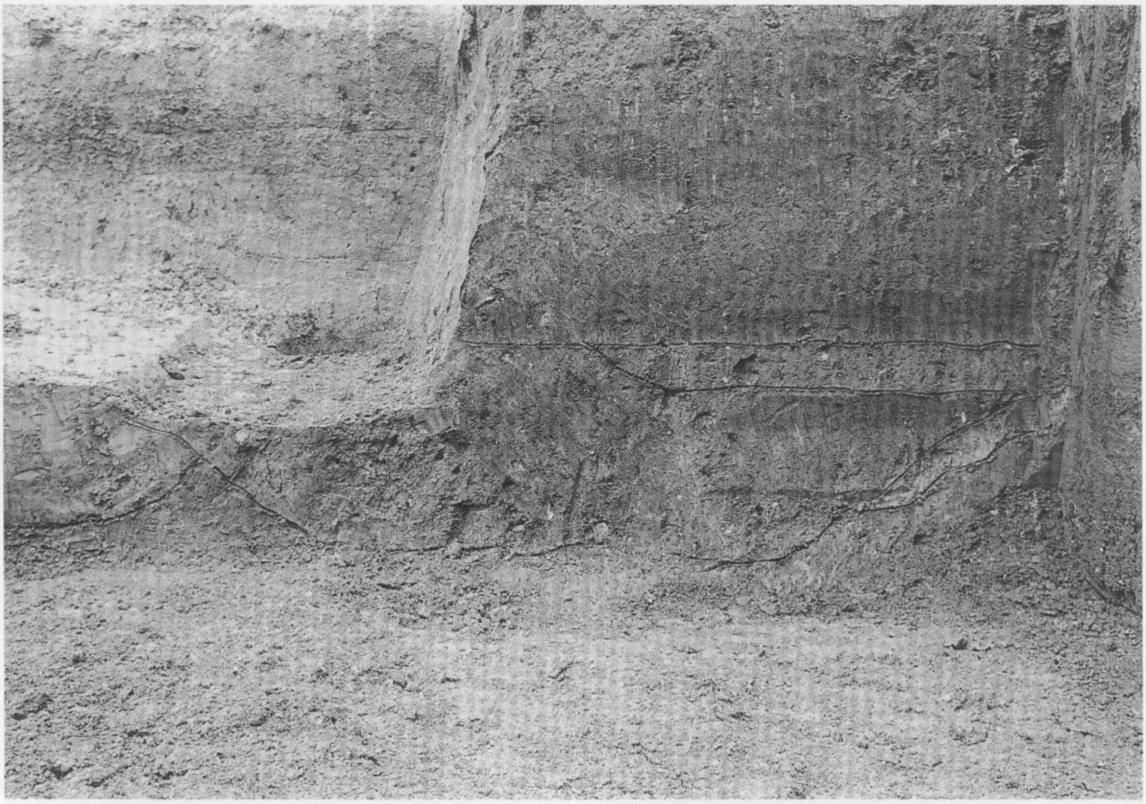
条87次調査区全景（西から）

87SF100全景（北から）

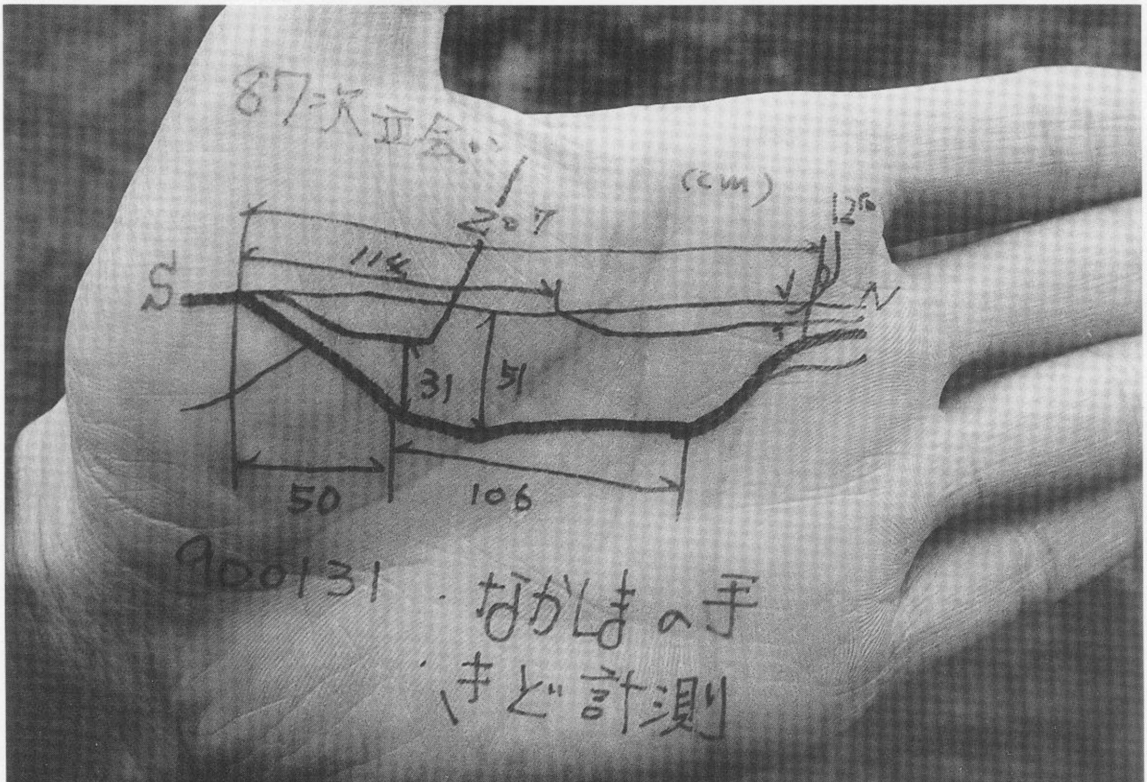
87SE015井戸枠痕跡検出状況（南から）

87SX137土器出土状況（南から）

87SK020土器出土状況（北から）



87SD040土層観察状況（東から）



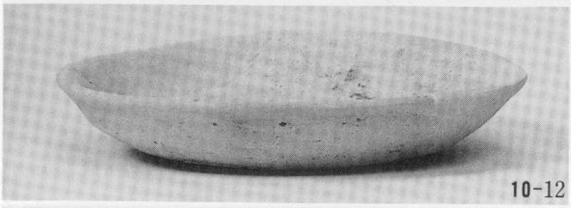
87SD040土層計測値模式図（撮影：狭川）

条87SE015

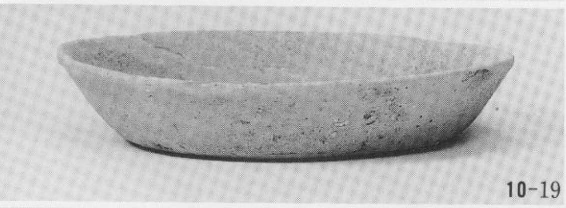

10- 2


10- 7


10- 9

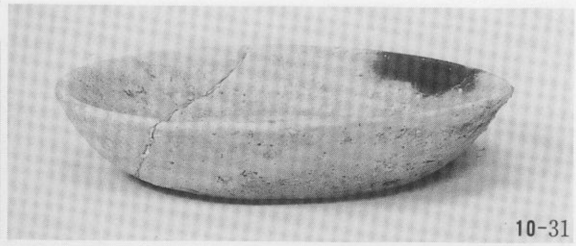

10-12


10-16


10-19


10-23


10-26

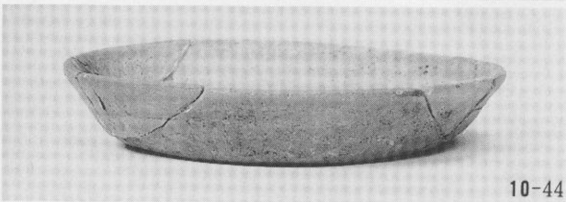

10-31

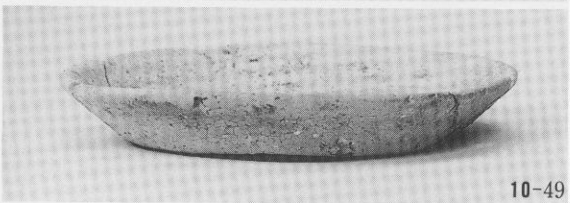

10-32


10-35


10-39


10-41


10-44

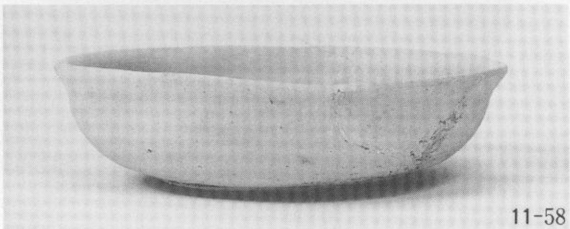

10-49


10-51


10-52


10-53

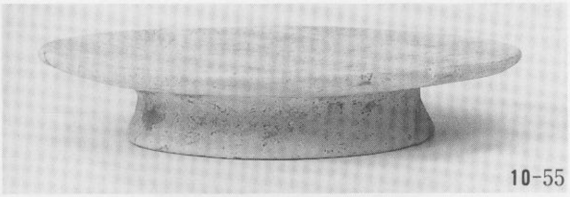

11-57

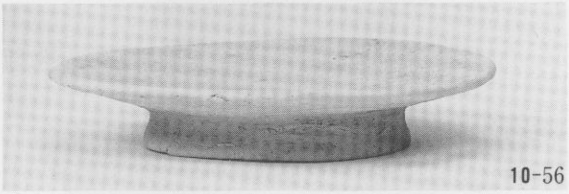

11-58

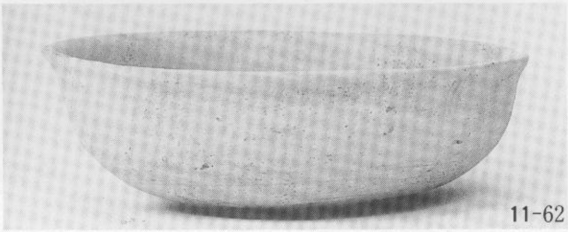

11-60


11-74


11-75


10-55


10-56


11-62

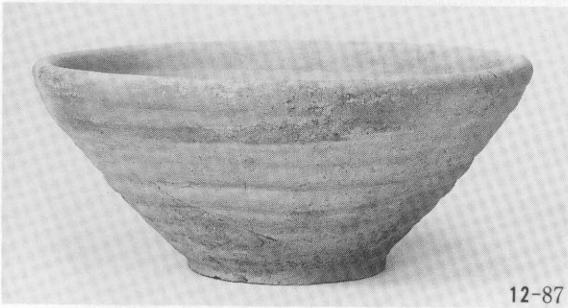

11-66


11-70

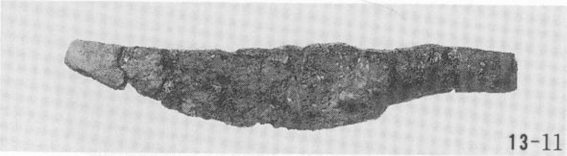

11-79


11-83

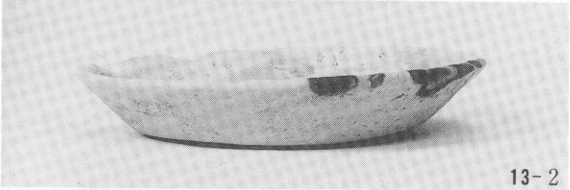

12-85

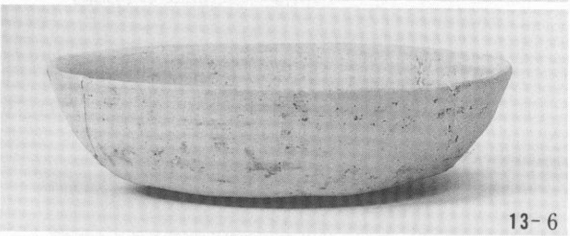

12-87

条87SE015黄茶色土


13-11

条87SE015灰茶色土

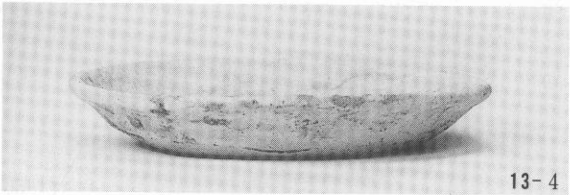

13- 2


13- 6

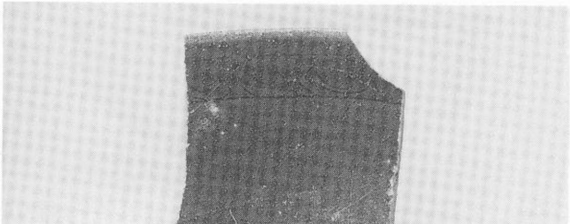

13- 7


12-92

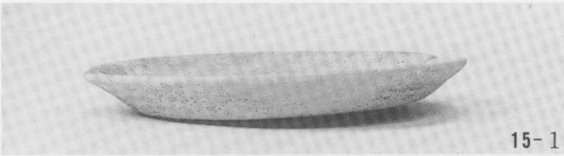

12-93

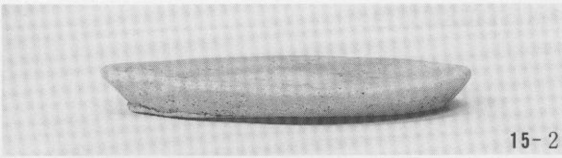

13- 4

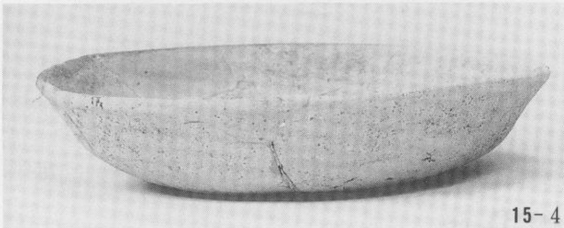
条87SE112

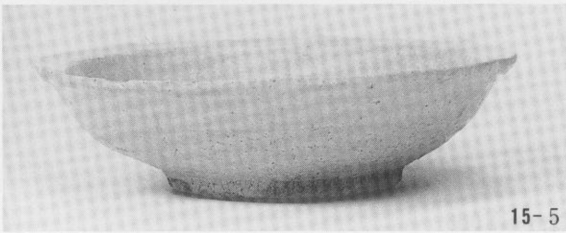

14- 3

条87SK010


15- 1


15- 2

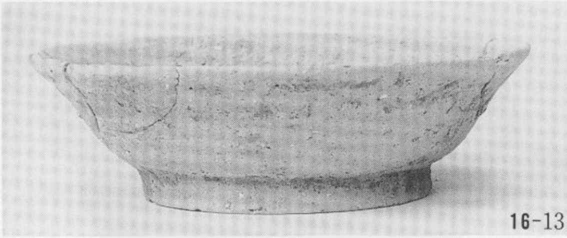

15- 4


15- 5

条87SK020

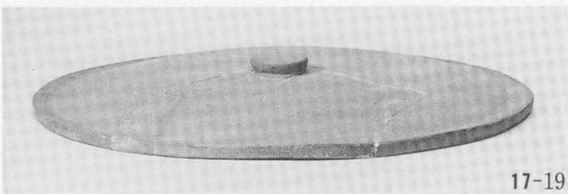

16- 4


16-12


16-13


16-15

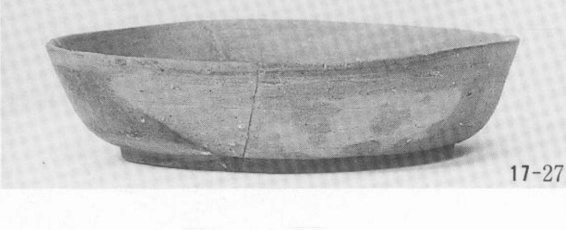
条87SK159

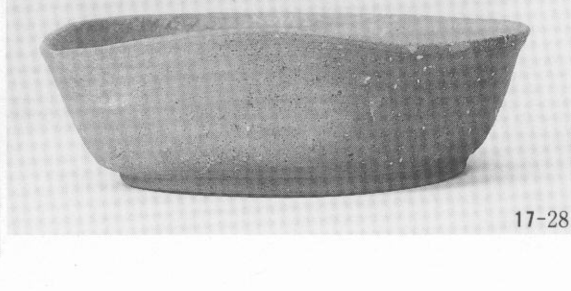

17-19


17-22


17-23

条87SK166


17-27


17-28

条87SD018黒茶色土

20-11

20-13

条87SX066

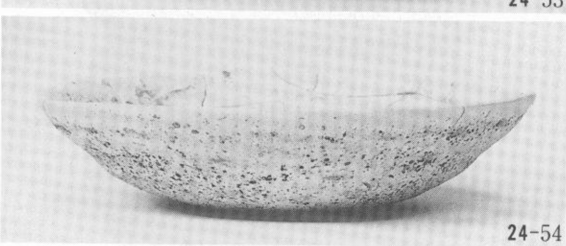
23-25

条87SX168

25-59

条87SX137

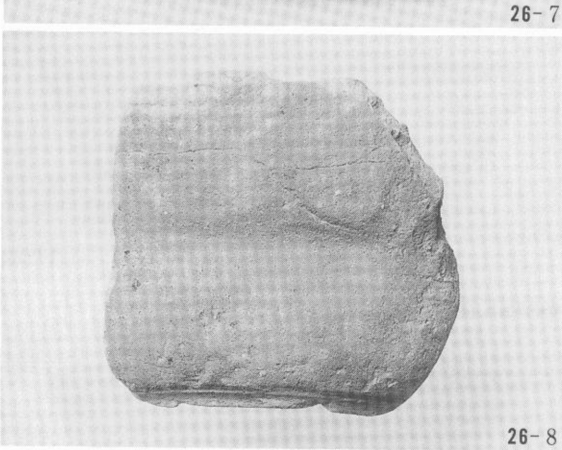
24-53



24-54

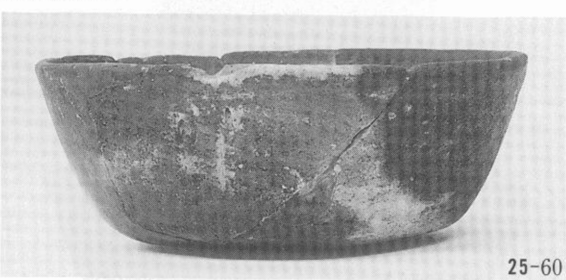
条87茶褐色土

26-7

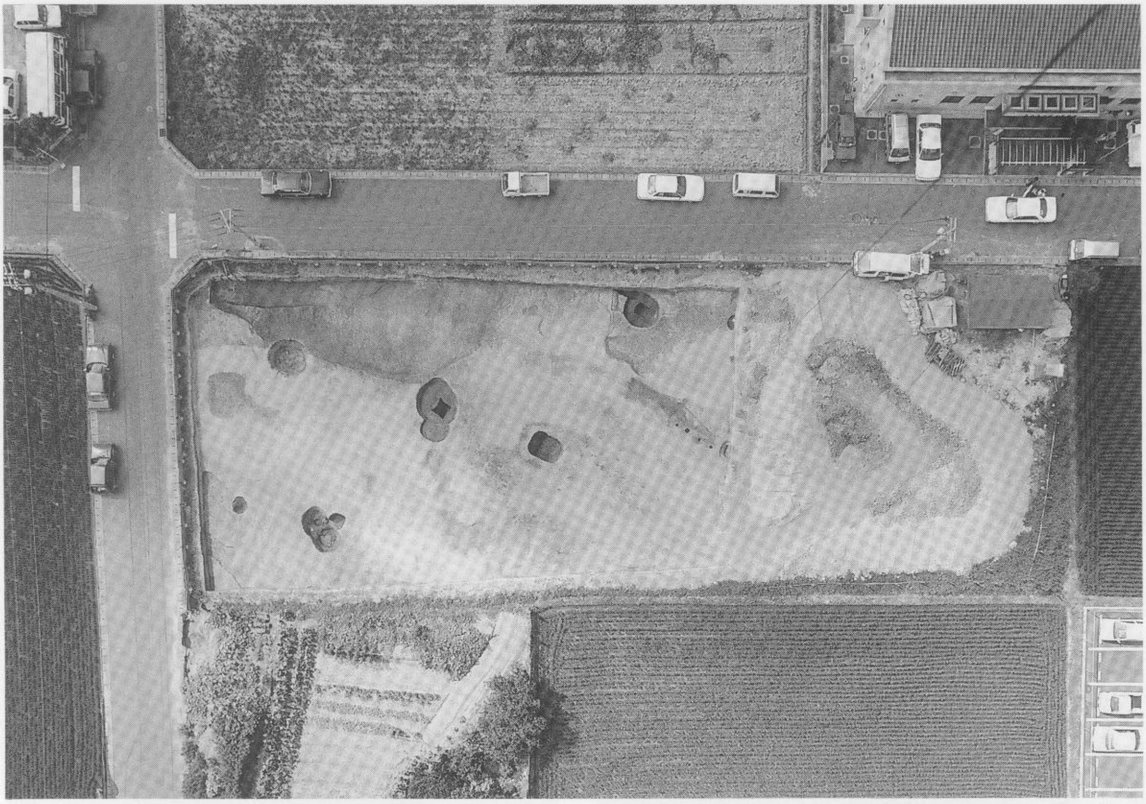


26-8

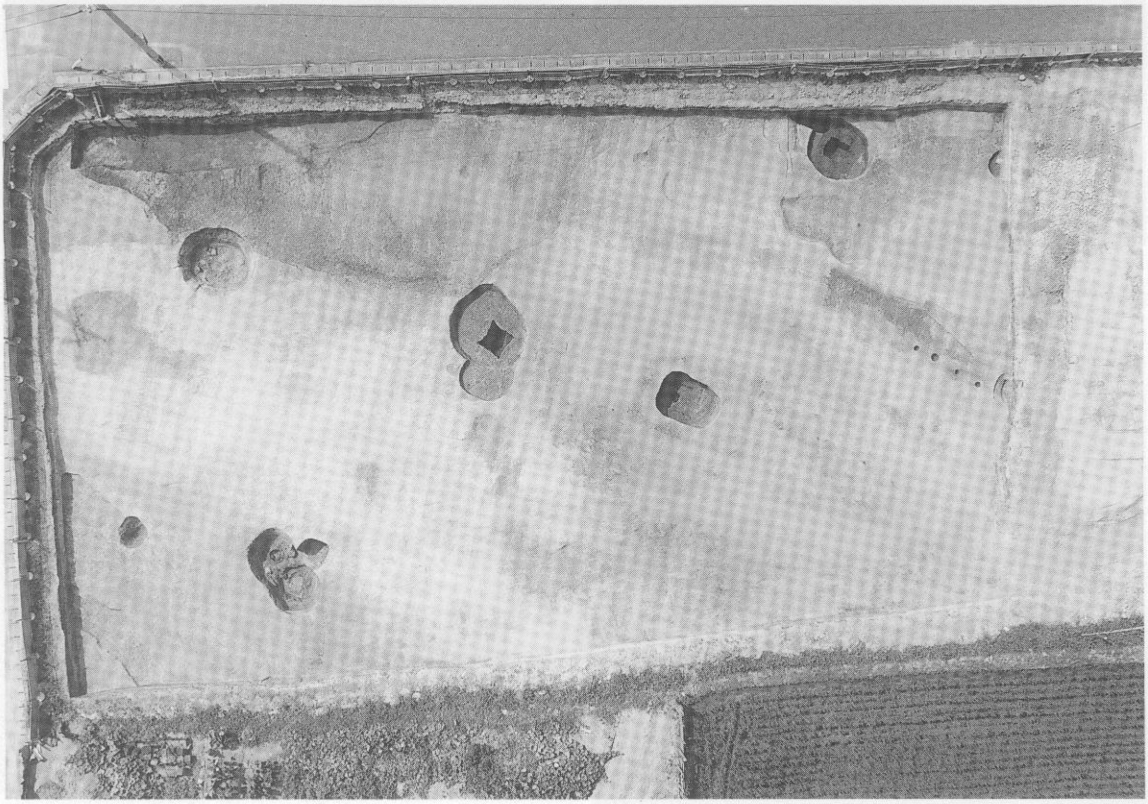
条87SX171



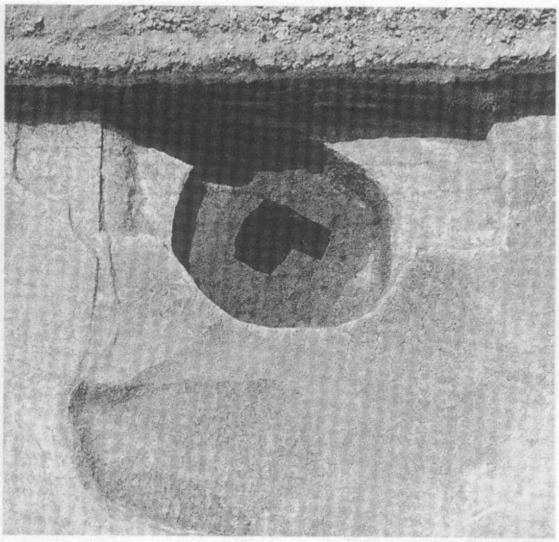
25-60

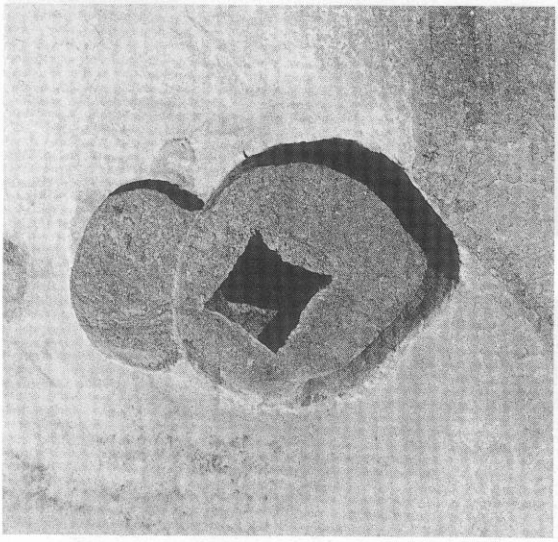


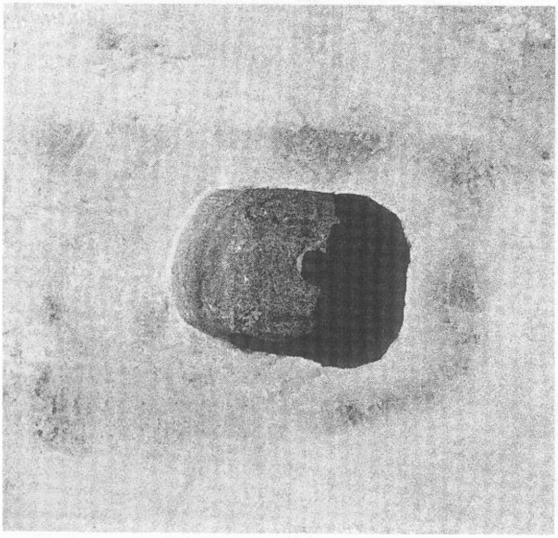
条98次調査全景（上が南）



条98次調査区全景（上が南）







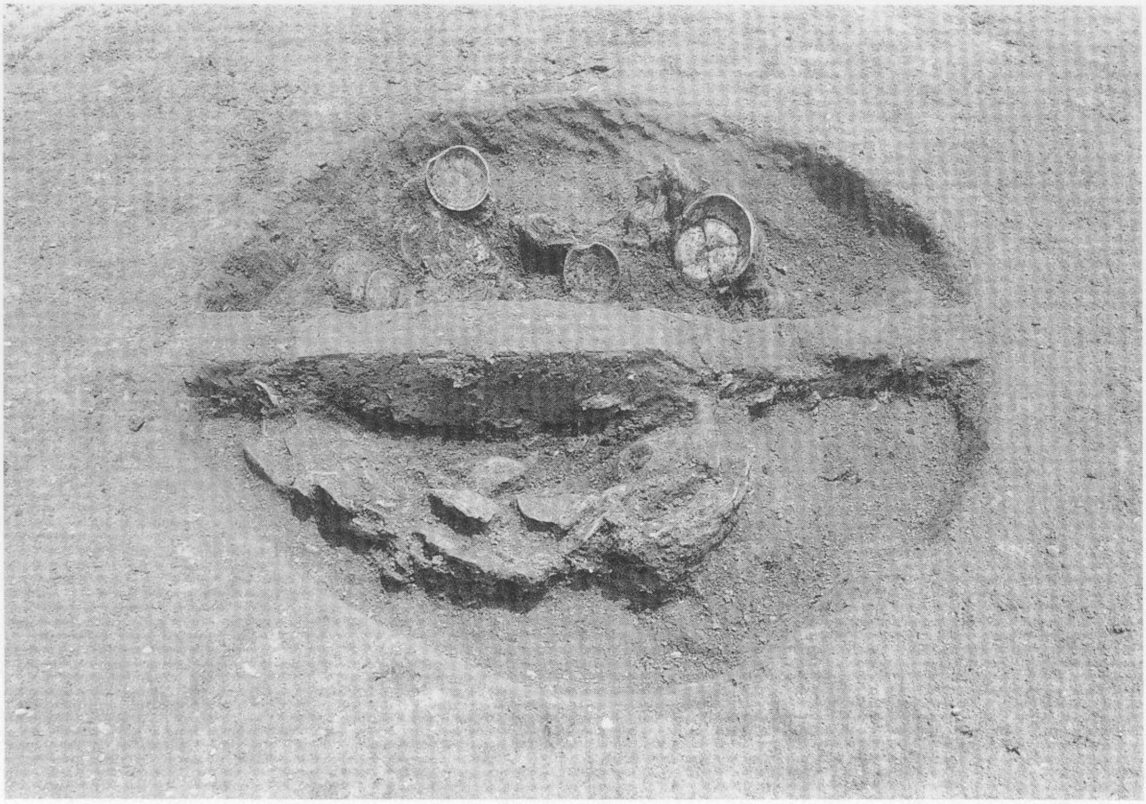
左上：98SE001全景（上が南）

左中：98SE002・003全景（上が東）

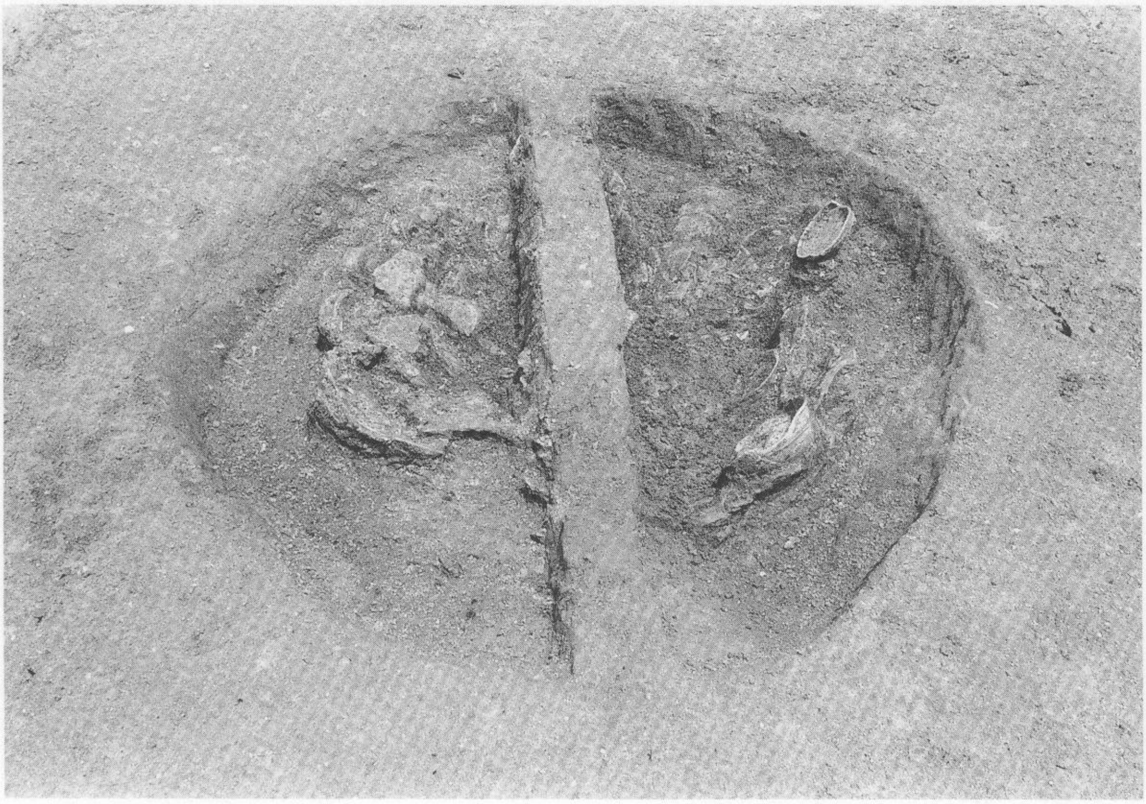
左下：98SE004全景（上が北）

右上：98SE006全景（上が南）

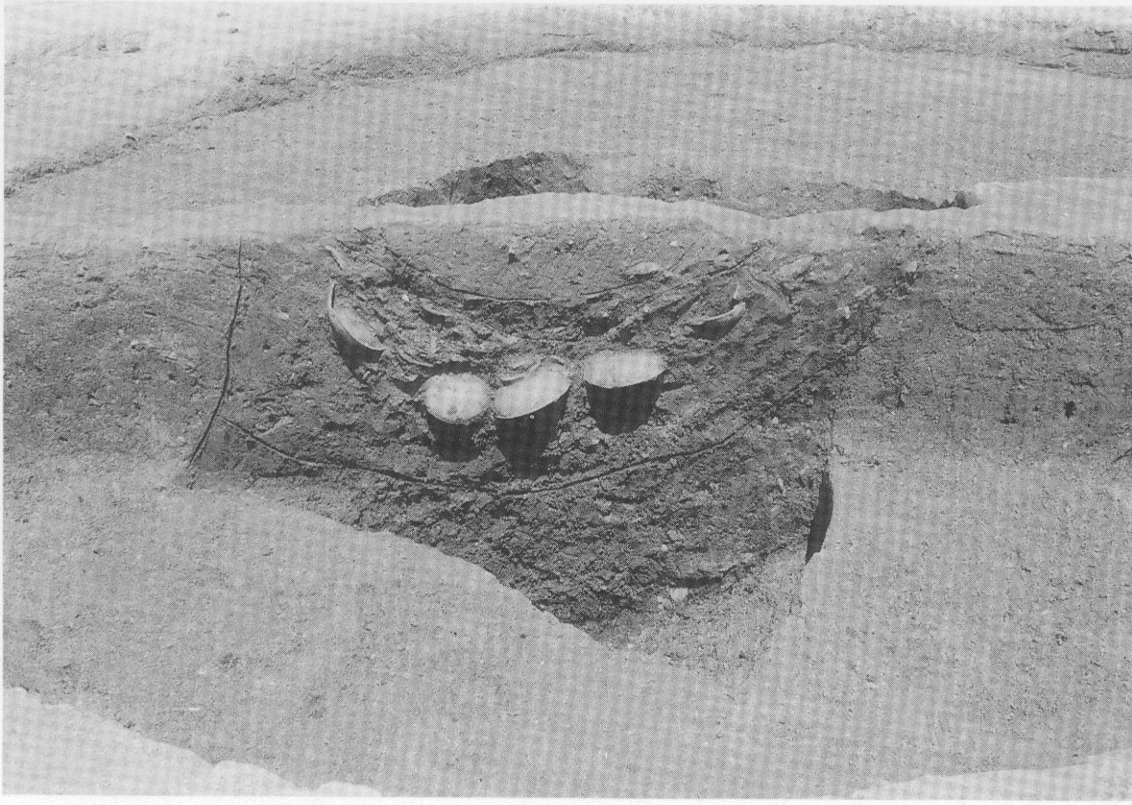
右中：98SE015全景（上が東）



98SE002土器出土状況（西から）



98SE002土器出土状況（南から）



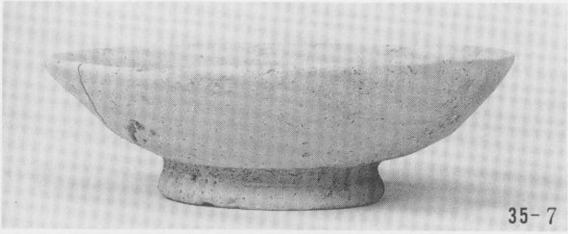
98SE002土層観察（西から）

98SE001土層観察（西から）

条98SE001黒灰色土

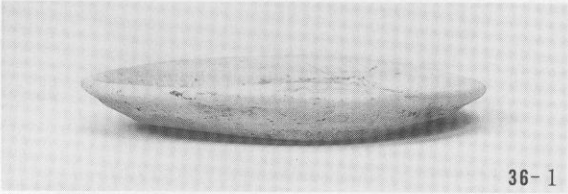

35-5

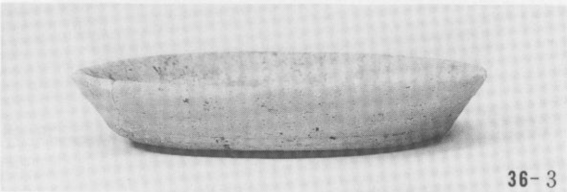

35-6

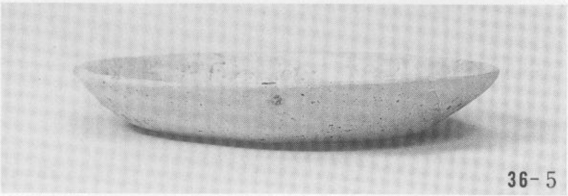

35-7

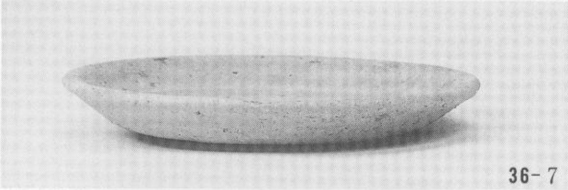

35-8

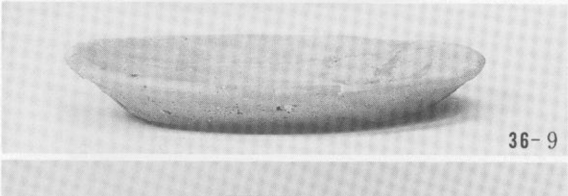
条98SE002黒色土

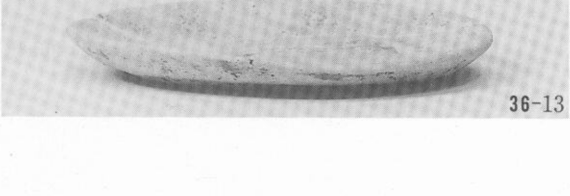

36-1


36-3


36-5


36-7

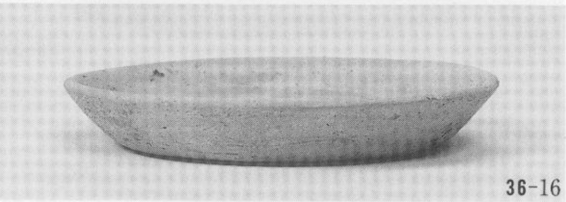

36-9

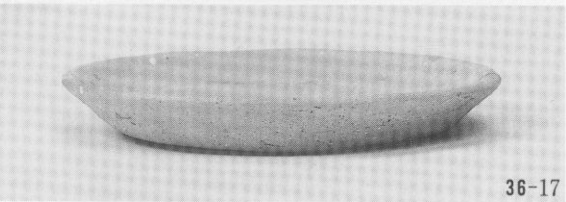

36-13

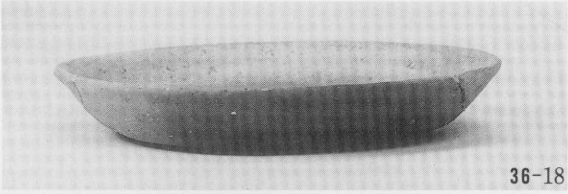

36-10

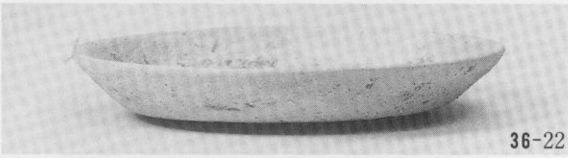

36-12

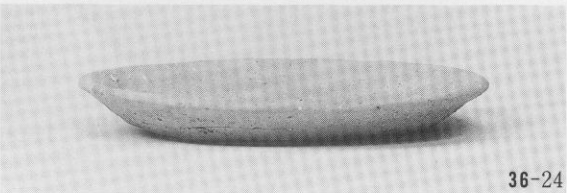

36-14

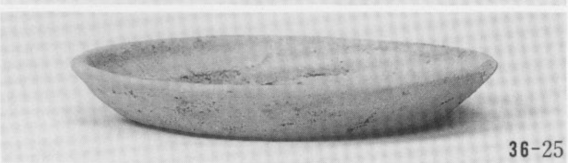

36-16


36-17

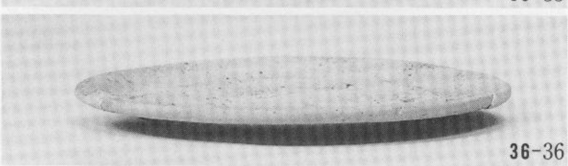

36-18

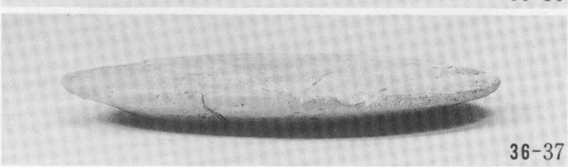

36-22


36-24

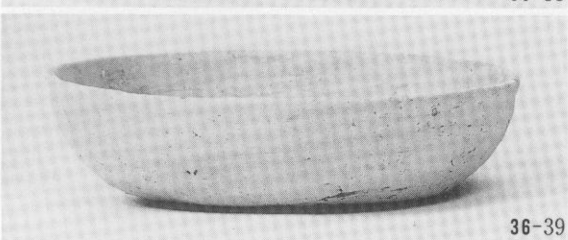

36-25

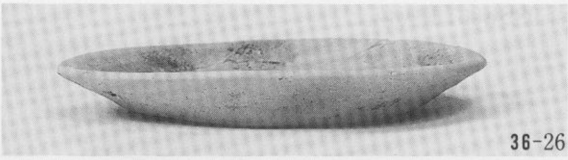

36-35

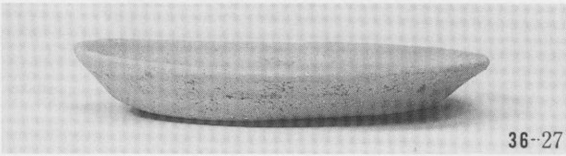

36-36

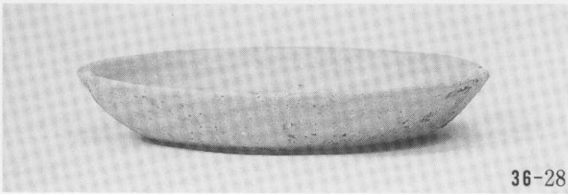

36-37


36-38

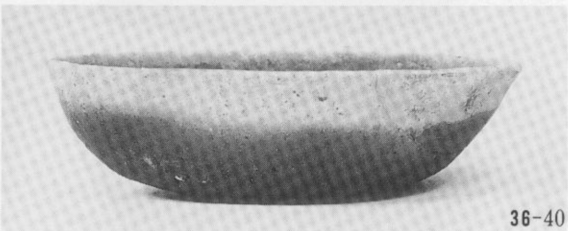

36-39

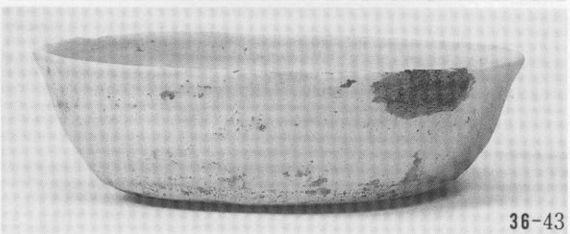

36-26

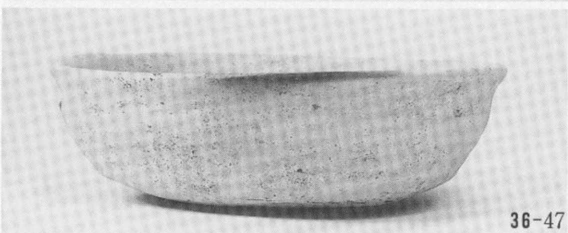

36-27

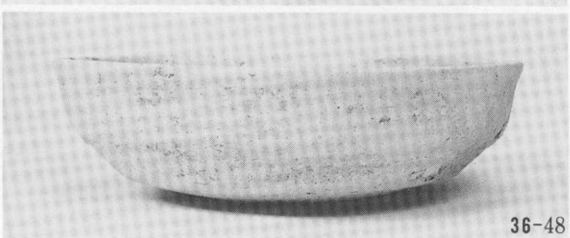

36-28

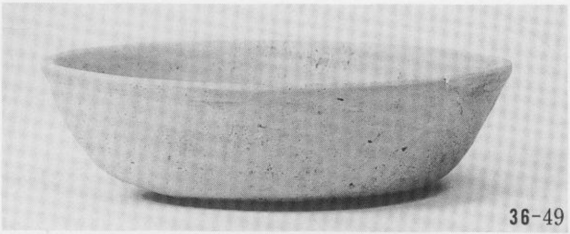

36-29


36-40

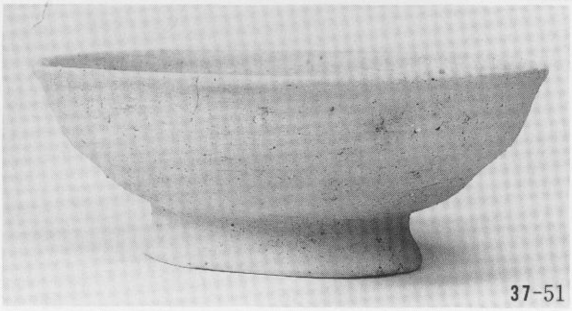

36-43


36-47


36-48


36-49

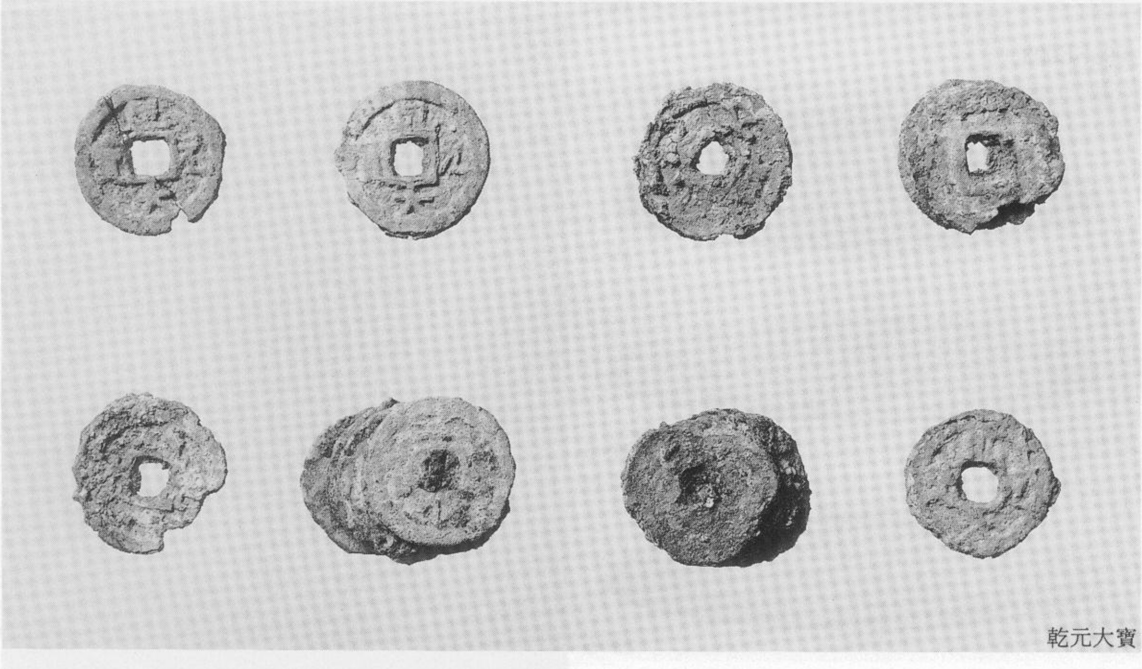

36-50

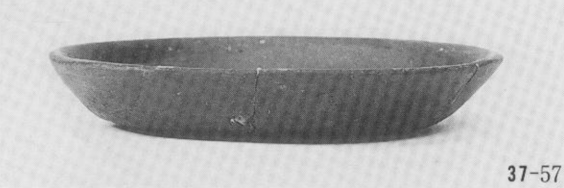

37-51

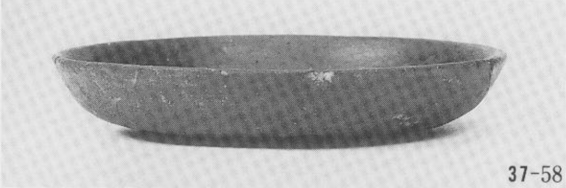

37-54


37-53

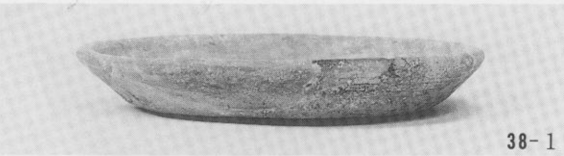

37-55

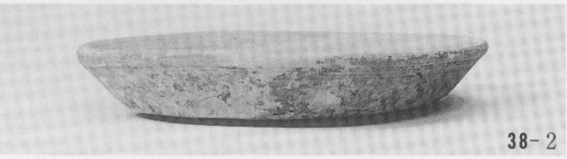

乾元大寶

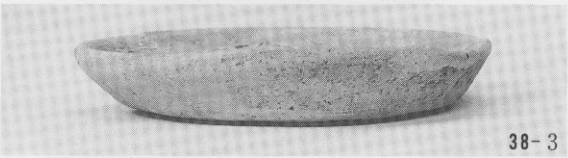

37-57

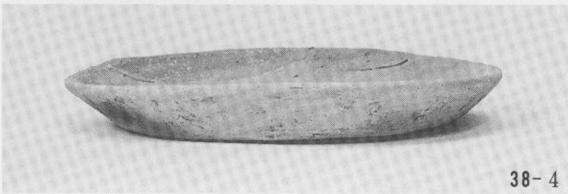

37-58

条98SE002黒茶色粘質土

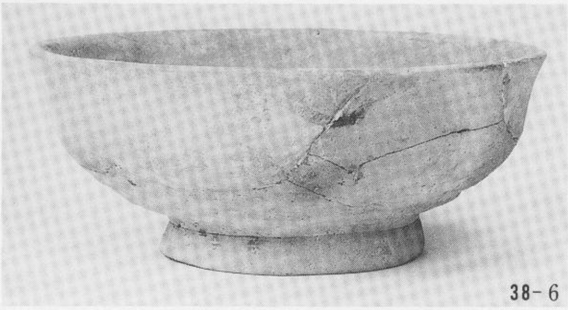

38-1


38-2

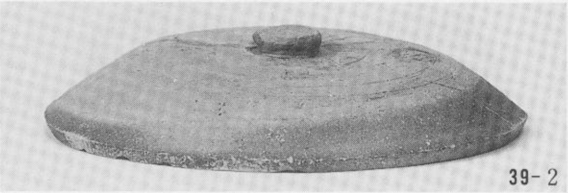

38-3

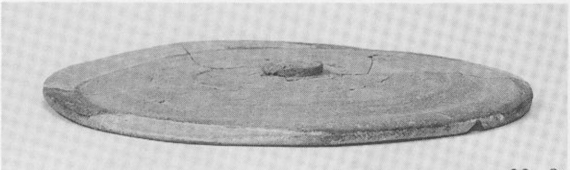

38-4

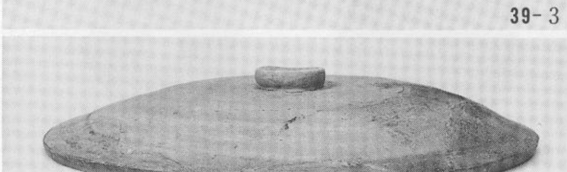

38-5

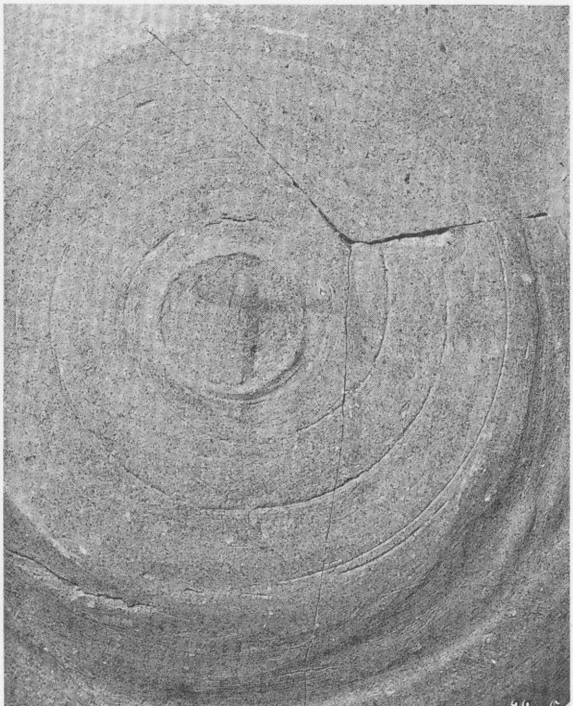

38-6

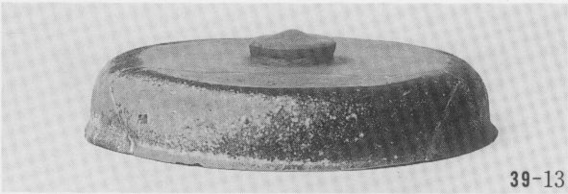
条98SE003

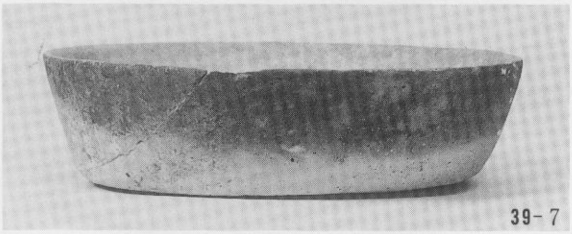

39-2

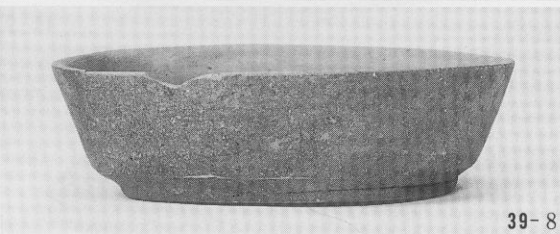

39-3

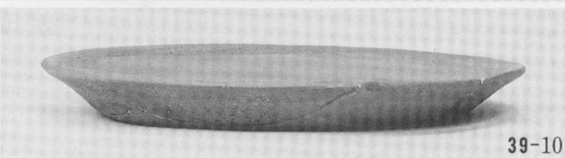

39-5


39-6

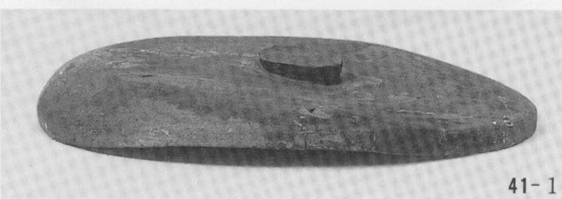

39-13

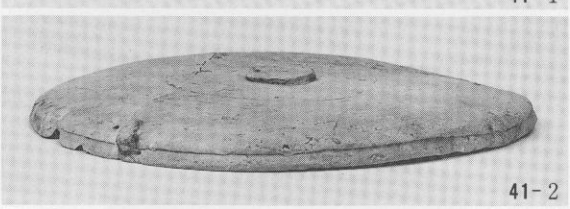

39-7


39-8

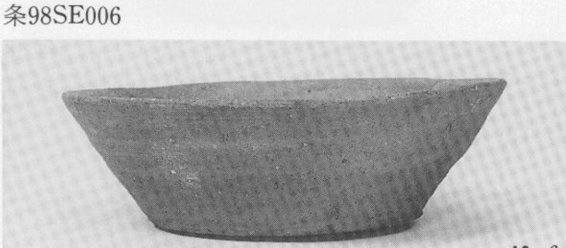

39-10

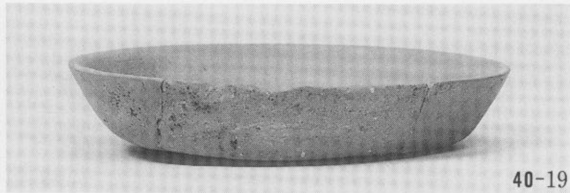
条98SE003枠内

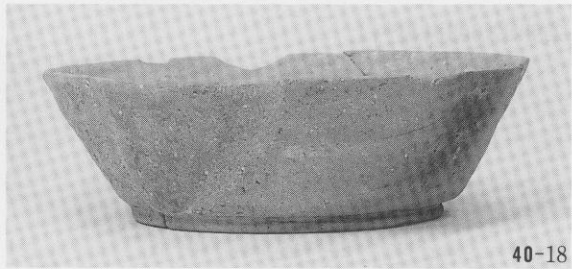

41-1


41-2

条98SE006


43-6


40-19


40-18

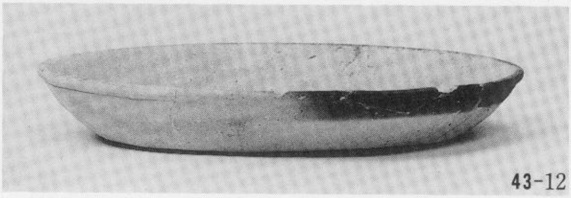

39-12

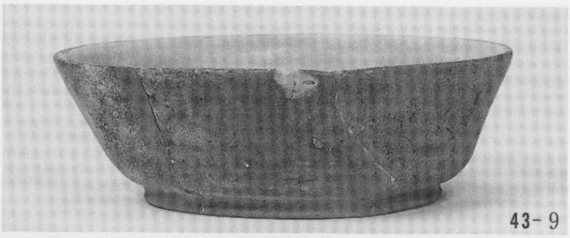
条98SE004


42-1

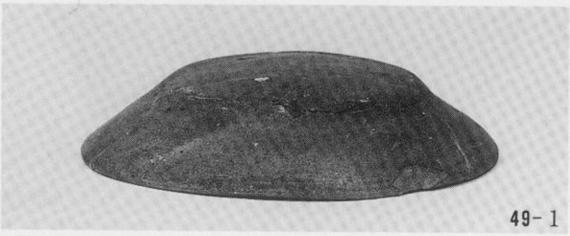

42-2


43-7

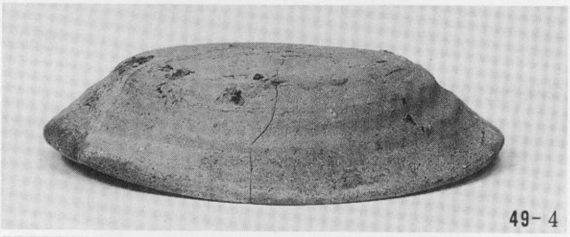

43-12


43- 9

条98SX005黒褐色土

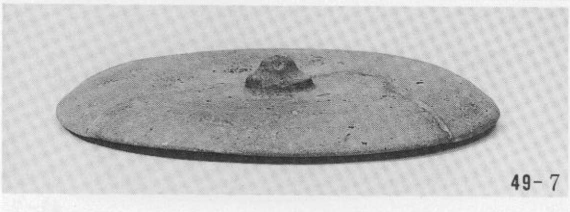

49- 1

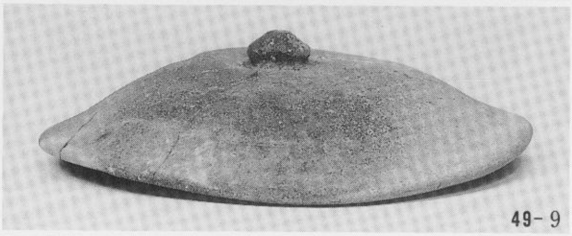

49- 2

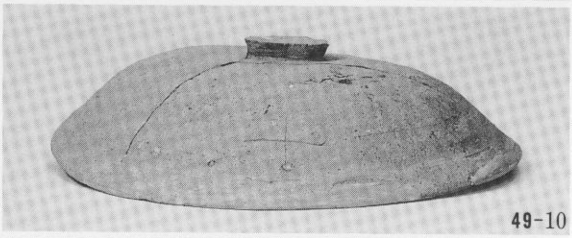

49- 4

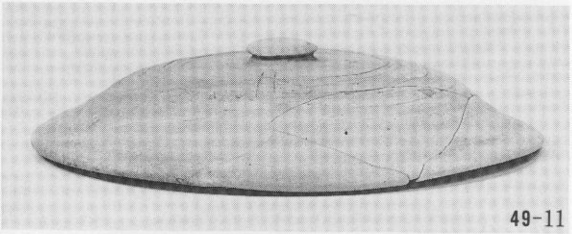

49- 5

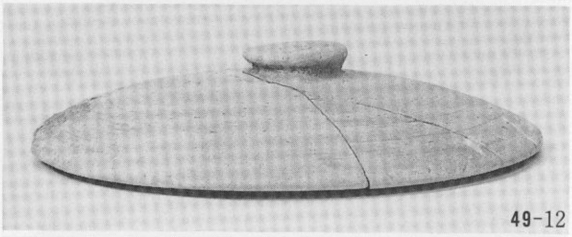

49- 6

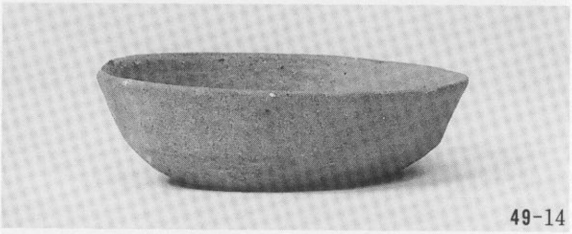

49- 7

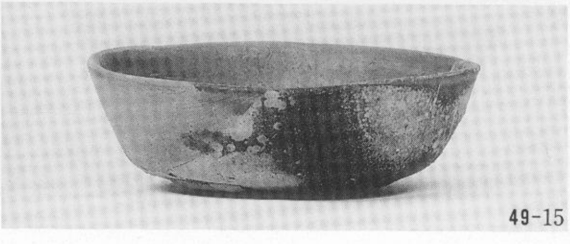

49- 9


49-10


49-11

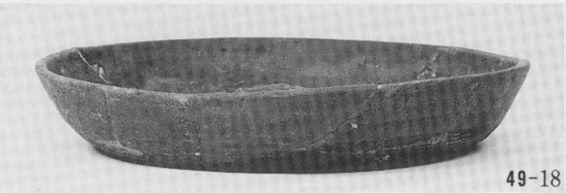

49-12

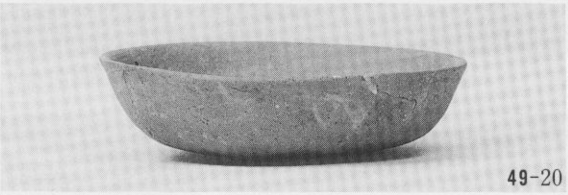

49-14

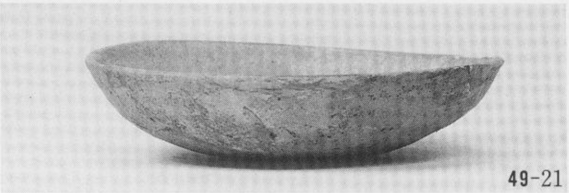

49-15

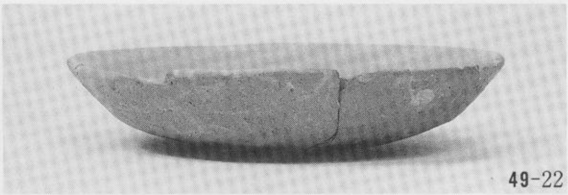

49-16

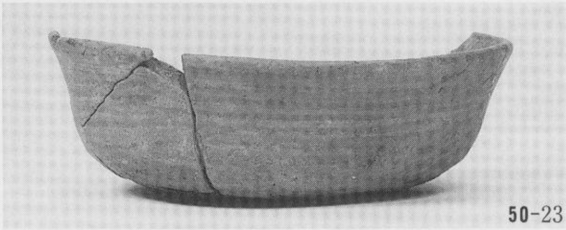

49-17


49-18

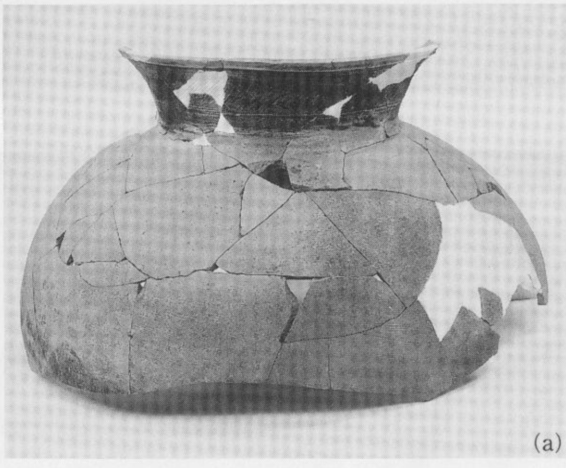

49-20


49-21


49-22


50-23


50-24


(a)

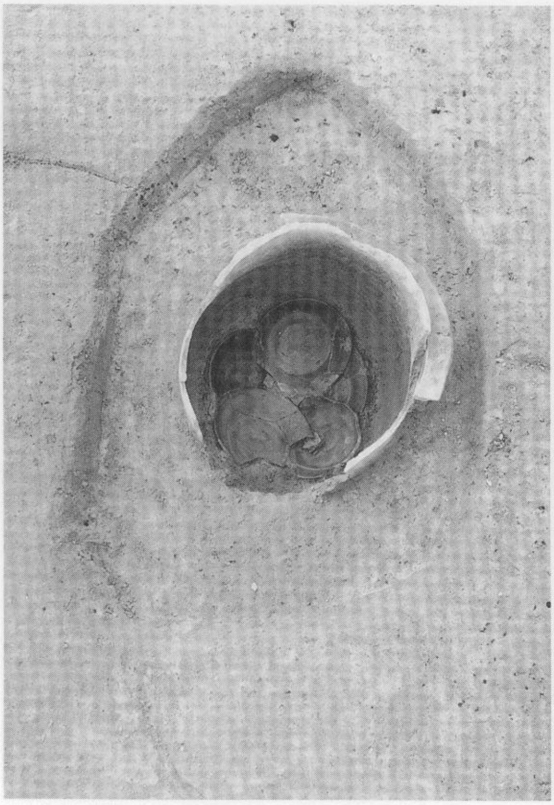

47-1～5

条106次調査区および政庁跡（西から）

条106次調査Ⅰ面遺構全景（上が北）

条106次調査Ⅰ面全景（西から）

条106次調査Ⅱ面全景（上が南）



106SK040土器出土状況（東から）

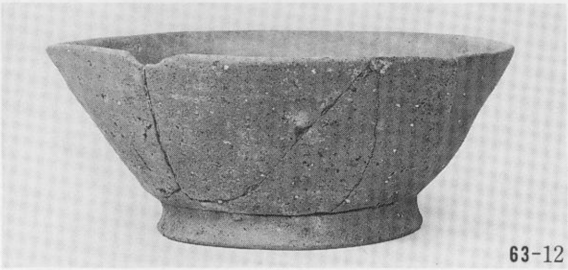
106SK011完掘状況（南から）

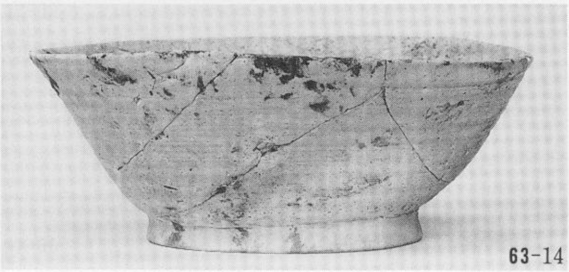
106SK040土師器・坏a埋納状況（東から）

条106SB070


62- 4

条106SE060


63-12


63-14

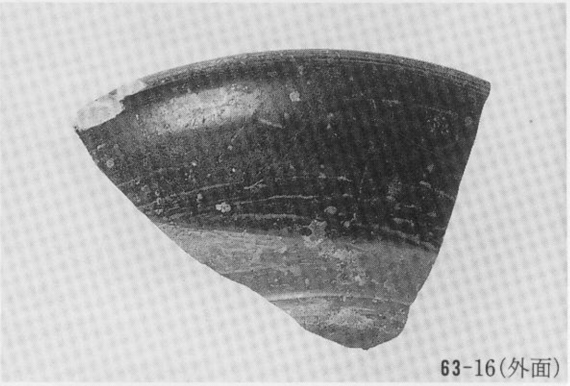
条106SK025

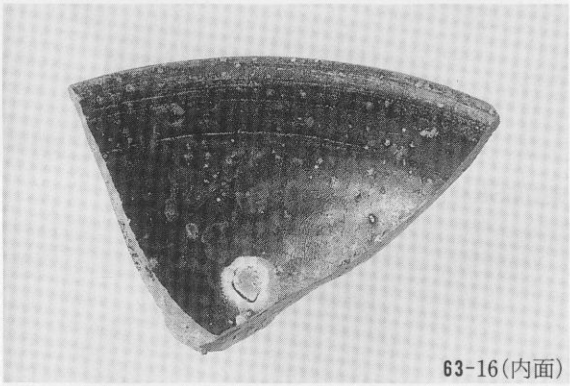

64-11

条106SK040


66-11

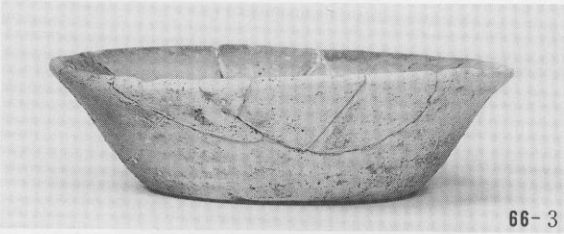

63-17


63-16(外面)

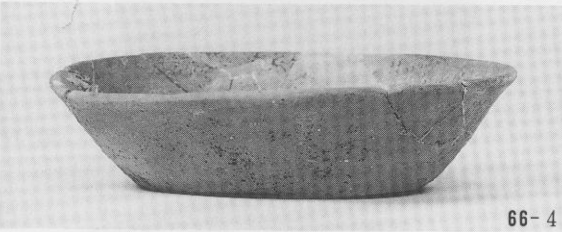

63-16(内面)


66-1


66-2

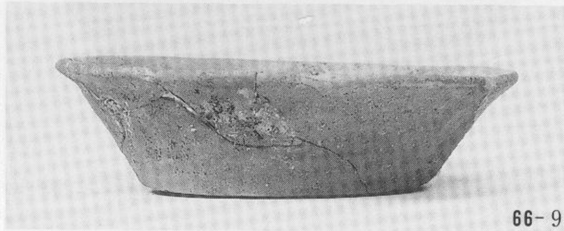

66-3


66-7


66-4


66-8

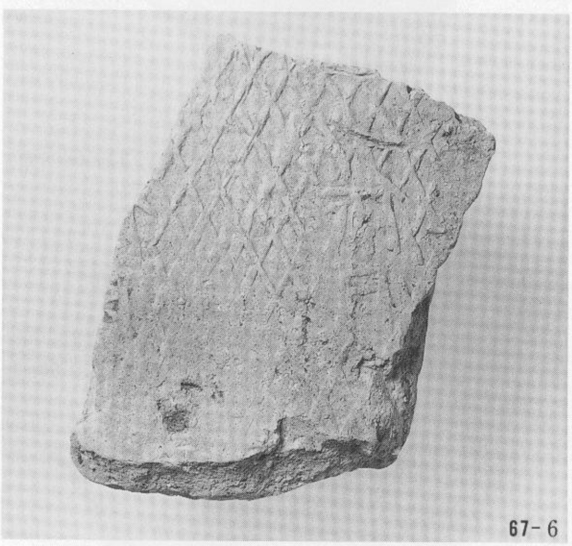

66-5


66-9

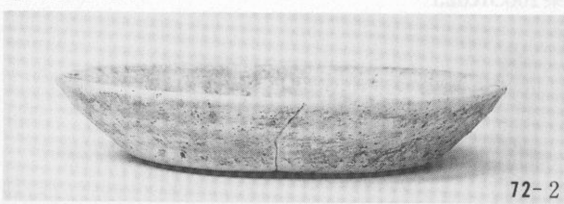

66-6


66-10

条106SK118


67-6

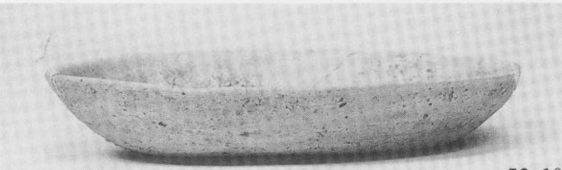
条106SX050


72-2


72-3

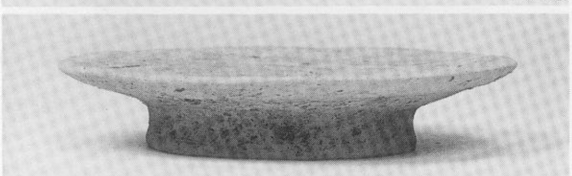

72-4

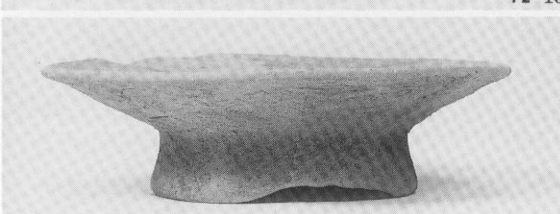

72- 5


72-10

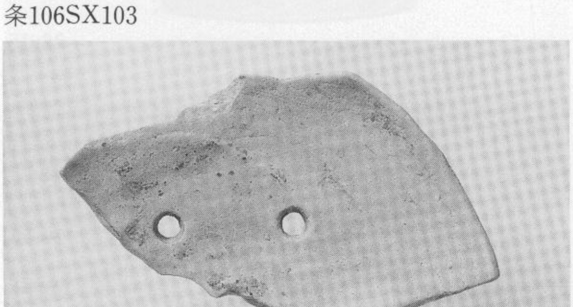

72-12


72-13


72-15

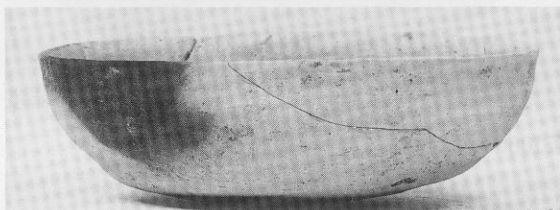

72-17

条106SX103


74- 9


72-21


72-23


72-24


72-26


72-29

条106SX132


74-20

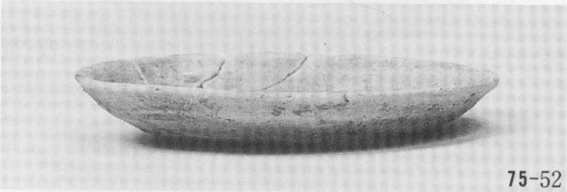

74-24

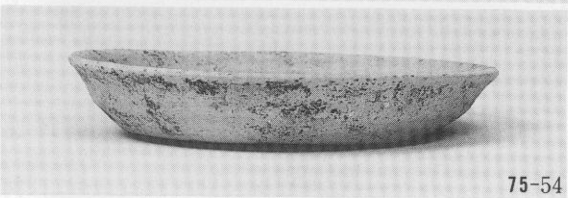
条106SX178


75-46


75-46

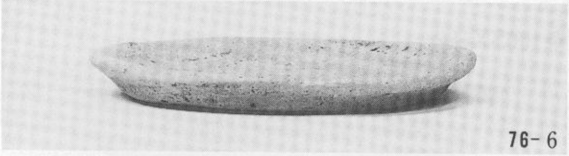
条106SX184


75-52


75-54

条106SX198

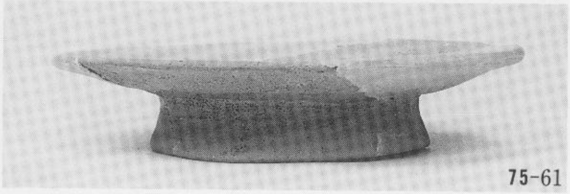

76- 4

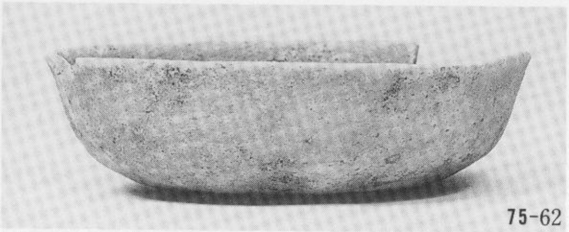

76- 6

条106SX198茶色土

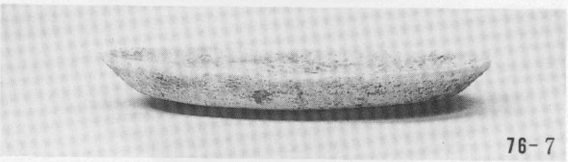

76-20

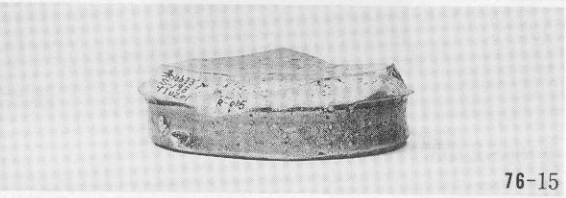

75-60

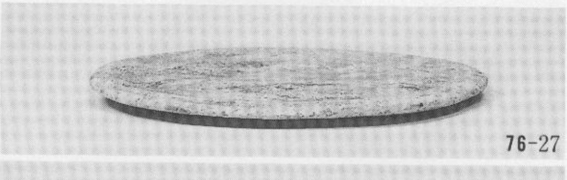

75-61

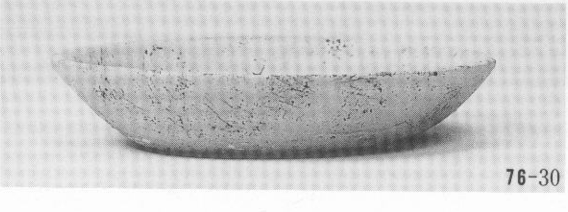

75-62


75-63


76- 7

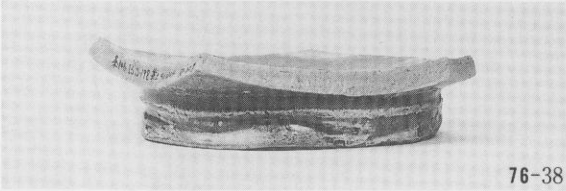

76-15


76-27

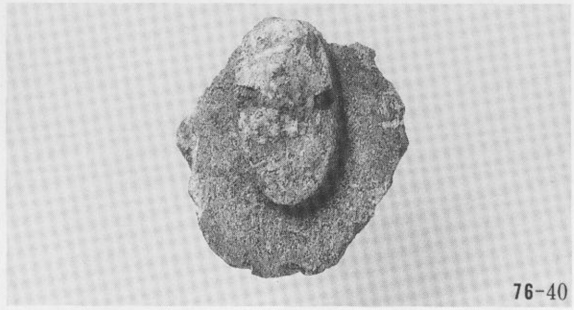

76-30


76-35


76-36


76-38

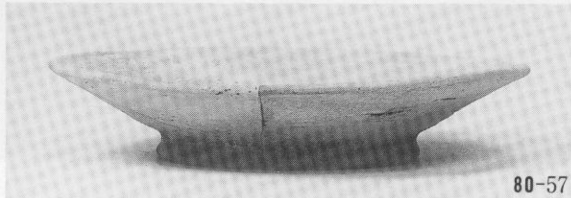
条106SX199

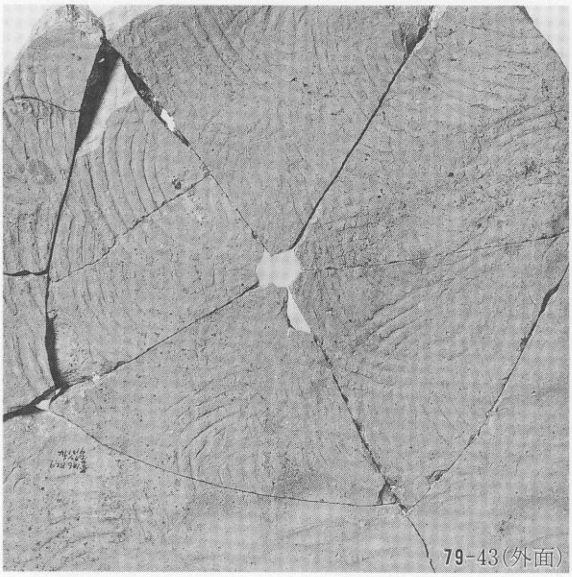

76-40

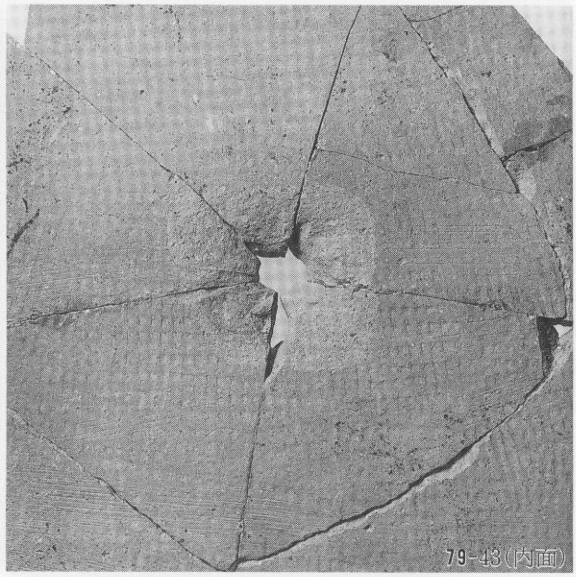
条106茶褐色土


79-20

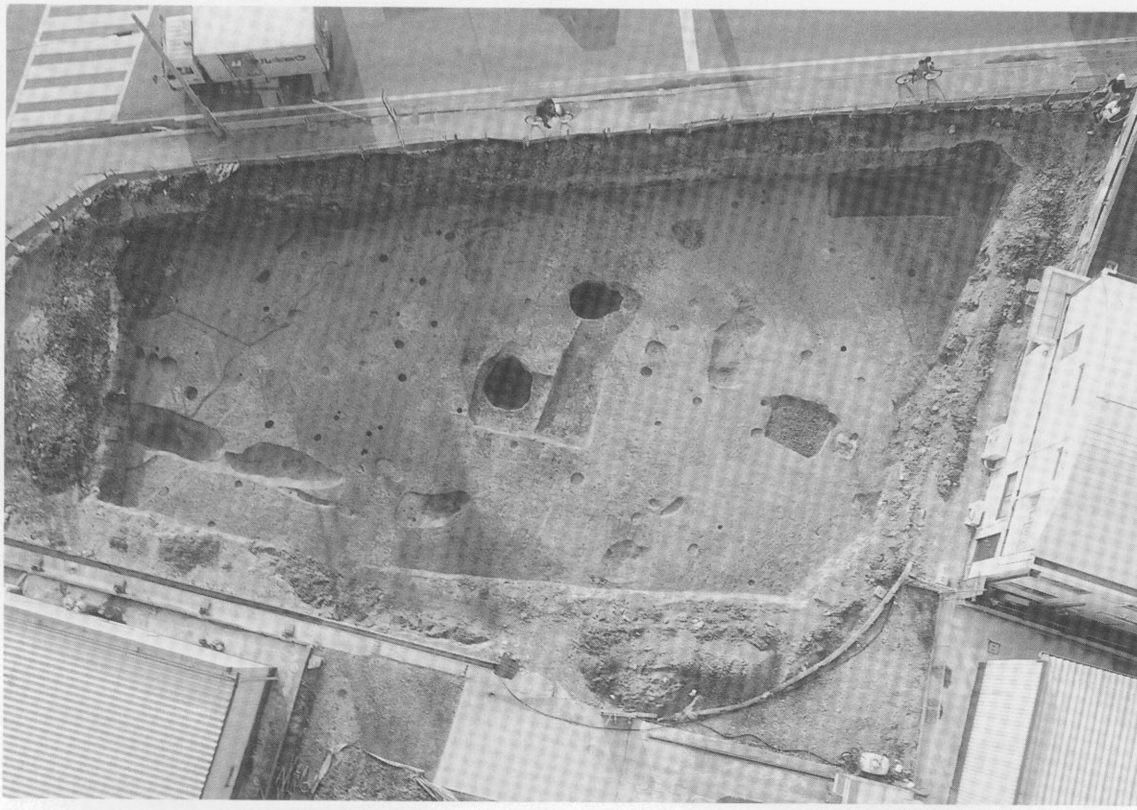

79-31


80-57

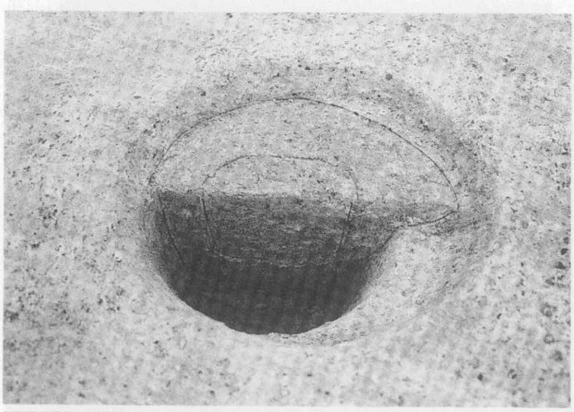

79-43(外面)

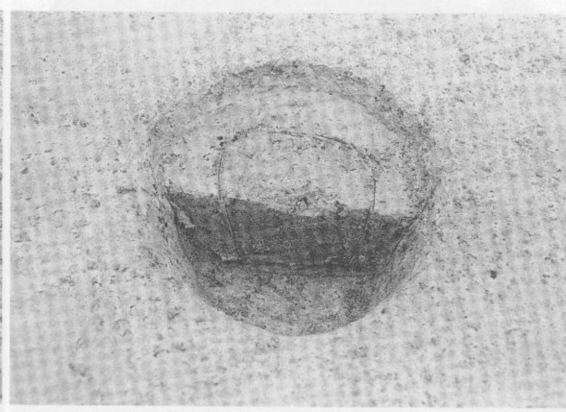

79-43(内面)


79-32



条118次調査全景（上が西）



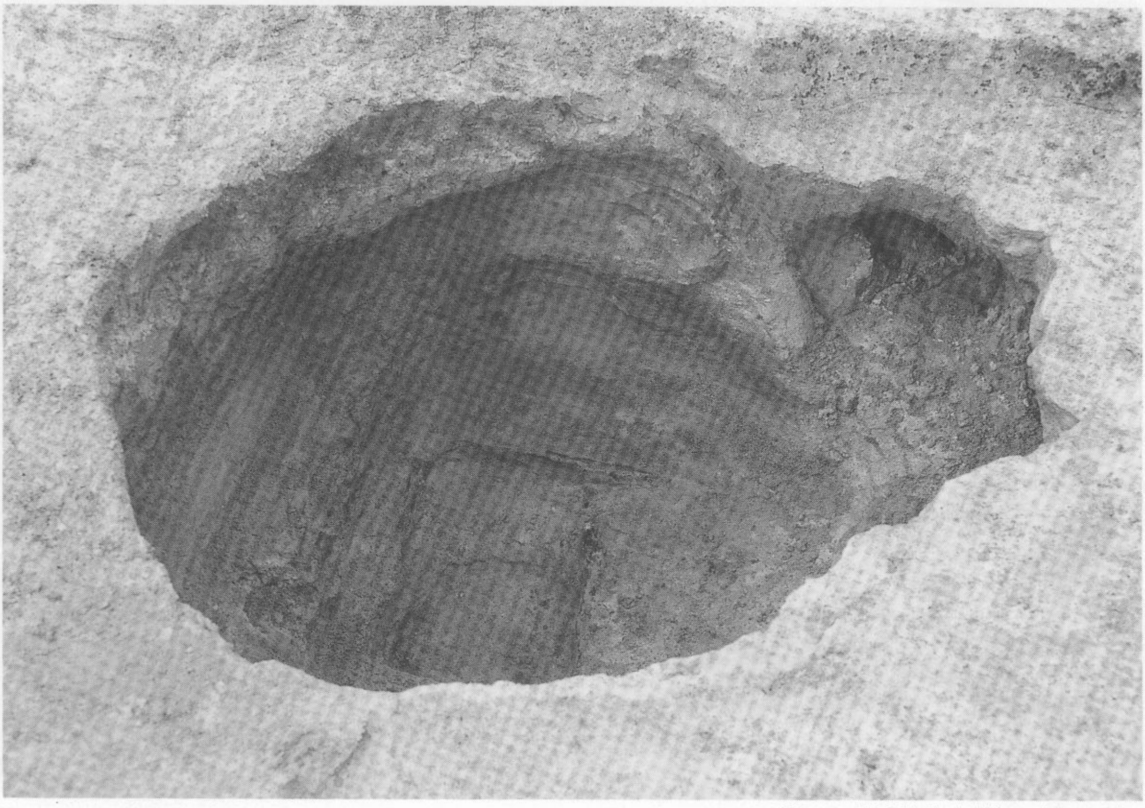


左上：118SB045柱穴d土層観察（南から）

左下：118SB045柱穴e土層観察（南から）

右上：118SB045柱穴f土層観察（南から）

118SE015井戸枠検出状況（東から）

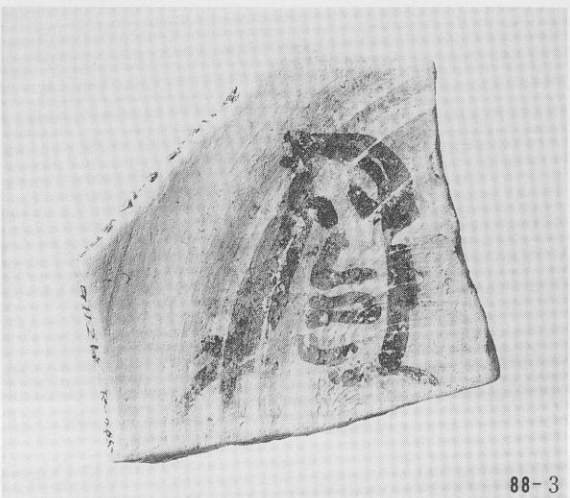


118SE020井戸枠検出状況（東から）

条118SB045

87- 2

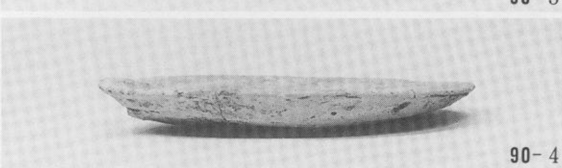
条118SB015青灰色土



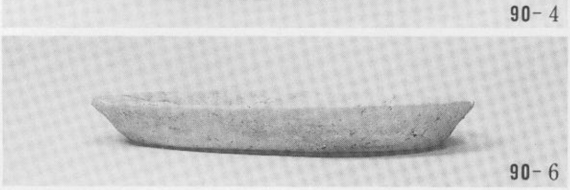
88- 3

条118SD010

90- 3



90- 4



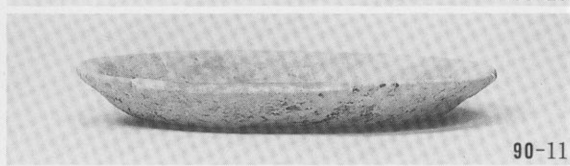
90- 6

90- 9

条118SE015暗灰色土

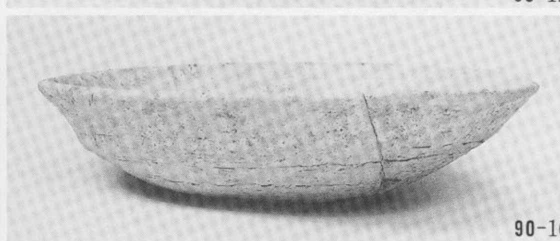
88-11

90-10

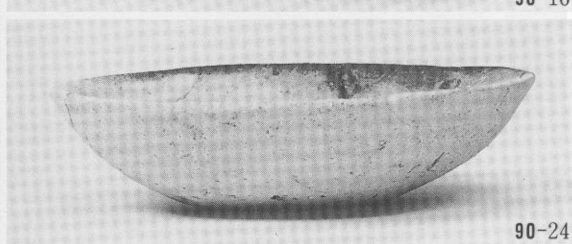


90-11

90-12



90-16



90-24

90-28


91-36


91-37


91-38


91-39


91-40

条118SD010上層


92- 7

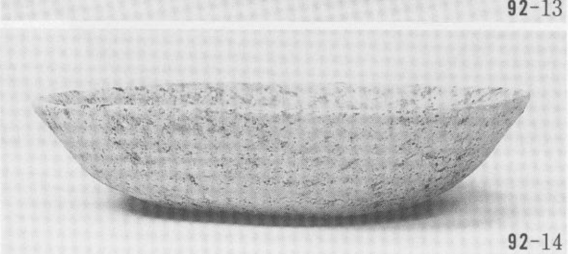

91-42


91-45


91-43


91-44


92-13

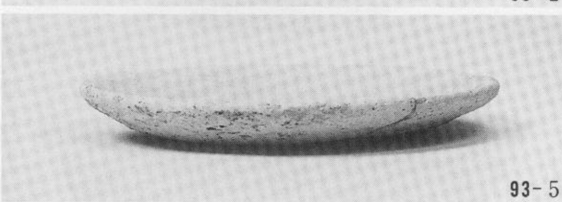

92-14


92-18

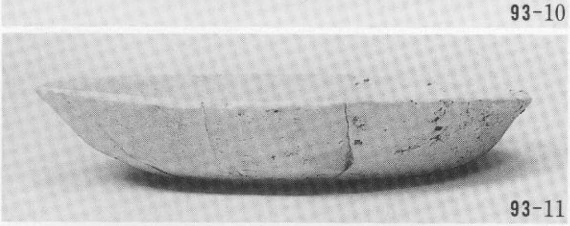

92-23

条118SD010下層


93- 2


93- 5

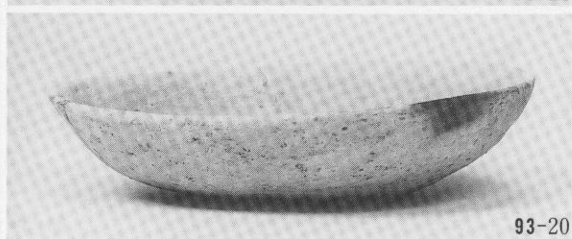

93-10


93-11


93-13


92-25


93-14


93-20

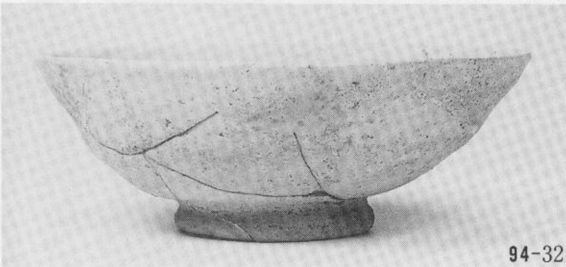

93-23


93-27


93-29

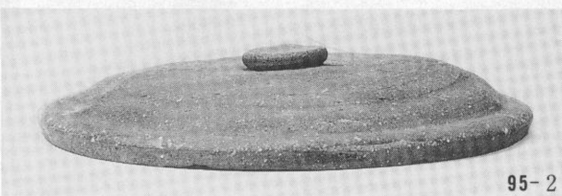

94-31


94-34

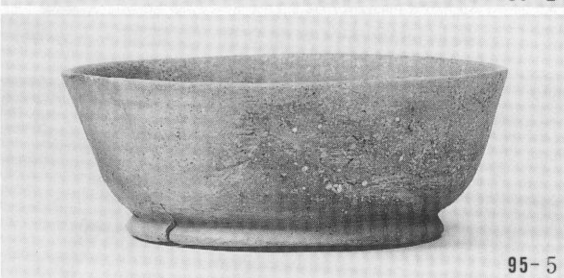

94-32


94-35

条118SX002灰茶色土

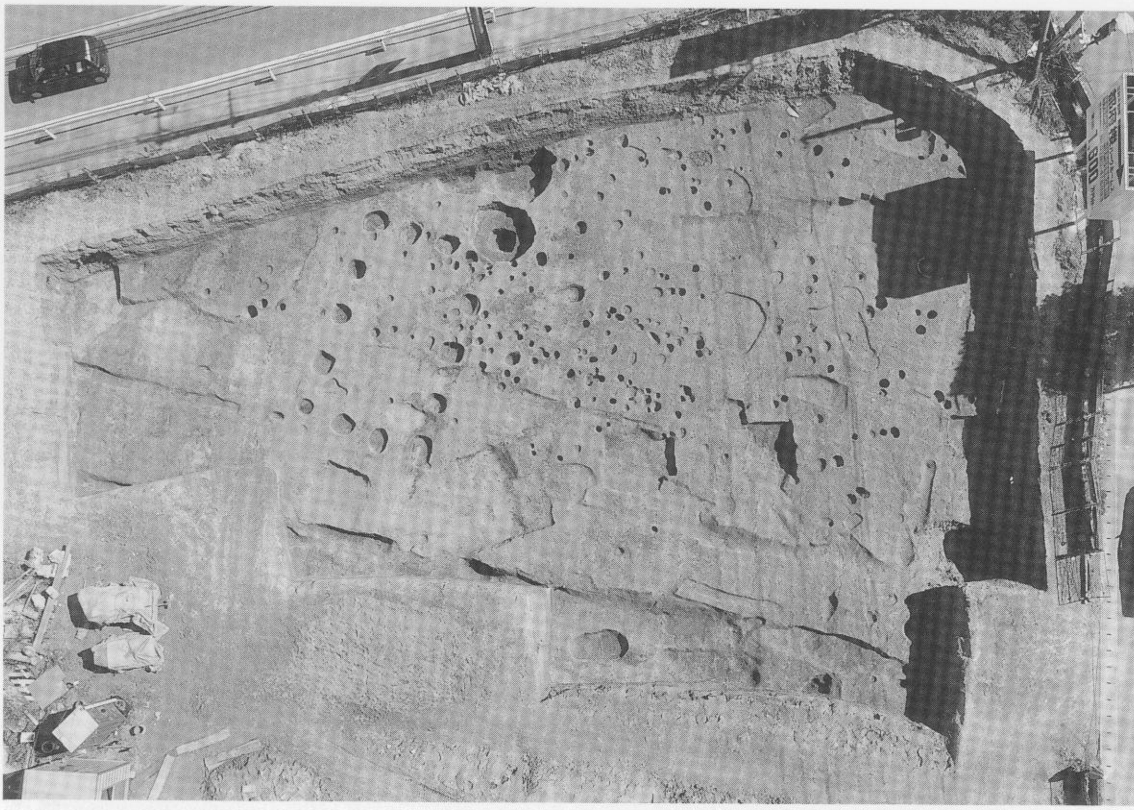

95- 2


95- 6


95- 5

条118茶褐色土

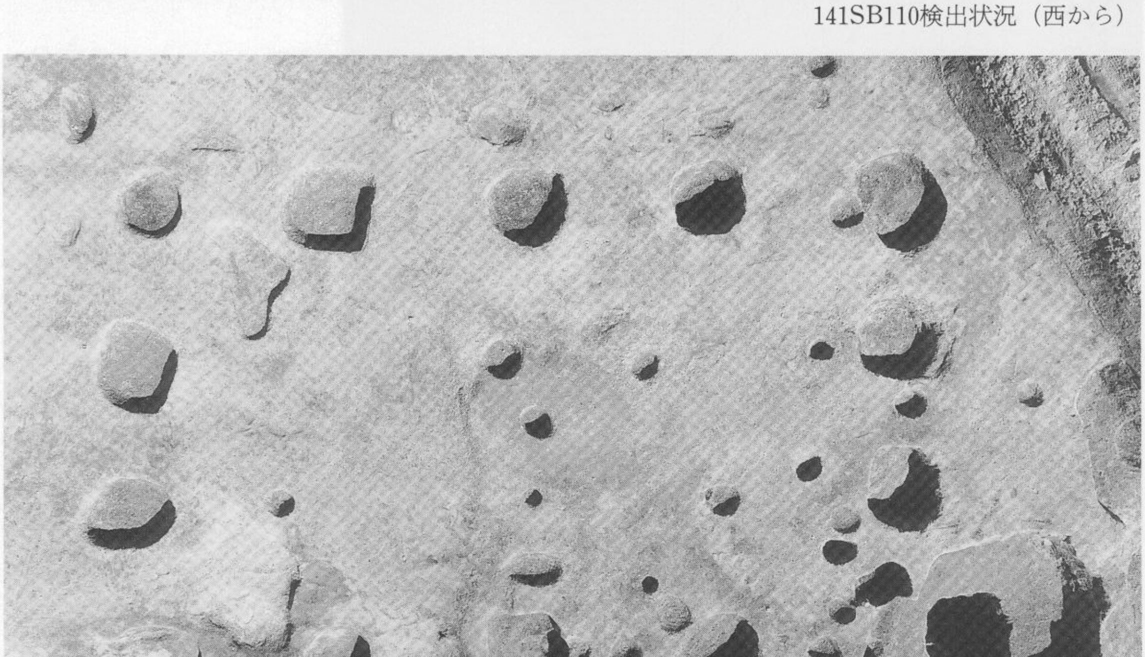

96- 7



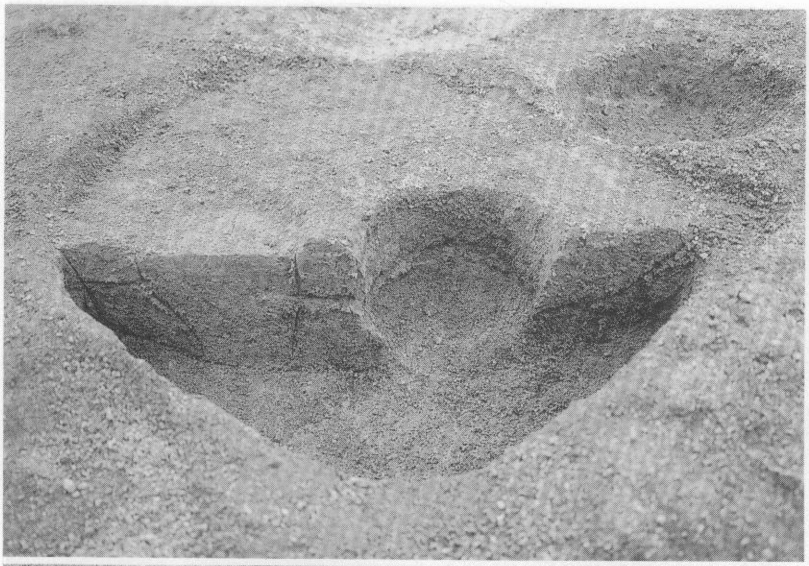
条141次調査区東部全景（反転前・上が東）

条141次調査区西部全景（反転後・上が西）

141SB110検出状況（西から）

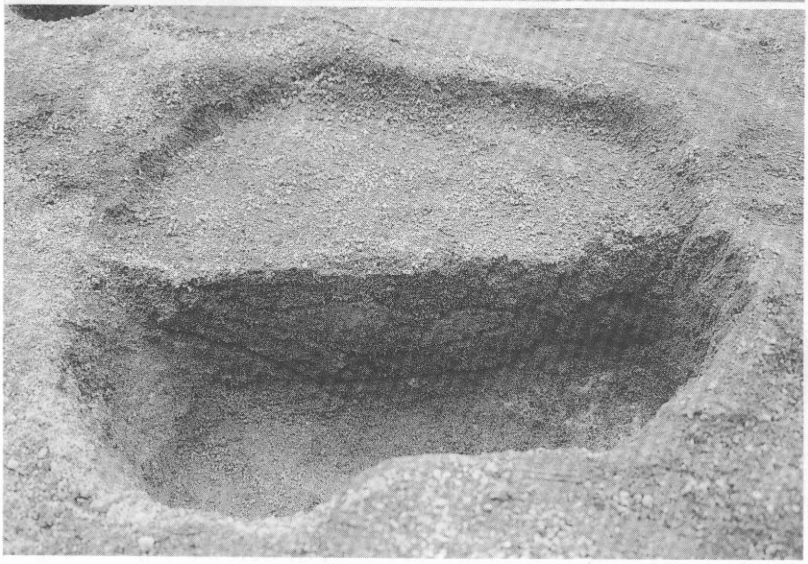


141SB110完掘状況（上が北）



141SB110a土層断面
（北から）

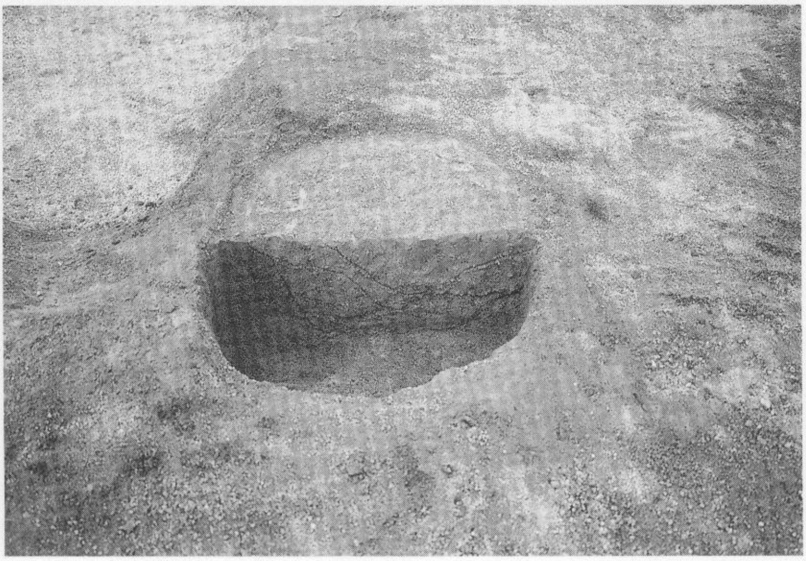
141SB110b土層断面
（東から）



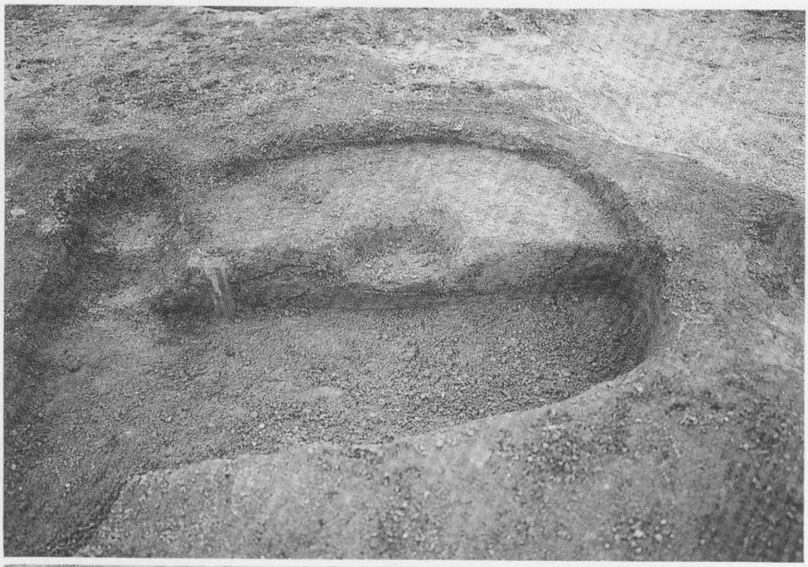
141SB110c土層断面
（東から）

141SB110e土層断面
（南から）

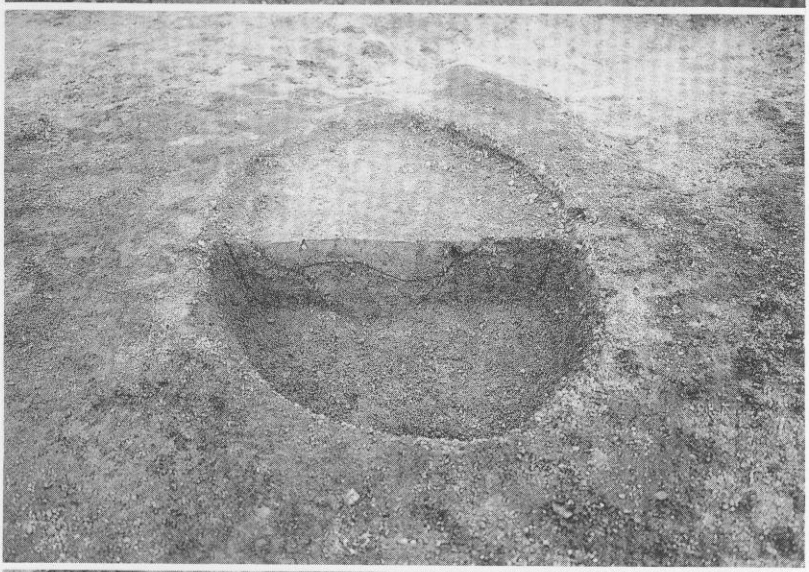
141SB110f土層断面
（南から）



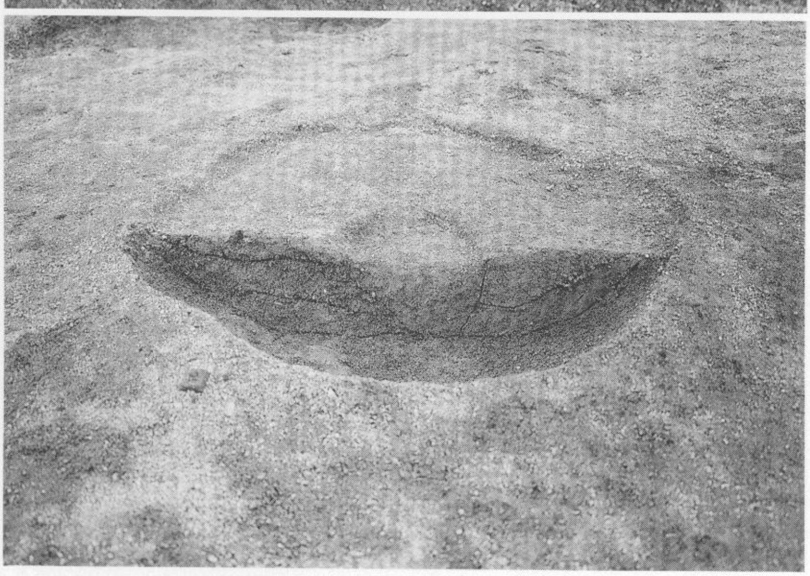
141SB110g土層断面
（南から）



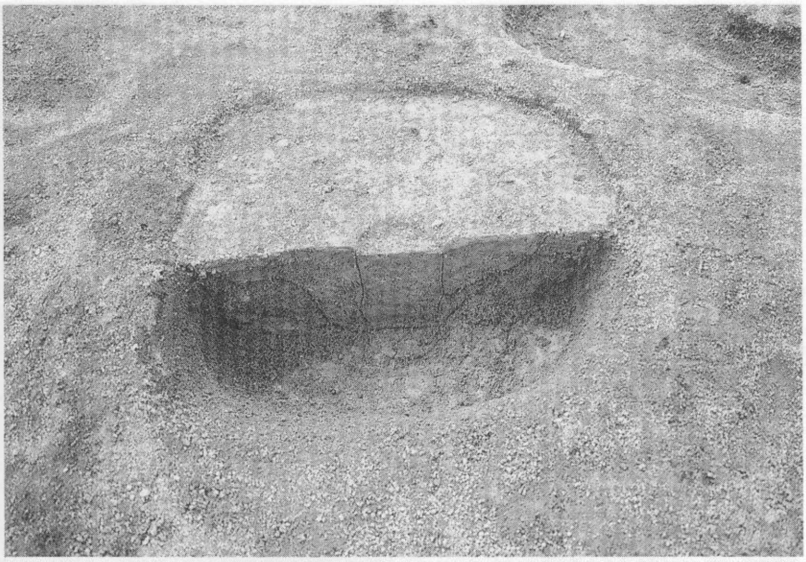
141SB110h土層断面
（南から）



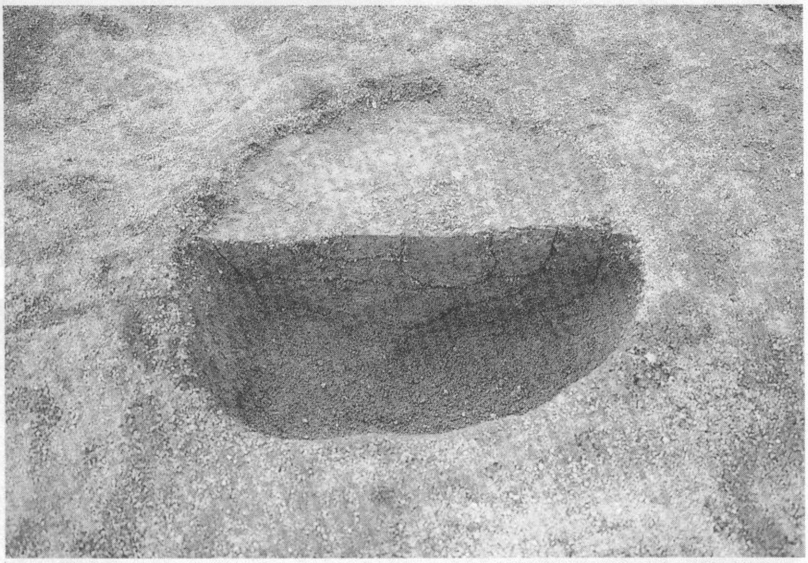
141SB110i土層断面
（南から）



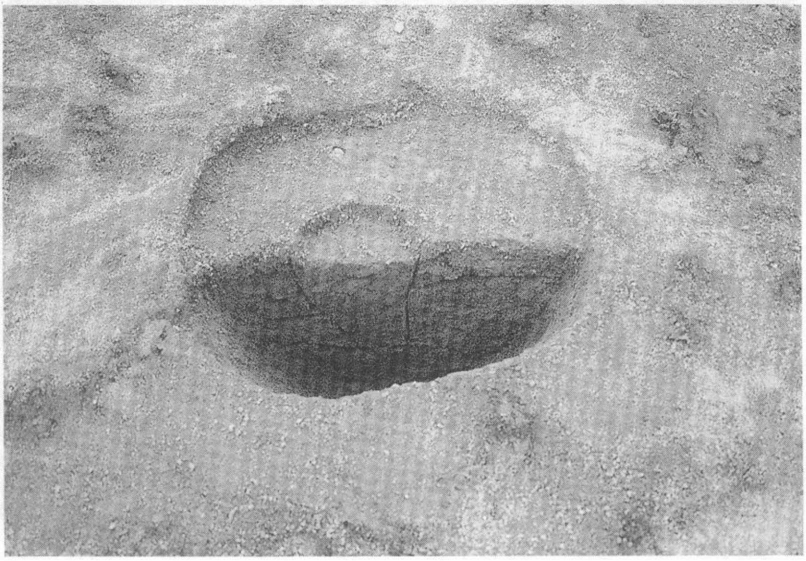
141SB110j土層断面
（南から）



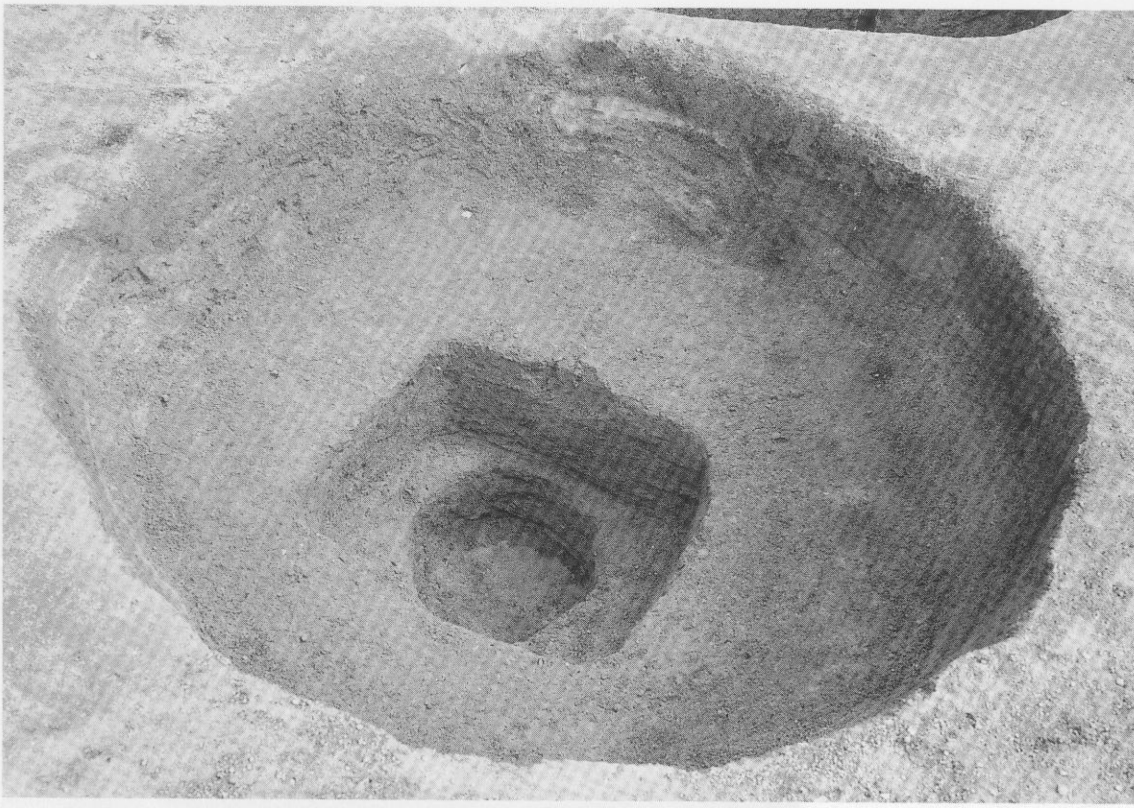
141SB110l土層断面
（北から）



141SB110m土層断面
（北から）

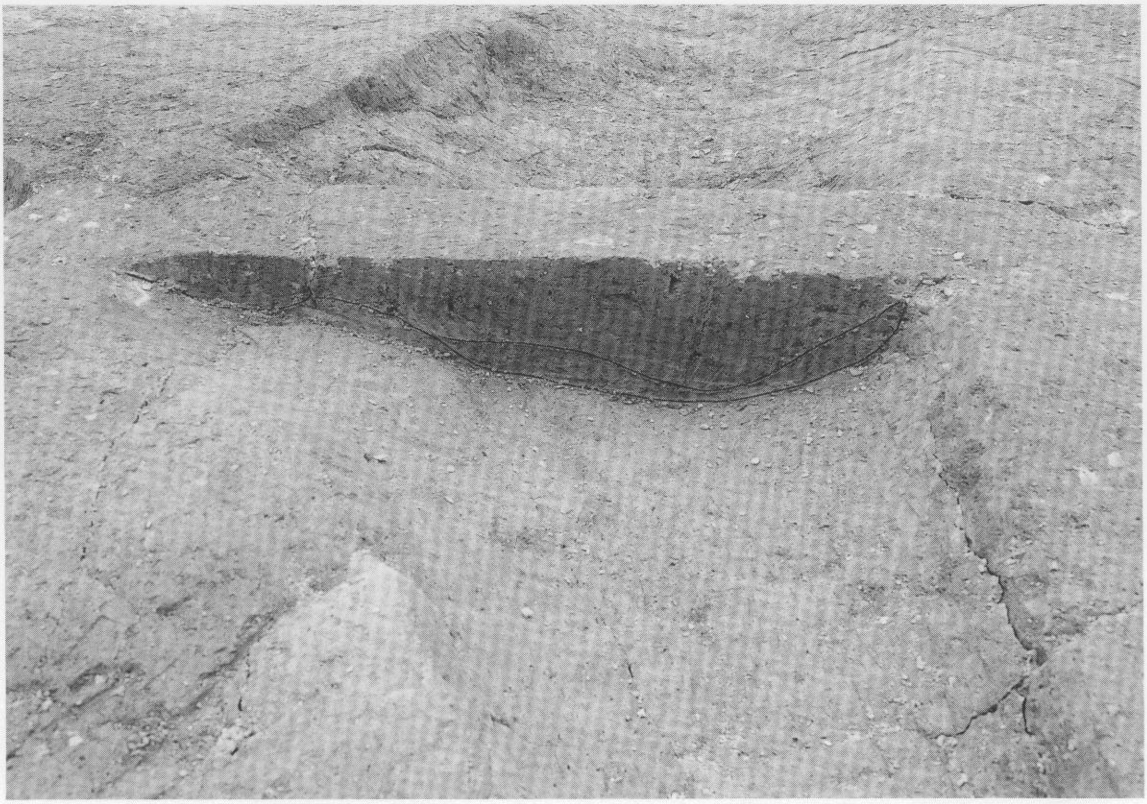


141SB110n土層断面
（北から）

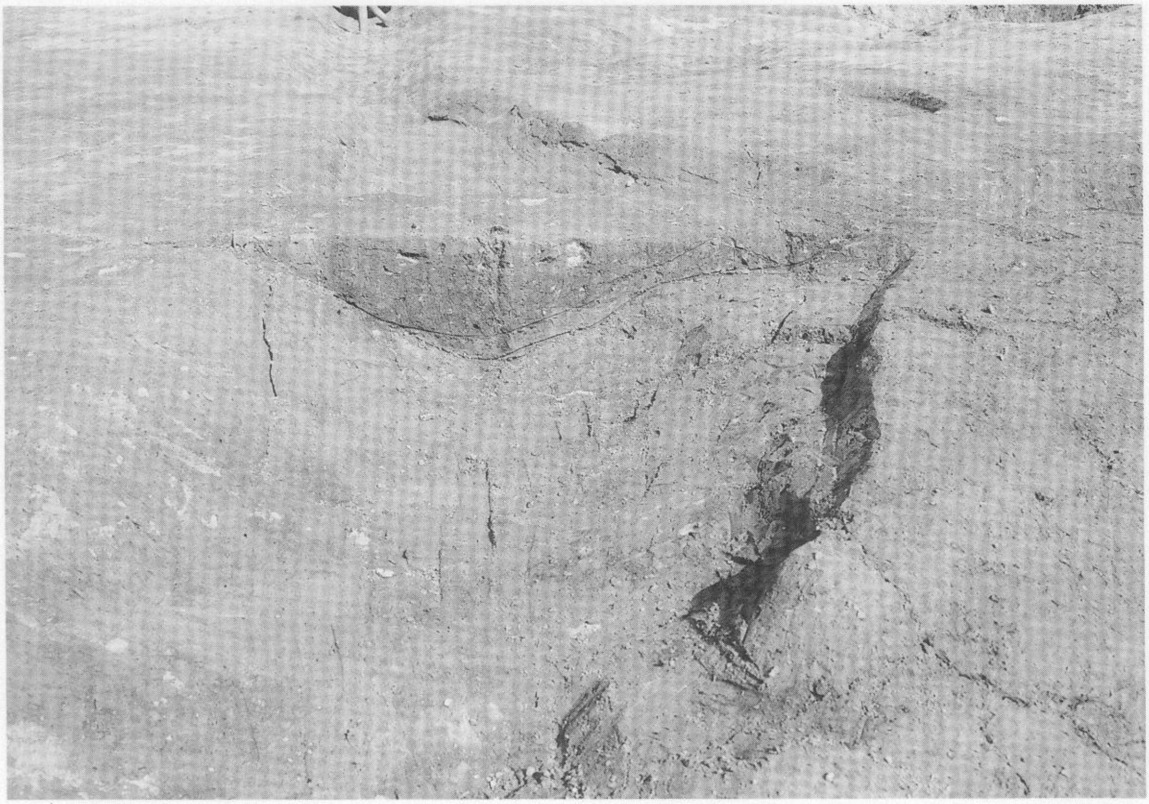


141SE085井戸枠内完掘状況（西から）

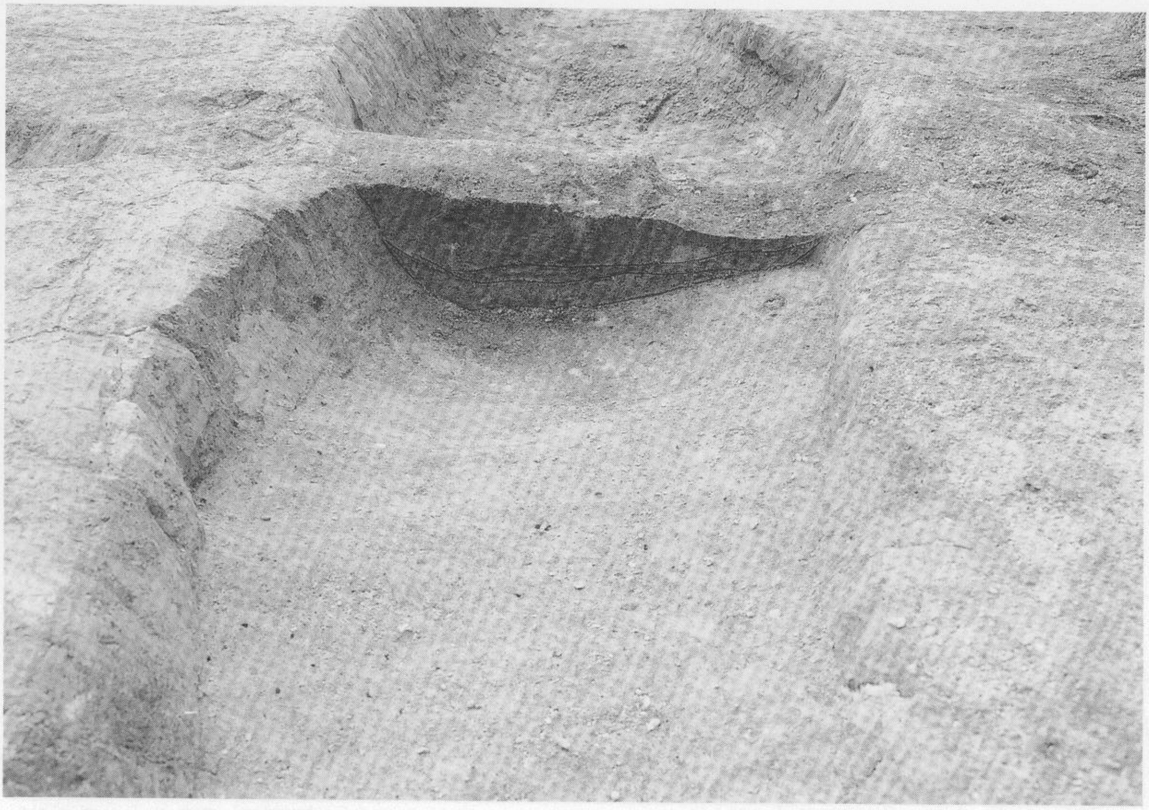
141SD020土層断面（3ライン・西から）



141SD010土層断面（Bライン・北から）



141SD010土層断面（Bライン・南から）



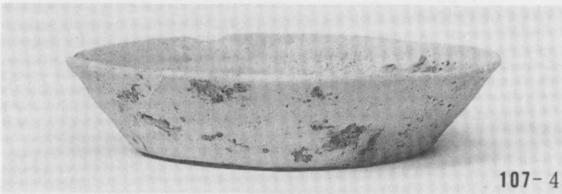
141SD100土層断面（Bライン・北から）

141SD100土層断面（Bライン・南から）

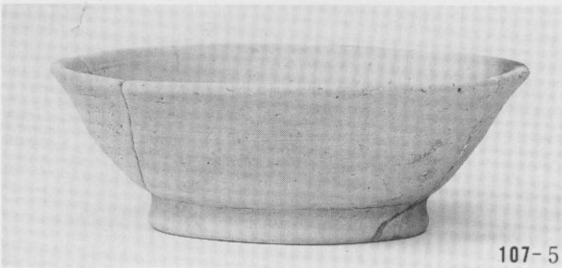
141SK095・SD100土層断面（Cライン・北から）

141SK040・SD065・SD100土層断面（Eライン・南から）

条141SE085



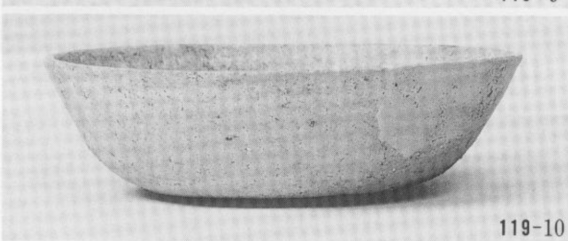
107- 4



107- 5

条141SK095

119- 9



119-10

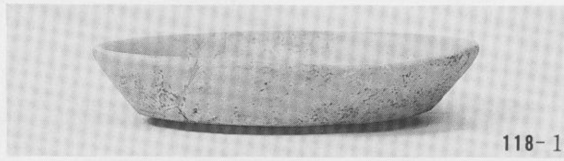
119-11

条141SD010

108- 2

108- 3

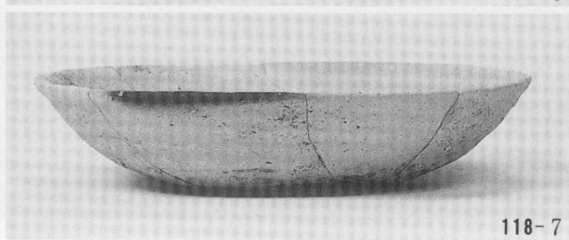
条141SK045



118- 1

118- 3

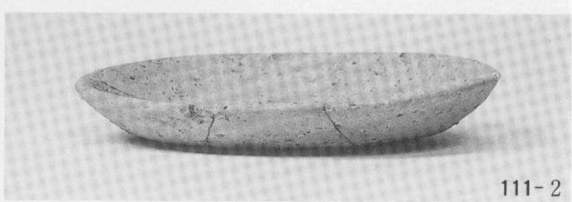
118- 6



118- 7

108- 4

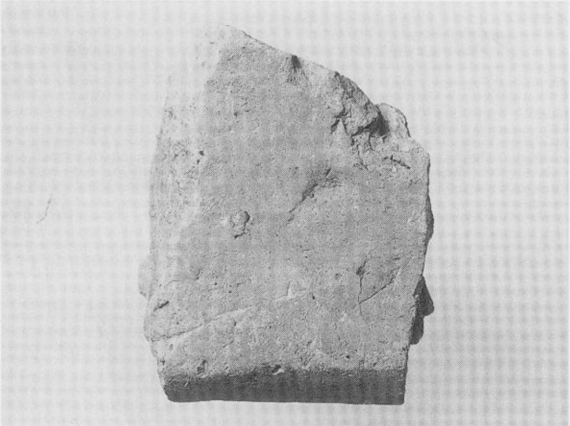
条141SD065

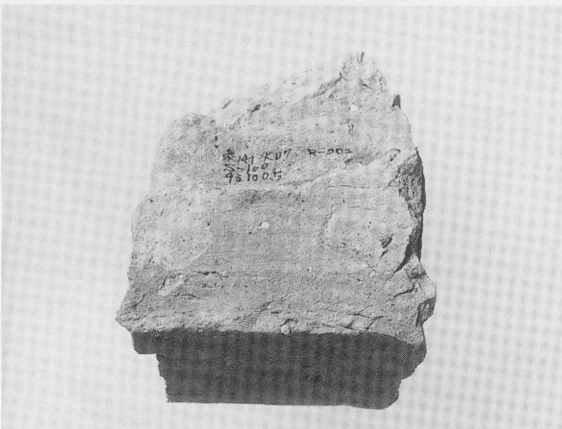


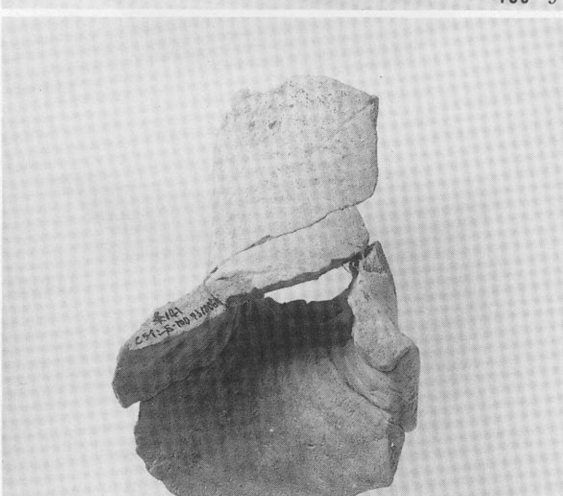
111- 2

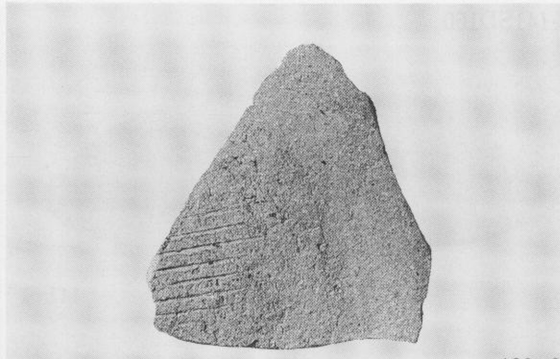
111- 6

条141SD100


108- 9

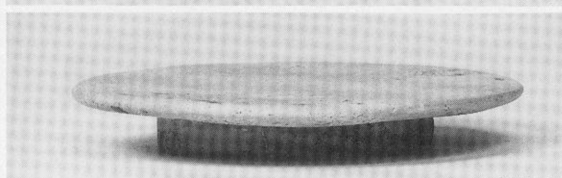

108- 9

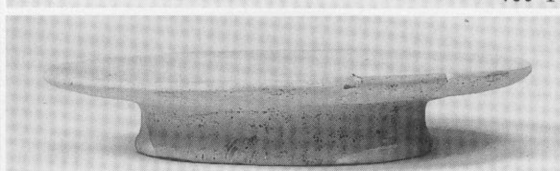

108-17

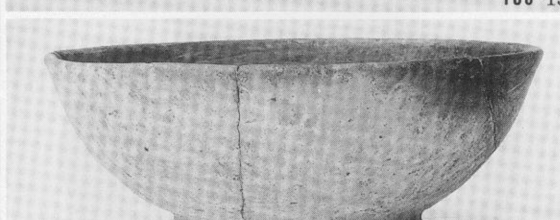

108- 8


108-12

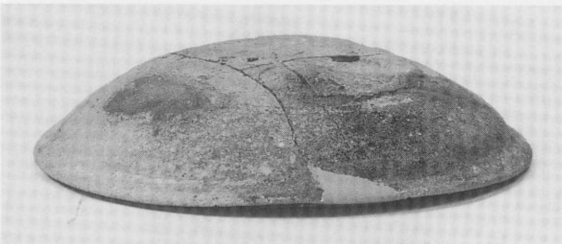

108-13


108-14

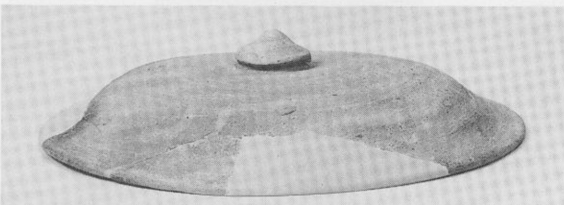

108-15


108-18

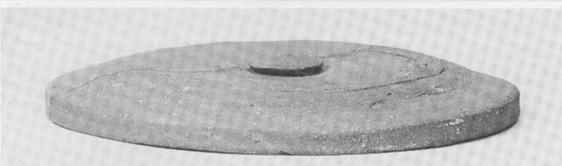
条141SD160



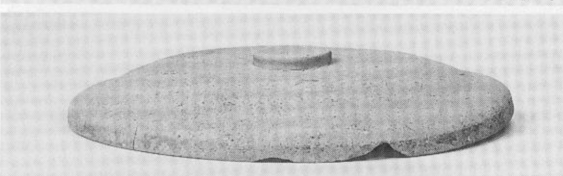
112-1



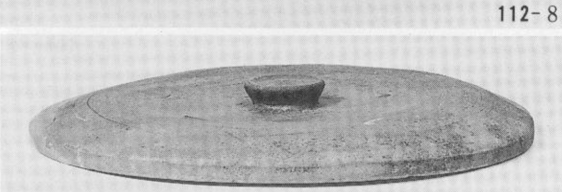
112-4



112-7

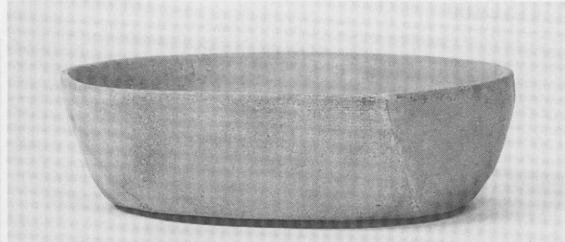


112-8

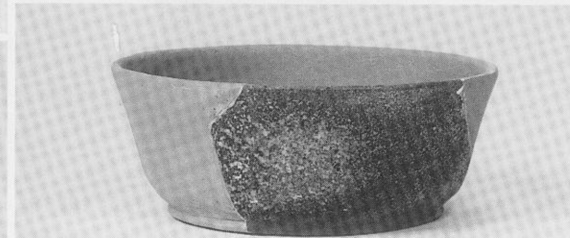


112-11

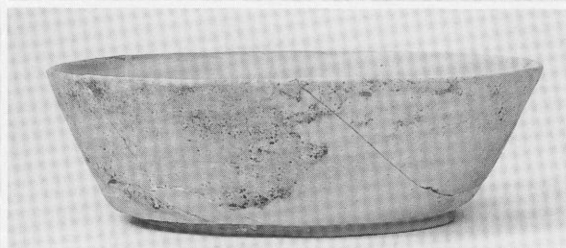
113-34



112-17



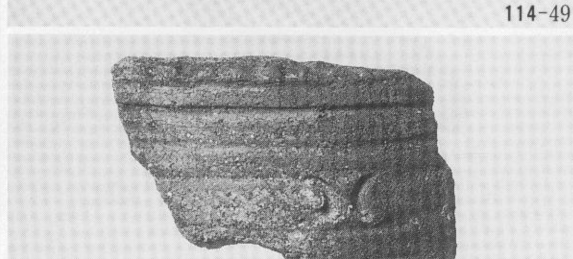
112-18



112-25

114-45

114-49



116-61

条141SX040

122- 2

122- 3

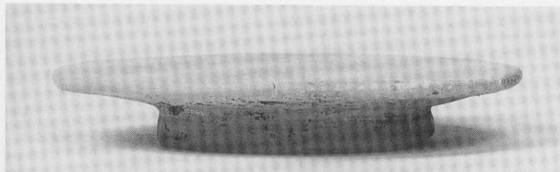
条141SX138

123- 6

条141SX167

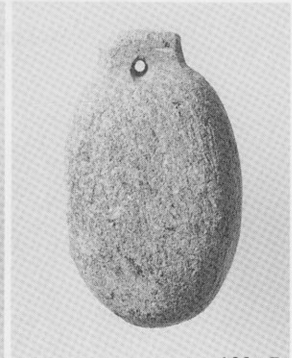
125- 5

125- 6

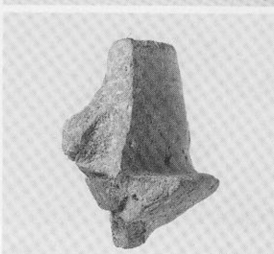


122- 5

122- 7



122- 7

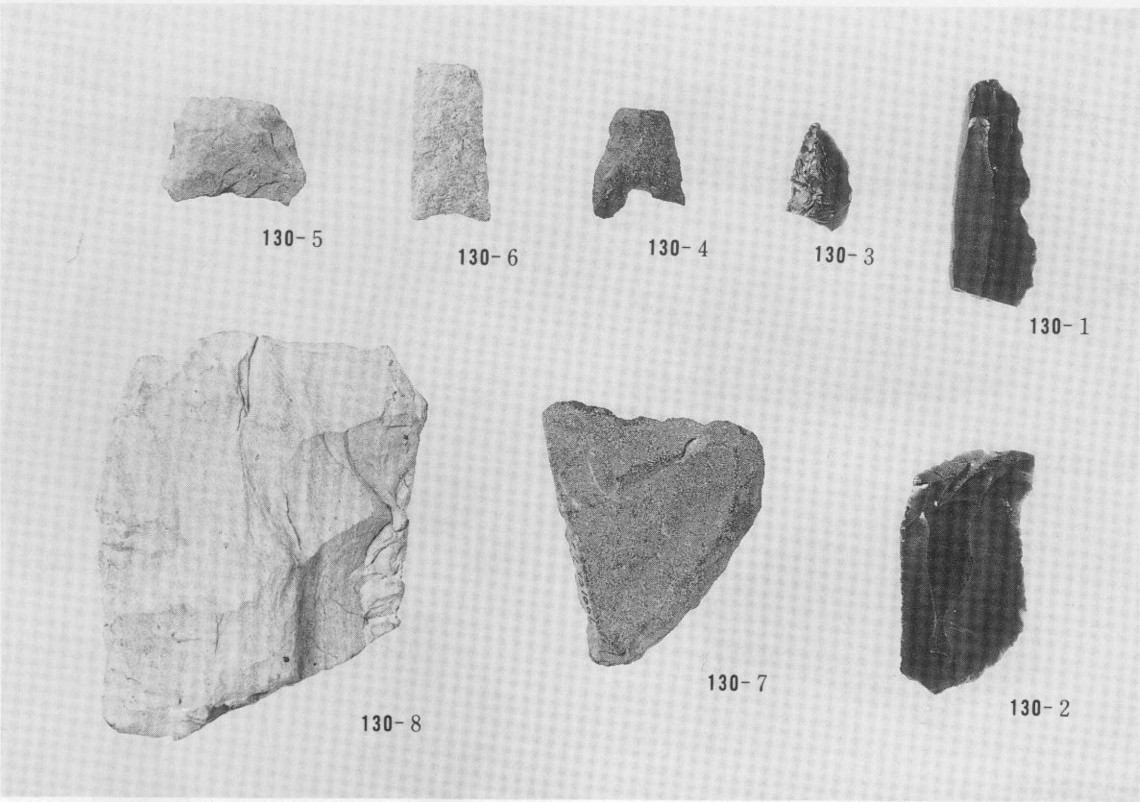


123- 6

条141淡灰色土

126-16

126-12



条141次調査出土石製品

太宰府市の文化財 第30集

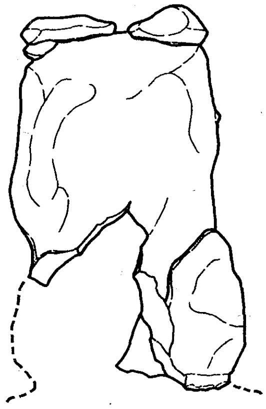
大宰府条坊跡IX

平成8年3月

編　集　太宰府市教育委員会
発　行　太宰府市観世音寺1－1－1

印　刷　株式会社チューエツ
福岡市博多区東比恵2丁目9番1号

Fig.140 条87・106・118・141次調査および試掘調査遺構配置図（1/200）
『大宰府条坊跡Ⅸ（太宰府市の文化財第30集）』付図



条87SK143出土狛犬(背面)